

北埋調報 167

八雲町

野田生2遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成13年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

八雲町

野田生2遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成13年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1 H-5



2 H-5 出土の土器



1 P-3 土器出土状況(1)



2 P-3 土器出土状況(2)



3 P-3 土器出土状況(3)



4 P-3 出土の土器

例 言

1. 本書は日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成12・13年度に実施した八雲町野田生2遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は、平成12年度を第2調査部第1調査課が、平成13年度は第1調査部第4調査課が担当した。
3. 本書の執筆は、I章：立田 理、II章：遠藤香澄、III・IV・VI章：遠藤香澄、中田裕香、立田 理が行い、全体の編集は主に立田 理が担当した。文責は各項の文末に記してある。
4. 遺物の整理は、土器を中田裕香、石器を立田 理が担当した。
5. 現地での写真撮影は立田 理、中田裕香が、室内での遺物の撮影は藤原秀樹、中山昭大が担当した。
6. 放射性炭素年代測定は株式会社地球科学研究所に依頼した。
7. 炭化材樹種同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
8. 炭化植物種子の分析は札幌国際大学 吉崎昌一氏、椿坂恭代氏に依頼した。
9. 報告書刊行後、出土資料および記録類は八雲町教育委員会が保管する。
10. 調査にあたっては下記の諸機関、諸氏にご協力、ご指導を頂いた。

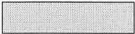

北海道教育庁文化課、八雲町教育委員会、長万部町教育委員会、八雲町立山越小学校、八雲町郷土資料館 三浦孝一・柴田信一・横山英介・安西雅希・吉田 力、七飯町教育委員会 石本省三、函館市教育委員会 田原良信・野村祐一・野辺地初雄、市立函館博物館五稜郭分館 佐藤智雄、木古内町教育委員会 菅野文二・大谷内愛史・木元 豊・三上英則・山田 央、戸井町教育委員会 鈴木正語、南茅部町教育委員会 福田裕二、森町教育委員会 藤田 登・荻野幸男、長万部町教育委員会 佐藤 稔・山田明美・大根田雅美、上ノ国町教育委員会 松崎水穂・斉藤邦典・三浦秀俊・松田輝哉、乙部町教育委員会 森 広樹・藤田 巧、伊達市教育委員会 大島直行・青野友哉、苫小牧市埋蔵文化財調査センター 赤石慎三、佐々木日登美

凡 例

- 本文中および図、表中では以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付した。
H：竪穴住居跡 P：土壙 F：焼土 FC：フレイク・チップ集中域 S：集石 SP：柱
穴状小土壙 HP：住居跡内の土壙・柱穴 HF：住居跡内の焼土
 - 遺構図の縮尺は原則として40分の1である。その他の縮尺を用いるものはスケールを付した。
 - 遺構平面図の小数字は標高（単位m）を表している。
 - 基本土層図、遺構の土層断面図に表記した数字は、標高（単位m）を表している。
 - 基本土層はローマ数字、それ以外の土層はアラビア数字を用いて表した。
 - 遺構の規模は、「確認面の長軸長×短軸長／床面（壙底）での長軸長×短軸長／最大の深さ」を
単位cmで示してある。なお、一部破壊されているものは数値に（ ）を付した。
 - 土層名は下記の記号を用いた場合がある。
Ko-d：駒ヶ岳-d火山灰
Ko-g：駒ヶ岳-g火山灰
火山灰の略号は、北海道火山灰命名委員会（1982）『北海道の火山灰』による。
 - 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構	1：40	遺物出土状況	1：20
復原土器	1：3	土器拓本	1：3
剥片石器	1：2	礫石器	1：3
土製品	1：2	石斧および石斧に関連する石器	1：2

また、P-13出土のフレイクについて、一部1：4としたものもある。その他の縮尺を使うもの
に関してはその都度スケールをつけ、本文中に記した。
 - 遺物写真図版の縮尺は土器が約3分の1、剥片石器と磨製石斧が2分の1、礫石器が3分の1で
ある。またP-13のフレイクの一部については4分の1としたものもある。
 - 石器・土製品・石製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。
 - 遺物実測図中でたたき痕はV-V、すり痕は|——|で範囲を表した。また、自然面はドットで
表現した。
 - 遺物出土状況図の一部に以下の記号を使用した。

覆土出土	土器：○	剥片石器：☆	礫石器：△	土・石製品：☆
	フレイク・チップ：□	礫：◎		
床面出土	土器：●	剥片石器：★	礫石器：▲	土・石製品：★
	フレイク・チップ：■	礫：×		
 - 焼土は遺構の覆土から検出された場合を含めて以下のトーンを用いて表した。

 - 石器実測図のトーン部分は被熱した範囲を表している。

- その他の使用したトーンに関しては、その都度凡例を付してある。

目 次

口 絵	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	1
4 調査の概要	3
(1) 発掘区の設定	3
(2) 調査の方法	4
(3) 整理の方法	4
(4) 基本層序	5
(5) 遺物の分類	10
(6) 調査結果の概要	12
II 遺跡の位置と環境	13
1 位置と環境	13
2 周辺の遺跡	15
III 遺構と遺構出土の遺物	19
1 縄文時代の遺構	19
(1) 住居跡	19
(2) 土壇墓	75
(3) フラスコ・ピット	86
(4) A類土壇（埋納遺構）	95
(5) 土壇	114
(6) 焼土・柱穴状小土壇・集石	127
2 続縄文時代の遺構	134
(1) 土壇	134
(2) 焼土	134
(3) フレイク集中	135
IV 包含層出土の遺物	137
1 土器	137
(1) 縄文時代早期の土器	137
(2) 縄文時代前期の土器	138

(3) 縄文時代中期の土器	143
(4) 縄文時代後期の土器	145
(5) 続縄文時代の土器	145
2 石器等	157
V 自然科学的分析	193
1 野田生2遺跡から出土した炭化材の樹種 (株)パリノ・サーヴェイ	193
2 野田生2遺跡から出土した炭化植物種子について 吉崎昌一・椿坂恭代	198
3 放射性炭素年代測定結果 (株)地球科学研究所	201
VI まとめ	207
1 遺構について	207
2 土器について	209
3 石器について	216
引用参考文献	220
写真図版	
報告書抄録	
奥付	

挿図目次

I 調査の概要

図 I - 1	遺跡周辺の地形と調査区	2
図 I - 2	調査区設定図	3
図 I - 3	調査区設定図及び平成12年度調査区位置図	4
図 I - 4	メインセクション(1)	6
図 I - 5	メインセクション(2)	7
図 I - 6	メインセクション(3)	8
図 I - 7	メインセクション(4)	9

II 遺跡の位置と環境

図 II - 1	遺跡の位置	14
----------	-------	----

III 遺構と遺構出土の遺物

図 III - 1	遺構位置図	20
図 III - 2	H - 1 (1)	21
図 III - 3	H - 1 (2)	22
図 III - 4	H - 1 遺物出土状況	23
図 III - 5	H - 1 出土の遺物	24
図 III - 6	H - 1 出土の石器(1)	26
図 III - 7	H - 1 出土の石器(2)	27
図 III - 8	H - 2	28
図 III - 9	H - 3 (1)	30
図 III - 10	H - 3 (2)	31
図 III - 11	H - 3 遺物出土状況	32
図 III - 12	H - 3 出土の遺物	33
図 III - 13	H - 4 (1)	35
図 III - 14	H - 4 (2)	36
図 III - 15	H - 4 遺物出土状況	37
図 III - 16	H - 4 出土の土器	38
図 III - 17	H - 4 出土の石器(1)	39
図 III - 18	H - 4 出土の石器(2)	40
図 III - 19	H - 5 (1)	42
図 III - 20	H - 5 (2)	43
図 III - 21	H - 5 遺物出土状況(1)	44
図 III - 22	H - 5 遺物出土状況(2)	45
図 III - 23	H - 5 出土の土器(1)	46
図 III - 24	H - 5 出土の土器(2)	47
図 III - 25	H - 5 出土の土器(3)	48
図 III - 26	H - 5 出土の石器(1)	50

図 III - 27	H - 5 出土の石器(2)	51
図 III - 28	H - 5 出土の石器(3)	52
図 III - 29	H - 5 出土の石器(4)	53
図 III - 30	H - 6 (1)	54
図 III - 31	H - 6 (2)	55
図 III - 32	H - 6 出土の遺物	56
図 III - 33	H - 7 (1)	58
図 III - 34	H - 7 (2)	59
図 III - 35	H - 7 (3)	60
図 III - 36	H - 7 遺物出土状況(1)	61
図 III - 37	H - 7 遺物出土状況(2)	62
図 III - 38	H - 7 出土の土器(1)	63
図 III - 39	H - 7 出土の土器(2)	64
図 III - 40	H - 7 出土の石器(1)	65
図 III - 41	H - 7 出土の石器(2)	66
図 III - 42	H - 1・5 掘上土(1)	68
図 III - 43	H - 1・5 掘上土(2)	69
図 III - 44	H - 1・5 掘上土遺物出土状況	70
図 III - 45	H - 1・5 掘上土出土の土器(1)	71
図 III - 46	H - 1・5 掘上土出土の土器(2)	72
図 III - 47	H - 1・5 掘上土出土の土器(3)	73
図 III - 48	H - 1・5 掘上土出土の石器	74
図 III - 49	土壙墓 (P - 4) と出土遺物	76
図 III - 50	土壙墓 (P - 6)	77
図 III - 51	土壙墓 (P - 6) 出土の遺物	78
図 III - 52	土壙墓 (P - 7)	80
図 III - 53	土壙墓 (P - 7) 出土の遺物	81
図 III - 54	土壙墓 (P - 25・32)	82
図 III - 55	土壙墓 (P - 25・32) 出土の遺物	83
図 III - 56	土壙墓 (P - 15) と出土の遺物	84
図 III - 57	フラスコピット (P - 3)	87
図 III - 58	フラスコピット (P - 3) 遺物出土状況	88
図 III - 59	フラスコピット (P - 3) 出土の土器(1)	89
図 III - 60	フラスコピット (P - 3) 出土の土器(2)	90

図Ⅲ-61	フラスコピット (P-3) 出土の土器(3).....	91	図Ⅲ-83	土壙 (P-26・27・28・29)	119
図Ⅲ-62	フラスコピット (P-3) 出土の石器.....	92	図Ⅲ-84	土壙 (P-31・33・34)	120
図Ⅲ-63	フラスコピット (P-5) と出土の遺物.....	93	図Ⅲ-85	土壙出土の遺物	123
図Ⅲ-64	A類土壙 (P-13) と遺物出土状況(1).....	96	図Ⅲ-86	焼土 (F-2・3・4・6・8・9・10)、集石 (S-1)	126
図Ⅲ-65	A類土壙 (P-13) 遺物出土状況(2).....	97	図Ⅲ-87	焼土 (F-11・12・13)	127
図Ⅲ-66	A類土壙 (P-13) 遺物出土状況(3).....	98	図Ⅲ-88	柱穴状土壙 (SP) (1)	129
図Ⅲ-67	A類土壙 (P-13) 出土の土器・接合資料(1).....	99	図Ⅲ-89	柱穴状土壙 (SP) (2)	130
図Ⅲ-68	A類土壙 (P-13) 接合資料(2).....	100	図Ⅲ-90	焼土・柱穴状土壙出土の遺物	131
図Ⅲ-69	A類土壙 (P-13) 接合資料(3).....	101	図Ⅲ-91	続縄文時代の遺構 (P-10、F-1・5・7、FC-1)	133
図Ⅲ-70	A類土壙 (P-13) 接合資料(4).....	102	図Ⅲ-92	P-10、F-5、FC-1の出土遺物	134
図Ⅲ-71	A類土壙 (P-13) 接合資料(5).....	103	Ⅳ 包含層出土の遺物		
図Ⅲ-72	A類土壙 (P-13) 出土の石器(1).....	104	図Ⅳ-1	I群a類土器と石錘の分布	139
図Ⅲ-73	A類土壙 (P-13) 出土の石器(2).....	105	図Ⅳ-2	包含層出土のI群a類土器(1)	140
図Ⅲ-74	A類土壙 (P-13) 出土の石器(3).....	106	図Ⅳ-3	包含層出土のI群a類土器(2)	141
図Ⅲ-75	A類土壙 (P-13) 出土の石器(4).....	107	図Ⅳ-4	包含層出土のI群a類土器(3)・II群b類土器	142
図Ⅲ-76	A類土壙 (P-13) 出土の石器(5).....	108	図Ⅳ-5	包含層出土のIII群a類土器(1)	146
図Ⅲ-77	A類土壙 (P-21・24) と出土遺物	111	図Ⅳ-6	包含層出土のIII群a類土器(2)	147
図Ⅲ-78	A類土壙 (P-30) と出土遺物	112	図Ⅳ-7	包含層出土のIII群a類土器(3)・III群b類土器(1)・IV群a類土器(1)・IV群c類土器	148
図Ⅲ-79	土壙 (P-1・2)	115	図Ⅳ-8	包含層出土のIII群a類土器(4)	149
図Ⅲ-80	土壙 (P-8・9・20・11)	116	図Ⅳ-9	包含層出土のIII群a類土器(5)	150
図Ⅲ-81	土壙 (P-12・14・16・17)	117	図Ⅳ-10	包含層出土のIII群a類土器(6)・III群b類土器(2)	151
図Ⅲ-82	土壙 (P-18・19・22・23)	118	図Ⅳ-11	包含層出土のIII群b類土器(3)・IV群a類土器(2)	152
			図Ⅳ-12	包含層出土のVI群c類土器(1)	153
			図Ⅳ-13	包含層出土のVI群c類土器(2)	154
			図Ⅳ-14	包含層出土土器分布(1)I群a類・II群b類・III群a類・III群b類	155
			図Ⅳ-15	包含層出土土器分布(2)VI群c類(沈線等・隆起線)・総点数.....	156
			図Ⅳ-16	包含層出土の石器(1)石鏃・石槍・つまみ付ナイフ・篋状石器	159
			図Ⅳ-17	包含層出土の石器(2)スクレイパー	160

図Ⅳ-18	包含層出土の石器(3)スクレイパー・石核	161	図Ⅳ-26	包含層出土石器分布(1)	169
図Ⅳ-19	包含層出土の石器(4)石核・Rフレイク・Uフレイク	162	図Ⅳ-27	包含層出土石器分布(2)	170
図Ⅳ-20	包含層出土の石器(5)石斧・石のみ・たたき石	163	図Ⅳ-28	包含層出土石器分布(3)	171
図Ⅳ-21	包含層出土の石器(6)たたき石・すり石・半円状扁平打製石器	164	図Ⅳ-29	包含層出土石器分布(4)	172
図Ⅳ-22	包含層出土の石器(7)半円状扁平打製石器	165	V 自然科学的分析		
図Ⅳ-23	包含層出土の石器(8)北海道式石冠・砥石・石皿	166	図Ⅴ-1	放射性炭素年代分析結果(1)	204
図Ⅳ-24	包含層出土の石器(9)石皿・石錘	167	図Ⅴ-2	放射性炭素年代分析結果(2)	205
図Ⅳ-25	包含層出土の土製品	168	図Ⅴ-3	放射性炭素年代分析結果(3)	206
			Ⅵ まとめ		
			図Ⅵ-1	野田生2遺跡Ⅲ群土器一括資料	214
			図Ⅵ-2	玄武岩製両面調整石器・素材剥片比較グラフ	217
			図Ⅵ-3	刃部に光沢のある石器	219

表 目 次

表Ⅰ-1	石器分類表	11
表Ⅰ-2	出土遺物一覧	12
表Ⅱ-1	八雲町内の遺跡	16
表Ⅲ-1	遺構規模一覧	173
表Ⅲ-2	遺構出土遺物一覧	174
表Ⅲ-3	遺構出土復原土器一覧	175
表Ⅲ-4	遺構出土拓本掲載土器一覧	180
表Ⅲ-5	遺構出土掲載石器一覧	182
表Ⅲ-6	P-13一括出土石器一覧	185
表Ⅳ-1	包含層出土復原土器一覧	186
表Ⅳ-2	包含層出土拓本掲載土器一覧	189
表Ⅳ-3	包含層出土掲載石器一覧	190
表Ⅴ-1	樹種同定結果	193
表Ⅴ-2	炭化種子出土表	200
表Ⅴ-3	炭素年代測定一覧	203

図版目次

- | | | | |
|------|---|--------|------------------------|
| 口絵 1 | | 図版10 1 | H-4・HF-1 (南西から) |
| 口絵 2 | | 2 | H-4・HP-2とHF-5土層断面(西から) |
| 図版 1 | 1 | 3 | H-4床面遺物出土状況(北東から) |
| | 2 | 4 | H-4土器出土状況(南から) |
| | 3 | 5 | H-4土器出土状況(南から) |
| 図版 2 | 1 | 図版11 1 | H-5(北西から) |
| | 2 | 2 | H-5検出(北から) |
| 図版 3 | 1 | 図版12 1 | H-5土層断面(南から) |
| | 2 | 2 | H-5調査状況とH-1(北から) |
| | 3 | 3 | H-5覆土遺物出土状況(南から) |
| 図版 4 | 1 | 図版13 1 | H-5掘上土検出状況(北東から) |
| | 2 | 2 | H-5覆土遺物出土状況(北西から) |
| | 3 | 3 | H-5・HP-13土層断面(南東から) |
| | 4 | 4 | H-5・HP-10遺物出土状況(東から) |
| 図版 5 | 1 | 5 | H-5・HP-16遺物出土状況(南から) |
| | 2 | 図版14 1 | H-6(南西から) |
| | 3 | 2 | H-6土層断面(西から) |
| | 4 | 3 | H-6・HP-2土層断面(南から) |
| | 5 | 4 | H-6・HP-1~3(南から) |
| 図版 6 | 1 | 図版15 1 | H-6床面遺物出土状況(南西から) |
| | 2 | 2 | H-6埋設土器断面(北から) |
| 図版 7 | 1 | 3 | H-7(北西から) |
| | 2 | 図版16 1 | H-7溝検出状況(南東から) |
| | 3 | 2 | H-7溝土層断面 |
| | 4 | 3 | H-7溝土層土面(南東から) |
| | 5 | 4 | H-7・HP-2土層断面(南から) |
| | 6 | 5 | H-7・HP-10土層断面(西から) |
| 図版 8 | 1 | 図版17 1 | H-7床面遺物出土状況(北東から) |
| | 2 | 2 | H-7床面遺物出土状況(北から) |
| 図版 9 | 1 | 3 | P-4(北東から) |
| | 2 | 4 | P-4土層断面(東から) |
| | 3 | 5 | P-6(西から) |
| | | 6 | P-6遺物出土状況(南から) |
| | | 図版18 1 | P-6土層断面(北西から) |

- | | | | | | |
|------|---|-----------------------|------|---|--------------------|
| | 2 | P-7 (北東から) | | 5 | P-16土層断面 (南から) |
| | 3 | P-7土層断面 (東から) | | 6 | P-17 (北東から) |
| | 4 | P-25 (奥) と P-32 (北から) | 図版25 | 1 | P-17土層断面 (南西から) |
| | 5 | P-25土層断面 (南東から) | | 2 | P-18 (南西から) |
| | 6 | P-25炭化物出土状況 (南西から) | | 3 | P-18土層断面 (南西から) |
| 図版19 | 1 | P-32土層断面 (南西から) | | 4 | P-19 (西から) |
| | 2 | P-32遺物出土状況 (西から) | | 5 | P-19土層断面 (南西から) |
| | 3 | P-15 (南から) | | 6 | P-20 (北東から) |
| | 4 | P-15土層断面、遺物出土状況 (南から) | 図版26 | 1 | P-22 (南から) |
| | 5 | P-3 (北から) | | 2 | P-22土層断面 (東から) |
| | 6 | P-3遺物出土状況 (東から) | | 3 | P-23 (南西から) |
| 図版20 | 1 | P-3土層断面 (北から) | | 4 | P-23遺物出土状況 (西から) |
| | 2 | P-5 (北西から) | | 5 | P-26 (南西から) |
| | 3 | P-5土層断面 (北西から) | 図版27 | 6 | P-26土層断面 (東から) |
| | 4 | P-5付属土壙断面 (南東から) | | 1 | P-27 (東から) |
| | 5 | P-21 (南東から) | | 2 | P-27土層断面 (東から) |
| | 6 | P-21土層断面 (南東から) | | 3 | P-28 (南西から) |
| 図版21 | 1 | P-13土層断面 (南から) | | 4 | P-28土層断面 (南西から) |
| | 2 | P-13遺物出土状況 (北西から) | | 5 | P-29 (北西から) |
| | 3 | P-13遺物出土状況 (南から) | | 6 | P-29土層断面 (南西から) |
| | 4 | P-13遺物出土状況 (北から) | 図版28 | 1 | P-31遺物出土状況 (南西から) |
| | 5 | P-24 (南東から) | | 2 | P-31土層断面 (南西から) |
| | 6 | P-24土層断面 (南から) | | 3 | P-33 (南西から) |
| 図版22 | 1 | P-30 (東から) | | 4 | P-33土層断面 (南から) |
| | 2 | P-30土層断面 (北から) | | 5 | P-34 (南から) |
| | 3 | P-1 (北西から) | | 6 | F-2 (南東から) |
| | 4 | P-1土層断面 (南から) | 図版29 | 1 | F-3・4 (南から) |
| | 5 | P-2 (東から) | | 2 | F-6 (北西から) |
| | 6 | P-2土層断面 (東から) | | 3 | F-8 (北西から) |
| 図版23 | 1 | P-8 (南東から) | | 4 | F-10 (南から) |
| | 2 | P-9 (南西から) | | 5 | F-11・12 (南から) |
| | 3 | P-9土層断面 (南から) | | 6 | F-13 (南西から) |
| | 4 | P-11 (南東から) | 図版30 | 1 | S-1検出 (東から) |
| | 5 | P-11土層断面 (南から) | | 2 | S-1土層断面 (東から) |
| | 6 | P-12 (南西から) | | 3 | S P-4、5土層断面 (北西から) |
| 図版24 | 1 | P-12土層断面 (南西から) | | 4 | S P-10 (南東から) |
| | 2 | P-14 (南から) | | 5 | S P-14 (南から) |
| | 3 | P-14土層断面 (西から) | | 6 | S P-22 |
| | 4 | P-16 (南東から) | | 7 | S P-23 (西から) |
| | | | 図版31 | 1 | P-10 (北東から) |

- 2 P-10土層断面(南から)
 3 F-5(南から)
 4 FC-1(南から)
 5 遺物出土状況(O-22-d区 西から)
 6 遺物出土状況(S-18-a区 北から)
- 図版32 1 III層上面遺物出土状況(北から)
 2 IV層上面遺物出土状況(北西から)
 3 遺物出土状況(P-24-d区 南から)
 4 遺物出土状況(O-24-c区 北から)
 5 遺物出土状況(S-22-d区 南西から)
- 図版33 1 H-1出土の土器(図Ⅲ-5-1)
 2 同左
 3 H-1出土の土器(図Ⅲ-5-2)
 4 同左
 5 H-1出土の土器(図Ⅲ-5-3)
- 図版34 1 H-1出土の遺物
- 図版35 1 H-3出土の遺物
 2 H-4出土の土器(図Ⅲ-16-1)
 3 H-4出土の土器(図Ⅲ-16-2)
 4 H-4出土の遺物(1)
- 図版36 1 H-4出土の遺物(2)
 2 H-5出土の土器(図Ⅲ-23-1)
 3 同左
- 図版37 1 H-5出土の土器(図Ⅲ-24-2)
 2 H-5出土の土器(図Ⅲ-24-3)
 3 H-5出土の土器(図Ⅲ-25-4)
 4 H-5出土の土器(図Ⅲ-25-5)
 5 H-5出土の土器(図Ⅲ-25-10)
 6 H-5出土の遺物(1)
- 図版38 1 H-5出土の遺物(2)
- 図版39 1 H-5出土の遺物(3)
- 図版40 1 H-6出土の土器(図Ⅲ-32-1)
 2 H-6出土の土器(図Ⅲ-32-2)
 3 H-6出土の遺物
 4 H-7出土の土器(図Ⅲ-38-1)
- 5 H-7出土の土器(図Ⅲ-38-2)
 6 H-7出土の土器(図Ⅲ-39-7)
- 図版41 1 H-7出土の土器(図Ⅲ-39-8)
 2 H-7出土の土器(図Ⅲ-39-9)
 3 H-7出土の土器(図Ⅲ-39-10)
 4 H-7出土の遺物(1)
- 図版42 1 H-7出土の遺物(2)
 2 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-45-1)
 3 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-45-2)
- 図版43 1 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-45-3)
 2 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-46-4)
 3 同右上
 4 同突起部分の拡大
 5 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-46-5)
 6 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-46-6)
- 図版44 1 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-46-7)
 2 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-47-8)
 3 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-47-9)
 4 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-47-10)
 5 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-47-17)
 6 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-47-18)
- 図版45 1 H-1・5掘上土出土の遺物
 2 P-6出土の土器(図Ⅲ-51-1)
 3 P-6出土の土器(図Ⅲ-51-3)
- 図版46 1 P-4・6出土の遺物
 2 P-7出土の土器(図Ⅲ-53-1)
 3 P-7出土の遺物
- 図版47 1 P-25・32・15出土の遺物

- 2 P-15出土の土器(図Ⅲ-56-1)
- 3 P-3出土の土器(図Ⅲ-59-1)
- 4 P-3出土の土器(図Ⅲ-59-2)
- 図版48 1 P-3出土の土器(図Ⅲ-59-3)
- 2 P-3出土の土器(図Ⅲ-60-4)
- 3 P-3出土の土器(図Ⅲ-60-5)
- 4 P-3出土の土器(図Ⅲ-60-6)
- 5 P-3出土の土器(図Ⅲ-60-7)
- 6 P-3出土の土器(図Ⅲ-60-8)
- 図版49 1 P-3出土の土器(図Ⅲ-61-9)
- 2 P-3出土の土器(図Ⅲ-61-10)
- 3 P-3出土の土器(図Ⅲ-61-11)
- 4 P-3出土の土器(図Ⅲ-61-12)
- 5 P-3出土の遺物(1)
- 図版50 1 P-3出土の遺物(2)、P-5出土の遺物
- 2 P-13・21・24・30出土の遺物
- 図版51 1 P-13出土の遺物(2)表
- 図版52 1 P-13出土の遺物(2)裏
- 図版53 1 P-13出土の遺物(3)表
- 図版54 1 P-13出土の遺物(3)裏
- 図版55 1 P-13出土の遺物(4)
- 図版56 1 P-13出土の遺物(5)
- 図版57 1 P-13出土の遺物(6)表
- 2 P-13出土の遺物(6)裏
- 3 P-13出土の遺物(7)表
- 4 P-13出土の遺物(7)裏
- 図版58 1 P-33出土の土器(図Ⅲ-85-1)
- 2 P-9・14・16・18・19・23・26・27・31、F-9出土の遺物
- 図版59 1 SP-11出土の土器(図Ⅲ-90-1)
- 2 SP-11・23出土の遺物
- 3 P-10、F-5、FC-1出土の遺物
- 図版60 1 包含層出土の土器(図Ⅳ-2-1)
- 2 包含層出土の土器(図Ⅳ-2-2)
- 3 包含層出土の土器(図Ⅳ-2-3)
- 4 包含層出土の土器(図Ⅳ-3-5)
- 5 包含層出土の土器(図Ⅳ-4-6)
- 図版61 1 包含層出土の土器(図Ⅳ-2-4b)
- 2 包含層出土の土器(図Ⅳ-3-7)
- 3 包含層出土の土器(図Ⅳ-5-1)
- 4 包含層出土の土器(図Ⅳ-5-2)
- 5 包含層出土の土器(図Ⅳ-5-3)
- 6 同左
- 図版62 1 包含層出土の土器(図Ⅳ-5-4)
- 2 包含層出土の土器(図Ⅳ-6-5)
- 3 包含層出土の土器(図Ⅳ-6-6)
- 4 包含層出土の土器(図Ⅳ-6-7)
- 5 包含層出土の土器(図Ⅳ-6-8)
- 6 包含層出土の土器(図Ⅳ-6-9)
- 図版63 1 包含層出土の土器(図Ⅳ-6-10)
- 2 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-11)
- 3 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-12)
- 4 同左突起部分の拡大
- 5 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-13)
- 6 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-14)
- 図版64 1 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-15)
- 2 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-16)
- 3 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-17)
- 4 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-18)
- 5 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-19)
- 6 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-20)
- 図版65 1 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-21)
- 2 包含層出土の土器(図Ⅳ-7-22)
- 3 包含層出土の土器(図Ⅳ-9-60)
- 4 包含層出土の土器(図Ⅳ-10-72)
- 5 包含層出土の土器(図Ⅳ-10-73)
- 6 包含層出土の土器(図Ⅳ-10-74)
- 図版66 1 包含層出土の土器(図Ⅳ-10-75)
- 2 包含層出土の土器(図Ⅳ-10-76)
- 3 包含層出土の土器(I群)
- 図版67 1 包含層出土の土器(Ⅱ・Ⅲ群)
- 2 包含層出土の土器(Ⅲ群)
- 図版68 1 包含層出土の土器(Ⅲ群)
- 2 包含層出土の土器(Ⅲ群)
- 図版69 1 包含層出土の土器(Ⅲ・Ⅳ群)
- 2 包含層出土の土製品
- 図版70 1 包含層出土の土器(図Ⅳ-12-1)
- 2 包含層出土の土器(図Ⅳ-12-2)

- | | | | | | |
|------|---|-------------------|------|---|-------------|
| | 3 | 包含層出土の土器(図Ⅳ-12-3) | 図版73 | 1 | 包含層出土の石器(2) |
| | 4 | 包含層出土の土器(図Ⅳ-12-4) | | 2 | 包含層出土の石器(3) |
| | 5 | 包含層出土の土器(図Ⅳ-12-5) | 図版74 | 1 | 包含層出土の石器(4) |
| | 6 | 包含層出土の土器(図Ⅳ-12-6) | | 2 | 包含層出土の石器(5) |
| 図版71 | 1 | 包含層出土の土器(図Ⅳ-12-7) | 図版75 | 1 | 包含層出土の石器(6) |
| | 2 | 包含層出土の土器(図Ⅳ-12-8) | | 2 | 包含層出土の石器(7) |
| | 3 | 包含層出土の土器 (Ⅵ群) | 図版76 | 1 | 包含層出土の石器(8) |
| 図版72 | 1 | 包含層出土の石器(1) | | 2 | H-5 出土の土器 |

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

受託者：財北海道埋蔵文化財センター

受託期間：平成12年4月1日～平成13年3月31日

（発掘期間 7月13日～10月31日）

平成13年4月1日～平成14年3月31日

（発掘期間 5月8日～8月10日）

（整理期間 8月11日～3月29日）

遺跡名：野田生2遺跡（登載番号 B-16-48）

所在地：山越郡八雲町野田生355-12ほか

調査面積：平成12年度 680m²

平成13年度 2,186m²

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

（平成12年度）

理事長 大澤 満

専務理事 宮崎 勝

常務理事 木村 尚俊

総務部長 柳瀬 茂樹

第2調査部長 鬼柳 彰

第1調査課長 種市 幸生（発掘担当者）

主任 中田 裕香

文化財保護主事 坂本 尚史（発掘担当者）

（平成13年度）

理事長 大澤 満

専務理事 宮崎 勝

常務理事 木村 尚俊（平成13年7月逝去）

総務部長 柳瀬 茂樹

第2調査部長 大沼 忠春（第1調査部長兼務 平成13年7月から）

第4調査課長 遠藤 香澄

主任 中田 裕香（発掘担当者）

文化財保護主事 立田 理（発掘担当者）

3 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道（函館～名寄間）は函館市を起点として室蘭・苫小牧・札幌市を經由し、名寄

I 調査の概要

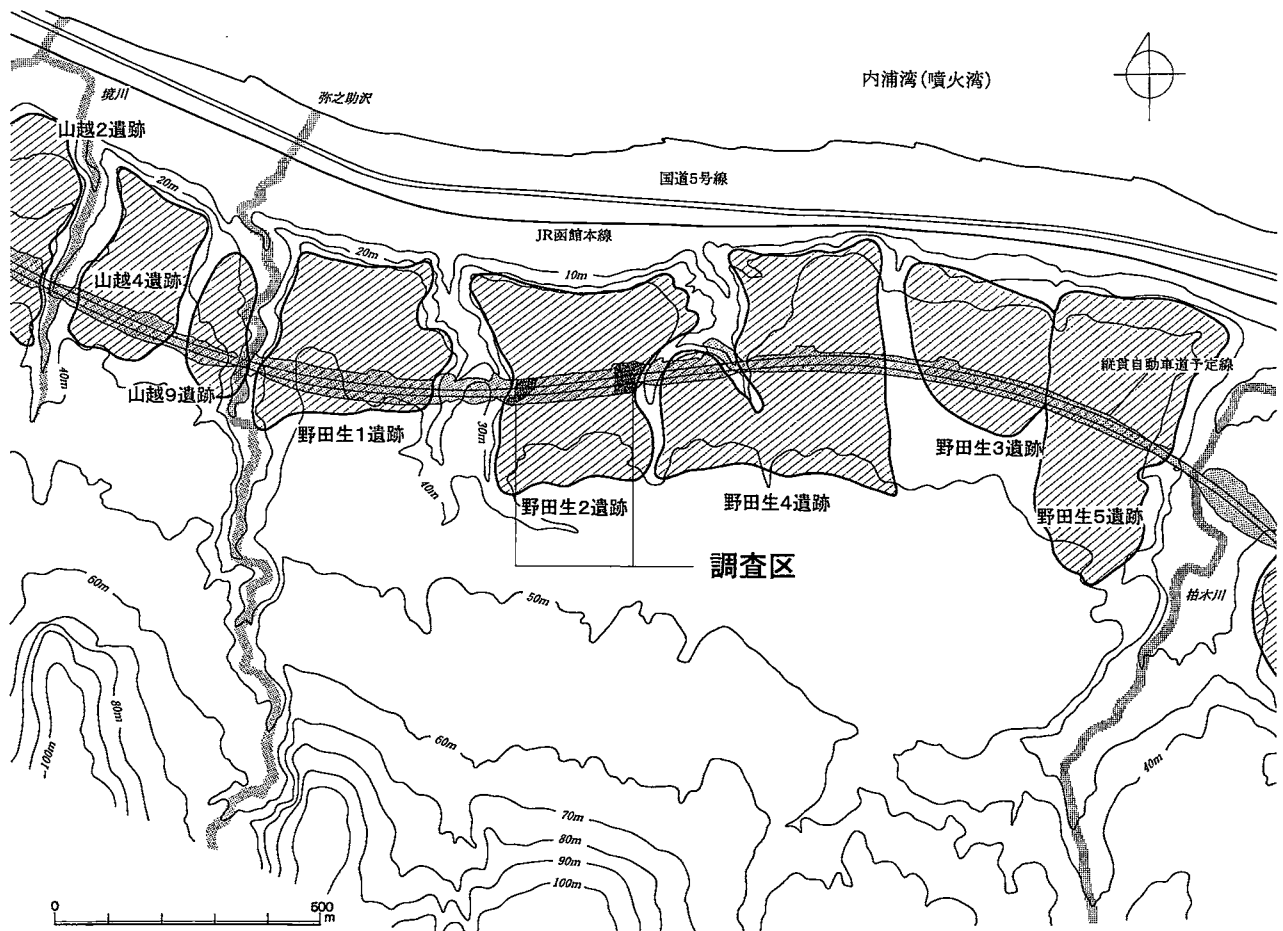


図 I - 1 遺跡周辺の地形と調査区

市に至る総延長488kmの路線で、このうち国縫 IC～和寒 IC間は既に供用されている。七飯～長万部間の路線については平成5年11月から事業が進められている。この事業に対する埋蔵文化財調査については平成2年4月、日本道路公団札幌支社から事前協議がなされ、協議を受けた北海道教育委員会では平成2年4月および平成7年11月に所在確認調査を、平成7年10月以降に順次、範囲確認調査を実施した。野田生2遺跡については、平成11年5月に範囲確認調査が実施され、発掘調査の必要な面積5,700㎡が提示された。北海道教育庁文化課が道路公団と協議した結果、計画変更は不可能なことから、発掘調査を実施することとなった。野田生2遺跡は、標高約40mの段丘平坦面に広がっており、調査必要面積5,700㎡は沢沿いの2ヵ所に分かれて設定された。そのうち1,920㎡は4車線化時の調査範囲・余裕幅等にあたり、調査予定面積は2ヵ所の合計で3,780㎡で算出された。

平成12年度調査は、調査予定面積の25%に当たる945㎡を計画し、農作業道確保、崩落事故を回避するために、680㎡に変更しておこなわれた(図I-3)。このとき2ヵ所の調査区のうち森町側をA地区、八雲町側をB地区と便宜上呼称した。

調査の結果A地区からは、住居とみられる落ち込みが4ヵ所、土壌2基のほか、縄文時代早期～中期の土器1,481点、石器等151点が出土し、B地区においてはスクレイパー1点、Uフレイク1点が出土したのみである。

この25%調査の結果を受け、北海道教育庁文化課、日本道路公団、(財)北海道埋蔵文化財センターの3者による協議がもたれ、遺構が多く検出され、遺物の出土も多いことが予想されるA地区2,020㎡に対し平成13年度に調査を行い、B地区については本調査を行わないことが決定された。A地区の調査にあたっては、遺構が比較的多く検出され、縄文早期、中期の遺物が多く出土した東側の沢に面し

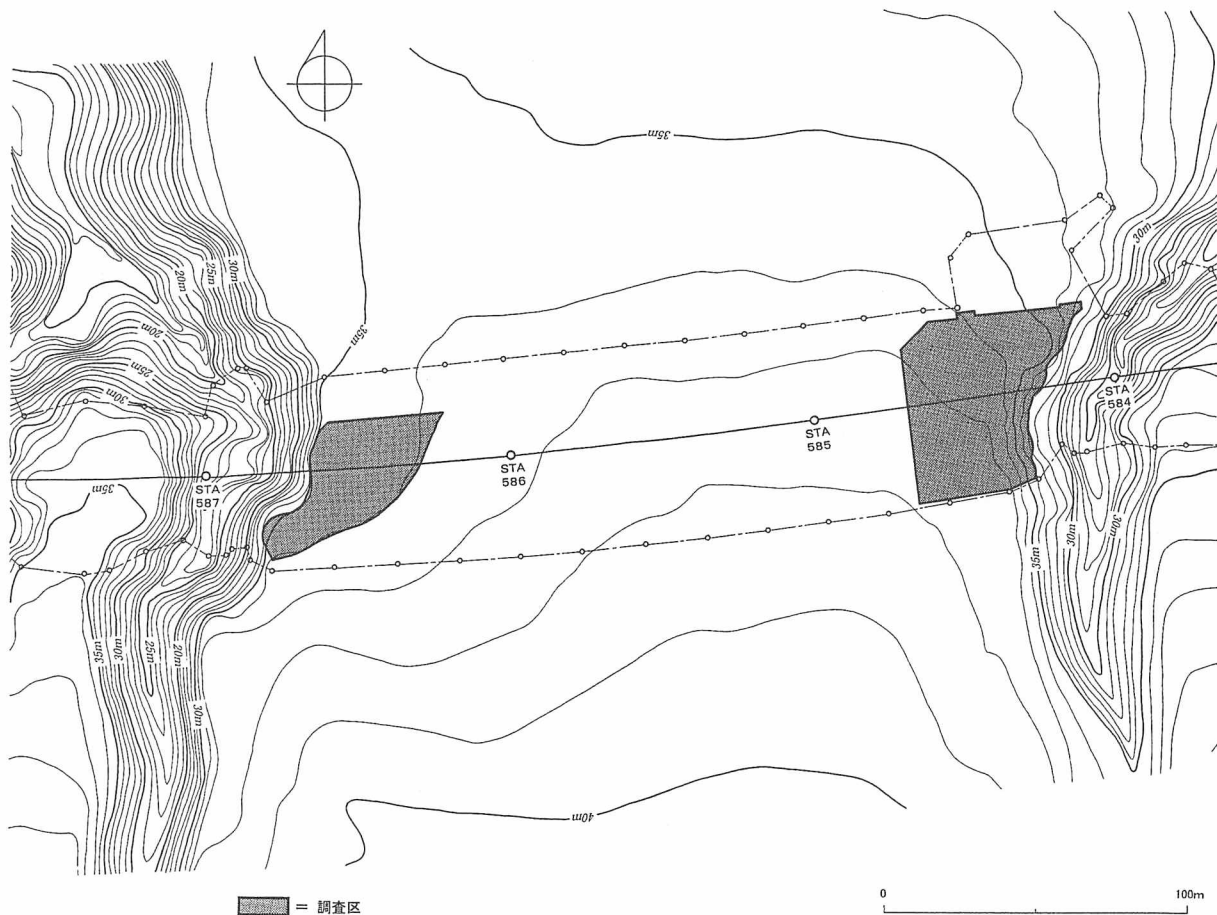


図 I - 2 調査区設定図

た範囲1,140m²を通常発掘調査、深度耕作により包含層の残存状況の悪い西側880m²を遺構確認調査とした。

さらに平成13年度の本調査では現地での求積の結果、通常発掘調査部分が166m²増え、2,186m²となった。

野田生2遺跡は函館工事事務所管内にかかり、同所管内では山越・落部・栄浜地区の調査が平成11年度から着手されている。これまで調査された遺跡は、八雲町内では山越2遺跡・山越3遺跡・山越4遺跡・野田生1遺跡・野田生2遺跡・野田生4遺跡・野田生5遺跡・落部1遺跡・栄浜1遺跡（以上財北海道埋蔵文化財センター）、山越5遺跡、旭丘1遺跡・浜松3遺跡・栄浜2遺跡・栄浜3遺跡（以上八雲町教育委員会）があり、森町内では本内川右岸遺跡・濁川左岸遺跡（財北海道埋蔵文化財センター）・栗ヶ丘1遺跡・鷲の木4遺跡（森町教育委員会）がある。

4 調査の概要

(1) 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては、北海道縦貫自動車道(七飯～長万部間)八雲南工事区測量図(縮尺1,000分の1)を使用した。工事区予定中央線上の中心杭であるSTA. 585と586を結んだ線を延長し、基準のMラインとした。Mラインから4m毎に北に向かってL、K…南側も同様にN、O…とした。またSTA. 585を通りこれに直交する線を40ラインとし、4m毎に東に向かって39、38…同様に西に向かって41、42…とした。調査区内においてこれらの直線が交差する地点に杭を打設した。発掘区はこの4mの方眼を基本とし、その南東側(図左上)の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼

I 調査の概要

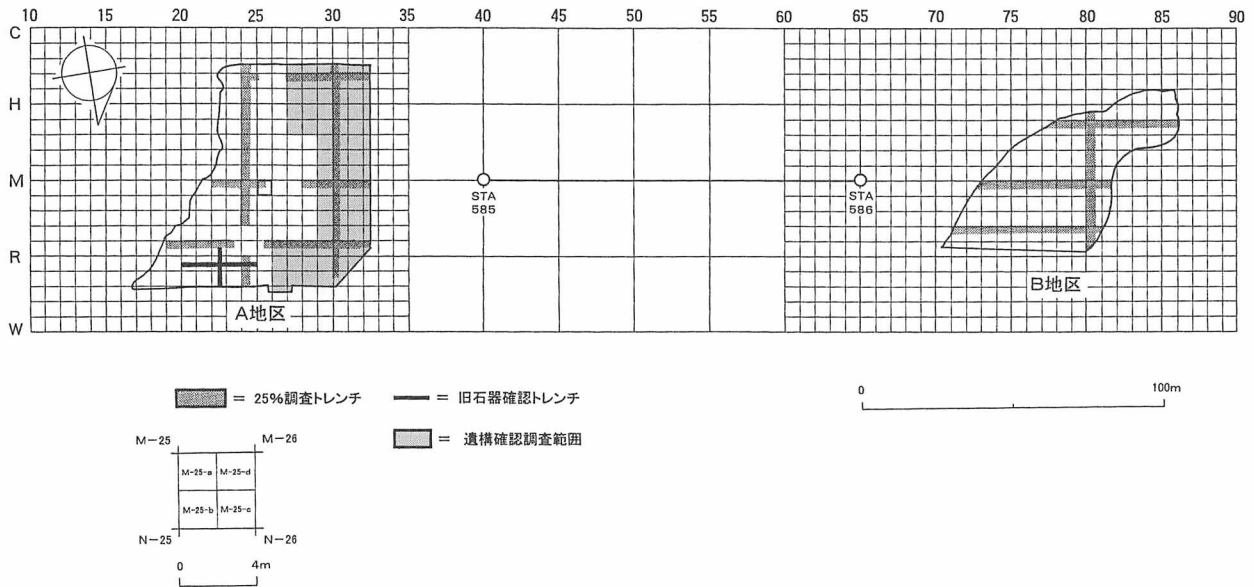


図 I - 3 調査区設定図及び平成12年度調査区位置図

称される（例えばN-15、M-20等）。調査においてはさらにこの方眼を4つに分けた2m方眼（小発掘区）に分割し遺物の取り上げを行った。小発掘区は杭のある側から反時計回りにa、b、c、dを付し、N-15-a、M-20-bのように呼称した（図I-1）。

なおMラインはN-97°-W、またこの方眼の平面直角座標は第XI系で以下のとおりである（旧測量法、旧日本測地系による）。

STA. 585（調査区杭番号M-40） X = -197889,068 Y = 8662,592

STA. 586（調査区杭番号M-65） X = -197900,642 Y = 8563,270

(2)調査の方法

平成12年度の25%調査を受け、本調査に先行しバックフォーによって表土、火山灰を除去した。その結果、25ラインから東側ではⅡ層とした駒ヶ岳火山灰d層が厚く堆積しており、包含層も良好に残存している事がわかった。一方、遺構確認区とした25ラインより西側では耕作が漸移層付近まで及んでいることがわかった。

このため調査は遺構確認区においてはスコップ・ジョレンを併用した遺構の確認を主体とし、包含層の良好に残存している区域に関しては、特に火山灰の落ち込み等が確認されない場合、移植ゴテを用いて5cm毎に掘り下げ、小発掘区にしたがって遺物を取り上げた。

遺構の遺物に関しては特に重要と思われるもののほか床面から出土した遺物に関しては出土した位置を全点計測して取り上げた。

また、住居跡H-5の柱穴HP-15を調査中、V層から石器とも取れる頁岩片が出土したため、旧石器時代の遺物の出土を想定して出土地点を中心に図I-3のようにトレンチを設定した。基本層序の部分で述べるが、V層以下には白色粘土と火山灰とみられる褐色細粒砂が堆積しており、これを目安に平均して1m程掘り下げた。しかし、出土したものは段丘堆積物とみられる礫のみである。

(3)整理の方法

現地では遺物を取り上げた後、水洗して大まかな分類を行い、遺物台帳、遺物カードを作成した。遺物のうち小発掘区で取り上げたものについては、掘り下げ回数を台帳、カードの備考欄に書き入れた。遺構出土遺物のうち位置を計測して取り上げたものに関しては、原則的に備考の欄に記入したが、

一部は取り上げ時の番号をそのまま遺物番号としたものもある。注記は台帳の整理が終わったものから順次作業を行った。また台帳の完成後、マイクロソフト社エクセルを用いてパソコンに入力し、集計作業の効率化を図った。

冬期の室内整理作業では遺物収集帳の点検、台帳の補正、土器の接合、復原作業、剥片の接合作業、遺物の実測および作図、集計、記録類の整理を行った。

なお注記の方法は以下のとおりである。また整理の段階では、発掘区出土遺物との混乱を避けるため、遺構の頭に野田生を意味するNをつけた。これは本報告では表記していない。

遺構出土の遺物

遺跡名	遺構名	遺物番号	層位
ノダ2.	NH-1.	103.	フク2

包含層出土の遺物

遺跡名	発掘区	遺物番号	層位
ノダ2.	P-26-a.	1.	Ⅲ

(4)基本層序

調査は前述のように平成12年度と13年度の2カ年にわたって行われた。基本層序は平成12年度に行われた25%調査により決定され、13年度の調査の際、さらに縄文時代早期の包含層を明確にするためⅣ層に関して細分を行った。また前述した2カ所の調査区とも一部に細分した個所があるものの堆積状況に相違は無い。以下に各層について記す。

- I 層：灰褐色土（現代耕作土）
- II 層：灰白色シルト質土（駒ヶ岳火山灰d層）
- III 層：黒色土 以下のように細分した部分がある。
- III a 層：（Ⅲ層上部）（縄文時代前期～続縄文時代包含層）
N1.5/黒（粘性なし ややしまりあり 削るとやや光沢がある 層界は明瞭）
- III b 層：（Ⅲ層中下部）
10Y R1.7/1黒～10Y R2/2黒褐色（粘性なし ややしまりあり 黄褐色土粒子が極少量混じる）
- IV 層：暗褐色土 以下のように細分した部分がある。なおⅢ層とⅣ層の層界には駒ヶ岳火山灰g層が観察される部分がある。
- IV a 層（縄文時代早期包含層）
10Y R4/1褐灰色（粘性あり しまりあり）
- IV b 層（漸移層）
10Y R5/2灰黄褐色（粘性あり しまりあり）
- V 層：黄褐色ローム（基盤層）
10Y R6/6明黄褐色（粘性あり ややしまりあり）

また、V層の下部に、段丘堆積物とみられる白色粘土や、火山灰とみられる褐色細粒砂が確認できる部分があった。

I 調査の概要

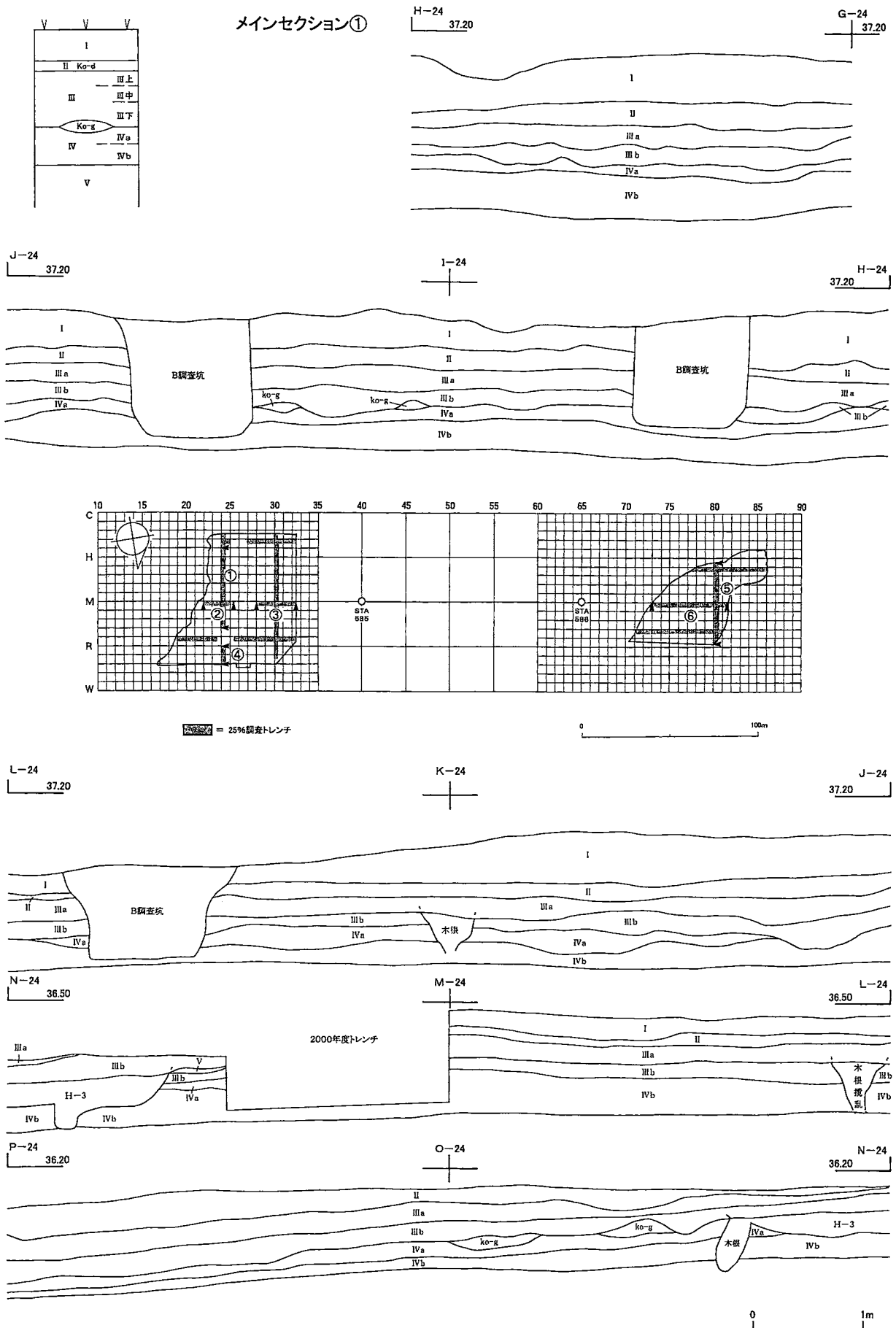
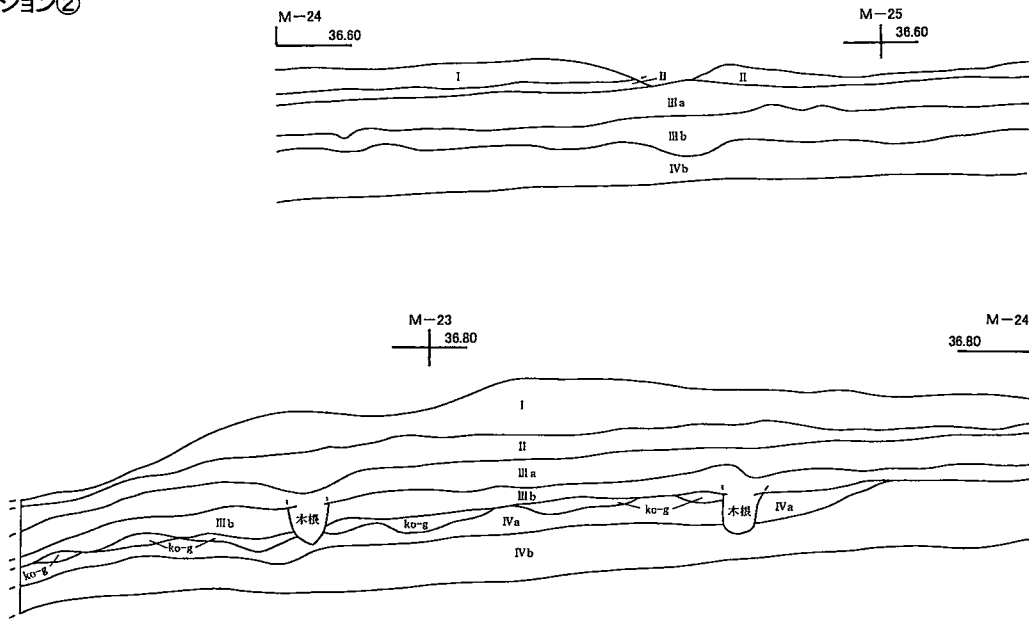
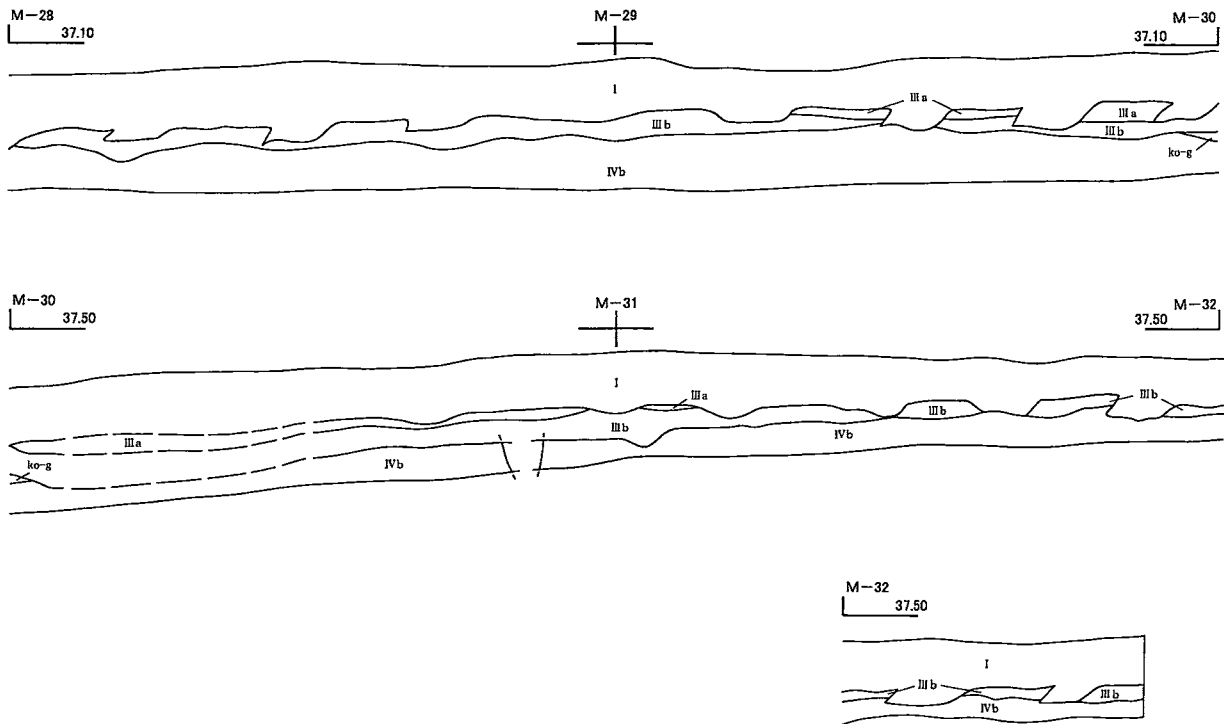


図 I - 4 メインセクション(1)

メインセクション②



メインセクション③



メインセクション④

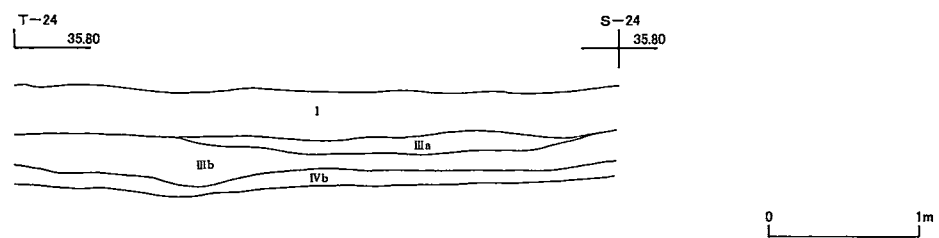


図 I-5 メインセクション(2)

I 調査の概要

メインセクション⑤

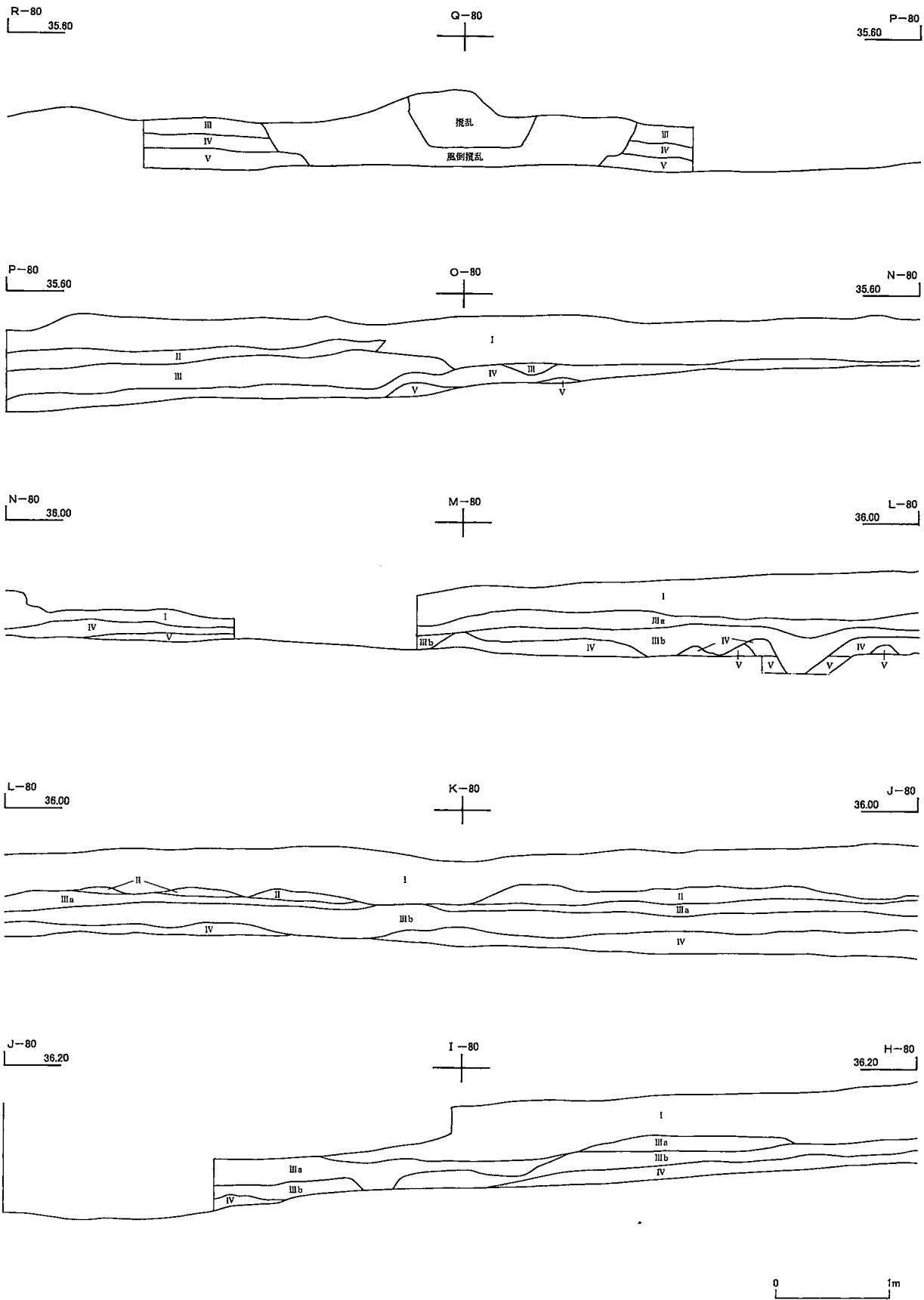


図 I - 6 メインセクション(3)

メインセクション⑥

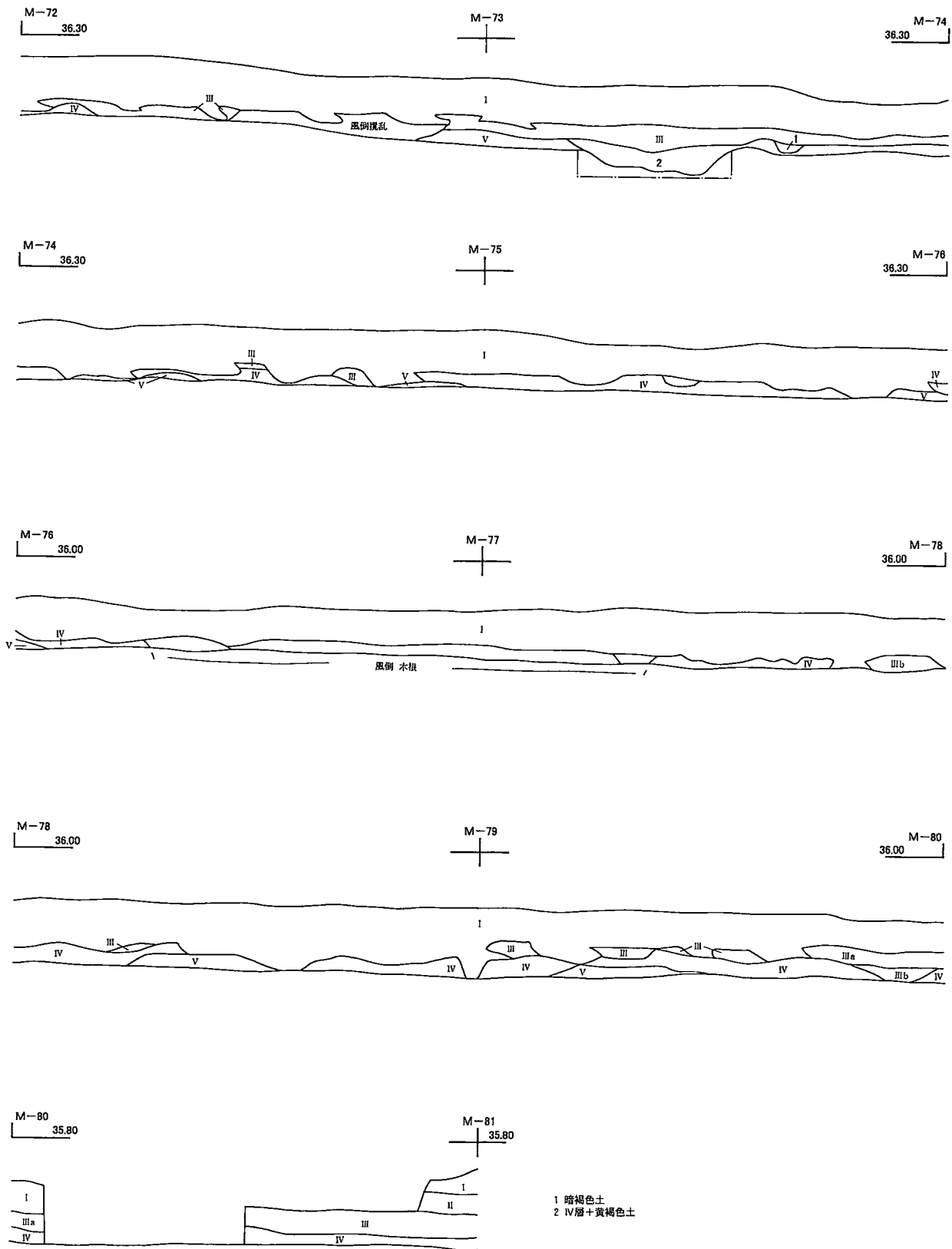


図 I-7 メインセクション(4)

(5)遺物の分類

1)土器

土器は、縄文時代早期に属するものをⅠ群とし、以下、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群である。なお、本遺跡ではⅦ群の資料は出土していない。また、Ⅴ群は細片がわずかに出土したのみである。

Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群

- a類 貝殻文、条痕文、沈線文の施されたもの
- b類 縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、貼付文の施されたもの（今回は出土していない）

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群

- a類 縄文尖底土器群（今回は出土していない）
- b類 円筒土器下層式に相当するもの

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群

- a類 円筒土器上層a式、円筒土器上層b式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの
- b類 榎林式、大安在B式、ノダツプⅡ式、煉瓦台式に相当するもの

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群

- a類 天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの
- b類 ウサクマイC式、手稲式、鯨潤式に相当するもの（今回は出土していない）
- c類 堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの

Ⅴ群 縄文時代晩期に相当するもの

Ⅵ群 続縄文時代に属する土器群

- a類 恵山式以前に相当するもの（今回は出土していない）
- b類 恵山式に相当するもの（今回は出土していない）
- c類 後北式に相当するもの

2)石器等

石器等は、(財)北海道埋蔵文化財センターによる八雲町内での分類を踏襲し、表Ⅰ-1の様に分類した。細分にあたって留意した2点について説明する。

- ①半円状扁平打製石器としたもののうち、扁平礫の周囲を打ち欠いて整形される狭義のもの以外に素材となる礫の形状の違いから3つに細分した。3dの礫をそのまま素材とするものと、Ⅷ1のすり石との区別は、機能部に打ち欠きによる整形があるものもしくは素材礫の長軸端に打ち欠きによる加工が有るものを3dそれらが無いものをⅧ1とした。
- ②Uフレイクと「素材となる剥片の形状をほとんど変えない」スクレイパーとの区別は、深さ概ね5mm以上の細部調整が、連続して5枚以上つけられるものにおいてスクレイパーとした。また、定型的な道具として使用された可能性を考慮し素材となる剥片の形状から3つに細分した。

表 I-1 石器等分類表
剥片石器群

I	石鏃	I A	1	石刃鏃				
			2 a	薄手・細身	薄手・細身・柳葉形			
			2 b		薄手・細身・五角形			
			3	三角形				
			4	木葉・変形				
	5	有基						
	9	破片で細分の困難なもの						
	石槍またはナイフ	I B	1	有基のもの				
			2	無基で変形・木葉形のもの				
			9	破片で細分の困難なもの				
II	石鏃	II A	1	剥片の一部に機能部を作り出したもの				
			2	棒状のもの				
			3	棒状のものにつまみ部を作り出したもの				
			9	破片で細分の困難なもの				
			III	つまみ付きナイフ	III A	1 a		背面右側縁に急角度の刃部を持つもの
						1 b	片面調整	片面全面調整
						1 c		片面周縁調整
						2	両面調整のもの	
						3	横長のもの	
4	ほとんど細部調整しないもの							
9	破片で細分の困難なもの							
スクレイパー	III B	1 a		篋状石器	片面調整			
		1 b			両面調整			
		2 a		縦長剥片素材	刃部外湾			
		2 b			刃部直線			
		2 c			刃部内湾			
		3 a		横長剥片素材	刃部外湾			
		3 b			刃部直線			
		3 c			刃部内湾			
		4	ラウンドスクレイパー					
5	エンドスクレイパー							
6	尖端のあるもの							
7	持ちこみのあるもの							
8	素材となる剥片の形状をあまり変えないもの							
9	破片で細分の困難なもの							
IV	両面調整石器	IV	1	円形・楕円形のもの				
			2	木葉形のもの				
			3	半円形で一方の側縁に平坦面があるもの				
V	石核	V A	1					
	原石		2					
	R フレイク	V B	1					
	U フレイク		2 a	縦長剥片の側縁を使用したもの				
			2 b	一部に原石面の残る剥片を使用したもの				
			2 c	上記以外の不定形剥片素材				
	楔形石器	V C	3					
フレイク・チップ								

磨製石器群

VI	石斧	VI A	1	擦り切り技法により製作されたもの	
			2	打ち欠きにより整形されたもの	
			3	敲打により整形されたもの	
			4	磨きのみにより整形されたもの	
	擦り切り残片		5		
	研磨石材		6		
	石のみ	VI B			

礫石器群

VII	たたき石	VII	1	礫の1端もしくは両端に敲打痕のあるもの	
			2	礫の周縁に敲打痕のあるもの	
			3	礫の平坦面に敲打痕のあるもの	
			4	上記のうち痕跡が明瞭にくぼんでいるもの	
VIII	すり石	VIII	1	断面三角形の礫の稜をすったもの	
			2	扁平礫の側縁にすり痕のあるもの	
			3 a	半円状扁平打製石器	狭義
			3 b		礫剥片素材
			3 c		半割礫素材
			3 d		扁平礫をそのまま素材
3 e	未製品				
4	北海道式石冠				
5	円礫の一部にすり痕のあるもの				
IX	石鋸	IX A			
	砥石	IX B	1	使用面に溝があるもの	
			2	使用面が平滑なもの	
X	台石・石皿	X			
XI	石錘	XI	1	4ヶ所に打ち欠きをもつもの	
			2	長軸両端に打ち欠きをもつもの	
			3	短軸両端に打ち欠きをもつもの	
XII	加工痕・使用痕のある礫	XII	1		
	礫		2		

I 調査の概要

(6)調査結果の概要

野田生2遺跡は、2カ年にわたる調査の結果、遺構は、竪穴住居跡7軒、土壙墓5基、土壙29基、柱穴状ピット24カ所、焼土13カ所、集石1カ所、フレイク集中1カ所が検出されており、調査区北西の沢に面した緩斜面に分布している。これらのうち、続縄文時代の後北C₁式期とみられる土壙1基、焼土3カ所とフレイク集中以外は、縄文時代中期のサイベ沢VII式・見晴町式の時期に属するものがほとんどであるとみられる。

遺物は50,347点出土した。内訳は土器15,665点、石器等34,682点である。Lライン以北の出土点数が多く、遺構の分布する範囲にほぼ一致している。

土器は縄文時代早期～後期の土器、続縄文土器が出土しているが、縄文中期前葉～中葉の土器が主体を占める。調査区の北東部では早期の条痕文平底土器、南東部では続縄文時代の後北C₁式も出土している。石器はスクレイパーやすり石が多く、石鏃、たたき石、石皿がそれらについて出土している。

表I-2 出土遺物一覧

分類	I群a類	II群b類	III群	III群a類	III群b類	III群b2類	IV群	IV群a類	IV群c類	V群	VI群c類	不明	土器計
包含層	1,022	11	630	8,503	201	354	33	51	1	2	597	234	11,639
遺構	45	1	165	3,496	44	185	0	33	0	0	25	19	4,026
計	1,067	12	795	11,999	245	539	33	84	1	2	622	253	15,665

分類	石鏃	石槍	石錐	つまみ付きナイフ	スクレイパー	両面調整石器	石核	原石	Rフレイク	Uフレイク	フレイク・チップ	石斧	石のみ	たたき石	すり石	半円状扁平打製石器	北海道式石冠	砥石	台石・石皿	石錘	礫・礫片	石製品・土製品	石器等計
包含層	29	3	8	5	110	1	10	8	34	122	1,568	5	2	82	12	58	28	11	54	13	2,760	31	4,954
遺構	23	2	3	3	52	3	2	3	23	46	934	4	1	33	1	30	9	1	50	0	28,483	22	29,728
計	52	5	11	8	162	4	12	11	57	168	2,502	9	3	115	13	87	38	12	104	13	31,244	53	34,682

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

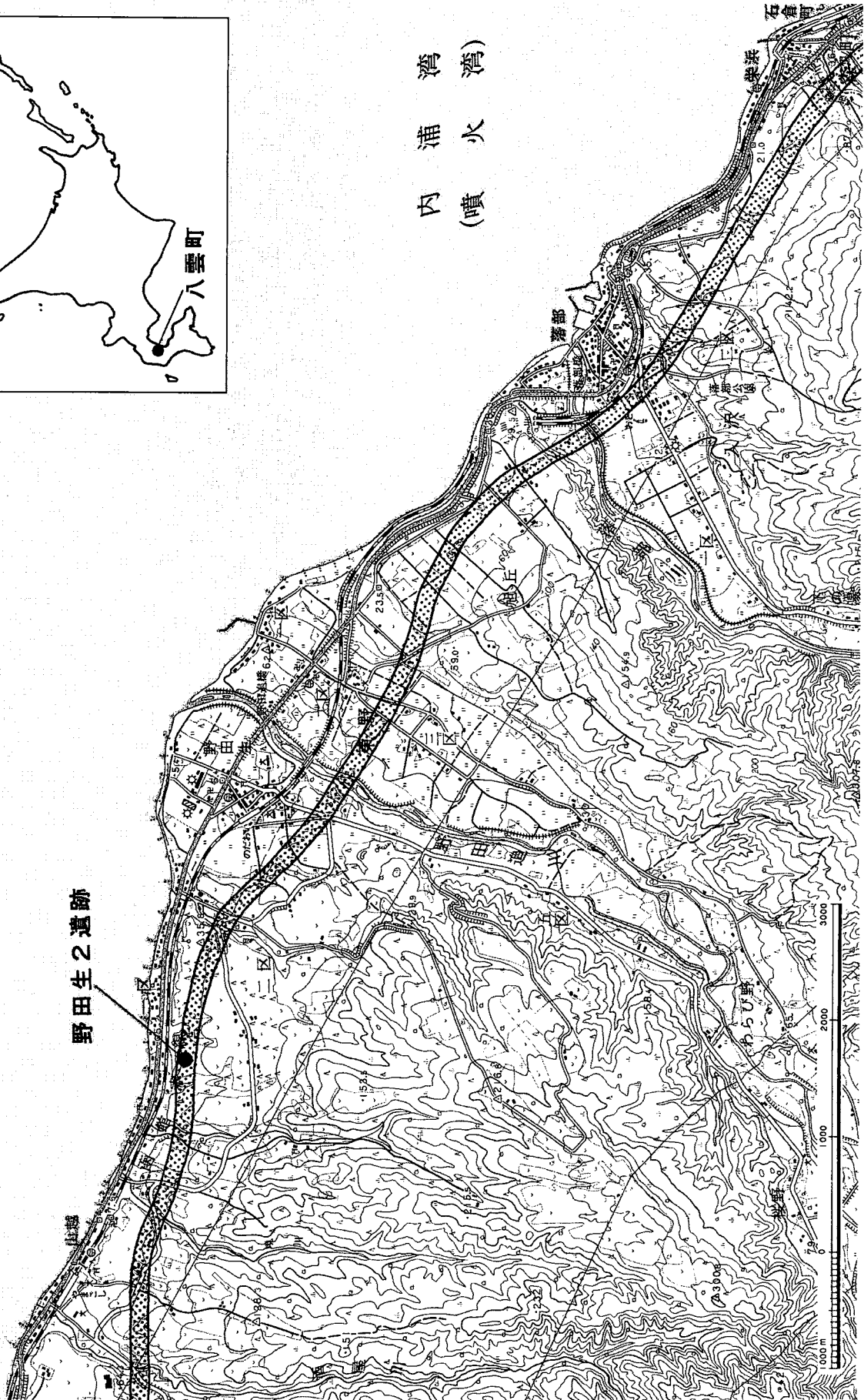
八雲町は渡島半島の北東部、内浦湾（噴火湾）に面し渡島管内で最も広い面積736.47km²を有する。北側はルコツ川を挟み長万部町と南側は茂無部川を境に森町と隣接しこの間の海岸線は34kmに及んでいる。西側は半島を日本海側と太平洋側とに二分する渡島山地を挟んで、桧山支庁の5町（今金町、熊石町、厚沢部町、乙部町、北桧山町）と接している。町域の82%はスギ、トドマツが主体の山林が占める。市街地は清流遊楽部川の河口に流入する砂蘭部川によって形成された扇状地の末端部に発達している。遊楽部川は太櫓岳に源を発し東流する全長28.5km、流域面積391.3km²の河川である。「サケ」が自然産卵のため遡上し、天然記念物であるオジロワシやオオワシのほかシギ等多くの鳥類が飛来する中継地としても知られ、また、棲息する魚類も豊富でアユの天然分布の太平洋側における北限、キュウリウオ、シシャモの南限でもある。この他、市街地の南西部には内浦湾に注ぐ大小の河川があり、その流域には農耕地が広がり緩やかに発達した丘陵地帯には酪農を中心とした農家が点在する。北海道の酪農の先進地であり、同時に道南を代表する養殖ホタテの生産基地でもある。噴火湾を背にすると砂蘭部岳、雄鉾岳、渡島半島の最高峰遊楽部岳（1,276m）、太櫓岳の山並みが、南部に広がる町営乳牛育成牧場に立つと北東に羊蹄山、南東方向には北海道駒ヶ岳の優美な姿が一望できる。

気候は海洋性のため春から夏にかけてやませ（北東風）が海霧をもたらし冷涼な日があり盛夏でも30度を超える日は少ない。平成12年の平均気温は8.2℃、最高気温は30.4℃、最低気温は-16.0℃、年間降水量は1,585mm、最深積雪量は87cmである（2001 八雲町町勢要覧による）。八雲町はまた四季折々変化に富んだ色彩があふれる“自然美術館の町”でもある。5月初旬、発掘調査が始まる頃には「さらんべ公園」で2,500本もの桜に出会うことができる。また6月には町の花であるツツジが「落部公園」を埋め尽くし、初夏になれば浜辺にはハマナスが、また山崎・花浦地区の国道5号線沿いにはエゾカンゾウの群生が橙黄色の花を咲かせる。秋には遊楽部川だけでなく野田追川、落部川にもサケが溯上し、冬は北西風が吹き噴火湾沿岸では最も積雪量が多いところでもある。

八雲の旧名は川にその名を残す。「遊楽部」、アイヌ語で「ユー・ラップ」（温泉下る川）、一説では「イ・ウ・ラァ・ペツ」（共に流れる川—支流がたくさん集まって流れ下る—）（改訂八雲町史）と呼んでいたものを、明治14年（1881年）、ここに農場を作った旧尾張藩主徳川慶勝侯が『古事記』の古歌「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠に八重垣作る その八重垣を」に因んで改名したものである。町内のあちこちには古歌に因む町名や名古屋市周辺の地名がつけられている。

野田生2遺跡は八雲市街から森町に向けて7.5kmほど南下した野田生地区に所在する。地形的に見るとこの周辺は、主として新第三紀鮮新世の瀬棚層で構成される標高100~200mの起伏が緩やかで谷密度が比較的小さい丘陵地とそれにつづく段丘面からなる。瀬棚層は上部の礫岩部層と下部の砂岩部層からなり、海岸丘陵地帯である遺跡周辺では上部礫岩部層が発達し、第四紀の段丘堆積物がある上を被っている。遺跡は標高30m~40mの海岸段丘上に立地し、海岸線に沿った東西総延長は250m、南北に400mほどである。平成12・13年度の調査範囲はこのうち標高35mの平坦面に位置し、東西2か所に分かれている（図I-2）。A地区の沢を挟んで東側には野田生4、B地区西側には野田生1遺跡がある。遺跡南側をミルクロードの愛称がある農道が緩やかな丘陵地帯を縫うように走っている。

八雲地方に東蝦夷地箱館六ヶ場所の一つとして野田追場所が設置されたのは慶長年間（1596~1614年）とされる。同じ頃開設された遊楽部（のちの山越内）場所同様、正式な開所時期は不明であるが、



図II-1 遺跡の位置

『津軽一統史』の寛文10年(1670)の記載には新田権之助が商場の知行主であることが記されている(改訂八雲町史)。南側は茂無部川を境に茅部場所と、北は山越の中央を流れる境川を文字通り境とし山越内場所と区画されていた。当場所では鮭、鱈、海鼠、帆立貝、夏場は昆布が漁獲され、とくに冬場は内浦湾を回遊するオットセイ猟が盛んであったことが記録に残っている。明和年間(1764~1772年)までは野田追がその中心であったが、落部の和人移住者増加により、安永5(1777)年にはその地位を落部に譲ることとなるが、寛政12(1800)年には場所名がそのまま残る形で村並となっている。松浦武四郎は弘化2・3(1845・46)年の紀行である『初航・再航蝦夷日誌』を底本にまとめた『渡島日誌』のなかで、当時の野田追村について「人家二十五軒、文化度六軒 夏分は浜は一面の昆布小屋にて実に繁昌なり。またはたごや、茶屋、小商人多し。」と記している。また、少しながら畑作が行われていたという。活況を呈していた様子が伺える。しかし文政・天保年間、落部場所と名が変わり、また畑の開墾が進展する中、隣の山越内場所へ転出するものも出現。このような動向のうちに明治期を迎え、蝦夷地が北海道となった明治2年(1869)には落部村に併合されている。

野田生は昭和31年以降の行政字名である。古くは野田追川の流域を指して「のた(だ)へ」あるいは「のたあい」と呼ばれていた。永田方正の『北海道蝦夷地名解』(明治24年)によれば「ヌプ・タイ Nup・tai (野・林)。今ノタオイと云うは非なり」とある。ちなみに永田は明治15年函館支庁から派遣され、遊楽部川河口の浜に居住していたアイヌの子弟のための「遊楽部学校」を開校、その間アイヌの人々の案内で遊楽部川本支流を巡りアイヌ語地名を研究、調査している。この他、上原熊次郎『蝦夷地名考』(文政7・1824年)では「ヌタイなり。(焼野)」と解されているが、『北海道の川の名』、『北海道駅名の起源(昭和29年改版)』ともに『永田解』の「ヌプ・タイ」を取り上げている。

現在「のだおい」の標記には野田生と野田追の2つがあり、山や川の名には後者が冠される。明治29年調整假製五万分の一『八雲』には川の名以外は見当たらないが、大正6年測図の五万分の一地形図では古くからの恵比須神社(蛭子神社)のある現在の東野地区を野田追、川を渡った八雲町側を野田生と区別している。大正年間から昭和45年の東野への字名改正まではこのように標記されていたようである。近年、野田生地区には工業団地が整備され場所当時の造船を偲ばせる船舶製造工場がある。

2 周辺の遺跡

平成14年2月現在、八雲町内では旧石器時代から縄文時代、続縄文時代、擦文時代にかけての78か所の遺跡が掲載されている(表II-1)。縄文時代を主体とする時期の複合する遺跡が8割以上を占め、その多くが内浦湾に面した標高20m~40mほど、高いところでは標高60mをはかる海岸段丘上に立地している。とくにハシノスベツ川から野田追川にかけての約7kmの間には半数近くの34か所の遺跡がある。これらの多くは中期の円筒上層式期~後期中葉を主体とするもので、連綿と連なっており海岸線全域が遺跡といっても過言ではない。

内陸部では遊楽部川上流の上八雲・富咲地区の標高60~85mの河岸段丘には、道南を代表する旧石器時代の遺跡であるトワルベツ(上八雲1)遺跡、大関遺跡をはじめ8つの遺跡があることが古くから知られている。このほか八雲市街地では砂蘭部川の下流に広がる扇状地の扇央や扇端部(5か所)や野田追川の河岸段丘上(4か所)にも少ないながら遺跡が見つかった。また、標高の低い海岸段丘や砂丘等の沖積地には浜中1遺跡(落部遺跡)に代表されるような続縄文時代の遺跡が立地する傾向が認められる。これらの遺跡は海触や開発行為で包含層が消滅している場合が多い。

ここでは野田生地区の遺跡に加え、野田追川中流域の桜野地区、下流域の東野地区および旭丘地区の遺跡を中心にその内容を簡単に見ていくこととする。

表I-1 八雲町内の遺跡

登録番号	遺跡名	所在地	立地()内標高m	時期	文献・内容・備考
B-16-1	オクツナイ遺跡	浜松1、31、39ほか	奥津内川右岸海岸段丘(8~20)	縄縄文(恵山)	採集資料あり 柴田(1991b)
B-16-2	トコタン1遺跡	熱田44-20ほか	海岸段丘(20~25)	縄縄文(恵山)	田川(1956)のトコタン遺跡C地点
B-16-3	ルコツ1遺跡	黒岩258ほか	海岸段丘(30~35)	縄文	頁岩剥片
B-16-4	浜松1遺跡	浜松259ほか	海岸段丘(25~28)	中期	円筒上層
B-16-5	大岡牧庭遺跡	上八雲296-1ほか	遊楽部川河岸段丘(70~75)	旧石器	昭和35年調査大岡遺跡。吉崎(1961)、千代(1965)三浦・柴田(1993)
B-16-6	シラリカ3遺跡	黒岩98、326	海岸段丘(25~40)	旧石器	頁岩剥片
B-16-7	上八雲1遺跡	上八雲286ほか	遊楽部川河岸段丘(70~80)	旧石器	昭和35・36・39年調査のトフルベツ遺跡 吉崎(1961)
B-16-8	雷咲遺跡	雷咲161ほか	遊楽部川河岸段丘(60~65)	旧石器	昭和35年10月面館博物館調査 伊藤千代吉所有煙葉集の石鏡は町指定有形文化財(昭和44年9月)
B-16-9	コタン温泉遺跡	浜松281ほか	ブユウヒ川左岸の海岸段丘(21~34)	早期~晩期・縄縄文	三浦・柴田(1992) 集落跡・土壊墓・貝塚 国の重要文化財指定骨角牙製品。昭和20・30年代田川賢三調査の無戸部遺跡 無戸部コタン遺跡。八雲高校郷土史研究部(1970)のコタンA遺跡
B-16-10	大新遺跡	大新47-1ほか	砂蘭部川扇状地の扇央(32)	早期・中期・晩期・縄縄文(恵山・後北)	三浦・柴田(1997・1998a)円筒上層B、後北C2
B-16-11	山越1遺跡	山越434-1ほか	海岸段丘(30)	中期	三浦(1980・1984)柴田(1991a・b)早期貝殻文・条痕文土器、魚形石器
B-16-12	山崎1遺跡	山崎154-7ほか	アイトウシナイ川左岸海岸段丘(28)	中期~晩期・縄縄文	三浦(1987)後北式と弥生系土器(天王山式)が伴出
B-16-13	台の上遺跡	東野505ほか	野田追川河岸段丘(15~20)	中期・晩期	円筒上層式 タンネトウL式
B-16-14	八雲1遺跡	出雲町40ほか	砂蘭部川扇状地(10)	中期・晩期	採集資料あり(魚形石器)。柴田(1991a)
B-16-15	シラリカ遺跡	黒岩100ほか	シラリカ川河岸段丘(5~10)	縄縄文(恵山)・糠文	円筒上層式 北大式?
B-16-16	小金沢遺跡	東野625ほか	野田追川右岸の河岸段丘(40)	中期	三浦(1961・1964)昭和34・37調査の落部遺跡 墓坑・小貝塚・住居跡、魚形石器 及川(1987)
B-16-17	浜中1遺跡	菰部470ほか	海岸段丘(15~17)	縄縄文(恵山)	円筒上層式
B-16-18	桜野1遺跡	桜野25-1ほか	野田追川河岸段丘(60~65)	中期	ブレイド・ポイン・ナイフ・石刃
B-16-19	上八雲2遺跡	上八雲334-1ほか	遊楽部川の河岸段丘(85)	旧石器	土器片 剥片(黒曜石・頁岩)
B-16-20	ハシノスベツ遺跡	大新72-3ほか	砂蘭部川の扇状地(30~50)	中期	田川(1958)昭和32年調査の元山遺跡 住居跡6
B-16-21	元山牧場遺跡	浜松105ほか	酒屋川左岸海岸段丘(20~30)	前期・中期	タンネトウL式
B-16-22	八雲2遺跡	相生町116ほか	砂蘭部川扇状地(20~28)	晩期	武内・山田(1968)野村(1982)三浦(1984)昭和42・55年調査の熱田遺跡。魚形土器を伴う住居跡 土師器は町指定有形文化財(昭和44年9月)
B-16-23	トコタン2遺跡	熱田17-1ほか	海岸段丘(17~38)	中期・縄縄文・糠文	土器片 剥片
B-16-24	トコタン4遺跡	熱田105-1ほか	海岸段丘(25~45)	縄文	三浦(1988)三浦・柴田(1991)後期の配石遺構、住居跡
B-16-25	浜松2遺跡	浜松123-1ほか	ブユウヒ川右岸河岸段丘(20~30)	早期~晩期	土器片
B-16-26	浜松6遺跡	浜松214-220	海岸段丘(10~20)	縄文	平成12年度町教委調査 住居跡3 土壊3 ほか
B-16-27	浜松3遺跡	浜松224ほか	海岸段丘(25~32)	中期~晩期 縄縄文(恵山)	
B-16-28	熱田1遺跡	熱田223-1ほか	トコタン右岸の砂丘(5~10)	縄縄文(恵山)	
B-16-29	鉄山遺跡	浜松517ほか	海岸段丘(30)	後期	
B-16-30	新牧場遺跡	東野757ほか	海岸段丘(60)	後期	昭和49年町文化財調査員が所在確認調査 三浦(1984)
B-16-31	ナンマツカ遺跡	上八雲252ほか	遊楽部川の河岸段丘(105)	旧石器	採集資料(ブレードコア、ブレード)あり。三浦(1984)
B-16-32	トコタン3遺跡	熱田62ほか	海岸段丘(35)	中期	
B-16-33	栄浜1遺跡	栄浜72ほか	茂無川左岸の海岸段丘(32~36)	前期~晩期 縄縄文(恵山・後北)	三浦(1982・1983・1988)三浦・柴田(1986・1987)柴田(1991b・1996)前期末~中期末にいたる大集落(住居跡203軒ほか)、配石遺構。平成12年度調査ではトリスキ式期の土壊。平成13年度調査継続
B-16-34	春日1遺跡	春日24-1	遊楽部川左岸河岸段丘(14)	後期・晩期	
B-16-35	上八雲4遺跡	上八雲502-4・6	遊楽部川河岸段丘(100)	旧石器	
B-16-36	上八雲5遺跡	上八雲432・502	遊楽部川河岸段丘(60)	旧石器	
B-16-37	上八雲6遺跡	上八雲290ほか	独立丘(80)	旧石器	採集資料(石核・ブレード)あり。三浦(1984)

登録番号	遺跡名	所在地	立地()内標高m	時期	文献・内容・備考
B-16-39	山崎3遺跡	山崎154-1ほか	山崎川左岸の河岸段丘 (15~32)	前期・中期	円筒下層・円筒上層式
B-16-40	黒岩1遺跡	黒岩276-1ほか	海岸段丘 (38)	中期	円筒上層式
B-16-41	黒岩2遺跡	黒岩257-1ほか	海岸段丘 (40)	中期	
B-16-42	八雲3遺跡	三杉町26	砂麓部川の扇状地 (14)	早期・前期	三浦 (1990)
B-16-43	浜松4遺跡	浜松254-1ほか	海岸段丘 (20~40)	晩期・縄文	
B-16-44	山越2遺跡	山越349ほか	海岸段丘 (20~30)	前期~後期・縄文(後北)	平成11・12年度調査 住居跡10 土葬30ほか 北埋調報163
B-16-45	山越3遺跡	山越402-1ほか	海岸段丘 (32~34)	前期~晩期	中期前半主体住居跡3 土葬17 燧土3ほか 北埋調報168
B-16-46	山越4遺跡	山越324-1ほか	海岸段丘 (30~39)	前期・中期・縄文(後北)	中期前半主体 住居跡4 土葬11ほか 北埋調報168
B-16-47	野田生1遺跡	野田生317-6ほか	海岸段丘 (33~40)	中期・後期	後期(焼調式)主体 住居跡41 土葬137ほか 赤彩土器・石椁・朱塗り甕 平成13年度調査継続
B-16-48	野田生2遺跡	野田生355-1ほか	海岸段丘 (34~39)	早期~後期・縄文(後北)	平成12年・平成13年度調査 住居跡7 土葬33ほか本報告書
B-16-49	野田生3遺跡	野田生394-1ほか	海岸段丘 (25~37)	中期	
B-16-50	野田生4遺跡	野田生378ほか	海岸段丘 (26~38)	前期~晩期	住居跡2 土葬13 燧土1 北埋調報171
B-16-51	野田生5遺跡	野田生303ほか	海岸段丘 (30~35)	縄文(恵山・後北)	土葬5、Tピット1 燧土8 北埋調報164
B-16-52	桜野2遺跡	桜野41-1ほか	野田追川河岸段丘 (70~75)	中期・晩期	タンネットウツ
B-16-53	桜野3遺跡	桜野22ほか	野田追川河岸段丘 (70~75)	中期・晩期	タンネットウツ
B-16-54	浜中2遺跡	香部459ほか	海岸段丘 (15~18)	縄文(恵山)	
B-16-55	柴浜2遺跡	柴浜214ほか	海岸段丘 (31)	早期~中期 縄文	平成12年度八雲町教委調査 土葬1 平成13年度調査継続
B-16-56	山越5遺跡	山越475-476	海岸段丘 (14)	前期~晩期	三浦・柴田 (1988)
B-16-57	山越6遺跡	山越214・474・475	海岸段丘 (14)	前期・中期 縄文	三浦・柴田 (1988) 恵山式、後北式
B-16-58	浜松5遺跡	浜松114-1ほか	海岸段丘 (10~30)	早・後・晩期 縄文	三浦・柴田 (1995) 後期の住居と配石遺構(墓)
B-16-59	旭丘1遺跡	旭丘3~8ほか	海岸段丘 (42~55)	前期・中期	平成12年度八雲町教委調査 住居跡3 土葬7 (三浦・柴田1998b)
B-16-60	山崎4遺跡	山崎158-1ほか	海岸段丘 (25~45)	早期~後期	中期主体住居跡18土葬88 北埋調報162
B-16-61	ポンツウカ1遺跡	黒岩692-1ほか	海岸段丘 (30)	早期~中期	住居跡2 土葬4 燧土ほか 北埋調報155
B-16-62	山崎5遺跡	山崎195-1ほか	海岸段丘 (32~45)	早期~後期・縄文	住居跡等17、土葬墓11ほか 居住区と墓域 北埋調報167
B-16-63	黒岩3遺跡	黒岩244	海岸段丘 (45)	早期・中期・後期	住居跡3 燧土2ほか 北埋調報155
B-16-64	シラリカ2遺跡	黒岩289・290・586	海岸段丘 (38~40)	早期~中期・縄文	前期後半のヒスイ製垂飾り(糸魚川産) 北埋調報142
B-16-65	山越10遺跡	山越399~401	海岸段丘 (40~50)		
B-16-66	浜松7遺跡	浜松273-1ほか	海岸段丘 (30~45)	縄文(恵山)	
B-16-67	浜松8遺跡	浜松280ほか	海岸段丘 (50~60)		
B-16-68	浜松9遺跡	浜松302ほか	海岸段丘 (30~50)		
B-16-69	山越7遺跡	山越471ほか	海岸段丘 (30~40)		
B-16-70	山越8遺跡	山越438ほか	海岸段丘 (30~40)		
B-16-71	山越9遺跡	山越325ほか	海岸段丘 (20~45)		
B-16-72	野田生6遺跡	野田生434ほか	海岸段丘 (20~30)	中期	
B-16-73	東野遺跡	東野252ほか	海岸段丘 (10~40)	後期・晩期・縄文	
B-16-74	柴浜3遺跡	柴浜240・入沢411ほか	海岸段丘 (10~40)	中期・近世	平成19年度八雲町教委調査 近世の烟跡
B-16-75	柴浜4遺跡	柴浜269ほか河川	海岸段丘 (25~50)		
B-16-76	黒岩4遺跡	黒岩593	海岸段丘 (35~50)	前期(?)	北海道式石冠、すり石、たたき石、ナイフ
B-16-77	落部1遺跡	入沢374ほか	落部川左岸海岸段丘 (23~39)	中期~縄文(後北)	平成13年度調査 住居跡2 Tピット7 土葬7ほか
B-16-78	春日2遺跡	春日187ほか	砂麓部川左岸 (23)	早期~後期	

II 遺跡の位置と環境

野田生地区の弥之助沢と野田追川間の標高25m～40mの段丘上には、西から野田生1、野田生2、野田生4、野田生3、野田生5、野田生6の各遺跡がある。平成12年度・13年度に野田生3・野田生6遺跡を除く4遺跡について当センターが調査を行っている。野田生1遺跡は弥之助沢川に面した上下2段の段丘面から中期～続縄文期の遺構・遺物が多数検出されている。2か年の調査で住居跡41、土壙137と160基あまりの柱穴状ピットや焼土と土器11万点を含む18万点に上る遺物が検出されている。住居跡は大半が後期中葉の鯨潤式期のもので、中期のものもある。前者の住居跡にはその構造が良くわかるものが多く、風除け用とみられる立ち石のある「地床炉」、「出入口構造」を伴うものがある。土壙には配石や石組みをとまなう墓壙と見られるものもある。ほぼ完全な形を保つ赤彩土器、異形台付き土器、意図的に打ち欠かれた土器等に加え石棒、住居跡からはアスファルト、白色粘土等と特徴的の遺物が出土している。これらの資料は現在整理中で平成14年度報告書刊行予定である。

野田生4遺跡は中期中葉が主体で、ほかに晩期、後期の遺物があり、住居跡2、土壙13、焼土1等が検出されている（北埋調報171）。野田生5遺跡は柏木川の河岸段丘上にあり、平成12年度の調査の結果、土壙5、溝状のTピット1、焼土等が検出されている。土器は続縄文期の後北B、C₂・D式と恵山式のもので大半を占め、中期、後期の大津式、手稲式、晩期の土器が少量あるほか、弥生系土器、擦文のミニチュア土器も出土している。石器は続縄文期に属するものが多く、中でもピエス・エスキューが主体的石器としてある（北埋調報164）。

桜野地区には中期の桜野1・桜野2・桜野3遺跡がある。いずれも標高60m～85mの野田追川の河岸段丘上にほぼ連続してある。分布調査では上流側の桜野2・桜野3遺跡から晩期タンネトウL式土器も出土している。また、『道南遺跡分布事典』（函館中部高校1974）では、中期の「桜野包含地」として石斧の存在が記載されている。「桜野小学校前方台地」として地図で印された地点を包蔵地の図と対照したがこの3遺跡のいずれからも外れ、さらに標高の高い位置にある。別な遺跡の可能性もある。

東野地区の標高40mの段丘上には中期の小金沢遺跡がある。田川賢蔵氏所蔵と注釈のある北大式の存在が示されたことがあるが（千代1965）、実測図の掲載が無くその実態は不明である。

台の上遺跡、新牧場遺跡、東野遺跡は野田追川下流域の右岸標高60mほどの段丘面とそれに続く北向きの斜面にほぼ連続してある遺跡である。台の上遺跡はこのうち標高20～29mの斜面にある。昭和61（1987）年八雲町教委によって調査され、土壙2基が検出されている。1基は円形で扁平礫が複数入れられている。土器の出土量は多くはないが中期から続縄文時代までの各時期のものがある。中期は円筒上層式、ノグップⅡ式、レンガ台式、後期のものには天祐寺式、トリサキ式、大津式、白坂3式、鯨潤式等がある。晩期の土器は大洞C₂、A式が出土している。また後北C₂式に混在し弥生系の天王山式土器が出土している点が注目される（三浦1987）。この他、八雲高等学校郷土史研究部の報告「八雲町の恵山式土器」（昭和46年1月）には恵山式土器の口縁2点が掲載されている。

新牧場遺跡は標高32m～50m、台の上遺跡の南側にある。昭和49（1974）年に八雲町文化財調査員によって所在確認調査がなされ沈線による文様に特色のある後期前葉のトリサキ式土器が出土している（三浦1984）。また、東野遺跡は3遺跡の中で最も広い包蔵地を有する。これまでの所在確認調査では後期、晩期に加え、擦文時代の遺物が検出されている。

旭丘1遺跡は落部川左岸近くの標高20～70mの段丘上にあり、包蔵地の範囲は東西350m、南北400mほどの広がりを持つ。平成9年度および平成13年度町教委により調査され、平成9年度の調査では住居跡1と土壙2と前期、中期の遺物が検出されている（三浦・柴田1998b）。平成13年度に調査は隣接地区で、平成9年度の続きを含めた住居跡4、土壙10、焼土3と遺物が検出されている。遺構の時期はサイベ沢Ⅶ式・見晴町式期頃と見られる（北海道教育庁文化課2001）。（遠藤香澄）

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

野田生2遺跡では2ヵ年にわたる調査の結果、住居跡7軒、土壙墓5基、土壙29基、焼土13ヵ所、集石1ヵ所、フレイク・チップ集中域1ヵ所、柱穴状小土壙24基が検出された。このうち土壙1基(P-10)、焼土3ヵ所(F-1、5、7)、フレイク・チップ集中域(FC-1)は検出面、また周囲で出土する遺物から、統縄文時代の後北C₁式の時期とみられるものである。これらの統縄文時代の遺構は調査区中央よりやや南西、標高35.8~36.6mの段丘平坦面に分布している。この他の遺構はほぼ縄文時代中期前半、サイベ沢Ⅶ式~見晴町式の時期のものが多数を占めるとみられる。これらの縄文時代の遺構は調査区北東側、沢に向かう緩斜面に比較的集中して検出されたが、中でも土壙墓は調査区東端の沢に向かって張り出す部分に密集している。

以下縄文時代と統縄文時代の遺構を分けて記載を行うこととする。なお縄文時代の土壙については以下の4つに区分し、順に記載した。

- ① 土壙墓（基準については「北日本における縄文時代の墓制」『1999 南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム資料集』の参考基準によった）
- ② フラスコピット（壙口に比較して壙底部分が袋状に広がる土壙のうち、平面形の長軸が1mを超える規模をもつもの）
- ③ A類土壙（壙底の形状が直径80cm程度の円形を呈し、覆土中もしくは壙底から埋納されたとみられる遺物が出土したもの）
- ④ その他の土壙（上記に該当しないもの）

(立田)

1 縄文時代の遺構

(1) 住居跡

H-1 (図Ⅲ-1~7、表1~5、図版3~5・33・34)

位置 Q-21-c・d、Q-22、Q-23-b、R-21-d、R-22-a・d

規模 520×470/456×408/54

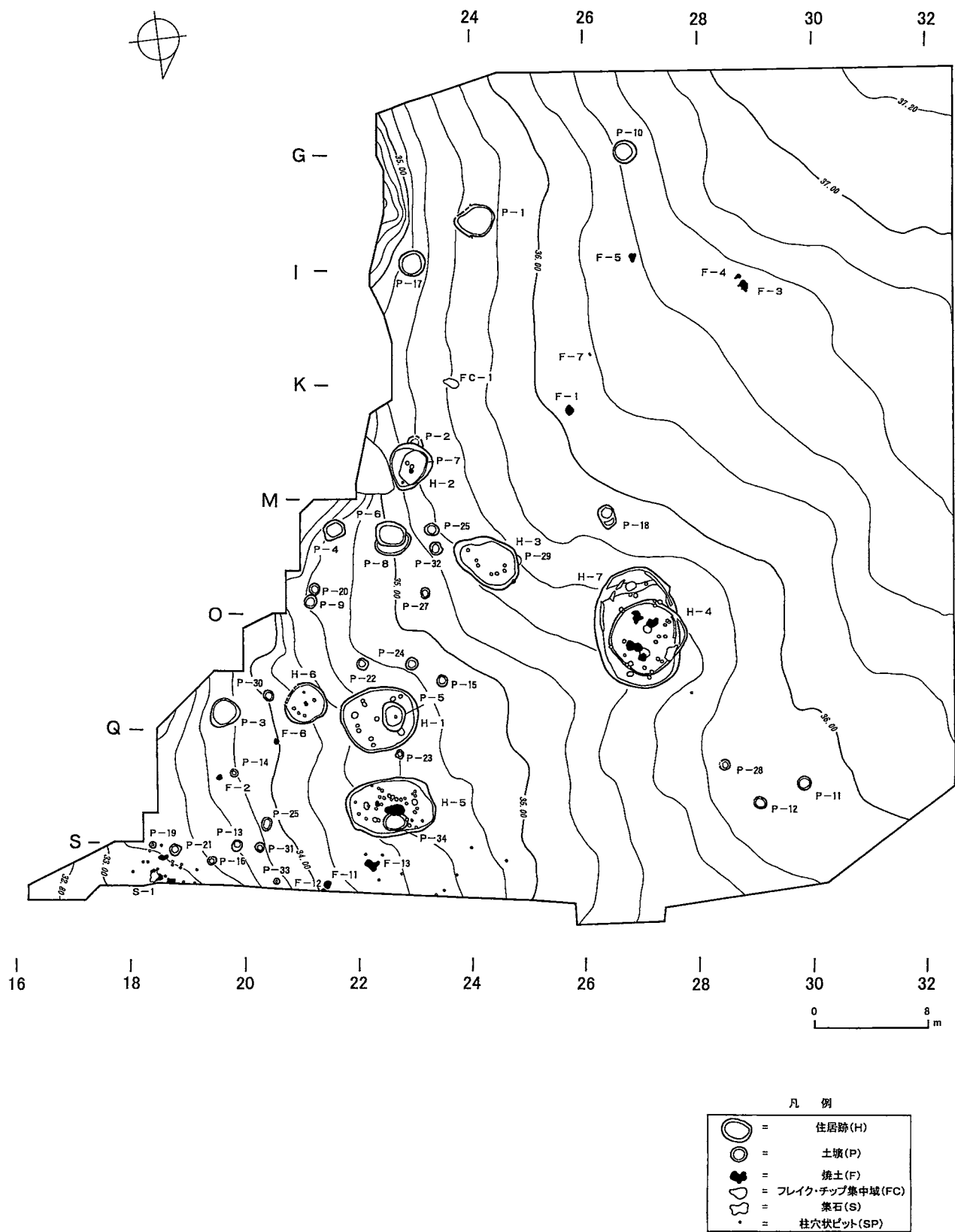
長軸方向 N-118°-W

平面形 楕円形

確認・調査 平成12年度に北東側約4分の1を調査していたものである。13年度の調査で、既に確認されていた東壁に対応する火山灰の落ち込みがⅢ層上面を精査中に検出された。落ち込みの長短軸に直交するトレンチを設定しⅤ層まで掘り下げた結果、壁床を確認して住居跡であることを確認した。平面形は北東側の一部をトレンチで欠くが楕円形を呈する。床はほぼ平坦である。壁は全周し、立ち上がりは明瞭、角度は急である。覆土は8層に分層した。1、3、4層は自然堆積である。その他の2、5、6~8層は成因は不明であるが黒褐色または黒色土を基調に黄褐色土、暗褐色土を混じる人為的に動かされた土の状況を呈する。

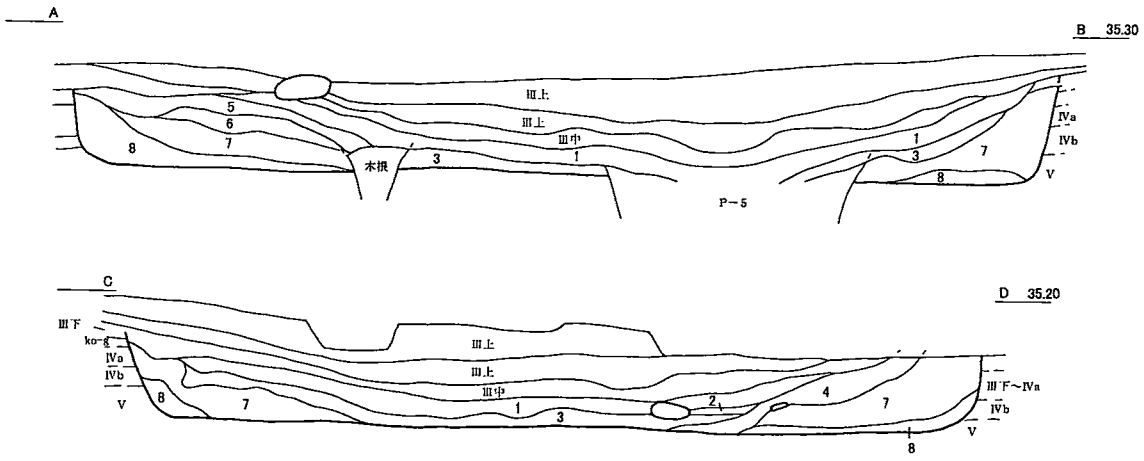
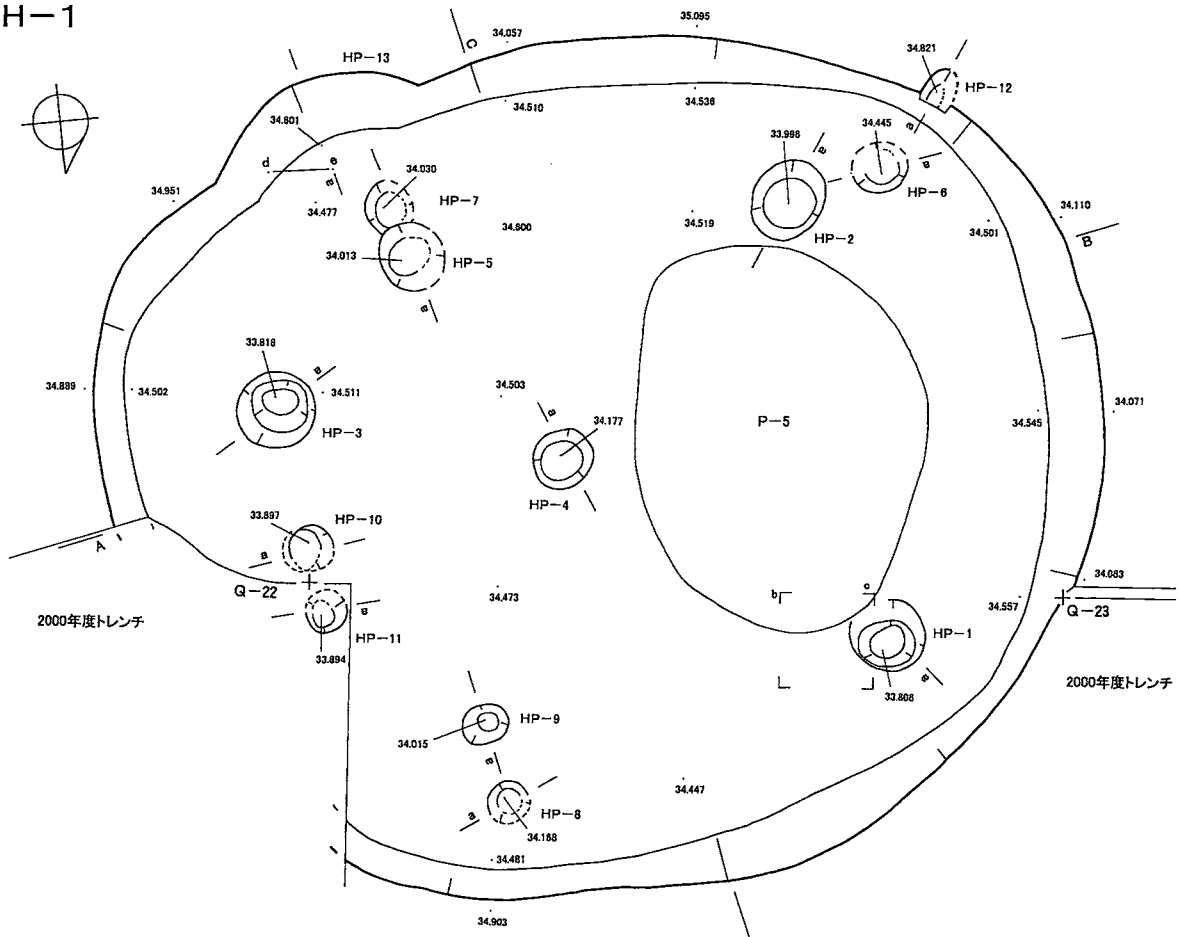
柱穴 11基検出された。すべて床面を精査中に確認した。検出面からの深さが40cmを超えるものは6基(HP-1~3、5、7、9、10)あり、そのうちHP-1、2、3、9は概ね住居の四隅に対応して左右対称に配置されているため、支柱穴とみられる。その他の柱穴は上部構造との関連は不明だが、中央に位置するHP-4は記録を取れなかったが覆土中に焼土粒が混じっており、炉であったのかもしれない。

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物



図Ⅲ-1 遺構位置図

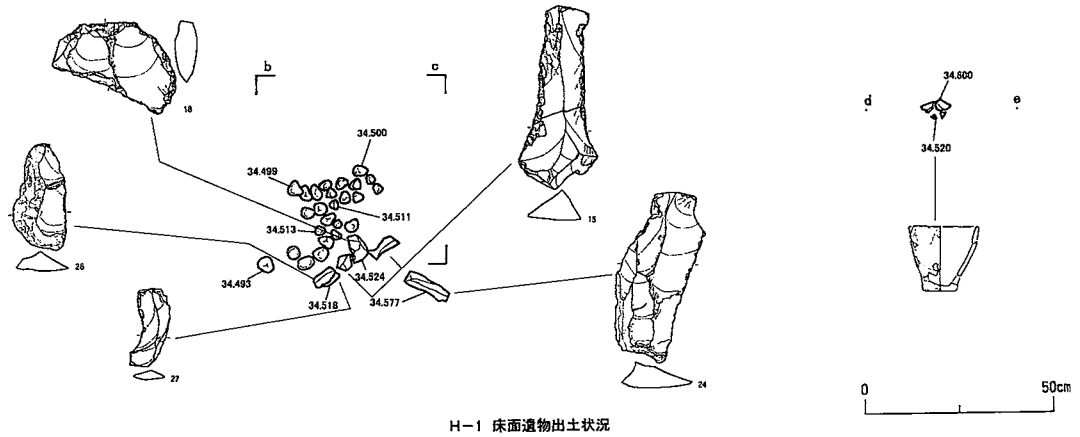
H-1



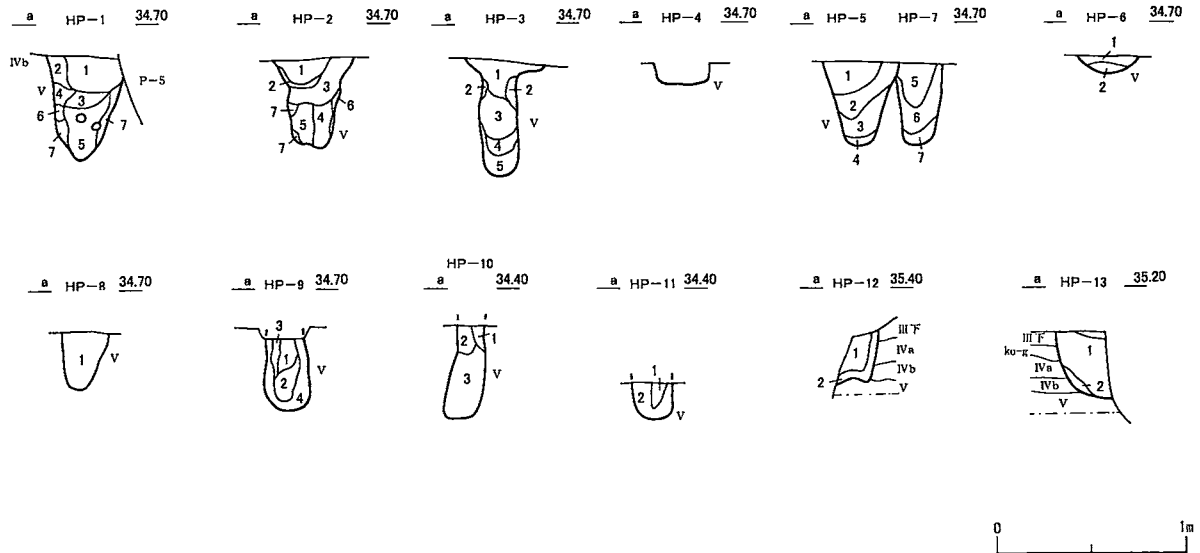
- | | | | | |
|-----|--------|-----------|--------|------------------------------|
| H-1 | 1 黒色土 | (10YR2/1) | やや粘性あり | しまりなし |
| | 2 黒色土 | (10YR2/1) | やや粘性あり | しまりなし 黄褐色土が斑状に混じる |
| | 3 黒褐色土 | (10YR3/1) | やや粘性あり | しまりなし 黄褐色土が若干混じる |
| | 4 黒褐色土 | (10YR2/2) | やや粘性あり | ややしまりあり |
| | 5 黒褐色土 | (10YR2/2) | やや粘性あり | ややしまりあり 黄褐色土粒子が若干混じる |
| | 6 黒褐色土 | (10YR2/3) | 粘性なし | ややしまりあり 黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土で構成される |
| | 7 黒褐色土 | (10YR2/2) | やや粘性あり | しまりあり 6より暗褐色土多い |
| | 8 黒褐色土 | (10YR2/2) | やや粘性あり | ややしまりあり |

図Ⅲ-2 H-1(1)

III 遺構と遺構出土の遺物



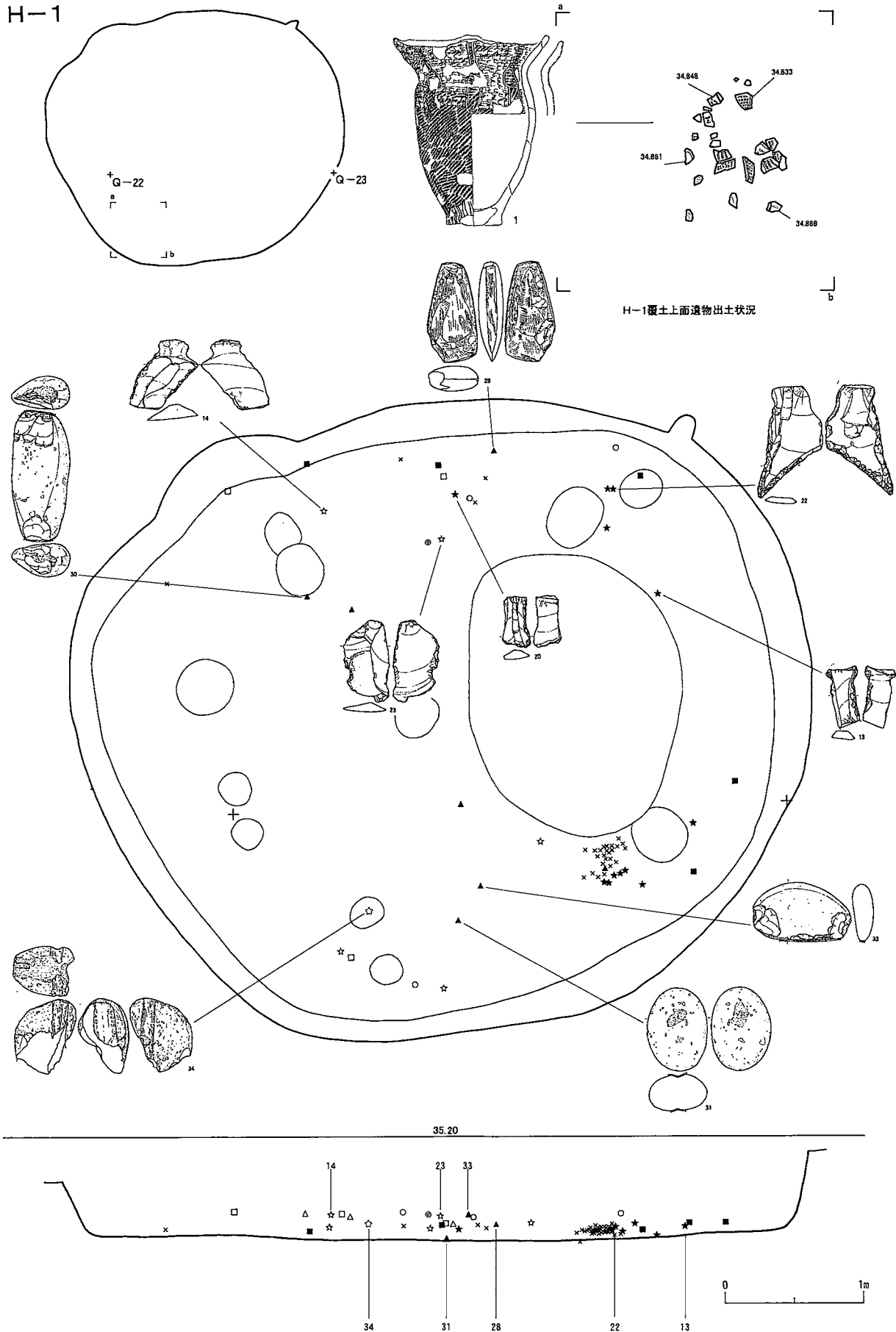
H-1 床面遺物出土状況



HP-1	1	黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる
	2	黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロック、炭化物が少量混じる
	3	黒色土	(10YR2/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる
	4	褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし	ややしまりあり	黄褐色土が少量混じる
	5	灰黄褐色土	(10YR4/2)	粘性なし	しまりなし	黒色土、黄褐色土がブロック状に混じる
	6	明黄褐色土	(10YR6/6)	粘性なし	しまりなし	崩落土?
	7	にぶい黄褐色土	(10YR5/3)	粘性なし	しまりなし	層界不明瞭
HP-2	1	黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子が多く混じる
	2	黒色土	(10YR2/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子が若干混じる
	3	黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子が多く混じる
	4	にぶい黄褐色土	(10YR5/3)	粘性なし	しまりあり	黄褐色土ブロックが多く混じる
	5	にぶい黄褐色土	(10YR5/4)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロックが若干混じる
	6	黄褐色土	(10YR5/6)	粘性なし	ややしまりあり	灰褐色土が若干混じる
	7	にぶい黄褐色土	(10YR5/3)	粘性なし	しまりなし	
HP-3	1	褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロックが若干混じる
	2	明黄褐色土	(10YR6/8)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロックが若干混じる
	3	黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子が多く混じる
	4	にぶい黄褐色土	(10YR5/4)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロックが多く混じる
	5	灰黄褐色土	(10YR4/2)	やや粘性あり	しまりなし	ボンボンの土
HP-4	1	黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土が多く混じる
	2	暗褐色土	(10YR3/3)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土が少量混じる
	3	暗褐色土	(10YR3/3)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土が多く混じる
	4	褐色土	(10YR4/6)	粘性あり	ややしまりあり	
	5	黄褐色土	(10YR7/8)	粘性なし	しまりあり	砂質土
	6	黄褐色土	(10YR7/8)	粘性なし	しまりあり	5よりやや黄色い
	7	暗褐色土	(10YR3/3)	やや粘性あり	しまりなし	黄褐色土が若干混じる
HP-6	1	明黄褐色土	(10YR6/8)	粘性あり	しまりあり	黒褐色土・白色粘土ブロックが斑状に混じる
	2	明黄褐色土	(10YR6/8)	粘性あり	しまりあり	
HP-8	1	明黄褐色土	(10YR6/6)	粘性あり	しまりあり	灰褐色土・暗褐色土ブロックが斑状に混じる
	2	褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロックが多く混じる
HP-9	1	黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる
	2	黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる
	3	灰黄褐色土	(10YR5/2)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロックが多く混じる
	4	明黄褐色土	(10YR6/6)	やや粘性あり	しまりあり	
HP-10	1	明黄褐色土	(10YR6/8)	粘性あり	ややしまりあり	暗褐色土ブロックが多く混じる
	2	褐灰色土	(10YR5/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子が多く混じる
	3	褐灰色土	(10YR5/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロック、黒色土が多量に混じる
HP-11	1	にぶい黄褐色土	(10YR6/3)	粘性あり	ややしまりあり	黒褐色土が斑状に混じる
	2	褐灰色土	(10YR4/1)	やや粘性あり	しまりなし	黄褐色土、黒褐色土が斑状に混じる
HP-12	1	黒褐色土	(10YR2/1)	粘性なし	しまりなし	
	2	褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし	しまりなし	層界不明瞭
HP-13	1	褐灰色土	(10YR4/1)	やや粘性あり	しまりなし	黄褐色土が斑状に混じる
	2	灰黄褐色土	(10YR4/2)	やや粘性あり	しまりなし	黄褐色土が多く混じる

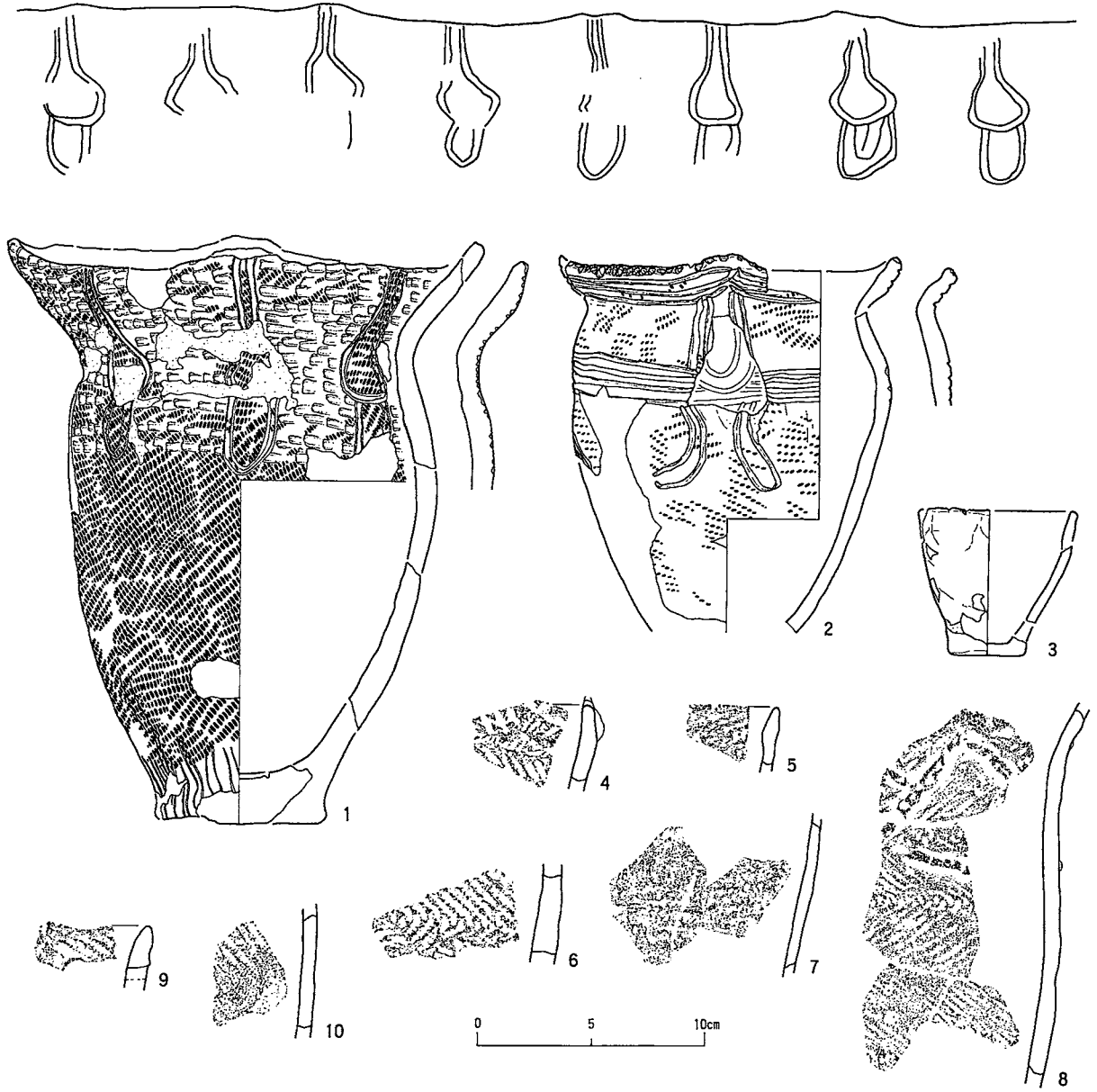
図 III-3 H-1(2)

H-1



H-1覆土上面遺物出土状況

図Ⅲ-4 H-1 遺物出土状況



図Ⅲ-5 H-1出土の遺物

付属施設 壁際に2基の土壙を確認した。HP-12と13である。12は浅く、住居の掘込面から壁の中位付近までの深さしかない。垂木尻を支えた痕跡かもしれない。HP-13はやや住居の外側に突出した形をとることから、出入り口の痕跡である可能性もあるが、H-1の床面との境界にミニチュア土器が出土しているため、特殊な施設であるかもしれない。西側床面の大半を占めるP-5は断面観察の結果から覆土3層～7層の堆積時に掘り込まれたものとみられる。

遺物の出土状況 覆土上面においてⅢ群b-2類土器がまとまって出土している(図Ⅲ-4)。HP-13からミニチュア土器が出土し、またHP-1の近くの床面から礫25点、スクレイパー、Uフレイクなどの剥片石器5点がまとまって出土した。(図Ⅲ-3)これらの礫の一部とみられる礫がHP-1覆土中からも2点出土している。(立田)

遺物 1は覆土上面の遺物集中と包含層から出土し、2、4～8は覆土、3はHP-13と床面との境界、9・10はHP-1の覆土から出土した。

1・2は低い山形の突起が4箇所にある深鉢形土器で、頸部にくびれをもち、口縁部の外反する器形である。1は斜行縄文が施された後、半截竹管状の工具を用いて文様を加えられている。突起の下と突起の間にはU字状の沈線を重ねた文様が8単位描かれ、それらの間や口唇は横位の押し引きで充填されている。胴部下位には縦位の沈線が施されている。口縁部内面は横方向になでられている。胎土は径数ミリ以下の礫や砂粒を多量に含む。2は横走気味の縄文を地として、沈線で文様の描かれたものである。口縁部には3条の沈線がめぐる。突起の下には曲線による文様が縦位に重ねられ、それらの間は4条の沈線で結ばれている。口唇には竹管状の工具による刺突がある。内面はみがかれ、内外面とも一部に炭化物が付着している。胎土に海綿骨針を含む。これらは大安在B式に相当する。

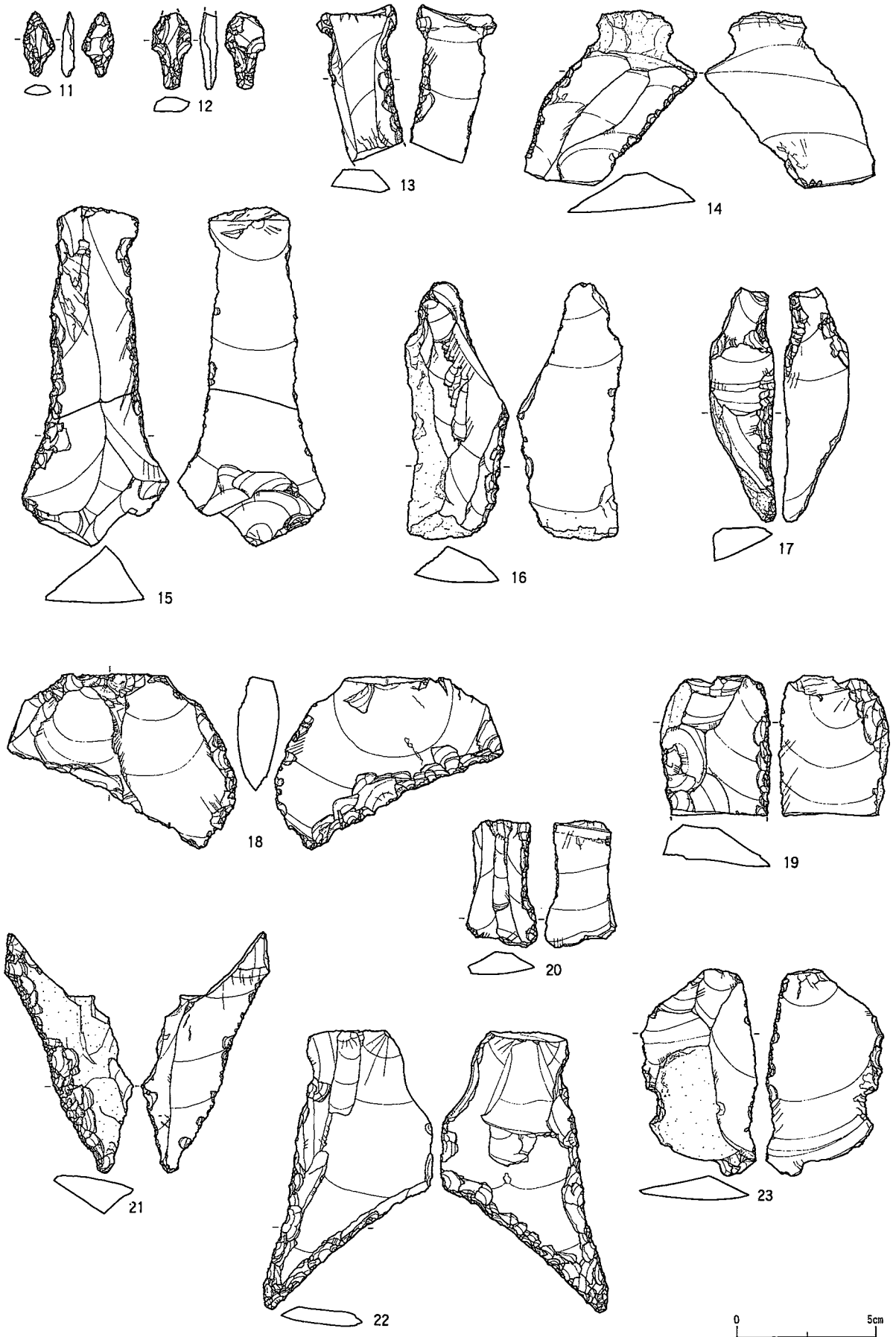
3は小型で無文の土器である。内面と底面はみがかれている。外面は風化し、器面はややざらついている。4は突起部の下に貼付帯のあるもので、その上には縄文が施されている。口唇には縄の圧痕がある。5は無節の縄文が施されたもので、7と同一個体の可能性がある。8は結束第1種羽状縄文が施された後に細い粘土紐が貼り付けられたもので、貼付帯上には棒状の工具により押し引きが加えられている。9は台形状の突起部の破片で、穿孔されている。これらはサイベ沢Ⅷ式古段階(立田2002)に相当すると考えられる。(中田)

11、12は有茎石鏃(ⅠA5)。素材剥片の周縁にのみ細部調整されるものである。13、14はつまみ付きナイフ、13は素材剥片の周縁にのみ細部調整されるもの(ⅢA1c)、14はほとんど加工されないもの(ⅢA4)である。なお13と20は接合することがわかった。13は破断した後も細部調整されている。15～22はスクレイパーである。15～19は刃部が直線を呈するもの(ⅢB2b)、21は刃部が外反するもの(ⅢB2b)、22が先端のあるもの(ⅢB6)である。23～27はUフレイク。23～26は一部に原石面の残る剥片を利用するもの(VB2b)である。23は微細剥離に沿って脂肪光沢が認められる。27は不定形剥片を素材とするもの(VB2c)である。剥片石器の石材は22が玄武岩である他は頁岩製である。28は石斧(ⅣA)。片岩製である。29～32はたたき石である。29、30は礫の両端に敲打痕があるもの(Ⅶ1)、形状から半円状扁平打製石器の未製品の可能性もある。31、32は礫の平坦面に敲打痕があるもののうち、敲打痕が明瞭でくぼんでいるもの(Ⅶ4)。31は表裏、32は表面のみに敲打痕があり、両者とも礫の長軸上中心よりやや上によった位置にある。33は半円状扁平打製石器。扁平礫をそのまま素材とするもの(Ⅷ3d)である。34は軽石製の石製品である。欠損していると思われるが、側面を平坦に加工した円礫の中央を縦断する溝がつけられている。

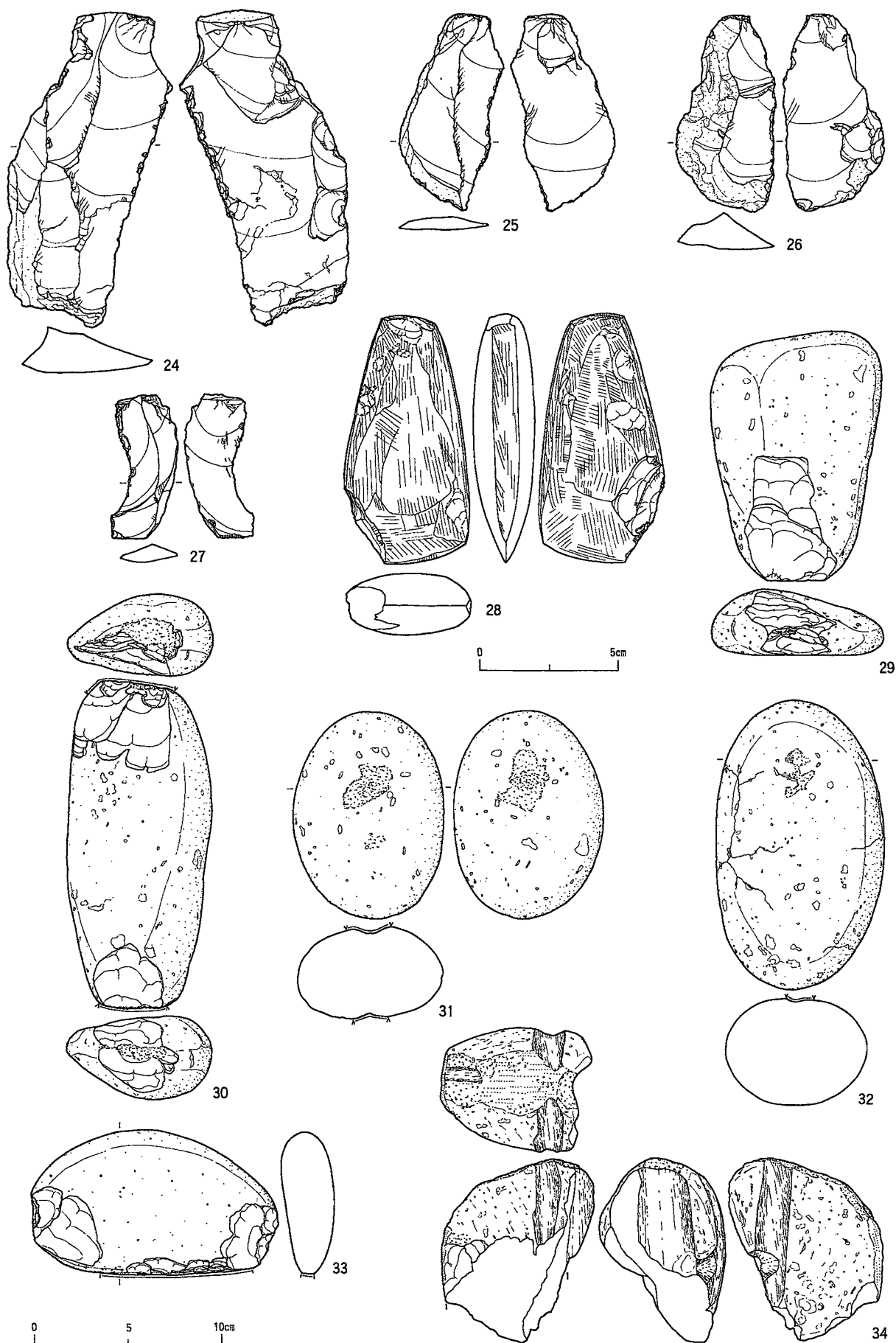
時期 床面から出土した土器から、縄文時代中期前半サイベ沢Ⅷ式のものと思われる。

(立田)

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

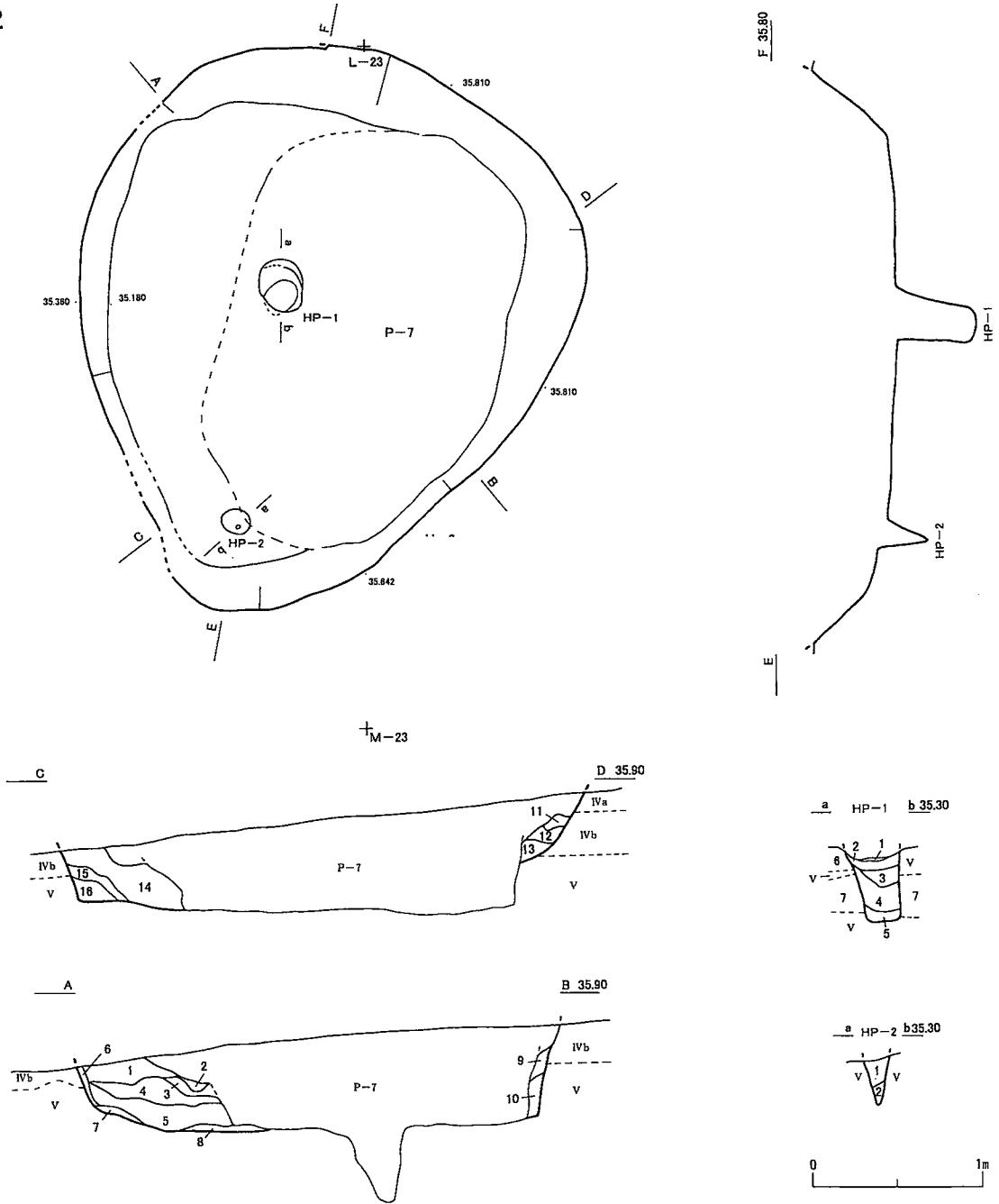


図Ⅲ-6 H-1 出土の石器(1)



図Ⅲ-7 H-1出土の石器(2)

H-2



- | | | |
|------|----------|-------------------------------|
| H-2 | 1 暗黄褐色土 | 黄褐色土粒子が混じる |
| | 2 暗褐色土 | 黄褐色土粒子が混じる |
| | 3 暗褐色土 | |
| | 4 黒褐色土 | 黄褐色土粒子が混じる |
| | 5 暗褐色土 | 黄褐色土粒子が混じる 炭化物がわずかに混じる(よごれた土) |
| | 6 灰褐色土 | 暗黄褐色土が混じる |
| | 7 暗黄褐色土 | |
| | 8 黒褐色土 | 黄褐色土ブロックが混じる |
| | 9 暗褐色土 | |
| | 10 暗黄褐色土 | 暗褐色土粒子が混じる |
| | 11 暗褐色土 | 黄褐色土粒子がわずかに混じる |
| | 12 暗褐色土 | |
| | 13 暗褐色土 | 黄褐色土粒子、炭化物がわずかに混じる |
| | 14 暗茶褐色土 | 黄褐色土、炭化物が混じる |
| | 15 暗褐色土 | |
| | 16 暗黄褐色土 | 黄灰色土がわずかに混じる |
| HP-1 | 1 黒色土 | 黄灰色土が混じる |
| | 2 暗黄褐色土 | 黒色土・黄褐色土粒子が混じる |
| | 3 黒褐色土 | 黄褐色土粒子が混じる |
| | 4 暗黄褐色土 | ポロポロしている |
| | 5 黒褐色土 | 黄褐色土ブロックが多量に混じる |
| | 6 黄褐色粒砂 | |
| | 7 灰黄褐色砂 | |
| HP-2 | 1 灰褐色土 | やや粘性あり 黄褐色土が混じる 炭化物がごくわずかに混じる |
| | 2 灰褐色土 | ボンボンしている 黄褐色土ブロックが混じる |

図III-8 H-2

H-2 (図Ⅲ-8、表1・2、図版5)

位置 L-22-c・d、L-23-a・b

規模 340×274/286×240/58

長軸方向 N-167° -W

平面形 不整楕円形

確認・調査 P-7の調査中、土層観察用のあぜで壁の立ち上がりが2箇所認められることから確認した。壁面はやや急角度で立ち上がり、床面はほぼ平坦である。覆土には黄褐色土が混じり、埋め戻された可能性がある。この後、西側に重複してP-7が構築されたと考えられる。

柱穴 床面の中央部(HP-1)と北東(HP-2)で検出した。HP-2は先端の尖るものである。

遺物 覆土1層からフレイク1点、覆土中位から分類不明の縄文土器片が出土している。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代中期前半と考えられる。(中田)

H-3 (図Ⅲ-9~12、表1・2・4・5、図版6・7・35)

位置 M-23-c、M-24-b・c、N-23-d、N-24

規模 (478)×408/322×268/32

長軸方向 N-78° -W

平面形 不整形

確認・調査 平成12年度のトレンチ調査で確認された。トレンチは遺構をちょうど分断する形であった。このことから、平成13年度においては遺構の重複の有無を確認するため東西方向にトレンチを2本追加し、付近の包含層を掘込面付近まで掘り下げた。その結果、床面の凹凸が激しく、平面形も不整形ではあるが、覆土中に炭化物が多量に混じる層がどの方向のトレンチでも確認されたため、1軒の住居跡として調査することにした。覆土、床面から出土した炭化材について、樹種同定、炭素年代分析を行った(図Ⅲ-9、第V章1)。出土位置と樹種の関係については図Ⅲ-9のとおりである。分析した炭化材は層位によって分けた(表V-1)が、何らかの傾向は得られなかった。床面から出土した炭化材の放射性炭素年代の分析結果は¹⁴C補正年代で4350±40 y. B. P. (Beta-163030)である。

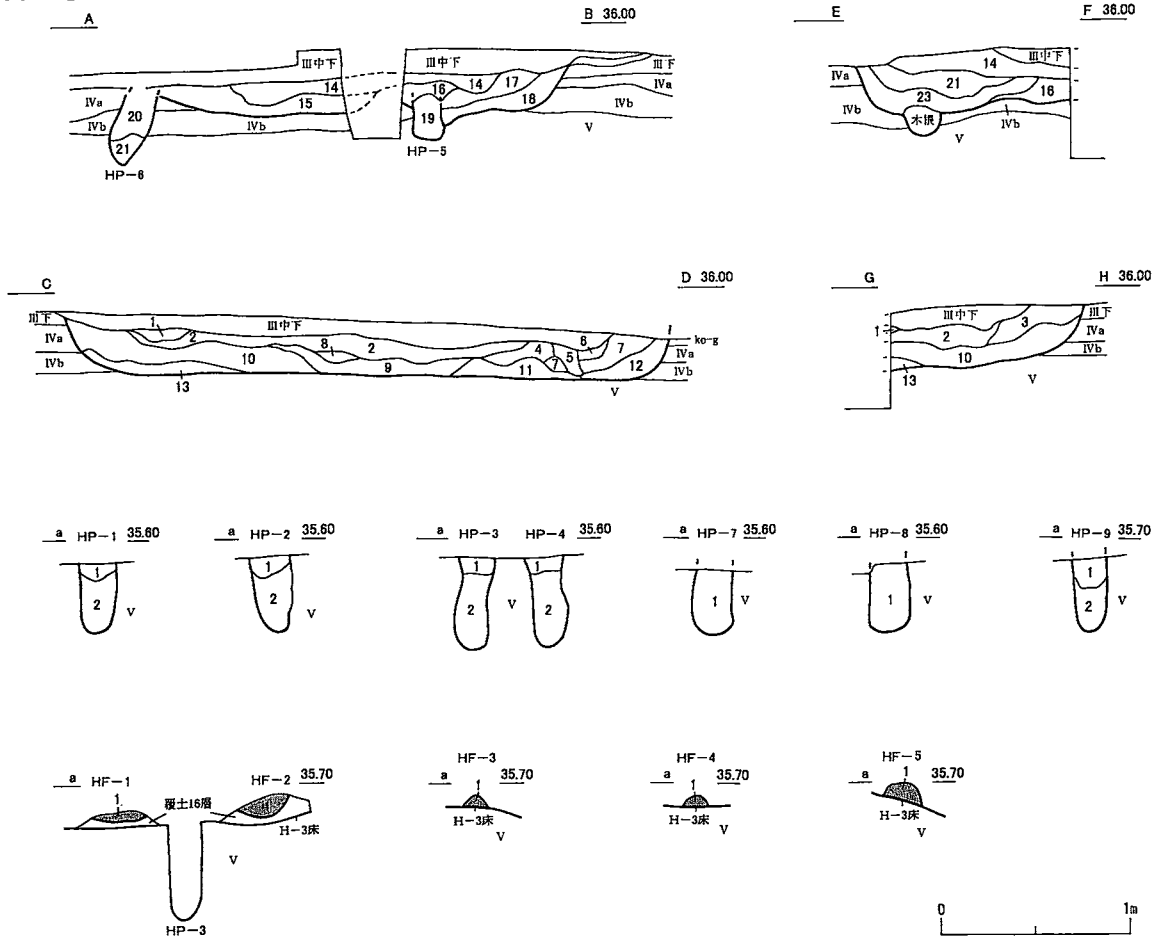
柱穴 9基検出された。HP-1~4は床面から、HP-5、6は土層断面で、HP-7~9は床面から10cm掘り下げた時点で検出した。覆土から掘り込まれるHP-5以外はいずれも深さが40cmを超える明瞭な柱穴である。これらは規則的な配列を示さないが、HP-1・2、3・4、7・8はそれぞれ20cm前後の間隔で組をなしているようである。すべての組の断面は不明瞭ではあるが「ハ」の字状に開いている。このうちHP-3、4は覆土の上面(1層)を黄褐色土で版築状に埋め立てた痕跡がある。HP-7、8が床面で検出できなかったことを考え合わせると、この2基も埋め立てられていた可能性がある。

付属施設 検出されていない。(立田)

遺物 1~4は覆土出土の土器片である。1・2は斜行縄文が施されている。3は無文地に粘土紐が貼付されたもので、粘土紐の上には捺糸圧痕がみられる。胎土は海綿骨針をわずかに含む。4は結束第1種羽状縄文の地に粘土紐が貼り付けられており、貼付帯上には縄文が施されている。これらはサイベ沢Ⅶ式古段階に相当する。(中田)

5は石鏃。有茎のもの(IA5)。先端を欠損する。6はRフレイク(VB-1)である。素材剥片の打瘤部に加工が施される。7は石斧(VIA)である。泥岩製である。8は半円状扁平打製石器。

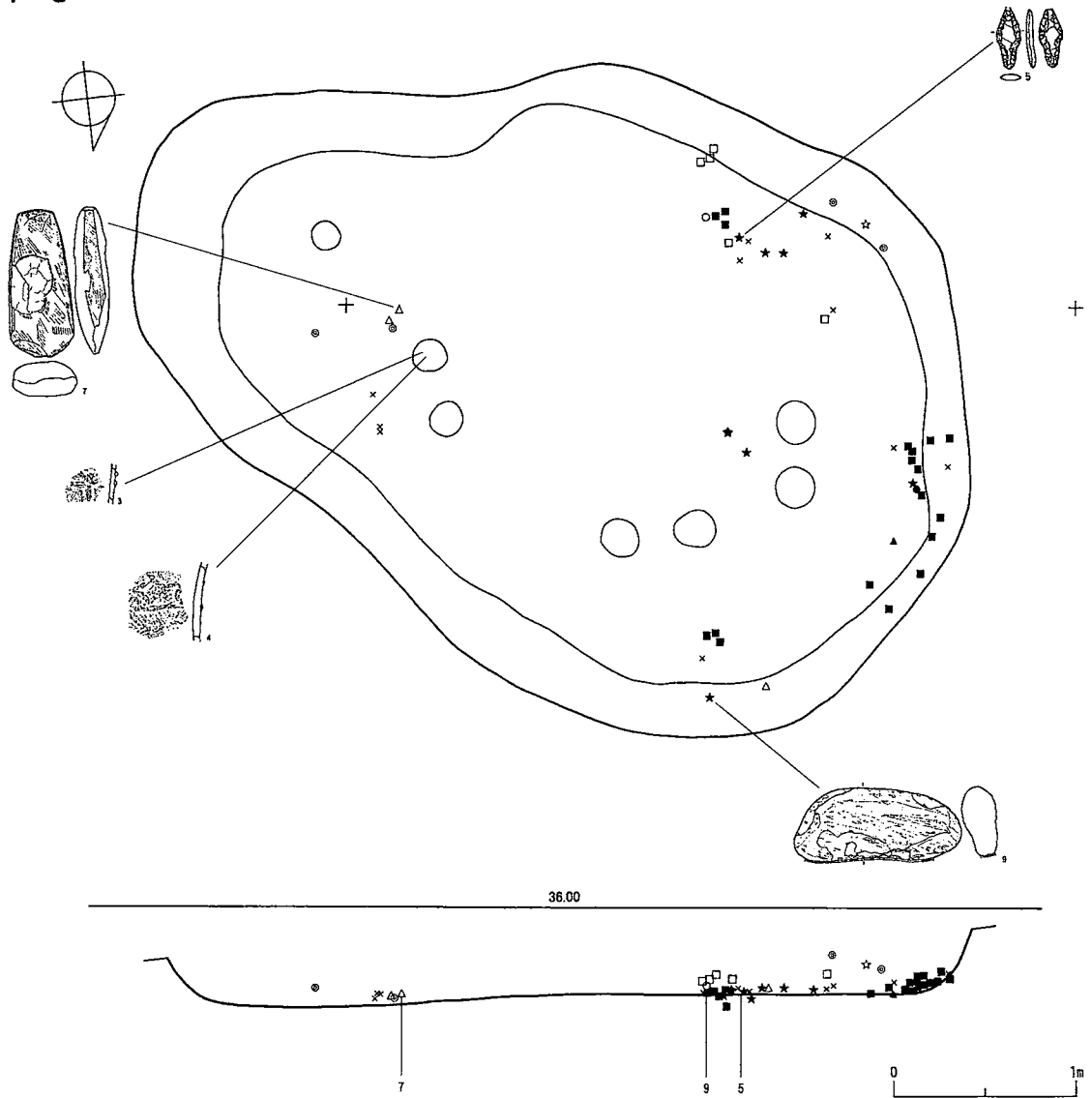
H-3



H-3	1 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	ややしまりあり	黄褐色土ブロックが斑状に混じる
	2 灰黄褐色土	(10YR4/2)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロック、炭化物が若干混じる
	3 灰黄褐色土	(10YR4/2)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子が多く混じる
	4 灰黄褐色土	(10YR4/2)	粘性なし	ややしまりあり	黄褐色土粒子が多く混じる
	5 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	ややしまりあり	黄褐色土ブロックが多く混じる
	6 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子、炭化物が多く混じる
	7 明黄褐色土	(10YR7/6)	粘性なし	ややしまりあり	黄褐色土粒子が多く混じる
	8 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子、炭化物が多く混じる
	9 黒色土	(10YR2/1)	粘性なし	ややしまりあり	黄褐色土ブロック、粘土ブロック、炭化物が多く混じる
	10 灰黄褐色土	(10YR4/2)	粘性なし	しまりなし	灰褐色土が多く黄褐色土粒子、炭化物が少量混じる
	11 黒褐色土	(10YR3/2)	粘性なし	しまりなし	灰褐色土が多く黄褐色土粒子、炭化物が少量混じる
	12 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロックが若干混じる
	13 黒褐色土	(10YR3/2)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土・灰褐色土ブロック、炭化物が多く混じる
	14 灰黄褐色土	(10YR4/2)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子、炭化物が多く混じる
	15 黒褐色土	(10YR3/2)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子、炭化物が多く混じる
	16 黒褐色土	(10YR3/2)	粘性なし	ややしまりあり	黄褐色土粒子、炭化物が若干混じる
	17 にぶい黄褐色土	(10YR4/3)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロックが若干混じる 炭化物が多く混じる
	18 灰黄褐色土	(10YR4/2)	粘性あり	しまりなし	黄褐色土・暗褐色土ブロックが多く混じる
	19 黒色土	(10YR2/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土・暗褐色土ブロックが多く混じる
	20 灰黄褐色土	(10YR4/2)	やや粘性あり	しまりなし	黄褐色土ブロックが若干混じる
	21 黒褐色土	(10YR3/2)	粘性なし	しまりなし	
	22 黒褐色土	(10YR3/2)	粘性なし	しまりなし	炭化物が多く混じる
	23 黒褐色土	(10YR3/2)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子が若干混じる
HP-1	1 黒色土	(10YR2/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子、炭化物が多く混じる
	2 灰黄褐色土	(10YR4/2)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子が多く混じる
HP-2	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる
	2 灰黄褐色土	(10YR4/2)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロックが多く混じる
HP-3	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし	しまりあり(固い)	黄褐色土が版築状に堆積する
	2 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	しまりなし	
HP-4	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし	しまりあり(固い)	黄褐色土が版築状に堆積する
	2 灰黄褐色土	(10YR4/2)	粘性なし	しまりなし	炭化物が多く混じる
HP-7	1 黒褐色土	(10YR3/2)	粘性なし	ややしまりあり	黄褐色砂が多く混じる
HP-8	1 黄褐色土	(10YR5/3)	粘性なし	ややしまりあり	黄褐色砂が多く混じる
HP-9	1 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土ブロックが少量混じる
	2 灰黄褐色土	(10YR4/2)	粘性なし	しまりなし	黄褐色土粒子が多く混じる
HF-1	1 橙黄色土	(5YR7/8)	粘性なし	しまりなし	灰褐色土ブロック、炭化物が若干混じる
HF-2	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし	しまりなし	橙黄色土粒子、黄褐色土粒子が多く混じる
HF-3	1 橙黄色土	(5YR7/8)	粘性なし	しまりなし	黒褐色土中に橙黄色土粒子が若干混じる
HF-4	1 橙黄色土	(5YR7/8)	粘性なし	しまりなし	黒褐色土中に橙黄色土粒子が若干混じる
HF-5	1 橙黄色土	(5YR7/8)	粘性なし	しまりなし	黒褐色土中に橙黄色土粒子が若干混じる

図Ⅲ-10 H-3(2)

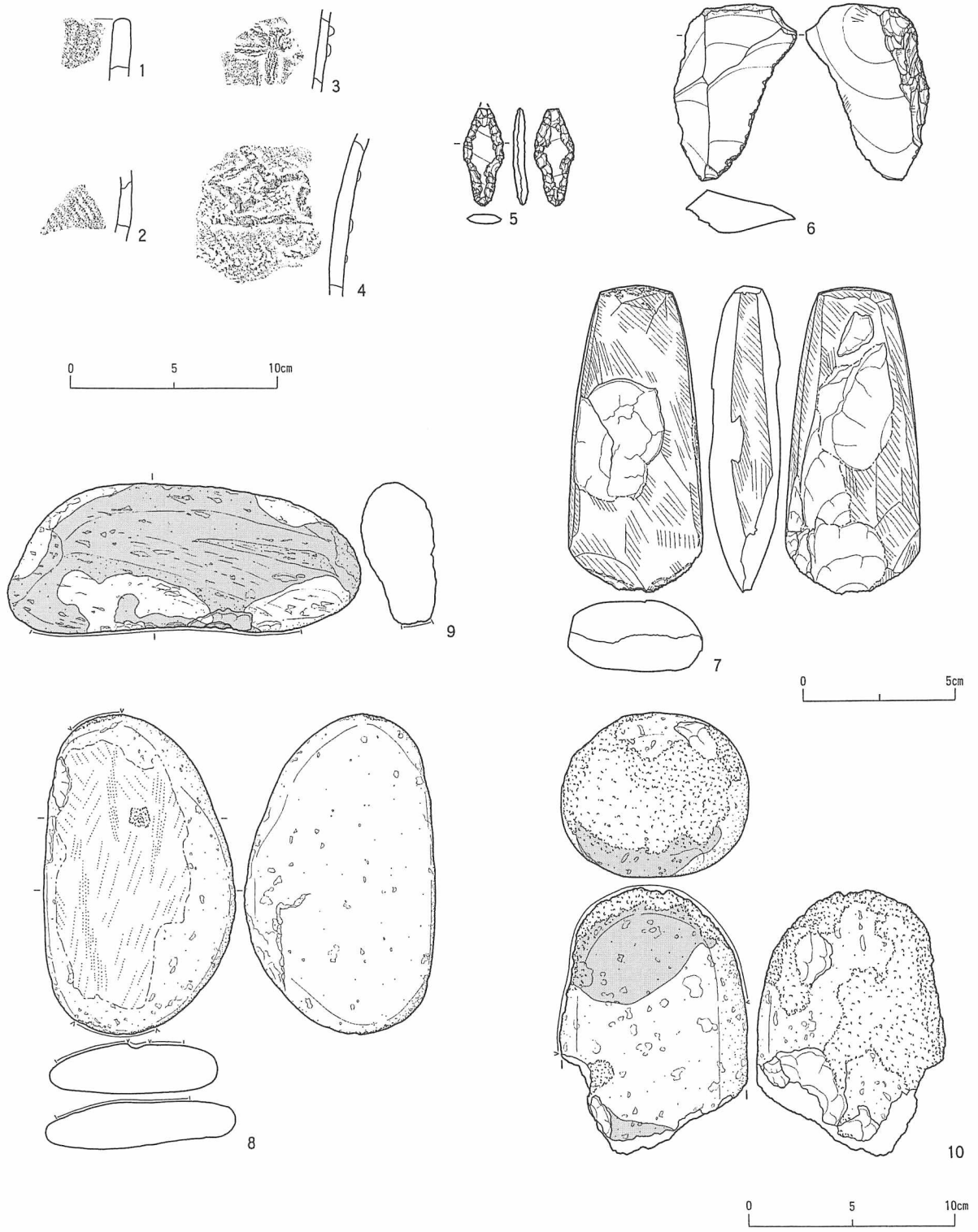
H-3



図Ⅲ-11 H-3 遺物出土状況

溶結凝灰岩の扁平礫をそのまま素材とするもの（Ⅷ3 d）である。機能部、裏面以外は被熱し黒変している。9は砥石（ⅨB 2）、扁平礫の表面に機能部があり、円滑である。10は石棒とみられるもの。敲打によって整形され、被熱している。

時期 覆土から出土した土器から縄文時代中期前半のものと思われる。（立田）



図Ⅲ-12 H-3 出土の遺物

H-4 (図Ⅲ-13~18、表1~5、図版8~10・35・36)

位置 N-26-c、N-27-b・c、O-26、O-27、P-26-d、P-27-a

規模 (522) × (468) / (484) × (458) / 28

長軸方向 N-146° -W

平面形 隅丸方形

確認・調査 IV層上面を精査中、深度耕作に攪乱される黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みが不整形であったため、長軸とそれに直交するトレンチを設定してV層まで掘り下げたところ、黒褐色土中に焼土を確認した。焼土はトレンチ内に2カ所確認でき、レベルがほぼ一定であったことから、この面を床とする1つの住居を想定した。もう一つの住居が入れ子状に重複する可能性があったため、落ち込みを超えた範囲にトレンチを延長し、床面を掘り下げて確認することにした。その結果、落ち込みは2軒の住居であり、古い住居のくぼみを利用して焼土が作られていることがわかった。これらの住居のうち、くぼみを利用した新しい住居をH-4、古いほうの住居をH-7と呼称し、H-4から調査を進めることにした。

本遺構の平面形は不整な隅丸方形を呈し、壁の立ち上がりは不明瞭であるが、確認できた部分では緩やかに立ち上がる。床面は概ね平坦である。覆土は自然堆積とみられる黒色土である。

柱穴 柱穴とみられる土壌は検出されていない。

付属施設 床面から焼土が5カ所検出されている。いずれもよく焼けており、住居跡の中心半径1mをめぐるように形成されている。またHP-1~3とした土壌は断面観察の結果、いずれも埋め戻されており、焼土と一部が重複する1、2は埋め戻された後焼土が形成されていることがわかった。これらの土壌はいずれも不整形を呈し、比較的深く掘られている。HP-1からは被熱した大きな安山岩が出土している。

遺物の出土状況 住居南東端の床面からIV群a類土器がややまとまって出土している(図Ⅲ-14)。HF-2の北西に接して台石が出土している。この台石に床面から出土し被熱した安山岩片が接合している(図Ⅲ-15、18)。安山岩の破片はHF-1から2の間、1.5mほどの範囲に散乱している。

(立田)

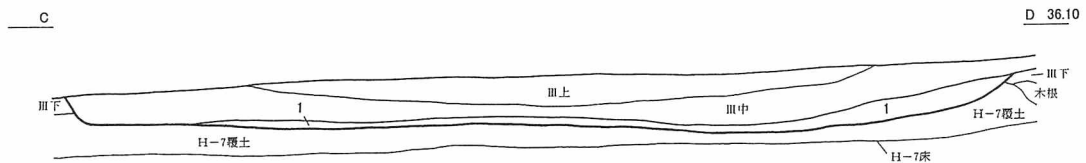
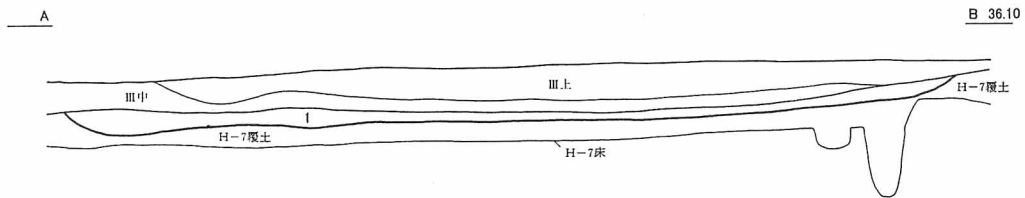
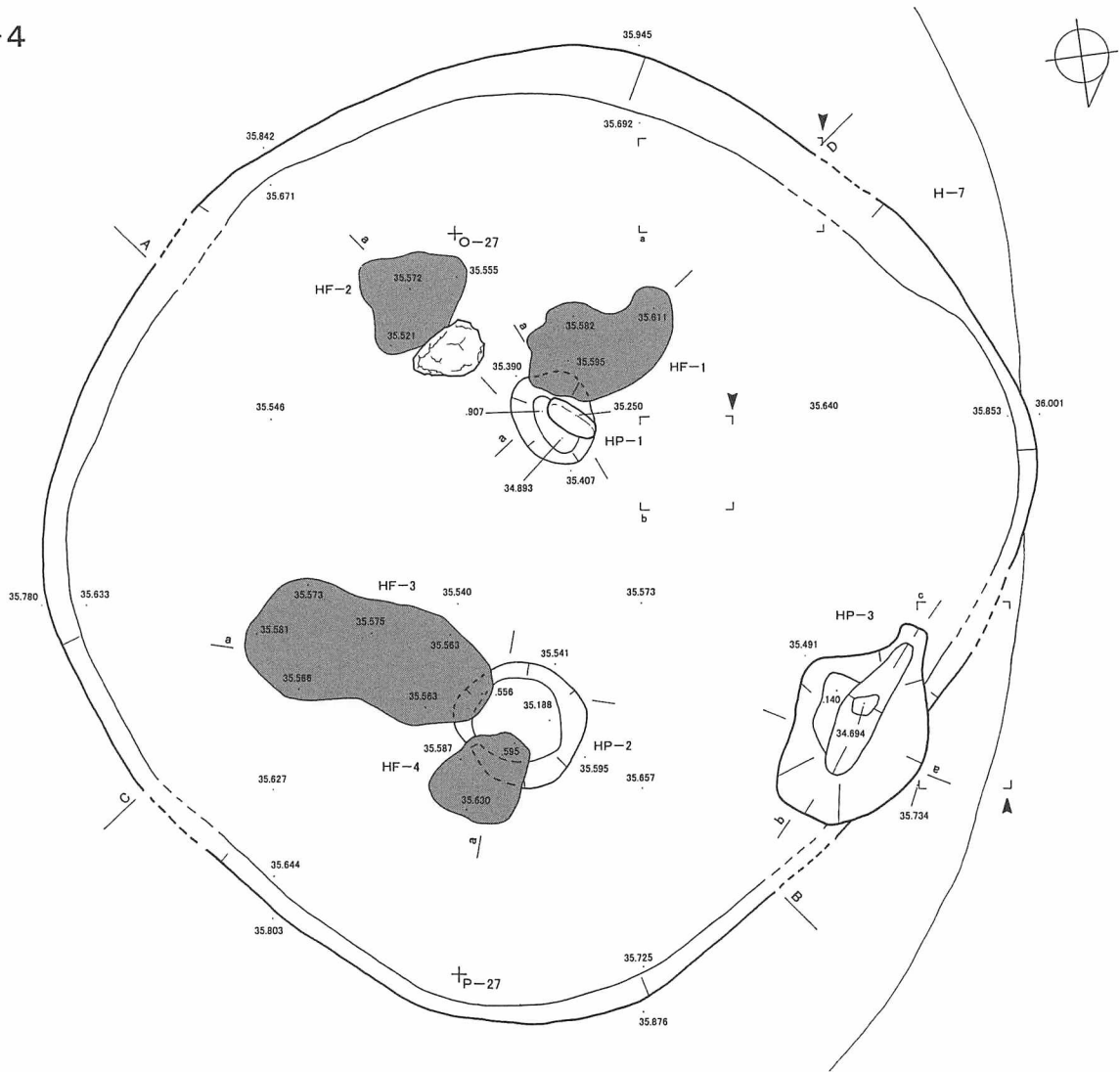
遺物 1はHP-3の壙口、2、5~7は床面、3・4は覆土から出土した。

1は2種類の棒状突起がそれぞれ向かい合う位置につくと考えられるもので、底部は上げ底である。結束第1種羽状縄文を地として細い粘土紐が凸レンズ状に貼り付けられ、交点に環状の貼り付けが加えられているが、それらの中には剥落したものも少なくない。粘土紐の上には捺糸圧痕が施されている。内面はよくみがかれ、外面には炭化物が付着している。胎土に海綿骨針を含む。3は縄端の圧痕があるもので、内面に炭化物が付着する。4の外面はみがかれている。5は口縁部の断面形が切り出し状になるもので、口唇直下に半截竹管状工具による刻み目が施されている。6はゆるやかな波状口縁になると考えられる。7はH-7床面出土の土器(図Ⅲ-39-7)と同一個体の破片である。これらはサイベ沢Ⅶ式古段階に相当する。

2の口縁はゆるやかな波状で、胴部上位にややふくらみがある。オオバコのトウを回転させて地文とした後、口縁部に横走する2条の浅い沈線をめぐらせたものである。肥厚する突起の下には横走沈線の上に円形の刺突が加えられ、直下に沈線でうずまき状の文様が描かれている。外面に炭化物が付着している。胎土に径数ミリ以下の礫や砂粒を多量に含む。大津式に相当すると考えられる。(中田)

8は石鏃。有茎のもの(IA5)である。石材は黒曜石、つくりは粗く、先端は明瞭ではない。9、10はスクレイパーである。9は縦長剥片素材で刃部が直線を呈するもの(ⅢB2b)である。刃部に

H-4

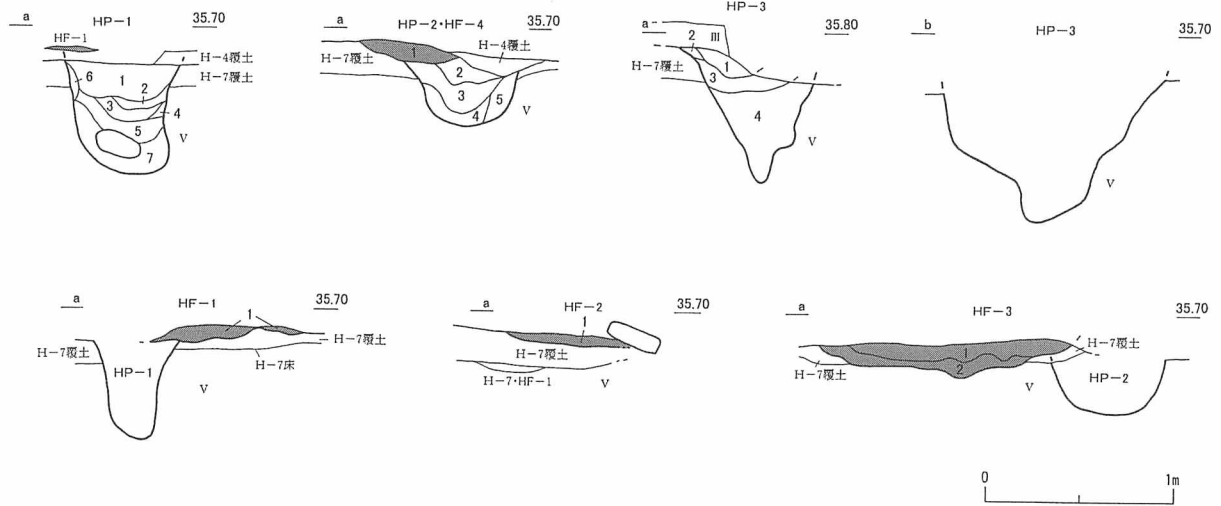


H-4 1 黒色土 (10YR2/1) やや粘性あり ややしまりあり

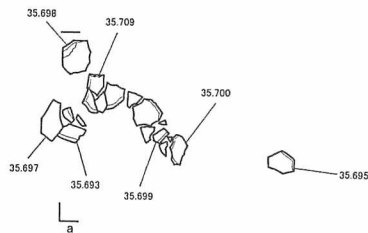
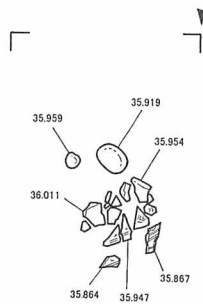


図Ⅲ-13 H-4(1)

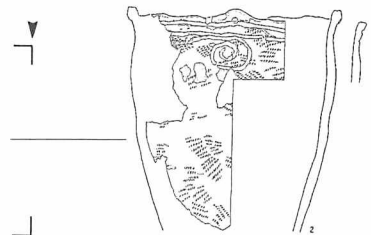
H-4



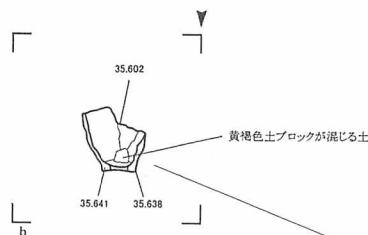
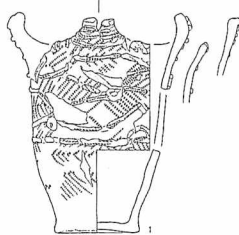
- | | | | | |
|-----------|---------------------|------|---------|------------------------|
| HP-1 | 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) | 粘性あり | しまりなし | 黄褐色土粒子、炭化物片が多く混じる |
| | 2 褐灰色土 (10YR4/1) | 粘性あり | しまりなし | 炭化物片、焼土粒子が若干混じる |
| | 3 灰黄褐色土 (10YR4/2) | 粘性なし | しまりなし | 炭化物片、焼土粒子が若干混じる |
| | 4 褐灰色土 (10YR4/1) | 粘性なし | しまりなし | 炭化物片、焼土粒子が若干混じる |
| | 5 黒褐色土 (10YR3/1) | 粘性あり | しまりなし | 炭化物片、黄褐色土粒子が若干混じる |
| | 6 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) | 粘性なし | ややしまりあり | 黄褐色土ブロックが斑状に混じる |
| | 7 黒褐色土 (10YR3/2) | 粘性あり | しまりなし | |
| HP-2+HF-4 | 1 黄橙色土 (7.5YR7/8) | 粘性なし | ややしまりあり | |
| | 2 褐灰色土 (10YR4/1) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロックが若干混じる |
| | 3 黒褐色土 (10YR3/1) | 粘性なし | しまりなし | 炭化物が多く混じる。黄褐色土粒子が若干混じる |
| | 4 黒褐色土 (10YR3/2) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる |
| | 5 にぶい黄橙色土 (10YR5/3) | 粘性なし | しまりなし | 暗褐色土ブロックが斑状に若干混じる |
| HP-3 | 1 褐灰色土 (10YR4/1) | 粘性なし | ややしまりあり | 黄褐色土が斑状に多く混じる |
| | 2 褐灰色土 (10YR4/1) | 粘性あり | ややしまりあり | |
| | 3 黒褐色土 (10YR3/1) | 粘性なし | しまりなし | |
| | 4 黒褐色土 (10YR3/2) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロックが多く混じる |
| HF-1 | 1 黄橙色土 (7.5YR7/8) | 粘性なし | ややしまりあり | 暗褐色土ブロックが若干混じる |
| HF-2 | 1 灰黄褐色土 (10YR5/2) | 粘性あり | ややしまりあり | 焼土粒子、暗褐色土ブロックが少量混じる |
| HF-3 | 1 橙色土 (7.5YR6/8) | 粘性なし | ややしまりあり | 暗褐色土ブロックが若干混じる |
| | 2 褐灰色土 (10YR4/1) | 粘性なし | ややしまりあり | 暗褐色土ブロックが若干混じる |



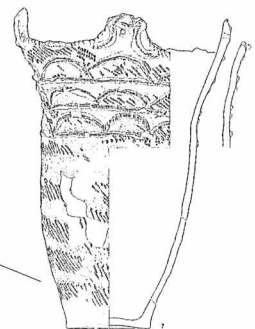
H-4土器集中1



H-4 HP-3坑口遺物出土状況

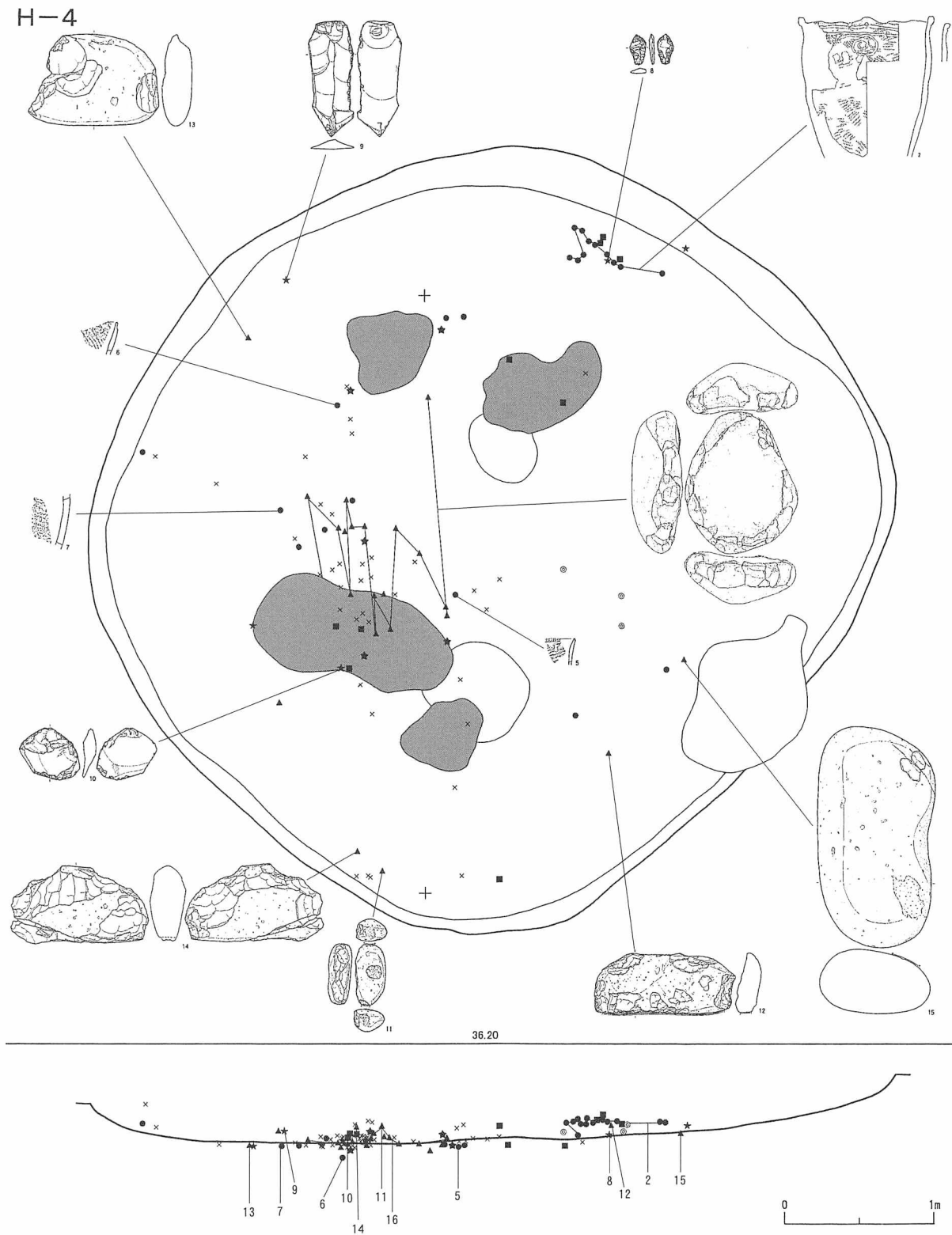


H-4土器集中2



0 50cm

図III-14 H-4(2)

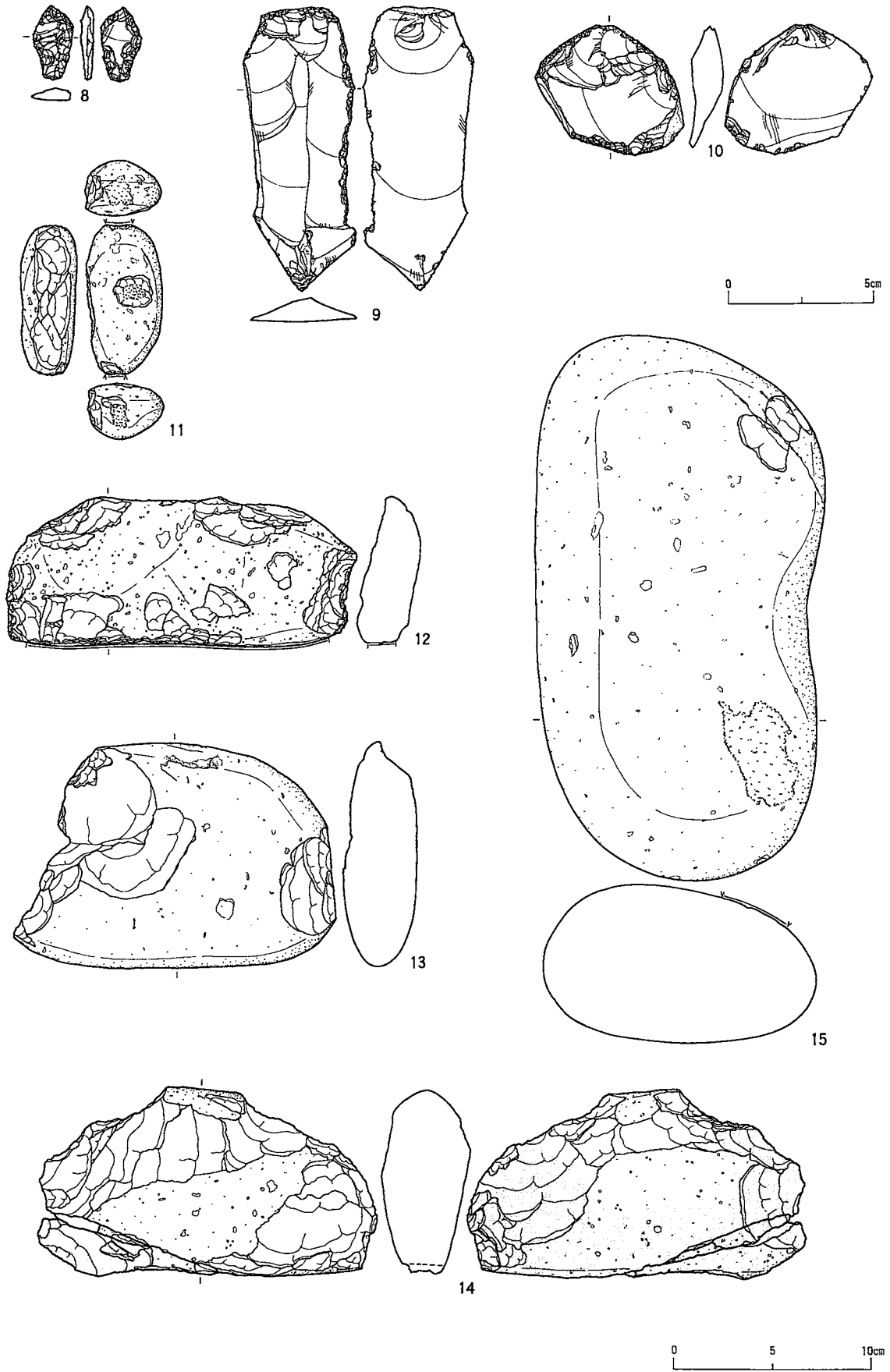


図Ⅲ-15 H-4 遺物出土状況

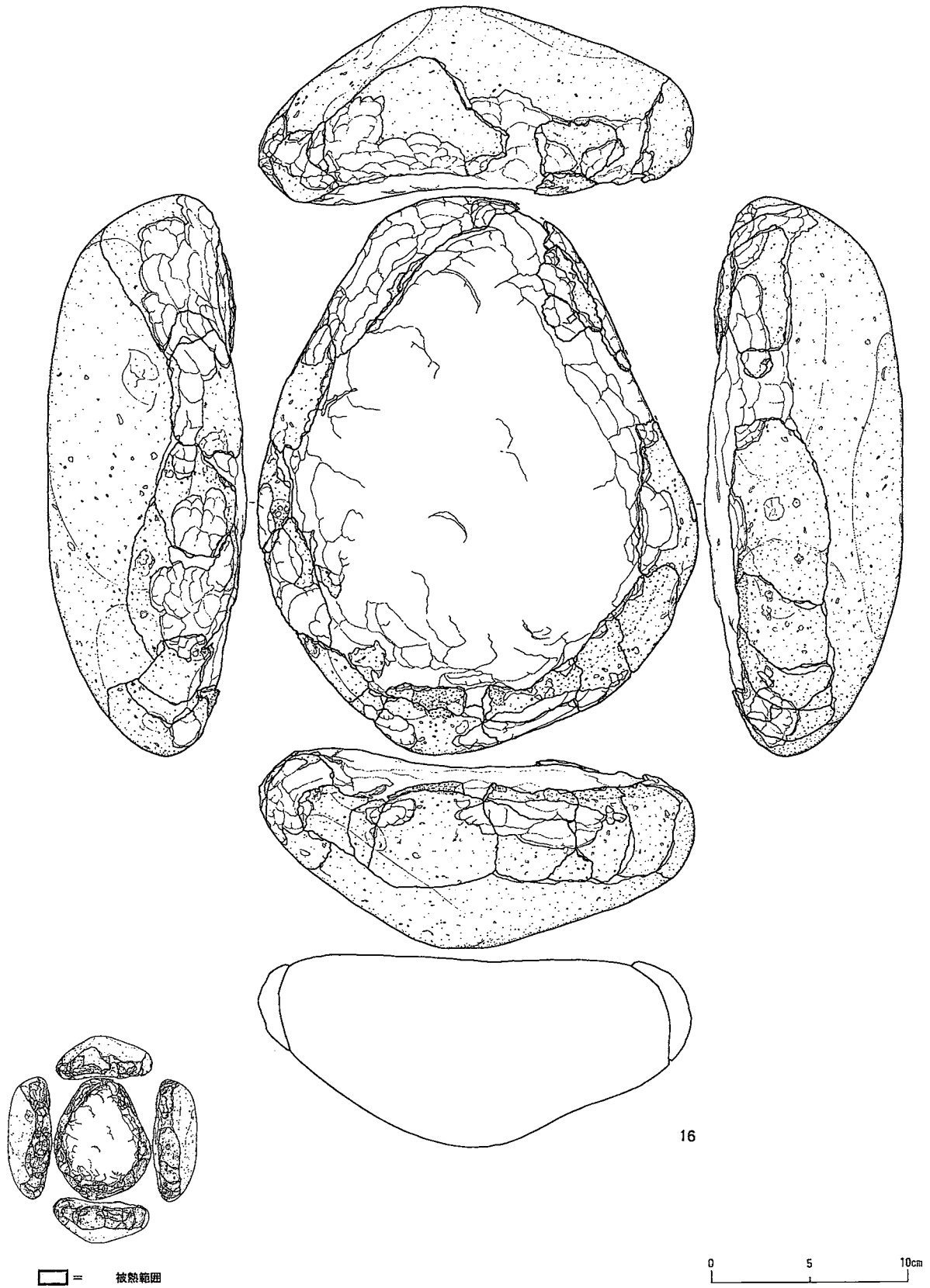


図Ⅲ-16 H-4出土の土器

沿った両面に脂肪状の光沢がみられる。10は横長剥片素材で刃部が直線を呈するもの（ⅢB3b）。黒曜石製である。11はたたき石。やや細長の楕円形の礫を用い、平坦面に敲打痕があるもの（Ⅷ3）である。礫の両端、側面にも敲打痕がある。12~14は半円状扁平打製石器である。12は扁平礫の周縁を打ち欠きにより整形するもの（Ⅷ3a）である。機能部の幅は広く明瞭である。13、14は未製品である。礫の両端、周縁の一部を打ち欠いて加工される。15は台石（X）。瓢箪状の円礫を用い、平坦面の縁の一部に明瞭な敲打痕があるものである。16は台石（X）である。床面から出土した安山岩の剥片と接合している。接合した剥片に明確な打瘤、打点が認められないこと、台石、剥片が被熱していることから、付近で検出されている焼土によって焼かれ、はじけたものである可能性が高い。



図Ⅲ-17 H-4出土の石器(1)



図III-18 H-4出土の石器(2)

時期 床面から出土した土器から縄文時代後期初頭大津式のものと思われる

(立田)

H-5 (図Ⅲ-19~29、表1~5、図版11~13、36~39)

位置 Q-22-b・c、Q-23-b、R-21-c・d、R-22、R-23-a・b

規模 580×546/404×360/40

長軸方向 N-110°-W

平面形 楕円形

確認・調査 Ⅲ層上面を精査中に駒ヶ岳火山灰d層の楕円形の落ち込みを確認した。住居跡であることを想定して、長軸と中心を通りそれに直交する方向にトレンチを設定し、落ち込みの内側をV層まで掘り下げた。その結果、平坦な床とそれに伴う焼土を確認したため、トレンチを延長し、壁を確認して住居跡とした。

住居跡の平面形は南西、北東方向にやや歪に膨らむ楕円形を呈する。壁は全周し、南側でやや急、その他では緩やかである。床面は平坦であるが、南東方向から北西方向に向かって緩やかに傾斜している。覆土は8層に区分した。覆土3層とした黒色土は自然堆積、覆土5層が自然堆積の可能性がある。その他はV層起源とみられる黄褐色土が混じる人為的堆積である。覆土1、2層は付近の遺構を構築した際の掘上土の可能性はある。なお覆土6層中から出土した炭化物を放射性炭素年代測定法により年代測定した。その結果、¹⁴C補正年代にして4410±40y. B. P. (Beta-163031)の値が得られている。

柱穴 柱穴はかなり疑わしいものまで含めて31基検出された。HP-1~13は床面から、13~31までは床面から10~20cm掘り下げた時点で検出された。このうち検出面から深さにして40cm以上あるものまたその可能性のあるものは15基ある。それらはHP-3、13、10、20を結んで成す正方形の辺にほぼ収まっている。この正方形の中心には炉とみられるHF-1が位置することから、この4本の柱穴は住居の上部構造を支えていたものとみられる。平面形と長軸が合わないが、このことは建物が建て替えられたか、また覆土中から多量に出土している見晴町式の時期に何らかの改変を受け正確な平面形を捕らえられなかった可能性もある。

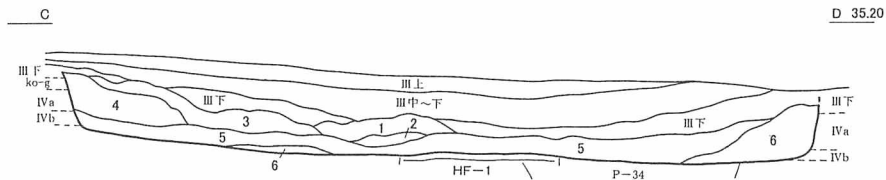
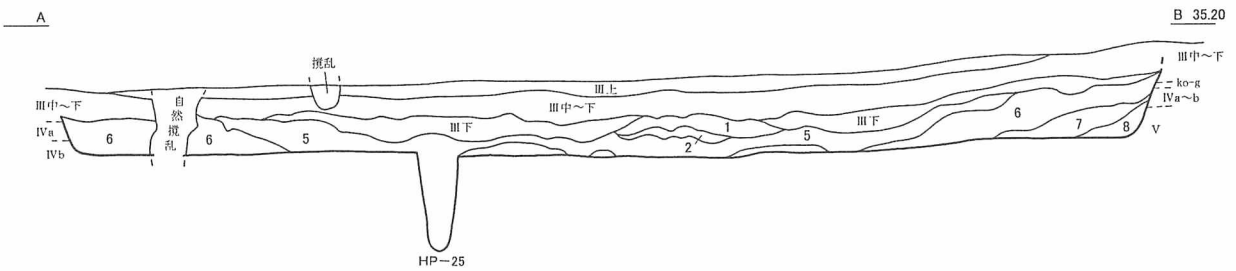
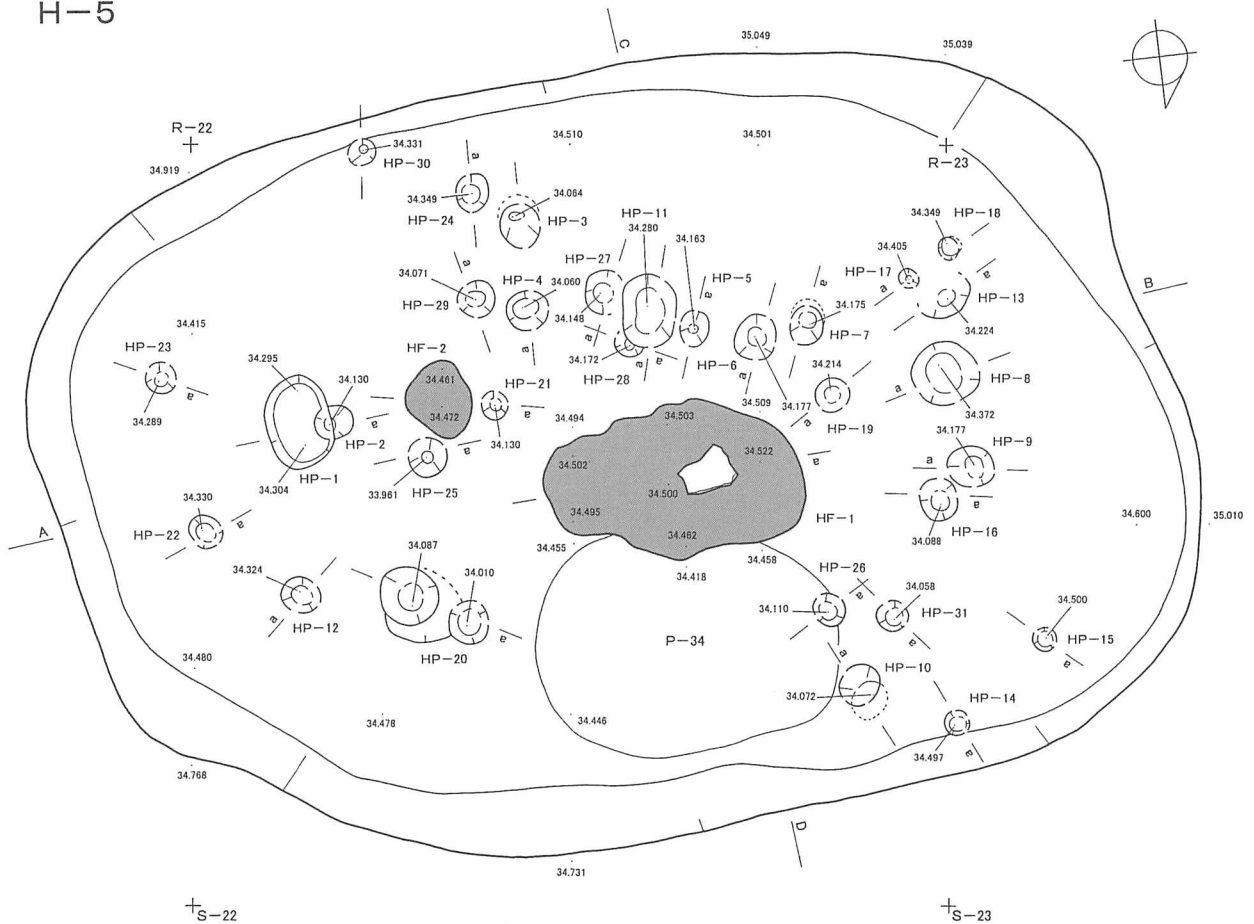
付属施設 床面から2基の焼土が検出された。HF-1は前述した4基の柱穴の中心に位置する。柱穴群の中心軸と長軸をほぼ同じくしており、住居の炉と考えられる。なお平面図中の石皿は焼土形成面である床面からはやや浮いた覆土6層中から出土したものである。HF-2は前述した柱穴群の中心軸の延長線上、HP-3とHP-20を結んだ線の中心にある。明瞭な焼土である。

遺物の出土状況 覆土5、6層から多くの遺物が出土している(図Ⅲ-21・22)。 (立田)

遺物 1・2は覆土5層下位、3~8は覆土6層、9~12は床面直上、14~18は床面、13はHP-16の覆土、19・20はHP-20の覆土から出土したものである。1・2は山形の突起をもち、胴部にふくらみのある器形で、1は複節の縄文、2は斜行縄文が施されている。これらの底部付近は無文で、軽くみがかれている。内面から口唇にかけての調整はみがきである。胎土に径数ミリ以下の円礫・砂粒を多量に含む。1は口縁部が内彎し、3箇所突起があるが、それらの間隔は不均等である。上面観は楕円形に近く、実測図の正面に向けた側がやや突き出ている。口縁部は粘土紐を貼り付けて肥厚させ、その上部に接して太い沈線がめぐっている。突起部に粘土紐を用いて施されたうずまき状の文様のうち、2箇所は剥落している。2本一組の沈線で突起の下に凸レンズ状の文様が描かれ、それらの上下にはゆるやかな波状の沈線が施されている。口縁部には一對の補修孔がある。内面の一部に炭化物が付着する。2は口縁部が直立し、突起部でやや外反するもので、4箇所に突起がある。突起部

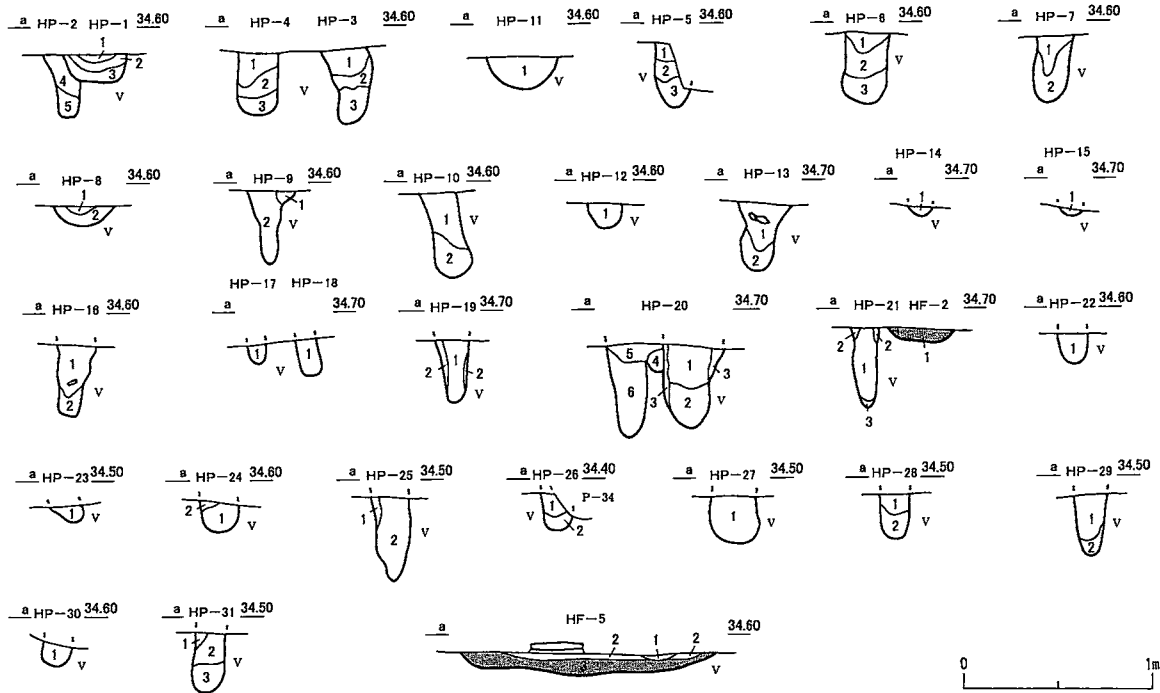
III 遺構と遺構出土の遺物

H-5



- | | | | |
|-----|---------|-----------|--------------------------------|
| H-5 | 1 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性あり ややしまりあり 黄褐色土ブロックが斑状に多く混じる |
| | 2 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性あり ややしまりあり 黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる |
| | 3 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性あり ややしまりあり 遺物が混じる |
| | 4 黒褐色土 | (10YR3/2) | 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子が多く混じる |
| | 5 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性あり ややしまりあり |
| | 6 黒褐色土 | (10YR2/3) | 粘性あり ややしまりあり 黄褐色土粒子が多く混じる |
| | 7 灰黄褐色土 | (10YR4/2) | 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子が多く混じる |
| | 8 黒褐色土 | (10YR3/2) | 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子、炭化物が若干混じる |

図III-19 H-5(1)

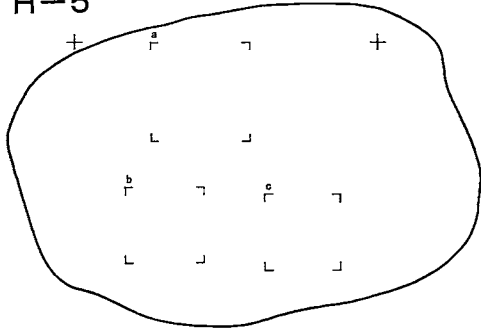


HP-1	1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性なし しまりなし		HP-16	1 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 粘性あり ややしまりあり 灰褐色土ブロック、炭化物が若干混じる	
	2 褐色土 (2.5YR6/8) 粘性あり しまりあり 黒褐色土粒子が若干混じる		2 明黄褐色土 (10YR6/8) 粘性あり しまりあり		
	3 褐色土 (2.5YR6/6) やや粘性あり しまりあり 層界漸変		HP-17	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	
HP-2	1 褐色土 (2.5YR6/8) 粘性なし ややしまりあり 層界漸変		HP-18	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	
HP-1・2	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性あり しまりあり 黄褐色土粒子、炭化物が多く混じる		HP-19	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が若干混じる	
	2 明黄褐色土 (10YR6/8) 粘性あり しまりなし 褐灰色土・黒褐色土ブロックが多く混じる		2 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 粘性なし ややしまりあり 黄褐色土粒子が多く、炭化物が少量混じる		
	3 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり しまりなし 黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる		HP-20	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし ややしまりあり 黄褐色土粒子が多く、炭化物が少量混じる	
	4 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性あり ややしまりあり 炭化物が若干混じる		2 黒色土 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる		
	5 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性あり ややしまりあり 灰褐色土ブロックが若干混じる		3 灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘性あり しまりあり 灰褐色土ブロックが多く混じる		
HP-3	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性あり しまりなし 黄褐色土ブロックが多く混じる		4 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 粘性あり ややしまりあり 灰褐色土ブロックが多く混じる		
	2 灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子が多く混じる		5 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり ややしまりあり 黄褐色土ブロックが若干混じる		
	3 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる		6 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし ややしまりあり 黄褐色土粒子が多く、炭化物が少量混じる		
HP-4	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる		HP-21	1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり しまりなし 黄褐色土ブロックが多く、炭化物が若干混じる	
	2 灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子が多く混じる		2 黄褐色土 (10YR7/8) 粘性あり しまりあり 灰褐色土ブロックが斑状に混じる		
	3 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる		3 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性あり しまりあり		
HP-5a	1 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが多く混じる		HP-22	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし ややしまりあり 黄褐色土ブロックが若干混じる	
HP-5b	1 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性なし しまりなし 灰褐色土ブロック、炭化物が若干混じる		2 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性あり ややしまりあり 黄褐色土ブロックが若干混じる		
	2 灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘性なし しまりなし 黄褐色土・灰褐色土ブロックが多く混じる		HP-23	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性あり ややしまりあり	
	3 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが多く混じる		HP-24	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが若干混じる	
HP-6	1 黒色土 (2.5Y2/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子、炭化物が多く混じる		2 黄褐色土 (10YR7/8) 粘性あり しまりなし 灰褐色土ブロックが少量混じる		
	2 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが多く混じる		HP-25	1 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性なし ややしまりあり 炭化物が若干混じる	
	3 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる		2 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性なし しまりなし 灰褐色土・黄褐色土ブロック、炭化物粒子が多く混じる		
HP-7	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが多く混じる		HP-26	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる	
	2 灰黄褐色土 (10YR5/2) やや粘性あり しまりなし 黄褐色土・暗褐色土ブロックが多く混じる		2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性なし しまりなし 灰褐色土ブロック、炭化物が若干混じる		
HP-8	1 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性なし しまりなし 砂粒で構成される		HP-27	1 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 粘性なし しまりなし 黒褐色土ブロックが若干混じる	
	2 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし しまりなし 炭化物が多く混じる		HP-28	1 にぶい黄褐色土 (10YR7/4) 粘性あり しまりあり 炭化物が若干混じる	
HP-9	1 黄褐色土 (10YR7/8) 粘性なし しまりなし 灰褐色土ブロックが若干混じる		2 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性なし ややしまりあり		
	2 灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる		HP-29	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが多く混じる	
HP-10	1 灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘性なし しまりなし 黄褐色土・灰褐色土ブロックで構成される		2 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 粘性あり ややしまりあり 灰褐色土ブロックが少量混じる		
	2 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土・灰褐色土ブロックで構成される		HP-30	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが多く混じる	
HP-11	1 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性あり ややしまりあり 灰褐色土ブロックが斑状に少量混じる		HP-31	1 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 粘性なし しまりあり 灰褐色土ブロックが少量混じる	
HP-12	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性あり ややしまりあり		2 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりあり 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる		
HP-13	1 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子、炭化物が多く混じる		3 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 粘性なし ややしまりあり 灰褐色土ブロックが若干混じる		
	2 灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘性なし しまりなし 灰褐色土と黄褐色土で構成される				
HP-14	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし				
HP-15	1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし				

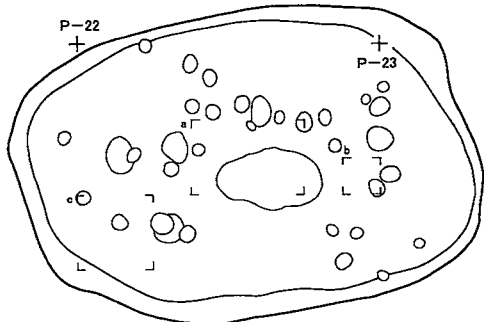
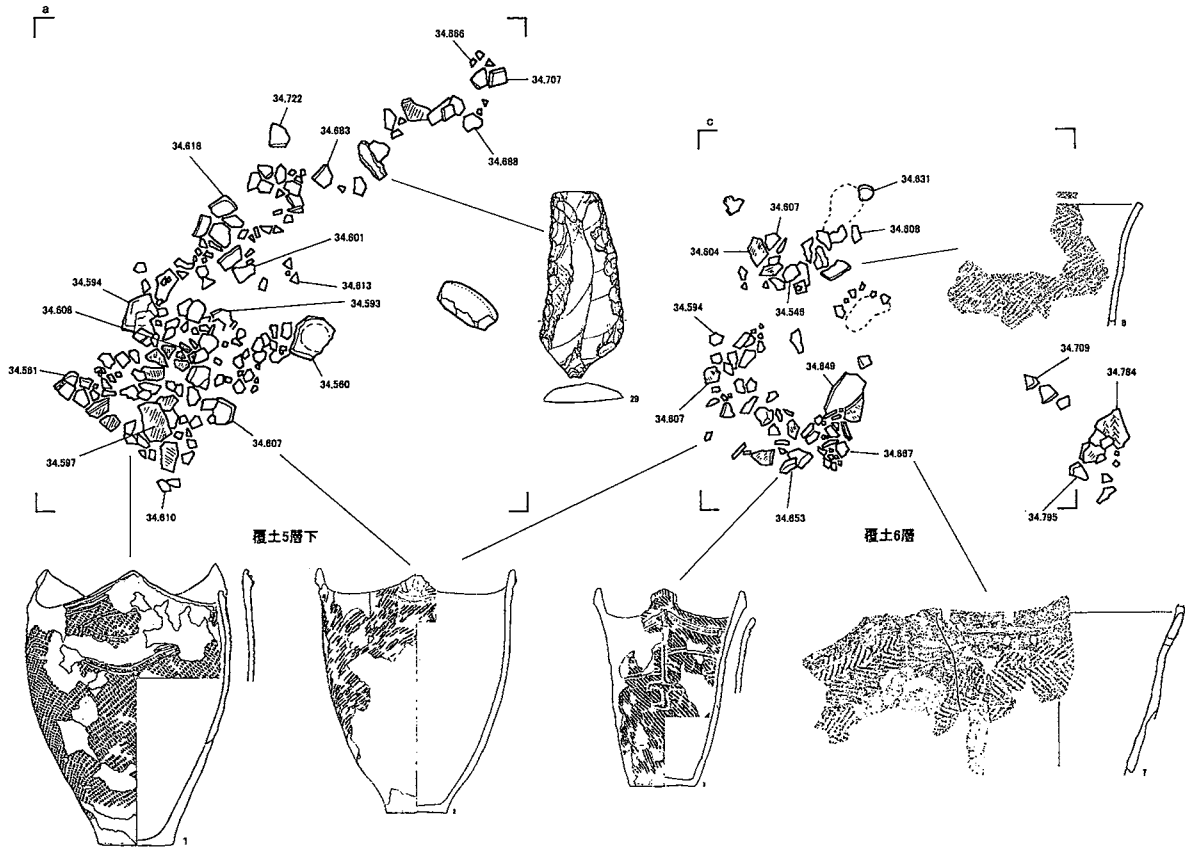
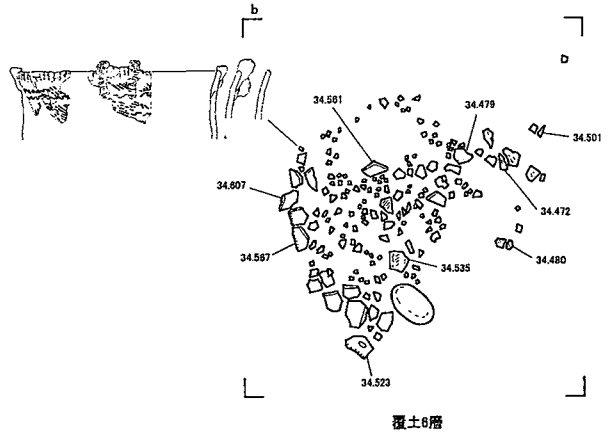
図Ⅲ-20 H-5(2)

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

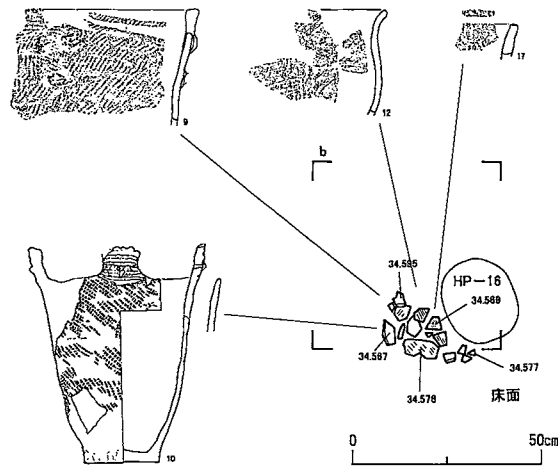
H-5



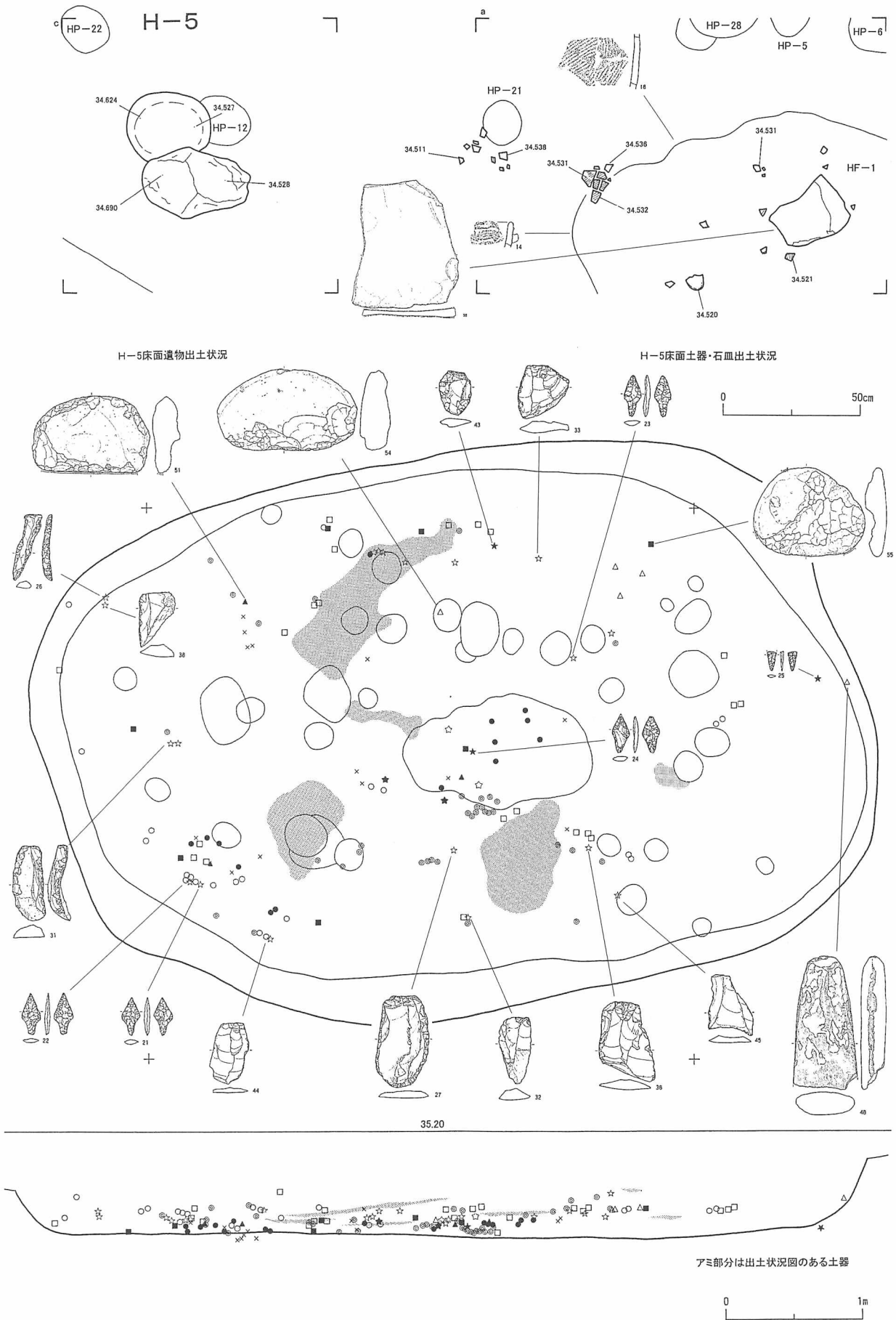
+ H-5覆土 土器集中検出状況 +



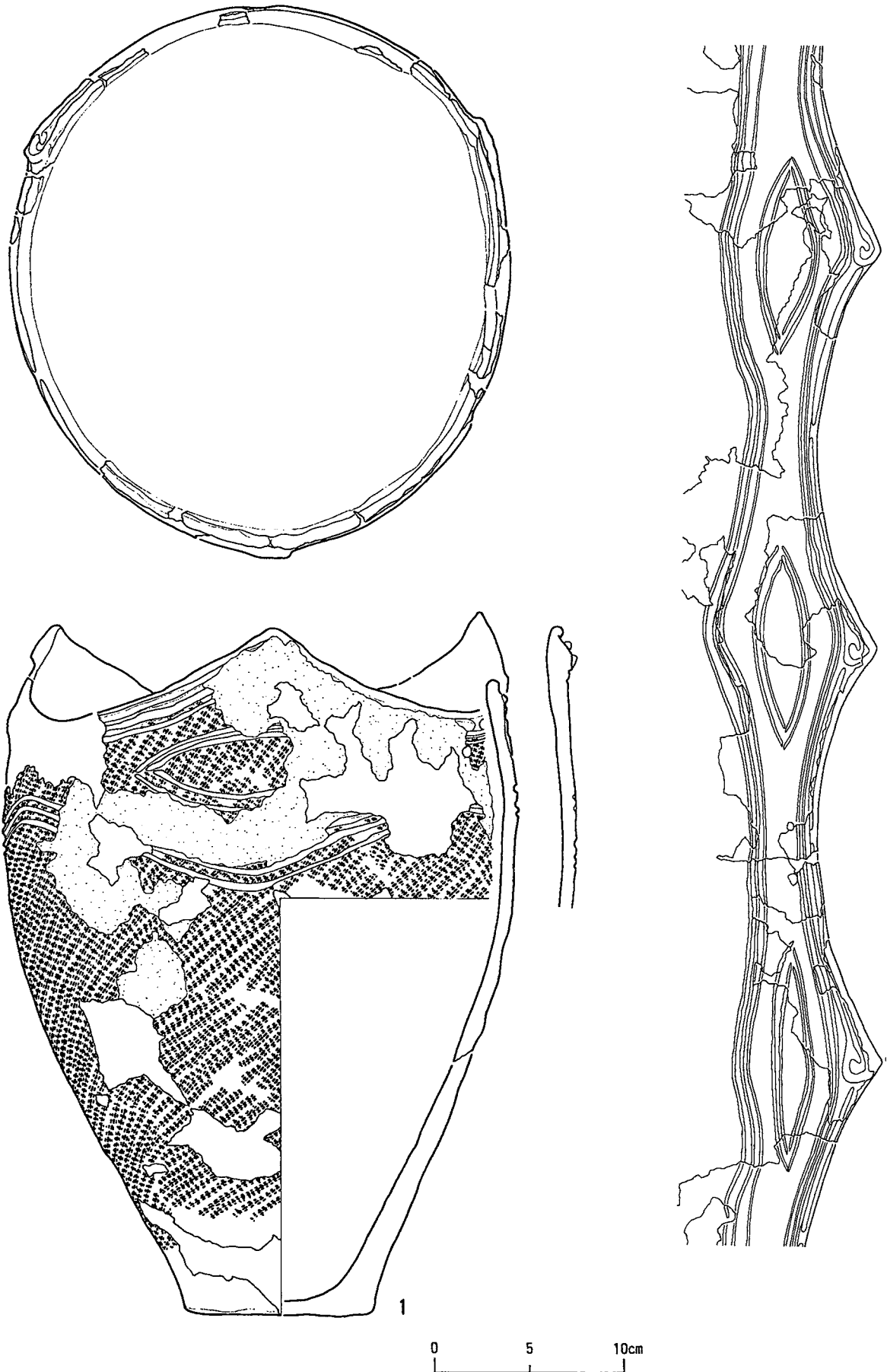
+G-22 H-5床面 土器集中検出状況 +G-23



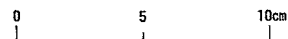
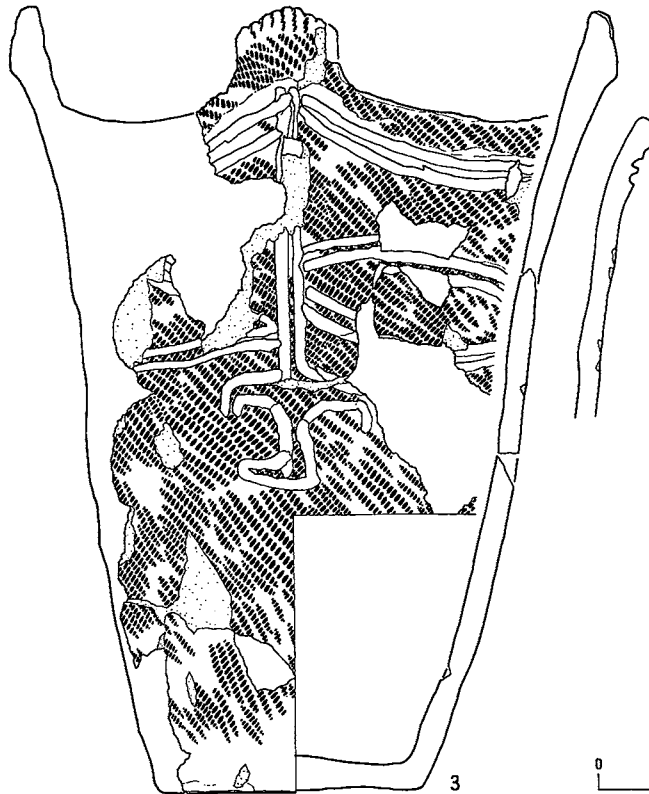
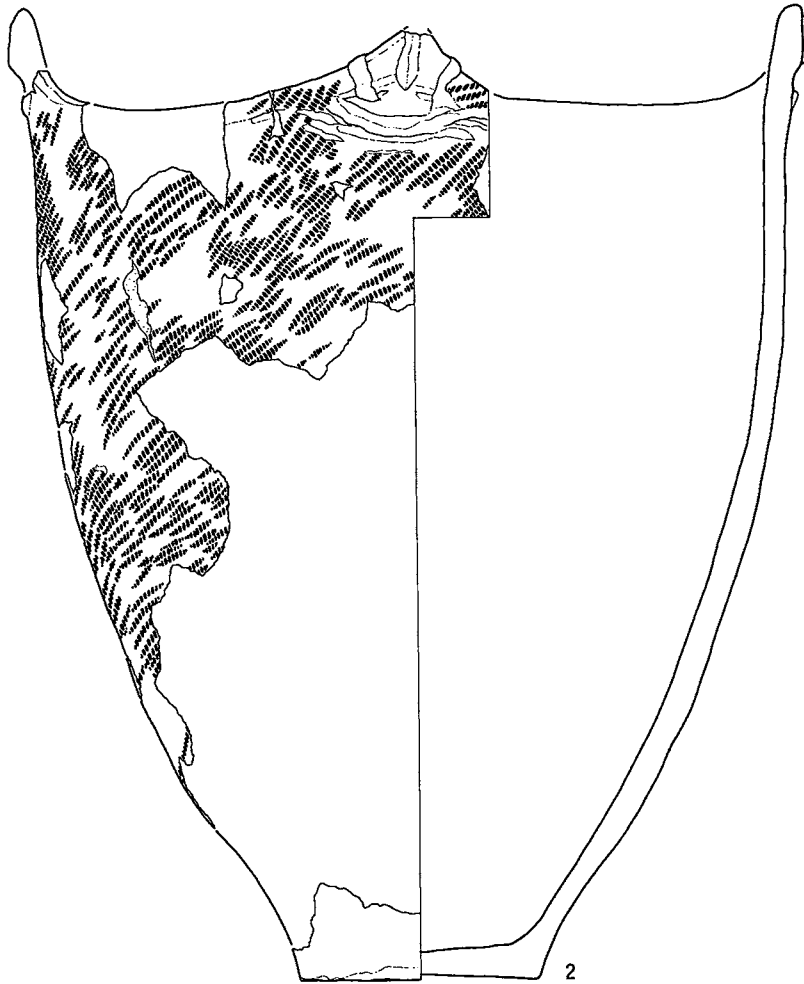
図Ⅲ-21 H-5 遺物出土状況(1)



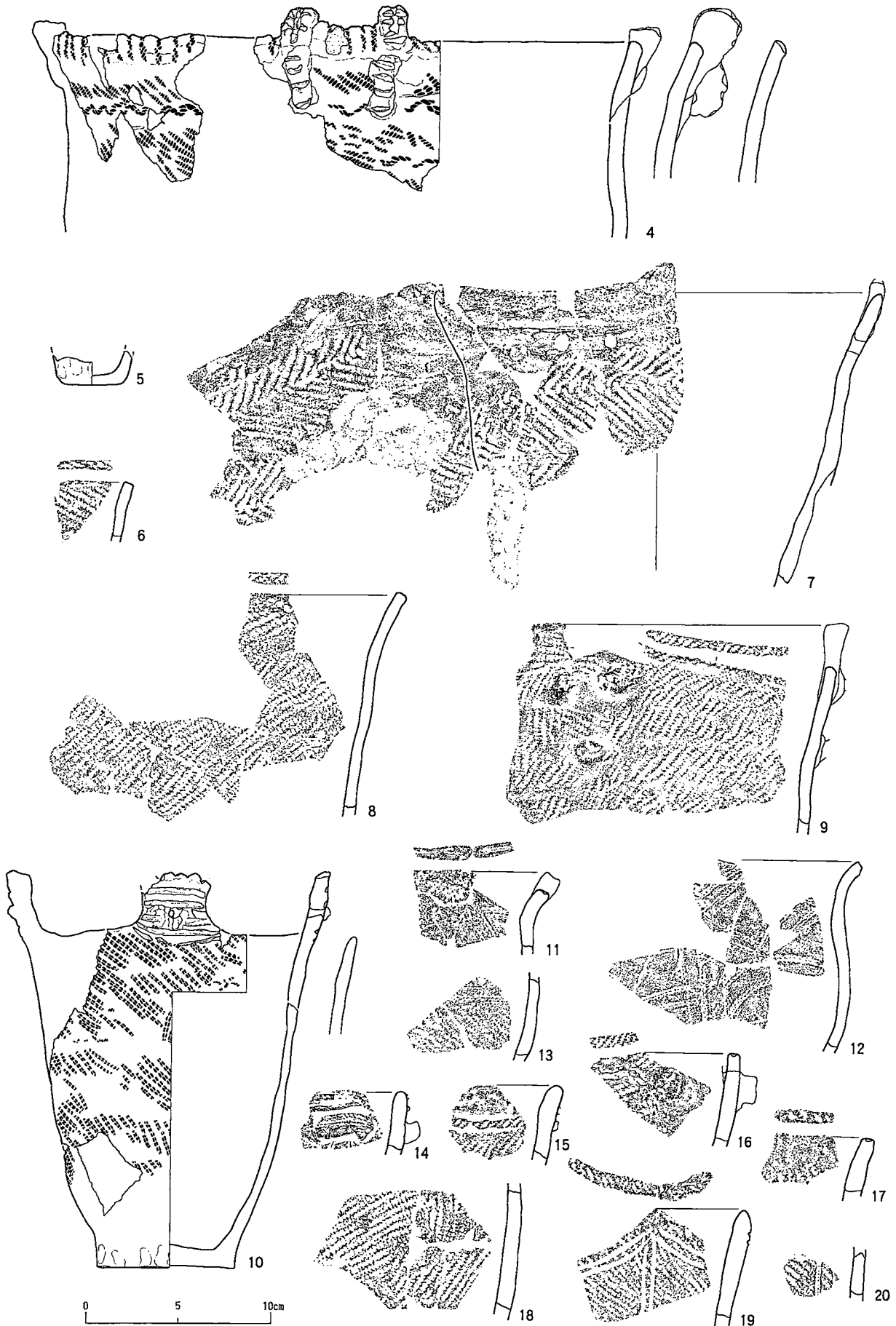
図Ⅲ-22 H-5 遺物出土状況(2)



図Ⅲ-23 H-5出土の土器(1)



図Ⅲ-24 H-5出土の土器(2)



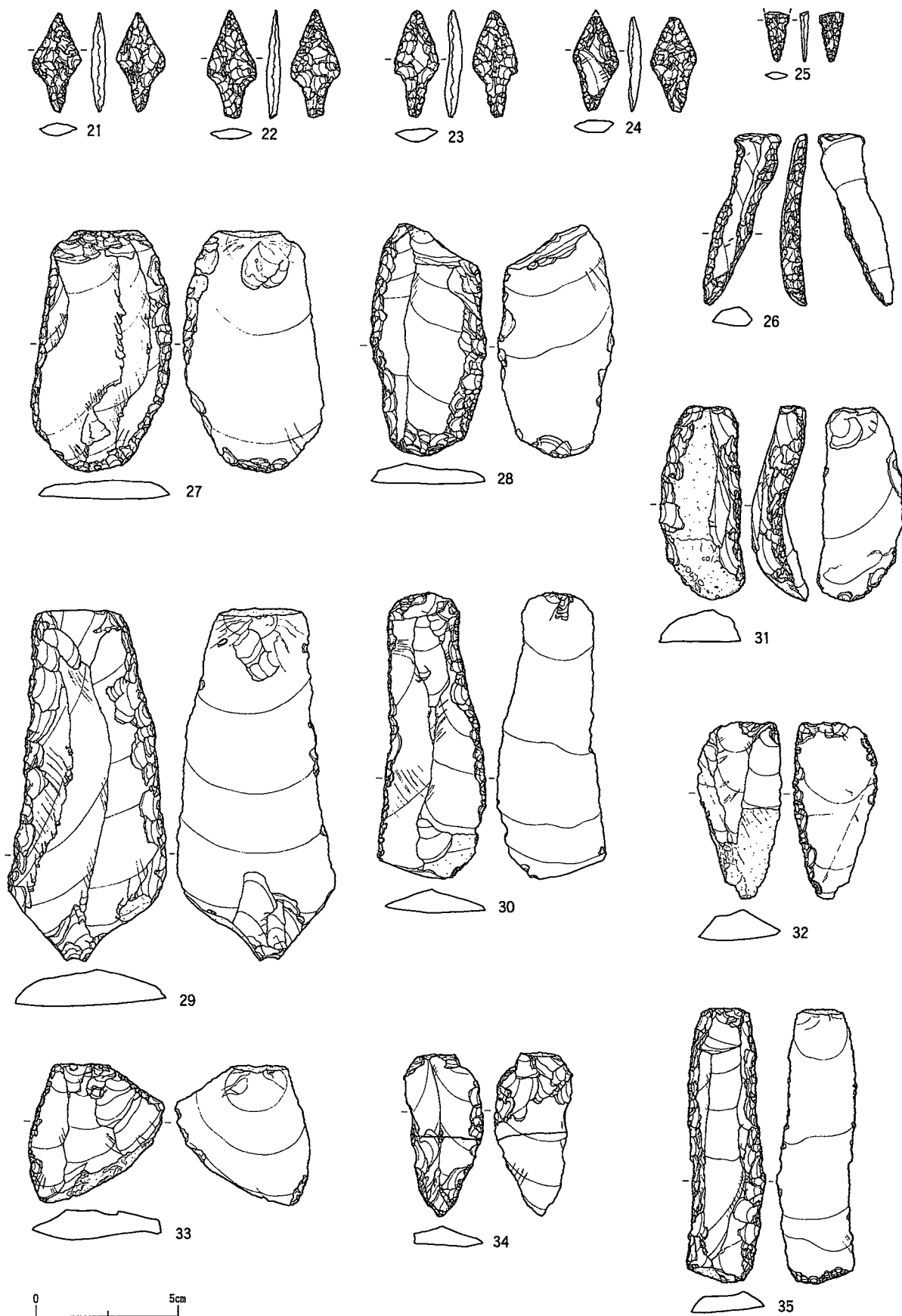
図Ⅲ-25 H-5 出土の土器(3)

と直下には粘土紐が貼り付けられている。3は直線的に立ち上がる器形で、4箇所突起があったと考えられる。突起部や口唇は肥厚し、断面は切り出し状である。突起の頂部には撚糸の圧痕がある。斜行縄文を地として2本一組の太い沈線で文様が描かれている。突起部の下は縦位の文様が施され、それらの間は凸レンズ状の沈線で結ばれている。これらは見晴町式に相当すると考えられる。1は大木8a式併行のものである。

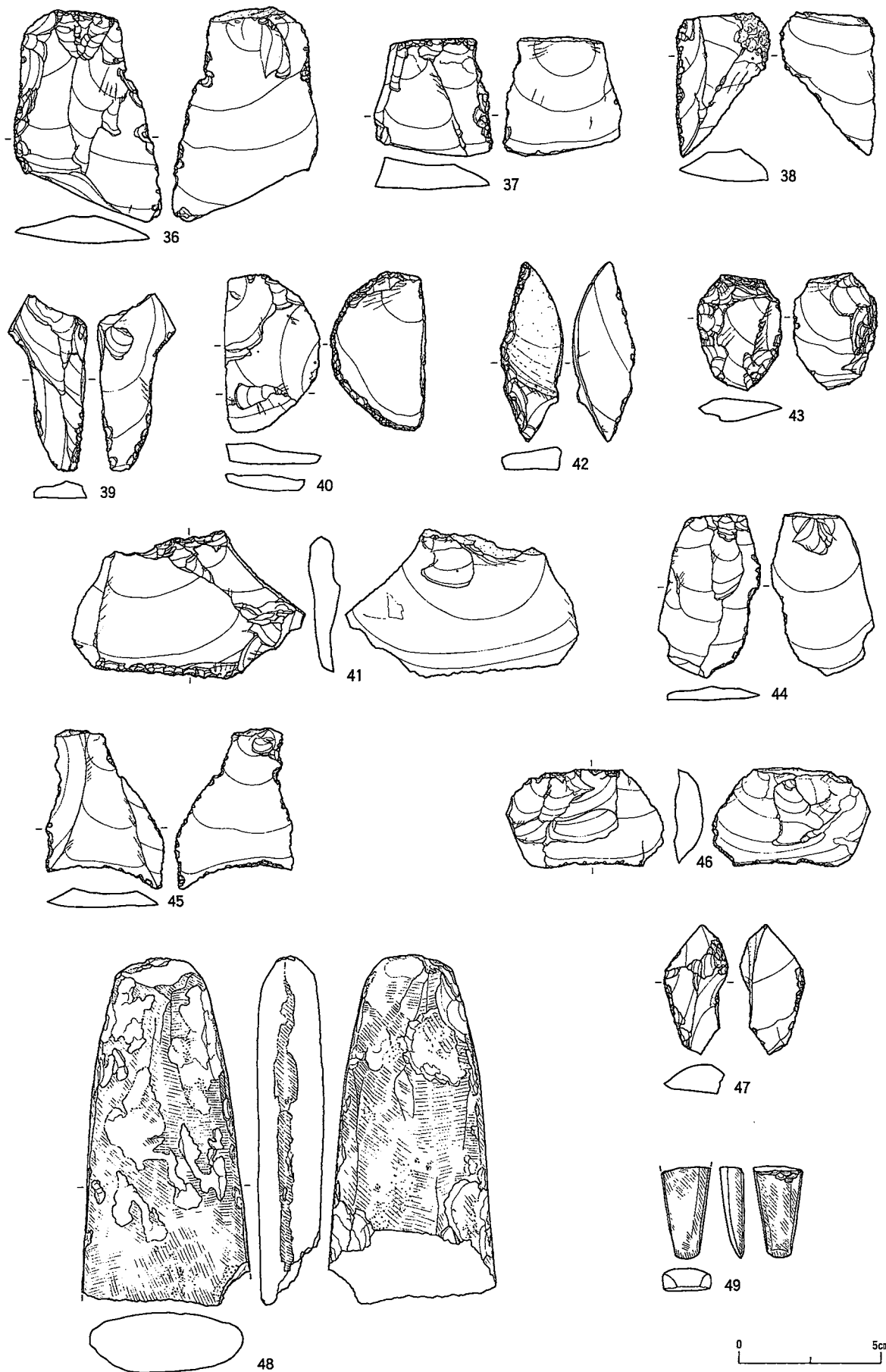
4は胴部以下が欠損するもので、2個一對の突起が付けられている。突起の下には橋状の把手が縦位に貼り付けられており、把手の上にはヘラ状工具による刻み目がある。口唇には刻み目の施された部分と縄の圧痕の施された部分がある。結束第2種斜行縄文が施されている。5は小型の土器の底部で、器面はざらついている。6は斜行縄文が施され、口唇にも縄文がある。7は結束第1種羽状縄文が施されたもので、突起の部分は欠損している。口唇直下は無文の部分もある。口縁部には一對の補修孔がある。外面には炭化物が付着している。胎土に海綿骨針を多量に含む。8・9は同一個体と考えられる。9は2個一對の棒状突起があり、突起の下位にはY字状の把手の剥落した痕がある。10は4箇所に突起があると考えられる。突起には貫通孔があり、左右に粘土粒が貼り付けられている。これらの上下には横位の沈線が加えられ、頂部にはヘラ状の工具による刻み目がある。器厚は薄く、口唇はやや尖る。複節の斜行縄文が施されている。底部付近と内面はよくみがかれている。11~13は同一個体で、口縁が外反し、胴部のふくらむ器形と考えられる。口縁部から胴部にかけては無文地に撚糸の圧痕で文様が描かれ(12)、文様帯の下には斜行縄文が施されている。11は低い突起の部分で、口唇にも撚糸の圧痕がある。14・15は突起部の破片である。14は突起上に横位の把手が貼り付けられ、その上に撚糸の圧痕がある。口唇の一部には刺突が加えられている。15は細い粘土紐が貼り付けられたもので、その上にも縄文が施されている。16はボタン状の貼り付けをもつもので、突起の部分は欠損している。口唇には縄文が施されている。17は突起部の破片で、頂部に縄端の圧痕がある。18は斜行縄文が施されたもので、胎土に海綿骨針を含む。19・20は2本一組の沈線が施されている。19は山形の突起をもつもので、斜行縄文の地に突起から垂下する沈線とその左右に弧状の沈線が施されている。口唇にも縄文がある。割れ口の一部には炭化物が付着している。これらのうち19は見晴町式で、それ以外はサイベ沢Ⅶ式新段階に相当すると考えられる。(中田)

21~25は石鏃である。21~24は有茎のもの(ⅠA5)。素材の両面に比較的丁寧な細部調整が施される。返しは明瞭ではない。25は破片である。26はつまみ付きナイフ(ⅢA1c)である。背面の側縁にのみ細部調整される。刃部はやや厚い。27~42はスクレイパー。27~37までが縦長剥片の素材。27~34は刃部が外反するもの(ⅢB2a)。31はやや厚手の剥片を用いるもので、側面観はノの字状を呈する。35~38は刃部が直線を呈するもの(Ⅲb2b)である。39は刃部が内湾するもの(ⅢB2c)である。40、41は横長剥片を用いるもので、40は刃部が外反するもの(ⅢB3a)、41は直線状のもの(ⅢB3b)である。42は細分の困難なものである。43はRフレイク(VB1)。44~47はUフレイクである。44は石刃様の剥片を用いるもの(VB2a)。45~47は不定形な剥片を素材とするもの(VB2c)である。剥片石器の石材は黒曜石製の25を除いてすべて頁岩製である。48は石斧(VI A)。片岩製である。49は石のみ(VI B)。泥岩製である。50はたたき石、礫の周縁に敲打痕があるもの(VII 2)である。礫の稜線上に敲打痕が認められる。51~55は半円状扁平打製石器である。51は礫の周縁を打ち欠きによって加工するもの(VIII 3 a)、52は剥片状の礫を素材とするもの(VIII 3 b)、53~55が未製品(VIII 3 e)である。扁平礫の一部を打ち欠いたのみである。56は石皿(X)。扁平な砂岩を用い平坦面の両面を使用面とするもの。使用面は円滑である。

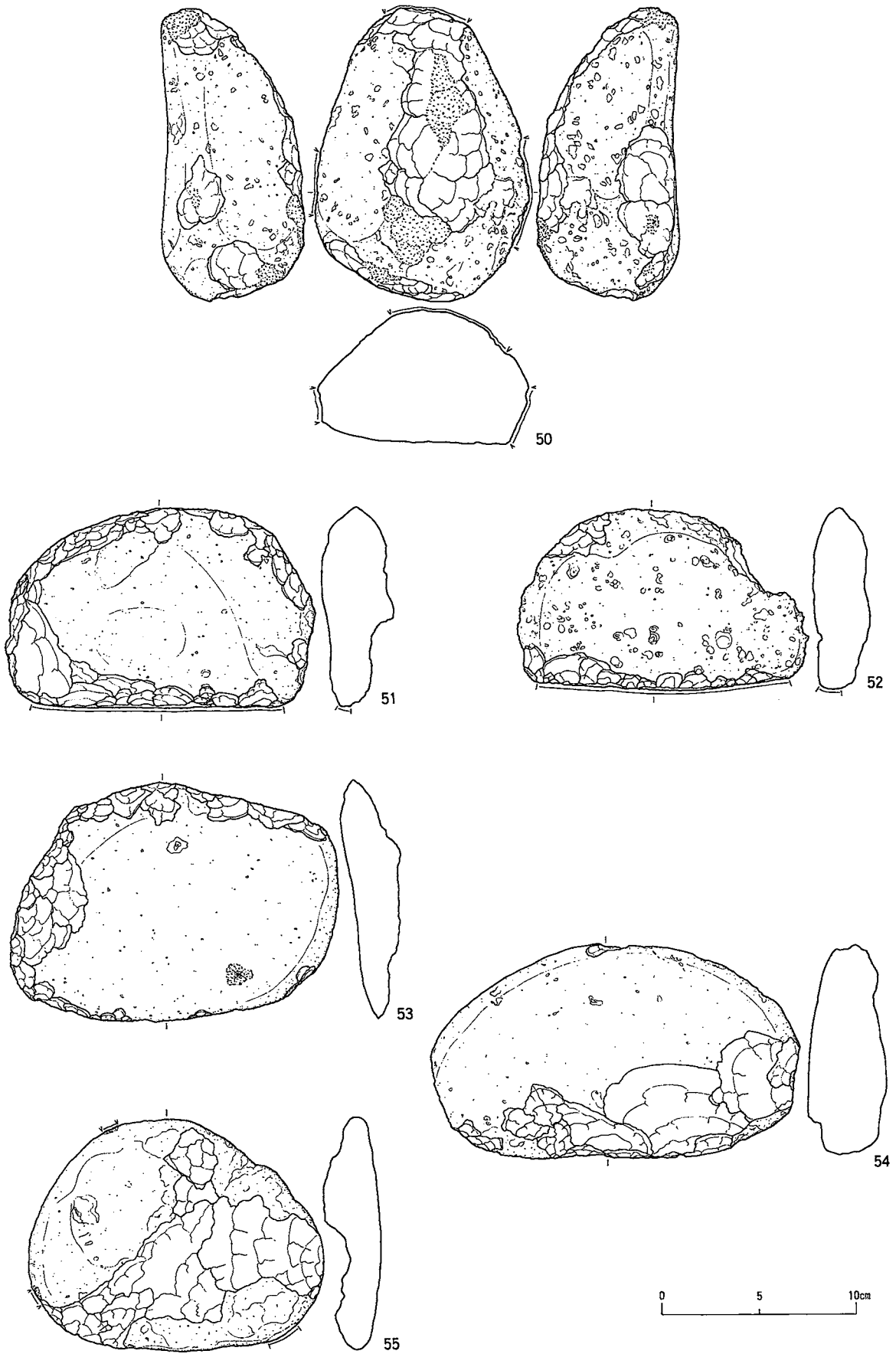
なおスクレイパー、Uフレイクの刃部に脂肪状の光沢がみられるものがあり、スクレイパー27、28、



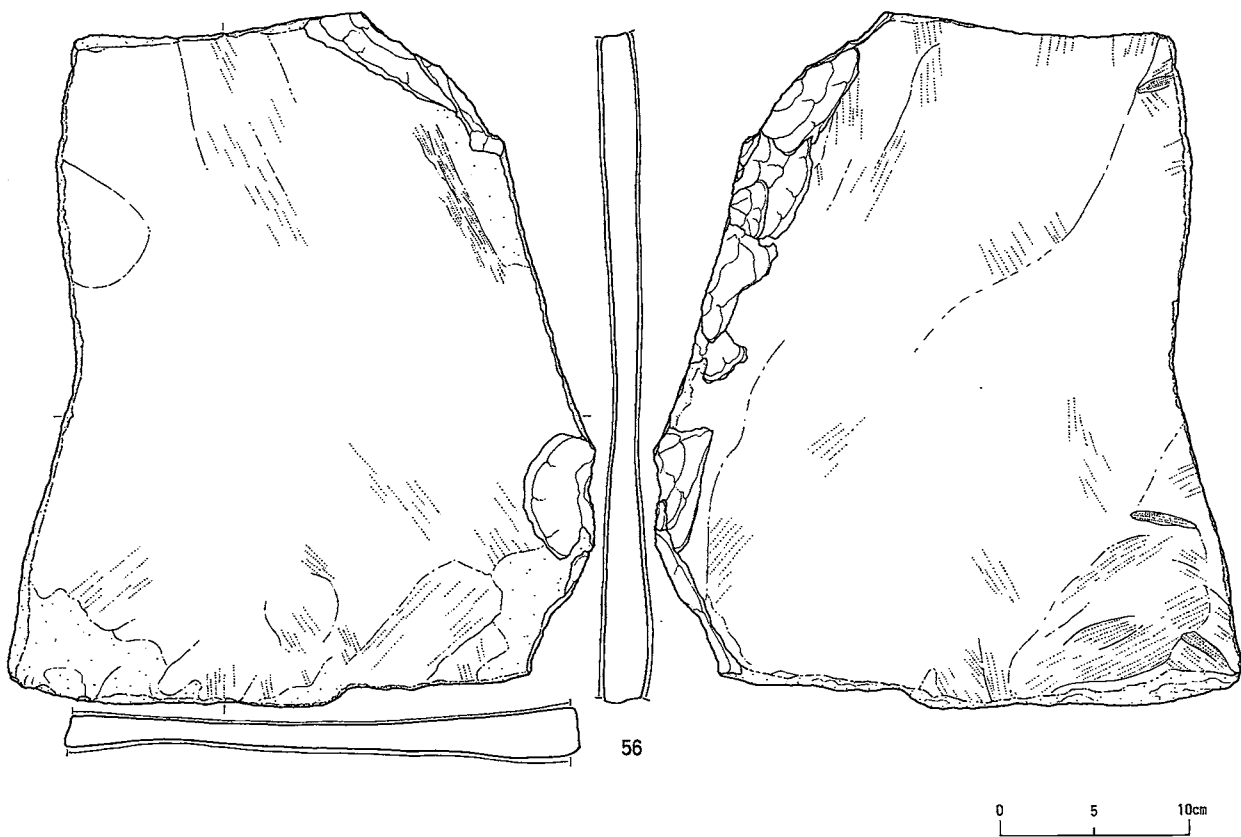
図III-26 H-5出土の石器(1)



図Ⅲ-27 H-5出土の石器(2)



図Ⅲ-28 H-5 出土の石器(3)



図Ⅲ-29 H-5出土の石器(4)

30、41には刃部に沿って背腹両面に明瞭な光沢がみられる。Uフレイク44には微細剥離のある側縁の腹面にのみやや弱い光沢が認められる。

時期 床面から出土した土器から、縄文時代中期前半サイベ沢Ⅷ式新～見晴町段階のものと思われる。(立田)

H-6 (図Ⅲ-30～32、表1～5、図版14・15・40)

位置 P-20-c・d、P-21-a・b

規模 300×254 / (262) × (246) / 26

長軸方向 N-146.5° -W

平面形 不整円形

確認・調査 Ⅲ層下位の調査中に黒褐色土の落ち込みを確認したので、21ラインとそれに直交する方向にトレンチを入れ、床面と壁の立ち上がりを検出した。壁面はゆるやかに立ち上がり、床面は東側がやや低くなっている。覆土中には黄褐色土の粒子や黒色土・黒褐色土が混じる。床面直上の土をフローテーションの試料として採取中に、遺構の中央部で暗赤褐色焼土(HF-1)が痕跡程度に堆積しているのを確認した。床面直上の土からはクルミ属の核果破片、不明種子がわずかに検出された(第V章2参照)。

柱穴 床面を精査中に4基を検出した。HF-1の周囲に長方形に配置されている。

遺物の出土状況 床面直上の土を採取中に土器片が立った状態で出土した。周囲を精査したところ、Ⅲ群a類の胴部から底部にかけての土器1個体分(図Ⅲ-32-2)が床面に掘られた土坑の中に正立

III 遺構と遺構出土の遺物

H-6

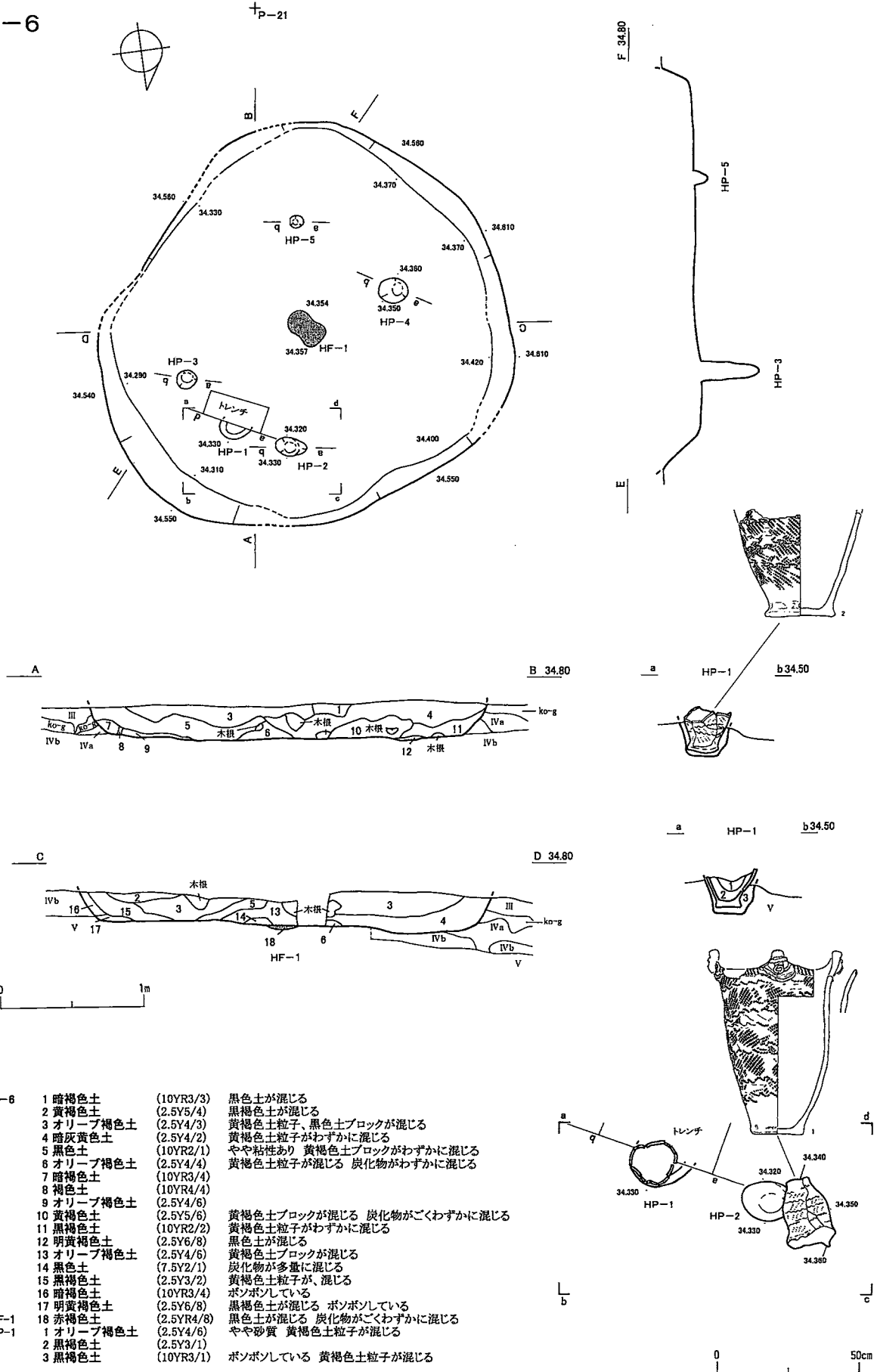
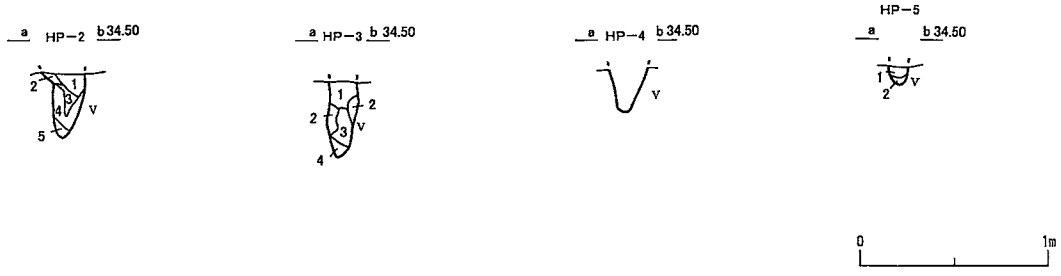
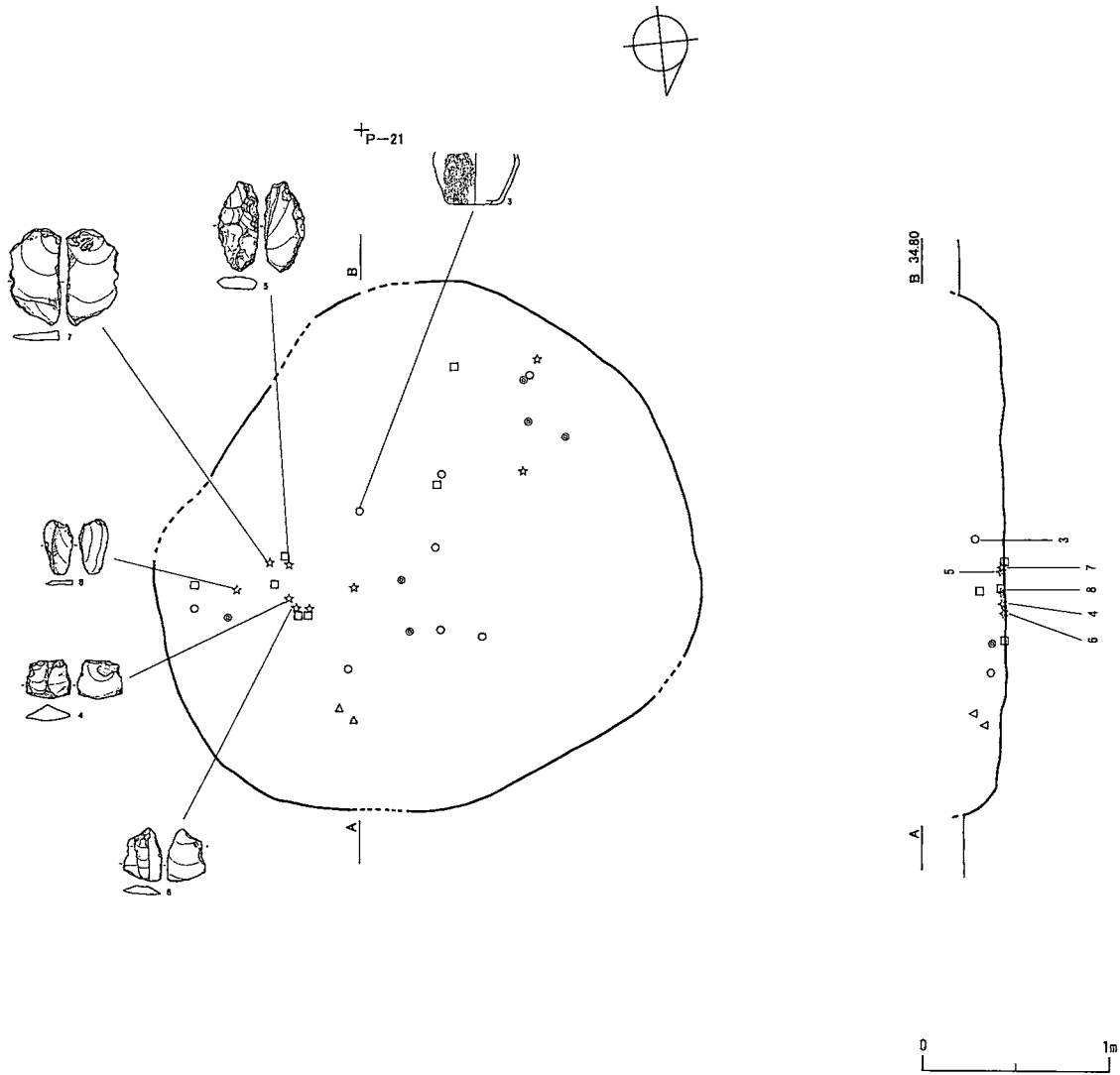


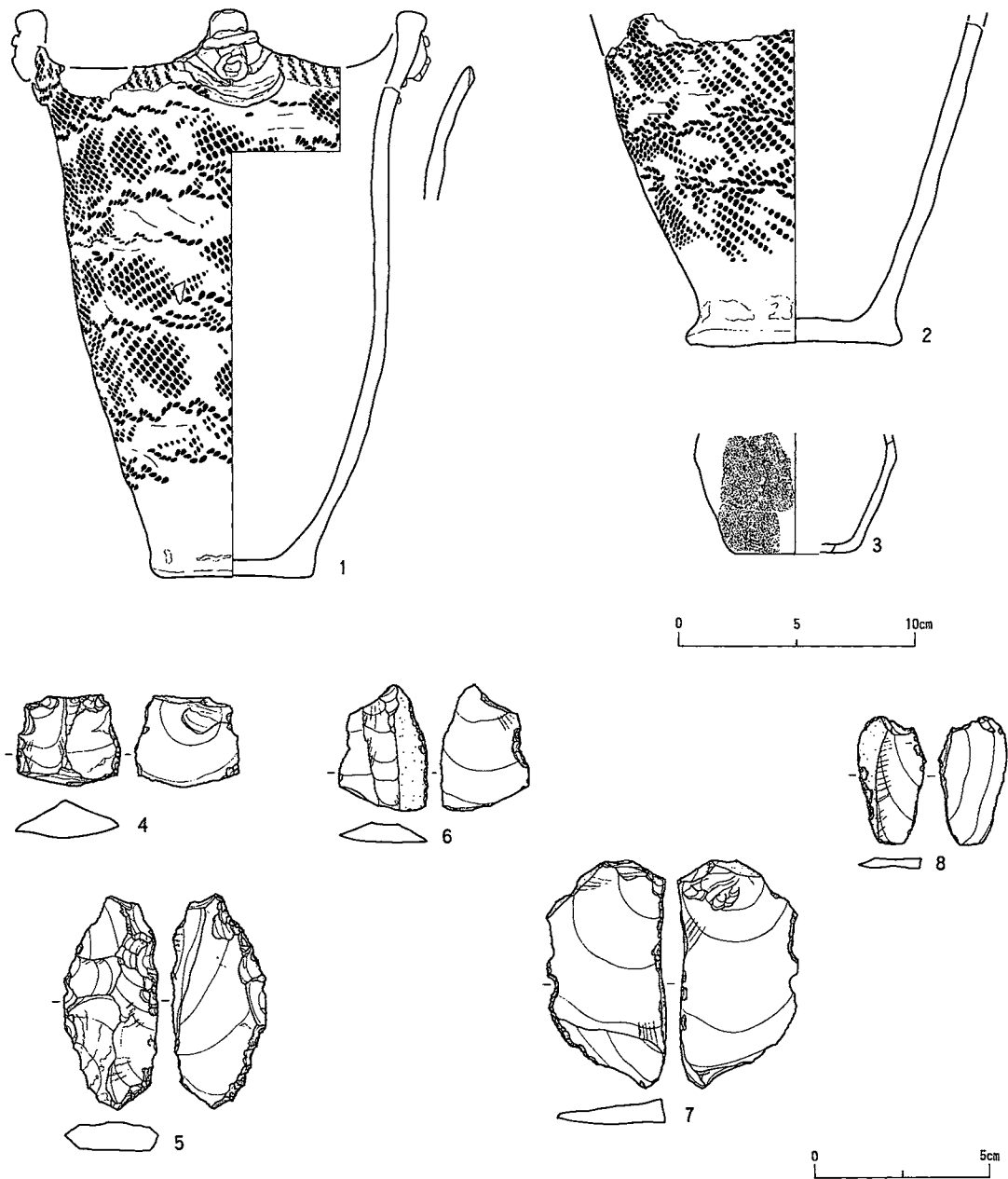
図 III-30 H-6(1)



HP-2	1 黒褐色土	(2.5Y3/2)	ややボソボソしている 黄褐色土ブロックが多量に混じる
	2 黒褐色土	(2.5Y3/1)	ややボソボソしている
	3 オリーブ褐色土	(2.5Y4/3)	ボソボソしている 黄褐色土粒子が混じる
	4 明黄褐色土	(2.5Y6/8)	ややボソボソしている 黒褐色土が混じる
	5 明黄褐色土	(2.5Y6/8)	
HP-3	1 黒褐色土	(2.5Y3/2)	黄褐色土ブロックが混じる
	2 明黄褐色土	(2.5Y6/8)	黒褐色土が混じる
	3 黒褐色土	(2.5Y3/2)	ややボソボソしている 黄褐色土ブロックが混じる
	4 黒褐色土	(2.5Y3/1)	黄褐色土ブロックが混じる
HP-4	1 黒褐色土	(2.5Y3/2)	ややボソボソしている 黄褐色土ブロックが混じる 炭化物がわずかに混じる
HP-5	2 黒褐色土	(2.5Y3/2)	黄褐色土ブロックが混じる



図Ⅲ-31 H-6(2)



図Ⅲ-32 H-6 出土の遺物

の状態で見つめられていた。土器の内部には土がつまっていた。床面では2の西側にⅢ群a類の土器(図Ⅲ-32-1)が横倒しになった状態で出土した。この土器の内部にも暗褐色の土がつまっていた。1の土器を取り上げた後、東側に隣接してHP-2が検出されている。

遺物 1・2は結束第2種斜行縄文が施されたもので、底部付近はみがかれている。1は4箇所肥厚する山形の突起をもつもので、3箇所は欠損している。突起部には円形や紐状の粘土が貼り付けられている。口唇下は肥厚し、縄の圧痕が加えられている。外面は口縁部から胴部上位に、内面は口縁部と胴部下位に炭化物が付着している。2は底部が外側に張り出している。1・2の土器の内部につまっていた土を採取してフローテーションを行った結果、2の土器内の土からニワトコ属の種子1

粒が検出された(第V章2参照)。3は覆土上位と包含層から出土した小型の土器である。無文で、外面はみがかれている。内面は器面に凹凸が残る。1・3は胎土に海綿骨針を含む。これらはサイベ沢Ⅶ式新段階に相当する。(中田)

4はスクレイパー。下部を欠損する(ⅢB9)。5はRフレイク(VB1)である。6～8はUフレイクである。6は縦長剥片を用いるもの(VB2a)、7、8は不定形な剥片を用いるもの(VB2c)である。(立田)

時期 床面から出土した土器から縄文中期前半、サイベ沢Ⅶ式新段階の時期と考えられる。

1の土器の内面から採取した炭化物とH-6の床面直上から採取した炭化物の年代測定を行ったところ、¹⁴C補正年代で前者は4540±40y. B. P. (Beta-163036)、後者は4380±40y. B. P. (Beta-163032)という結果が得られた(第V章3参照)。(中田)

H-7 (図Ⅲ-33~41、表1~5、図版15~17、40~42)

位置 N-26、N-27-a・b・c、O-26、O-27、P-26-a・d、P-27-a・d

規模 838×802/618×528/44

長軸方向 N-19° -W

平面形 長楕円形

確認・調査 IV層上面を精査中、深度耕作に攪乱される黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みが不整形であったため、長軸とそれに直交するトレンチを設定してV層まで掘り下げたところ、黒褐色土中に焼土を確認した。焼土はトレンチ内に2カ所確認でき、レベルがほぼ一定であったことから、この面を床とする1つの住居を想定した。もう一つの住居が入れ子状に重複する可能性があったため、落ち込みを超えた範囲にトレンチを設定し、床面を掘り下げて確認することにした。その結果、落ち込みは2軒の住居であり、古い住居のくぼみを利用して焼土が作られていることがわかった。これらの住居のうち、くぼみを利用した新しい住居をH-4、古いほうの住居をH-7と呼称した。

H-4を確認した後、そのトレンチを延長し床面をさらに掘り下げた。その結果、やや平坦な床、緩やかに立ち上がる壁を確認して本遺構とした。

平面形は長楕円形を呈する。床面は平坦であるが、南端1mほどの幅において他より一段高い部分がある。壁は確認できた部分では緩やかであるが、南側以外では明瞭ではない。また住居の壁際付近において浅い周溝が確認された。周溝は住居の南半分をほぼ全周し、幅はほぼ20cm、深さは概ね5cm程である。南端において明確な途切れがあり、南西側は壁からやや離れて位置する。覆土は2層に区分した。自然堆積とみられる。

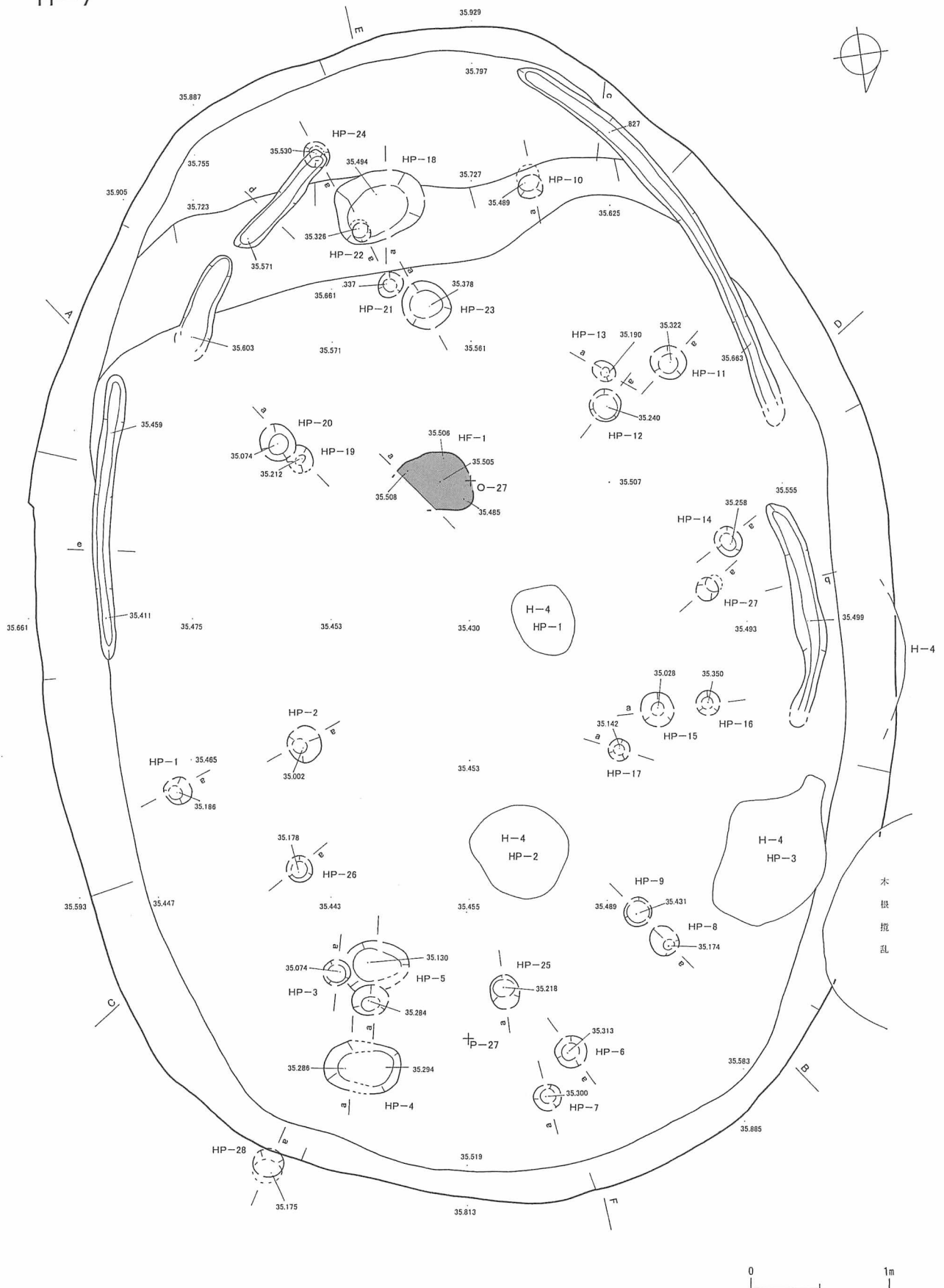
柱穴 かなり疑わしいものまで含め、全部で28基検出された。すべて床面を10cm掘り下げた時点で確認した。このうち確認面からの深さが40cmを超えるものはHP-2、8、15、20の4基である。これらに対となる柱穴、HP-3、12、24も含めると計8本の支柱穴のある住居であったと想定できる。この8基の柱穴のうちHP-2以外には隣接して2基以上の柱穴がある。立替の痕跡であるかもしれない。また、HP-18は他の柱穴に比してやや大きく、浅い。加えて住居の南端に位置することも考慮すると、何らかの付属施設とするべきかもしれない。

付属施設 焼土を1カ所検出した。住居の長軸上、中心よりやや南によった、HP-12、20間に位置する。住居の炉とみられる。明瞭な地床炉である。

遺物の出土状況 覆土中、および床面からやや多くの遺物が出土している(図Ⅲ-36)。(立田)

遺物 1～6は覆土、7～12は床面出土の土器である。

H-7



図Ⅲ-33 H-7(1)

H-7

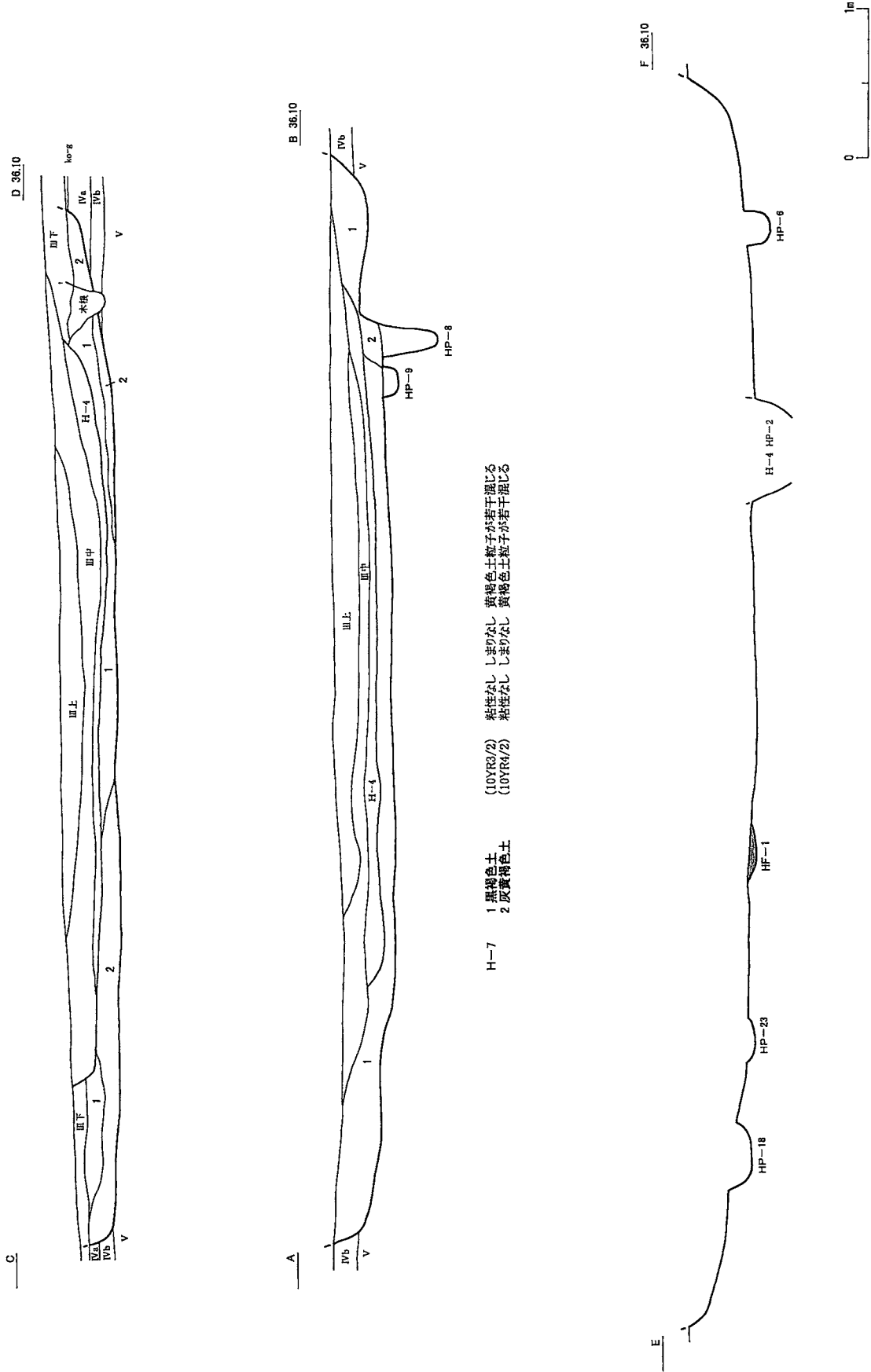
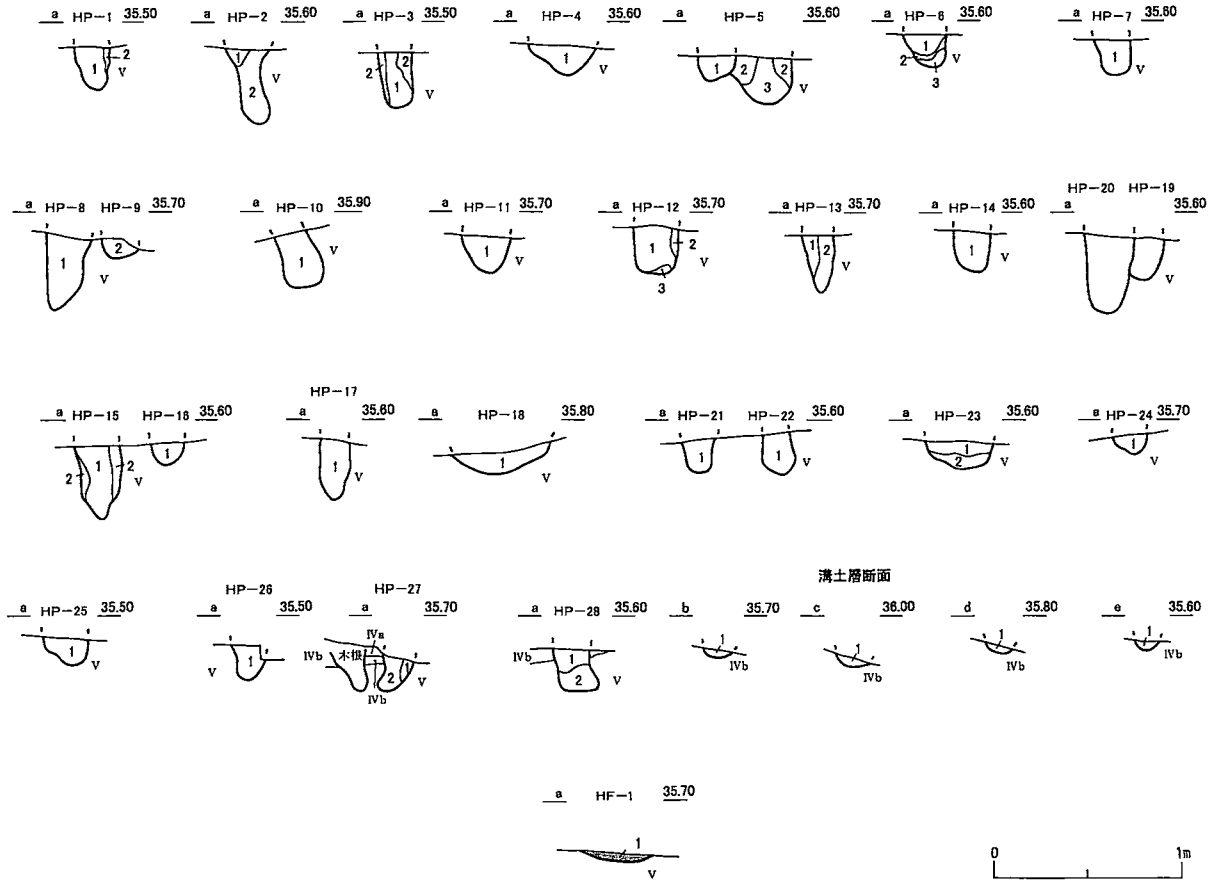


図 III-34 H-7(2)

III 遺構と遺構出土の遺物

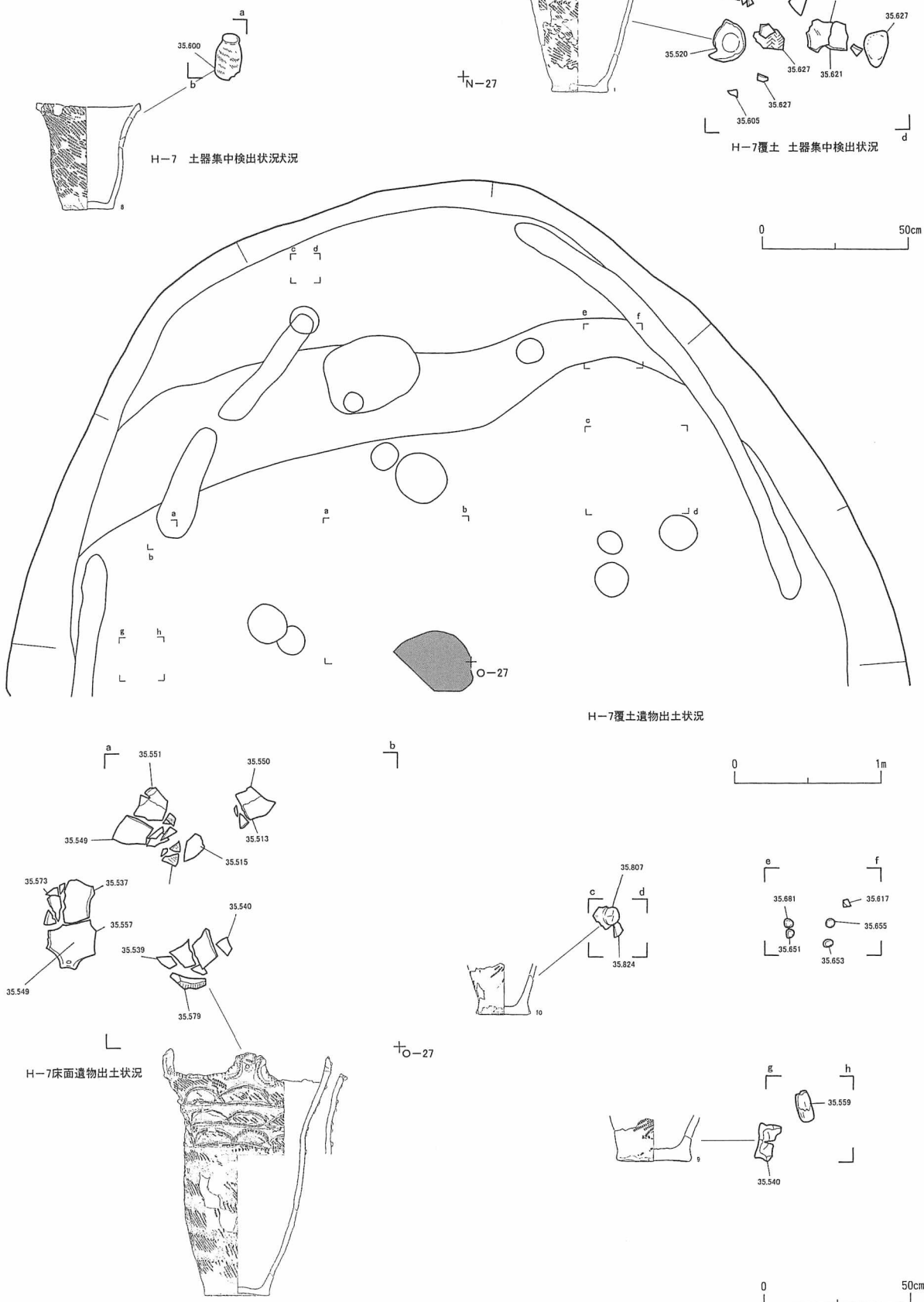
H-7



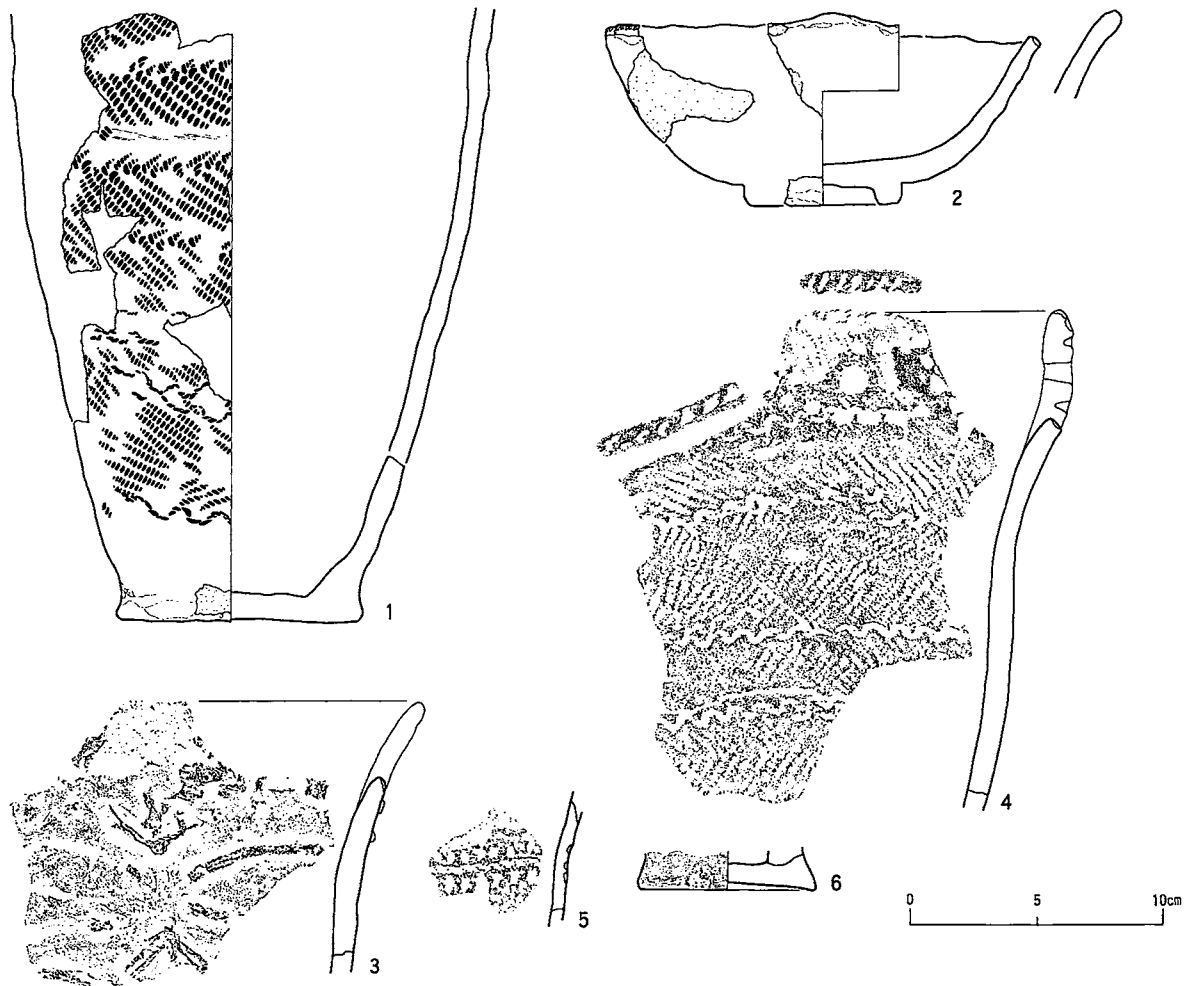
HP-1	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性あり ややしまりあり	黄褐色土ブロック、炭化物が若干混じる	層界不明瞭
	2 黄褐色土	(10YR7/8)	粘性あり ややしまりあり	灰褐色土ブロックが斑状に混じる	
HP-2	1 褐灰色土	(10YR5/1)	粘性なし ややしまりあり	黄褐色土ブロックが多く混じる	層界面然
	2 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし しまりなし	層界付近に黄褐色土ブロックが多く混じる	
HP-3	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし しまりなし	黄褐色土ブロックが若干混じる	層界不明瞭
	2 褐灰色土	(10YR5/1)	粘性なし しまりなし	黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	
HP-4	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし しまりなし	黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	層界不明瞭
HP-5	1 褐灰色土	(10YR4/1)	やや粘性あり ややしまりあり	黄褐色土ブロックが少量混じる	層界やや画然
	2 灰黄褐色土	(10YR5/2)	粘性あり ややしまりあり	黄褐色土ブロックが若干混じる	
	3 黒色土	(10YR2/1)	粘性なし しまりなし	黄褐色土ブロックが若干混じる	
HP-6	1 褐灰色土	(10YR5/1)	粘性あり ややしまりあり	層界付近に黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	層界面然
	2 灰黄褐色土	(10YR5/2)	粘性なし ややしまりあり	1層が斑状に若干混じる	
	3 黒色土	(10YR2/1)	粘性なし ややしまりあり		
HP-7	1 褐灰色土	(10YR4/1)	やや粘性あり しまりなし	黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	層界不明瞭
HP-8-9	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし ややしまりあり	黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	層界面然
	2 灰黄褐色土	(10YR5/2)	粘性なし ややしまりあり	暗褐色土・黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	層界不明瞭
HP-10	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし ややしまりあり	暗褐色土ブロックが斑状に少量混じる	層界やや画然
HP-11	1 黒色土	(10YR2/1)	粘性なし しまりなし	灰褐色土・黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	
HP-12	1 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし しまりなし	層界面然	
	2 灰黄褐色土	(10YR5/2)	粘性なし ややしまりあり	灰褐色土ブロックが斑状に若干混じる	
	3 灰黄褐色土	(10YR6/2)	粘性なし しまりなし		
HP-13	1 灰黄褐色土	(10YR5/2)	粘性なし ややしまりあり	黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	層界不明瞭
	2 黒色土	(10YR2/1)	粘性なし しまりなし	1層が若干混じる	
HP-14	1 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし しまりなし	黄褐色土・灰褐色土ブロックが斑状に若干混じる	層界面然
HP-15	1 黒色土	(10YR2/1)	粘性なし ややしまりあり	黄褐色土ブロックがモザイク状に多く混じる	層界面然
	2 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし ややしまりあり	黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	
HP-16	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし ややしまりあり	暗褐色土・黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	層界面然
HP-17	1 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし しまりなし	灰褐色土ブロックが斑状に若干混じる	層界不明瞭
HP-18	1 黒褐色土	(10YR3/2)	粘性あり ややしまりあり	黄褐色土粒子が若干混じる	炭化物が少量混じる 層界不明瞭
HP-21	1 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし ややしまりあり	黄褐色土・暗褐色土ブロックが多く混じる	層界面然
HP-22	1 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし しまりなし	層界付近に黄褐色土ブロックが多く混じる	
HP-23	1 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性あり ややしまりあり	黄褐色土・暗褐色土ブロックが斑状に若干混じる	層界不明瞭
	2 灰黄褐色土	(10YR5/2)	粘性あり しまりあり	暗褐色土粒子が少量混じる	
HP-24	1 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし しまりなし	層界付近に黄褐色土・暗褐色土ブロックが少量混じる	層界不明瞭
HP-25	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性なし しまりなし	層界付近に黄褐色土ブロックが若干混じる	層界不明瞭
HP-26	1 にぶい黄色土	(2.5Y6/4)	粘性なし ややしまりあり	暗褐色土ブロックが若干混じる	層界面然
HP-27	1 にぶい黄褐色土	(10YR5/3)	粘性なし しまりなし	黄褐色土ブロックが少量混じる	層界やや画然
	2 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし しまりなし	層界付近に暗褐色土ブロックが若干混じる	
HP-28	1 黒褐色土	(10YR3/1)	粘性なし しまりなし	層界不明瞭	
	2 灰黄褐色土	(10YR5/2)	粘性なし ややしまりあり	黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる	
HF-1	1 橙色土	(5YR7/8)	粘性あり しまりあり		
溝	1 褐灰色土	(10YR4/1)	粘性あり ややしまりあり	層界付近に黄褐色土ブロックが若干混じる	層界不明瞭

図 III-35 H-7(3)

H-7



図Ⅲ-36 H-7 遺物出土状況(1)

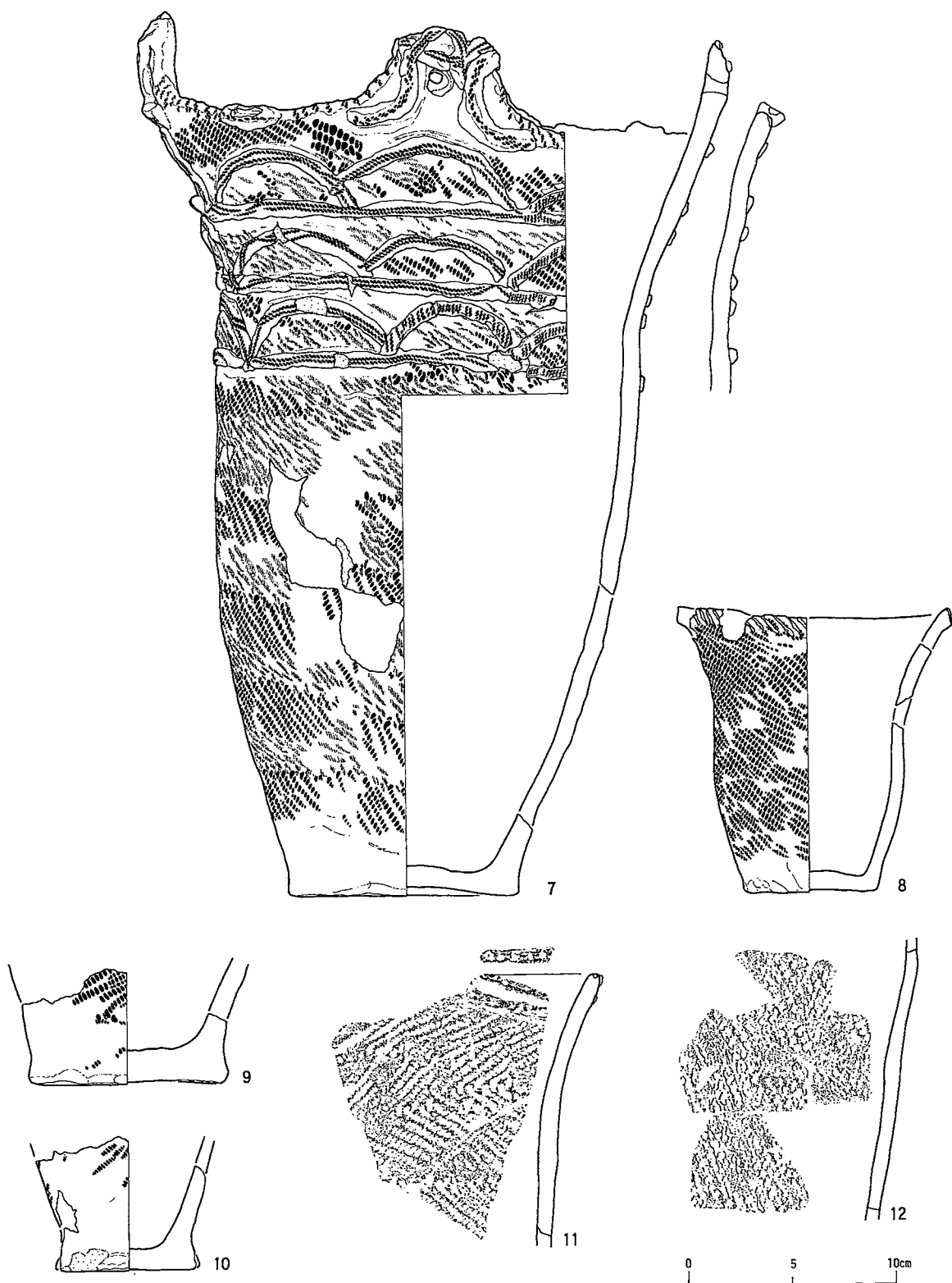


図Ⅲ-38 H-7出土の土器(1)

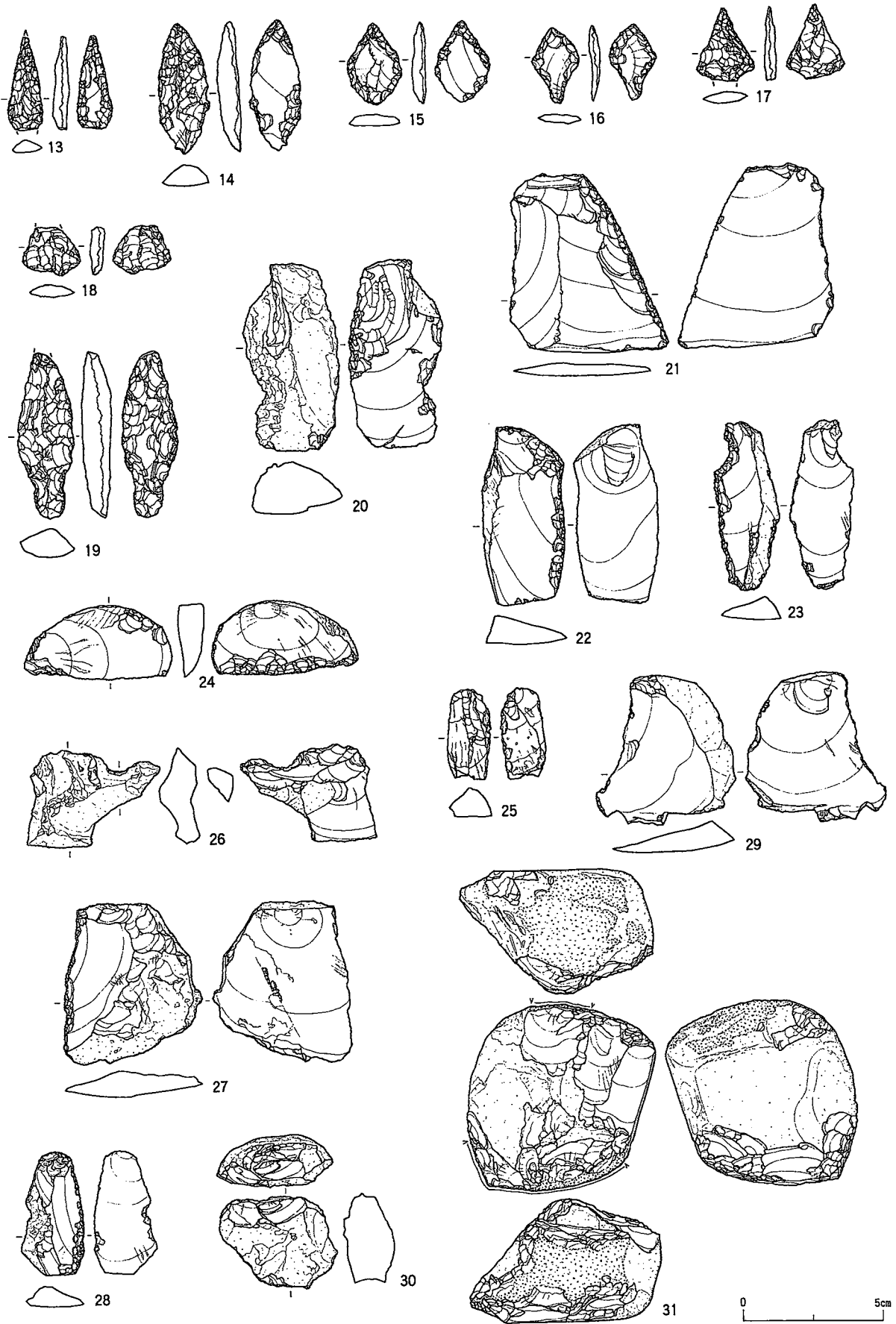
1は口縁部が欠損した大型の土器で、底部付近はみがかれている。内面の底部付近に炭化物が付着する。3・4は弁状の突起をもつものである。3は無文地に細い粘土紐が貼り付けられ、突起間は凸レンズ状になっていたと考えられる。貼付帯上には撚糸の圧痕が施されている。4は結束第2種斜行縄文が施されたものである。突起部の貫通孔は上下に半截竹管状工具による刺突が加えられ、また、突起の縁に沿うように粘土紐が貼り付けられていたが、多くは剥落している。刺突列は貼付帯上や口唇にもみられる。突起の頂部の口唇にはヘラ状の工具を用いて斜位の刻み目が加えられている。外面には炭化物が付着し、内面の一部ははじけたようになっている。6は上げ底の底部片で、割れ口には炭化物が付着している。1・4は胎土に海綿骨針を含む。これらはサイベ沢Ⅶ式古段階に相当するものである。

2は高台をもつ浅鉢形の土器で、無文である。口縁の1箇所に低い山形の突起があるが、向かい側の突起の有無は欠損のため不明である。口唇の一部には棒状の工具による刻み目がある。内外面ともよくみがかれている。胎土に海綿骨針を含む。5は縄端によると考えられる刺突列と半截竹管状工具を用いて下から突き上げた刺突列の間に縄の圧痕がある。これらは大安在B式に相当すると考えられる。

7は大形の土器で、撚り戻しの原体による縄文と2段の原体による縄文を用いて結束第1種斜行縄

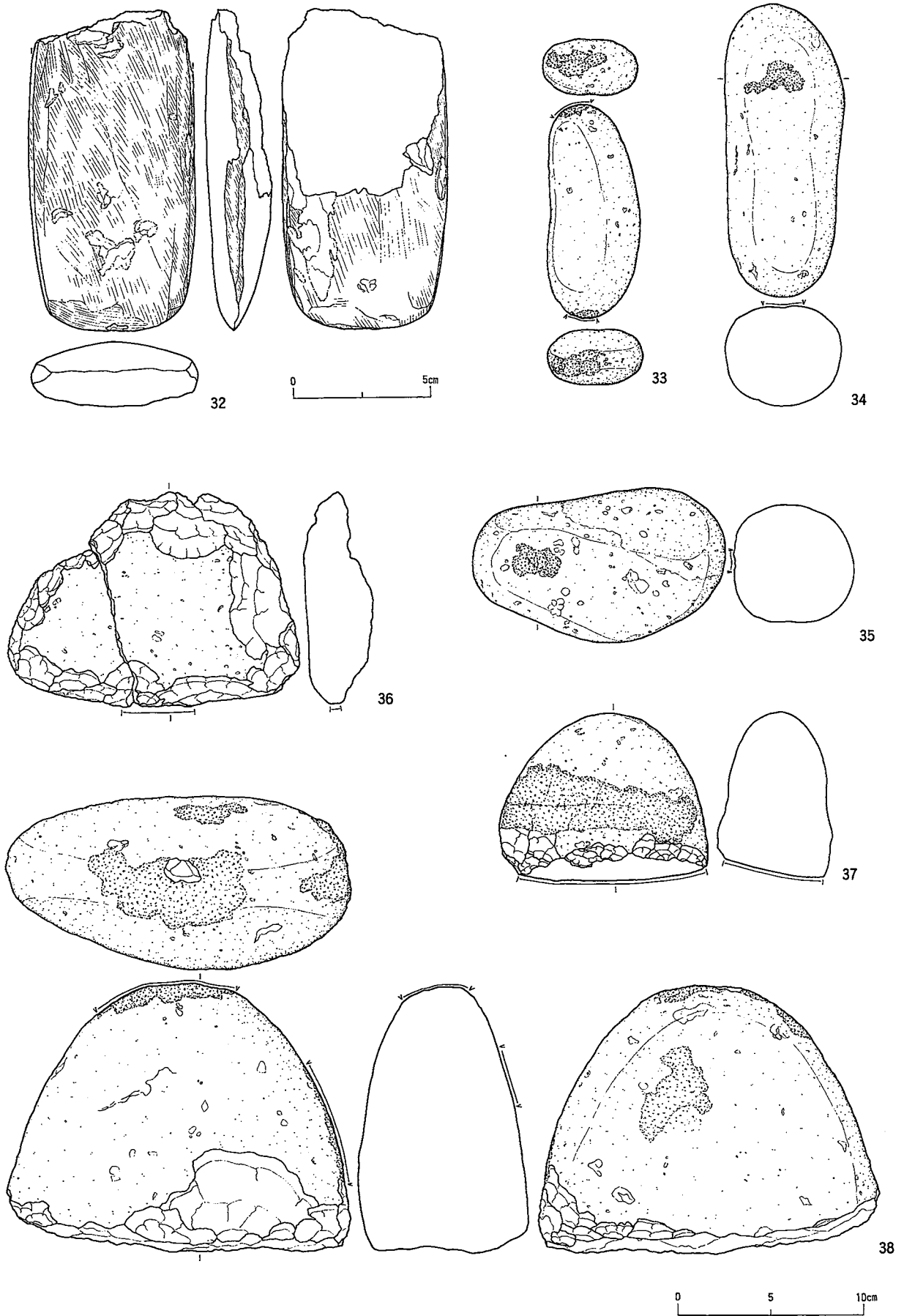


図Ⅲ-39 H-7 出土の土器(2)



図Ⅲ-40 H-7出土の石器(1)

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物



図Ⅲ-41 H-7出土の石器(2)

文が施されている。突起部には貫通孔があり、その周囲に粘土紐が貼り付けられている。口唇には縄の圧痕があり、突起の中間には粘土紐が環状に貼り付けられている。口縁部から胴部上位にかけては弧線状の貼付帯と横走る貼付帯が交互に施されている。貼付帯上には撚糸の圧痕があり、それらは縦位と横位の両方のものがみられる。内面はよくみがかれている。内外面に炭化物が付着する。8は口縁部が外反し、断面は切り出し形になる。口唇直下にはヘラ状工具による斜位の刻み目が加えられている。8～10は斜行縄文が施され、底部付近はみがかれている。11は突起の欠損したもので、口唇に半截竹管状工具による刺突列が加えられた後、直下に貼付帯を2条めぐらせている。上位の貼付帯には撚糸圧痕が加えられている。12は複節の縄文が施された胴部片である。7・12は胎土に海綿骨針を含む。9・10は胎土に黒雲母を含む。これらはサイベ沢Ⅶ式古段階に相当すると考えられる。

(中田)

13～18は石鏃である。14、15は木葉状を呈するもの(ⅠA3)である。13、17は有茎のもの(ⅠA5)である。18は比較的念入りの細部調整が施されている(ⅠA9)。19は有茎石槍(ⅠB1)である。やや厚手で先端を欠損する。20～25はスクレイパーである。20～23は縦長剥片を素材とするもので、20、21は刃部が外反するもの(ⅢB2a)、22、23は刃部が直線を呈するもの(ⅢB2b)である。24は横長剥片を素材とし、刃部が直線を呈するもの(ⅢB3b)である。25は黒曜石のやや厚みのある剥片を用い、側縁を刃部としている(ⅢB9)。26はRフレイク(B1)。不定形な剥片の一部に抉り状の加工が施されるものである。27～29はUフレイク。原石面の残る剥片を素材とするもの(VB2b)である。剥片石器の石材は石鏃の17、18、スクレイパーの24、25が黒曜石、石鏃の16が玄武岩である以外はすべて頁岩である。30、31は石核(VA1)。30は玉髓の小礫を用い、一部を加工するものである。剥離と素材の大きさから石材となる剥片がとられた可能性は無い。31はやや角のある頁岩を素材とし、2ヵ所の平坦面を打面とするものである。ただし図の下部では明瞭な敲打痕が認められるため、たたき石としての用途が主であった可能性が高い。32は石斧(A)。片岩製である。33～35はたたき石である。33は細長い礫の両端に敲打痕があるもの(1)、34、35は楕円礫の表面に敲打痕があるもの(3)である。いずれも敲打痕は弱い。36は半円状扁平打製石器、扁平礫の周縁を打ち欠いて加工されるもの(Ⅲ3a)である。37は北海道式石冠(Ⅷ4)。機能部はよく使われ、円滑である。38は台石である。表面と端部に弱い敲打痕が認められる。

なお、21のスクレイパーの刃部に沿う背腹両面に脂肪光沢が認められる。

時期 床面付近から出土した土器から、縄文時代中期前半サイベ沢Ⅶ式古段階のものとみられる。

(立田)

H-1・5 掘上土 (図Ⅲ-42～48、表1～3、図版42～45)

位置 O-21～23、P-20～23、Q-20～22、R-20～22、S-20～22

規模 1751×(850)

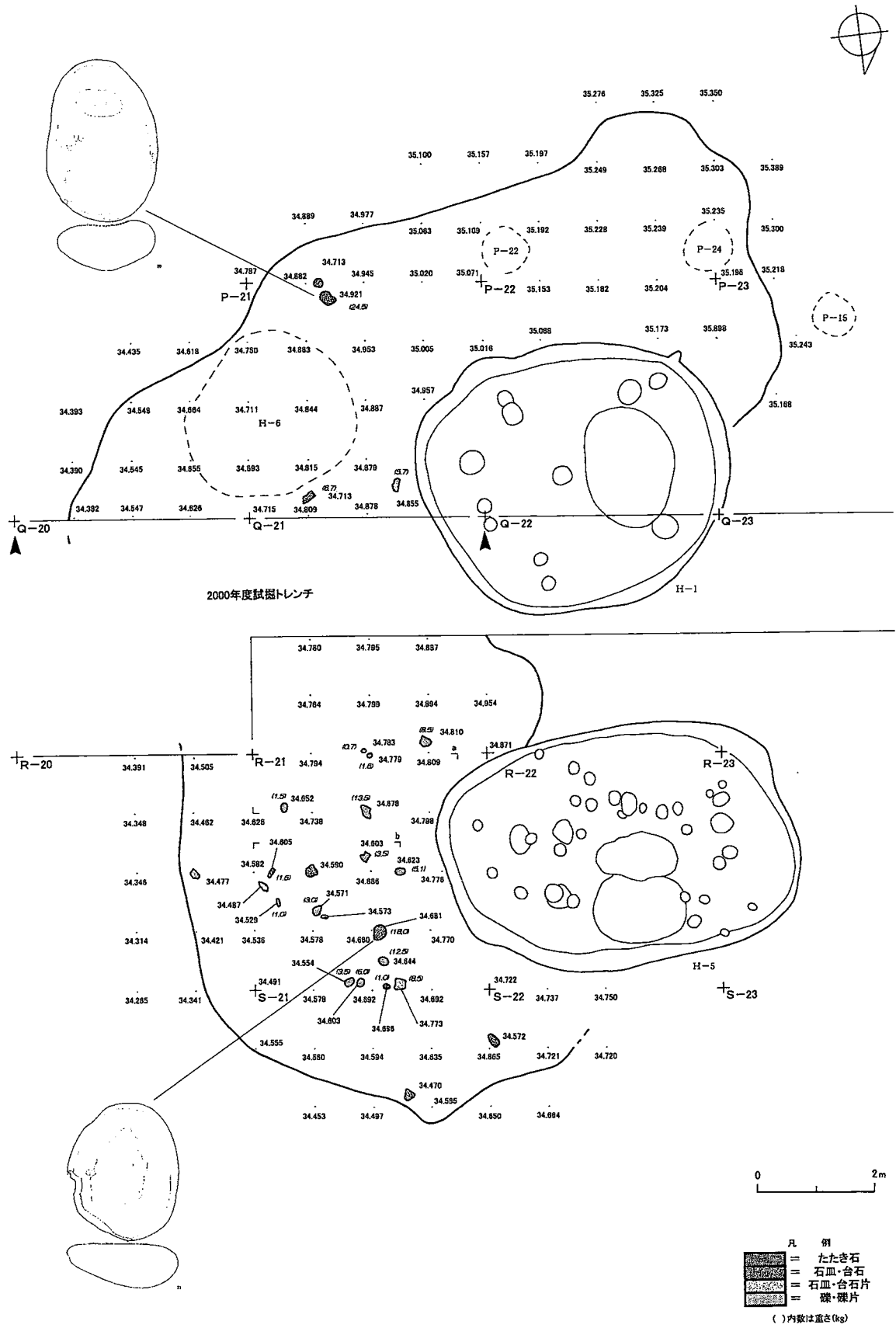
長軸方向 (N-20°-W)

確認・調査 Ⅲ層を調査中、褐色土の広がりを確認した。褐色土は沢に向かう斜面の下位に広がっており、H-1、5を境界として緩斜面側に分布していた。またこの分布と重なって、石皿等の礫石器、土器の集中などが確認されたため、住居跡との関連、時期差を明らかにするため、遺構として扱うこととした。しかし、H-1、5の先後関係は土層観察からは不明であり、また褐色土の範囲からも峻別できなかったため、1つの遺構として扱った。

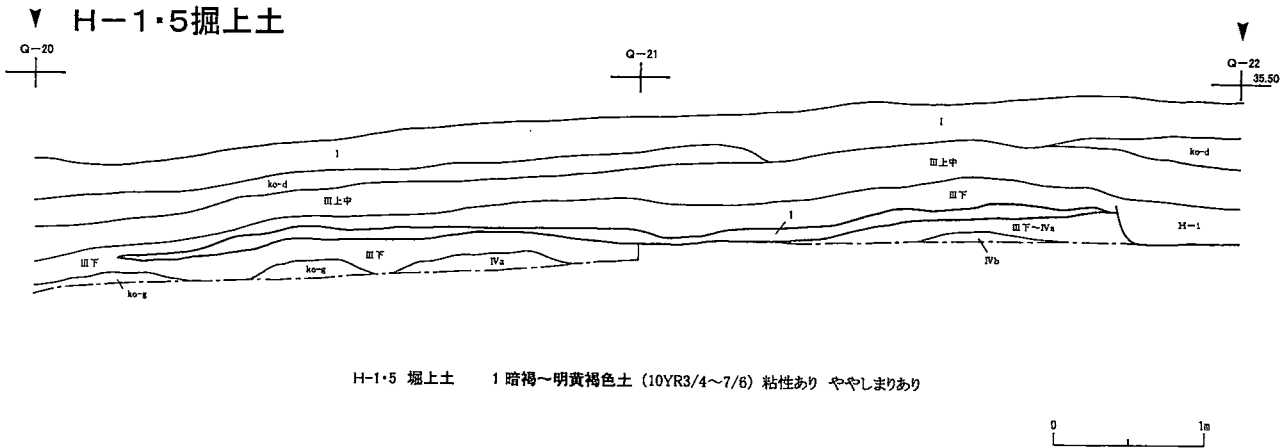
(立田)

遺物 1は直線的に立ち上がる器形で、底面は欠損している。4箇所に突起をもつと考えられる。斜行縄文の施された後に2本一組の細い粘土紐が貼り付けられている。粘土紐の上には2条の撚糸圧

H-1・5掘上土



図Ⅲ-42 H-1・5掘上土(1)



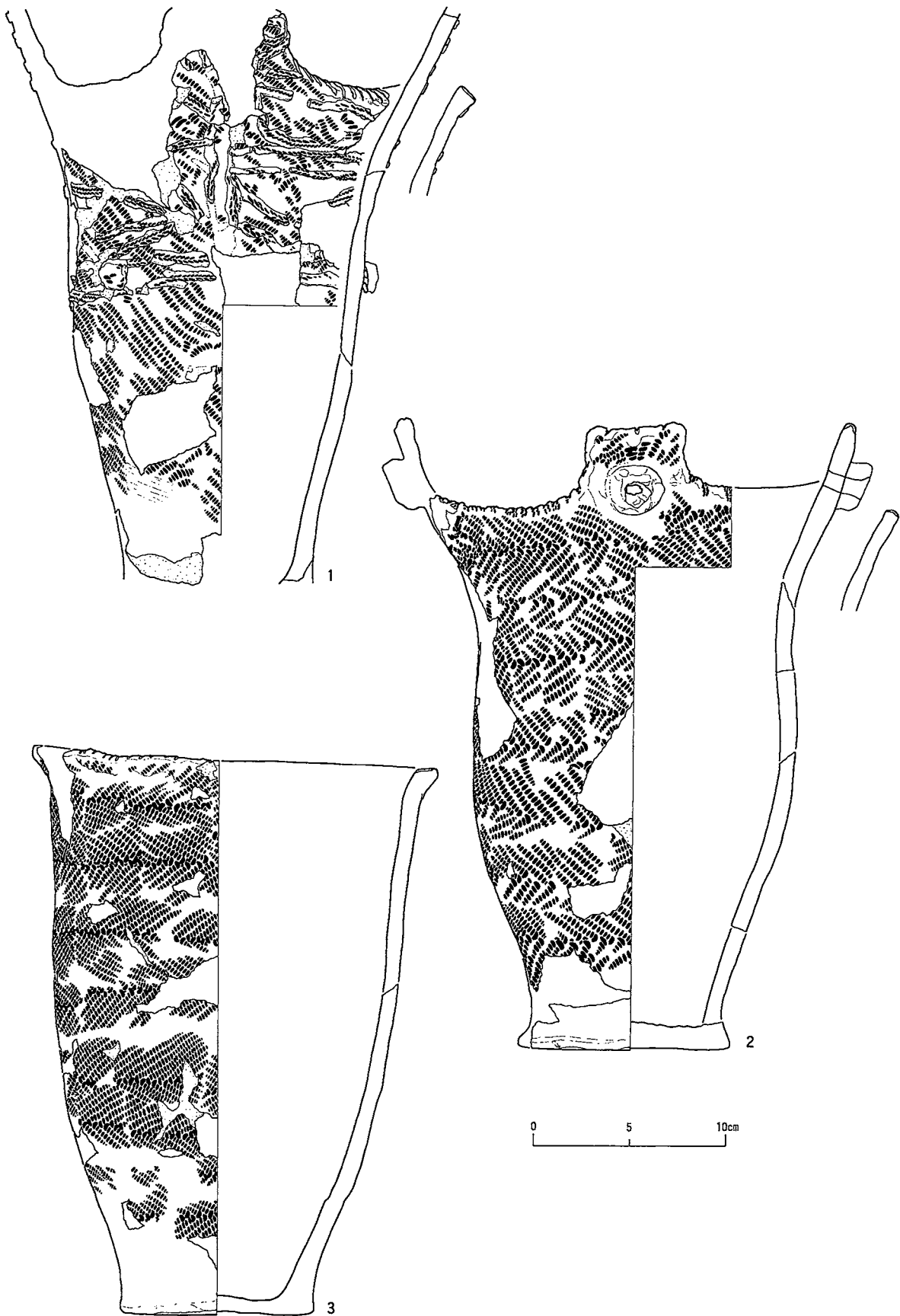
図Ⅲ-43 H-1・5掘上土(2)

痕がある。文様帯は横走る粘土紐と突起の下に垂下する粘土紐によって区画されている。前者の上にはボタン状の貼り付けが加えられている。口唇にはヘラ状工具による刻み目がある。2～4、17は結束第1種羽状縄文が施されたものである。4は外面が磨耗している。2は台形状の突起の下位にうがたれた貫通孔をふちどるように環状の貼り付けが加えられている。口唇には縄の圧痕、突起の頂部にはヘラ状工具による刻み目がある。3は口縁部が外反し、幅の広い口唇には斜位の刻み目がある。4は口縁部が大きく外反する器形で、2種類の突起がそれぞれ向かい合う位置にある。実測図の正面に示したものは2個一対の短い棒状突起の下に粘土が貼り付けられて動物の頭部のような形をしている。口唇にはヘラ状工具による斜位の刻み目がある。内外面に炭化物が付着している。5は山形の突起をもつもので、結束第2種羽状縄文が施されている。口縁部の内面には炭化物が付着している。4・5はわずかに上げ底になっている。6～10は斜行縄文が施されている。6は山形の突起の下位に瘤状の粘土を貼り付けた後、外面側から穿孔している。底部は外側に張り出す。口唇には縄の圧痕がある。外面の口縁部から胴部にかけて炭化物が付着している。7は肥厚する突起をもつもので、底面は欠損している。口縁部から胴部上位にかけては斜行縄文が施され、一部ミガキによって消されている。胴部以下は縦方向にみがかれている。8は胴部下位にふくらみのあるもので、底部は欠損している。2種類の突起をもつ可能性がある。突起上には撚糸の圧痕があり、その下に粘土紐が横位に貼り付けられている。口唇には棒状の工具による刻み目がある。内外面に炭化物が付着する。9は3箇所上山形の突起があると考えられるもので、口唇には撚糸の圧痕がある。底部は外側に張り出している。9・10の胴部下半はみがかれている。11～13は結束第2種の縄文が施されたものである。11は棒状の突起をもつ。12・13の口唇には縄の圧痕がある。14は低い突起の下部に貫通孔のあるもので、内外面とも一部に炭化物が付着している。17は結束第1種羽状縄文、18は綾絡文が施されている。18の底部は外側に張り出す。外面には炭化物が付着している。6・7・10・18・19の胎土には海綿骨針を含む。これらはサイベ沢Ⅶ式古段階に相当すると考えられるが、7～9のように新しい様相をもつものもある。

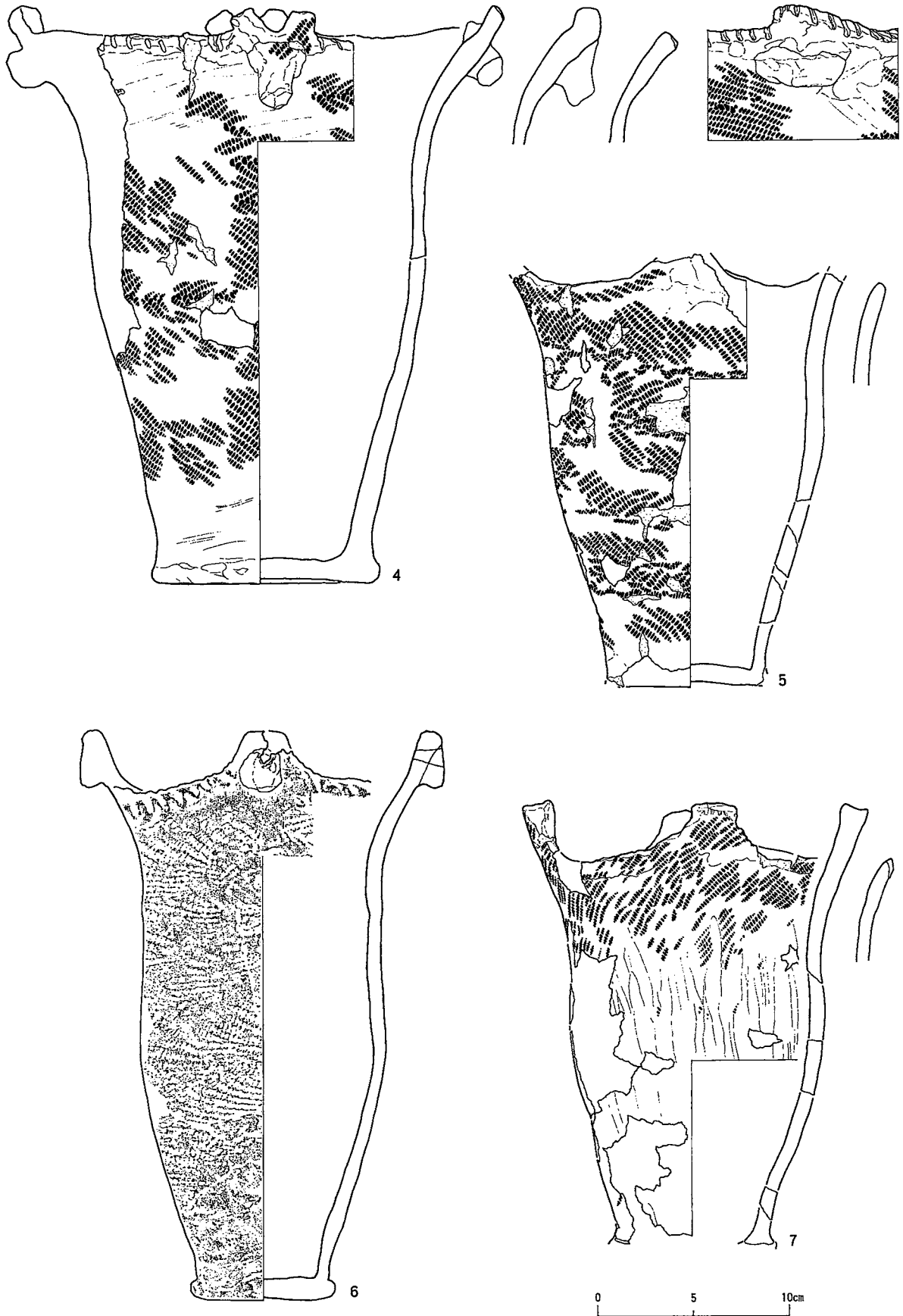
16は口縁が折り返されたもので、口唇直下には刺突がある。大安在B式に相当すると考えられる。
(中田)

20、21は石皿(X)である。扁平磔を用い、平坦面の一部を使用するものである。20の使用面は円形を呈し、明瞭でややくぼんでいる。21の使用面は平坦で円滑である。

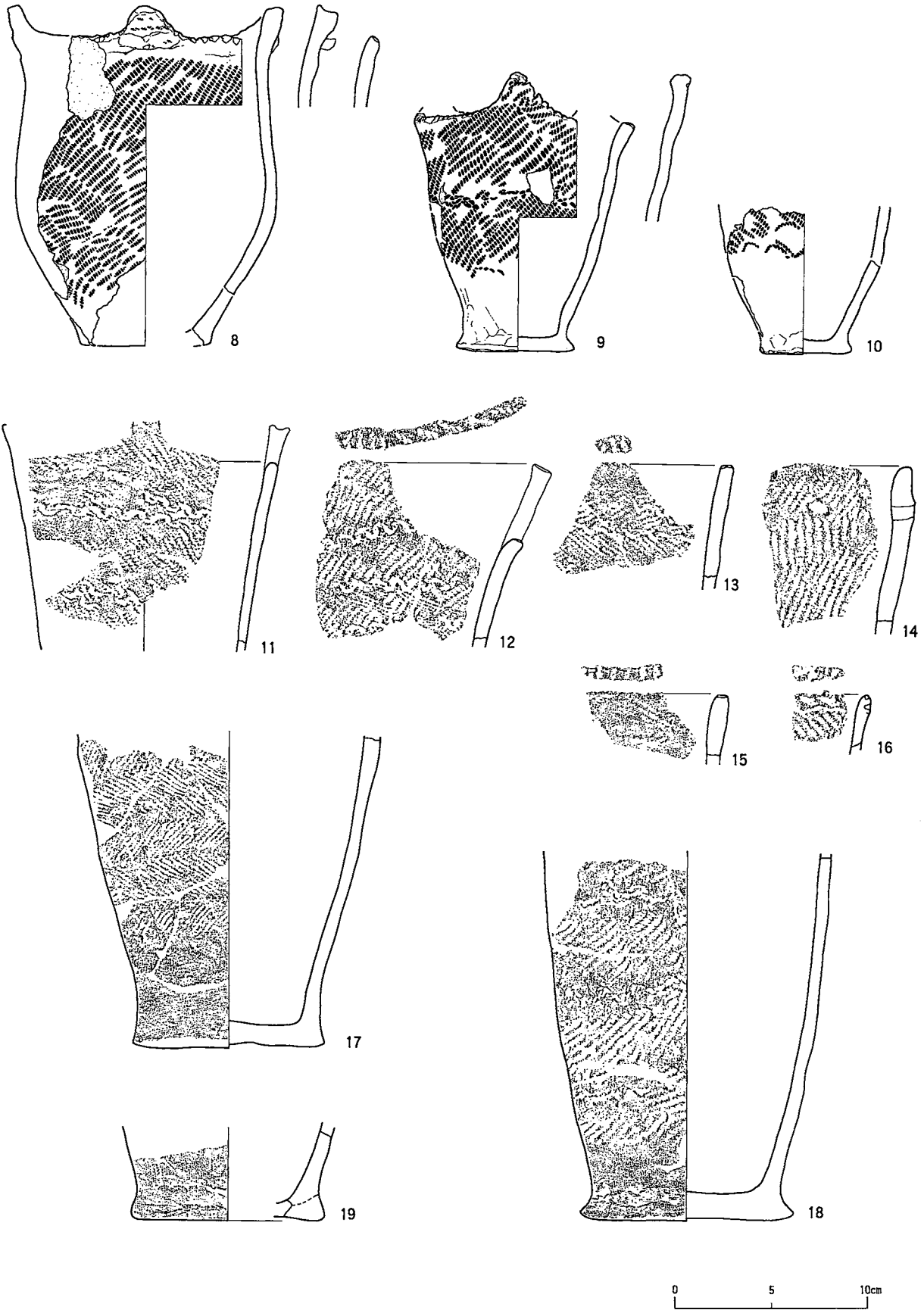
時期 上面出土の遺物から、縄文時代中期前半のものと思われる。
(立田)



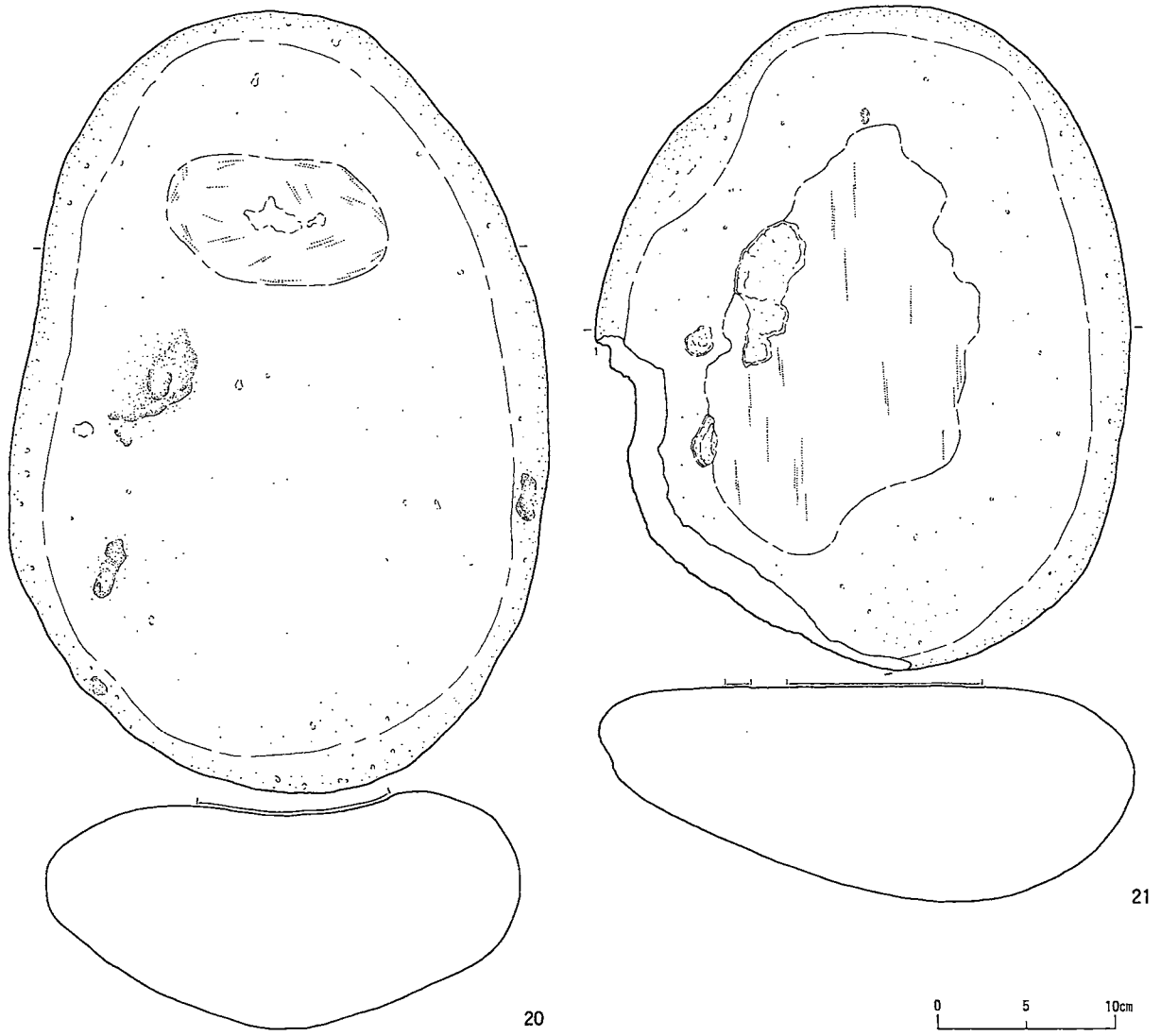
図Ⅲ-45 H-1・5 掘上土出土の土器(1)



図Ⅲ-46 H-1・5 掘上土出土の土器(2)



図Ⅲ-47 H-1・5 掘上土出土の土器(3)



図III-48 H-1・5掘上土出土の石器

(2) 土墳墓

P-4 (図Ⅲ-49、表1・2・4、図版17・46)

位置 M-21

規模 148×112/122×92/58

長軸方向 N-119.5° -W

平面形 隅丸方形

確認・調査 M-21区において、Ⅲ層を掘り下げていたところ、黒褐色土の落ち込みとその中心付近に焼けた2枚の扁平礫を確認した。土墳であることを想定し、長短軸にトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、平坦な墳底と急に立ち上がる壁を確認し、土墳であることがわかった。覆土は4層に区分した。2～4層は埋め戻しとみられる黄褐色土ブロックを含む黒褐色土である。

遺物 上面の被熱礫2点の他、覆土から土器12点、礫4点が出土している。また上面の礫はe-f方向の断面から、正立した状態であった可能性がある。(立田)

1は覆土から出土したⅢ群a類の胴部片で、斜行縄文が施されている。内面には炭化物が付着している。(中田)

時期 周囲で出土する遺物から、縄文時代中期前半のものとみられる。(立田)

P-6 (図Ⅲ-52～53、表1～5、図版17・18・45・46)

位置 M-22

規模 196×168/164×128/62

長軸方向 N-97.5° -W

平面形 隅丸方形

確認・調査 Ⅲ層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みは平成12年度調査によるトレンチの方向に延びていたため、トレンチの壁面を精査したところ断面の輪郭を確認した。トレンチにかかった部分を掘り下げ、急に立ち上がる壁、平坦な墳底を確認して土墳であることがわかった。さらに北、西方向にトレンチを追加してV層まで掘り下げた。その結果、この落ち込みは2基の土墳の重複であることがわかった。平面形が隅丸方形を呈し、やや深い土墳が浅い皿状の土墳(P-8)を壊して構築されている。前者が本遺構である。墳底は平坦で壁は急である。

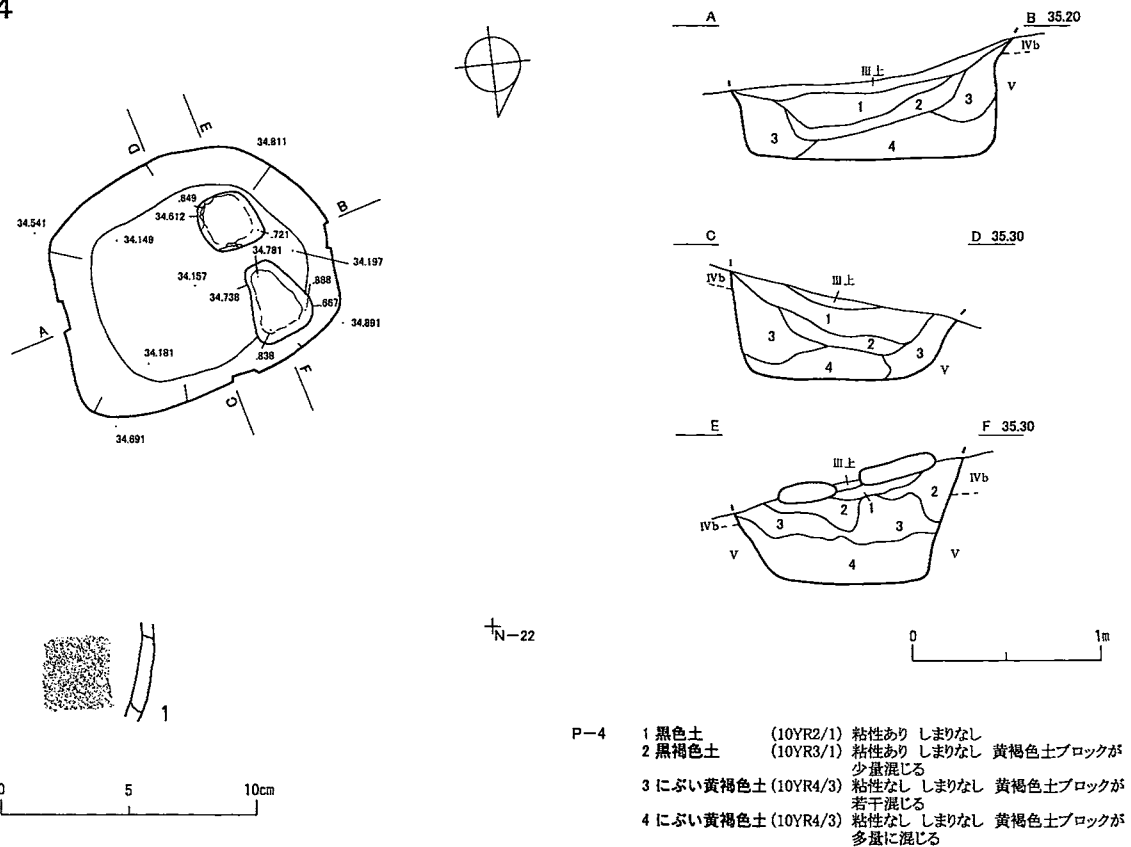
覆土は7層に区分した。4～6層は埋め戻しとみられる汚れた土である。7層は成因不明の黒褐色土である。

遺物 北西側の検出面において、半円状扁平打製石器、たたき石、礫がまとまって出土している(図Ⅲ-50)。また覆土の中位からは土器の細片が目立って出土している。また、焼土を検出した覆土1層上面から大型の礫が2点出土している。(立田)

1～6は覆土から出土したものである。1は底部の欠損する小型の土器で、小さな突起が3つあったと考えられる。無文で、内外面ともみがかれている。胎土に海綿骨針を含む。2・3は同一個体と考えられる。3は胴部下位にふくらみがあり、底部は上げ底である。斜行縄文が施されているが、施文は浅い。4は磨耗しているが、口唇にも縄文が施されている。5は口唇に縄の圧痕が施されている。6は口唇直下に横走る2条の沈線がめぐる。胴部には曲線による沈線文の一部がみられる。2～5は胎土に径数ミリ以下の礫や砂粒を多量に含む。これらは見晴町式に相当すると考えられる。

(中田)

P-4



図Ⅲ-49 土墳墓 (P-4) と出土遺物

7~10は石鏃である。7、8は木葉状 (IA 4)、9は有茎のもの (IA 5) である。10は細分不能の破片である (IA 9)。11は石錐 (II 2)。形態から石鏃の転用品の可能性もある。12はスクレイパーである。縦長剥片を用い、刃部が直線状を呈するもの (III B 2 b) である。13はRフレイク (V B 1) である。なお10、11の背腹には被熱によるとみられる円形のはじけが認められる。剥片石器の石材は7が黒曜石、8が玄武岩である他はすべて頁岩である。14、15はたたき石である。14は礫の端部に敲打痕のあるもの (VIII 1)。珪岩の亜角礫を素材とする。15は礫の平坦面に敲打痕のあるもの (VIII 3)。楕円礫の長軸上に2カ所の敲打痕がある。16、17は墳口で出土した半円状扁平打製石器である。いずれも礫をそのまま素材とし、ほとんど加工されないもの (VIII 3) である。

時期 覆土から出土している遺物から、縄文時代中期前半、見晴町式のものともみられる。(立田)

P-7 (図Ⅲ-52、53、表1~5、図版18・46)

位置 L-22-c・d、L-23-a・b

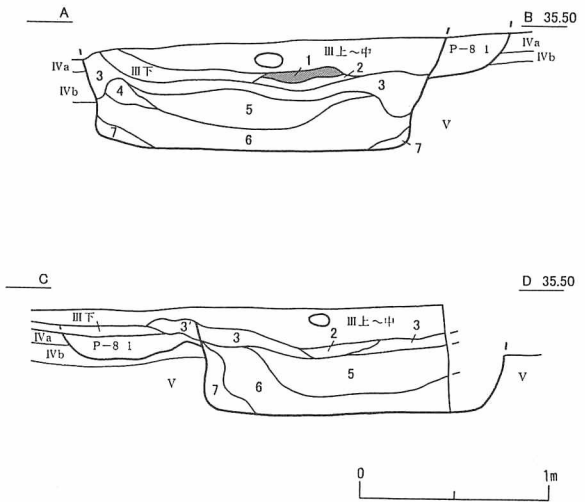
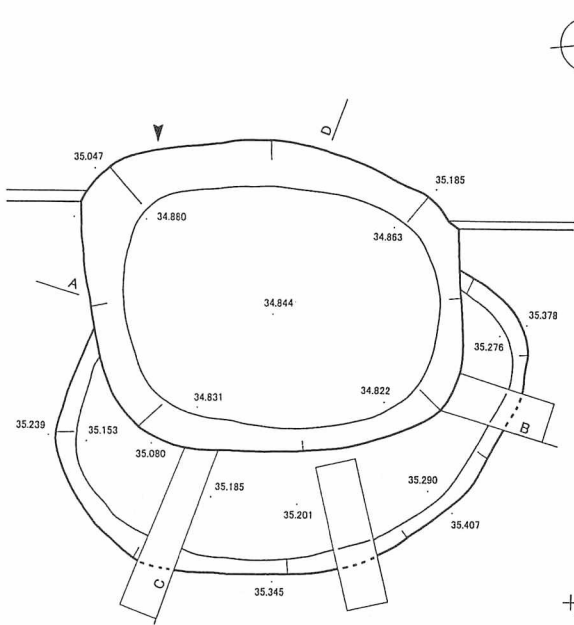
規模 318×(286)/284×(162)/58

長軸方向 N-171° -W

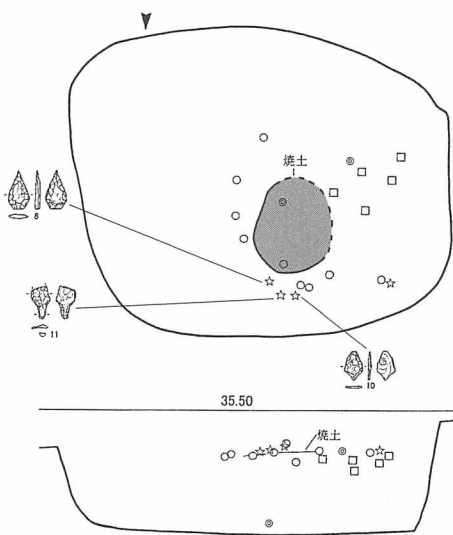
平面形 不整楕円形

確認・調査 IV層上面で灰褐色土が径約2.5mの範囲に広がっていたので、傾斜の方向とそれに直交する方向にトレンチを入れ、V層の立ち上がりを確認した。土層観察用のあぜの断面を精査した結果、

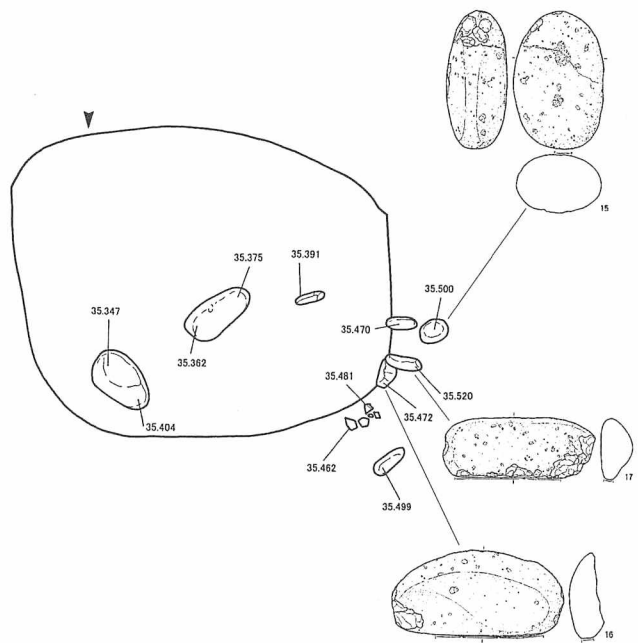
P-6



- ↑N-23 P-6
- 1 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性あり しまりあり 焼土
 - 2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし しまりあり 灰褐色土が若干混じる
 - 3 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりあり 黄褐色土粒子が多く混じる
 - 4 黄褐色土 (10YR7/8) 粘性あり しまりなし 黒色土ブロックが若干混じる
 - 5 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし ややしまりなし 黄褐色土・黒色土ブロックが多く混じる
 - 6 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし ややしまりなし 黄褐色土ブロックが多く混じる
 - 7 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし しまりなし



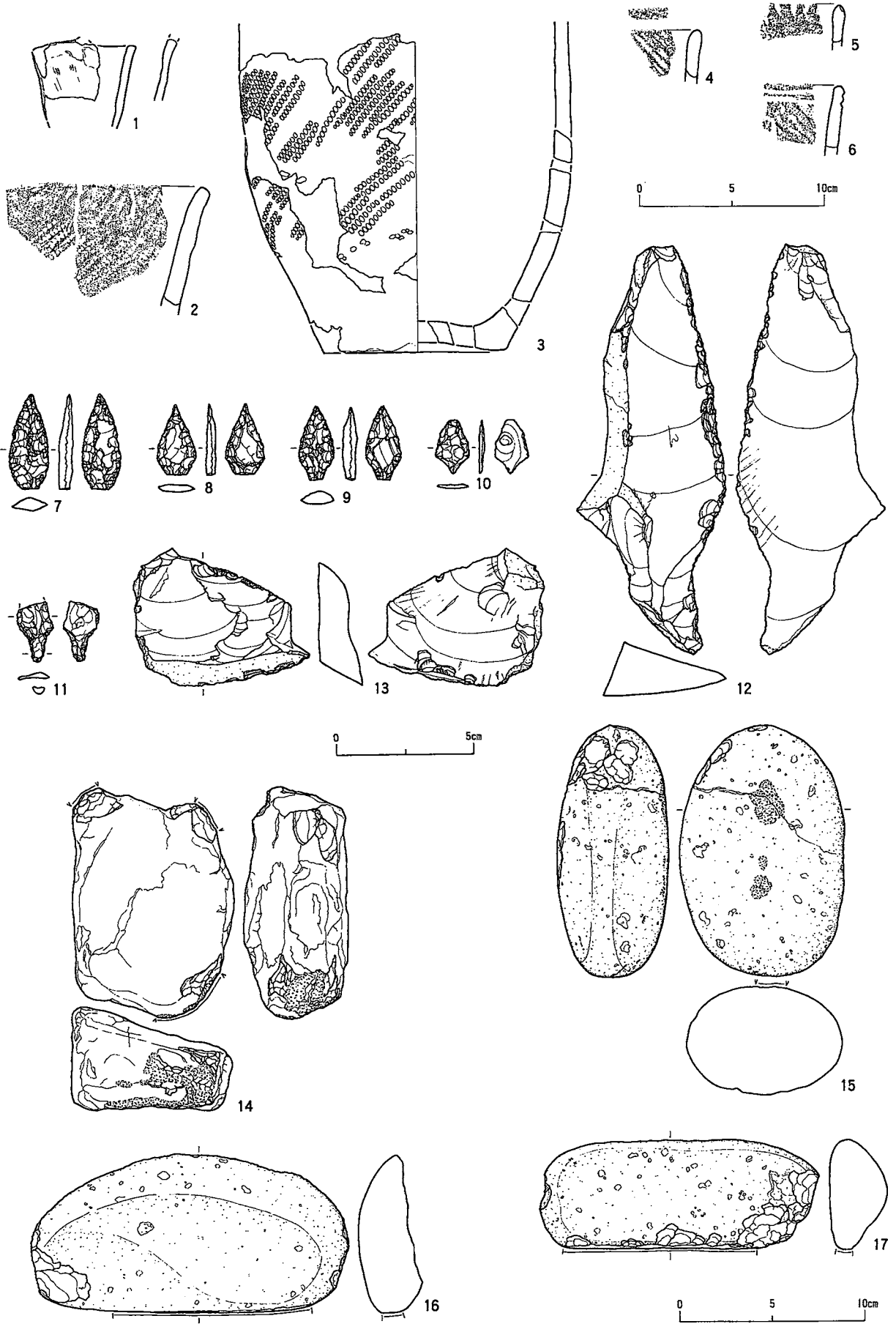
P-6覆土遺物出土状況



P-6竈口・上面遺物出土状況

図Ⅲ-50 土壌墓 (P-6)

III 遺構と遺構出土の遺物



図III-51 土墳墓(P-6)出土の遺物

P-7がH-2の覆土を掘り込んで構築されたと考えられるが、東側の壙底や壁の立ち上がりを調査している時はこのことに気づかず、立ち上がりの部分を掘り過ぎてしまった。覆土は黄褐色土粒や炭化物を含み、埋め戻されたものと考えられる。中央部では覆土下位で柱穴状ピット（SP-1）が検出された。SP-1の北に隣接して焼土（F-1）があり、SP-1に向かって流れ込んでいた。壙底直上の覆土26層を採取してフローテーションを行った結果、アカザ属の種子、クリ子葉の破片、クルミ属の核果破片、不明種子が検出された（第V章2参照）。

遺物の出土状況 北側の覆土中位から図Ⅲ-53-1の土器と礫が60×40cmの範囲にまとまって出土した。土器は内面を上にしたものが多かった。北側の覆土下位からたたき石（図Ⅲ-53-5）と北海道式石冠(6)が隣り合って出土した。南側の覆土下位からは台石(7)が出土した。

遺物 1・2は覆土、3は南西部の壙底直上から出土した。1は山形の突起をもつ無文の土器で、底部は外側に張り出す。頂部は肥厚し、左右からつまみあげられたようになっている。頂部を除いた口唇にはヘラ状の工具により浅い刻み目が加えられている。内外面ともよくみがかれる。外面の口縁部から胴部中位と内面の胴部下位には炭化物が付着している。2は口唇に縄文が施されている。3は斜行縄文が施されたものである。2・3の内面には炭化物が付着している。これらはサイベ沢Ⅶ式新段階に相当すると考えられる。 (中田)

4はUフレイク。不定形な剥片を素材とするもの（VB2c）である。5はたたき石。砂岩の歪な礫を用い、周縁に敲打痕があるもの（Ⅶ2）である。6は北海道式石冠（Ⅷ4）である。小型であるが、機能部には擦痕が認められるためここに分類した。7は台石である。やや扁平な礫の表裏中央に敲打痕があるもので、大きさから台石（X）とした。 (立田)

時期 出土遺物から縄文中期前半、サイベ沢Ⅶ式の時期と考えられる。 (中田)

P-25 (図Ⅲ-54~55、表1・2・5、図版18・47)

位置 M-23-a・b

規模 86×62/82×60/36

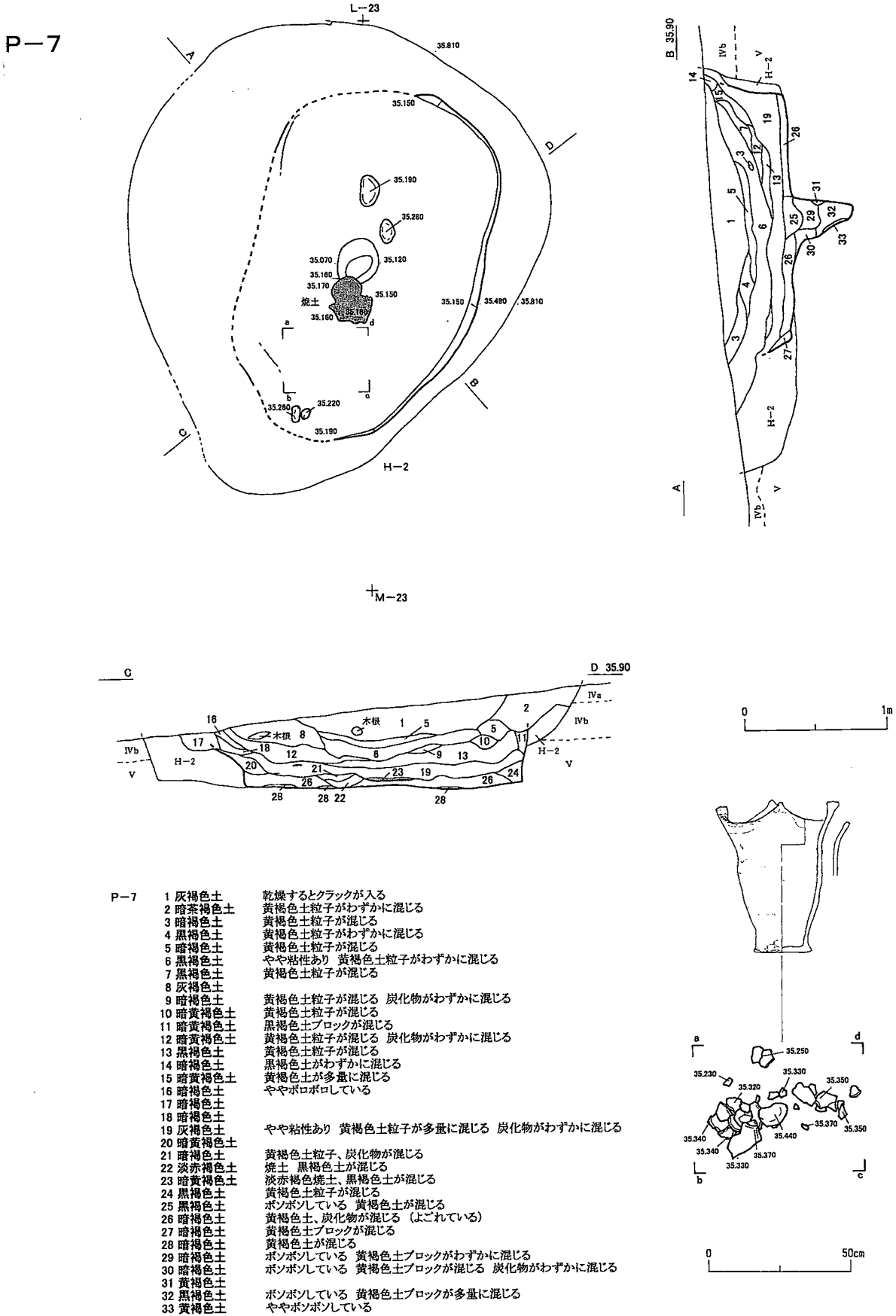
長軸方向 N-97.5° -W

平面形 楕円形

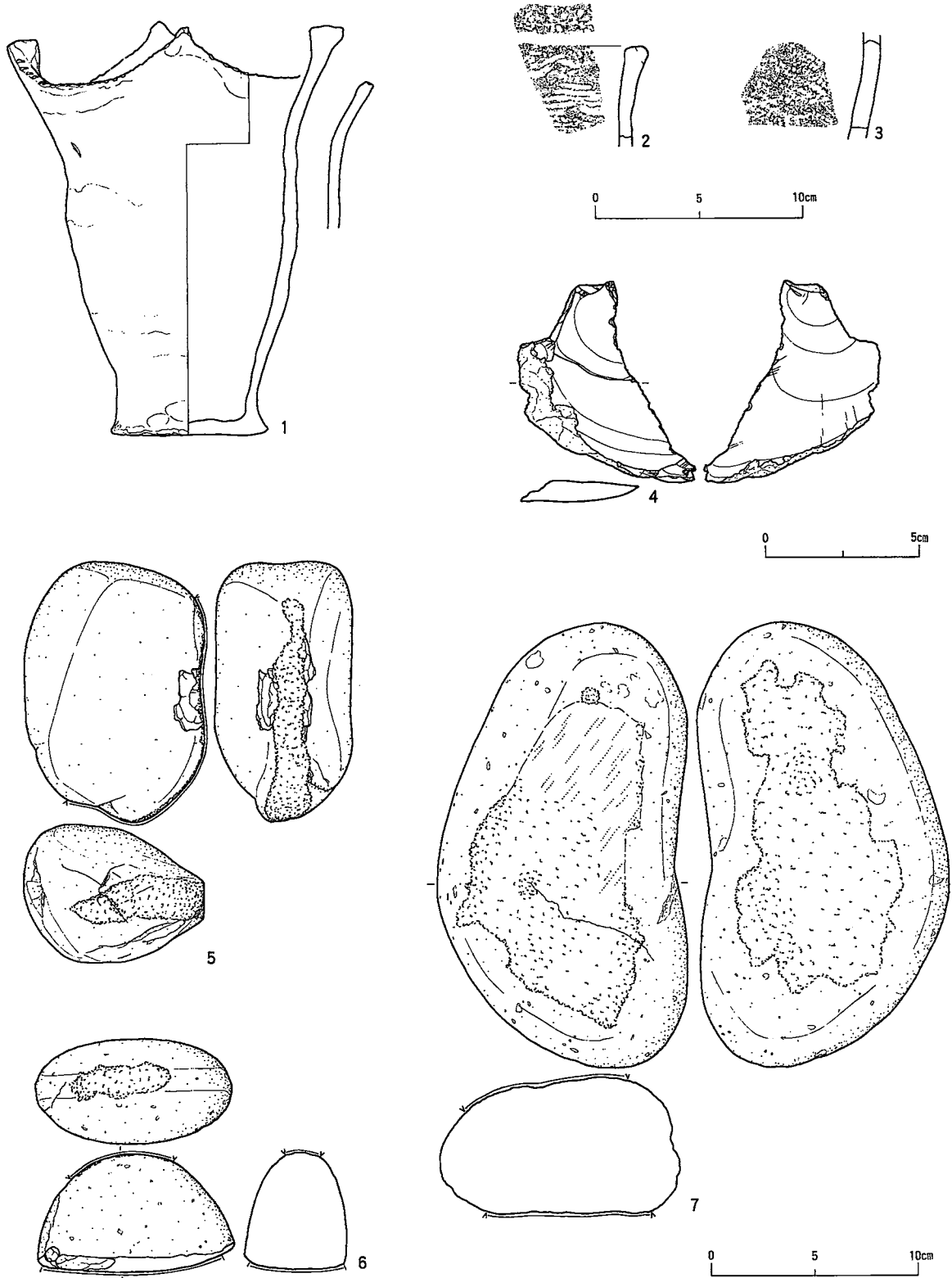
確認・調査 平成12年度トレンチを精査中、壁面に黒褐色土の落ち込みを確認した。短軸方向と想定される北西方向にトレンチを設定して掘り下げた。その結果壙底、壁を確認して土壙であることがわかった。平面形は楕円形、壙底は平坦、壁は中位まで緩やかで中位から壙口までは急である。断面形は椀状を呈する。覆土は11層に区分した。3層以下は埋め戻しとみられる汚れた土の堆積である。覆土7層から出土した炭化物は¹⁴C補正年代で4380±40 y. B. P. (Beta-163034) の結果が得られている。

遺物 覆土からⅢ群a類土器2点、礫2点が出土している。その他壙口から出土した半円状扁平打製石器（1、2）がある。いずれも扁平な礫をそのまま素材とし、ほとんど加工されていない（Ⅷ3d）が、機能部の幅は比較的広く、よく使われている。

時期 付近から出土する遺物、また放射性炭素年代の結果から縄文時代中期前半のものとみられる。 (立田)

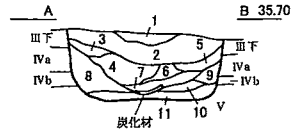
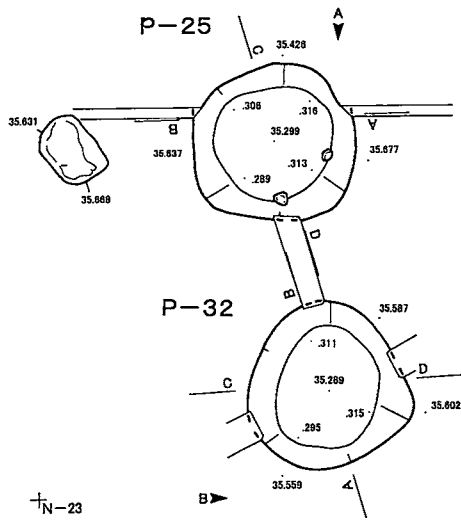


図III-52 土墳墓 (P-7)

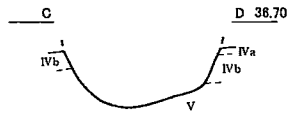
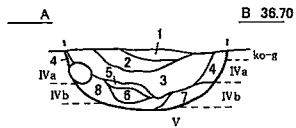


図Ⅲ-53 土墳墓(P-7)出土の遺物

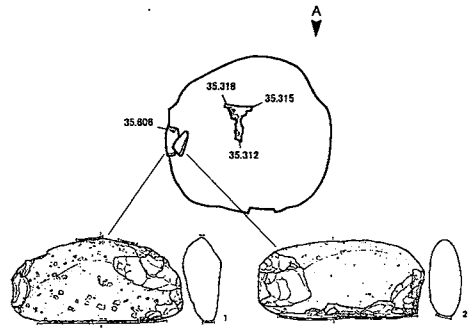
P-25-32



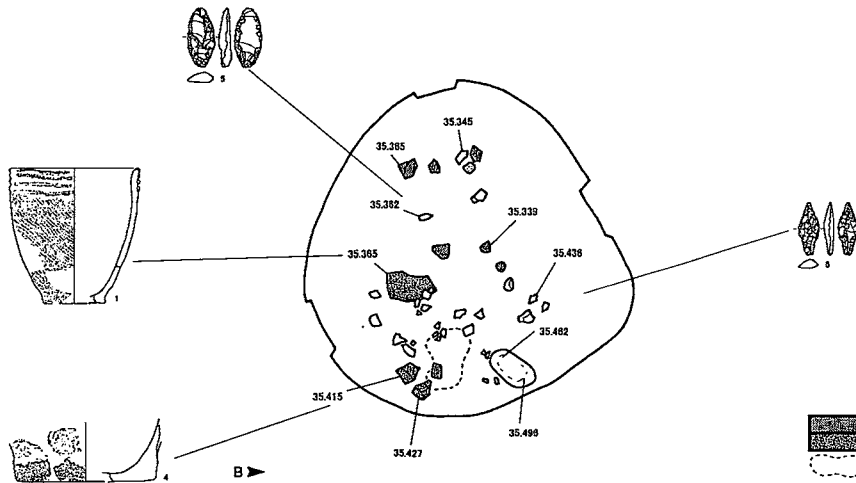
- P-25
- | | | | | |
|---------|-----------|------|---------|-----------|
| 1 黒褐色土 | (10YR2/2) | 粘性なし | しまりなし | III層上位相当 |
| 2 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性なし | しまりなし | III層中位相当 |
| 3 褐灰色土 | (10YR4/1) | 粘性なし | しまりなし | 暗褐色土が若干混 |
| 4 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性なし | しまりなし | 灰褐色土が若干混 |
| 5 褐灰色土 | (10YR4/1) | 粘性なし | ややしまりあり | 暗褐色土が斑 |
| | | | | 状に多く混じる |
| 6 褐灰色土 | (10YR4/1) | 粘性なし | ややしまりあり | 暗褐色土が斑 |
| | | | | 状に少混じる |
| 7 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロックが |
| | | | | 少混じる |
| 8 褐灰色土 | (10YR4/1) | 粘性なし | ややしまりあり | 黄褐色土ブロック |
| | | | | が多く混じる |
| 9 灰黄褐色土 | (10YR5/2) | 粘性なし | しまりなし | 暗褐色土・黄褐色 |
| | | | | 土ブロックが多く混 |
| 10 黒褐色土 | (10YR3/2) | 粘性あり | ややしまりあり | 黄褐色土ブロック |
| | | | | が多く混じる |
| 11 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性あり | ややしまりあり | 黄褐色土ブロック |
| | | | | が多く混じる |



- P-32
- | | | | | |
|---------|-----------|--------|---------|--------------|
| 1 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土粒子が多く混 |
| | | | | じる |
| 2 黒色土 | (10YR2/1) | やや粘性あり | しまりなし | |
| 3 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロック、炭化物 |
| | | | | 片が多く混じる |
| 4 褐灰色土 | (10YR4/1) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロックが斑 |
| | | | | 状に多く混じる |
| 5 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性なし | ややしまりあり | 黄褐色土粒子が多く混 |
| | | | | じる |
| 6 明黄褐色土 | (10YR7/6) | 粘性あり | ややしまりあり | 灰白色岩石片、灰褐色 |
| | | | | 土ブロックが多く混 |
| 7 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性あり | しまりなし | 黄褐色土粒子、炭化物 |
| | | | | 片が多く混じる |
| 8 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土粒子が多く混 |
| | | | | じる |



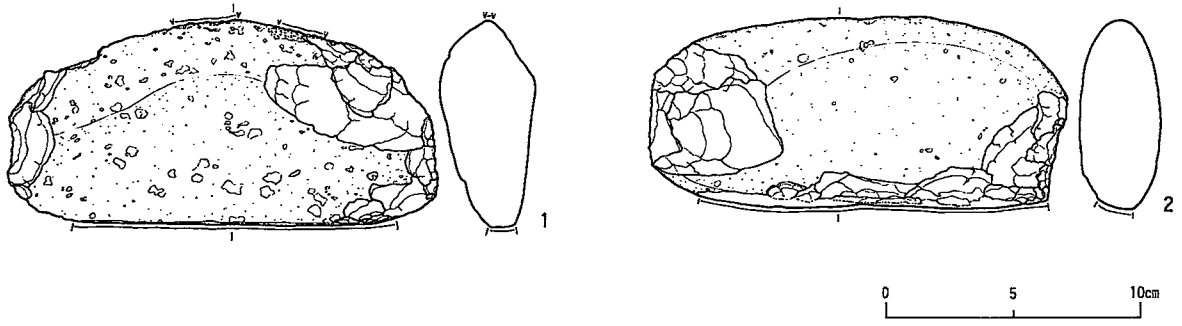
炭化材(覆土7層)及び墳口遺物出土状況



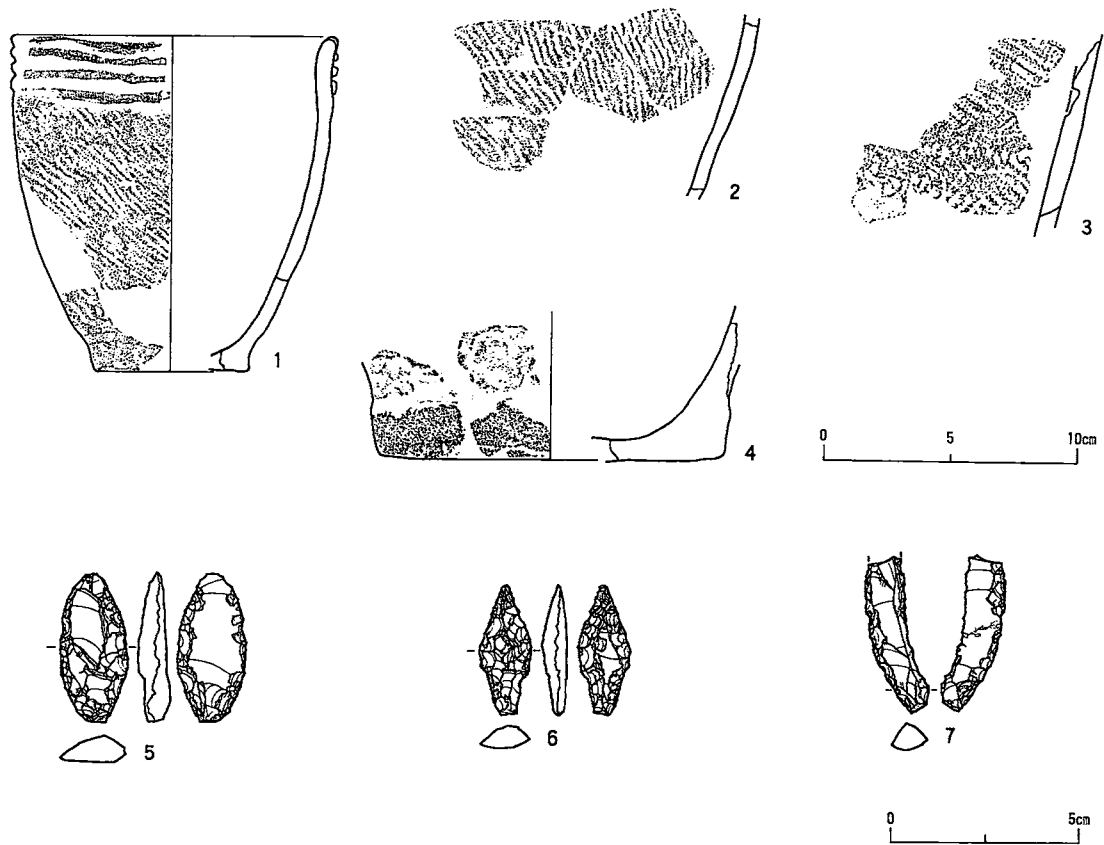
P-32覆土遺物出土状況

図III-54 土墳墓 (P-25・32)

P-25



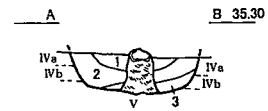
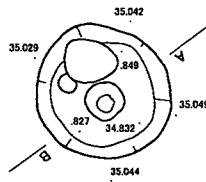
P-32



図Ⅲ-55 土壙墓 (P-25・32) 出土の遺物

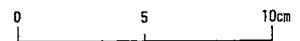
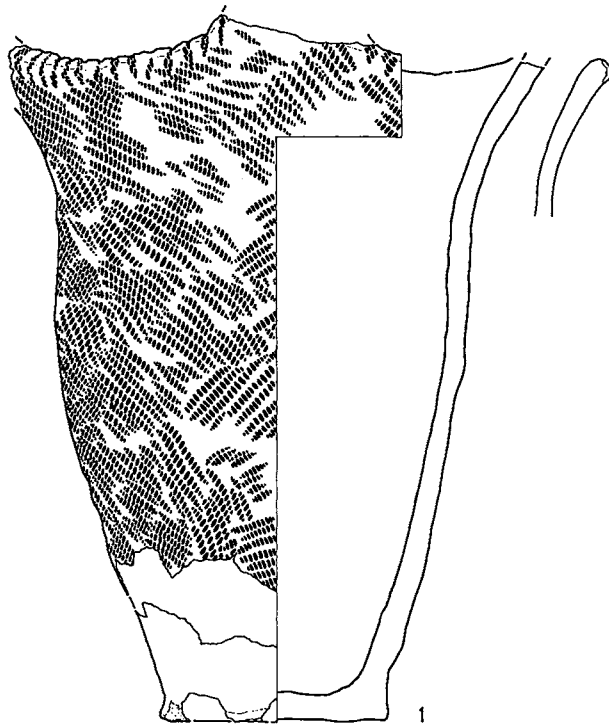
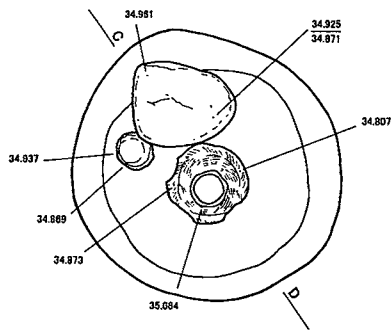
P-15 \uparrow P-23

▼



- P-15
- 1 黒褐色土 (10YR3/1) やや粘性あり しまりなし 黄褐色土粒子が若干混じる
 - 2 黒褐色土 (10YR3/1) やや粘性あり ややしまりあり 黄褐色土粒子が多量に混じる炭化物が若干混じる
 - 3 黒色土 (10YR2/1) 粘性あり ややしまりあり 層界付近に黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる

▼



図Ⅲ-56 土壙墓 (P-15) と出土の遺物

P-32 (図Ⅲ-54・55、表1・2・4・5、図版19・47)

位置 M-23-b

規模 88×68/87×52/33

長軸方向 N-168.5° -W

平面形 不整楕円形

確認・調査 IV層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。長軸方向にトレンチを設定してV層まで掘り下げると、椀状を呈する壁、壙底を確認して土壌であることがわかった。平面形は不整な楕円形を呈する。覆土は8層に区分した。3層以下が埋め戻しとみられる汚れた土である。(立田)

遺物 覆土3層下部付近から、土器の細片、安山岩の剥片、白色を呈する岩片が多く出土している。

1～4は覆土から出土した。1・2は同一個体である。1は横走する4条の粘土紐が貼り付けられ、貼付帯の下位には斜行縄文が施されている。内外面に炭化物が付着する。4は大型の底部片で、器面の剥落が激しい。これらの土器は胎土に小礫を多量に含み、1・2は海綿骨針も含む。サイベ沢Ⅶ式に相当すると考えられる。(中田)

5、6は石鏃である。5は木葉状のもの(IA4)である。やや厚手で、素材剥片の周縁にのみ加工されるものである。6は有茎のもの(IA5)である。7は石錐。棒状に加工されるもの(IIA2)である。(立田)

時期 覆土出土の遺物から縄文時代中期前半、サイベ沢Ⅶ式のものともみられる。(立田)

P-15 (図Ⅲ-56、表1～4、図版19・47)

位置 P-23-a・d

規模 70×54/74×54/20

長軸方向 N-137° -W

平面形 円形

確認・調査 V層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心には土器の底部付近が現れていた。土器が埋設されている可能性を想定して半截すると、倒立状態の土器が出土した。加えて椀状の断面形を確認し、土壌であることがわかった。平面形は円形である。覆土は3層に区分した。2、3層は埋め戻しによる堆積である可能性が高い。(立田)

遺物 壙底より倒立状態のⅢ群a類土器が出土している。その底部片は土壌の東側に添えられるように出土している。また土器の南側からは扁平な礫が出土している。(立田)

1は口縁部の外反する土器で、4つあった突起は打ち欠かれた可能性がある。口唇直下は肥厚し、縄の圧痕が加えられている。斜行縄文が施され、図示しなかった面には胴部上位の一部に綾絡文がある。口縁部の一部は赤く変色し、内面にははじけが認められる。二次的に加熱されたと考えられる。外面の口縁部から胴上部までと内面には炭化物が付着している。2は壙底から出土した、1とは別個体の口縁部片で、外面に炭化物が付着している。これらはサイベ沢Ⅶ式新段階に相当すると考えられる。(中田)

時期 壙底から出土した土器から縄文時代中期前半サイベ沢Ⅶ式のものともみられる。(立田)

(3) フラスコ・ピット

P-3 (図Ⅲ-57~62、表1~5、図版19・20・47~50)

位置 P-19-b・c・d、P-20-b

規模 258×214/(206)×178/78

長軸方向 N-136°-W

平面形 不整楕円形

確認・調査 Ⅲ層下位で黒色土の落ち込みが確認されたので、傾斜と直交する方向にあぜを残して40cmほど掘り下げたところ、落ち込みの長軸方向にそうように土器片多数や石皿1個(未掲載)が5箇所にとまって出土した(図Ⅲ-58上)。これらのうち、西壁付近で確認された土器1個体分(図Ⅲ-59-2)のまともは覆土8層の下部で出土したが、それ以外の4箇所と焼土2箇所(焼土1・2)は埋土と考えられる暗灰黄色土(覆土10層)の上面から検出された。焼土1はピットの中央部に向かって流れ込んでいた。遺物や焼土を取り上げた後、さらに掘り下げ、底面と壁面の立ち上がりを確認した。底面の直上には固くしまった黄褐色土(覆土24層)が堆積しており、この層を除去したところ、底面の東側に径50cm、深さ5cmほどの皿状のピットが検出された。壁面は二段になっており、崩落が激しい。

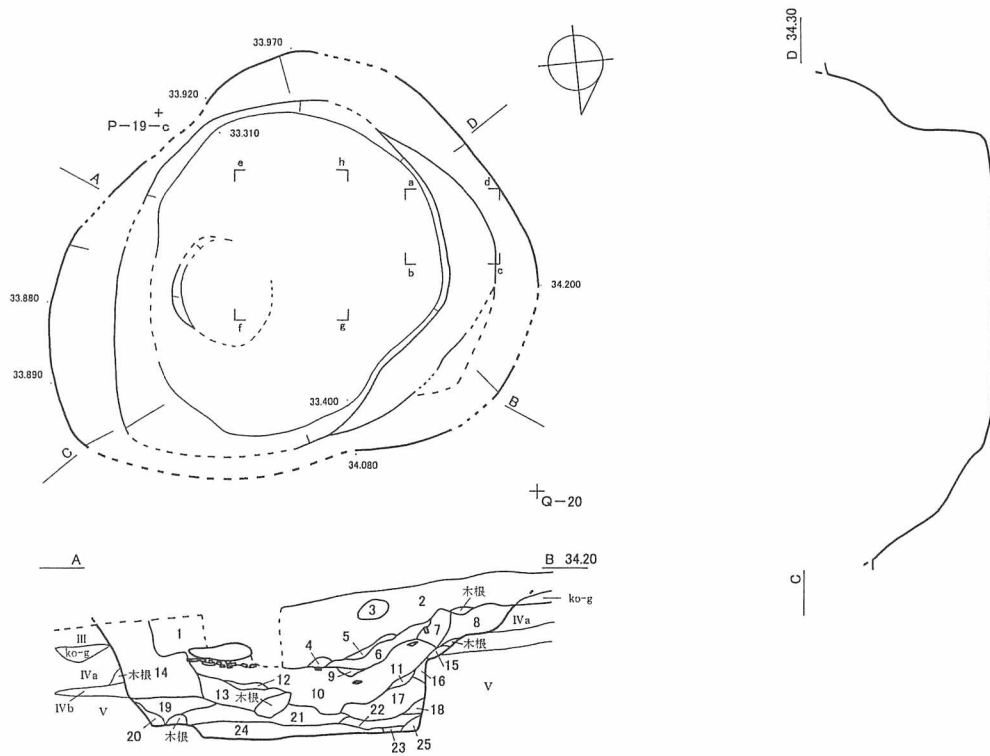
遺物の出土状況(図Ⅲ-58) 図Ⅲ-60-4の土器は焼土2の上面から横倒しになりつぶれた状態で、図Ⅲ-59-1の土器はその西側に接するように出土した。1の破片の一部は焼土2の西に隣接するようにまとまっていた。1は口縁を南に向け、4は北に向けている。焼土2の東側では6の破片1点も出土した。2はピットの西壁付近から、口縁部をピットの中央部に向けて落ち込んだような状態で出土した。3は胴部破片の約半分と底部が石皿の直下から、口縁部と胴部破片の残りは石皿の北東に位置する径50cmほどの遺物の集中域から出土した(図Ⅲ-58上)。口縁部は北東を向いており、破片の中には摩滅したものもあったが、石皿の直下から出土した破片は割れ口や器面に摩滅が認められなかった。この集中域からは、3以外に土器8個体分(5~12)が廃棄されたような状態で出土している。図Ⅲ-60-8の破片の多くはQ-22・23から出土した。図Ⅲ-61-9・10の破片の多くは北東の集中域の中でも斜面の下側から出土した。11の破片の半分以上はⅢ層から出土しており、横倒しになっていた可能性がある。12の破片は北東の集中域東側以外にも覆土上位から中位に散在して出土した。

図Ⅲ-62-19のたたき石はピットの中央部に向かって落ち込むような状態で出土した。23・24の半円状扁平打製石器はピット中央部の10層上面に2点まとまって出土した。

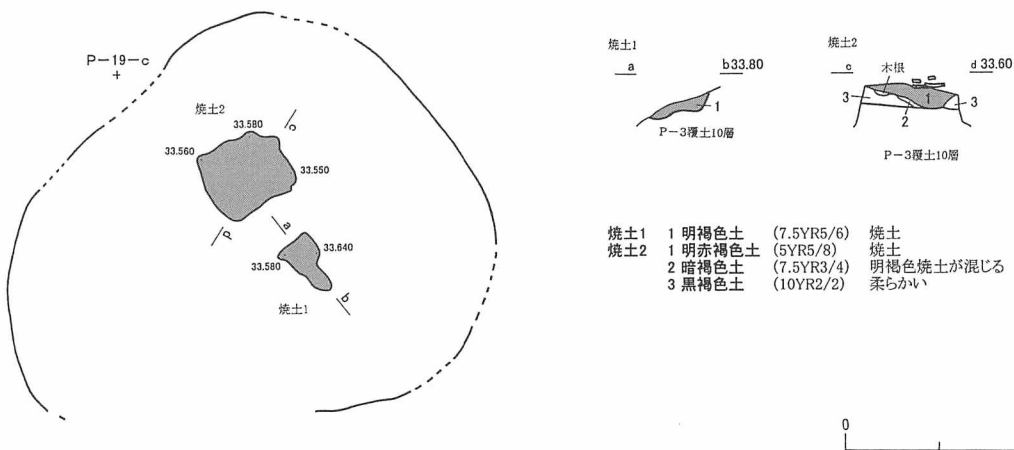
遺物 掲載した土器はいずれも覆土上位・中位から出土したものである。

1は胴部下位がすぼまる器形で、内面側に粘土紐の加えられた低い突起が2個ある。口縁部の欠損の状況からはこれらの間に異なる形の突起のあった可能性がある。外面はやや磨耗しており、一部に結束第1種の縄文のみられる地に2本一組の細い粘土紐による縦位や弧線状の文様が胴部中位まで施されている。口唇直下には粘土紐が凸レンズ状に貼付されている。粘土紐の上には撚糸の圧痕がみられる。外面の胴部中位と内面の胴部上位から中位にかけて炭化物が付着している。2・3には結束第1種羽状縄文が施されている。2は台形状の突起をもつもので、突起の中央部に長楕円形の穴があげられている。底面は欠損している。内面の胴部下位には炭化物が付着している。3は直線的に立ち上がる大型の土器である。口縁部には半円状の粘土帯が4箇所に貼り付けられていた可能性がある。粘土紐の上にも縄文が施されている。内面はよくみがかれている。4は口縁が外反し、下膨れの器形である。口唇直下は3分の2ほどが欠損しており、打ち欠かれた可能性がある。口縁部には縦位の橋状

P-3



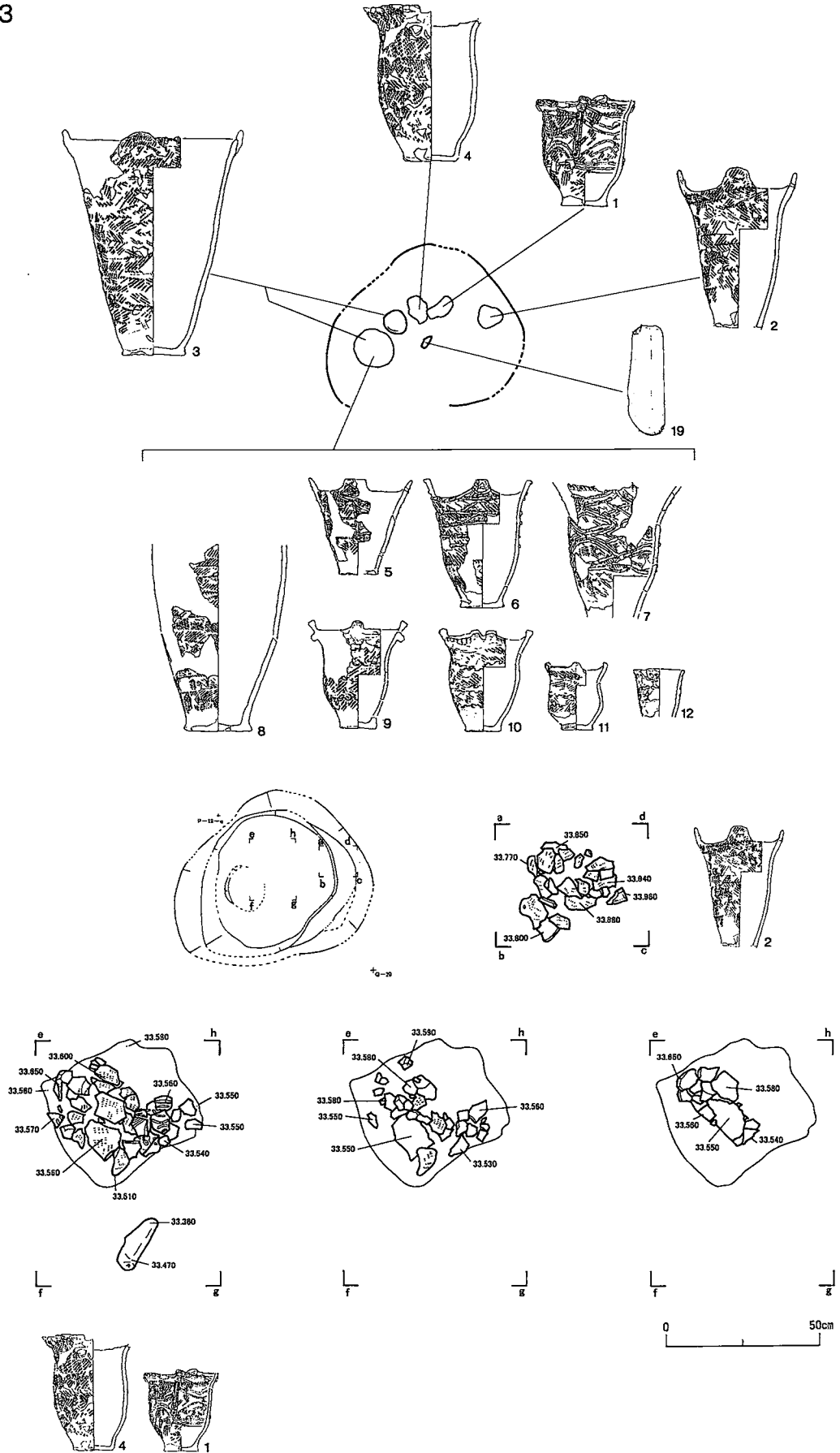
- | | | | | |
|-----|----|----------|------------|-----------------------------|
| P-3 | 1 | オリーブ褐色土 | (2.5Y4/4) | |
| | 2 | 黒色土 | (2.5Y2/1) | しまりあり 乾燥すると上部にクラックが入る |
| | 3 | 黒褐色土 | (7.5YR3/1) | ややボソボソしている 黄褐色土粒子が多量に混じる |
| | 4 | 黄灰色土 | (2.5Y4/1) | 粘性あり |
| | 5 | 黒褐色土 | (7.5YR2/2) | 黄褐色土粒子が多量に混じる |
| | 6 | 黒色土 | (5Y2/1) | 黄褐色土粒子が混じる |
| | 7 | 暗オリーブ褐色土 | (2.5Y3/3) | 黄褐色土粒子が混じる |
| | 8 | オリーブ褐色土 | (2.5Y4/6) | 砂質 |
| | 9 | 黒色土 | (10YR2/1) | |
| | 10 | 暗灰黄色土 | (2.5Y4/2) | 黄褐色土ブロックが混じる 炭化物がわずかに混じる |
| | 11 | 黄褐色土 | (2.5Y5/6) | 黒色土ブロックが混じる |
| | 12 | 黒褐色土 | (10YR2/2) | 黄褐色土粒子が混じる 炭化物がわずかに混じる |
| | 13 | オリーブ褐色土 | (2.5Y4/3) | 黄褐色土ブロックが混じる |
| | 14 | 暗灰黄色土 | (2.5Y4/2) | |
| | 15 | オリーブ褐色土 | (2.5Y4/4) | |
| | 16 | 明黄褐色土 | (2.5Y6/8) | 砂質 黒褐色土ブロックが混じる |
| | 17 | 黒色土 | (5Y2/1) | 黄褐色土粒子が混じる |
| | 18 | オリーブ黒色土 | (5Y3/2) | 黄褐色土粒子が混じる |
| | 19 | オリーブ褐色土 | (2.5Y4/3) | 黄褐色土ブロックが混じる |
| | 20 | 黄灰色土 | (2.5Y4/1) | 黄褐色土ブロックが混じる |
| | 21 | 暗灰黄色土 | (2.5Y4/2) | 黄褐色土ブロックが多量に混じる |
| | 22 | オリーブ黒色土 | (5Y2/2) | 黄褐色土ブロックが混じる |
| | 23 | 黒褐色土 | (2.5Y3/2) | ややボソボソしている 黄褐色土粒子が混じる |
| | 24 | 黄褐色土 | (2.5Y5/6) | よくしまり、非常に固い 黄褐色土ブロックが多量に混じる |
| | 25 | 明黄褐色土 | (2.5Y6/8) | |



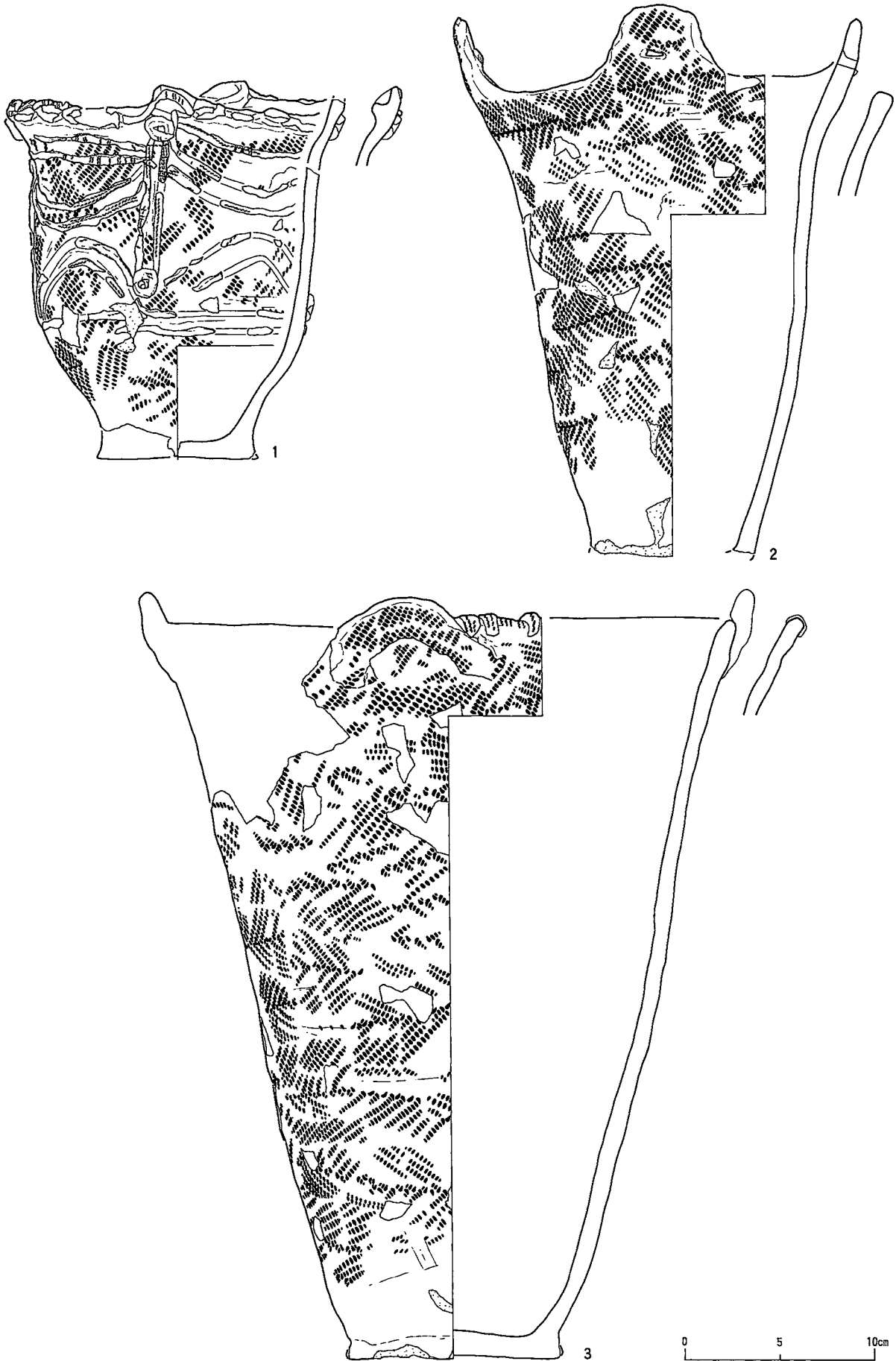
- | | | | | |
|-----|---|-------|------------|-----------|
| 焼土1 | 1 | 明褐色土 | (7.5YR5/6) | 焼土 |
| 焼土2 | 1 | 明赤褐色土 | (5YR5/8) | 焼土 |
| | 2 | 暗褐色土 | (7.5YR3/4) | 明褐色焼土が混じる |
| | 3 | 黒褐色土 | (10YR2/2) | 柔らかい |

図Ⅲ-57 フラスコピット (P-3)

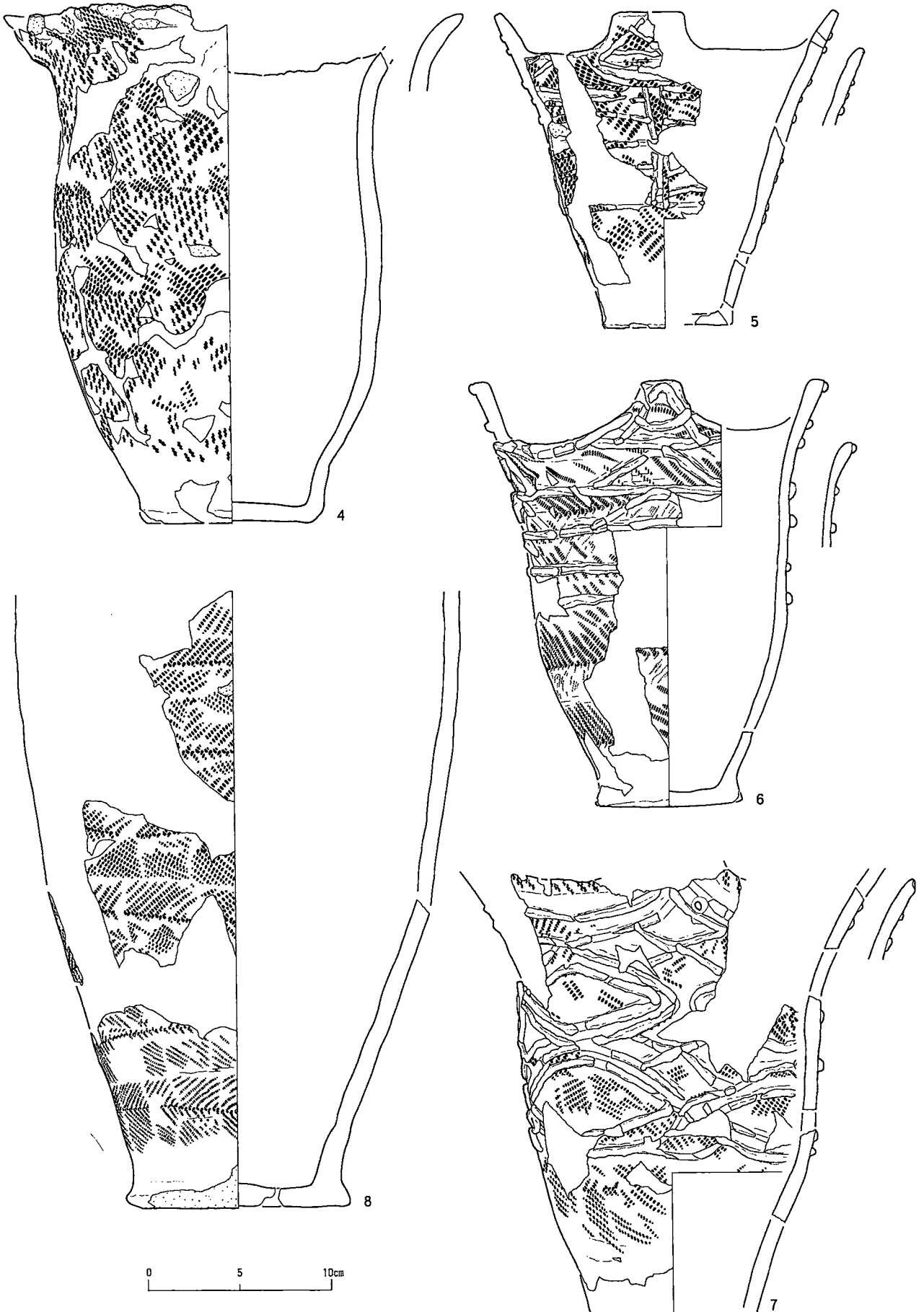
P-3



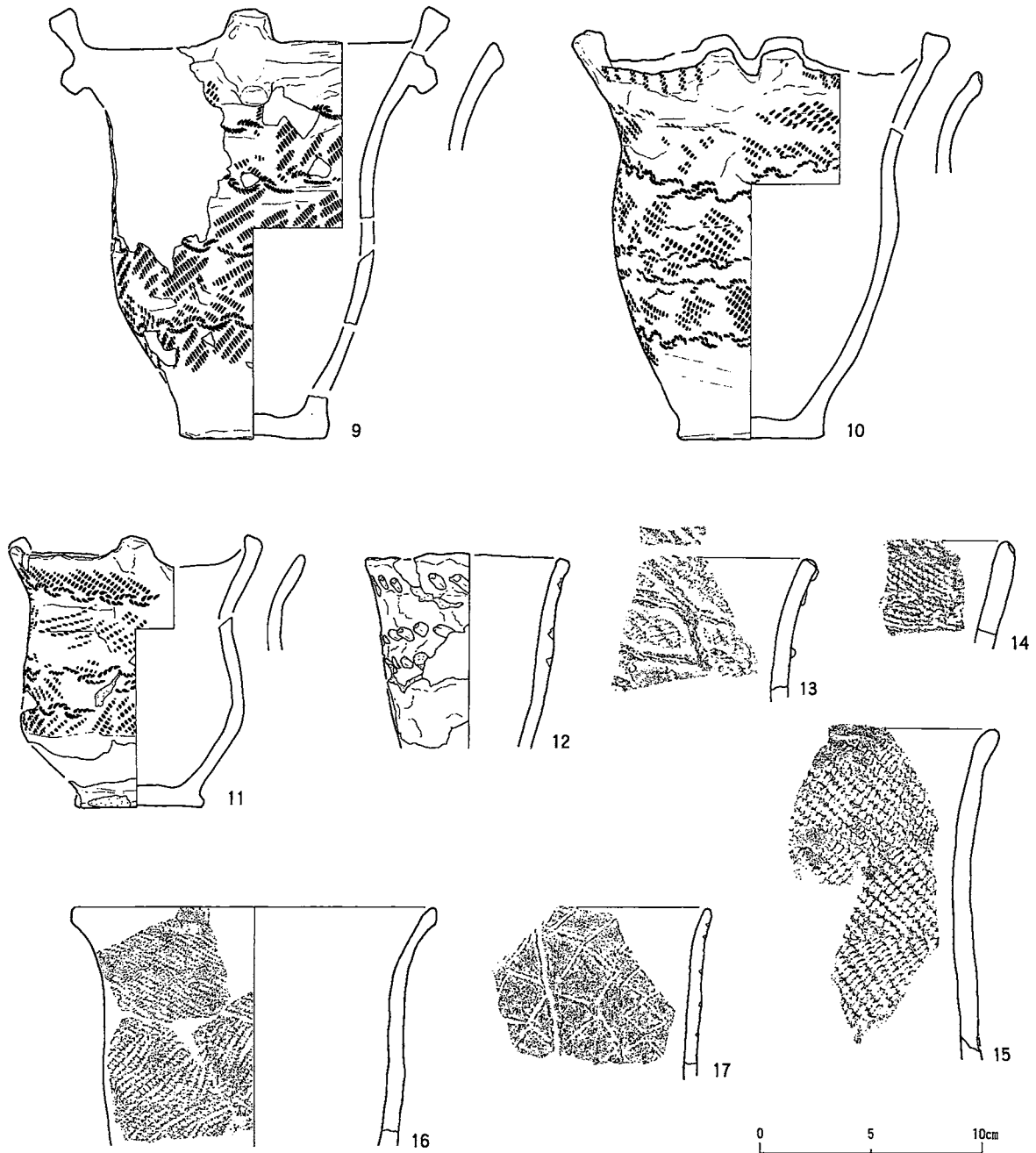
図Ⅲ-58 フラスコピット (P-3) 遺物出土状況



図Ⅲ-59 フラスコピット (P-3) 出土の土器(1)



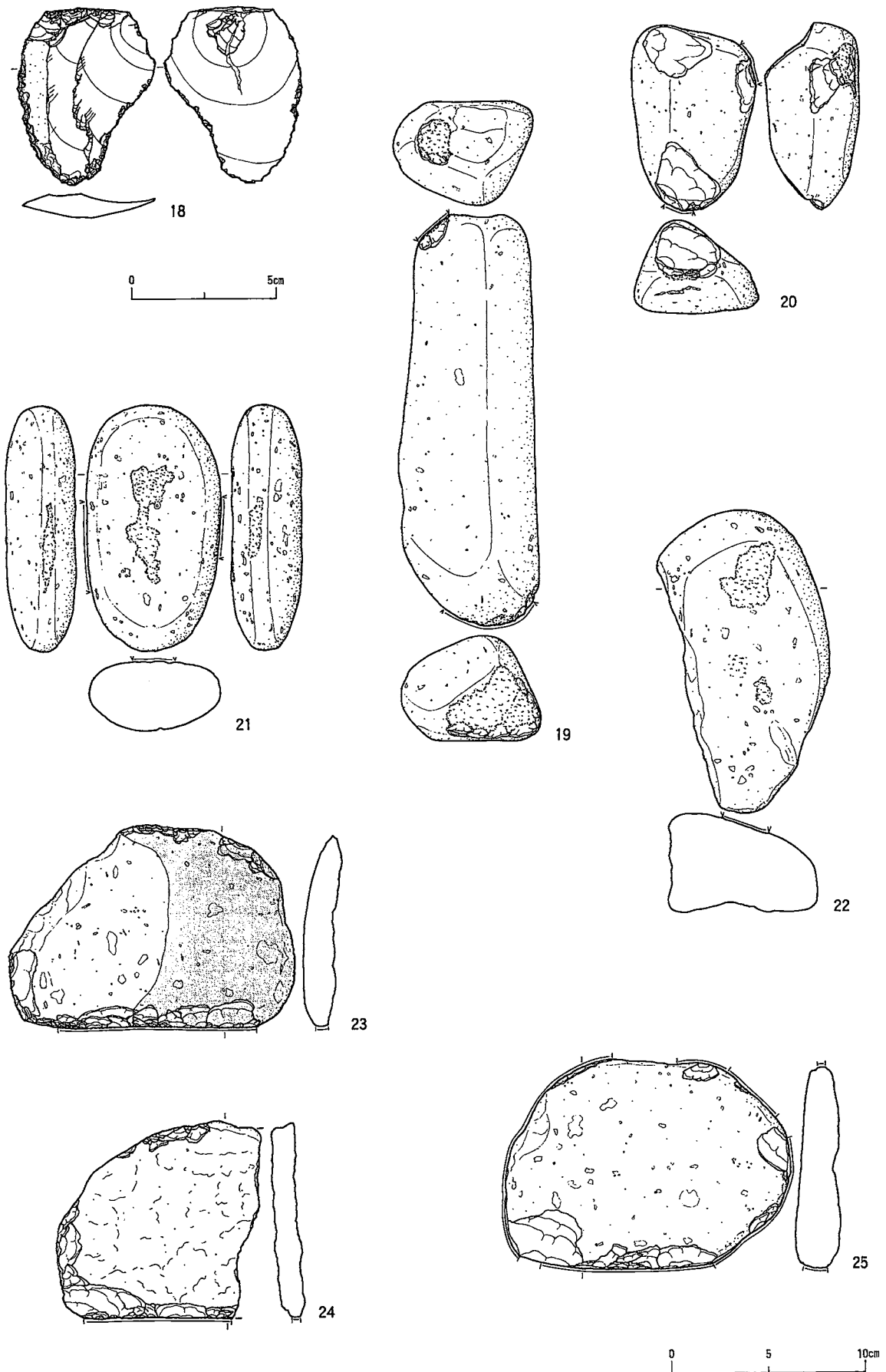
図Ⅲ-60 フラスコピット (P-3) 出土の土器(2)



図Ⅲ-61 フラスコピット (P-3) 出土の土器(3)

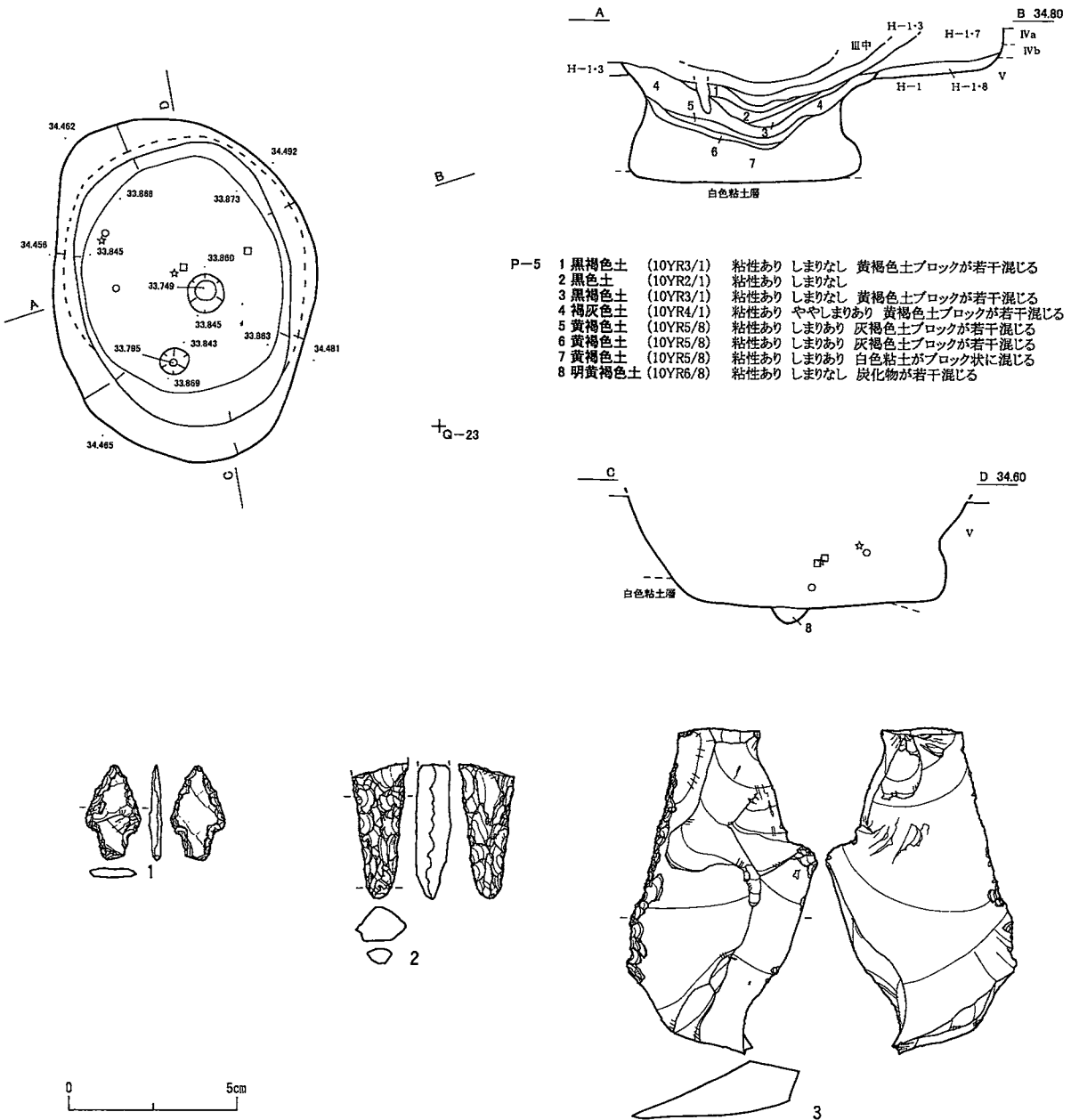
把手の剥落した跡が向かい合う2箇所にある。複節の縄文が施されている。内面の胴部下位には炭化物が付着している。5・6は台形状の突起をもつもので、結束第1種羽状縄文を地として、細い粘土紐が口縁部から胴部にかけて貼り付けられ、文様帯を形成している。5は直線的に立ち上がる器形である。貫通孔のある突起の下位に縦位の粘土紐が貼り付けられた後、それらを結ぶように横位の粘土紐が加えられている。これらの上にも縄文が施されている。6の縄文は2段の原体と撚り戻しによる原体を結束したものである。6は横位の粘土紐が5条めぐり、突起上とその下位にはそれらの間に山形の粘土紐が貼り付けられている。7は粘土紐が網目状に貼り付けられたもので、突起は欠損している。口唇直下には縄の圧痕がある。口縁部には補修孔がある。8は口縁部の欠損した大型の土器で、

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物



図Ⅲ-62 フラスコピット (P-3) 出土の石器

P-5



図Ⅲ-63 フラスコピット (P-5) と出土の遺物

胴部には結束第1種羽状縄文が施されている。内面は摩滅が激しく、胴部下位には摩滅後に炭化物が付着している。9~11は棒状の突起をもつもので、突起の頂部はややへこみ、肥厚している。口縁の断面形は切り出し状になる。綾絡文が施されている。9・10は2種類の突起をもつものである。10の実測図は2個一対のものを正面にして示した。9は突起の下部に瘤状の貼り付けがある。10の口唇直下には縄の圧痕がある。内面はよくみがかれている。11の内面には口縁部から胴部にかけて炭化物が付着している。13は縄文地に粘土紐が網目状に貼り付けられたもので、貼付帯上には撚糸圧痕がある。口唇にはヘラ状の工具で斜位の刻み目が加えられている。14の口唇には縄の圧痕がある。15・16には斜行縄文が施されている。17は無文地に縦位の沈線や菱形を上下に重ねた沈線が施されたものであ

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

る。内面の一部には炭化物が付着している。2・4・8は胎土に径数ミリ以下の礫や砂粒を多量に含む。2・6・10・11・13は胎土に海綿骨針を含む。これらはサイベ沢Ⅶ式古段階に相当すると考えられる。

12は無文地に竹管状工具を用いて斜め下方から刺突が施された小型の土器で、器面や口唇には凹凸がある。内面はみががれている。胎土に海綿骨針や礫を含む。大安在B式に相当する。

(中田)

18はUフレイク。素材剥片の原石面が一部に残るもの(VB 2 b)である。19~22はたたき石。19、20は礫の端部に敲打痕があるもの(Ⅶ 1)。19は断面三角形の細長い礫を用い、20は歪な円礫を用いるものである。21、22は礫の平坦面に敲打痕があるもの(Ⅶ 3)。21は扁平礫を用いるもの、側面にも弱い敲打痕がある。22は一部に平坦な面がある歪な礫を用いるもので、表面を使用するが敲打痕は弱く、不明瞭である。23~25は半円状扁平打製石器。23、24は周縁を打ち欠きにより加工されるもの(Ⅶ 3 a)。23は全体のほぼ半分が被熱し赤変している。25は扁平礫をそのまま用いるもの(Ⅶ 3 d)である。

(立田)

時期 出土遺物から縄文中期前半、サイベ沢Ⅶ式古段階の時期と考えられる。

1・2・11の土器の内面に付着した炭化物の年代を測定したところ、¹⁴C補正年代で、1は4,940±40 y. B. P. (Beta-163038)、2は4,560±40 y. B. P. (Beta-163037)、11は4,970±50 y. B. P. (Beta-163039)という結果が得られた(第V章3参照)。

(中田)

P-5 (図Ⅲ-63、表1・2・5、図版20・50)

位置 P-22-b・c、Q-22-d

規模 208×166/160×128/82

長軸方向 N-24°-W

平面形 楕円形

確認・調査 H-1の覆土を調査中、覆土が床面より落ち込む部分があった。土壌が重複していることを想定し、黒褐色土を掘り下げると、フラスコ状に膨らむ壁を確認した。改めて断面を精査すると、H-1の覆土3層付近から掘り込まれた土壌であることがわかった。平面形は南北に長い楕円形を呈する。壁は北壁以外の全周においてオーバーハングする。また壙底において2つの小土壌が検出されている。一つは土壌のほぼ中央、一つは北壁付近である。覆土は7層に区分した。4層以下は埋め戻しとみられる汚れた土である。特に7層はV層とみられる黄褐色土中にV層以下にみられる白色粘土がブロック状に混入する土である。

中央から検出された小土壌の覆土中から炭化物が出土している。この炭化物の放射性炭素年代により年代測定を行ったところ、¹⁴C補正年代で4430±40 y. B. P.の値が得られている(Beta-163033)。

遺物 覆土から土器3点、石鏃2点、スクレイパー1点、フレイク1点が出土している。1は石鏃。有茎のもの(IA 5)である。2は石鏃。棒状に加工されるもの(IIA 3)である。3はスクレイパー。縦長剥片を用い刃部が直線を呈するもの(ⅢB 2 b)である。

時期 床面で検出された炭化物の年代、またH-1より新しいことから考え合わせると、縄文時代中期前半サイベ沢Ⅶ式~見晴町式の期間のものと考えられる。

(立田)

(4) A類土壌 (埋納遺構)

P-13 (図Ⅲ-64~76、表1・2・4・6、図版21・50~57)

位置 Q-19-c、S-19-d

規模 78×52/68×44/24

長軸方向 N-177° -W

平面形 楕円形

確認・調査 Q-19区のV層を精査中に、R-19側の壁面に黒褐色土の落ち込みが現れているのを確認した。付近を精査すると、落ち込みはQ-19側にも一部広がっていることがわかった。土層断面図を作成したのち、ベルトを残してR-19グリッドを掘込面まで掘り下げた。その結果楕円形を呈する平面形を確認した。覆土を掘り下げると、覆土3層に達したところで、一塊の石器が出土した。石器は大型のものが多く長軸をそろえて並べられている状態であったため、1点ずつ記録をとりながら取り上げた。土壌の壁は北側が比較的緩やかな他は急である。覆土は3層に区分した。明瞭ではないが、2、3層は埋め戻しの土である。

遺物 覆土3層から両面調整石器3点、石槍1点、スクレイパー2点、Rフレイク6点、Uフレイク2点のほか、フレイクが82点出土している。これらは上位にあるものから順に個体番号をつけ、一覧表に掲載した。石器の石材に関しては、頁岩を母岩1、母岩2の2種に分けた。母岩1は、褐灰色を呈し、茶~灰色の細い縞模様が入るものである。あまり珪化しておらず、光沢は弱い。母岩2は灰色を呈し、白い斑点状の模様が雲のように現れているものである。母岩1よりやや珪化が進んでおり、1に比して光沢がある。

なお遺物出土状況図は①~⑯に分けた。それぞれ上に位置するものから図化してある。背腹の不明である両面調整石器、また取り上げ時点で背腹の区別のつかなかった計2点、また細片を除いて背面を上向きにして出土しているものが61点、腹面が17点で、背面を上とするものが多い。これらの石器の中で、玄武岩製の3点の両面調整石器はちょうど頁岩製のフレイク、Rフレイク、Uフレイクに挟まれるように位置している。

また、実測した石器については、2~17までが接合資料、以下両面調整石器、石槍、スクレイパー、Rフレイク、Uフレイクの順に掲載した。以下接合資料から順に記載するが、実測図横の縮小した白抜きの図面については、矢印は正面からみた打面の傾きを表し、丸数字は接合した剥片の剥離した順番を表している。なお、記載中の()内の数字は図Ⅲ-74~76の掲載番号を表している。(立田)

土器

1の口唇には縄の圧痕がある。胎土に海綿骨針を含む。

(中田)

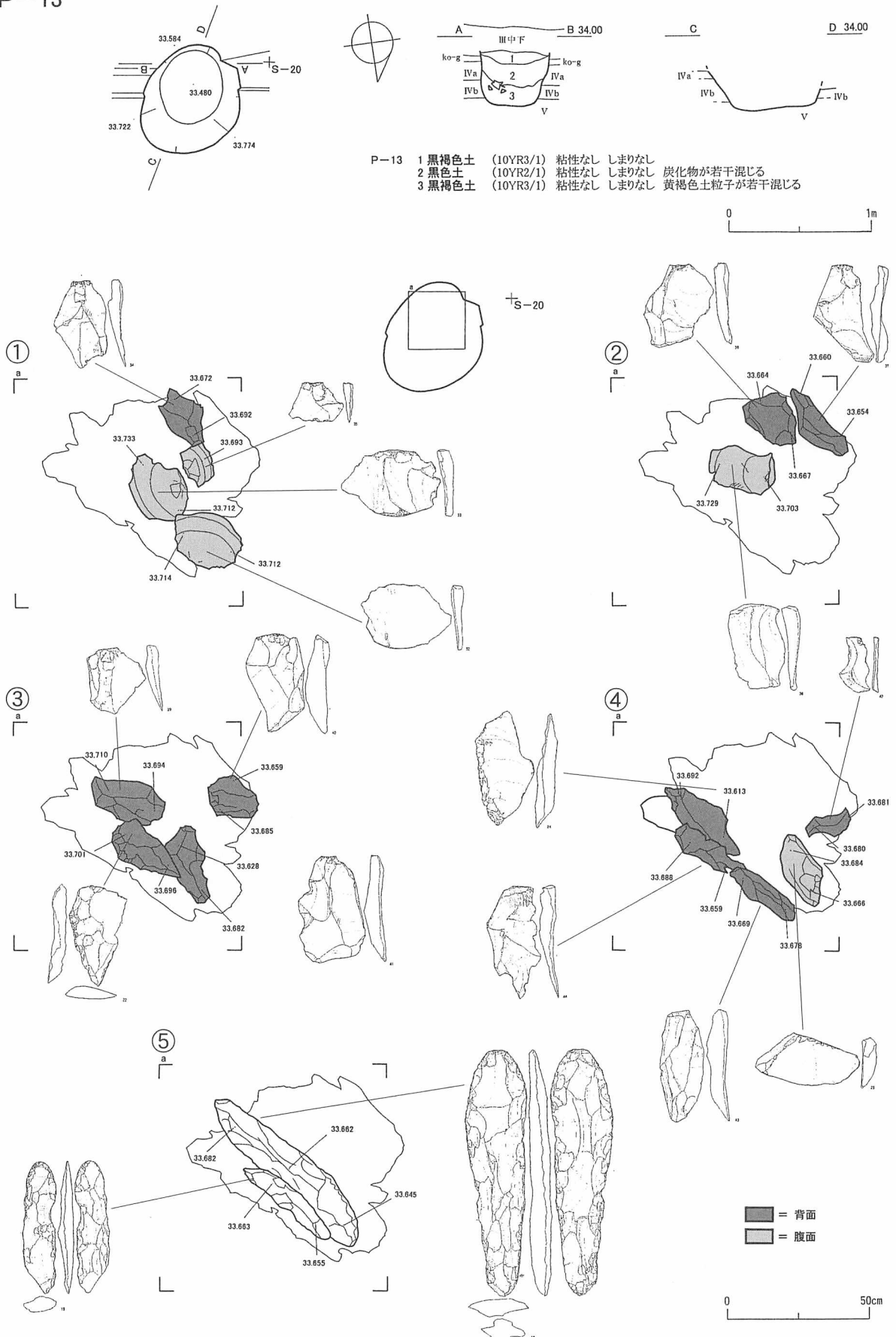
石器等**2 (接合資料1)**

原石面のある2点のフレイク(①=32、②=33)が接合したもの。打面に当たる部分に調整を施し、やや角度を変えて2枚の剥片を連続して剥離している。剥片は横長で末端はややヒンジ状を呈する。

3 (接合資料2)

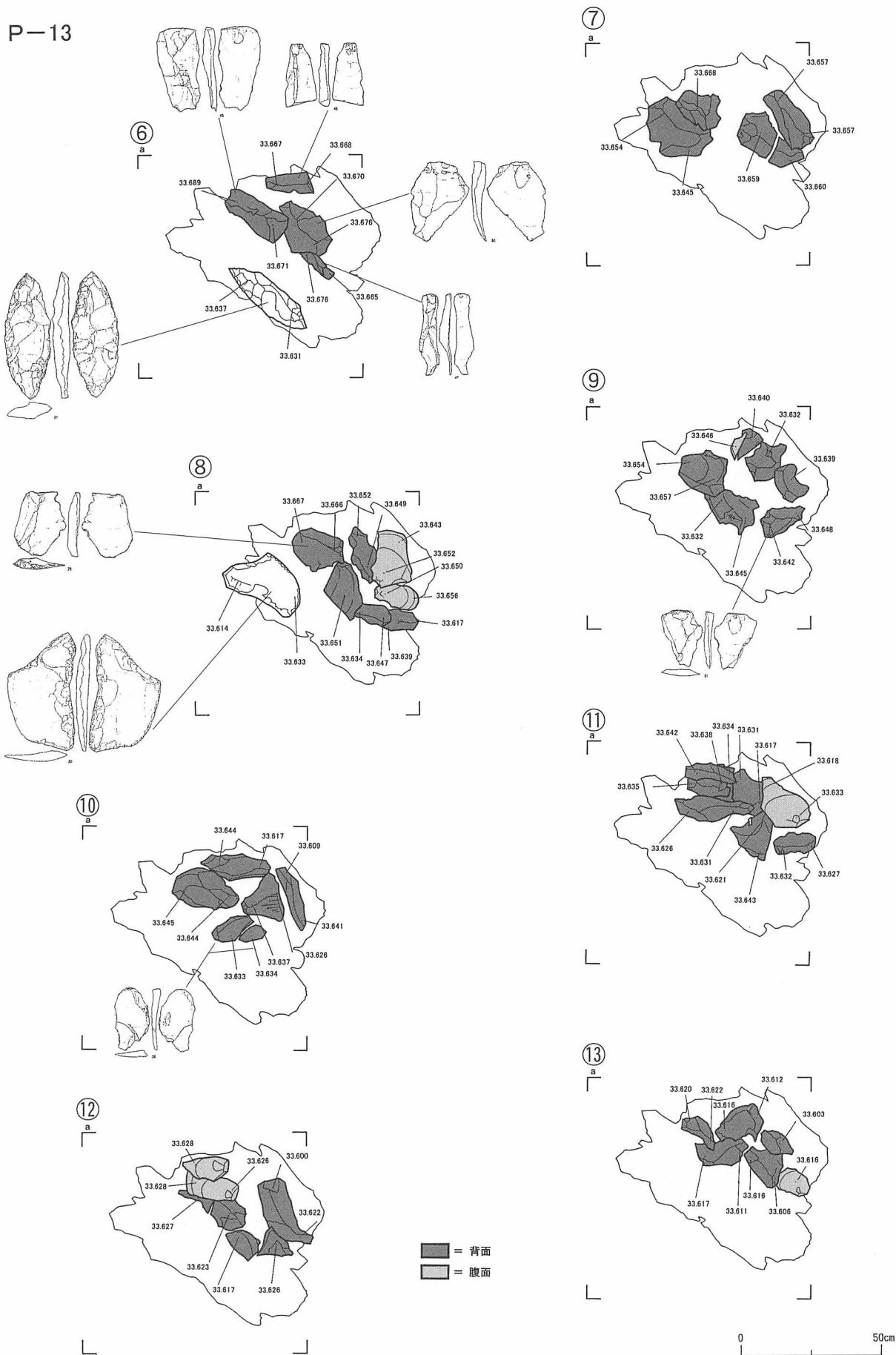
4点のフレイクが接合している。同一の打面において角度を変えながら剥片剥離を行っている。フレイクは概ねであるが、長さ、厚さ、平面の形状はまとまりがない。接合したフレイク以外に①、②間に1枚、③④、④間に2枚の剥片を剥離している。

P-13

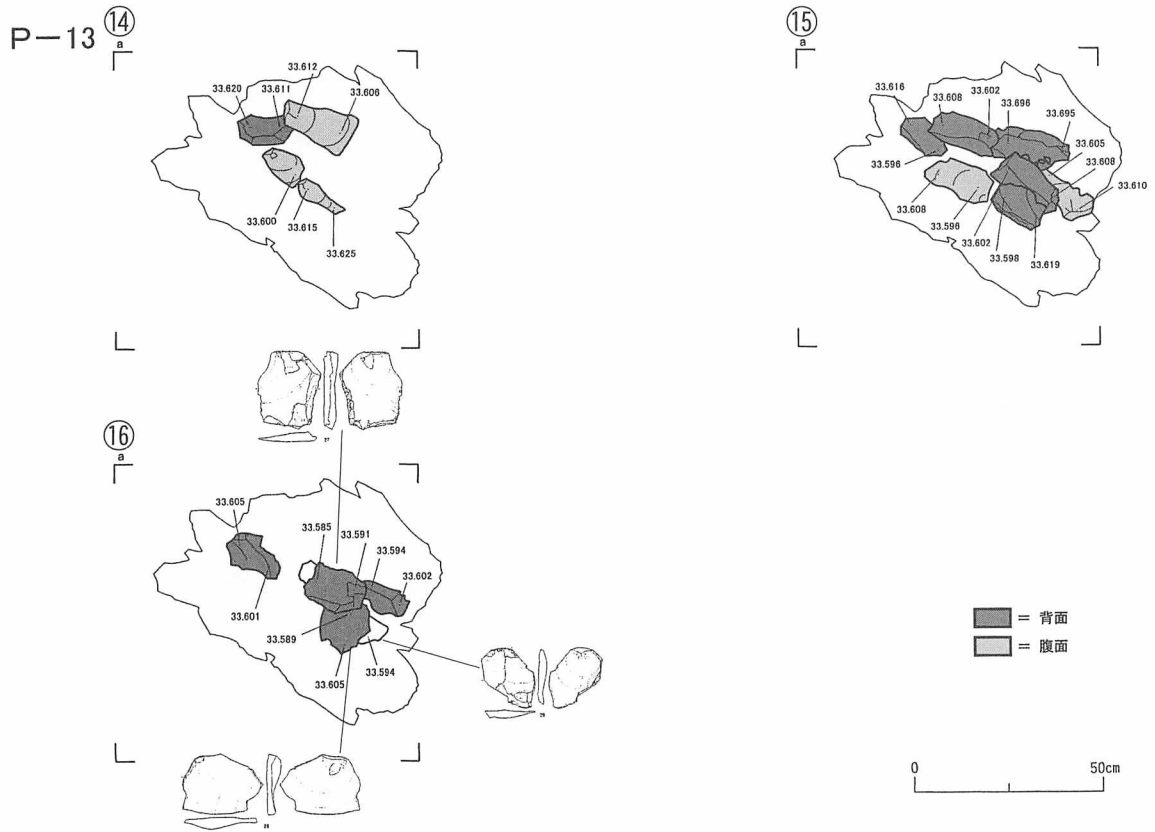


図Ⅲ-64 A類土壌 (P-13) と遺物出土状況(1)

P-13



図Ⅲ-65 A類土壌 (P-13) 遺物出土状況(2)



図Ⅲ-66 A類土壌 (P-13) 遺物出土状況(3)

4 (接合資料3)

2点のフレイクが接合している。同一打面において同一方向から3回の剥片剥離を行っている。そのうち2枚が接合した。剥片は2辺に節理面が残っている。①は37のフレイクである。

5 (接合資料4)

2点のフレイクが接合している。打面に粗い調整が施された後、①、②(38)を連続して剥離している。フレイクは概ね縦長であるが、厚さ、大きさのまとまりのない不定形剥片である。

6 (接合資料5)

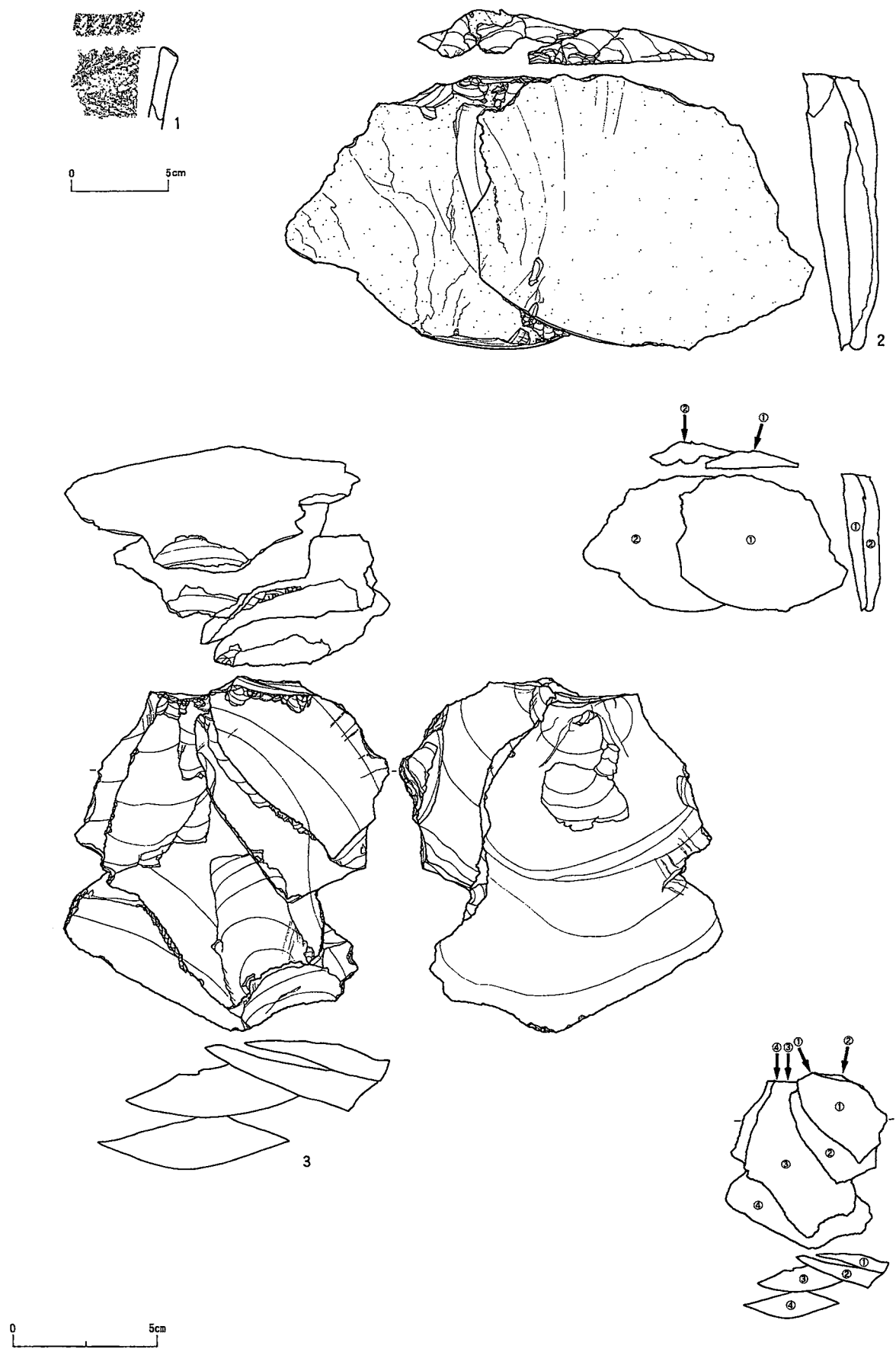
スクレイパーとフレイクの接合資料である。節理の平坦面を打面として①のスクレイパー(22)の剥離を行った後、打面を160度変え、節理による平坦面に設定し、②を剥離している。①は剥離の後側縁が細部調整される。

7 (接合資料6)

2点のフレイクが接合している。同一の打面において、①(39)を剥離した後、やや角度を変えて②を連続して剥離している。フレイクは2点ともやや横長、バルブは大きく膨らみ、厚手である。

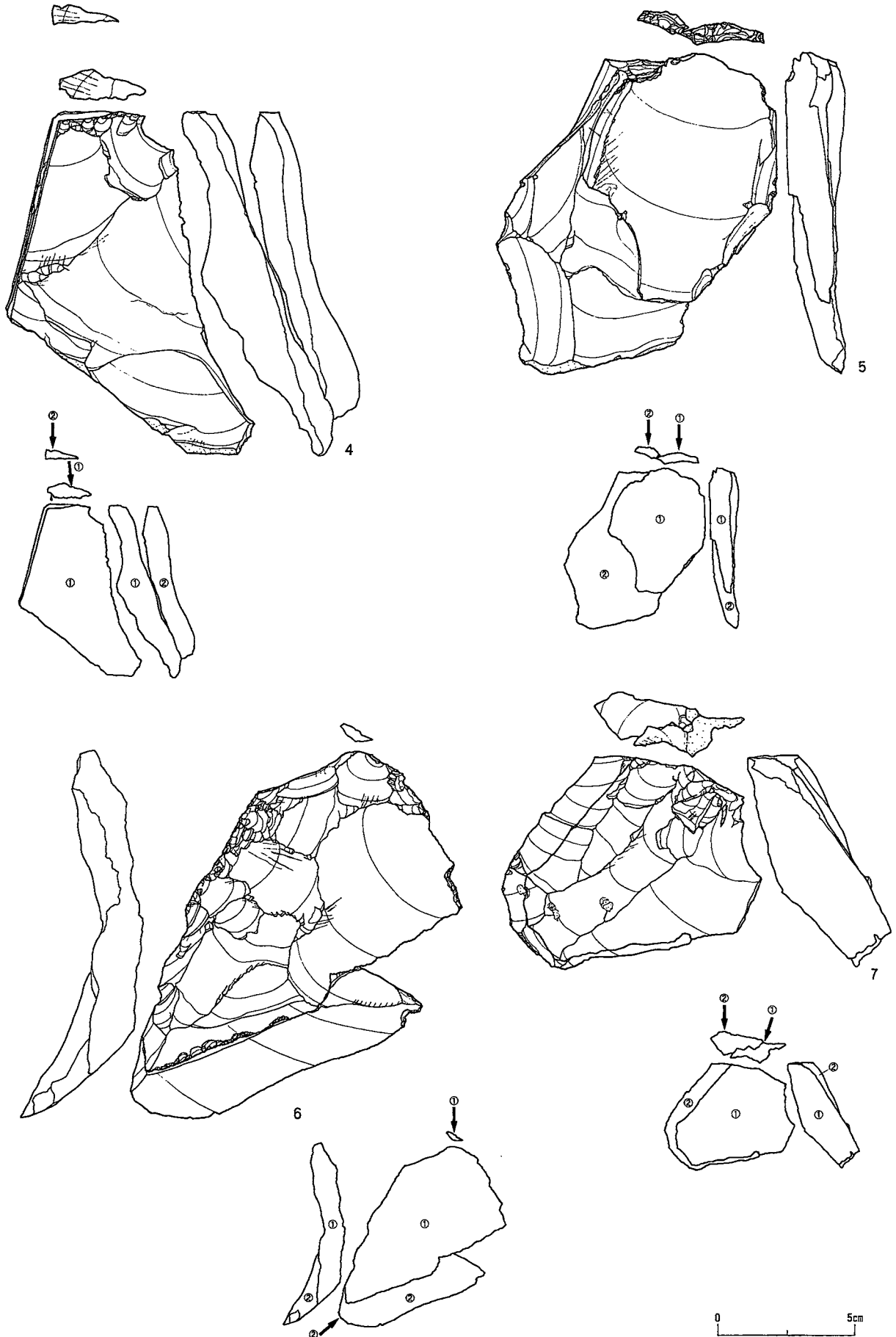
8 (接合資料7)

2点のフレイクが接合している。節理による平坦面を打面とし、3回の剥片剥離を行っている。そのうち2枚が接合したものである。①(44)、②(43)の剥離間に1枚の接合していない剥片が剥離されている。フレイクは概ね縦長であるが、不定形で厚手である。

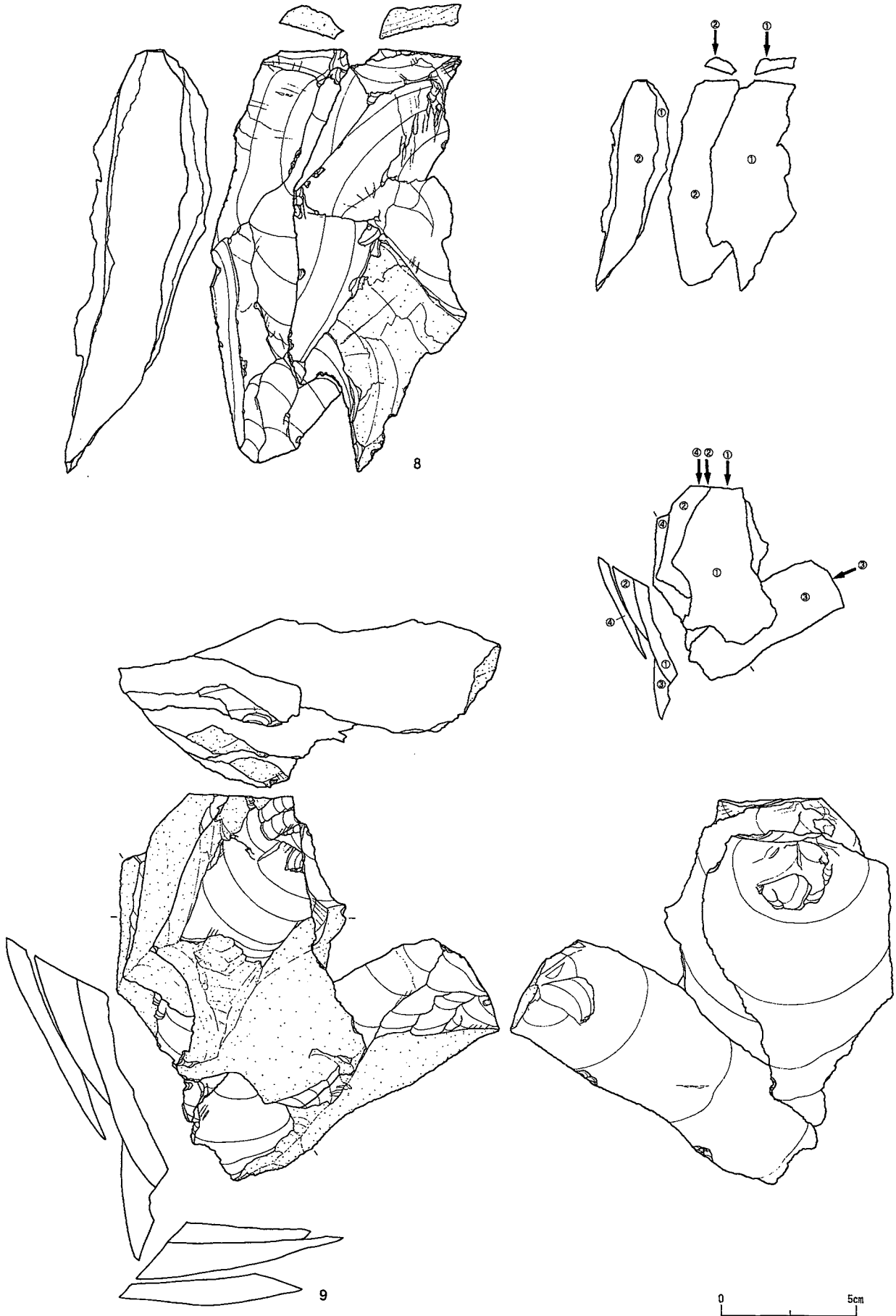


図Ⅲ-67 A類土壙 (P-13) 出土の土器・接合資料(1)

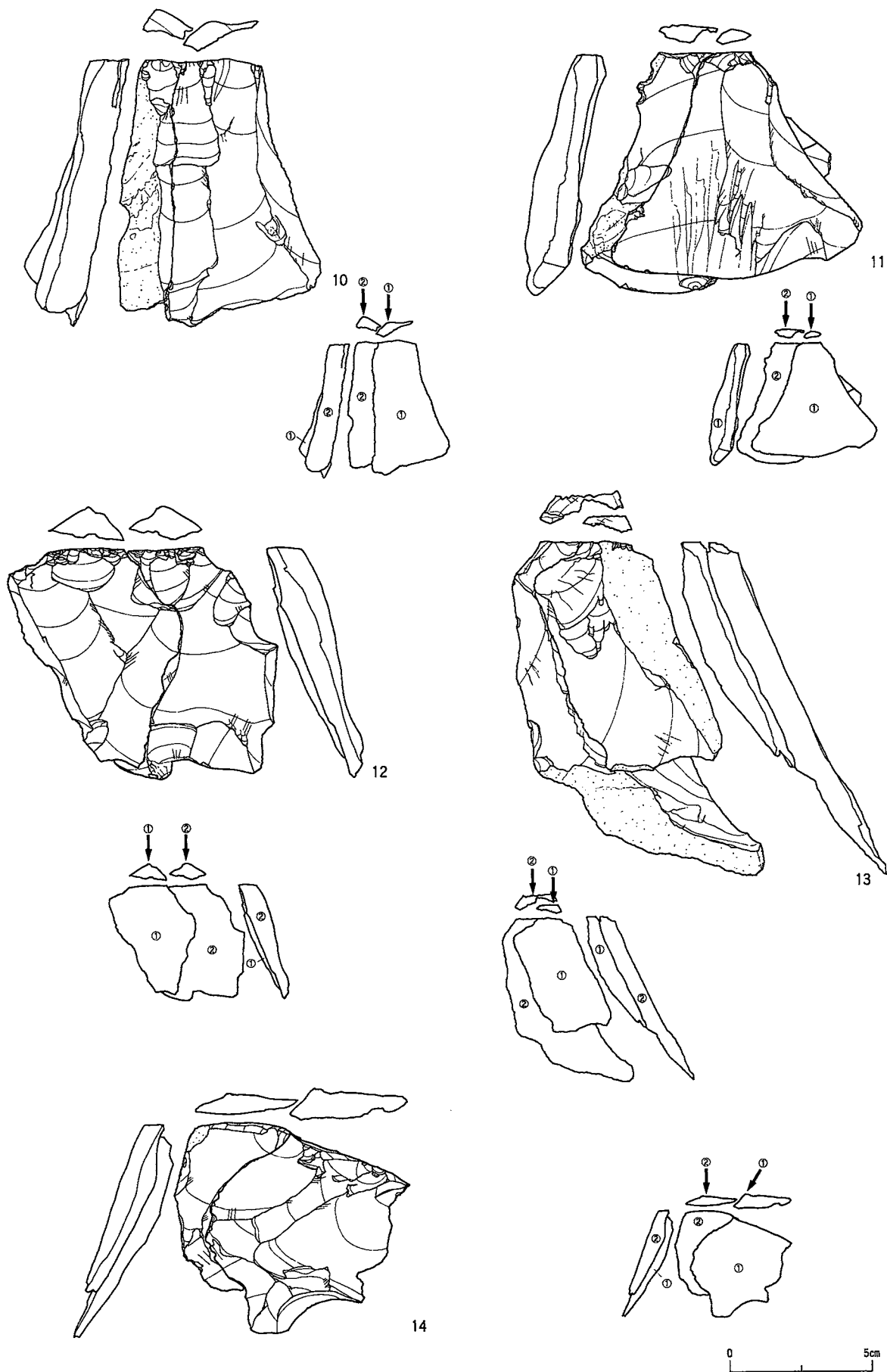
Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物



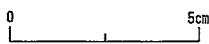
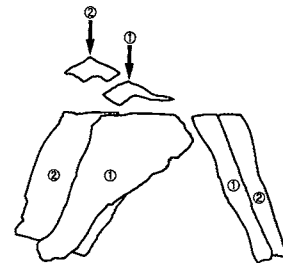
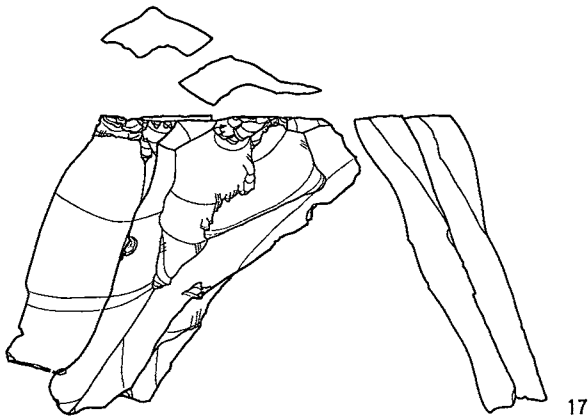
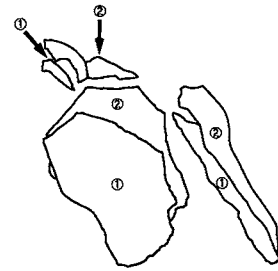
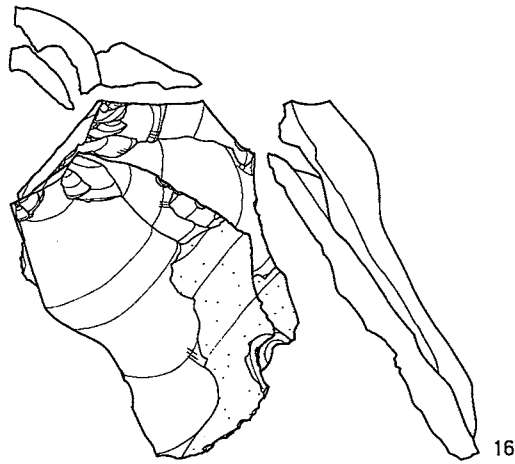
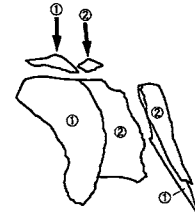
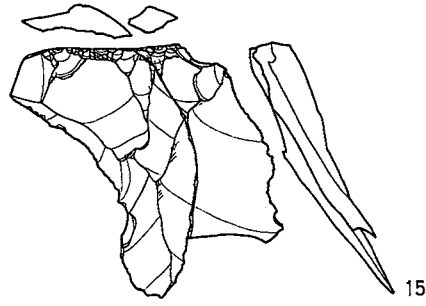
図Ⅲ-68 A類土壙 (P-13) 接合資料(2)



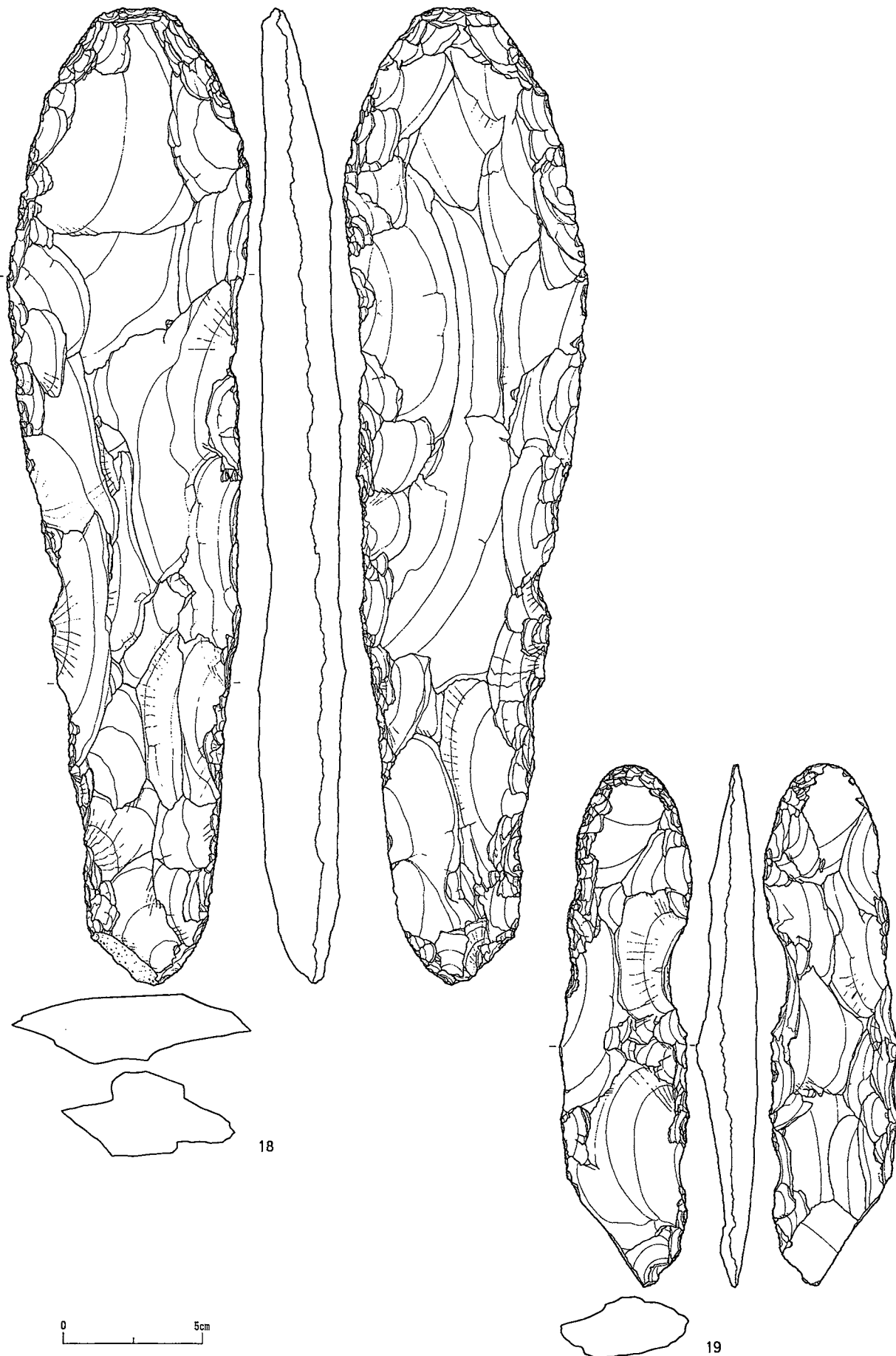
図Ⅲ-69 A類土壙(P-13)接合資料(3)



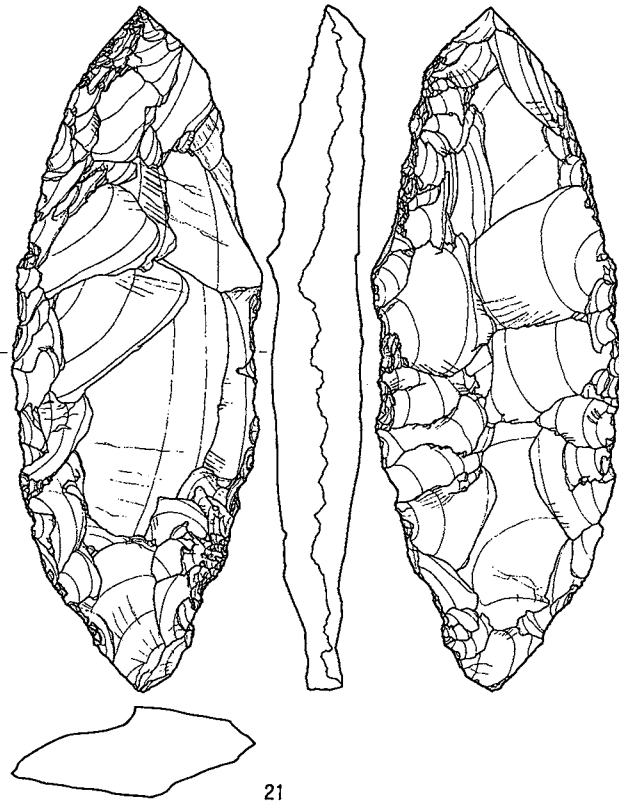
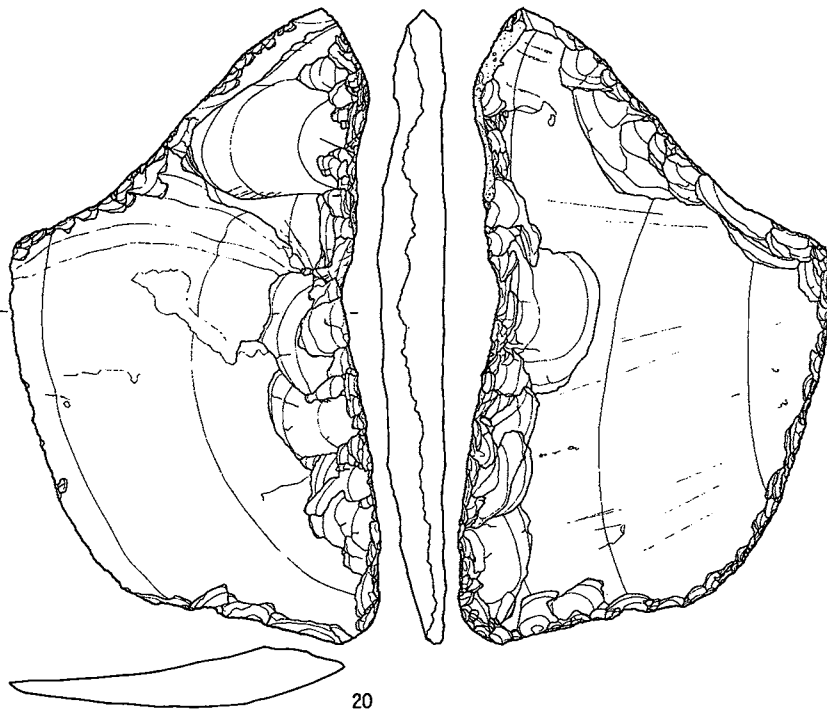
図Ⅲ-70 A類土壙 (P-13) 接合資料(4)



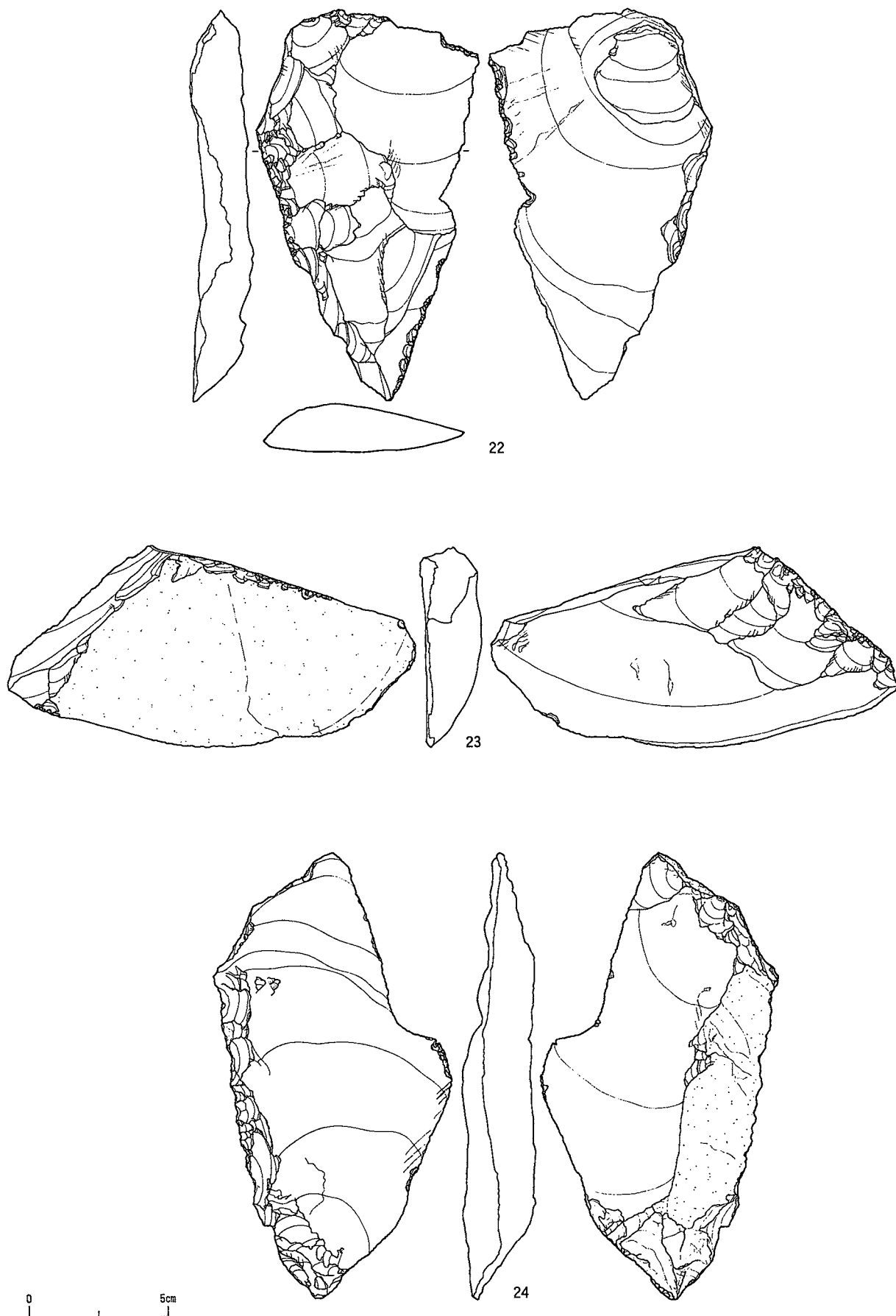
図Ⅲ-71 A類土壌 (P-13) 接合資料(5)



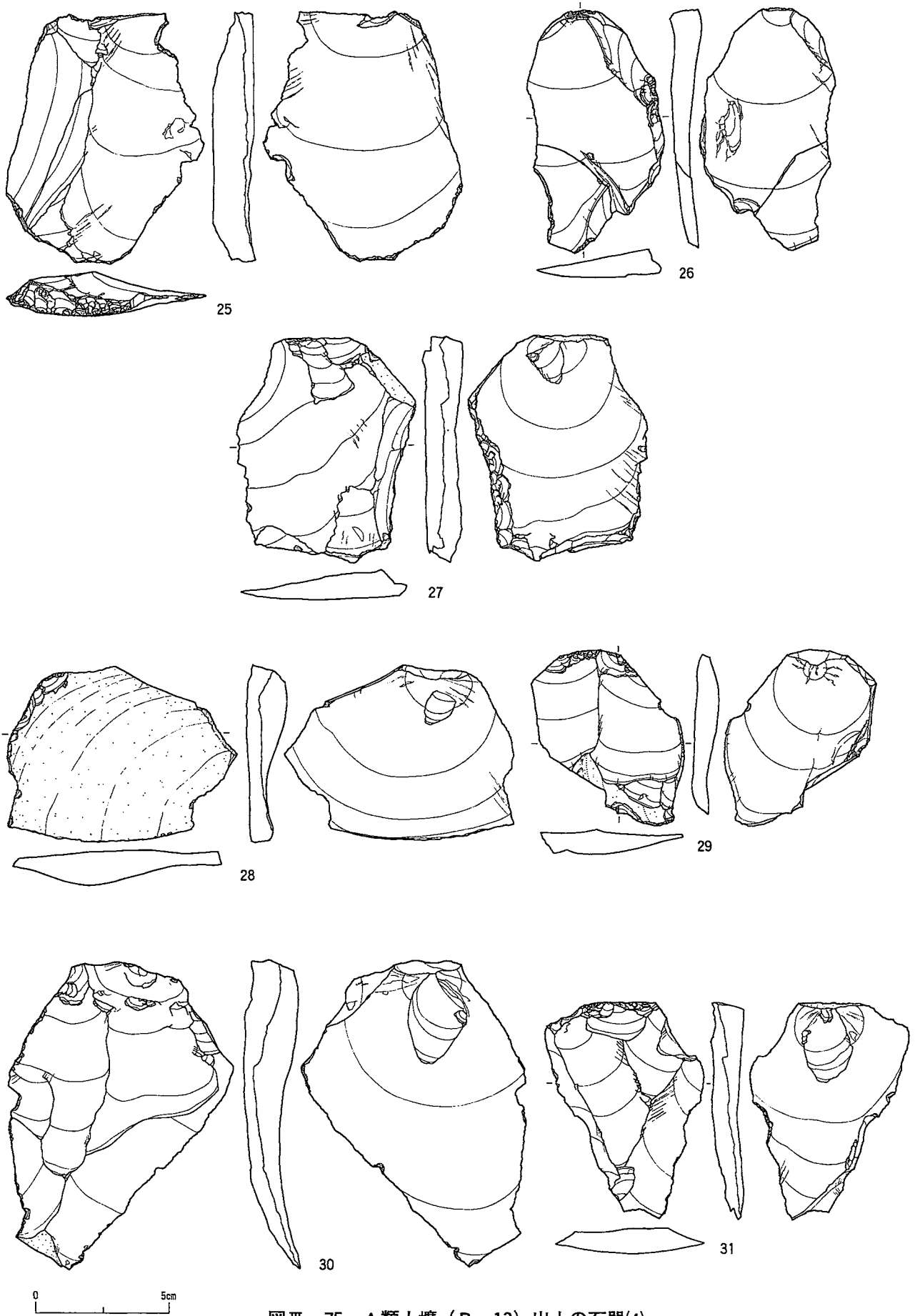
図Ⅲ-72 A類土壌 (P-13) 出土の石器(1)



図Ⅲ-73 A類土壌(P-13)出土の石器(2)

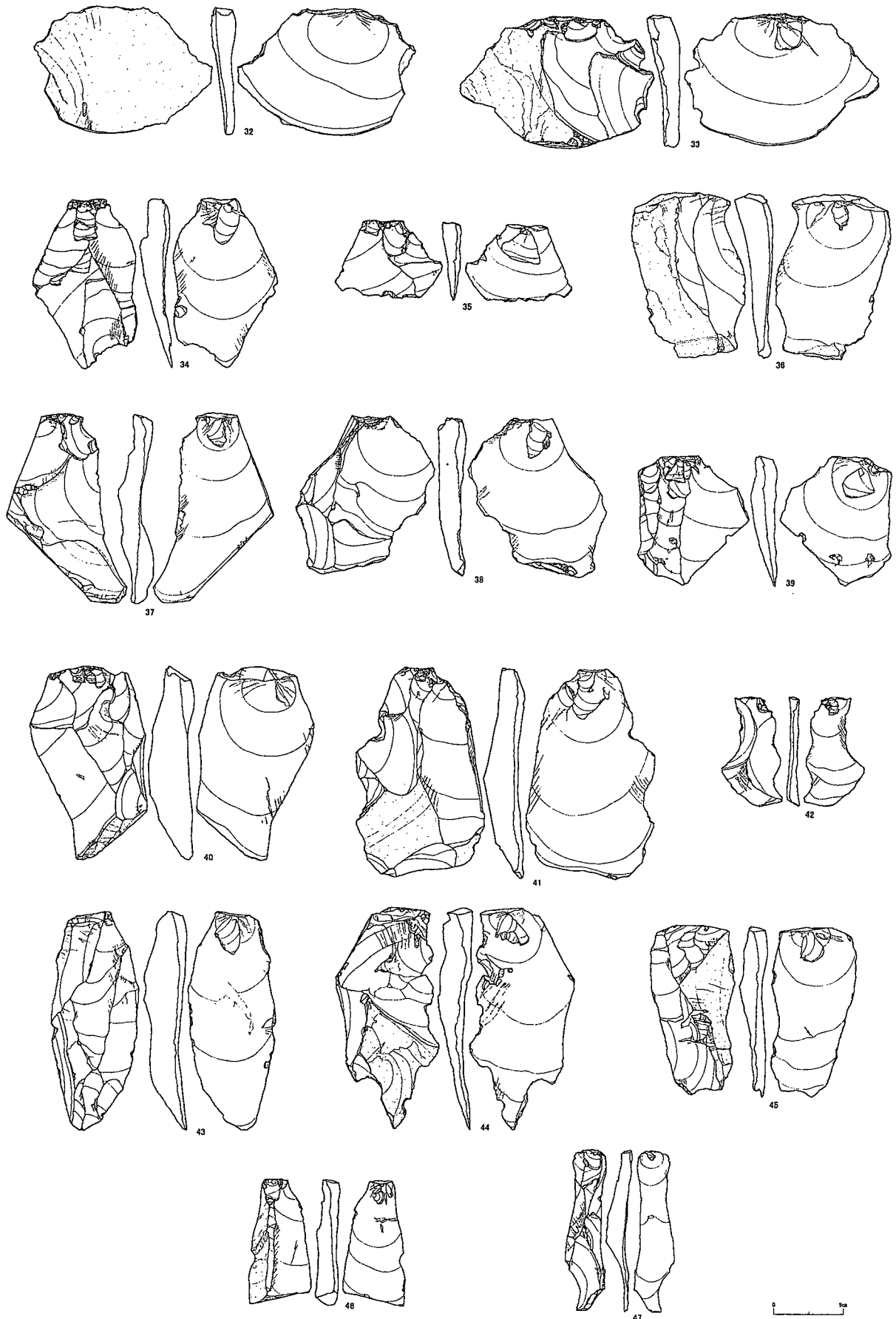


図Ⅲ-74 A類土壌 (P-13) 出土の石器(3)



図Ⅲ-75 A類土壌 (P-13) 出土の石器(4)

III 遺構と遺構出土の遺物



図Ⅲ-76 A類土壌 (P-13) 出土の石器(5)

9 (接合資料8)

4点のフレイクが接合している。節理による平坦面を打面とし、①、②を剥離した後、右方向に60°打面を変えて③の剥離を行っている。そののち打面を元に戻して④を剥離しているが、③、④間には接合していない剥片が数枚あるとみられる。フレイクはいずれも背面に原石面を残しており、不定形である。

10 (接合資料9)

2点のフレイクが接合している。節理による平坦面を打面とし、①、②(46)を連続して剥離している。フレイクは概ね縦長剥片であるが、厚手である。

11 (接合資料10)

2点のフレイクが接合している。同一の打面から①、②を連続して剥離している。フレイクは2枚とも三角形を呈し、末端はややヒンジ状を呈する。

12 (接合資料11)

1点のUフレイク、1点のフレイクが接合している。節理による平坦面を打面とし、①、②を連続して剥離している。①がUフレイク(31)、②がフレイクである。

13 (接合資料12)

2点のフレイクが接合している。節理による平坦面を打面とし、①、②を連続して剥離している。フレイクは概ね縦長であるが、いずれも原石面を一部に残している。

14 (接合資料13)

2点のフレイクが接合している。腹面とみられる緩い曲面を打面とし、やや角度を変えて①、②の剥片を連続して剥離している。フレイクは不定形で厚い。

15 (接合資料14)

2点のフレイクが接合したものである。節理による平坦面を打面とし、①、②を連続して剥離している。剥離との先後関係は不明だが、①の打面付近は細部調整がみられる。

16 (接合資料15)

2点のフレイクが接合したものである。剥離による緩やかな曲面を打面とし、2回の剥離を行った後、剥離軸を40°右に傾けて②を剥離している。フレイクは2点とも原石面を残しており、厚い。

17 (接合資料16)

2点のフレイクが接合したものである。剥離による緩やかな曲面を打面とし、同一方向から3回の剥離を行っている。そのうち2回目の剥離を除いた2点が接合している。2点ともやや横長の不定形な厚手のフレイクである。

18~20は両面調整石器である。18は原石をそのまま加工したものとみられ図の正面端部に原石面を残している。全体を粗い調整によって棍棒状に加工されている(IV 2)。19は剥片素材とみられるもので全体を粗い調整によって棒状に加工されるものである(IV 2)。20は横長剥片の周縁を加工し、台形様に整形される。なお18~20の石材は玄武岩である。21は石槍(ⅠB 2)である。両面に粗い調整が施され、木の葉状に整形される。22、23はスクレイパーである。22は先端の尖る縦長剥片を用い、背面左側縁の一部に直線状の刃部がつくものである(ⅢB 2 b)。23は横長剥片を用い、腹面右側縁から打瘤を削るかのような連続する細部調整が施されるものである(ⅢB 3 b)。22は接合資料5の①である。24~29はRフレイクである。原石面または節理面の残る不定形剥片を用い、剥片の厚みを減らすような急角度の調整がなされるものがほとんどである。30、31はUフレイクである。不定形な

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

剥片を素材とするもの（VB2c）である。30は背面右側縁に微細剥離痕がみられるもの、31は腹面右側縁に抉入する微細剥離がみられるものである。31は接合資料11の①である。32～47はフレイク。原石面や節理面を残し、やや厚手の不定形剥片が多い。

時期 土壌が駒ヶ岳火山灰g層を切って構築されること、付近から出土している遺物、また玄武岩製両面調整石器の類例から、縄文時代中期前半のものである可能性が高い。（立田）

P-21 （図Ⅲ-77、表1・2・5、図版20・50）

位置 S-18-d

規模 68×48/66×56/32

長軸方向 N-162.5°-W

平面形 不整楕円形

確認・調査 IV層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。長軸方向に半截した結果、やや平坦な壙底、急に立ち上がる壁を確認し、土壌であることがわかった。平面形は壙口が不整楕円形、壙底は円形を呈する。覆土は5層に区分した。3層は自然堆積の可能性があるがその他は埋め戻しによるものとみられる。

遺物 床面から北海道式石冠1点、礫2点がまとまって出土している。1は壙底から出土した北海道式石冠（Ⅷ4）である。機能部はよく使用され、片減りしている。

時期 床面から出土した北海道式石冠から縄文時代中期前半のものとみられる。（立田）

P-24 （図Ⅲ-77、表1・2・4、図版21・50）

位置 O-22-c、O-23-b

規模 82×67/74×64/46

長軸方向 N-172°-W

平面形 不整楕円形

確認・調査 IV層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。長軸方向に半截して壙底、壁を確認して土壌であることがわかった。平面形は壙口では不整な楕円形を呈し、壙底は円形を呈する。覆土の中位から壙底にかけて袋状に膨らむフラスコ状を呈する。覆土は10層に分層した。すべての層が埋め戻しとみられる汚れた土かあるいは炭化物が混じる土である。

遺物 1は壙底から出土した北海道式石冠（Ⅷ4）である。機能部は一部を欠損するが、よく使われ円滑である。

時期 壙底から出土した北海道式石冠から縄文時代中期前半のものとみられる。（立田）

P-30 （図Ⅲ-78、表1・2・5、図版22・50）

位置 P-20-a・b・d

規模 72×54/64×50/32

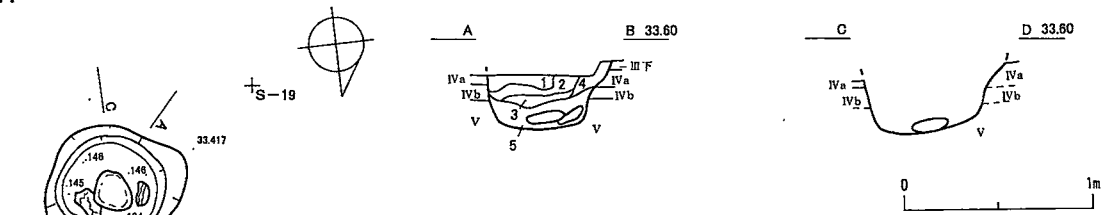
長軸方向 N-41°-W

平面形 楕円形

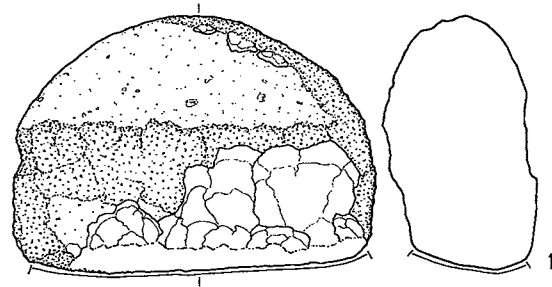
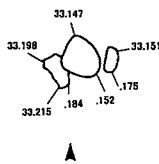
確認・調査 IV a層で石皿片が出土したので、遺物を残したままIV b層まで掘り下げたところ、周囲に灰黄色土の落ち込みを確認した。壁の立ち上がりは急で、底面はほぼ平らである。

遺物の出土状況 覆土中位で石皿片が使用面を上にした状態で出土し、その直下から北海道式石冠(1)

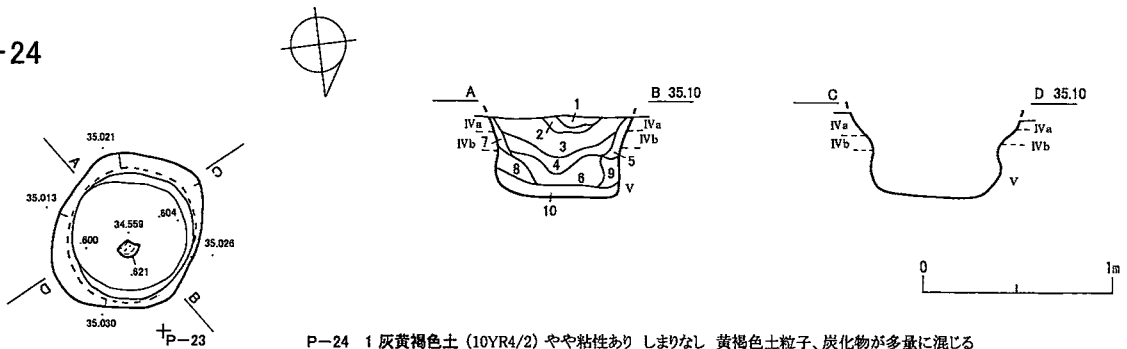
P-21



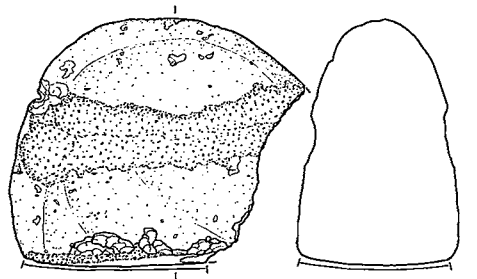
- P-21
- | | | | | |
|---------|-----------|------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色土 | (10YR3/2) | 粘性あり | しまりなし | 黄褐色土粒子、炭化物が多く混じる |
| 2 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性あり | しまりなし | 黄褐色土粒子、炭化物が少量混じる |
| 3 黒色土 | (10YR2/1) | 粘性なし | しまりなし | |
| 4 灰黄褐色土 | (10YR4/2) | 粘性あり | しまりなし | 黄褐色土ブロックが多く混じる |
| 5 灰黄褐色土 | (10YR4/2) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロック、岩片状の砂粒が多く混じる |



P-24



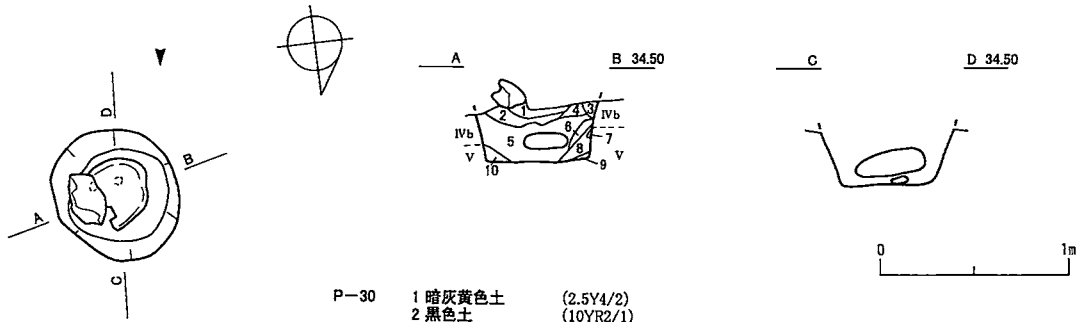
- P-24
- | | | | | |
|---------|-----------|--------|---------|--------------------|
| 1 灰黄褐色土 | (10YR4/2) | やや粘性あり | しまりなし | 黄褐色土粒子、炭化物が多量に混じる |
| 2 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土粒子が若干混じる |
| 3 黒褐色土 | (10YR3/2) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロックが多く混じる |
| 4 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性なし | しまりなし | 暗褐色土ブロックが若干混じる |
| 5 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロックが斑状に混じる |
| 6 灰黄褐色土 | (10YR4/2) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる |
| 7 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性あり | ややしまりあり | 黄褐色土ブロックが多く混じる |
| 8 明黄褐色土 | (10YR7/6) | 粘性なし | しまりなし | 暗褐色土+明黄褐色土 |
| 9 暗褐色土 | (10YR3/3) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロックが斑状に多く混じる |
| 10 黒褐色土 | (10YR3/1) | 粘性なし | しまりなし | 黄褐色土ブロックが多く混じる |



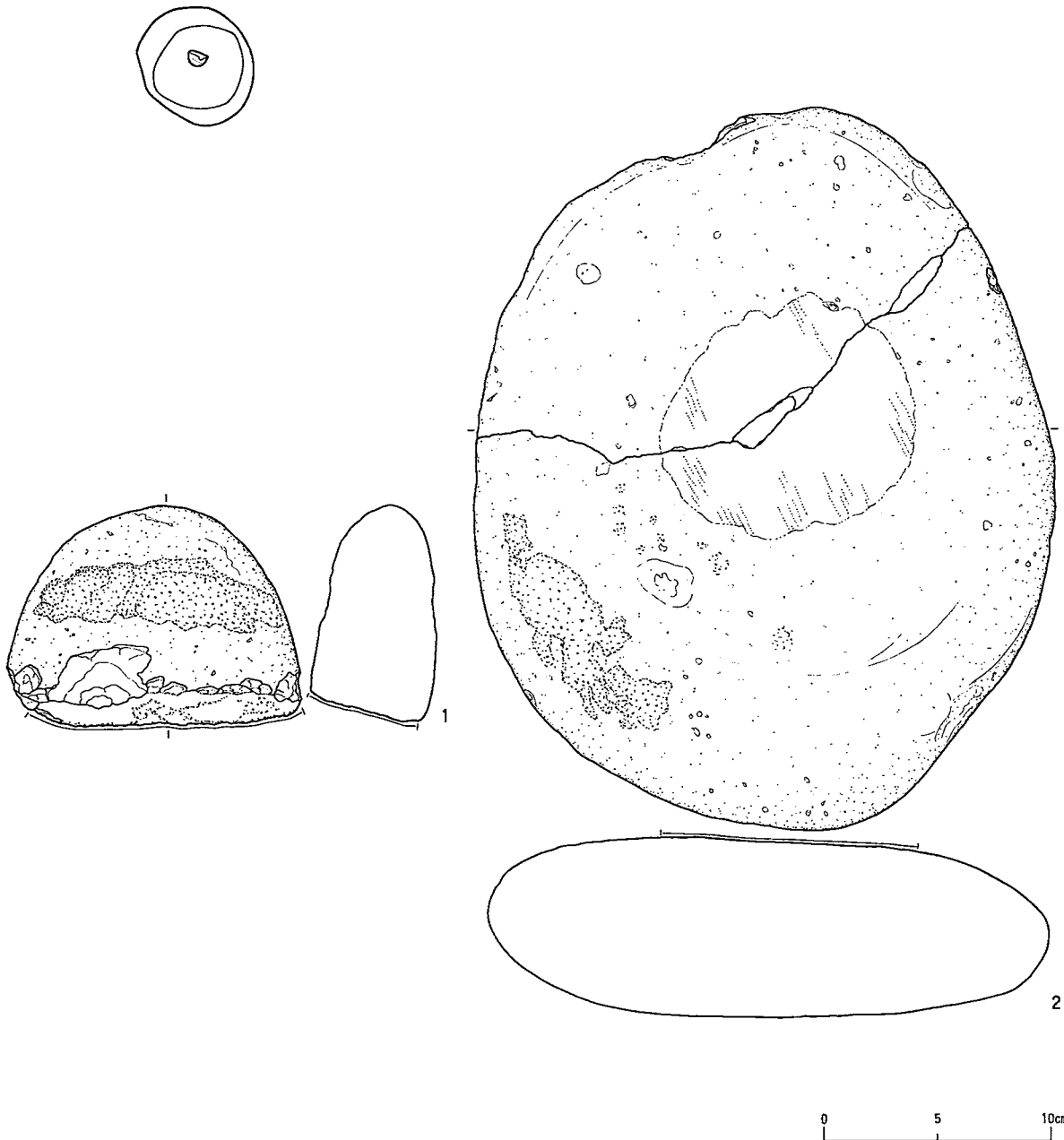
図Ⅲ-77 A類土壌 (P-21・24) と出土遺物

III 遺構と遺構出土の遺物

P-30



- P-30
- | | | |
|------------|-----------|------------|
| 1 暗灰黄色土 | (2.5Y4/2) | |
| 2 黒色土 | (10YR2/1) | |
| 3 オリーブ褐色土 | (2.5Y4/6) | |
| 4 オリーブ褐色土 | (2.5Y4/3) | |
| 5 暗オリーブ褐色土 | (2.5Y3/3) | 黄褐色土粒子が混じる |
| 6 黒褐色土 | (2.5Y3/1) | 黄褐色土粒子が混じる |
| 7 黄褐色土 | (2.5Y5/6) | 黒褐色土が混じる |
| 8 オリーブ褐色土 | (2.5Y4/4) | ボンボンしている |
| 9 黄褐色土 | (2.5Y5/6) | |
| 10 暗黄褐色土 | (2.5Y6/8) | ややボンボンしている |



図III-78 A類土壌 (P-30) と出土遺物

が横倒しの状態で出土した。覆土の石皿片はIV a層で確認されていた破片と接合し、完形(2)になった。
(中田)

遺物 1は墳底から出土した北海道式石冠(Ⅷ4)である。2は石皿(X)である。扁平礫の表面が使用されるもので、使用面はほぼ円形を呈し円滑である。石皿はこの使用面を中心に2つに割れている。
(立田)

時期 周辺の出土遺物から縄文中期前半のものと考えられる。
(中田)

(5) その他の土壌

P-1 (図Ⅲ-79、表1・2、図版79)

位置 H-23-c・d、H-24-a・b **規模** 280×240/226×189/44

長軸方向 N-116°-W

平面形 不整楕円形

確認・調査 試掘調査時と平成12年度のトレンチ調査時にV層上面で灰黄褐色土の落ち込みを確認した。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は中央部がやや深くなっている。南側の底面では柱穴状の小ピットが検出された。小ピットの先端は尖っている。

遺物 覆土1からフレイク1点が出土した。流れ込んだ遺物と考えられる。

時期 縄文時代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。
(中田)

P-2 (図Ⅲ-79、表1・2、図版22)

位置 K-22-c、K-23-b、L-22-d、L-23-a **規模** 108×54/(77)×(48)/72

長軸方向 N-65°-W

平面形 不整円形

確認・調査 H-2、P-7の調査中、IV b層中でH-2の南壁に暗褐色土の落ち込みを確認した。壁はゆるやかに立ち上がる。北壁はH-2に切られている。覆土は黄褐色土粒や炭化物を含み、埋め戻し土の可能性はある。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。
(中田)

P-8 (図Ⅲ-80、表1・2、図版23)

位置 M-22-b・c

規模 246×226/148×120/22

長軸方向 N-126.5°-W

平面形 楕円形

確認・調査 P-6の調査時に北側のトレンチで断面を確認したものである。P-6に平面形のほとんどを破壊されるが楕円形を呈するとみられる。墳底は平坦で壁は緩やかである。P-6より古い遺構であると判断したが、P-6と一体で墳口の広がる土壌であった可能性もある。覆土は自然堆積とみられる黒褐色土である。

遺物 出土していない。

時期 周囲で検出される遺構の時期から、縄文時代中期前半のものとみられる。
(立田)

P-9 (図Ⅲ-80・85、表1・2・4、図版23・58)

位置 O-20-d

規模 (86)×(60)/90×58/40

長軸方向 N-83°-W

平面形 不整円形

確認・調査 Ⅲ層下部を調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。長軸方向にトレンチを設定してV層まで掘り下げると、椀状を呈する断面形を確認したため、土壌とした。覆土は4層に区分した。黒褐色土を基調とするが、壙底直上の4層は黄褐色土が混じる汚れた土である。

遺物 覆土からⅢ群a類土器片2点、フレイク1点、礫片1点が出土している。図Ⅲ-85-2は覆土から出土したⅢ群a類の胴部破片である。胎土に海綿骨針を含む。

時期 検出面および周囲で出土する遺物の時期から、縄文時代中期前半のものとみられる。(立田)

P-11 (図Ⅲ-80、表1・2、図版23)

位置 Q-29-c、R-29-d

規模 94×74/92×78/13

長軸方向 N-17°-W

平面形 ほぼ円形

確認・調査 IV層上面を精査中に黒色土の落ち込みを検出した。半截した結果壙底、壁を確認して土壌であることがわかった。平面形はほぼ円形、断面は皿状を呈する。覆土は自然堆積とみられる黒色土である。壙底から小土壌が検出されたが、木根かもしれない。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、覆土の堆積状況から縄文時代のものであるとみられる。(立田)

P-12 (図Ⅲ-81、表1・2、図版23~24)

位置 R-28-d、R-29-a

規模 86×75/76×64/9

長軸方向 N-84°-W

平面形 楕円形

確認・調査 IVb層を精査中に黒色土の落ち込みを確認した。半截した結果壙底と壁を確認し、土壌であることがわかった。平面形は東西方向にやや長い楕円形、断面は皿状を呈する。覆土はⅢ層相当の自然堆積である。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、覆土の堆積状況から縄文時代のものであるとみられる。(立田)

P-14 (図Ⅲ-81・85、表1・2・4、図版24・58)

位置 Q-19-c

規模 44×32/42×32/14

長軸方向 N-178°-W

平面形 円形

確認・調査 IVb層上面で褐灰色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中央には礫石器が伴って出土していた。礫の中心を通るように半截した結果、壁、壙底を確認し、土壌であることがわかった。

遺物 覆土から北海道式石冠の未製品とみられるものが1点出土したほか、覆土からⅢ群a類土器5点、フレイク1点、礫片5点が出土している。図Ⅲ-85-3は覆土から出土したⅢ群a類の胴部破片である。割れ面の一部に炭化物が付着している。

時期 覆土から出土した北海道式石冠から、縄文時代中期前半のものとみられる。(立田)

P-16 (図Ⅲ-81・85、表1・2・4、図版24・58)

位置 S-19-a・d

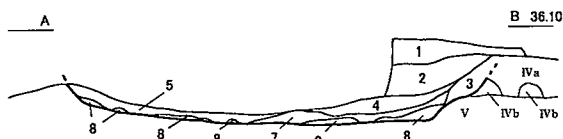
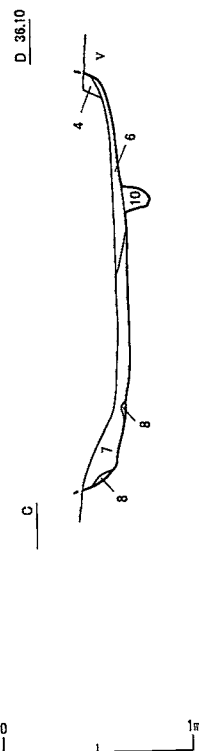
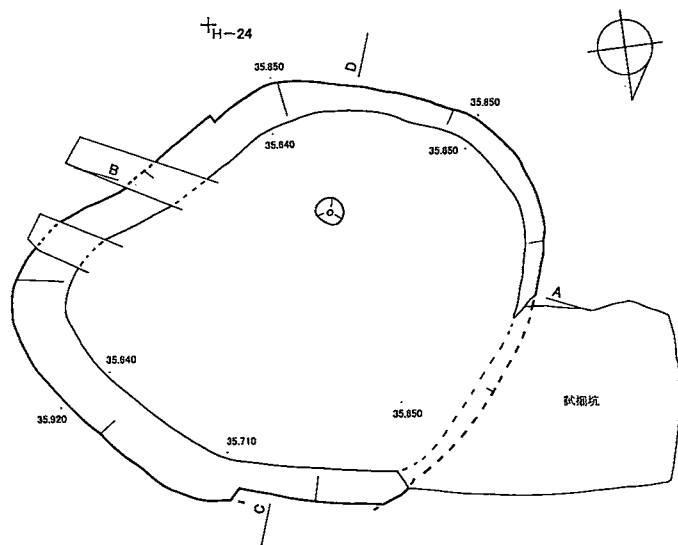
規模 54×38/52×36/20

長軸方向 N-120°-W

平面形 ほぼ円形

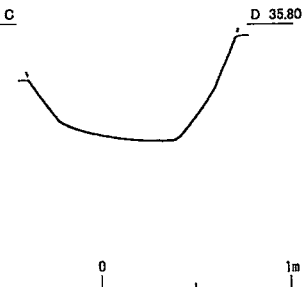
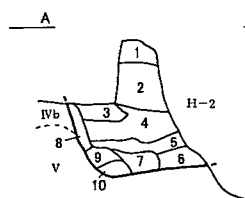
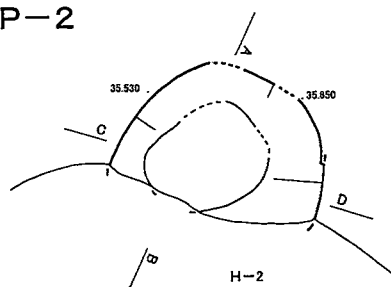
確認・調査 IV層上面を精査中に褐灰色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中央にはやや角のある人頭大の礫が伴っており、礫の中心を通るように半截した。その結果、壁、壙底を確認して土壌であ

P-1



- | | | |
|-----|---------------------|-----------------------------|
| P-1 | 1 黒色土 (5Y2/1) | 乾燥するとクラックが入る III層に相当する |
| | 2 オリーブ褐色土 (2.5Y4/3) | 黄褐色土粒子がわずかに混じる |
| | 3 黄褐色土 (2.5Y5/6) | 黒色土ブロックがわずかに混じる |
| | 4 オリーブ褐色土 (2.5Y4/4) | やや粘性あり 黄褐色土ブロック、炭化物がわずかに混じる |
| | 5 灰黄褐色土 (10YR4/2) | 黄褐色土が混じる |
| | 6 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | 砂質 |
| | 7 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) | 黄褐色土粒子、炭化物が混じる |
| | 8 明黄褐色土 (2.5Y6/8) | 灰黄褐色土が混じる |
| | 9 黄褐色粗砂 (10YR5/6) | |
| | 10 黒褐色土 (2.5Y3/1) | 黄褐色土ブロックが混じる 炭化物がわずかに混じる |

P-2

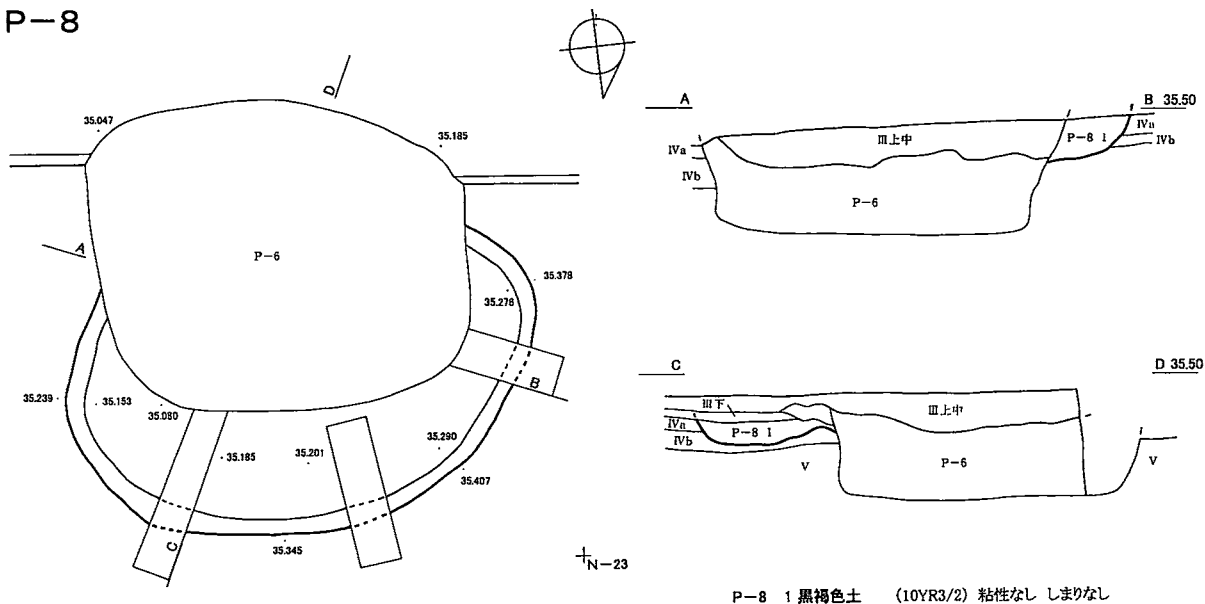


- | | | |
|-----|---------------------|-------------|
| P-2 | 1 黒褐色土 (10YR3/4) | (IIIb層) |
| | 2 暗褐色土 (10YR3/1) | 黄褐色土粒子が混じる |
| | 3 黒褐色土 (2.5Y5/6) | 明黄褐色土が混じる |
| | 4 黄褐色土 (2.5Y4/4) | 炭化物が混じる |
| | 5 オリーブ褐色土 (2.5Y6/8) | 暗褐色土が混じる |
| | 6 明黄褐色土 (2.5Y5/2) | 炭化物がわずかに混じる |
| | 7 暗灰黄色土 (2.5Y6/6) | |
| | 8 明黄褐色土 (2.5Y4/3) | 炭化物がわずかに混じる |
| | 9 オリーブ褐色土 (2.5Y6/8) | |
| | 10 明黄褐色土 (2.5Y6/8) | |

図III-79 土壌 (P-1・2)

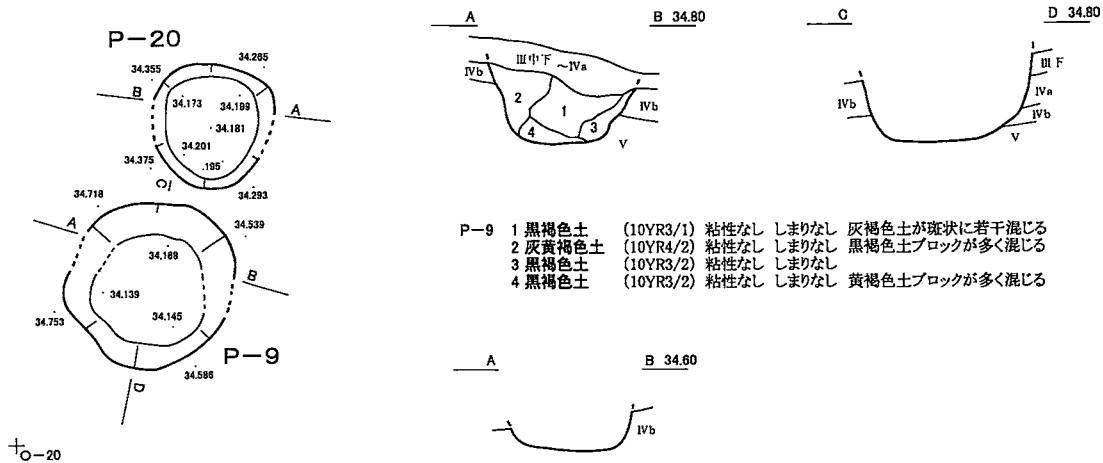
Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

P-8



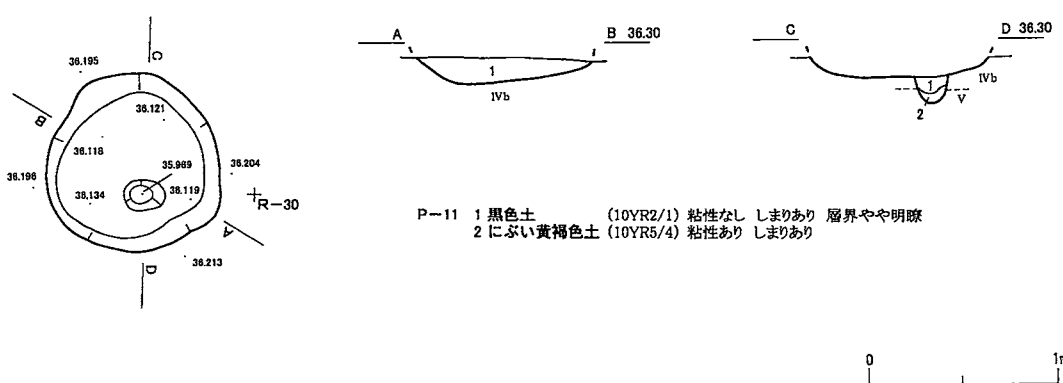
P-8 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし しまりなし

P-9・20

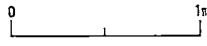


- P-9 1 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし しまりなし 灰褐色土が斑状に若干混じる
 2 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性なし しまりなし 黒褐色土ブロックが多く混じる
 3 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし しまりなし
 4 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが多く混じる

P-11



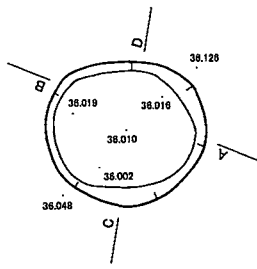
- P-11 1 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし しまりあり 層界やや明瞭
 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性あり しまりあり



図Ⅲ-80 土壌 (P-8・9・20・11)

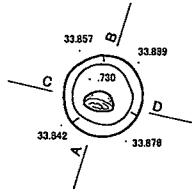
P-12

TR-29



P-12 1 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし しまりあり 層界やや明瞭

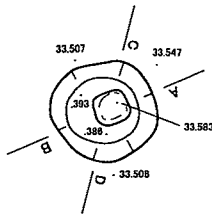
P-14



P-14 1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし
2 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性なし しまりなし

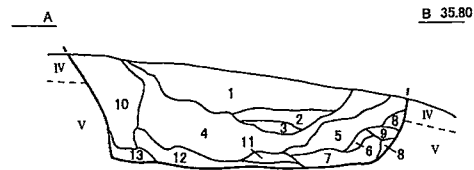
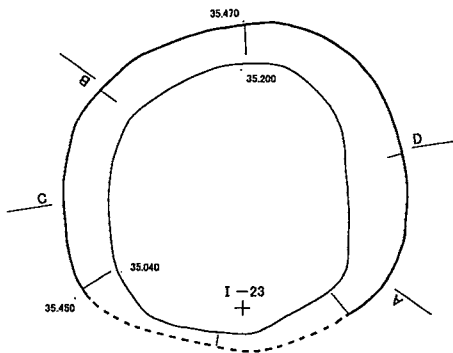
TR-20

P-16



P-16 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性なし ややしまりあり 黄褐色土
粒子、炭化物が若干混じる
2 褐灰色土 (10YR4/1) やや粘性あり ややしまりあり
3 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒
子が若干混じる

P-17



P-17 1 黒褐色土 (10YR2/2) やや粘性あり
2 暗褐色土 (10YR3/3)
3 黄褐色土 (2.5Y5/6) 黄褐色土ブロックが混じる
4 オリーブ褐色土 (2.5Y4/3)
5 黄褐色土 (2.5Y5/4)
6 明黄褐色土 (2.5Y6/6)
7 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 黄褐色土粒子が混じる
8 明黄褐色土 (2.5Y6/8)
9 黒褐色土 (2.5Y3/2) ボソボソしている (木根跡)
10 黄褐色土 (2.5Y5/4)
11 オリーブ褐色土 (2.5Y4/4)
12 明黄褐色土 (2.5Y6/8) ややボソボソしている 黄褐色土・暗褐色土ブロック
がわずかに混じる
13 黄褐色土 (2.5Y5/6)

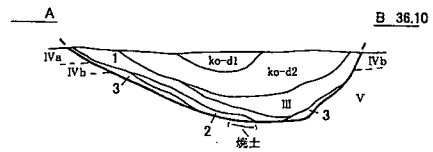
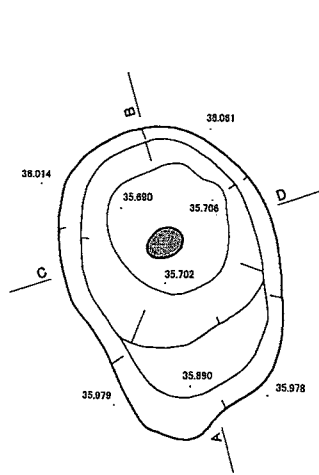


図Ⅲ-81 土壌 (P-12・14・16・17)

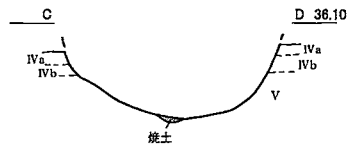
III 遺構と遺構出土の遺物

P-18

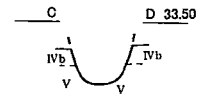
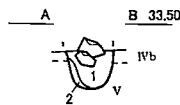
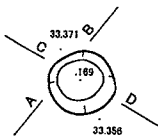
M-28



- P-18 ko-d1 黄灰色土 (2.5Y6/1) 砂質シルト
 ko-d2 灰白色土 (2.5Y8/1) シルト
 III 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性なし しまりなし
 焼土 明赤褐色土 (5YR5/6) 粘性あり しまりあり
 1 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性なし しまりあり 黄褐色土・黒色土ブロックが多く混じる
 2 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし しまりあり 黄褐色土・黒色土ブロックが少量混じる
 3 明黄褐色土 (10YR6/8) 粘性なし ややしまりあり 黒色土ブロックが多く混じる

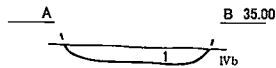
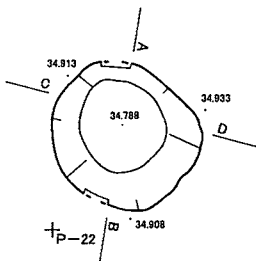


P-19



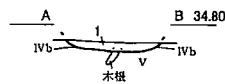
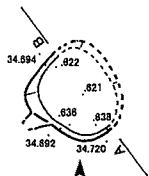
- P-19 1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性あり ややしまりあり 炭化物、黄褐色土粒子が多く混じる
 2 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性あり ややしまりあり

P-22

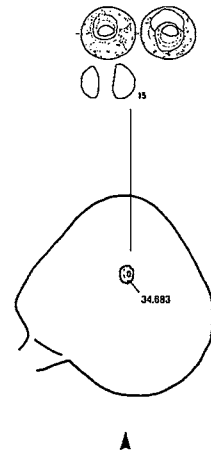


- P-22 1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが多く混じる

P-23

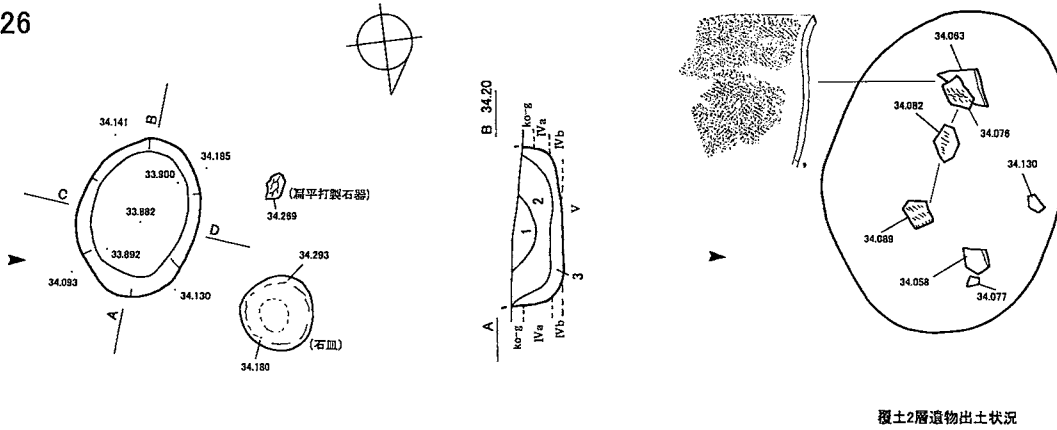


- P-23 1 黒褐色土 (10YR3/1) 黄褐色土粒子が多く混じる



図III-82 土壌 (P-18・19・22・23)

P-26

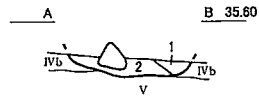
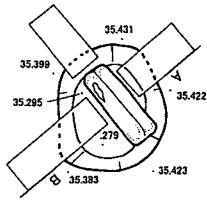


覆土2層遺物出土状況

- P-26 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし しまりなし
 2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり しまりなし 黄褐色土粒子、炭化物が多く混じる
 3 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性なし ややしまりあり 黄褐色土・灰褐色土ブロックが多く混じる

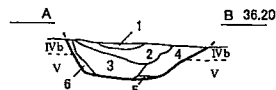
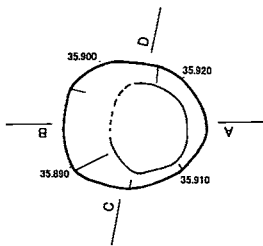


P-27



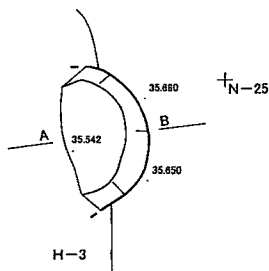
- P-27 1 黒色土 (10YR2/1) 粘性あり しまりなし
 2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子が若干混じる

P-28



- P-28 1 浅黄色土 (2.5Y7/4) 黄褐色土粒子が混じる
 2 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 黒褐色土・黄褐色土ブロックが混じる
 3 オリーブ褐色土 (2.5Y4/4) 黒褐色土・黄褐色土ブロックが混じる
 4 黄褐色土 (2.5Y5/6) 黒褐色土ブロックが混じる
 5 明黄褐色土 (2.5Y6/6) 黒褐色土ブロックが混じる
 6 明黄褐色土 (2.5Y6/8) 黒褐色土粒子がわずかに混じる

P-29



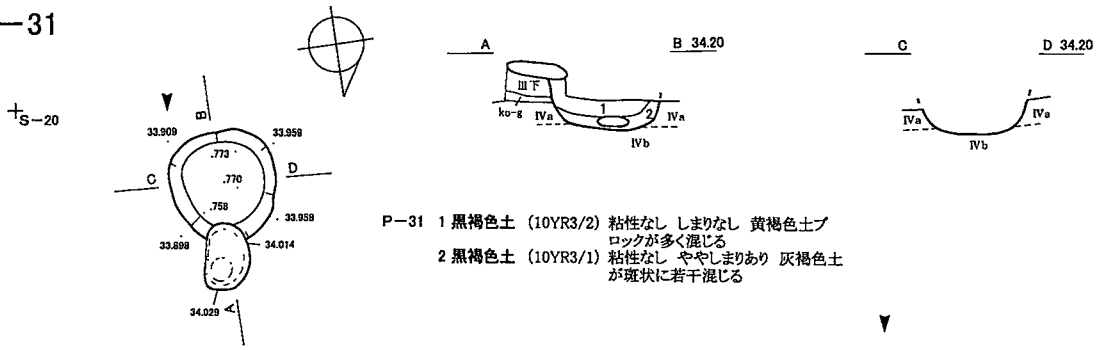
- P-29 1 黒褐色土 (10YR3/2) やや粘性あり しまりなし 黄褐色土粒子が多く混じる 炭化物が少量混じる



図Ⅲ-83 土壌 (P-26・27・28・29)

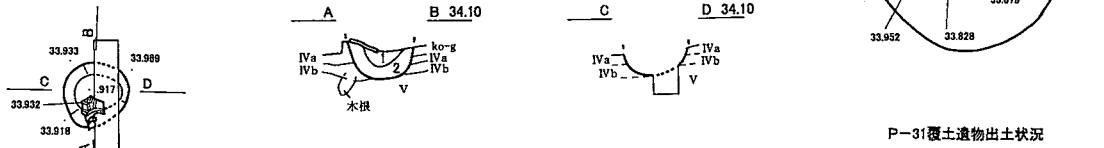
Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

P-31



P-31 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし しまりなし 黄褐色土
 ロックが多く混じる
 2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし ややしまりあり 灰褐色土
 が斑状に若干混じる

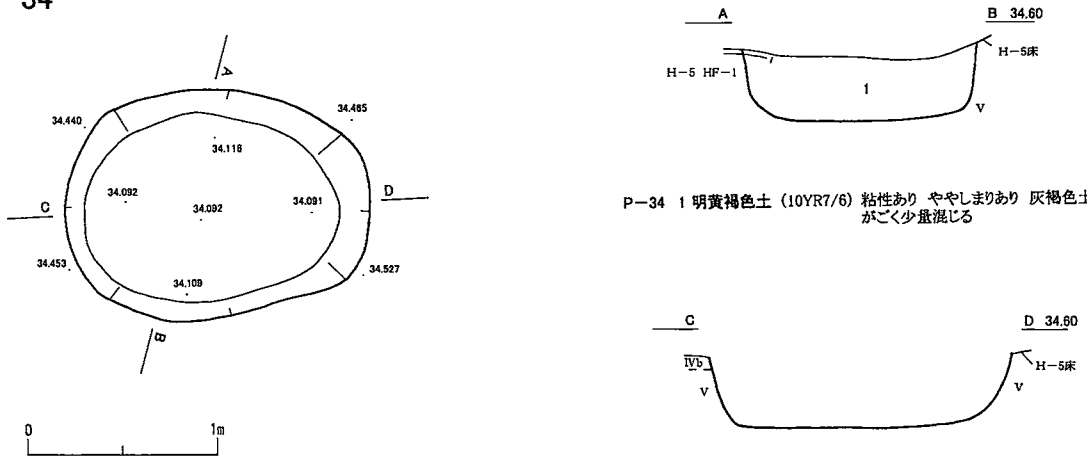
P-33



P-33 1 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし しまりなし
 2 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土粒
 子が斑状に若干混じる

P-31覆土遺物出土状況

P-34



P-34 1 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性あり ややしまりあり 灰褐色土
 がごく少量混じる

図Ⅲ-84 土坑 (P-31・33・34)

ることがわかった。平面形はほぼ円形、壙底は平坦、壁は急である。覆土は3層に区分した。1層と3層については人為的堆積の可能性はある。

遺物 覆土から礫1点のほか、Ⅲ群a類土器片が3点出土している。 (立田)

図Ⅲ-85-4・5は覆土から出土したⅢ群a類の胴部破片で、同一個体の可能性はある。胎土に海綿骨針を含む。 (中田)

時期 周囲で出土する遺物から縄文時代中期前半のものとみられる。 (立田)

P-17 (図Ⅲ-81、表1・2、図版24~25)

位置 H-22-c、H-23-b、I-22-d、I-23-a **規模** 182×128/(170)×140/54

長軸方向 N-105° -W **平面形** 不整円形

確認・調査 Ⅲ層5回目を調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。壁面はゆるやかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

遺物 北西壁際の覆土上位からUフレイクが1点出土している。

時期 縄文時代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。 (中田)

P-18 (図Ⅲ-82・85、表1・2・4、図版25・58)

位置 M-26-a・b・d **規模** 156×134/114×92/38

長軸方向 N-27° -W **平面形** 不整楕円形

確認・調査 V層上面を精査中に駒ヶ岳火山灰d層を伴う黒褐色土の落ち込みを確認した。半截した結果、椀状の断面形を確認して土壙であることがわかった。平面形は瓢箪状の楕円形を呈する。壙底の最深部に焼土が検出された。やや不明瞭で小規模な焼土である。覆土は3層に区分した。黒色土、暗褐色土、黄褐色土が混じる汚れた土である。これらの土は上位にⅢ層相当の自然堆積に厚く覆われており、ほぼ開口状態にあったとみられる。なお壙底には3~4本単位の引っかいたような溝が残っており、この土壙の製作時の痕跡とみられる。 (立田)

遺物 図Ⅲ-85-6・7は覆土から出土したⅢ群a類の胴部破片である。7は無文で、胎土に海綿骨針を含む。 (中田)

時期 底面から遺物が出土していないためはっきりしないが、覆土の黒褐色土の堆積状況から、縄文時代中期から後期にかけての時期のものである可能性が高い。 (立田)

P-19 (図Ⅲ-82・85、表1・2・4、図版25・58)

位置 S-18-a **規模** 36×33/34×22/23

長軸方向 N-71.5° -W **平面形** ほぼ円形

確認・調査 IV層上面を精査中に中央に遺物を伴う褐灰色土の落ち込みを確認した。半截するとU字状の断面形を確認でき、土壙であることがわかった。平面形はほぼ円形である。覆土は2層に区分した。覆土1層は人為的堆積の可能性はある。

遺物 覆土からⅢ群a類土器1点、やや大きなフレイクが2点出土している。 (立田)

図Ⅲ-85-8は覆土から出土したⅢ群a類の底部片である。内外面ともよくみがかれている。

(中田)

時期 周辺で検出される遺構の時期から、縄文時代中期のものとしてみられる。 (立田)

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

P-20 (図Ⅲ-80、表1・2、図版25)

位置 O-20-c・d

規模 (64)×50/66×54/18

長軸方向 N-91°-W

平面形 ほぼ円形

確認・調査 IV層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。半截した結果、自然攪乱と判断し、残りを掘り下げたが、椀状を呈する形状であったため、土壙とすることにした。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、周囲の遺物出土状況から縄文時代中期前半のものとみられる。(立田)

P-22 (図Ⅲ-82、表1・2、図版26)

位置 O-22-b

規模 80×46/62×48/12

長軸方向 N-77.5°-W

平面形 不整円形

確認・調査 IV層を精査中、褐灰色土の落ち込みを検出した。長軸にあわせてトレンチを設定してV層まで掘り下げると、皿状の断面を確認でき土壙であることがわかった。平面形は不整円形、覆土は自然堆積とみられる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期前半のものとみられる。(立田)

P-23 (図Ⅲ-82・85、表1・2・5、図版26・58)

位置 Q-22-c・d

規模 50×44/(44)×(37)/6

長軸方向 N-51°-W

平面形 不整楕円形

確認・調査 IV層を精査中、黒褐色土の落ち込みを確認した。H-1の外周柱穴を想定してトレンチを入れたところ、浅い皿状の断面を確認したため、土壙であることがわかった。平面形は不整楕円形である。また壙底から木根が確認されており、土壙は自然攪乱の可能性はある。

遺物 15は覆土から出土した軽石製の玉である。クルミ大の軽石を用い、ほぼ中心に穿孔される。

時期 周囲で出土している遺物から、縄文時代中期前半のものとみられる。(立田)

P-26 (図Ⅲ-83・85、表1・2・4・5、図版26・58)

位置 R-20-b

規模 86×67/64×50/28

長軸方向 N-178.5°-W

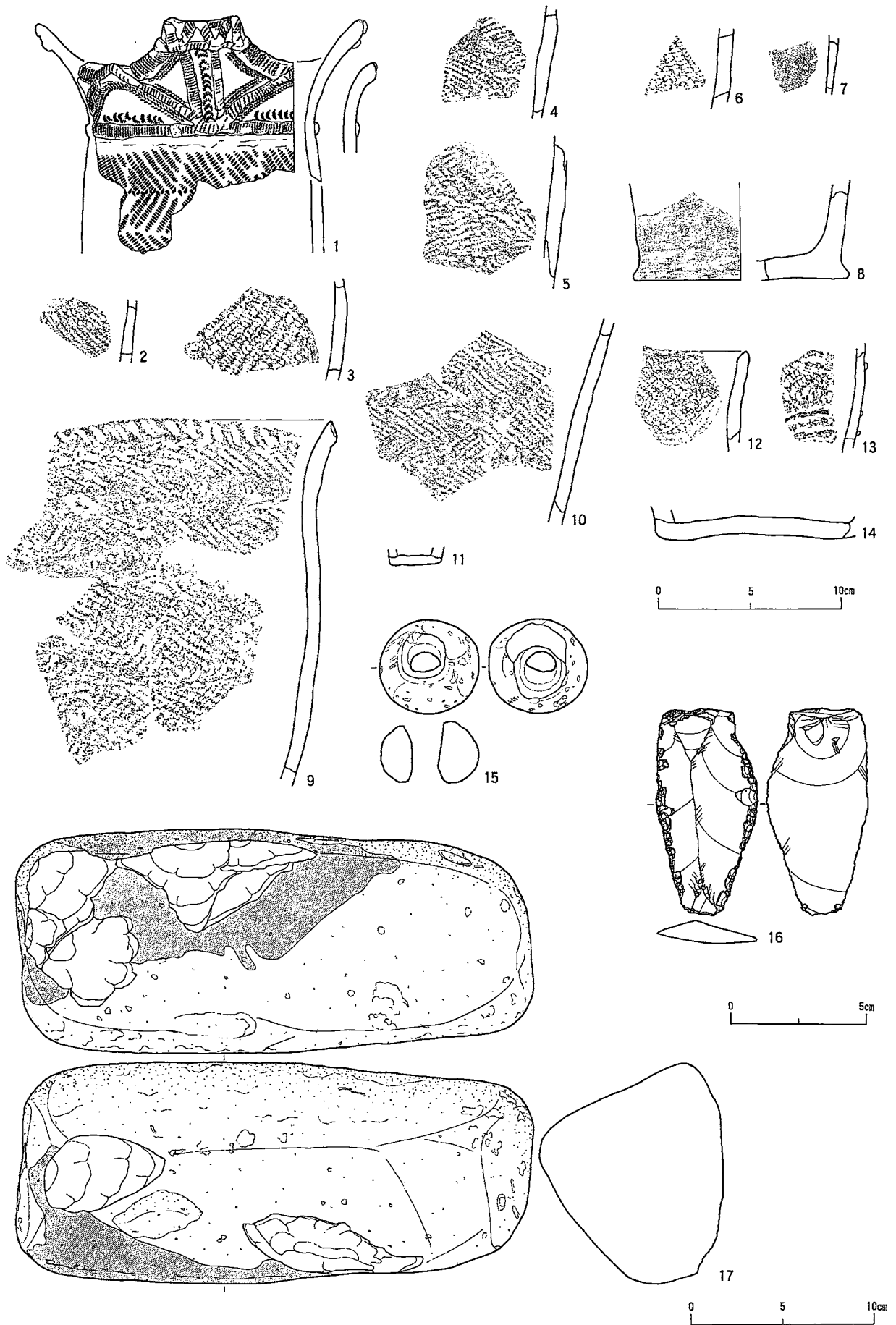
平面形 楕円形

確認・調査 IV層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。西側を半截して壙底、壁を確認して土壙であることがわかった。平面形は南北に長い楕円形、壙底はほぼ平坦で壁は急である。覆土は3層に区分した。1層は自然堆積、2、3層は人為的堆積の可能性はある。

遺物 図Ⅲ-85-9~11は覆土から出土したものである。9は口縁部の断面が切り出し状になり、ヘラ状工具による刻み目に加えられている。外面は炭化物が付着している。11は小型の土器の底部片である。10・11は胎土に礫や海綿骨針を含む。16はスクレイパー。縦長剥片を用い、外反する刃部がつくもの(ⅢB2a)である。

時期 周囲で出土する遺物、また覆土出土の遺物から、縄文時代中期前半のものとみられる。

(立田)



図Ⅲ-85 土壙出土の遺物

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

P-27 (図Ⅲ-83・85、表1・2・5、図版27・58)

位置 N-23-b

規模 66×50/58×38/14

長軸方向 N-7°-W

平面形 不整楕円形

確認・調査 IV b層上面を精査中に、三角柱状の礫石器を伴う黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みより大きな遺構を想定してT字状にトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、浅い皿状の断面を確認して土壌であることがわかった。平面形は不整楕円形、覆土は2層に区分した。自然堆積とみられる。

遺物 1は覆土から出土した台石(X)である。三角柱状の礫を用い、稜の一部を敲打するものである。全体の約2分の1が被熱により黒変しており、敲打はその被熱痕の後に行われている。

時期 付近で検出される遺構の時期から、縄文時代中期前半のものとみられる。(立田)

P-28 (図Ⅲ-83、表1・2、図版27)

位置 Q-28-b・c

規模 76×(48)/68×40/21

長軸方向 N-98°-W

平面形 円形

確認・調査 遺構確認地区でIV b層を調査中に黄褐色土の落ち込みを確認した。壁面はゆるやかに立ち上がる。底面は南東側がわずかに深くなっている。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。(中田)

P-29 (図Ⅲ-83、表1・2、図版27)

位置 M-24-c、N-24-d

規模 78×58/45×32/12

長軸方向 N-8°-W

平面形 -

確認・調査 H-3の調査終了後、壁を精査していたところ、北西壁に黒褐色土の落ち込みを確認した。接線方向にトレンチを設定してV層まで掘り下げたところ、椀状を呈する断面を確認して土壌であることがわかった。H-3との先後関係は不明である。

遺物 出土していない。

時期 周囲で出土する遺物から、縄文時代中期前半のものとみられる。(立田)

P-31 (図Ⅲ-84・85、表1・2・4、図版28・58)

位置 S-20-a

規模 60×44/56×42/22

長軸方向 N-19°-W

平面形 ほぼ円形

確認・調査 IV層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みは検出面の北側に石皿を伴っていた。長軸方向を軸とし東側を半截した結果、壙底、壁を確認して土壌であることがわかった。平面形はほぼ円形、断面形はやや小さな平坦面のある椀状を呈する。

遺物 覆土からⅢ群a類土器13点、たたき石1点、フレイク1点、礫・礫片6点が出土している。

図Ⅲ-85-12~14は覆土から出土したⅢ群a類の土器片である。12は口縁部の断面がとがっている。13は縄文地に細い粘土紐が貼り付けられており、貼付帯の上には撚糸の圧痕がある。外面に炭化物が付着している。14は大型の土器の底部片で、内外面ともよくみがかれている。割れ面の一部に炭化物が付着している。(中田)

時期 覆土中から出土した土器から縄文時代中期前半のものと考えられる。(立田)

P-33 (図Ⅲ-84・85、表1・2・3、図版28)

位置 S-20-c

規模 34×24/34×20/20

長軸方向 N-95°-W

平面形 ほぼ円形

確認・調査 IV層上面を精査中に黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みは北西端にⅢ群a類土器のやや大きな破片を伴っていた。そのため土器が中心にかかるようにトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、椀状の断面形を確認し、土壌であることがわかった。

遺物 覆土からⅢ群a類土器が5点出土している。(立田)

図Ⅲ-85-1は覆土から出土し、弁状の突起をもつ。口縁部は無文地で、太い粘土紐で区画され、馬蹄形の圧痕が施されている。貼付帯上や貼付帯に沿って撚糸の圧痕がみられる。胴部には結束第1種羽状縄文が施されている。内外面の一部に炭化物が付着する。円筒土器上層b式に相当する。

(中田)

時期 周囲、覆土から出土する遺物から縄文時代中期前半のものとみられる。

P-34 (図Ⅲ-84、表1・2、図版28)

位置 R-22-b・c

規模 160×134/120×100/40

長軸方向 N-96.5°-W

平面形 楕円形

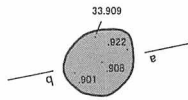
確認・調査 H-5の床面を精査中に汚れたロームの落ち込みを確認した。H-5の付属土壌を想定してトレンチをいれてV層まで掘り下げたところ不明瞭な断面形を確認した。半截して土壌であることを確認した。土層断面に覆土の落ち込みがみられなかったことから、明瞭ではないがH-5よりも古い土壌である可能性が高い。

遺物 覆土からⅢ群a類土器5点、フレイク2点が出土している。

時期 検出状況から、縄文時代中期前半のものとみられる。(立田)

III 遺構と遺構出土の遺物

F-2

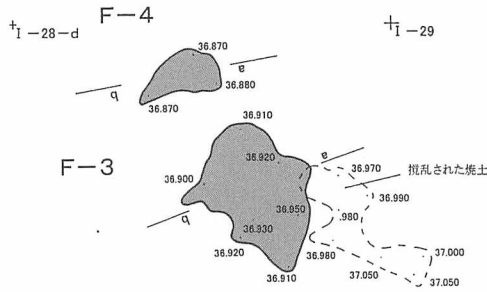


+R-20

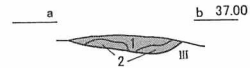


F-2 1 焼土 粘性なし しまりあり

F-3・4



+I-29



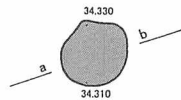
F-3 1 橙褐色土 焼土 暗褐色土が混じる
2 黒褐色土 焼土(橙褐色土)が混じる



F-4 1 橙褐色土 焼土 暗褐色土が混じる
2 暗褐色土 焼土(橙褐色土)が混じる

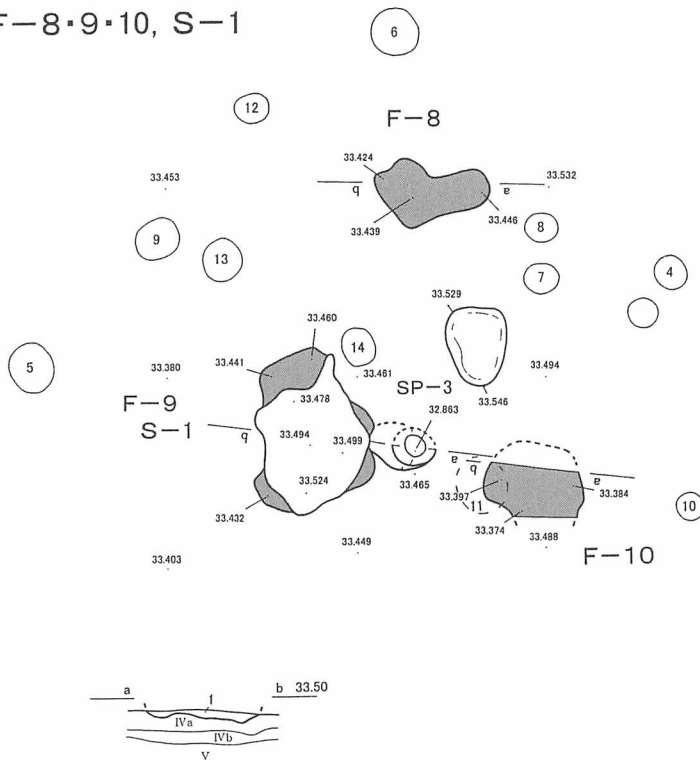
F-6

+Q-20-d

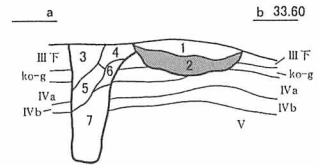


F-6 1 暗赤褐色土 (2.5YR3/4) 黒色土が混じる

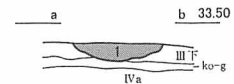
F-8・9・10, S-1



+S-19



S-1 1 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし しまりなし 5~3cmの円礫が多く混じる
F-9 2 橙土 (5YR7/8) 粘性なし しまりなし 灰褐色土が斑状に若干混じる
SP-3 3 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし しまりなし
4 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし しまりなし 灰褐色土・焼土ブロックが多量に混じる
5 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし しまりなし 灰褐色土・焼土ブロックが若干混じる
6 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり ややしまりあり
7 黒色土 (10YR2/1) 粘性あり しまりなし 黄褐色土粒子が斑状に若干混じる



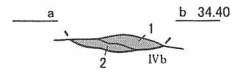
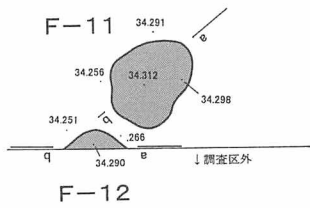
F-10 1 橙土 (5YR6/8) 粘性なし ややしまりあり 炭化物粒子が若干混じる



F-8 1 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性なし ややしまりあり 橙土粒子、炭化物粒子が若干混じる

図III-86 焼土 (F-2・3・4・6・8・9・10)、集石 (S-1)

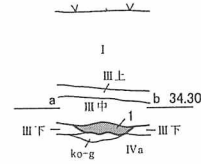
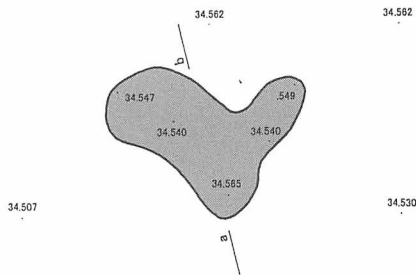
F-11・12



F-11 1 にごい橙色土 (5YR6/4) やや粘性あり しまりあり 黒色土が斑状に若干混じる
 2 橙色土 (5YR6/8) 粘性なし ややしまりあり 暗褐色土が斑状に若干混じる

F-13

† S-22



F-12 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし しまりなし 橙色土粒子が若干混じる



F-13 1 橙色土 (7.5YR6/8) 粘性あり ややしまりあり



図Ⅲ-87 焼土 (F-11・12・13)

(6) 焼土・集石・柱穴状小土壇

1) 焼土

F-2 (図Ⅲ-86、表1・2、図版29)

位置 Q-19-c

規模 40×38/4

長軸方向 N-118° -W

確認・調査 IV層上面で不明瞭な焼土を検出した。

遺物 出土していない。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代中期前半のものとみられる。 (立田)

F-3 (図Ⅲ-86、表1・2、図版29)

位置 I-28-d

規模 82×70/10

長軸方向 N-26.5° -W

確認・調査 調査区南西の遺構確認調査範囲で耕作土を除去中に、III層の残存した部分で確認した。

遺物 出土していない。

時期 検出した層位から縄文時代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。 (中田)

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

F-4 (図Ⅲ-86、表1・2、図版29)

位置 I-28-d 規模 42×24/8

長軸方向 N-113° -W

確認・調査 調査区南西の遺構確認調査範囲で耕作土を除去中に、Ⅲ層の残存した部分で確認した。北側にNF-3が隣接している。

遺物 出土していない。

時期 検出した層位から縄文時代のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。(中田)

F-6 (図Ⅲ-86、表1・2、図版29)

位置 Q-20-d 規模 38×35/6

長軸方向 N-126.5° -W

確認・調査

遺物 出土していない。

時期 検出した層位や周辺の遺物から、縄文中期前半のものと考えられる。(立田)

F-8 (図Ⅲ-86、表1・2、図版29)

位置 S-18-d 規模 60×36/6

長軸方向 N-95.5° -W

確認・調査 IV層上面を精査中に確認した。やや不明瞭な焼土である。北側約1mにはF-9、10、S-1が位置する。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代のものとみられるが、詳細な時期は不明である。(立田)

F-9 (図Ⅲ-86・90、表1・2・4、図版29・59)

位置 S-18-a・b・c 規模 78×66/10

長軸方向 N-27° -W

確認・調査 集石を検出したのち、土壌が下部に存在していることを想定してトレンチをいれてV層まで掘り下げたところ、集石の下部に接して焼土を検出した。明瞭な焼土である。

遺物 下部から礫が1点出土している。図Ⅲ-90-4は焼土の下部から出土したⅢ群a類の土器片で、口縁部は外反する。口唇には棒状の工具による刻み目が施されている。(中田)

時期 付近の遺物出土状況から縄文時代中期の可能性が高いが、層位的にやや高い位置で検出されており、縄文時代後期の可能性も若干ある。(立田)

F-10 (図Ⅲ-87、表1・2、図版29)

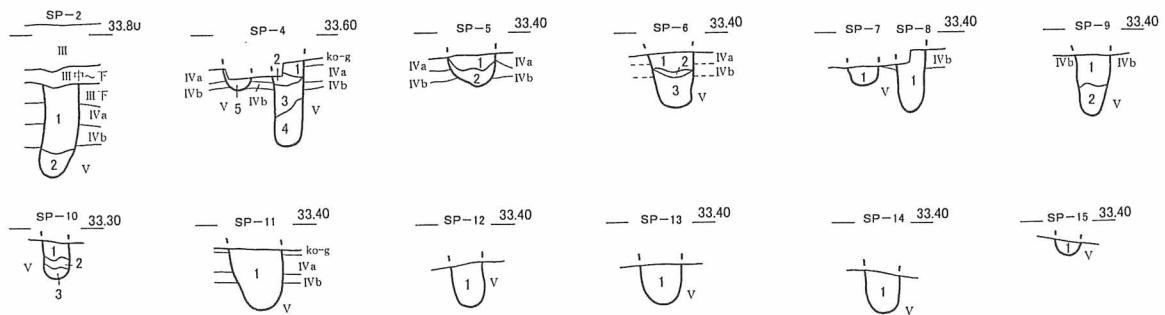
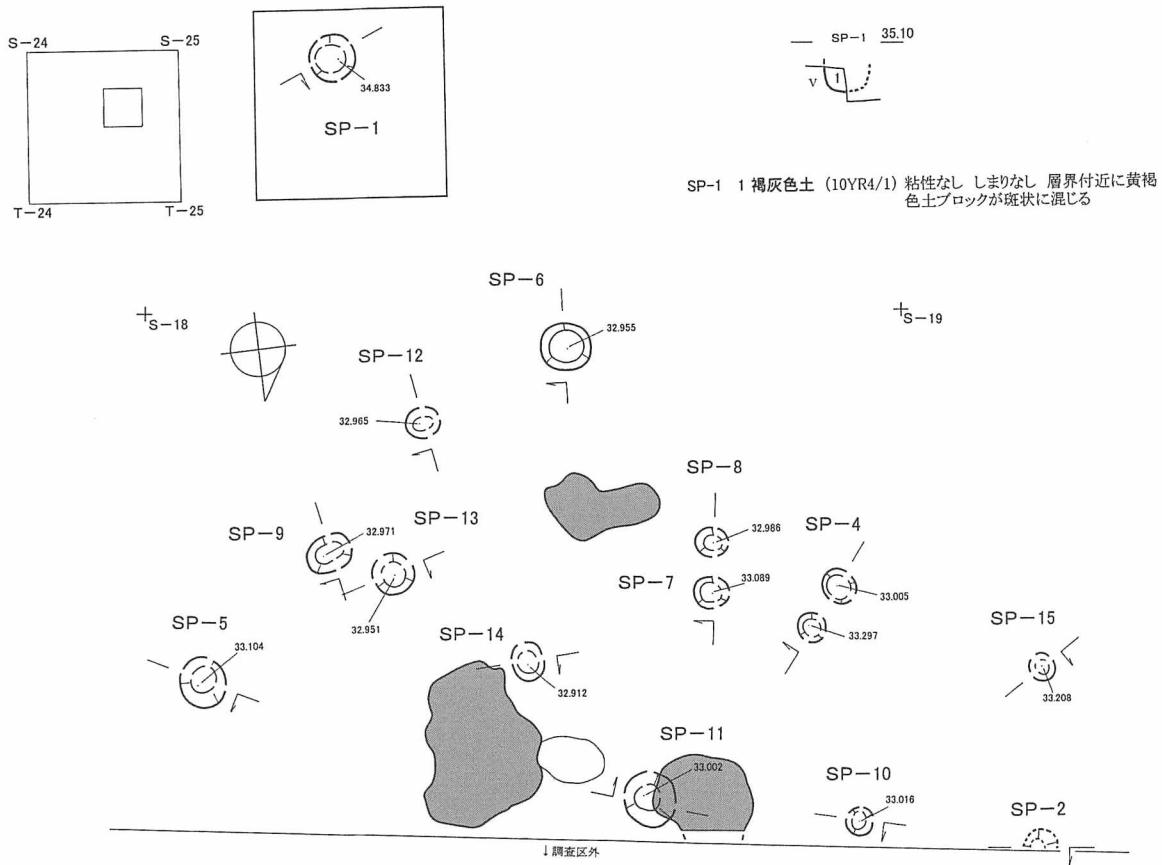
位置 S-18-c 規模 54×(38)/10

長軸方向 N-94° -W

確認・調査 F-9を確認したトレンチに一部がかかっており、トレンチを延長して確認した。明瞭な焼土である。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代のものとみられるが、詳細な時期は不明である。(立田)



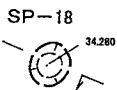
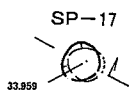
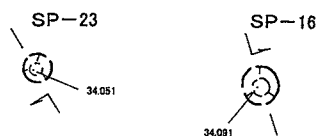
SP-2	1 暗褐色土 (10YR3/3)	粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子、炭化物粒子が多く混じる
	2 黒褐色土 (10YR3/1)	やや粘性あり しまりなし 黄褐色土粒子、炭化物粒子が多く混じる
SP-4	1 褐色土 (10YR4/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子、炭化物片が若干混じる
	2 黒褐色土 (10YR3/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子、炭化物片が若干混じる
	3 褐色土 (10YR4/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが斑状に多く混じる
	4 黒色土 (10YR2/1)	やや粘性あり しまりなし 黄褐色土ブロックが斑状に多く混じる
	5 褐色土 (10YR4/1)	粘性なし ややしりあり 黄褐色土ブロック、炭化物粒子が若干混じる
SP-5	1 黒色土 (10YR2/1)	粘性なし しまりなし 暗褐色土ブロックが斑状に若干混じる
	2 黒褐色土 (10YR3/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる
SP-6	1 褐色土 (10YR4/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる
	2 黒色土 (10YR2/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子が多く混じる
	3 褐色土 (10YR5/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土粒子、炭化物が多く混じる
SP-7・8	1 褐色土 (10YR4/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる
SP-9	1 褐色土 (10YR4/1)	やや粘性あり ややしりあり 黄褐色土・褐色土ブロックが斑状に若干混じる
	2 黒褐色土 (10YR3/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが斑状に若干混じる
SP-10	1 褐色土 (10YR4/1)	やや粘性あり ややしりあり 黄褐色土・黒色土のモザイク状
	2 明黄褐色土 (10YR7/6)	やや粘性あり しまりあり 灰褐色土ブロックが斑状に若干混じる
	3 黒色土 (10YR2/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土・褐色土ブロックが若干混じる
SP-11	1 褐色土 (10YR4/1)	粘性なし ややしりあり 黄褐色土粒子、炭化物が若干混じる
SP-12	1 黒褐色土 (10YR3/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物粒子が多く混じる
SP-13	1 褐色土 (10YR4/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる
SP-14	1 褐色土 (10YR4/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる
SP-15	1 褐色土 (10YR4/1)	粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロック、炭化物が多く混じる



図Ⅲ-88 柱穴状土壌 (SP) (1)

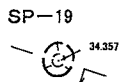
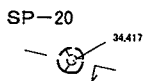
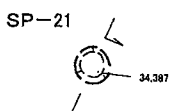
III 遺構と遺構出土の遺物

†S-22

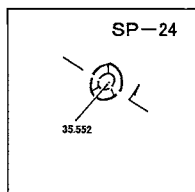
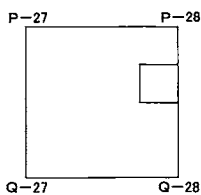


†S-24

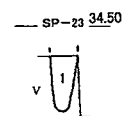
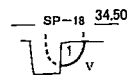
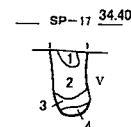
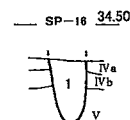
SP-22



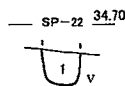
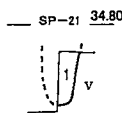
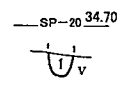
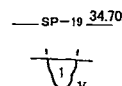
†T-24



†S-23



- SP-16 1 褐色土 (10YR4/1) 粘性なし ややしまりあり 黄褐色土・暗褐色土ブロック、炭化物が多く混じる
- SP-17 1 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが若干混じる
- 2 褐色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 黄褐色土ブロックが若干混じる
- 3 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性あり ややしまりあり 灰褐色土ブロックが斑状に若干混じる
- 4 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり ややしまりあり
- SP-18 1 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし しまりなし 層界付近に黄褐色土ブロックが若干混じる
- SP-23 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし しまりなし 黄褐色土・暗褐色土ブロックが多く混じる



- SP-19 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし しまりなし 層界付近に黄褐色土ブロックが少量混じる
- SP-20 1 褐色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 層界付近に黄褐色土ブロックが少量混じる
- SP-21 1 褐色土 (10YR4/1) 粘性なし しまりなし 層界付近に黄褐色土・暗褐色土ブロックが斑状に若干混じる
- SP-22 1 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし しまりなし 層界付近に黄褐色土粒子が若干混じる

— SP-24 35.90



- SP-24 1 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし しまりなし 層界付近に黄褐色土ブロックが斑状に混じる

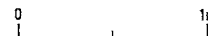
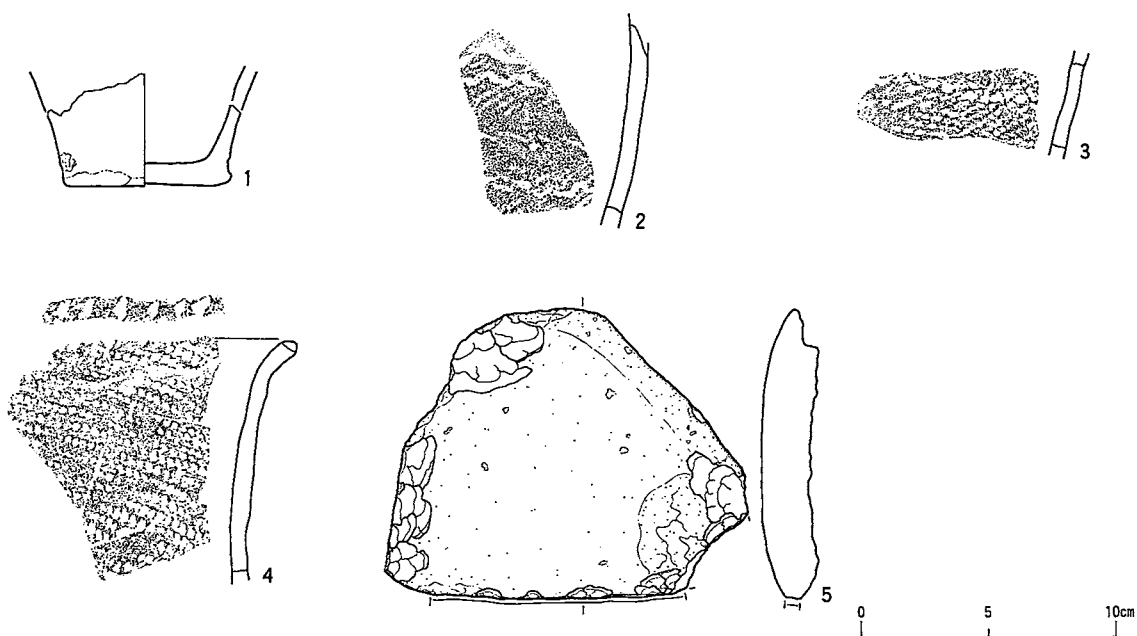


図 III-89 柱穴状土壌 (SP) (2)



図Ⅲ-90 焼土・柱穴状土壌出土の遺物

F-11 (図Ⅲ-87、表1・2、図版29)

位置 S-21-b

規模 52×38/10

長軸方向 N-142° -W

確認・調査 IV層上面を精査中に検出した。やや不明瞭な焼土である。

遺物 出土していない。

時期 詳細な時期は不明であるが、付近で出土する遺物から縄文時代中期前半のものとみられる。

(立田)

F-12 (図Ⅲ-87、表1・2、図版29)

位置 S-21-b

規模 36×10/6

長軸方向 N-96° -W

確認・調査 F-11の北西約20cmの位置で検出した。確認できた部分は一部で、ほとんどは調査区外におよんでいる。形成面はⅢ層下部である。

遺物 出土していない。

時期 検出面から、縄文時代中期前半のものとみられる。

(立田)

F-13 (図Ⅲ-87表1・2、図版29)

位置 S-22-a・b

規模 102×78/10

長軸方向 N-112° -W

確認・調査 Ⅲ層下部を精査中に確認した。明瞭な焼土である。

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

遺物 上面で礫片が7点出土している。

時期 詳細な時期は不明であるが、周囲から出土する遺物から縄文時代中期前半のものとみられる。
(立田)

2) 集石

S-1 (図Ⅲ-88・90、表1・2、図版30)

位置 S-18-a・b・c

規模 86×60/10

長軸方向 (N-5°-W)

確認・調査 Ⅲ層を精査中、砂利が集中する場所を検出した。土壌の重複を想定し、集中域を越える範囲にトレンチを設定してV層まで掘り下げた。その結果、砂利が密集する土層とその下に焼土を検出した。この砂利の密集層をS-1、焼土をF-9として調査したが、S-1中の砂利はほとんどが被熱しており、両者は関連する遺構とみられる。

遺物 覆土からⅢ群a類土器4点、フレイク231点、礫・礫片81点、砂利27,862点が出土している。

時期 検出面から縄文時代のものとみられるが、詳細な時期は不明である。
(立田)

3) 柱穴状小土壙 (図Ⅲ-89・90、表1~4、図版59)

概要

S-24区において、V層上面を精査中、黒褐色土の小さな落ち込みを確認した。半截した結果、柱穴状の断面形を確認したため柱穴状小土壙SP-1として調査することにした。S-24区からは他に検出されなかったが、調査区内を改めて精査した結果、全部で24基検出された。この種の小土壙は調査区の北端F-9周囲から調査区のはほぼ中央にあたるH-7北端にかけて分布しており、そのうち特に集中しているのは集石1、焼土F-8~10付近であった。以下にその特徴をまとめて記載し、個々の規模は一覧表に記載することにした。なお、平面図中の標高数値は土壌の最も低い点を測ったものである。

特徴

これらの土壙は、平面形はほぼ円形を呈し、断面形は椀状かあるいはやや尖るものが多い。覆土はⅢ層、またはⅣ層の黒褐色土、暗褐色土にV層起源とみられる黄褐色土が斑状、またはブロック状に混入する状況を呈している。深さは検出面がまちまちのため、よくわからないが、掘込面の確認できたSP-2、SP-3はそれぞれ46、62cmである。その他の土壙も類似した規模であったと推察される。またこれらの土壙は時期を決定できる遺物が出土しておらず、詳細な時期の確定は不可能ではあるが、Ⅲ群a類土器の分布範囲と重なることから土壙の多くはこの時期のものと考えられる。しかし焼土F-9付近で検出された12基(SP-2~15)は、掘込はまったく認められなかったが、住居の柱穴の可能性もある。
(立田)

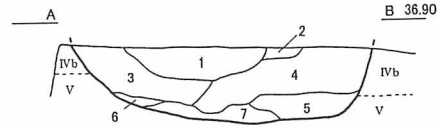
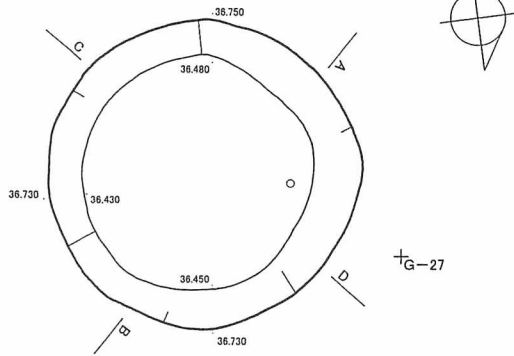
図Ⅲ-90-1~3はSP-11覆土から出土したⅢ群a類の土器である。1の外面はみがかれている。内外面の一部に炭化物が付着する。3は内面に炭化物が付着している。胎土に海綿骨針を含む。

(中田)

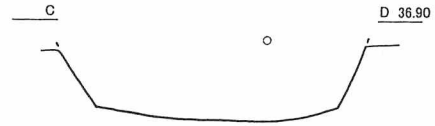
遺物

5はSP-23の覆土から出土した半円状扁平打製石器である。剥片状の礫を用いるもの(Ⅷ3b)である。
(立田)

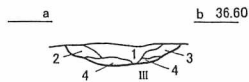
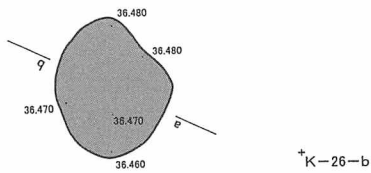
P-10



- P-10
- | | |
|---------|----------------|
| 1 黒褐色土 | 黄褐色土粒子が混じる |
| 2 暗橙褐色土 | ko-gがわずかに混じる |
| 3 暗褐色土 | 灰褐色土が混じる |
| 4 灰褐色土 | 黄褐色土が混じる 黒褐色土粒 |
| 5 暗黄褐色土 | 子がわずかに混じる |
| 6 暗褐色土 | 灰褐色土が混じる |
| 7 暗黄褐色土 | 砂質 |

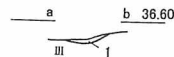
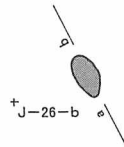


F-1



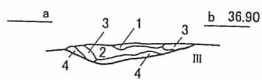
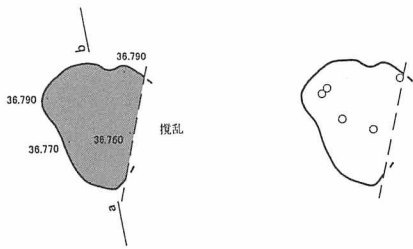
- F-1
- | | |
|---------|---------------|
| 1 淡赤褐色土 | 焼土 |
| 2 淡茶褐色土 | 焼土 |
| 3 茶褐色土 | 焼土 |
| 4 暗褐色土 | 焼土(淡赤褐色土)が混じる |

F-7



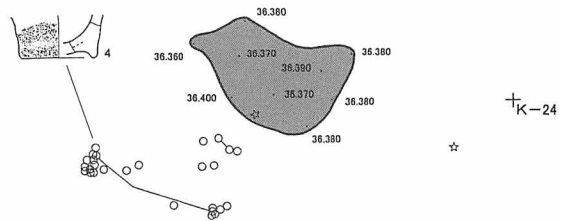
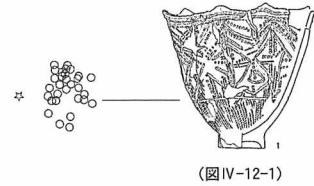
- F-7 1 暗赤褐色土 焼土

F-5

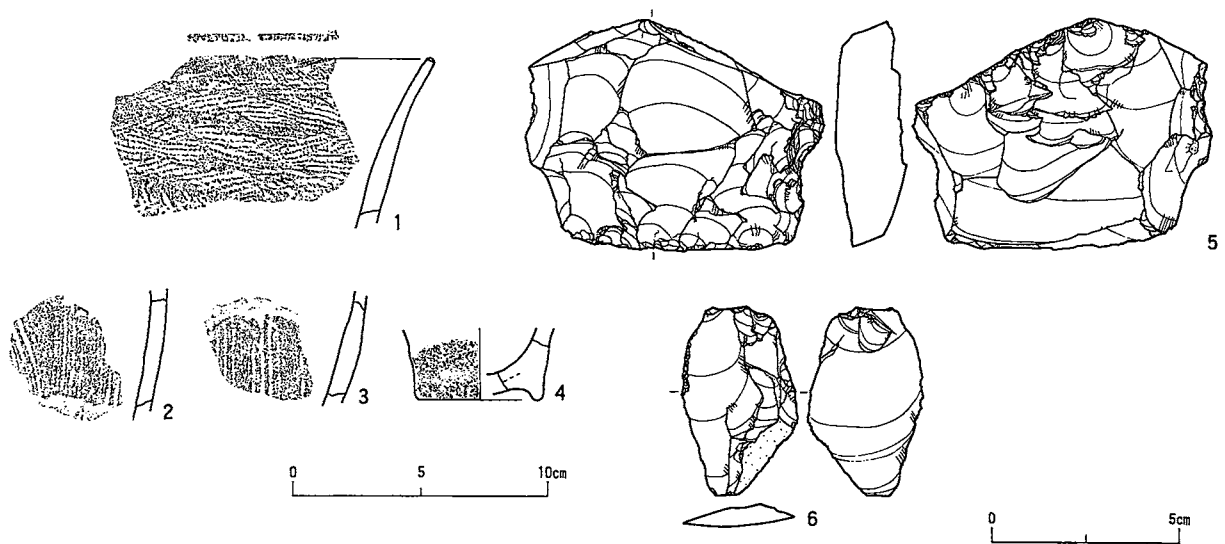


- F-5
- | | |
|---------|----------------|
| 1 暗茶褐色土 | 焼土(橙褐色土)、炭化物が混 |
| 2 橙褐色土 | 焼土 |
| 3 暗橙褐色土 | 焼土 黒色土が混じる |
| 4 黒色土 | 焼土(橙褐色土)が混じる |

FC-1



図III-91 続縄文時代の遺構 (P-10、F-1・5・7、FC-1)



図Ⅲ-92 P-10、F-5、FC-1の出土遺物

2 続縄文時代の遺構

調査区の南東部でⅢ層中位から土壇1基、Ⅲ層上位から焼土3カ所とフレイク集中1カ所が検出された。検出した層位や周辺の遺物から、続縄文時代中葉の遺構と考えられる。

(1) 土壇

P-10 (図Ⅲ-91・92、表1・2・4、図版31・59)

位置 F-26-c、G-26-d

規模 168×124/163×124/42

長軸方向 N-98° -W

平面形 円形

確認・調査 Ⅲ層4回目の調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は中央部がやや深くなっている。覆土は黄褐色土粒や黒褐色土粒がわずかにまじり、埋め戻しの可能性がある。

遺物 確認面で図Ⅲ-92-1の土器片が出土した。1は口縁部が外反し、横走る帯状の縄文が施されている。口唇は角張り、半月形の浅い刻み目がある。内面は横方向になでられた後、みがかれている。胎土に海綿骨針をわずかに含む。後北C₁式に相当する。

時期 続縄文時代中葉、後北C₁式の時期と考えられる。

(2) 焼土

F-1 (図Ⅲ-91、表1・2、図版31)

位置 K-25-c・d

規模 74×62/12

平面形 不整楕円形

確認・調査 Ⅲ層1回目の調査中に検出した。

遺物 出土していない。

F-5 (図Ⅲ-91・92、表1・2・4、図版31・59)

位置 H-26-c

規模 68×56/10

平面形 不整楕円形

確認・調査 Ⅲ層1回目の調査中に検出した。

遺物 焼土の上面からⅥ群c類の土器7点、焼土中から礫片3点が出土した。図Ⅲ-92-2・3は縦走る縄文が施され、内面は横方向になでられている。胎土には、径2mm程度の礫を含む。

F-7 (図Ⅲ-91・92、表1・2・4、図版31・59)

位置 J-26-a

規模 24×12/6

平面形 不整楕円形

確認・調査 Ⅲ層2回目の調査中に検出した。

遺物 黒曜石製のフレイク2点と頁岩製のフレイク3点が出土した。後者は焼けている。

(3) フレイク集中

FC-1 (図Ⅲ-91・92、表1・2・4・5、図版31・59)

位置 J-23-c、K-23-d

規模 (85)×(46)

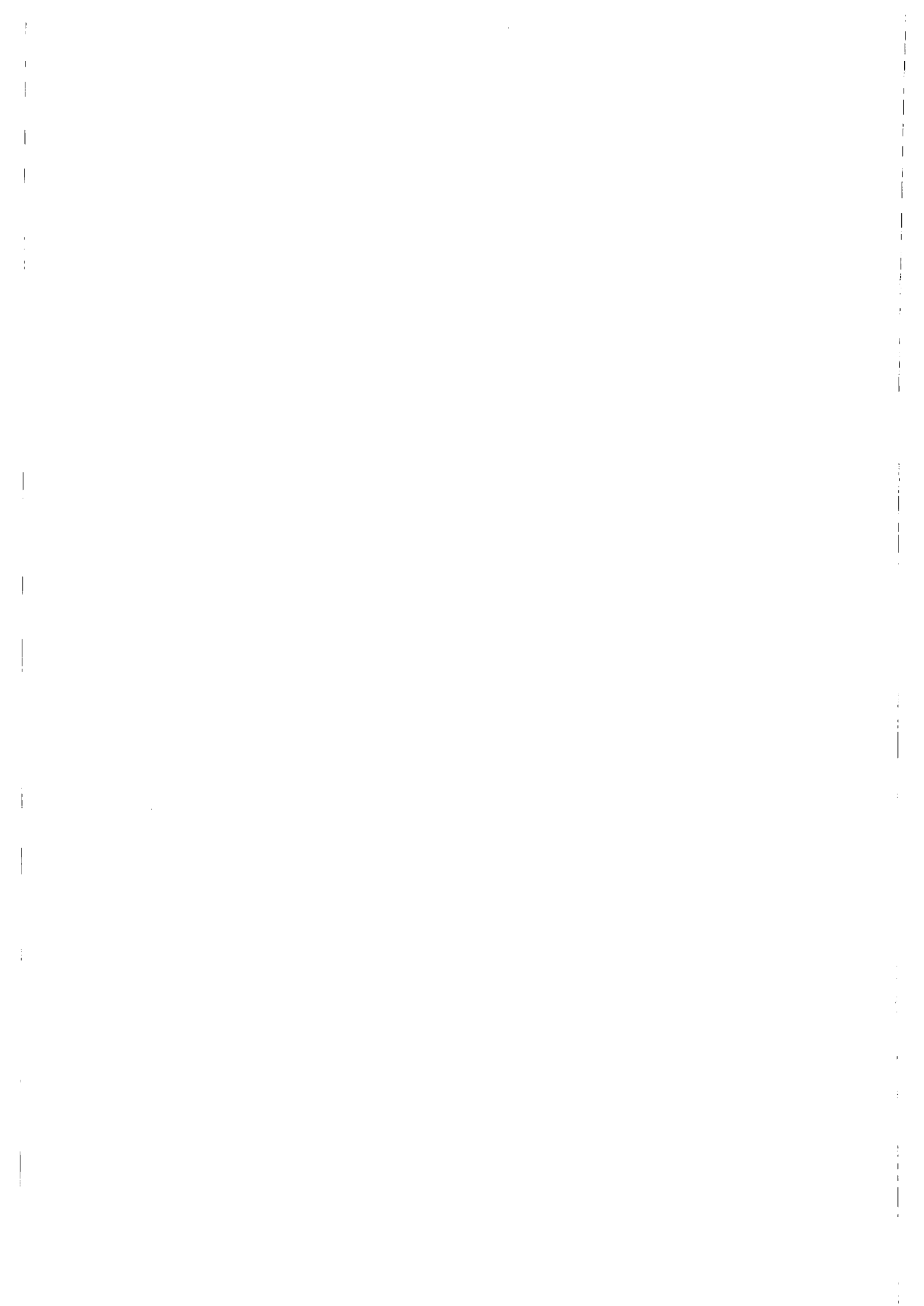
平面形 不整形

確認・調査 Ⅲ層2回目の調査中に剥片のまとまりを検出した。

遺物 頁岩製のRフレイク1点、フレイク272点が出土した。集中範囲から約70cm西側でUフレイク1点が出土した。フレイク集中の北西に隣接してJ-23-b(出土位置は計測していない)とK-23-dからⅥ群c類の土器1個体分が出土している。胴部から底部の破片だが、風化が激しく、接合したものはわずかである。図Ⅲ-92-4はこの土器の高台のある底部片で、底板は貼り合わされている。胎土には砂粒を多く含み、礫も含まれている。なお、フレイク集中の南側約2mから後北C₁式の土器1個体(図Ⅳ-12-1)が径約30cmの範囲にまとまって出土した。5はRフレイク(VB1)。6はUフレイク。一部に原石面が残るもの(VB2b)である。石材は5、6ともに頁岩である。

時期 続縄文時代中葉、後北C₁式の時期と考えられる。

(中田)



IV 包含層出土の遺物

1 土器

包含層から出土した土器の点数は11,639点である。主体となるのはⅢ群a類の土器で73%を占め、Ⅰ群a類、Ⅱ群b類、Ⅲ群b類、Ⅵ群c類等も出土している（表Ⅰ-2）。

(1) 縄文時代早期の土器

Ⅰ群a類（図Ⅳ-1～4-1～21、表7・8、図版60、61、66）

1,022点出土している。図上復元されたもの、底部を含め、復元できたものは10個体である。このほかに口縁部13点、底部および底面だけの破片が19点ある。その分布は調査区Mラインよりも北側にほぼ限られる。出土層位はⅢ層の下部、上面から掘り下げ回数にして4回目以上あるいはⅣb層中である。また、本群土器が多く出土する範囲は縄文中期前半の住居跡や土壌の集中する地区であることから、その掘り上げ土中や遺構(H-1、H-5、H-6、P-5)の覆土中からも検出されている。図Ⅳ-1は掲載した土器の出土地点と接合関係および早期に対応されると見られる石錘全点（印は△）の出土位置を示したものである。ほぼ1か所にまとまって出土したものもあるが（図Ⅳ-3-5、図版32-3・4）、住居の構築で広範囲に散在している状況が把握できる。また、石錘はP-24～26区に集中し、Ⅰ群a類土器の濃淡と重なる。早期の包含層は調査区外北東部にも及んでいることが推測される。

本遺跡出土のⅠ群a類土器はすべて平底で尖底のものはない。やや上げ底気味のものもある。平縁と波状口縁のものがあり、器形は底部からやや膨らみをもって立ち上がり、口縁部が僅かに外反する深鉢形である。30cmを超える大型のもの（4～6）がある反面、10cmに満たない小型のものもあり、後者では口縁部まで直線的な立ち上がりを見せる（2・3）。口唇断面は角形でやや丸みを帯びたものと、口唇上を丁寧に調整し平滑にするもの、外側が切り出し形に削られるものがある。文様は口縁部付近に刻み目のある細い貼付帯をめぐらすもの、条痕文に重ねて沈線で文様を描くものと条痕文・無文のものがある。条痕文は文様を意識したものではなく器面の調整痕とみられ、ほぼ全ての土器片の内外面に、主に横方向に観察される。内面は粗く残っている例が多いが、器（外）面では、とくに底部付近が無文となるように丁寧に消されるものも多い。条痕文の原体は幅10～15mm前後の施文具で、条痕の条の幅は一定ではない。掲載土器を含めその破片の大半は精製された胎土で焼成が非常に良く、色調は概ね明・暗黄褐色や黄橙色である。本遺跡の主体を占める中期前半の土器とは明らかに区別できる。胎土に繊維は全く含まないが、肉眼観察ではあるが海綿骨針の混入する資料もある（1、2、4～6、9、13、14、16～19）。

1は包含層の広範囲から出土した破片とP-5覆土のものが接合した。全体の4分の3ほどが残存する。小さな山のある波状口縁であるが、口唇部調整の際に頂部の一方を指頭で押すことで山の形が非対称となっている。口縁部のやや広い範囲に浅い沈線で斜格子目の文様があるが、細い棒状工具で1条ずつ引かれたものと、調整に用いられた幅10mmほどの施文具を用いているところがある。また、胴部～底部にも斜め方向にごく浅い沈線文がある。文様の下書きのような印象を受ける。内面の条痕はほぼ全面に粗く残っている。2、3は平縁で無文のもの。2は削り調整の際に胎土の小石が動いた痕跡が明瞭で、器内外面に小さな孔がいくつも見られる。3は全体の3分の1ほどが残存する。口唇断面は切り出し形。底部周辺を平滑に調整し、その部分には先の細い工具での集合条線様の粗い擦痕がある。4 a～dは同一個体。破片は多数あったが胴部のみが復原できた。全体の4分の1ほどが残

存する。頂部の間隔のある緩やかな波状口縁の土器とみられ、器高は30cmを超すと推測され、6の土器に比するほど大型となると考えられる。口唇断面は丸みを帯びた角形で、ほぼ全面に条痕文が残るが器面のものは部分的になで消されている。条痕の施文具は幅12、3mm程。その端はまっすぐで、切断面の痕跡が観察される。条痕の中に不規則な幅の条が4条観察できる。5、6はいずれも口縁部に添って貼付帯がある。5はM-23区のIV層上面からまとまって出土したもので全体の3分の2ほどが残存する。器高に比べて、土器の厚さが8、9mm程と薄く、口縁から底部までほぼ均質の厚さを保っている。緩やかな波状口縁であるが不規則に波打つ部分もある。口唇は丸みを帯びた角形で、口唇直下に幅5mmほどの粘土紐を貼り付けた後、棒状工具でその上位に沈線を1条加えている。貼付帯上には同じ施文具で斜めの刻みがある。胎土に海綿骨針が混入する。6は破片が包含層の広範囲とH-6の覆土中から出土した。4か所に小さな山形の波頂部がある。口唇断面は切り出し形。口唇から1cmほど下がった位置に細い貼付帯がある。貼付帯上には2種類の施文具による刻みがあり、一つは棒状、もう一つは刻み目の中に小さな凹みが数個あることから、先端が複数に分かれたやや幅と厚みのある施文具によるとみられる。表裏の条痕文の原体とは異なるものである。口縁部文様帯には3条1単位の沈線文で波頂部の両側を縦に区画し、斜めに繋ぐことにより幾何学的文様を構成している。条痕文は胴部から底部ではなで消されているが、体上半部では一部では残されており、文様帯下端を区画する横走沈線文のような効果を有している。7～9は底部。7は削りに伴う砂粒の移動の痕跡が顕著で、2と同様に器面に無数の孔が観察できる。8は上げ底気味の底面に2条、沈線様の施文がある。10～12は口縁部。10は外反気味のもので、横位の条痕があるが口唇直下の狭い範囲は指でなで消され無文となっている。11は条痕に重ねて横走沈線文がある。12の断面は切り出し形。13～17は横走する沈線文のある胴部片。沈線は間隔をあげ施文される。破片資料のみで全体の様子は知られないが、沈線文は途切れたり、弧を描くものがある。13・14・16はやや幅広の、15・17は細い原体による。後二者の内面の条痕文は5に類似し、施文具の切断面がまっすぐである。同一個体の可能性がある。18～21は条痕のある胴部片。

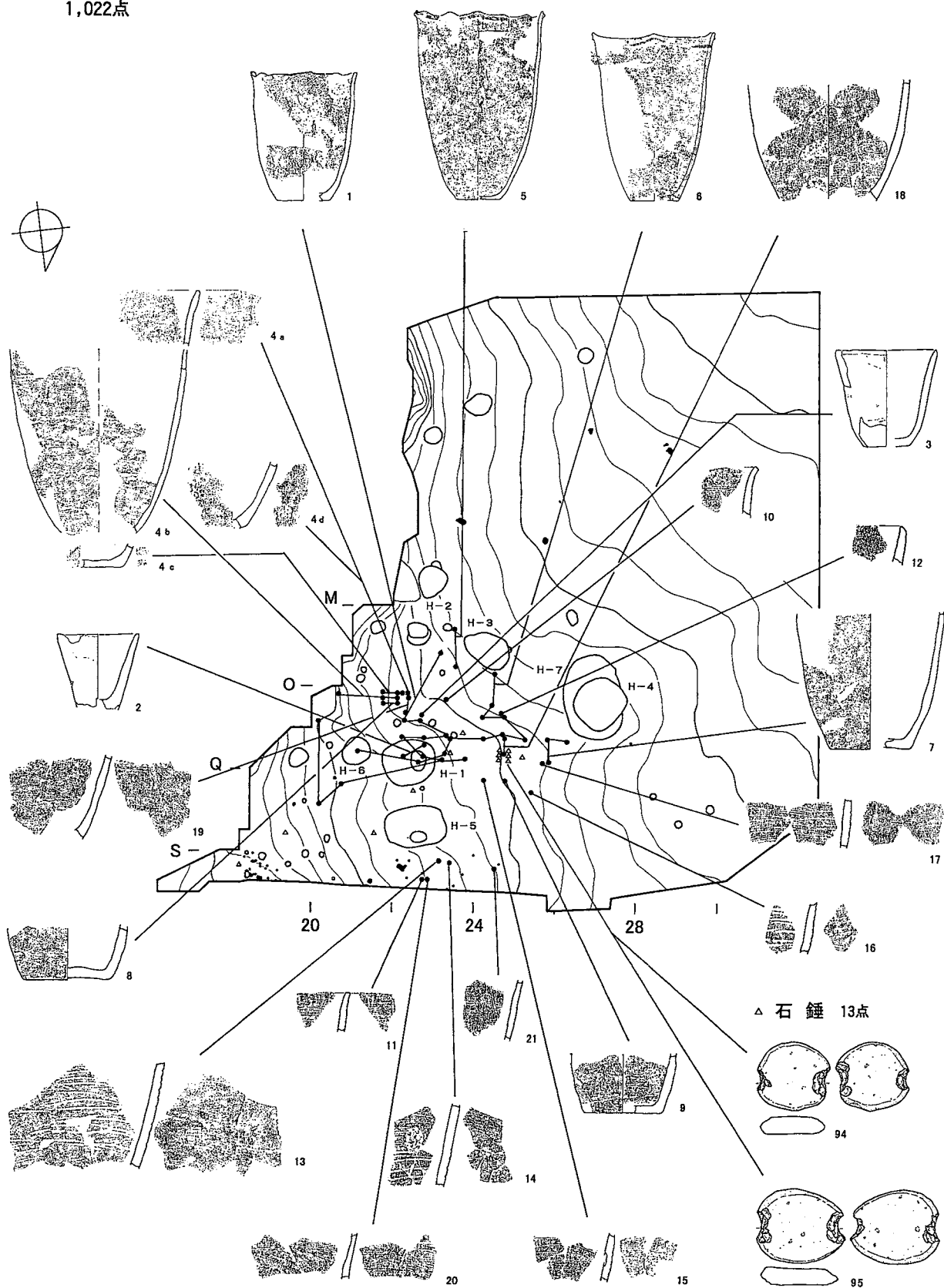
(2) 縄文時代前期の土器

II 群 b 類 (図IV-4-1～7、表8、図版67)

主に調査区の南側のI層・III層から11点が出土している。全ての土器の胎土に繊維が混入する。

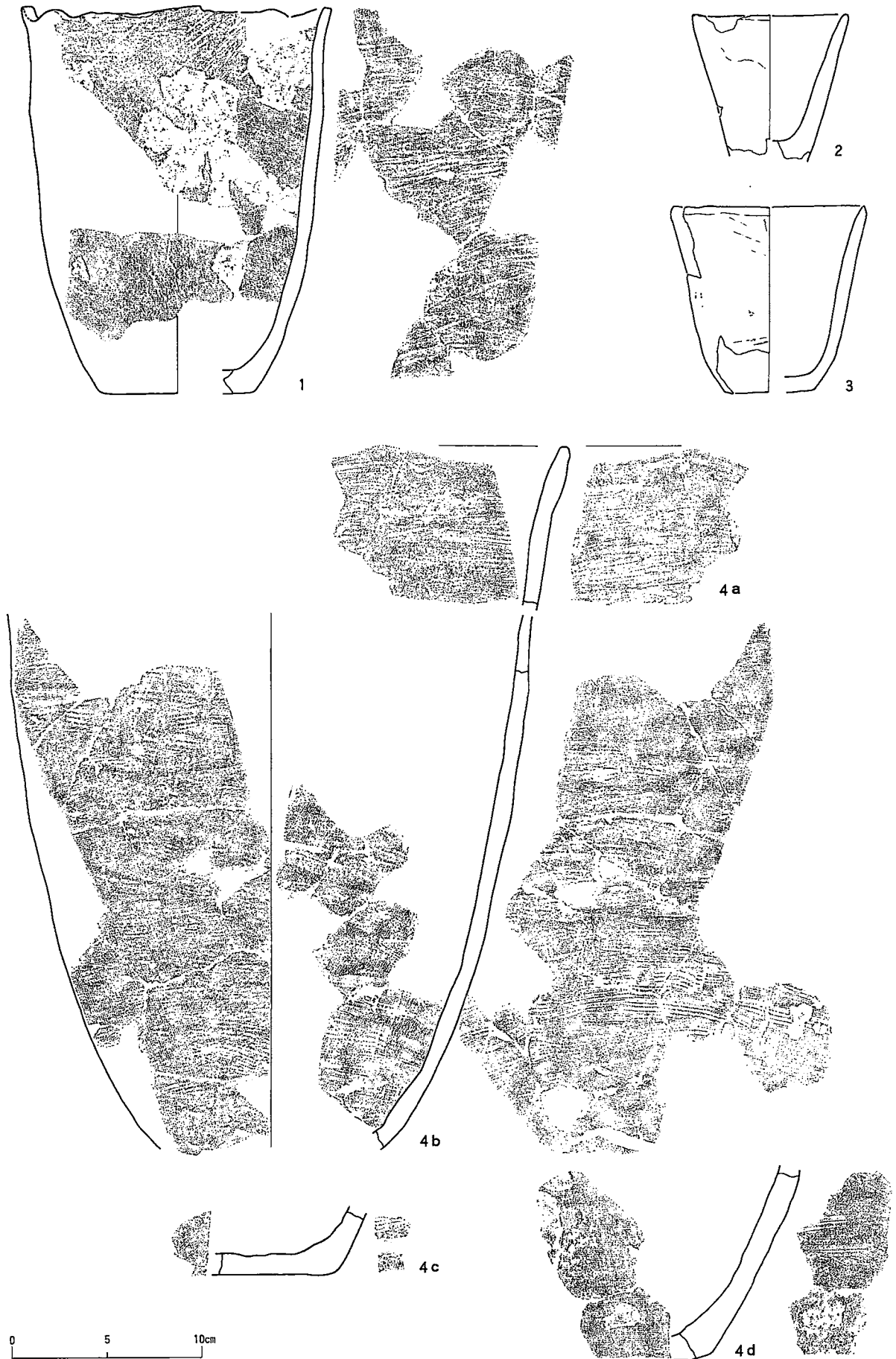
1は口唇が薄身でやや丸みを帯びた角形を呈し、僅かに外反する。口唇上には先の細い工具による刻みがある。器面にはLR原体による斜行縄文とその下位に縄線文とみられる文様があるが摩滅しているため明瞭ではない。内面には条痕が観察できる。2は細い撚り紐を巻きつけた多軸絡条体回転文とみられるもの。この土器片は色調が灰白色を呈し繊維の混入がほかの土器と比べ少なく、また、内面の磨きは顕著ではない。3は口縁部の区画の貼付帯があり、断面が角形の棒状工具による刺突文が付けられている。貼付帯にそって2条一対のLR縄線文が複数施されている。4～7は多軸絡条体の回転文が施されている厚手の胴部片。いずれも内面は丁寧に磨かれている。4と7には胎土に海綿骨針が混入している。3・5・6は試掘調査の際に出土したもので同一個体の可能性がある。1は円筒下層c式とみられ、ほかは下層d式である。(遠藤)

I 群 a 類土器
1,022点

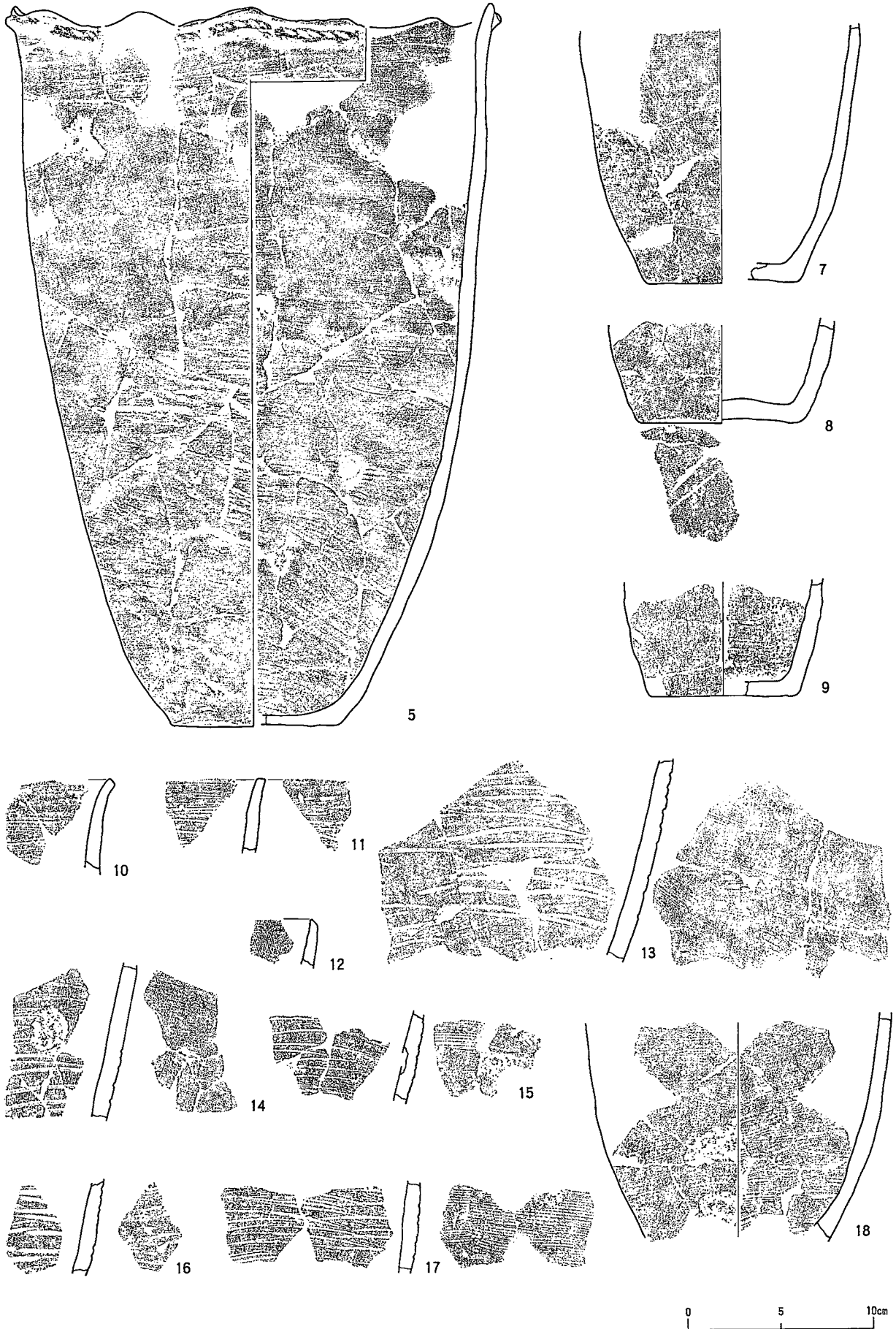


図IV-1 I 群 a 類土器と石錘の分布

IV 包含層出土の遺物

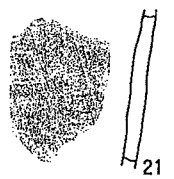
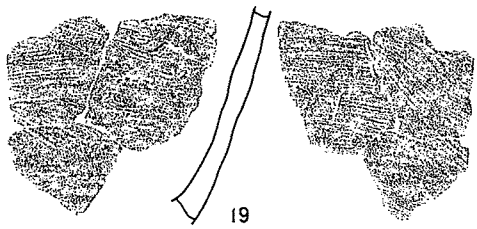
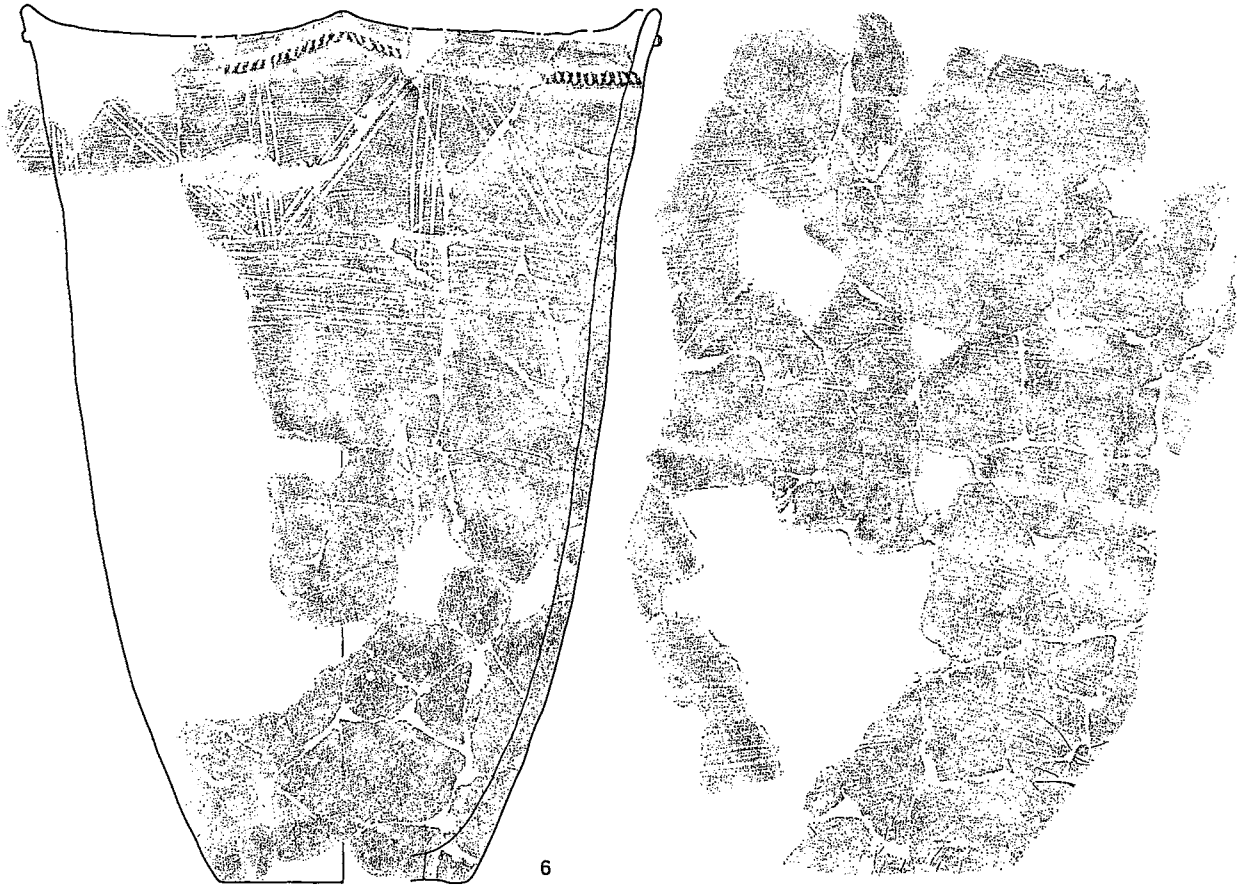


図IV-2 包含層出土のI群a類土器(1)



図IV-3 包含層出土のI群a類土器(2)

IV 包含層出土の遺物



II 群b類



0 5 10cm

図IV-4 包含層出土のI群a類土器(3)・II群b類土器

(3)縄文時代中期の土器

Ⅲ群 a 類 (図Ⅳ-5-1~図Ⅳ-7-17、図Ⅳ-8-24~図Ⅳ-10-76、表7・8、図版61~69)

Ⅲ群 a 類の土器はLライン以北、27ライン以東から多く出土し、遺構の分布と一致している (図Ⅳ-14)。

①円筒土器上層 b 式に相当するもの (図Ⅳ-8-24~26)

24~26は試掘調査の際にB地区から出土したものである。無文地に粘土紐が貼り付けられ、それらの間に撚糸圧痕や馬蹄形の圧痕が加えられている。粘土紐上にも撚糸圧痕がある。24は弁状の突起の下に2本一組の縦位の貼り付けが施されたもので、馬蹄形圧痕の下位には長円形の刺突がある。25の口唇には波状の貼り付けが施されている。

②サイベ沢Ⅶ式に相当するもの (図Ⅳ-5-1~図Ⅳ-7-12、15~17、図Ⅳ-8-27~38、図Ⅳ-9-39~44)

27は無文地に撚糸の圧痕で文様の施されたもので、把手の剥落したと考えられる痕跡がある。内外面に炭化物が付着する。H-5から同一個体が出土している (図Ⅲ-25-11~13)。

1・5・28~30、34~36は地の縄文が施された後、口縁部から胴部にかけて細い粘土紐が貼り付けられたものである。1・28・35・36は突起の下に垂下する貼付帯があり、1・28は粘土紐の上と口唇に撚糸の圧痕が加えられている。1の粘土紐は2本一組で、垂下する貼付帯と胴部を横走する貼付帯によって区画された文様帯には弧線状の貼付帯が施されている。29・30は同一個体で、粘土紐の上には半截竹管状工具による刺突がみられる。29の口唇には撚糸の圧痕、口唇直下には斜位の短刻線が施されている。5は突起の下部にやや太い粘土紐による橋状の貼り付けが施された後、円孔がうがたれている。貼り付け上には縄の圧痕がある。口縁部には連弧状の貼付帯が加えられている。口唇には半截竹管状工具によると考えられる刻み目がある。胴部には綾絡文が施されている。34の貼付帯は剥落したものが多く、弧線状に施されていたと考えられる。36の突起部はやや内弯し、貫通孔がうがたれている。

7は台形状の突起の上部、31~33、37は山形の突起上に横位の粘土紐が貼り付けられたものである。7は幅の広い突起の頂部や口唇に撚糸の圧痕が施されている。32は肥厚した口唇直下にも短い粘土紐が斜位に貼り付けられている。粘土紐の上には縄の圧痕 (31・32)、撚糸の圧痕 (33)、斜位の刻み目 (37) が加えられている。31は口唇にも縄の圧痕がある。33・37は突起の下に粘土が瘤状に貼り付けられたもので、33の貼り付けには撚糸の圧痕が加えられている。口唇には刺突 (33)、斜位の刻み目 (37) がある。

2~4、6、8~12、38~42は縄文のみのもので、2~4、38・39・41・42は結束第1種羽状縄文、6~11、40は結束第2種斜行縄文、12は無節の斜行縄文が施されている。口唇には縄文 (2)、縄の圧痕 (3・6・9~11、38~41)、ヘラ状工具による刻み目 (4)、縄端の圧痕 (12) がある。3は2種類の突起があり、内傾する大きな突起には太い橋状の把手が横位に貼り付けられている。4は小さな山形の突起が向かい合う位置にある。8・9・12は突起の下部に瘤状の貼り付けが加えられている。9の突起は2個一対の小さな山形になると考えられる。11・12は口縁部に補修孔がある。12の内面は器面がはじけたようになっている。38は突起の部分が欠損したものである。39の突起には円孔があり、その下にあった貼付帯は剥落したと考えられる。40の突起は3個の小突起からなる。42は口唇直下がやや肥厚しており、外面には炭化物が付着している。

43・44は同一個体で、結束第1種羽状縄文が施された後に突起の直下から垂下する沈線や弧状の沈線で文様が描かれている。43の突起には円孔があり、横位の粘土紐が施されている。突起の頂部には

燃糸の圧痕、口唇には縄の圧痕がある。外面に炭化物が付着している。

15～17はミニチュアの土器である。15・16は2個一対の瘤状の突起がある。15は結束第2種斜行縄文が施されている。16は無文地で、口縁部に鋸歯状の沈線がめぐる。口唇には刻み目がある。17は無文で、器面に凹凸がある。

4・6・8・10～12・16・17・34・36・39・40は胎土に海綿骨針を含む。

以上の土器の中には7、31～33・37のように新段階に下るかと考えられるものもあるが、大多数は古段階（立田 2002）のものである。

③見晴町式（広田 2001、佐藤 2001、立田 2002）に相当するもの（図IV-17-14、図IV-9-45～60、図IV-10-61～64）

45～49は斜行縄文が施された後に沈線で文様が描かれている。45の沈線は半截竹管状の工具を用いてひかれたものである。口縁部は折り返され、口唇には縄の圧痕がある。46～48は同一個体で、2本一組の沈線が施されている。山形突起の直下から垂下する沈線と横走する沈線で文様帯が区画され、突起間を結ぶような弧状の沈線が加えられている。口唇には縄文がある。49は網目状の沈線が施されているようである。

50は口縁部にうずまき状の粘土紐が貼り付けられたもので、口唇には縄文が施されている。51～53は同一個体で、口唇は粘土紐が貼り付けられて肥厚し、さらに沈線が加えられている。斜行縄文の地に2本一組の沈線で蛇行状や弧線状の文様が施されている。内外面とも炭化物が付着する。54は突起の部分に縦位の粘土紐が貼り付けられ、直下には無文地に沈線が施されている。55は突起の部分に環状の貼り付けがあり、縄端による刺突が加えられている。口唇は摩滅しているが、縄文が施されているようである。

14、56～60、62・63は山形の突起をもち、斜行縄文の施されたものである。14は3箇所突起があり、突起上には粘土紐が縦横に貼り付けられている。口唇にも縄文が施されている。口縁部には一対の補修孔がある。口縁部には内外面とも炭化物が付着している。56～58、60は口唇直下が肥厚したもので、56は縄の圧痕が縦位に施されている。57の縄文は複節である。59・63の口唇には縄端の圧痕がある。62は図上で器形を復原したものである。63は破片の大きさのわりに重さが軽く、器面にややぬめりがある。61は無文で、内傾する突起の頂部は欠損している。64は斜行縄文が施されたもので、口唇にも縄文がある。14・59・61は胎土に海綿骨針を含む。

13、65～68、72～76はⅢ群a類土器の胴部・底部の破片である。65は横走気味の縄文が施されている。外面に炭化物が付着する。67・68は同一個体である。69～71は無文の小型土器で、70・71は同一個体である。65・72・73は胎土に海綿骨針を含む。

Ⅲ群b類（図IV-7-18～21、図IV-10-77～80、図IV-11-81～85、表7・8、図版64・65・68・69）

Ⅲ群b類は調査区の北東に分布し、2箇所に集中域がある（図IV-14）。

18、77～80は沈線文が施されたものである。18は4箇所に低い山形の突起をもち、器厚は厚い。無文地で、口縁部から胴部にかけて縦方向に調整された後に横走する沈線を2条めぐらせ、その下位に2本一組の斜位の沈線が加えられている。内面はみがかれているが、縦位ないし斜位の調整痕も残る。77～80は斜行縄文の地に縦位や横位の沈線が施されている。77と78、79と80はそれぞれ同一個体で、いずれも内面はみがかれている。前者は胎土に小礫や砂粒が多い。77は山形の突起をもつと考えられる。口唇にも縄文が施されている。77・78の外面、80の内面には炭化物が付着している。19・20、81・82は刺突文が施されている。19・20は小型の土器で、胎土に海綿骨針を含む。19は直線的に立ち上

がる器形で、底部が張り出している。無文地で、文様帯は竹管状工具による横位の刺突列で区画され、その上位は浅い縦位の沈線の間を刺突列で充填している。口唇にも刺突が加えられている。20は無文地に先が2つに分かれた工具による刺突がみられる。81・82は斜行縄文の地に縄端による刺突が施されている。82には竹管状工具による、下方から突き上げたような刺突もみられる。これらは大安在B式に相当する。

21は直線的に立ち上がる器形で、底部は上げ底である。縦走する縄文が施されている。21・83・85の内面には炭化物が付着している。83・85の縄文は複節である。84は外面が横方向になでられ、一部に縄文が施されている。

(4)縄文時代後期の土器

Ⅳ群 a 類 (図Ⅳ-7-22、図Ⅳ-11-86~90、表7・8、図版65・69)

Ⅳ群 a 類は調査区の南側に散在し、北西隅でも出土している。

22・86・88は太い沈線で区画された中に磨消縄文が施されている。22・88は一部に櫛状の工具による条線もみられる。86は小さな突起を覆うように半円状に粘土が貼り付けられている。88の沈線は鈎の手状になっている。87は折り返された無文地の口縁に短刻線が施されている。口縁の断面形は角張る。89・90は無文地に沈線で文様が描かれたもので、89は外面が縦方向、内面が横方向にけずられている。22は胎土に海綿骨針を含む。これらは大津式に相当する。

Ⅳ群 c 類 (図Ⅳ-7-23、表8、図版69)

調査区の北西隅から注口部が1点出土している。内外面ともみがかれ、胎土に海綿骨針を含む。

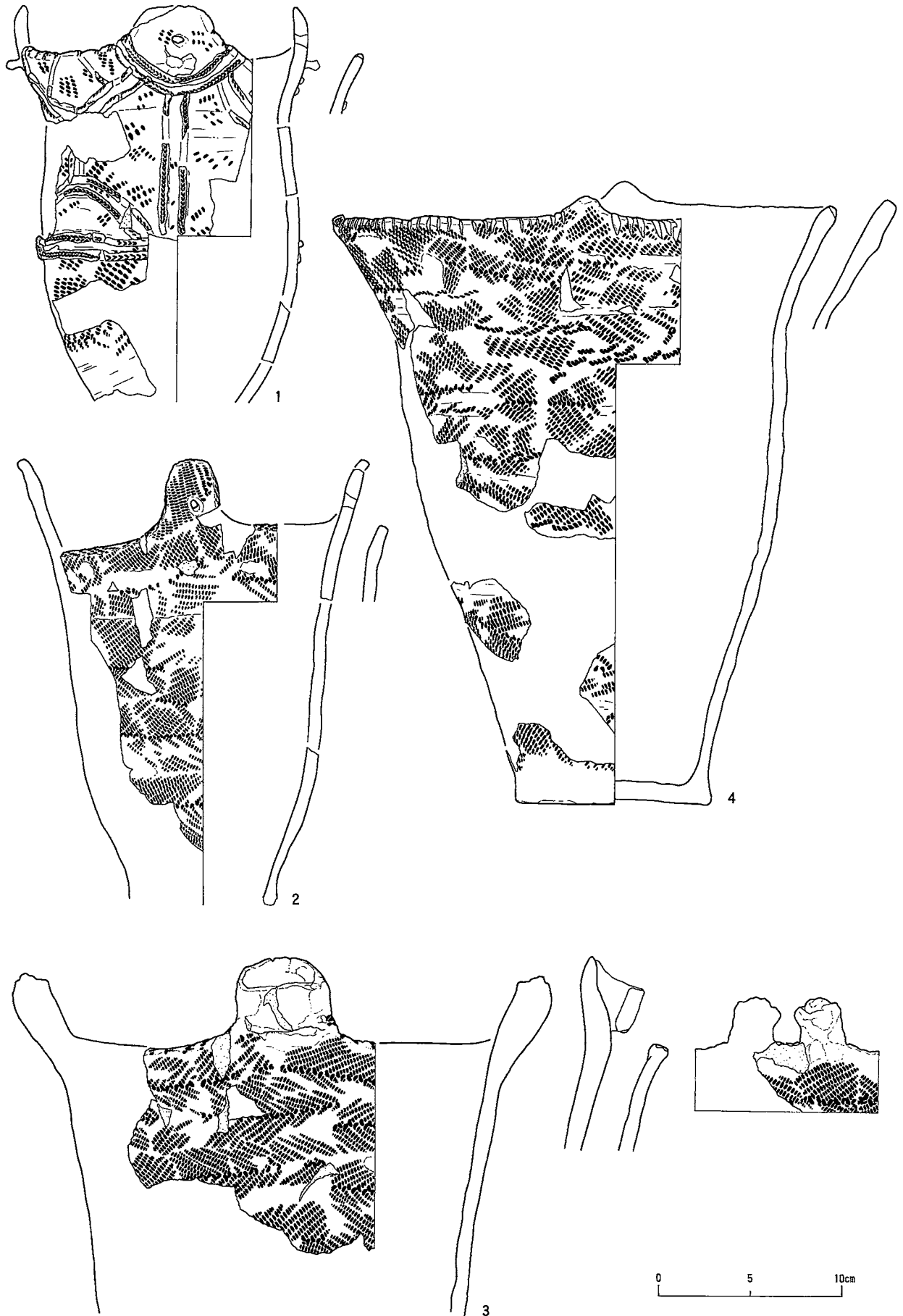
(5)縄文時代の土器

Ⅵ群 c 類 (図Ⅳ-12・13、表7・8、図版70・71)

沈線等の施されたもの(図Ⅳ-13-9~21)と隆起線の施されたもの(図Ⅳ-12-1~6、図Ⅳ-13-22~33)があり、どちらも調査区の南東に分布している(図Ⅳ-15)。

9は口縁部から胴部上位がほぼ直立する器形で、2個一対の低い山形の突起がある。横走縄文とそれを縁取る沈線によって文様が描かれ、それらの間の無文部には三角形の列点文が横位にめぐる。胴部下位には縦走する帯状縄文が施されている。10は口縁部が先細りになるもので、口唇直下には斜行縄文、その下位には横走する縄文が施されている。11~13は横走する縄文の施されたもので、11・13は同一個体の可能性がある。11は肥厚する低い山形の突起の部分である。12は口唇の内面側に半月状の刻み目がある。14・15は同一個体の可能性がある。14は縦走する縄文が施された後に器面がみがかれている。内面に炭化物が付着する。16~18は同一個体である。16・17は帯状の縄文が内外両面に施されており、外面はそれらを縁取るように沈線が加えられている。口唇には半月形の刻み目がある。16は2個一対の山形の突起があり、頂部は切り込みが加えられている。19~21は同一個体で、帯状縄文が施されている。内面に炭化物が付着する。19には補修孔がある。

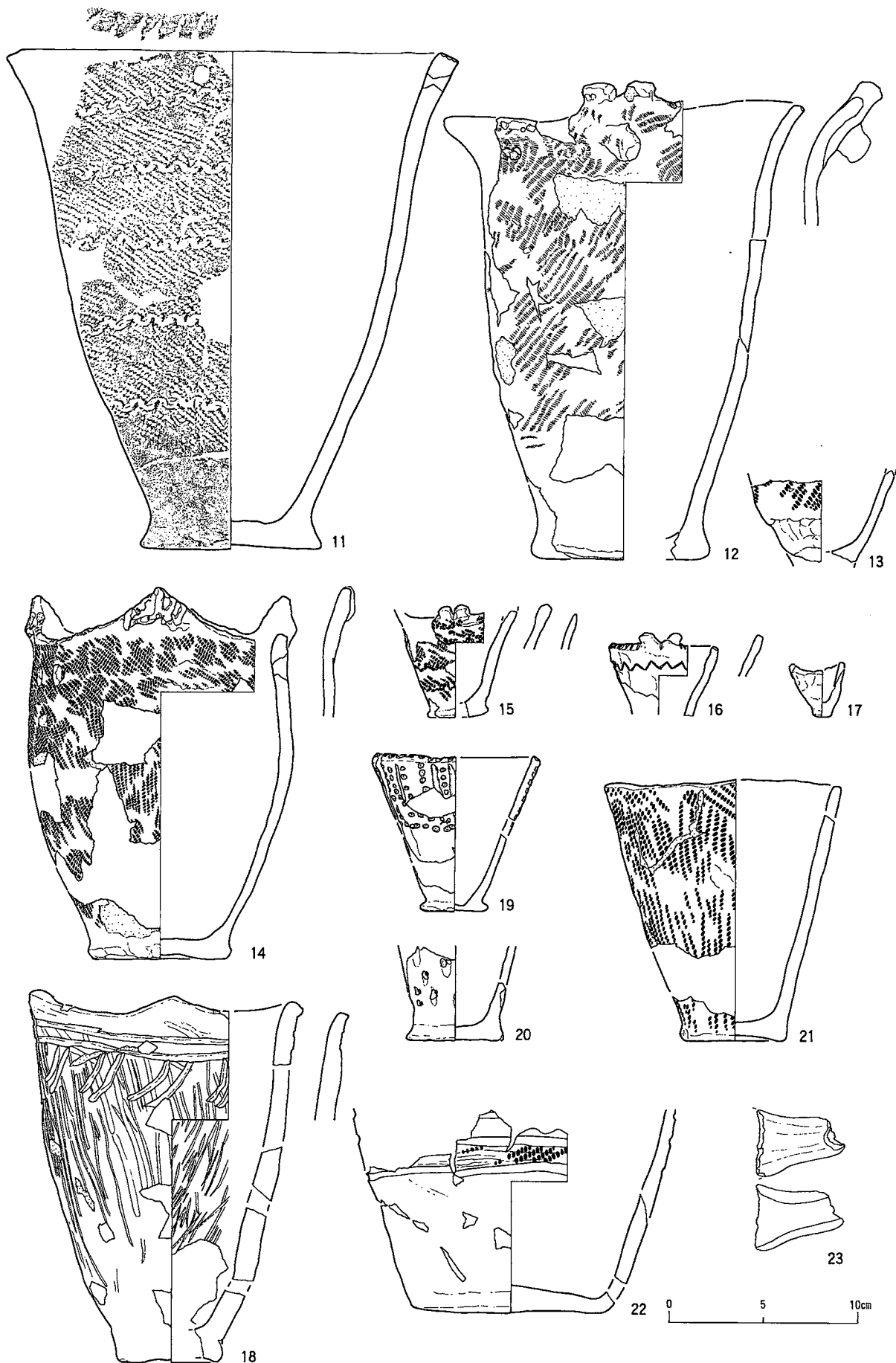
1は胴部に縦走する縄文、口縁部に横走する縄文の施された後、横位の沈線によって区画された幅の広い文様帯に隆起線による文様が描かれたものである。口縁部には2条の横走する隆起線がめぐる。山形突起の下は垂下する隆起線が施され、それらの間は斜位の隆起線で菱形状や弧線状の文様が構成されているが、摩滅、剥落した部分も多い。これらの隆起線は上下をなでつけて整形されており、隆起線のはがれた跡には、文様を割り付けるためにひかれたと考えられる細い沈線のみられる部分もある。隆起線の間には半月形の列点文が加えられている。口唇の刻み目は密に施されている。内面には横位の調整痕が残る。胎土に径2ミリ程度の小礫を含む。31・32は縦位の隆起線の先が2つないし3つに分かれている。32・33は同一個体の可能性がある。



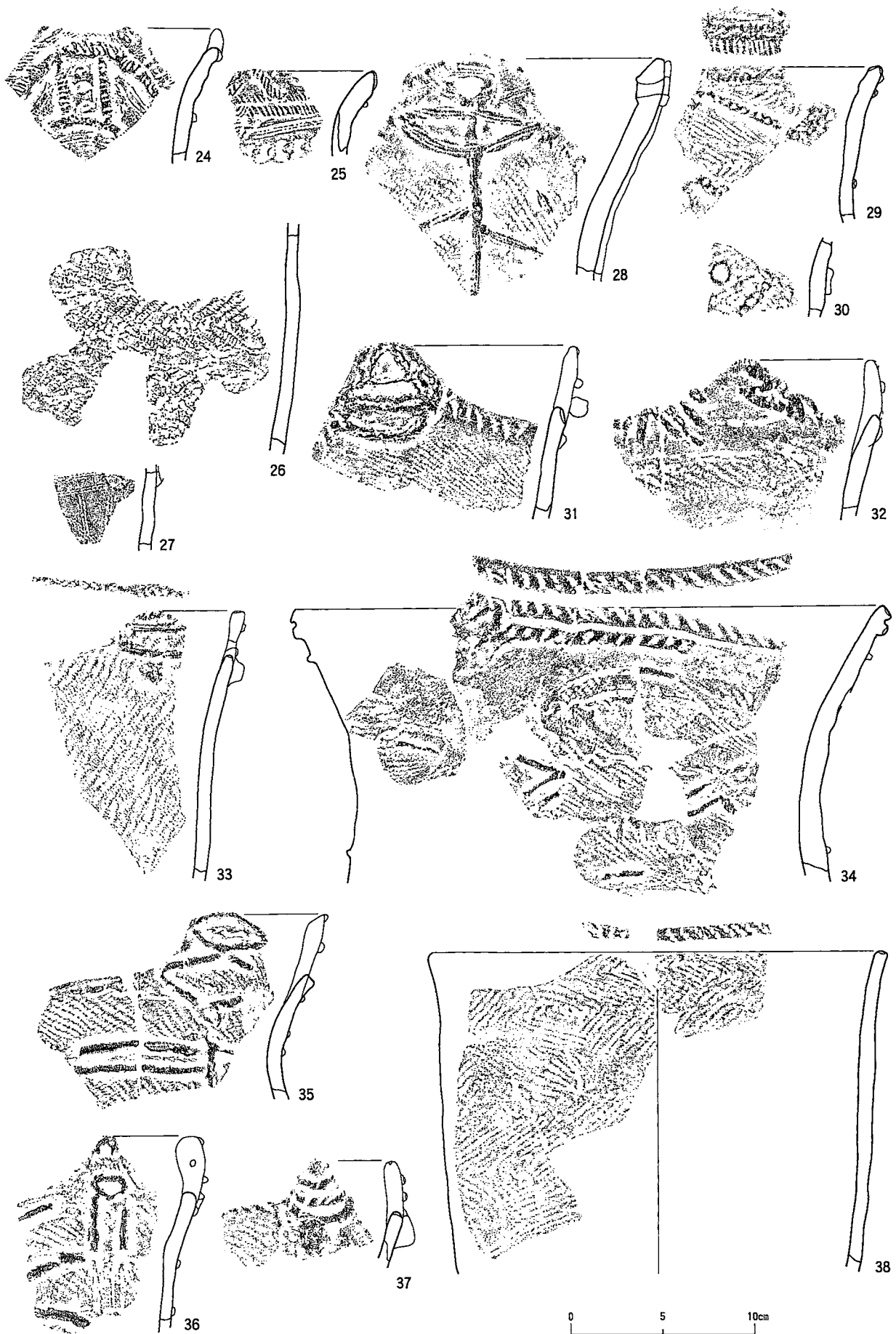
図IV-5 包含層出土の皿群a類土器(1)



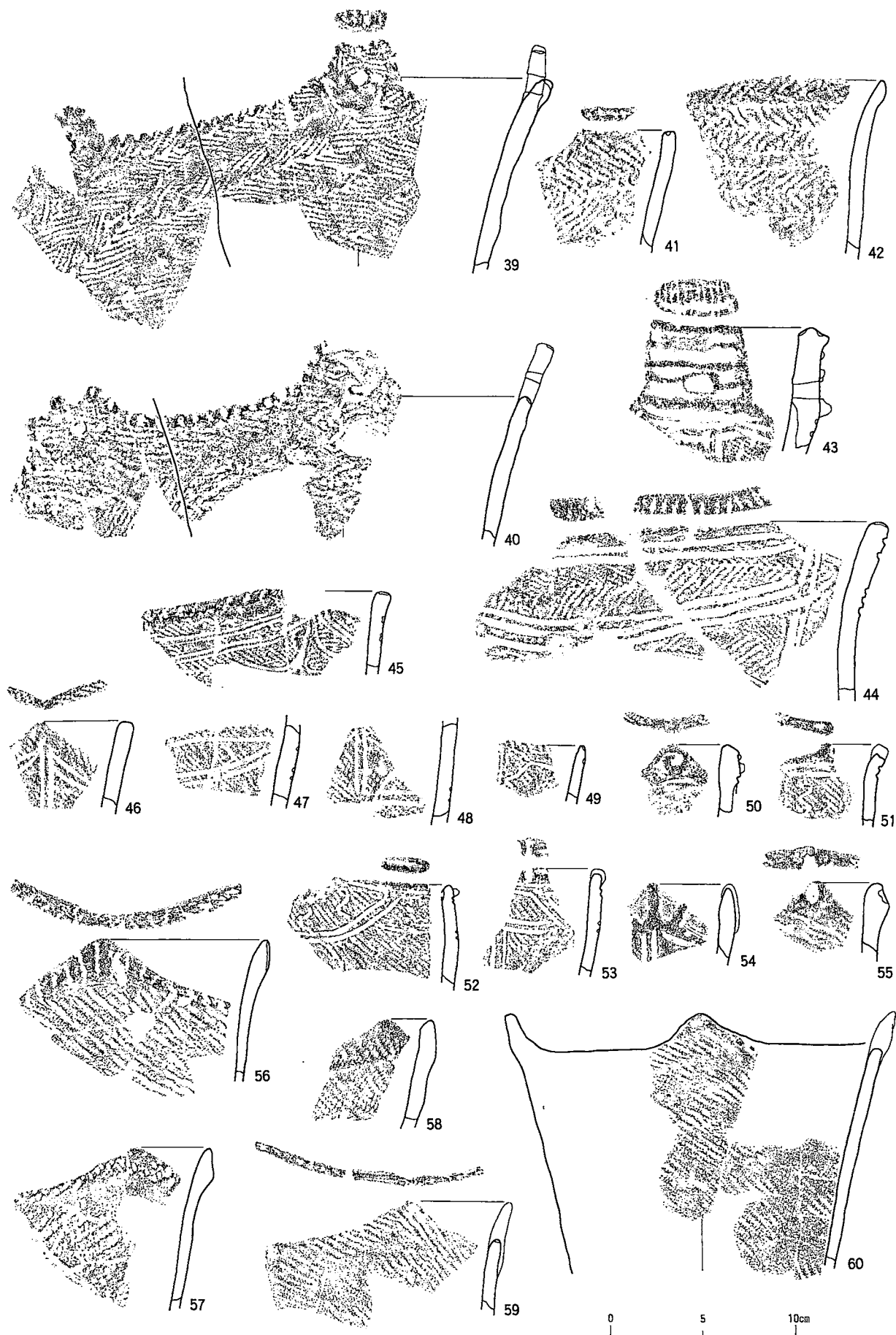
図IV-6 包含層出土のⅢ群a類土器(2)



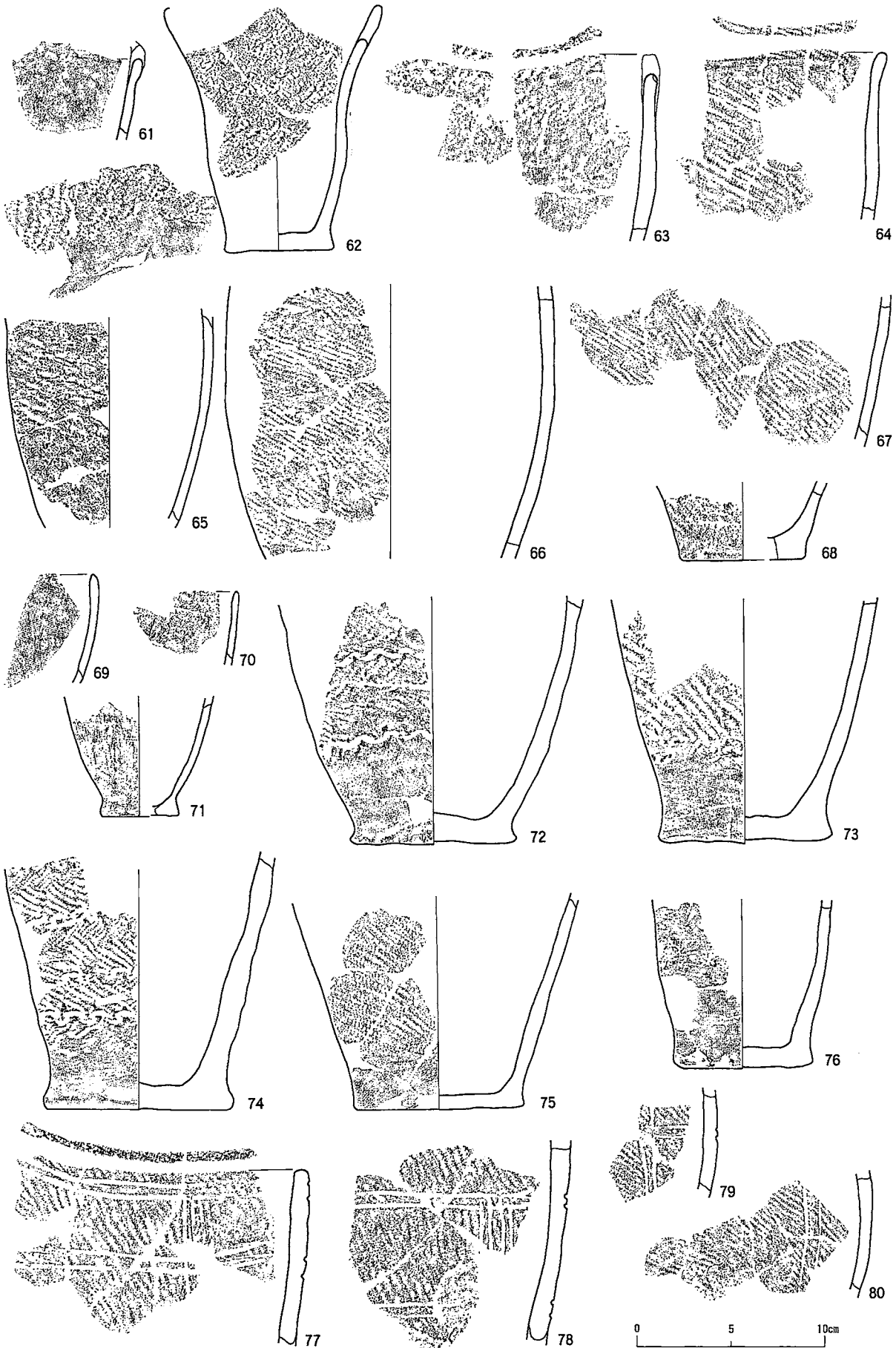
図IV-7 包含層出土のⅢ群a類土器(3)・Ⅲ群b類土器(1)・Ⅳ群a類土器(1)・Ⅳ群c類土器



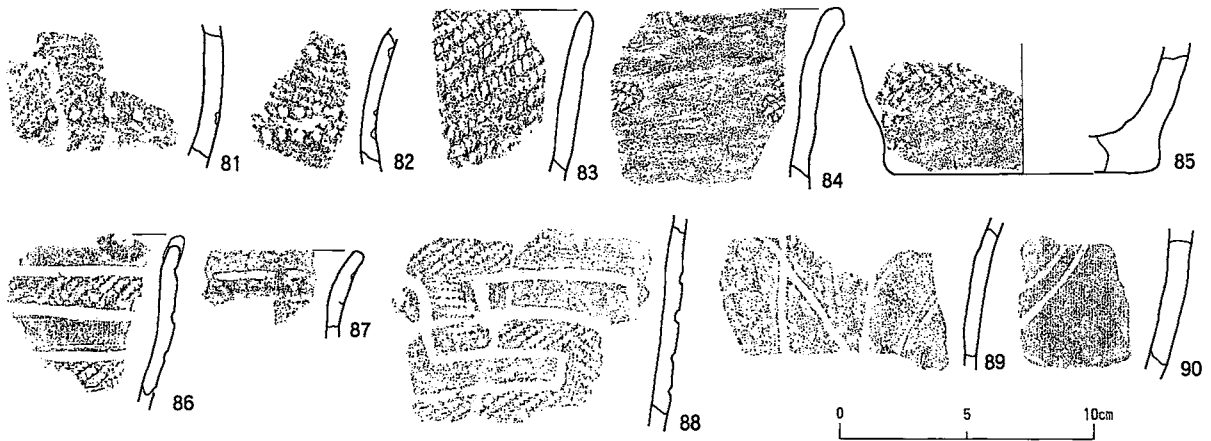
図Ⅳ-8 包含層出土のⅢ群a類土器(4)



図IV-9 包含層出土のⅢ群a類土器(5)



図Ⅳ-10 包含層出土のⅢ群a類土器(6)・Ⅲ群b類土器(2)



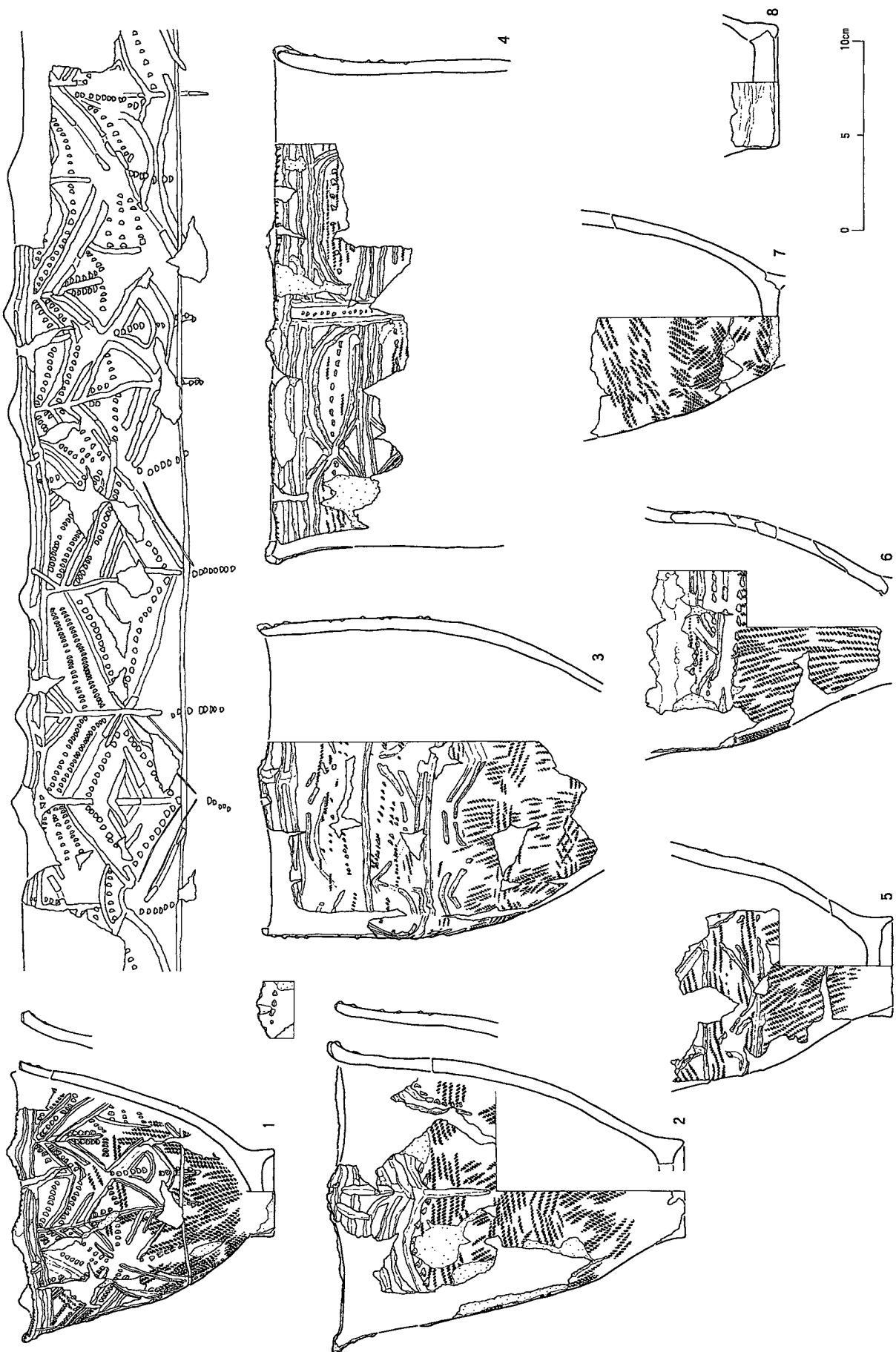
図IV-11 包含層出土のⅢ群b類土器(3)・Ⅳ群a類土器(2)

2～6、22～28は横走する縄文を地として、横位や弧線状の隆起線が配されたものである。隆起線の間には半月形や楕円形の列点文が施されている。口唇には刻み目がある。2は突起の下や中間に施された縦位の隆起線が連弧状の隆起線や半月形の列点文で結ばれている。突起の内面には縦位の短刻線が施され、その直下に小さな刺突の加えられたものもある。内面の胴部上位には横方向、下位は右下がりの調整痕がある。3は口縁部がやや内弯する器形で、口唇直下と胴部上位に横走する隆起線が施され、後者の上下には2本一組の弧線状の隆起線がめぐり、外面は風化による摩滅や剥落が激しい。内面はみがかれ、炭化物がわずかに付着している。胎土に径2ミリ程度の小礫を含む。4は大型の土器で、縦位や横位の隆起線で文様帯が区画され、それらに凸レンズ状の隆起線がめぐっている。図示した部分では縦位の隆起線の左上に山形突起があり、本来は隆起線の右上にも突起の貼り付けられていた可能性がある。山形突起の直下に隆起線の垂下している破片も2箇所で見られるので、2種類の突起が向かい合わせになっていたとも考えられる。内面の調整はミガキである。内外面とも炭化物が付着している。8は4と同一個体の底部破片である。4の胴部以下は破片の残存状況が悪く、両者を接合することはできなかった。5の内面には横方向の調整痕がある。6の胴部上位は外面側がうすく剥落し、成形時の接合痕の残る部分が多い。隆起線は多くが摩滅、剥落している。文様帯の下位は横位の列点文によって区画されている。内面はみがかれている。5・6は胎土に砂粒が多い。22～25には肥厚する小突起がある。口唇の刻み目には円形(23)や斜位(25)のものもある。22・26は2本一組の隆起線でメガネ状の文様が描かれたもので、22は隆起線で区画された内部に斜位の短刻線が加えられている。26の内面には炭化物が付着している。

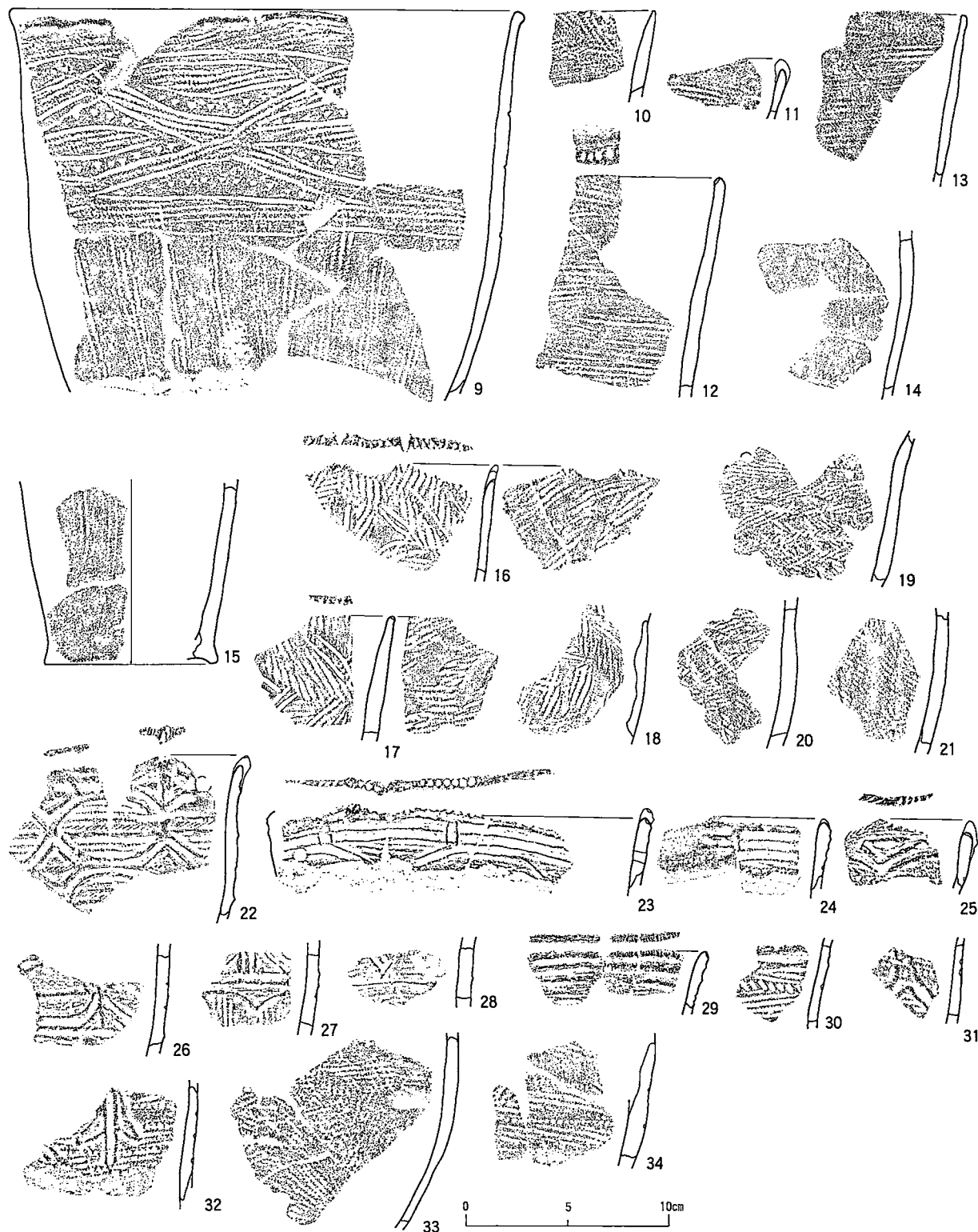
29・30は同一個体の可能性がある。30は横走縄文の間に斜位の短刻線が施されている。7は縦走する縄文の施文後に横走縄文が施されたもので、内面には横位の調整痕が残る。胎土は砂粒が多い。34は横走縄文の施文後に円形の刺突列が施されている。

これらの土器は後北C₁式に相当する。

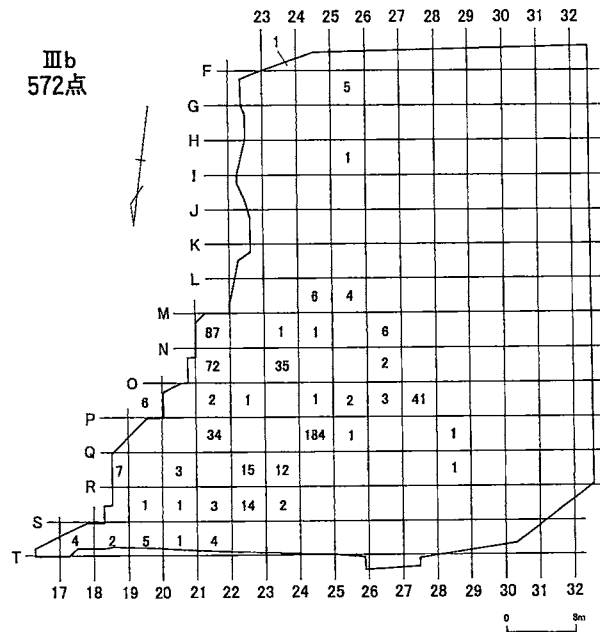
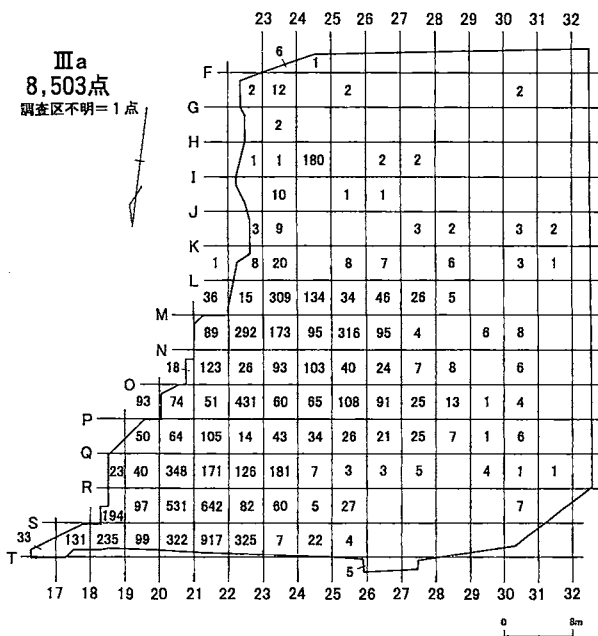
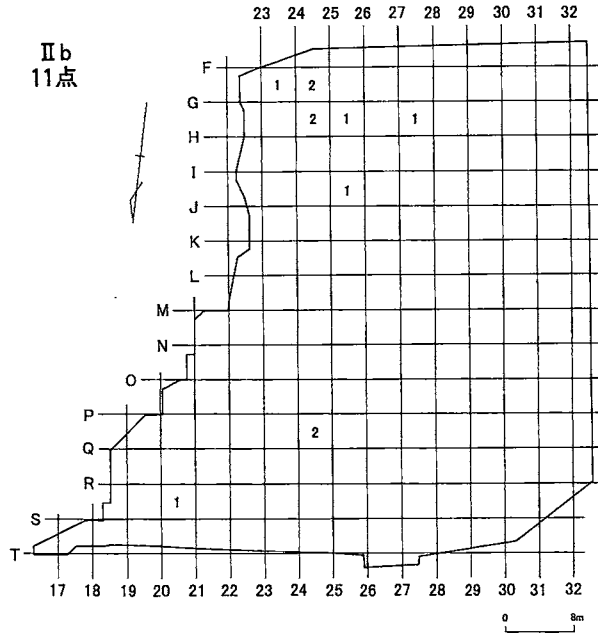
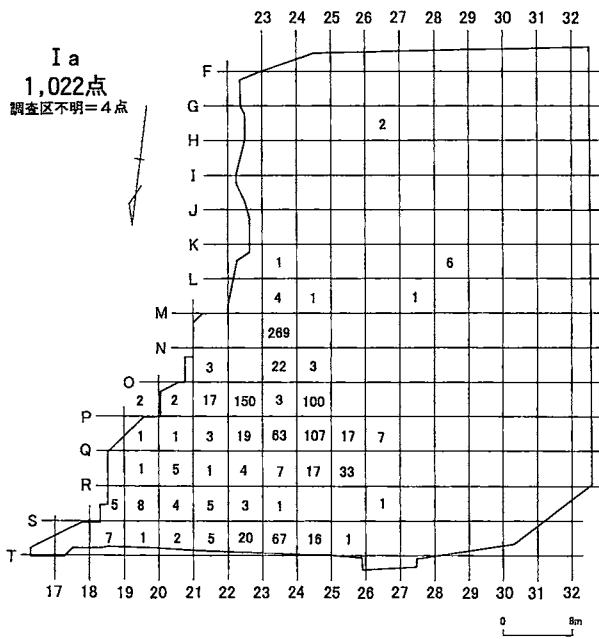
(中田)



図IV—12 包含層出土のVI群c類土器(1)

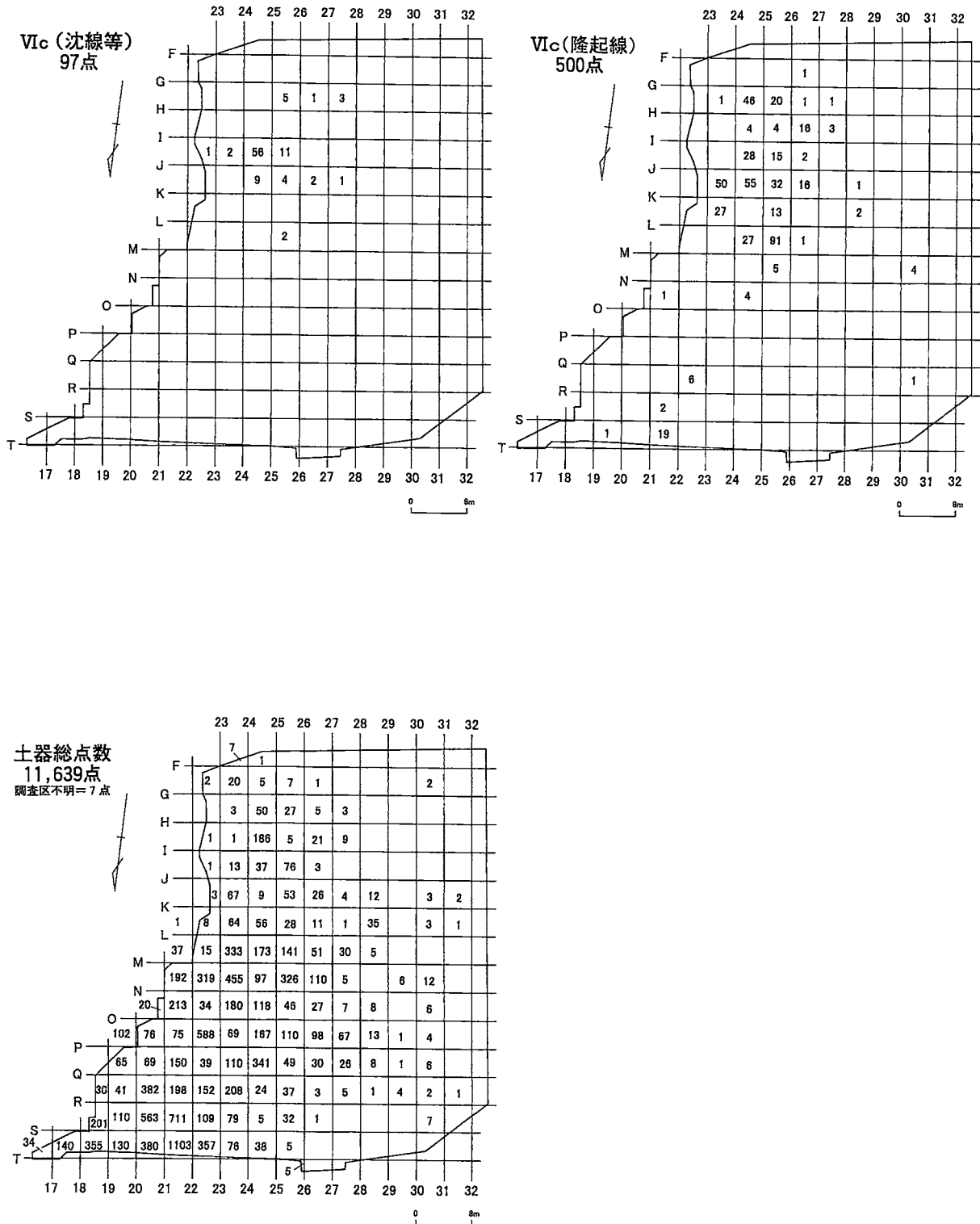


図IV-13 包含層出土のVI群c類土器(2)



図IV-14 包含層出土土器分布(1) I群a類・II群b類・III群a類・III群b類

IV 包含層出土の遺物



図IV-15 包含層出土土器分布(2)VI群c類(沈線等・隆起線)・総点数

2 石器等

包含層から出土した石器の総点数は4,954点、内訳は表Ⅰ-2の通りである。特徴は石皿・台石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠などの礫石器が多く出土していること、また、フレイク・チップの点数に対し、スクレイパー、石鏃等の、剥片石器群の中での石器の占める割合が多いことである。

なお石材に関しては、剥片石器については後述し、礫石器については、特に断りのない限り安山岩である。各細分の点数の記述は石鏃、スクレイパー、Uフレイク、半円状扁平打製石器にのみ行った。

〔剥片石器群〕

石鏃（ⅠA）（1～15）（図Ⅳ-16、表9、図版72）

29点出土している。1は三角形を呈するもの（ⅠA3）である。両面に丁寧な加工が施される。2～6は木葉状を呈するもの（ⅠA4）である。2は背腹両面、3は背面に比較的丁寧な調整が施されるが、4～6は素材剥片の周縁のみに加工される簡素なつくりのものである。7～15は有茎のもの（ⅠA5）である。7～10は返しが不明瞭なもの。11～15は明瞭なものである。10がやや厚手で粗い加工により整形されている他は比較的丁寧に両面が加工されている。各細分の点数はⅠA3が1点、ⅠA4が5点、ⅠA5が19点、ⅠA9が4点である。

石槍（ⅠB）（16、17）（図Ⅳ-16、表9、図版72）

3点出土している。16、17は正面観が菱形・木葉型を呈するもの（ⅠB2）である。16は背腹両面にわたって入念な細部調整が施され、側縁はほぼ直線に仕上げられる。17はやや歪な形状で、基軸がやや螺旋状にねじれている。

石錐（ⅡA）（18～21）（図Ⅳ-16、表9、図版72）

8点出土している。18～20は剥片の一部に機能部を作り出したもの（ⅡA1）。19は形状から石鏃の転用品の可能性ある。21は棒状のもの（ⅡA2）である。

つまみ付きナイフ（ⅢA）（22、23）（図Ⅳ-16、表9、図版72）

5点出土している。22はほとんど加工しないもの（ⅢA4）である。23は背面のほぼ全面に細部調整されるもの（ⅢA1b）である。やや厚手で側面観はノの字状を呈する。

スクレイパー（ⅢB）（24～42）（図Ⅳ-16～18、表9、図版72）

110点出土している。24は筥状石器。両面に細部調整されるもの（ⅢB1b）である。

25～41はスクレイパーである。107点出土した。そのうち25～39は縦長剥片素材、40、41は横長剥片素材である。25～28は刃部が外反するもの（ⅢB2a）。25、26は石刃様の縦長剥片を用いるもの、29は素材の原石面が残るものである。29～36は刃部が直線を呈するもの（ⅢB2b）。31、32は石刃様の縦長剥片を用いるもの、33、34は素材の原石面が一部に残るものである。37～39は刃部が内湾するもの（ⅢB2c）。すべて原石面が一部に残る剥片を用いるものである。40、41は横長剥片を素材とし、刃部が直線を呈するもの（ⅢB3b）。42は先端を作り出すもの（ⅢB6）である。この1点のみの出土である。なお30、41には刃部に沿って脂肪状の光沢が両面にわたってみとめられる。

各細分の点数はⅢB1bが2点、ⅢB2aが28点、ⅢB2bが34点、ⅢB2cが7点、ⅢB3bが4点、ⅢB6が1点、ⅢB9が33点出土している。

両面調整石器（Ⅳ）（43）（図Ⅳ-18、表9、図版72）

1点のみ出土している。43は木葉形のもの（Ⅳ2）である。比較的粗い加工が両面に施されている。

石核（ⅤA）（44～46）（図Ⅳ-18、19、表9、図版73）

10点出土している。44は拳大の亜角礫を用い、平坦面を打面とし、数枚の剥片剥離を行うものであ

る。45はやや扁平な亜角礫を用い、打面を固定せずに周縁から剥片剥離を行うものである。46は亜角礫を用い、2か所の平坦面から剥片剥離を行っている。しかし原石、剥離の大きさはともに小ぶりで、剥片石器の素材を得るためのものとは考えられない。

Rフレイク (VB1) (47) (図IV-19、表9、図版73)

34点出土している。47は背面の周縁に加工が施されるものである。

Uフレイク (VB2) (48~51) (図IV-19、表9、図版73)

121点出土している。48は石刃様の縦長剥片を用いるもの (VB2 a)。腹面のほとんどと背面の周縁にタール状の付着物がついている。49は素材の原石面が残るもの (VB2 b)。50、51は不定形な剥片を用いるもの (VB2 c) である。各細分の点数はVB2 aが29点、VB2 bが22点、VB2 cが70点である。

剥片石器の石材は石鏃(2)が黒曜石、石核(45)が玉髓である他はすべて頁岩である。そのうち石鏃(3)、(8)、石槍(17)、スクレイパー(31)、(35)はやや珪質分の多い頁岩、筧状石器(24)、スクレイパー(25)はやや泥岩に近いざらついた表面である。

[磨製石器群]

石斧・石のみ (IVA) (52~54) (図IV-20、表9、図版73)

合計7点が出土している。52、53は石斧(IVA 1)。52は泥岩、53は片岩製である。54は石のみである。片岩製で研磨により薄手に加工される。

[礫石器群]

たたき石 (VII) (55~64) (図IV-20・21、表9、図版73)

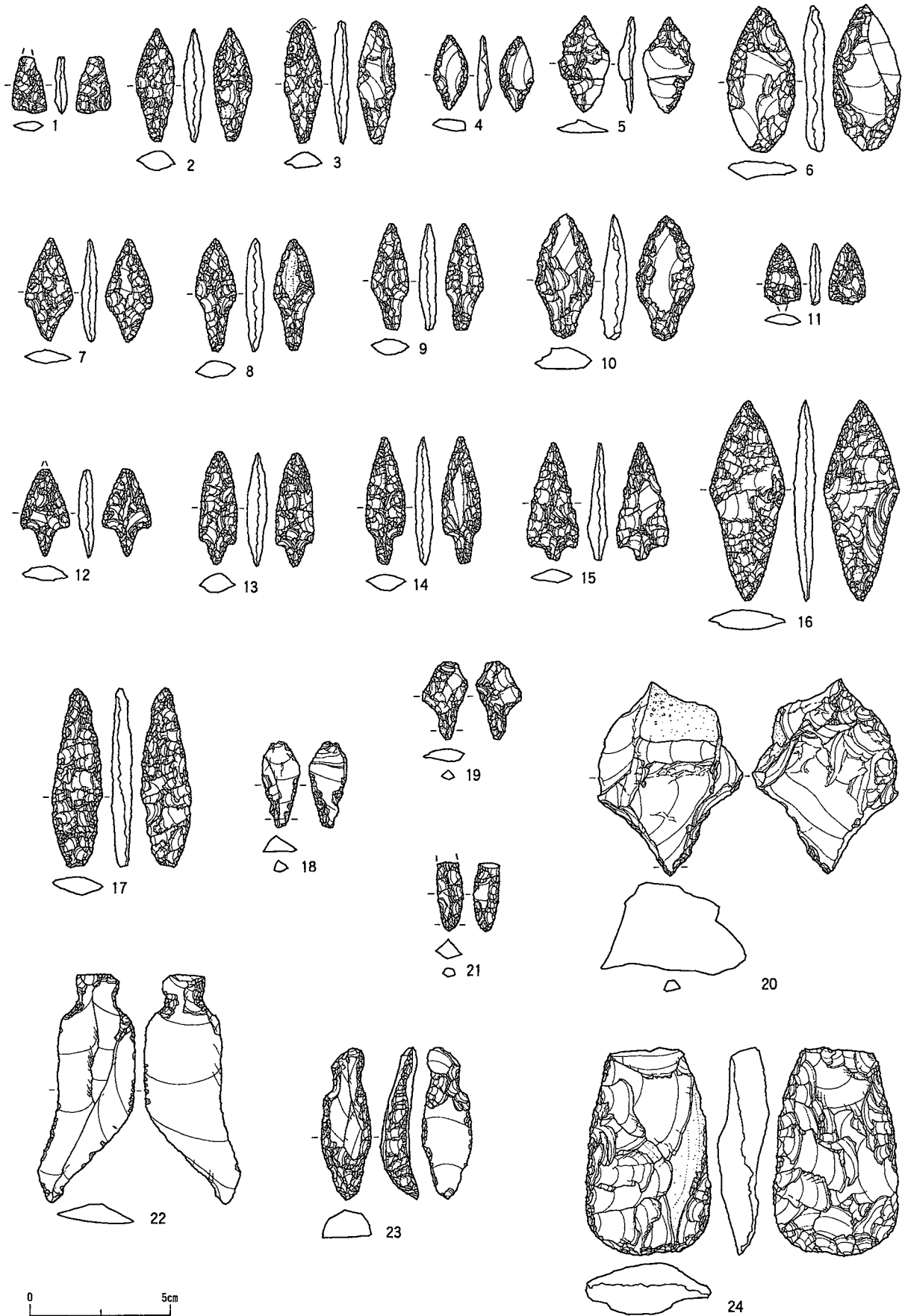
82点出土している。55、56は棒状礫の端部に敲打痕があるもの (VII 1)。55は礫の両端に敲打痕があるもの。56はくの字に曲がった泥岩を用い、一端を使用されるもの。敲打痕は明瞭でつぶれている。57~59は歪な亜円礫を用い、周縁に断続的な敲打痕があるもの (VII 2) である。58は中央平坦面にも敲打痕がある。59は石材から石核の可能性もある。石材は56が泥岩、59は頁岩である。60~64は礫の平坦面に敲打痕があるもの (VII 3)。60は両面2か所、都合4か所にやや不明瞭な敲打痕があるもの。61は表面に1か所、端部に1か所の弱い敲打痕がある。62は円礫を用い、表裏面に1か所ずつ敲打痕があるものである。敲打痕は明瞭でくぼんでいる。63は断面が台形を呈する角柱状の礫を用い、4つの平坦面のうち3面に明瞭な敲打痕があるものである。64は断面三角形の歪な亜円礫を用い、すべての平坦面のほぼ中央に敲打痕があるものである。

すり石 (VIII 1) (65~67) (図IV-21、表9、図版73・74)

12点出土した。65、66は断面三角形の礫の稜を擦ったもの (VIII 1)。65は3つの稜のうち2つを、66は1つを使用するものである。67は円礫の一部に擦痕のあるものである (VIII 2)。67は円礫の中央に使用痕があるもので、使用面はよく使われ円滑である。

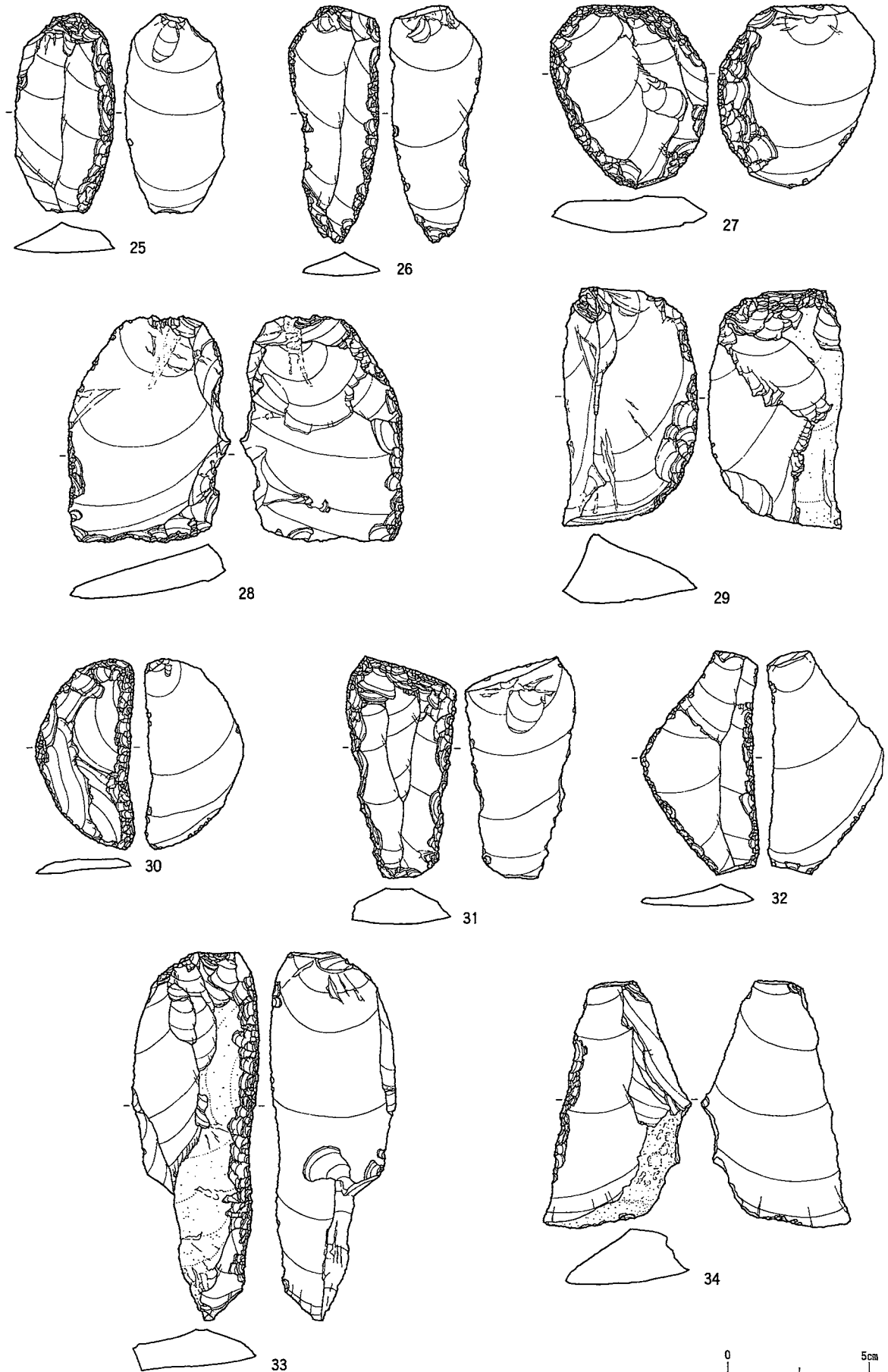
半円状扁平打製石器 (VIII 3) (68~80) (図IV-21・22、表9、図版74・75)

58点出土した。68~71は礫の周縁を打ち欠いて加工されるもの (VIII 3 a) である。68は節理面が表裏につく原石を用い、薄手である。70、71には明瞭な使用痕がある。機能部の幅は70は細く、71はやや幅広である。72~75は礫剥片素材 (VIII 3 b)。74は機能部が内湾している。76は半割礫を素材とするもの (VIII 3 c)。機能部の擦痕は明瞭でやや幅広である。77、78は礫をそのまま素材とするもの (VIII 3 d)。11点出土した。77は小型のもの。機能部に打ち欠きによる加工痕があるのでここに含めた。78は石皿片の転用とみられるもの。砂岩製である。機能部は打ち欠きにより幅狭に加工される。79、80は未成品 (VIII 3 e) である。礫の周縁を一部打ち欠いている。

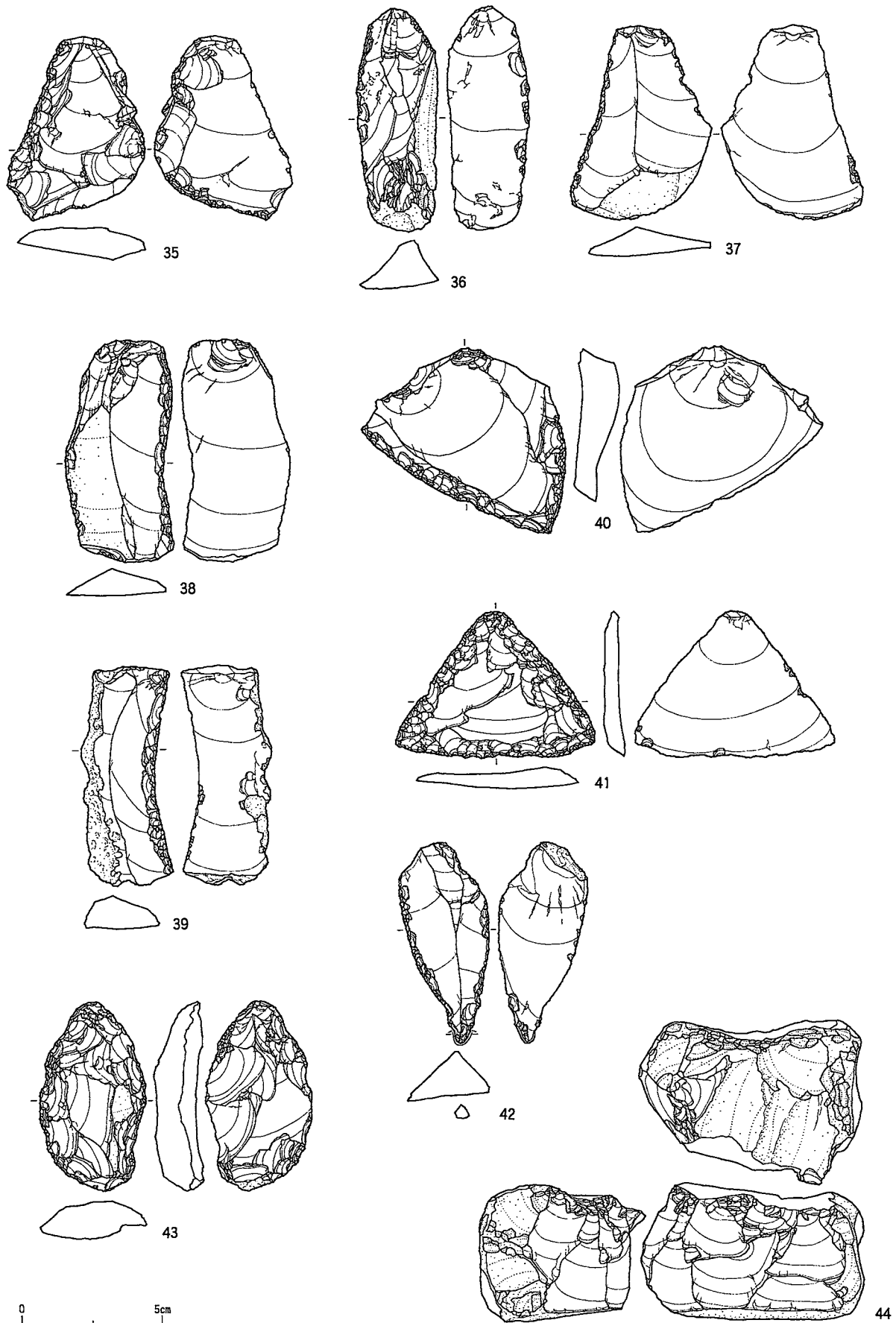


図IV-16 包含層出土の石器(1)石鏃・石槍・つまみ付ナイフ・籠状石器

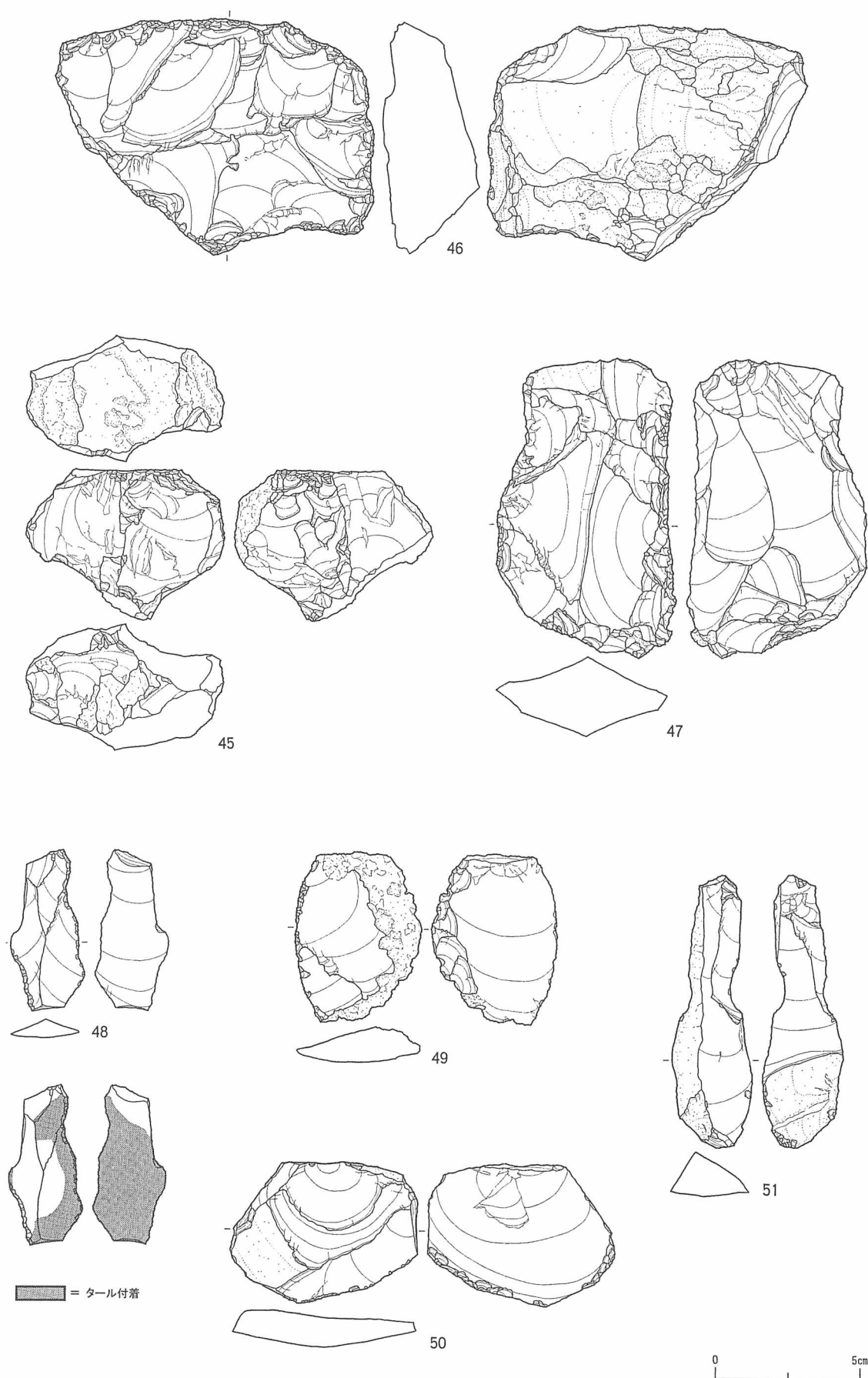
IV 包含層出土の遺物



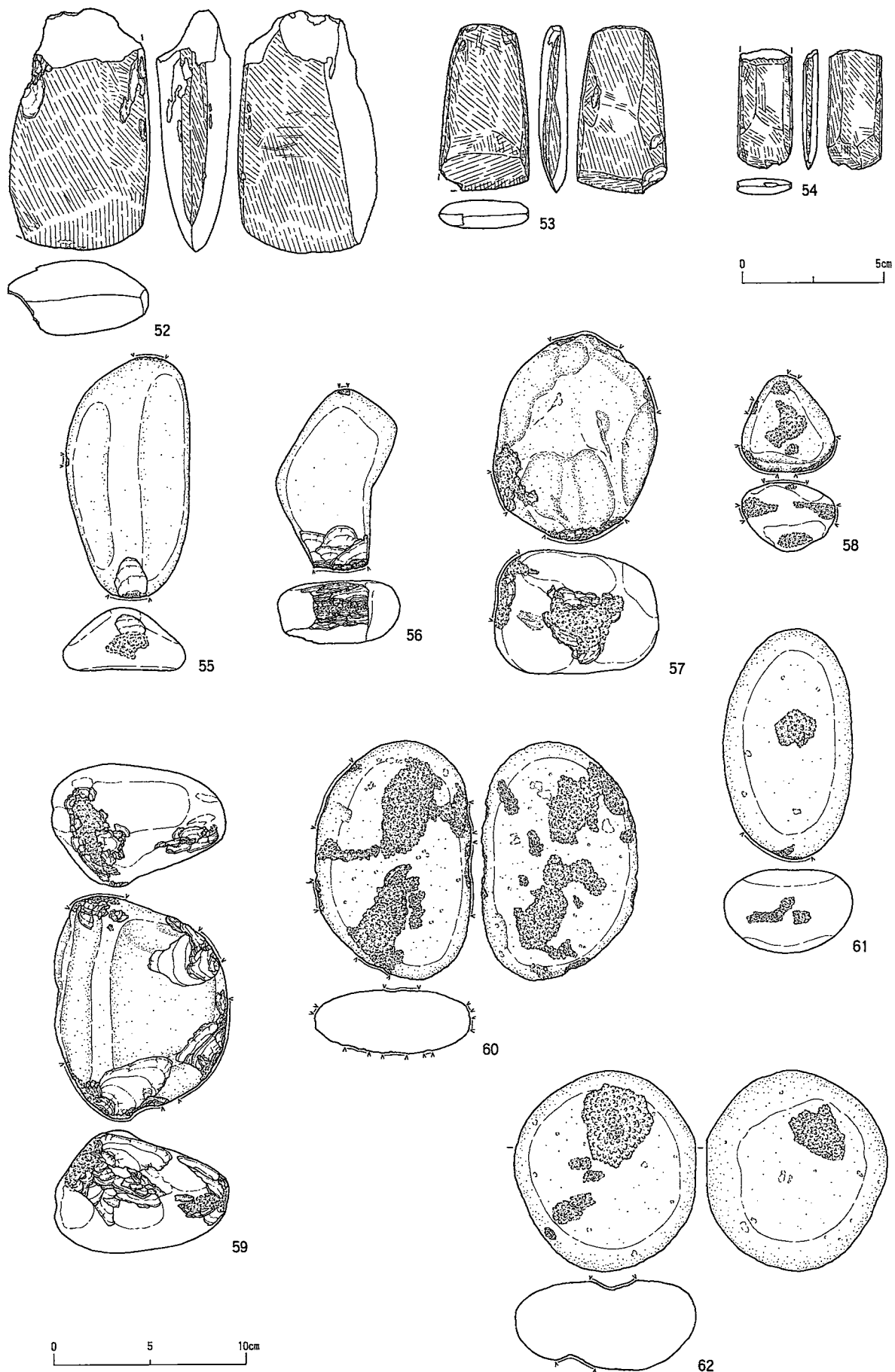
図IV-17 包含層出土の石器(2)スクレイパー



図IV-18 包含層出土の石器(3)スクレイパー・石核

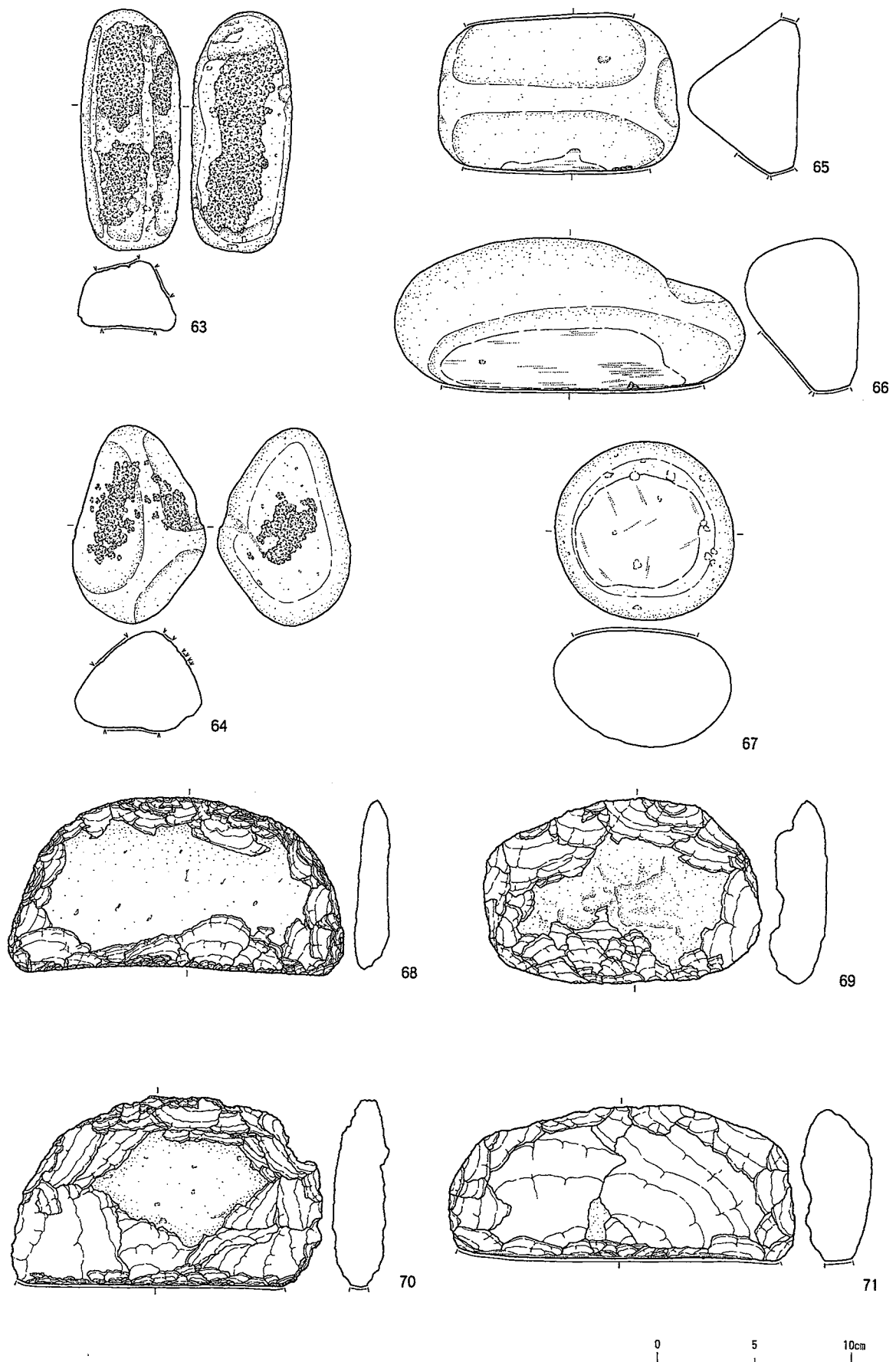


図IV-19 包含層出土の石器(4)石核・Rフレイク・Uフレイク

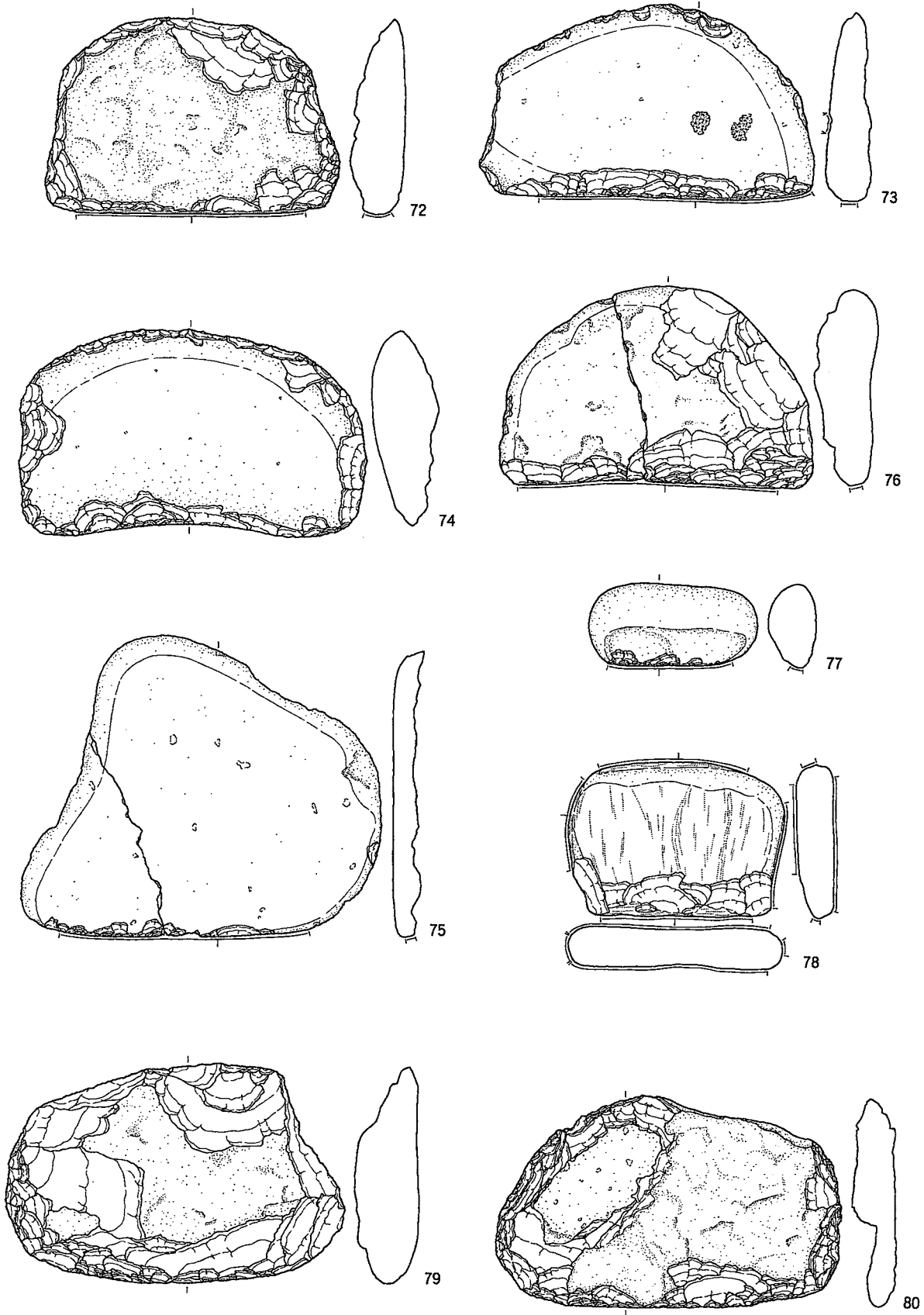


図IV-20 包含層出土の石器(5)石斧・石のみ・たたき石

IV 包含層出土の遺物



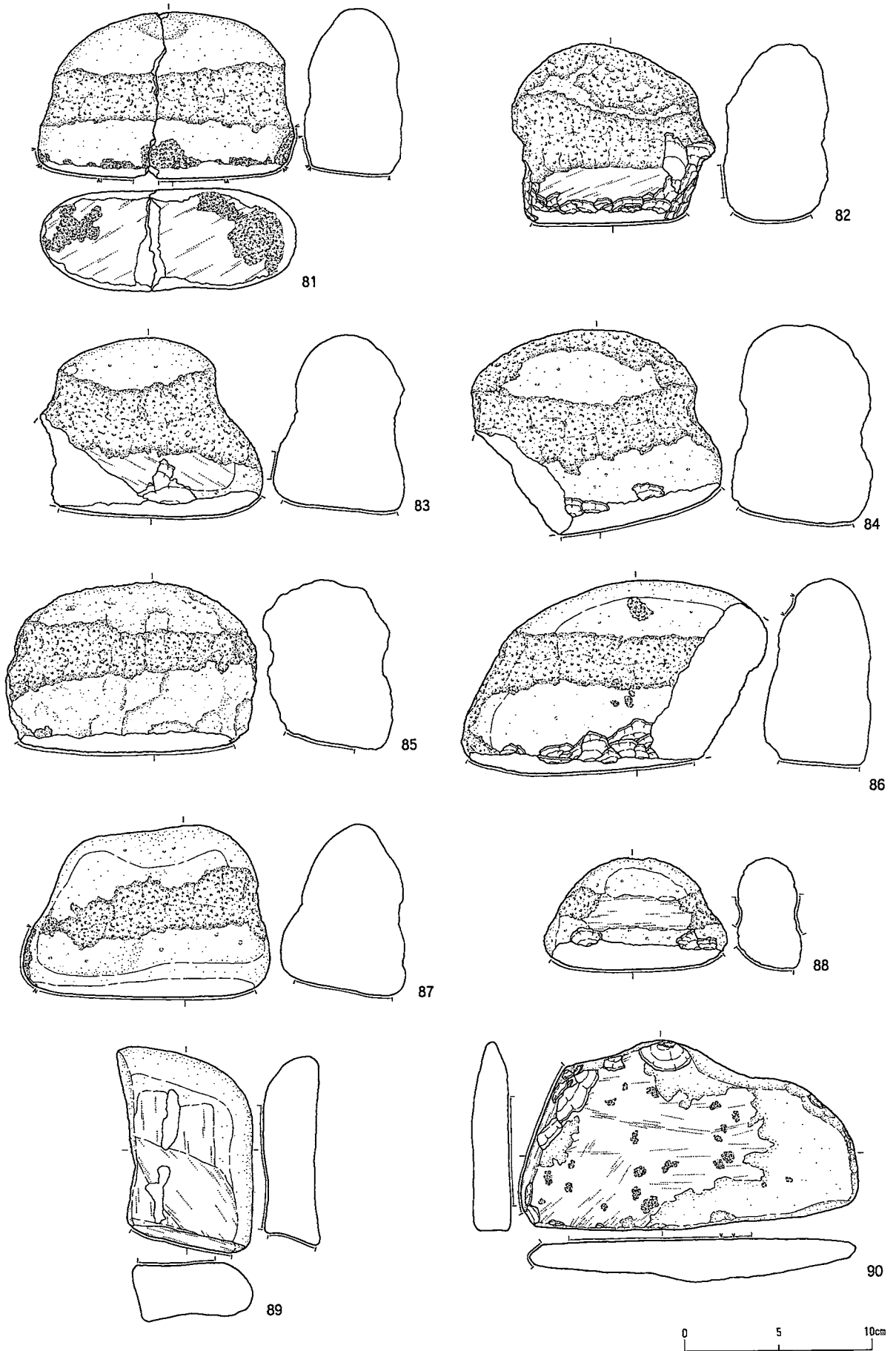
図IV-21 包含層出土の石器(6)たたき石・すり石・半円状扁平打製石器



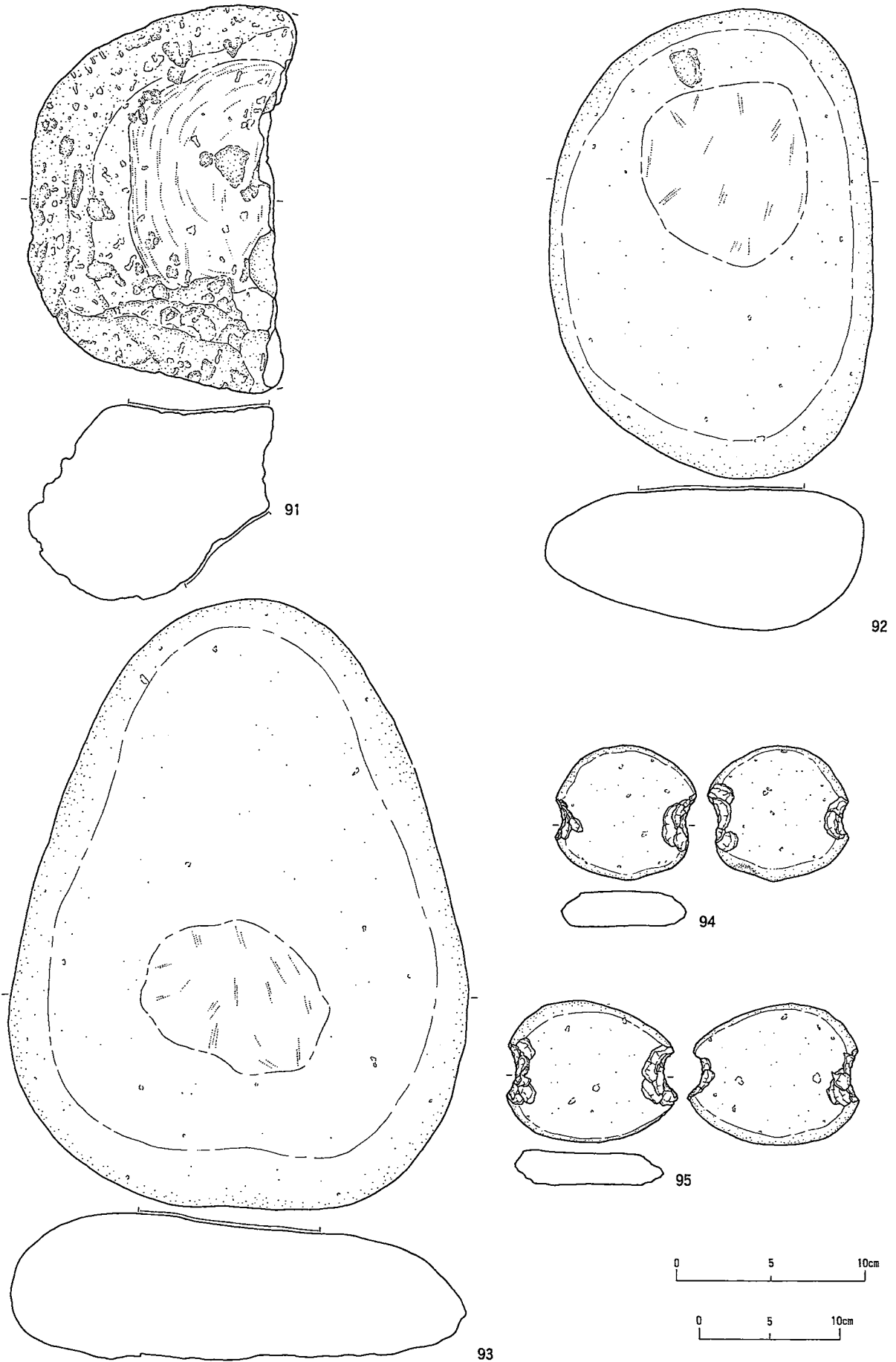
0 5 10cm

図IV-22 包含層出土の石器(7)半円状扁平打製石器

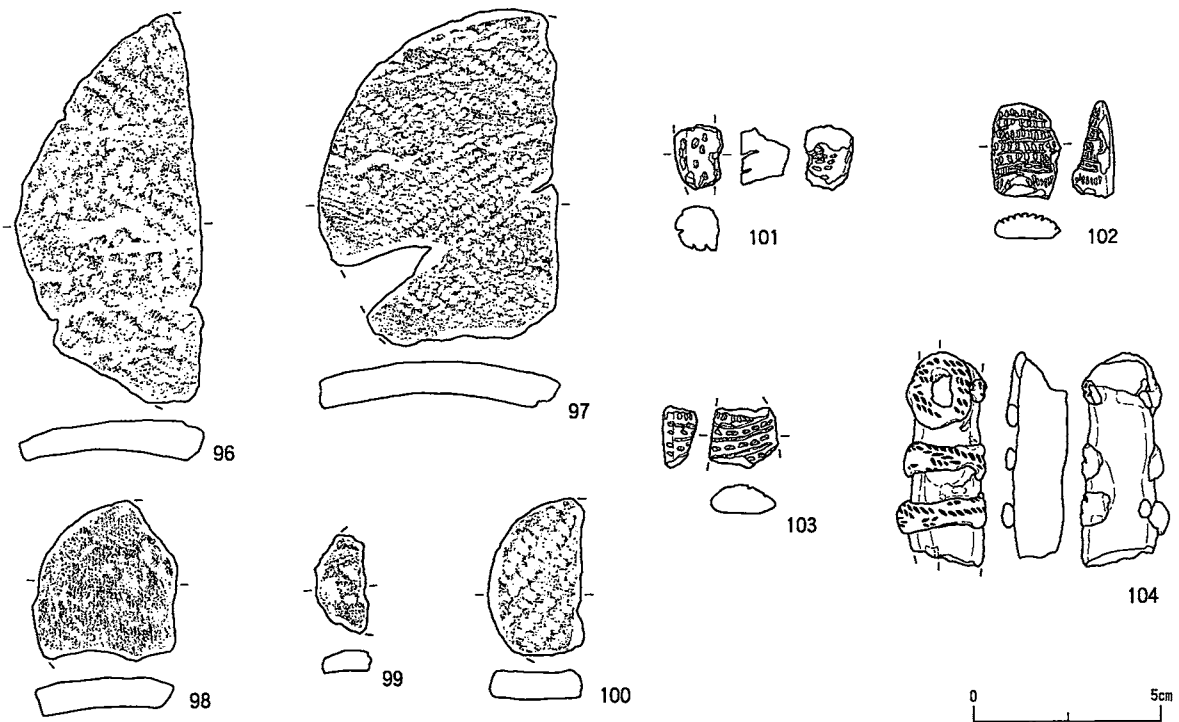
IV 包含層出土の遺物



図IV-23 包含層出土の石器(8)北海道式石冠・砥石・石皿



図IV-24 包含層出土の石器(9)石皿・石錘



図IV-25 包含層出土の土製品

各細分の点数は、Ⅶ3 aが18点、Ⅶ3 bが12点、Ⅶ3 cが4点、Ⅶ3 dが11点、Ⅶ3 eが4点である。

北海道式石冠 (Ⅶ4) (81~88) (図IV-23、表9、図版75)

28点出土した。すべてが「正面観が半円形を呈し、最大幅がほぼ使用面にある」小島分類I類(小島 1999)に相当するものである。2つに割れているもの(81)や機能部の両端または片端を欠損するもの(82、83、86)が多く、成品は少ない。81は使用面の縁辺に明瞭な敲打痕があるものである。88は小型のものである。

砥石 (ⅨB) (89) (図IV-23、表9、図版75)

11点出土した。89は砂岩を用いるもの、大きさから砥石とした。

台石・石皿 (Ⅹ) (90~93) (図IV-24、表9、図版75、76)

54点出土している。90は砂岩の扁平な礫を用いるもの、使用面は円滑に磨かれている。91は軽石製のもの。破片とみられるが使用面は大きくくぼんでいる。92、93は扁平な礫の表面が円形に使用されるものである。大きさは92が33.2cm、93が43.1cm、重さは92が12.5kg、93が22.5kgである。

石錘 (Ⅺ2) (94、95) (図IV-24、表9、図版75)

13点出土している。すべて長軸両端に打ち欠きがあるものである。

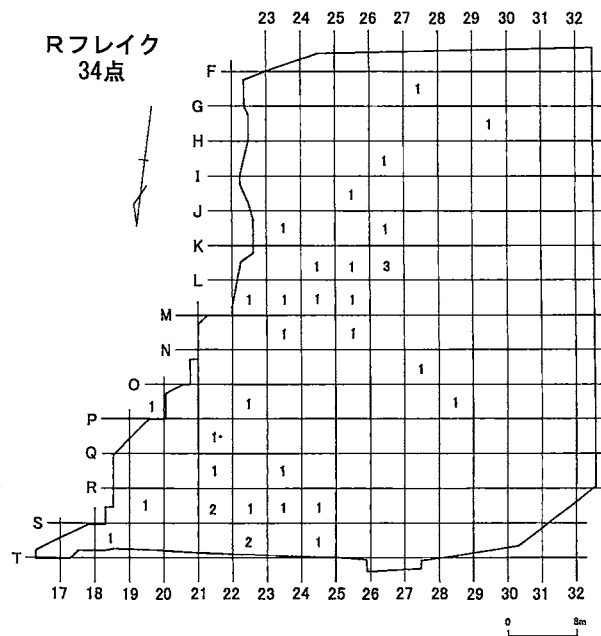
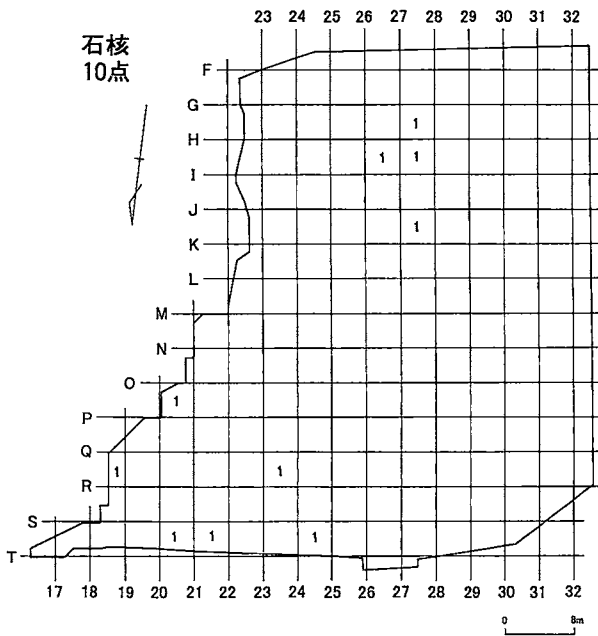
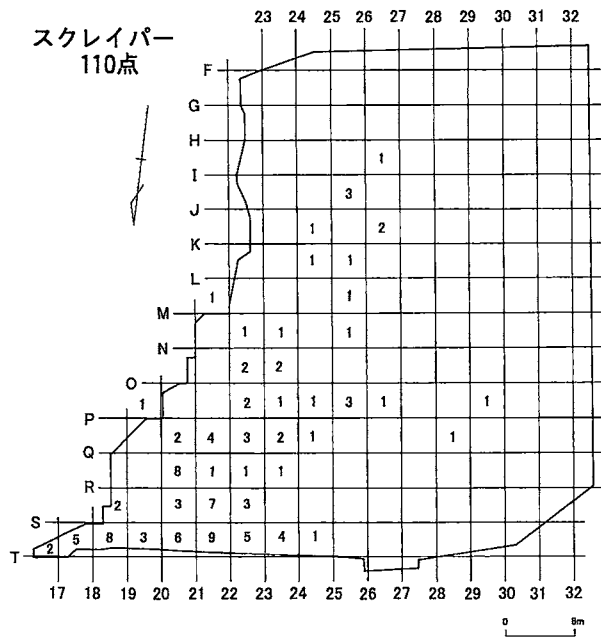
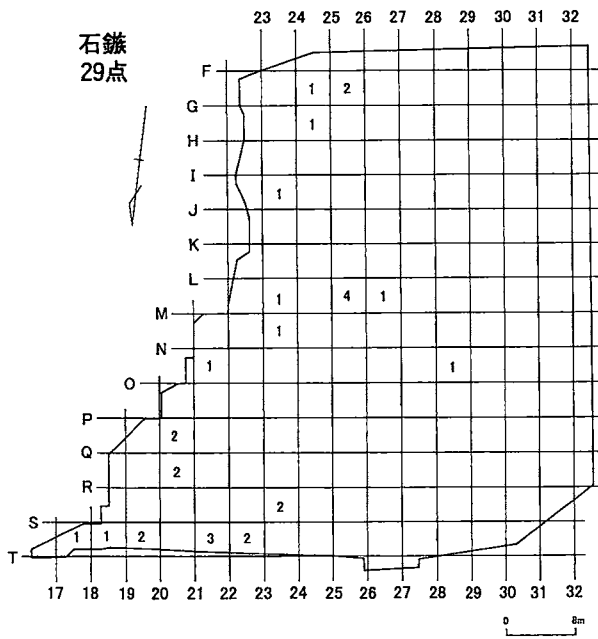
(立田)

土製品 (96~104) (図IV-25、表9、図版69)

96~100は円板状土製品である。いずれもⅢ群a類土器の胴部破片を打ち欠いたものと考えられる。97は胎土に海綿骨針を含む。98の外表面は摩滅している。

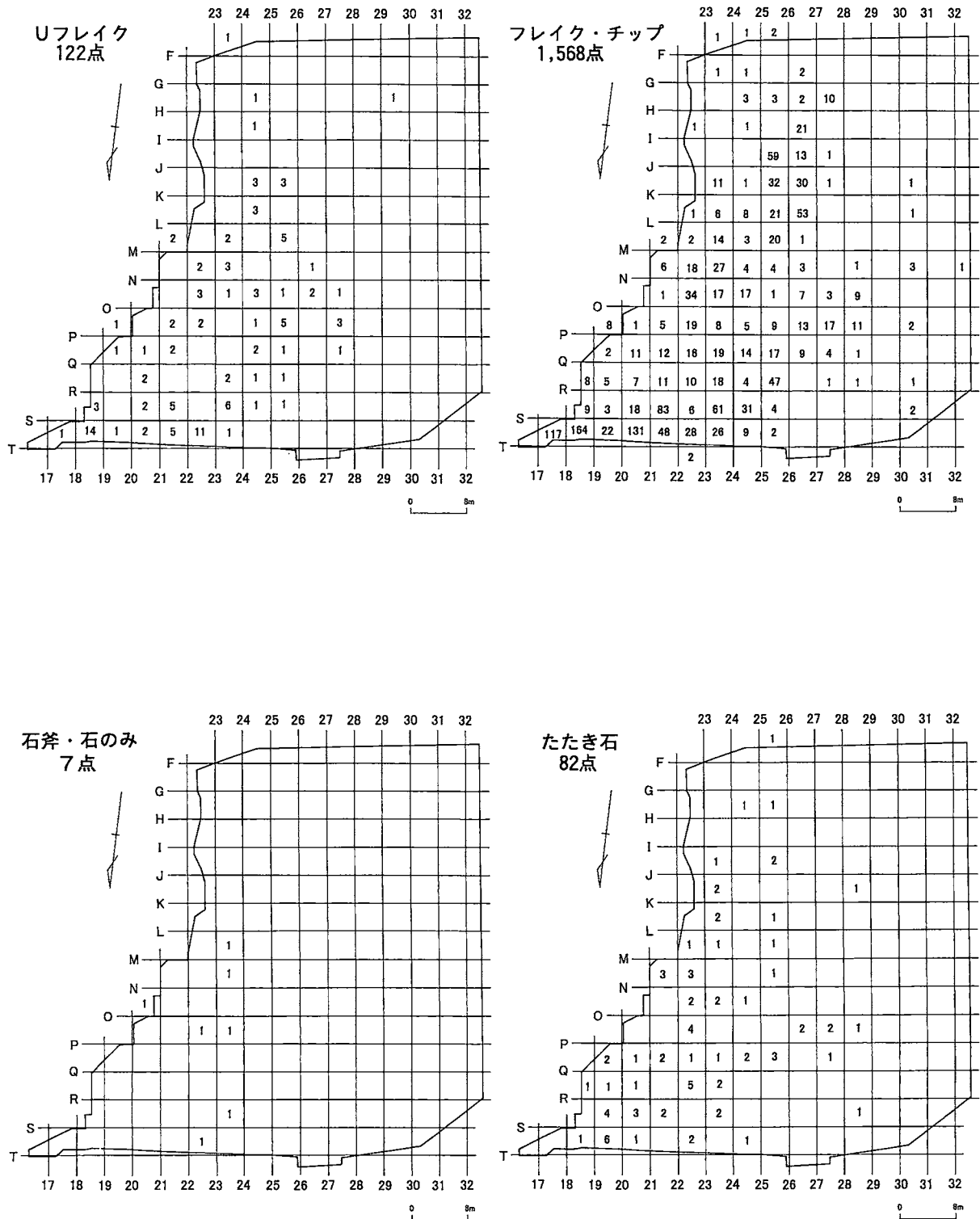
101~103は刺突が施されたものである。101の断面は楕円形になると考えられる。101・102は胎土に海綿骨針を含む。102・103は細い沈線と密集する刺突が交互に施されている。102は下部に貫通孔のうがたれていた跡がある。104は棒状の粘土に環状や紐状の粘土が貼り付けられたもので、それらの上には撚糸の圧痕が施されている。

(中田)

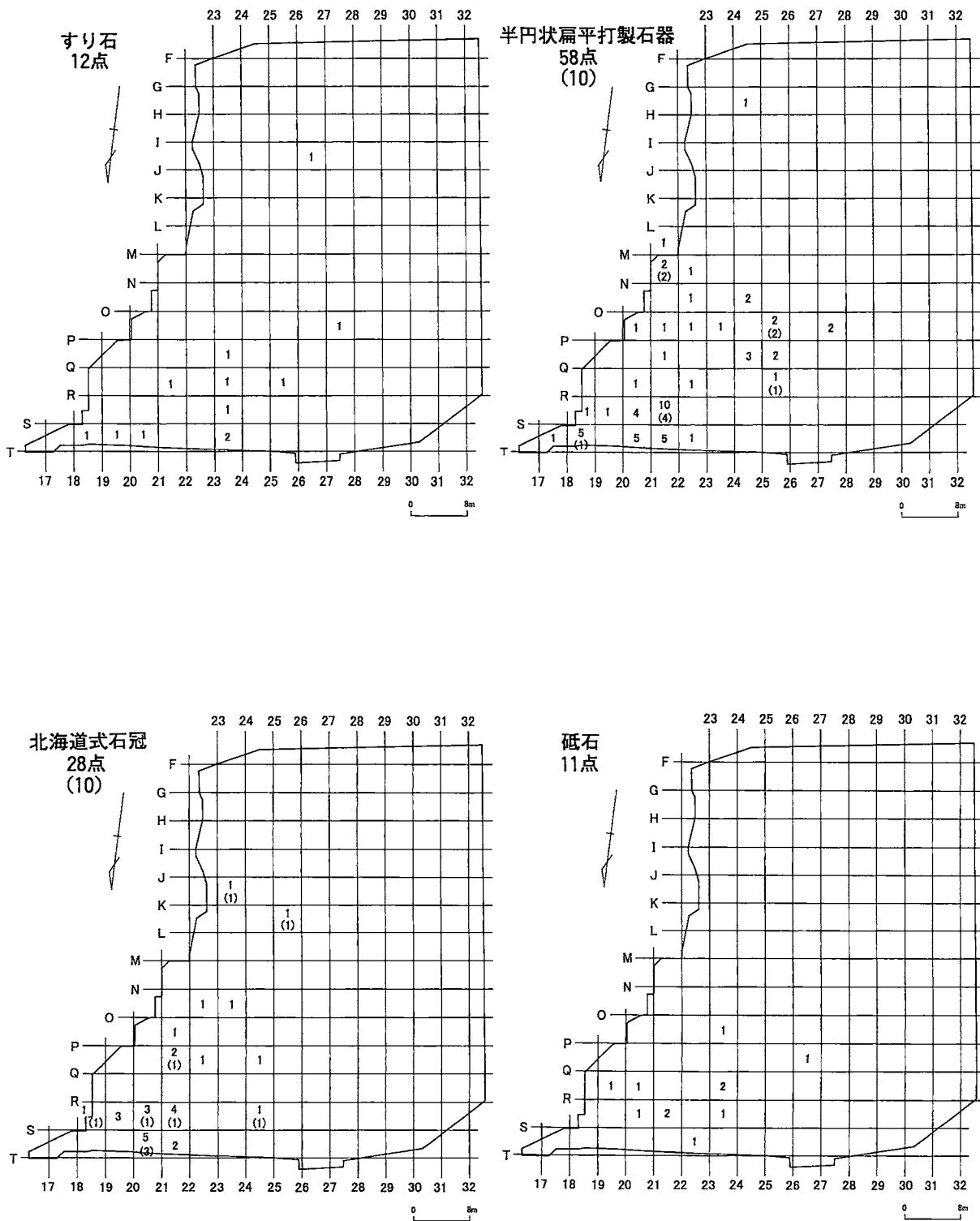


図Ⅳ-26 包含層出土石器分布(1)

IV 包含層出土の遺物



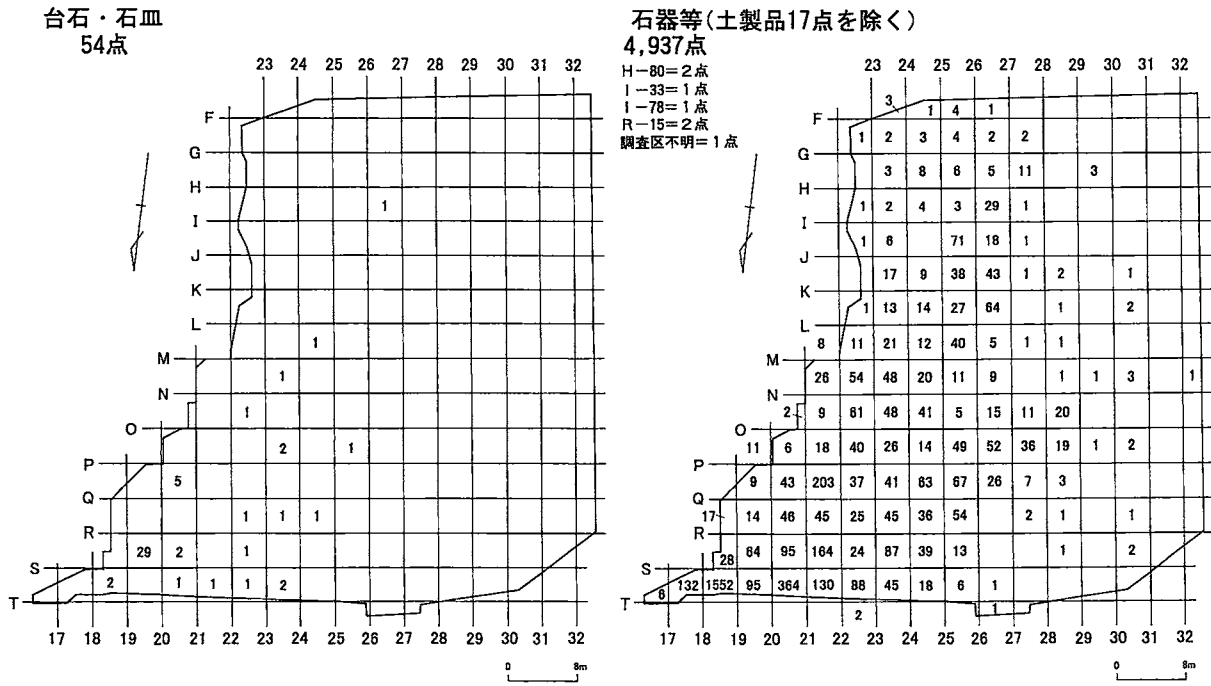
図IV-27 包含層出土石器分布(2)



※ ()内は破片の数

図IV-28 包含層出土石器分布(3)

IV 包含層出土の遺物



図IV-29 包含層出土石器分布(4)

表Ⅲ-1 遺構規模一覧

(1)住居跡

遺構番号	位 置	確認面 底面 (cm)		平面形	長軸方向	時 期	備 考
		長軸×短軸	長軸×短軸				
H-1	Q-21-c・d、Q-22、Q-23-d、R-21-d、R-22-a・d	520×470	456×408/54	楕円形	N-118° -W	縄文時代中期前半	
H-2	L-22-c・d、L-23-a・d	340×274	286×240/58	不整楕円形	N-167° -W	縄文時代中期前半	
H-3	M-23-c、M-24-b・c、N-23-d、N-24	(478)×408	322×268/32	不 整 形	N-78° -W	縄文時代中期前半	
H-4	N-26-c、N-27-b・c、O-26、O-27、P-26-d、P-27-a	(522)×(468)	(484)×(458)/28	隅丸方形	N-146° -W	縄文時代中期前半	
H-5	Q-22-b・c、Q-23-b、R-21-c・d、R-22、R-23-a・b	580×546	404×360/40	楕円形	N-110° -W	縄文時代中期前半	
H-6	P-20-c・d、P-21-a・b	300×254	(262)×(246)/26	不整円形	N-146.5° -W	縄文時代中期前半	
H-7	N-26、N-27-a・c、O-26、O-27、P-26-a・d、P-27-a・d	838×802	618×528/44	長楕円形	N-19° -W	縄文時代中期前半	
H-1-5 補正上	O-21-23、P-20-23、Q-20-22、R-20-22、S-20-22	1751×(850)		—	N-20° -W	縄文時代中期前半	

(2)土墳墓

遺構番号	位 置	確認面 底面 (cm)		平面形	長軸方向	時 期	備 考
		長軸×短軸	長軸×短軸				
P-4	M-21	148×112	122×92/58	隅丸方形	N-119.5° -W	縄文時代中期前半	墓
P-6	M-22	196×168	164×128/62	隅丸方形	N-97.5° -W	縄文時代中期前半	墓
P-7	L-22-c・d、23-a・b	318×(286)	284×(162)/58	不整楕円形	N-171° -W	縄文時代中期前半	墓
P-25	M-23-a・b	86×62	82×60/36	楕円形	N-97.5° -W	縄文時代中期前半	墓
P-32	M-23-b	88×66	87×52/33	不整楕円形	N-168.5° -W	縄文時代中期前半	墓
P-15	P-23-a・d	70×54	74×54/20	円 形	N-137° -W	縄文時代中期前半	墓?

(3)フラスコ・ピット

遺構番号	位 置	確認面 底面 (cm)		平面形	長軸方向	時 期	備 考
		長軸×短軸	長軸×短軸				
P-3	P-19-b・c・d、20-b	258×214	(206)×178/78	不整楕円形	N-136° -W	縄文時代中期前半	フラスコ
P-5	P-22-b・c、Q-22-d	208×166	160×128/82	楕円形	N-24° -W	縄文時代中期前半	フラスコ

(4)A類土墳

遺構番号	位 置	確認面 底面 (cm)		平面形	長軸方向	時 期	備 考
		長軸×短軸	長軸×短軸				
P-13	Q-19-c、S-19-d	78×52	68×44/24	楕円形	N-177° -W	縄文時代中期前半	土墳A
P-21	S-18-d	68×48	66×56/32	不整楕円形	N-162.5° -W	縄文時代中期前半	土墳A
P-24	O-22-c、23-b	82×67	74×64/46	不整楕円形	N-172° -W	縄文時代中期前半	土墳A
P-30	P-20-a・b・d	72×54	64×50/32	楕円形	N-41° -W	縄文時代中期前半	土墳A

(5)土墳

遺構番号	位 置	確認面 底面 (cm)		平面形	長軸方向	時 期	備 考
		長軸×短軸	長軸×短軸				
P-1	H-23-c・d、H-24-a・b	280×240	226×189/44	不整楕円形	N-116° -W	縄文時代	
P-2	K-22-c、K-23-b、L-22-d、L-23-a	108×54	(77)×(48)/72	不整円形	N-65° -W	縄文時代	
P-8	M-22-b・c	246×226	148×120/22	楕円形	N-126.5° -W	縄文時代中期前半	
P-9	O-20-d	(86)×(60)	90×58/40	不整円形	N-83° -W	縄文時代中期前半	
P-11	Q-29-c、R-29-d	94×74	92×78/13	ほぼ円形	N-17° -W	縄文時代中期前半	
P-12	R-28-d、R-29-a	86×75	76×64/9	楕円形	N-84° -W	縄文時代中期前半	
P-14	Q-19-c	44×32	42×32/14	円 形	N-178° -W	縄文時代中期前半	
P-16	S-19-a・d	54×38	52×36/20	ほぼ円形	N-120° -W	縄文時代中期前半	
P-17	H-22-c、H-23-b、I-22-d、I-23-a	182×128	(170)×140/54	不整円形	N-105° -W	縄文時代	
P-18	M-26-a・b・d	156×134	114×92/38	不整楕円形	N-27° -W	縄文時代中期前半	
P-19	S-18-a	36×33	34×22/23	ほぼ円形	N-71.5° -W	縄文時代中期前半	
P-20	O-20-c・d	(64)×50	66×54/18	ほぼ円形	N-91° -W	縄文時代中期前半	
P-22	O-22-b	80×46	62×48/12	不整円形	N-77.5° -W	縄文時代中期前半	
P-23	Q-22-c・d	50×44	(44)×(37)/6	不整楕円形	N-51° -W	縄文時代中期前半	
P-26	R-20-b	86×67	64×50/28	楕円形	N-178.5° -W	縄文時代中期前半	
P-27	N-23-b	66×50	58×38/14	不整楕円形	N-7° -W	縄文時代中期前半	
P-28	Q-28-b・c	76×(48)	68×40/21	円 形	N-98° -W	縄文時代	
P-29	M-24-c、N-24-d	78×58	45×32/12	—	N-8° -W	縄文時代中期前半	
P-31	S-20-a	60×44	56×42/22	ほぼ円形	N-19° -W	縄文時代中期前半	
P-33	S-20-c	34×24	34×20/20	ほぼ円形	N-95° -W	縄文時代中期前半	
P-34	R-22-b・c	160×134	120×100/40	楕円形	N-96.5° -W	縄文時代中期前半	

(6)縄文時代の焼土

遺構番号	発 掘 区	規 模 (cm)		長軸方向	時 期	備 考
		長軸×短軸	厚さ			
F-2	Q-19-c	40×38	4	N-118° -W	縄文時代中期前半	
F-3	I-28-d	82×70	10	N-26.5° -W	縄文時代	
F-4	I-28-d	42×24	8	N-113° -W	縄文時代	
F-6	Q-20-d	38×35	6	N-126.5° -W	縄文時代中期前半	
F-8	S-18-d	60×36	6	N-95.5° -W	縄文時代中期前半	
F-9	S-18-a・b・c	78×66	10	N-27° -W	縄文時代中期前半	
F-10	S-18-c	54×(38)	10	N-94° -W	縄文時代中期前半	
F-11	S-21-b	52×38	10	N-142° -W	縄文時代中期前半	
F-12	S-21-b	36×10	6	N-96° -W	縄文時代中期前半	
F-13	S-22-a・b	102×78	10	N-112° -W	縄文時代中期前半	
S-1	S-18-a・b・c	86/60	10	(N-5° -W)	縄文時代	

IV 包含層出土の遺物

(7)柱穴状小土壇

遺構番号	発掘区	規模 (cm)		時期	備考
		長軸	深さ		
SP-1	S-24-d	24	12	縄文時代中期前半	
SP-2	S-19-b	18	46	縄文時代中期前半	
SP-3	S-18-c	24	62	縄文時代中期前半	
SP-4	S-18-d	16	44	縄文時代中期前半	
SP-5	S-18-a・b	26	16	縄文時代中期前半	
SP-6	S-18-d	24	30	縄文時代中期前半	
SP-7	S-18-d	16	10	縄文時代中期前半	
SP-8	S-18-d	15	32	縄文時代中期前半	
SP-9	S-18-a	20	32	縄文時代中期前半	
SP-10	S-18-c	14	20	縄文時代中期前半	
SP-11	S-18-c	28	32	縄文時代中期前半	
SP-12	S-18-a	16	24	縄文時代中期前半	
SP-13	S-18-a	22	20	縄文時代中期前半	
SP-14	S-18-a・d	18	22	縄文時代中期前半	
SP-15	S-19-a	14	8	縄文時代中期前半	
SP-16	S-22-a	20	32	縄文時代中期前半	
SP-17	S-22-b	20	34	縄文時代中期前半	
SP-18	S-22-c	22	12	縄文時代中期前半	
SP-19	S-23-b	16	16	縄文時代中期前半	
SP-20	S-23-b・c	14	12	縄文時代中期前半	
SP-21	S-23-c	20	28	縄文時代中期前半	
SP-22	S-23-d、S-24-a	20	18	縄文時代中期前半	
SP-23	S-22-a	14	29	縄文時代中期前半	
SP-24	P-27-d	16	22	縄文時代中期前半	

(8)続縄文時代の遺構

遺構番号	発掘区	確認面 底面 (cm)		平面形	長軸方向	時期	備考
		長軸×短軸	長軸×短軸				
P-10	F-26-c、G-26-d	168×124	163×124	42	円形	N-98° -W	続縄文時代

遺構番号	発掘区	規模 (cm)		長軸方向	時期	備考
		長軸×短軸	厚さ			
F-1	K-25-c・d	74×62	12	N-6.5° -W	続縄文時代	
F-5	H-26-c	68×56	10	N-22° -W	続縄文時代	
F-7	J-26-a	24×12	6	N-33.5° -W	続縄文時代	
FC-1	J-23-c、K-23-d	(85)×(46)		N-83° -W	続縄文時代	

表Ⅲ-2 出土遺物一覧 (住居) ()内は床面、壇底から出土した点数

遺構名	I a	II b	III	III a	III b	III b 2	IV a	不明	石鏃	石槍	つまみ付きナイフ	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	石核	原石	石斧	石のみ	たたき石	すり石	半円状扁平打製石器	北海道式石冠	砥石	台石	石皿	石棒	石製品	焼成粘土塊	礫・礫片	総計
H-1	2			11(46)	(6)	119			3	1(1)	1(1)	6(6)	(1)	5(5)	7(21)			(1)		7(2)		1							11(34)	300	
H-2									2						1															1	4
H-3				38(4)					(1)				1(1)	1(1)	39(33)			(1)		(1)	1	2		1			1	1	1(2)	39(14)	183
H-4			(1)	(53)			(30)	(2)	(1)			(2)	(1)	(18)					(2)		(3)			(28)				(5)	4(53)	203	
H-5	2(2)	(1)	50(7)	1392(108)	5(1)			2(12)	3(2)		1	15(4)	2(1)	9	51(12)		1	1	1	4		7(1)	(3)		(1)	1	1(1)	3(4)	120(17)	1,848	
H-6	2		4	5(18)				5				2	1	7	8(6)							1								7	66
H-7			1	81(98)	24		3	1	6	1		6(2)	5(1)	5	46(8)	2	(1)	(1)		6		1	1							75	376
H-1・5 欄上土上面	36		74	588	8	1		1	1			3	1	3	32					3		1	1			11				42	806
計	44	1	137	2,442	44	120	33	28	16	1	3	46	14	37	282	2	2	4	1	25	1	17	5	1	31	12	1	4	15	417	3,786

出土遺物一覧 (土壇、その他)

遺構名	I a	III	III a	III b 2	VI ?	VI c	不明	石鏃	石槍	石鏃	両面調整石器	スクレイパー	原石	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	たたき石	半円状扁平打製石器	北海道式石冠	石皿	台石	礫・礫片	砂利	焼成粘土塊?	玉	総計					
P-4		1	11																												18
P-6		7	115					4		1		1	1	1	1	6	2	2					9							150	
P-7		10	45(3)				2								1	(1)	1		1		2	5								71	
P-25			2																2				2							6	
P-32			134					2		1							4		1				3	6						151	
P-15			(2)																				(1)							3	

遺構名	I a	III	III a	III b 1 2	VI ?	VI c	不明	石鏃	石槍	石鏃	両面調整石器	スクレイパー	原石	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	たなき石	半円状扁平打製石器	北海達式石冠	石皿	台石	礫・礫片	砂利	焼成粘土塊?	玉	総計
P-3		6	671	65								1			2	39	4	6		1	1	47	1	1		845
P-5	1		1				1	1		1		1		1		1										8
P-13			2						1		3	2		6	2	82							2			100
P-24																			(1)				2			3
P-30																			(1)	2		(1)				4
P-1																	1									1
P-9			2													1							1			4
P-14			5													1		1					5			12
P-16			3																				1			4
P-17															1											1
P-18			6												1	2							1			10
P-19			1													2							1			4
P-21																2			(1)				3(2)			8
P-23																									1	1
P-26		1	15									1											1			18
P-27																					1					1
P-31			13														1	1					6			21
P-33			5																							5
F-9			7																				1			8
F-13																							7			7
S-1			4													231							81	27,862		28,178
SP-11		2	7													1							3			13
SP-23																		1								1
P-10						2																				2
F-5					3	4																	3			10
F-7																	5									5
FC-1		1				19	1							1	1	272							3			298
計	1	28	1,054	65	3	25	4	7	1	3	3	6	1	9	9	652	8	13	4	3	4	197	27,869	1	1	29,971

表Ⅲ-3 遺構出土復原土器一覽(住居)

H-1 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接合	破片数	口径	底径	器高	未接合	破片数	備考
1	33-1,2	H-1	III b-2	H-1・1覆土3×66 Q-22-a・1 III×1 Q-22・3 III a×4	71	20.5	(7.6)	(26.0)	H-1・1覆土3×4未注記×9	13	
2	33-3,4	H-1	III b-2	H-1・13覆土1×2 H-1・17覆土1×6 H-25-c・1 III×1 p-21-b・3 III×2 p-21-b・4 III×3 p-21-b・5 III×1 p-21-b・8 III×1 p-21-c・4 III×2	18	(14.7)	-	(16.5)	H-1・32覆土1×1 M-21-d・9 III×1	2	
3	33-5	H-1	III a?	H-1・108床×26	26	(7.0)	3.4	6.5	H-1・108床×13	13	ミニチュア

H-4 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接合	破片数	口径	底径	器高	未接合	破片数	備考
1	35-2	H-4	III a	H-4・106HP-6覆土4×2 H-4・114HP-6 開口×29 H-7・40覆土1×1 H-7・65覆土×2 M-23-c・19 III×1 M-24-c・5?×1 o-27-b・1 III×1 o-27-b・4 III×1 o-27-c・2 III×1 p-27-a・1 III×4	43	(16.5)	8.4	21.9	H-7・125HP-12覆土×1 M-23-c・6 III×1 M-23-c・10 III×1	3	
2	35-3	H-4	IV a	H-4・99床23	23	(21.1)	-	(21.6)	H-4・99床6 H-7・53覆土1×1 未注記×5	12	

H-5 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接合	破片数	口径	底径	器高	同一個体	破片数	備考
1	36-2,3	H-5	III a	H-5・152覆土5下×52 H-5・153覆土5下×60 H-5・232覆土5下×28	140	(25.2)	(10.1)	37.0	H-5・152覆土5下×23 H-5・152覆土5下×11未注記分 H-5・153覆土5下×32 H-5・153覆土5下×98未注記分 H-5・232覆土5下×14	178	

IV 包含層出土の遺物

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接合	破片数	口径	底径	器高	同一個体	破片数	備考
2	37-1	H-5	Ⅲa	H-5・151覆土5下×7 H-5・152覆土5下×23 H-5・153覆土5下×58 H-5・155覆土5下×1 H-5・232覆土5下×13	102	(30.9)	9.5	(38.2)	H-5・152覆土5下×22 H-5・153覆土5下×47 H-5・232覆土5下×2 H-5・75覆土5下×1 H-5・HP・206覆土1×1 26 H-5・HF-1・268覆土上×4 H-5 d・8覆土5上×1 R-22-a・5Ⅲ×1 未注記×2	81	
3	37-2	H-5	Ⅲa	H-5・42覆土6×3 H-5・62覆土6×1 H-5・161覆土6×39 H-5・162覆土6×17 H-5 HP-10・243覆土1×6 H-5 HP-10・467覆土6×1 Q-20・3Ⅲ×3 S-19-a・7Ⅲ×2 S-21-c・4Ⅲ×1	73	(22.0)	10.6	31.0	H-5・161覆土6×30 H-5・162覆土6×35 H-5 HP-10・243覆土1×9	74	
4	37-3	H-5	Ⅲa	H-5・156覆土6×19 H-5・233覆土6×3	22	(33.8)	-	-	H-5・155覆土6×146 H-5・156覆土6×233 H-5・233覆土6×135 H-5・183覆土下×1 H-5・190覆土下×1 Q-21-c・16Ⅲ×1 未注記×6	523	
5	37-4	H-5	Ⅲa	H-5・160×1	1	-	3.5	-			ミニチュア
10	37-5	H-5	Ⅲa	H-5・161覆土6×2 H-5・162覆土6×19 H-5・236床直上×2 S-21-c・11Ⅲ×1 S-21-c・15Ⅲ×1	25	(16.1)	7.4	21.5			

H-6 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接合	破片数	口径	底径	器高	未接合	破片数	備考
1	40-1	H-6	Ⅲa	H-6・38床×7	7	(15.0)	7.0	24.0			
2	40-2	H-6	Ⅲa	H-6・37床×10 H-6・41覆土下×2	12	-	9.1	(14.1)			埋設土器

H-7 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接合	破片数	口径	底径	器高	未接合	破片数	備考
1	40-4	H-7	Ⅲa	H-7・86覆土下×13	15	-	9.7	(24.0)	H-7・86覆土下×2 N-27-b・4Ⅲ×2	4	
2	40-5	H-7	Ⅲb-2?	H-7・19覆土1×2 H-7・52覆土1×19	23	17.1	6.2	7.6	H-7・32覆土1×1	3	
				H-7・8覆土1×4 H-4・58床×2					H-7・52覆土1×2		
7	40-6	H-7	Ⅲa	H-4・100床×5 H-4 HP-7・116覆土1×1 H-7・15覆土1×2 H-7・19覆土1×8 H-7・53覆土1×1 H-7・61覆土1×4 H-7・86覆土1下×6 H-7・87床×21 H-7・94床×1 H-7・98床×1 H-7・99床×1 H-7・110床×15 H-7・116床×1 H-7・117床×4 H-7・132床×2 o-27・4Ⅲ×1 未注記×6	82	27.5	11.1	42.4	H-4 HP-7・116覆土1×1	1	
8	41-1	H-7	Ⅲa	H-7・108床×9 H-24・1Ⅲa×1	10	(13.0)	6.5	13.7	H-7・108床×1 N-24-d・11Ⅲ×3	4	
9	41-2	H-7	Ⅲa	H-7・97床×3 H-7 (HP-18)・126覆土1×2	5	-	9.6	(5.6)			
10	41-3	H-7	Ⅲa	H-7・88床×2 H-7・111床×6 H-7・112床×1	9	-	(6.5)	(6.5)			

H-1・5 掘上土 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接 合	破片数	口径	底径	器高	未 接 合	破片数	備考
1	42-2	H-1・5掘上上面	Ⅲa	H-1・5掘上・39Ⅲ×4、H-1・5掘上・43Ⅲ×2 H-1・5掘上・8Ⅲ×1、R-20-b・8Ⅲ×2 R-20-c・5Ⅲ×1、R-20-c・7Ⅲ×6、R-20-c・14Ⅲ×9 R-21-c・21Ⅲ×2、R-20-c・25Ⅲ×3 R-20-c・35Ⅲ×3R-20-d・10Ⅲ×3、R-20-d・22Ⅲ×1 R-21-b・8Ⅲ×2、R-21-b・14Ⅲ×1、R-21-b・22Ⅲ×1 R-21-b・25Ⅲ×2、R-21-b・30Ⅲ×1、R-21-b・35Ⅲ×2 R-25-c・2Ⅲ×4、S-17-b・13Ⅲ×1、S-20-d・6Ⅲ×1	51	(20.4)	-	(29.7)	H-1・5掘上・39Ⅲ×1、Q-20-c・9Ⅲ×1、Q-21-a・1Ⅲ×1 Q-21-c・2Ⅲ×1、R-20-c・7Ⅲ×1、R-20-c・14Ⅲ×1 R-20-c・21Ⅲ×1、R-20-d・10Ⅲ×1、R-20-d・22Ⅲ×1 R-21・1Ⅲ×1、R-21-b・8Ⅲ×1、R-21-b・22Ⅲ×1 R-21-d・33Ⅲ×1、S-18-b・32Ⅲ×1、S-20-d・3Ⅲ×1	16	
2	42-3	H-1・5掘上上面	Ⅲa	H-1・5掘上上面・15Ⅲ×1、H-1・5掘上上面・39Ⅲ×3 H-1・5掘上上面・43Ⅲ×2、H-1・5掘上上面・54Ⅲ×1 R-20-a・4Ⅲ×1、R-20-c・7Ⅲ×2、R-20-c・25Ⅲ×1 R-20-c・28Ⅲ×1、R-20-c・34Ⅲ×1、R-20-d・2Ⅲ×5 R-20-d・5Ⅲ×4、R-20-d・10Ⅲ×2、R-21-a・3Ⅲ×1 R-20-d・5Ⅲ×4、R-20-d・10Ⅲ×2、R-21-a・3Ⅲ×1 R-21-a・13Ⅲ×4、R-21-a・41Ⅲ×2、R-21-a・50Ⅲ×7 R-21-b・5Ⅲ×2、R-21-b・14Ⅲ×2、R-21-b・18Ⅲ×1 R-21-b・26Ⅲ×2、P-20-d?×1	46	(21.3)	10.9	32.6			
3	43-1	H-1・5掘上上面	Ⅲa	H-1・5掘上・43Ⅲ×64 R-20-c・7Ⅲ×1 R-20-c・14Ⅲ×1 R-21-b・8Ⅲ×7 R-21-b・22Ⅲ×3 未注記×1	77	(20.9)	10.0	29.4	H-1・5掘上・8Ⅲ×2 H-1・5掘上・32Ⅲ×2 H-1・5掘上・43Ⅲ×8 R-20-c・7Ⅲ×7 R-20-c・14Ⅲ×1 R-20-c・25Ⅲ×1 R-20-d・10Ⅲ×1 R-21-b・8Ⅲ×5 R-25-c・Ⅲ×3	30	
4	43-2、3、4	H-1・5掘上上面	Ⅲa	H-1・5掘上・39Ⅲ×24 H-1・5掘上・59Ⅲ×1 R-20・14Ⅲ×2 R-20-c・2Ⅲ×1 R-20-c・5Ⅲ×1 R-20-c・7Ⅲ×3	32	(25.1)	11.8	30.0	R-20-c・25Ⅲ×1 R-21-b・19Ⅲ×1	2	
5	43-5	H-1・5掘上上面	Ⅲa	H-1・5掘上上面・39Ⅲ×18 R-20-c・14Ⅲ×1、R-20-d・5Ⅲ×4 R-20-d・8Ⅲ×1、R-20-d・10Ⅲ×8 R-21-a・44Ⅲ×2、R-21-a・46Ⅲ×2	36	(17.1)	(8.1)	(22.6)	H-1・5掘上・39Ⅲ×2 R-20-d・2Ⅲ×1 R-20-d・5Ⅲ×2	5	
6	43-6	H-1・5掘上上面	Ⅲa	H-1・5掘上土・17Ⅲ×2、H-1・5掘上土・48Ⅲ×8 Q-21-b・2Ⅲ×2、Q-21-b・5Ⅲ×2 S-21-a・21×1、S-21-d・18Ⅲ×1	16	(15.7)	7.5	29.7	584+20R・2×1 R-21-b・8Ⅲ×1 S-21-d・18Ⅲ×1	3	
7	44-1	H-1・5掘上上面	Ⅲa	H-1・5掘上・14Ⅲ×5、H-1・5掘上・16Ⅲ×2 H-1・5掘上・39Ⅲ×1、Q-20-c・9Ⅲ×1 R-21-a・12Ⅲ×2、R-21-a・13Ⅲ×19 R-21-a・41Ⅲ×22、R-21-a・44Ⅲ×4 R-21-c・15Ⅲ×2、R-21-d・19Ⅲ×1 R-21-d・26Ⅲ×1	60	16.1	-	(23.1)	H-1・5掘上30×1 R-20-d・5Ⅲ×1、R-21-a・3Ⅲ×2、R-21-a・13Ⅲ×3 R-21-a・39Ⅲ×1、R-21-a・41Ⅲ×3、R-21-a・44Ⅲ×2 R-21-d・19Ⅲ×2、R-21-d・23Ⅲ×2、R-21-d・26Ⅲ×1	18	
8	44-2	H-1・5掘上上面	Ⅲa	H-1・5掘上上面・12Ⅲ×3、H-1・5掘上上面・30Ⅲ×2 H-1・5掘上上面・32Ⅲ×11、H-1・5掘上上面・39Ⅲ×6 R-21-a・13Ⅲ×1、R-21-b・8Ⅲ×1	24	(13.7)	-	(17.7)			
9	44-3	H-1・5掘上上面	Ⅲa	H-1・5掘上・14Ⅲ×16 R-21-a・13Ⅲ×2、S-20-a・4Ⅲ×1	19	11.1	6.0	14.5	R-21-a・3Ⅲ×1 R-24-b・1Ⅲ×1	2	
10	44-4	H-1・5掘上土	Ⅲa	H-1・5掘上・39Ⅲ×12	12	-	4.7	(7.7)			
18	44-6	H-1・5掘上上面	Ⅲa	H-1・5掘上・1Ⅲ×2 H-1・5掘上・12Ⅲ×8 R-21-d・1Ⅲ×4 R-21-d・2Ⅲ×1	15	-	11.2	(19.0)	H-1・5掘上・43Ⅲ×3 H-1・5掘上・12Ⅲ×2	5	

IV 包含層出土の遺物

遺構出土復原土器一覽 (土壙、その他)

P-6 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接 合	破片数	口径	底径	器高	未 接 合	破片数	備考	
1	45-2	P-6	Ⅲ a	M-21-c・1Ⅲ×1 P-6・6覆土3×1	2	(5.6)	-	(4.3)				
3	45-3	P-6	Ⅲ a	P-6・2覆土×12 P-6・7Ⅱ上×2 P-6・3覆土1×1 P-6・24覆土3×6 P-6・34-b 開口×3 P-6・37覆土1×2 M-22-b・19Ⅲ×1 M-22-c・5Ⅲ×4 M-22-c・2Ⅲ×3 M-22-c・6Ⅲ×4 M-22-c・7Ⅲ×3 M-22-c・10Ⅲ×8 M-22-c・15Ⅲ×4 M-22-d・1Ⅲ×1 N-20-d?Ⅲ×1 未注記×1	56	-	(9.8)	(17.4)	P-6・2覆土上×1、P-6・3覆土1×1 P-6・7Ⅱ上×2、P-6・24覆土3×2 P-6・34開口×6、P-6・37覆土1×5 L-23-c・1Ⅲ×1、L-23-c・5Ⅲ×1 L-23-d・3Ⅲ×1、M-21-a・6Ⅲ×1 M-22-a・6Ⅲ×1 M-22-b・1Ⅲ×1、M-22-b・5Ⅲ上×3 M-22-b・19Ⅲ×1、M-22-b・21Ⅲ×2 M-22-c・1Ⅲ×1、M-22-c・2Ⅲ×3 M-22-c・5Ⅲ×4、M-22-c・6Ⅲ×2 M-22-c・10Ⅲ×2、M-22-c・15Ⅲ×3 M-22-c・17Ⅲ×2、M-22-c・20Ⅲ×1 M-22-d・1Ⅲ×2、M-22-d・6Ⅲ×2 M-22-d・8Ⅲ×1、M-22-?・1Ⅲ×4 M-23・2 焼乱×7、M-23-c・1Ⅲ×2 M-23-c・9Ⅲ×1、M-24-c・1Ⅲ×1 M-24-c・5Ⅲ×1、P-32・5Ⅲ×1 未注記×2	71		

P-7 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接 合	破片数	口径	底径	器高	未 接 合	破片数	備考
1	46-2	P-7	Ⅲ a	P-7・2覆土中×2、P-7・3覆土中×1 P-7・4覆土中×1、P-7・6覆土中×2 P-7・7覆土中×2、P-7・8覆土中×1 P-7・10覆土中×2、P-7・11覆土中×1 P-7・12覆土中×1、P-7・13覆土中×1 P-7・14覆土中×2、P-7・15覆土中×1 P-7・16覆土中×1、P-7・20覆土中×4 P-7・21覆土中×1、P-7・22覆土中×2 P-7・23覆土中×1、P-7・24覆土中×1 P-7・25覆土中×1、P-7・26覆土中×1 P-7・27覆土中×3、P-7・28覆土中×3 P-7・38覆土上×1	36	14.3	7.5	19.9			

P-15 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接 合	破片数	口径	底径	器高	未 接 合	破片数	備考
1	47-2	P-15	Ⅲ a	P-15・1 壊底×1 P-15・2 壊底×1	2	(20.1)	9.0	(27.8)	P-15・2 壊底×1	1	

P-3 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接 合	破片数	口径	底径	器高	未 接 合	破片数	備考
1	47-3	P-3	Ⅲ a	P-3・9覆土中×2、P-3・10覆土中×1 P-3・11覆土中×1、P-3・12覆土中×3 P-3・13覆土中×2、P-3・15覆土中×1 P-3・16覆土中×6、P-3・17覆土中×1 P-3・18覆土中×3、P-3・19覆土中×2 P-3・20覆土中×1、P-3・21覆土中×1 P-3・30-2 覆土中×7、P-3・66覆土中×2 P-3・70覆土×3	48	17.8	(8.5)	19.7			
2	47-4	P-3	Ⅲ a	P-3・27a 覆土上×41	41	21.0	-	29.0			
3	48-1	P-3	Ⅲ a	P-3・23覆土上×56 P-3・79覆土上×49 P-3・86覆土上×2 P-3・56覆土上×1 P-3・74覆土上×39	147	(31.5)	(11.4)	46.0	P-3・23覆土上×6 P-3・37覆土上×1 P-3・79覆土上×12	19	
4	48-2	P-3	Ⅲ a	P-3-30・1 覆土中×34 P-3-30・2 覆土中×39 P-3-30・3 覆土中×22 P-3・66覆土上×4 P-3・79覆土上×3 P-3・×1	103	-	(10.1)	28.3	P-3-30・1 覆土中×5 P-3-30・2 覆土中×2 P-3-30・3 覆土中×9	16	
5	48-3	P-3	Ⅲ a	P-3・30覆土中×1 P-3・46覆土上×11 P-3・56覆土上×3 P-3・70覆土上×1 P-3・74覆土上×1 P-3・96覆土上×9 P-3・97覆土上×1 P-19-b・6Ⅲ×1 P-19-c・6Ⅲ×1 P-20-b・14Ⅲ×1	30	(18.8)	(7.1)	17.3	P-3・46覆土上×1 P-3・56覆土上×2 P-3・74覆土上×1 P-3・96覆土上×7 P-3・104覆土上× P-3・6 覆土中×1	13	

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接合	破片数	口径	底径	器高	未接合	破片数	備考
6	48-4	P-3	Ⅲa	P-3・37覆土上×1 P-3・46覆土上×1 P-3・56覆土上×6 P-3・66覆土上×2 P-3・74覆土上×19 P-3・79覆土上×3 P-3・96覆土上×4 P-3・97覆土上×1 O-19・1Ⅲ×1 P-19-b・6Ⅲ×4	42	(19.9)	8.0	23.2	P-3・56覆土上×1 P-3・35覆土上×1	2	
7	48-5	P-3	Ⅲa	P-3・24覆土上×1、P-3・25覆土中×1 P-3・37覆土上×3、P-3・49覆土上×2 P-3・56覆土上×1、P-3・61覆土上×1 P-3・79覆土上×2、P-3・88覆土上×6 P-3・98覆土中×1、O-19・1Ⅲ×13 P-19-b・6Ⅲ×1、P-19-b・7Ⅲ×2 P-19-c・6Ⅲ×1、P-19-c・7Ⅲ×2 Q-18-d・1Ⅲ×2、Q-18-d・9Ⅲ×1	40	-	-	(23.0)	P-3-30・1覆土中×1、P-3・61覆土上×1 P-3・79覆土上×1、P-3・88覆土上×1 O-19・1Ⅲ×4、Q-19-b・2Ⅲ×1 Q-18-d・1Ⅲ×1、Q-18-d・6Ⅲ×1 Q-20・3Ⅲ×1、Q-20-b・15Ⅲ×1 Q-20-b・11Ⅲ×2		
8	48-6	P-3	Ⅲa	P-3・66覆土上×7 P-3・79覆土上×18 Q-23-b・2Ⅲ×25 Q-23-b・5Ⅲ×1 Q-23-b・14攪乱×4 Q-23-b・15攪乱×1 Q-23-d・1Ⅲ×5 Q-23-d・2Ⅲ×3	64	-	12.1	(33.6)	Q-22-c・4Ⅲ×1 Q-23不明×2 Q-23-b・1Ⅲ×14 Q-23-b・2Ⅲ×45 Q-23-b・5Ⅲ×1 Q-23-d・2Ⅲ×1	64	
9	49-1	P-3	Ⅲa	P-3・56覆土上×9 P-3・74覆土上×24 P-3・79覆土上×6 P-19-b・7Ⅲ×1	40	(16.5)	6.7	19.4	P-3・35覆土上×1 P-3・66覆土上×1 P-3・74覆土上×6 P-3・79覆土上×2	10	
10	49-2	P-3	Ⅲa	P-3・56覆土上×1 P-3・74覆土上×13 P-3・97覆土上×2 P-19-c・4Ⅲ×1	17	(15.5)	6.5	18.3			
11	49-3	P-3	Ⅲa	P-3・37覆土上×1 P-3・56覆土上×1 P-3・57覆土上×1 P-3・74覆土上×1 P-3・79覆土上×2 P-3・96覆土上×1 P-3・97覆土上×1 P-19-b・6Ⅲ×7 P-19-c・5Ⅲ×2 P-20-c・7Ⅲ×1 Q-20・2Ⅲ×1	19	(11.2)	(5.7)	7.3			
12	49-4	P-3	Ⅲb-2	P-3・46覆土上×1 P-3・56覆土上×1 P-3・63覆土中×2 P-3・65覆土上×1 P-3・78覆土上×2	7	(9.2)	-	(8.7)			

P-33 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接合	破片数	口径	底径	器高	未接合	破片数	備考
1	58-1	P-33	Ⅲa	P-33・1覆土1×5	5	15.0	-	(12.9)			

SP-11 復原土器

掲載番号	図版番号	遺構名	分類	接合	破片数	口径	底径	器高	未接合	破片数	備考
1	58-1	SP-11	Ⅲa	SP-11・1覆土1×4	4	-	6.6	(4.4)			

IV 包含層出土の遺物

表Ⅲ-4 遺構出土拓本掲載土器一覽

H-1 拓本掲載土器一覽

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
4	34-1	Ⅲa	H-1	26	覆土1		1	
5	34-1	Ⅲa	H-1	17	覆土1		1	
6	34-1	Ⅲa	H-1	12	覆土1		1	
7	34-1	Ⅲa	H-1	13	覆土1	H-1・13覆土1×1 H-1・32覆土1×2	3	
8	34-1	Ⅲa	H-1	40	覆土7 Ⅲ	H-1・40覆土7×1 Q-22-c・4Ⅲ×1 Q-22-c・14Ⅲ×1 Q-22-d・2Ⅲ×1	4	
9	34-1	Ⅲa	H-1	115	HP-1、覆土		1	
10	34-1	Ⅲa	H-1	115	HP-1、覆土		1	

H-3 拓本掲載土器一覽

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
1	35-1	Ⅲa	H-3	88	覆土1			HP-4
2	35-1	Ⅲa	H-3	88	覆土1			HP-4
3	35-1	Ⅲa	H-3	5	覆土2			
4	35-1	Ⅲa	H-3	1	覆土2			

H-4 拓本掲載土器一覽

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
3	35-4	Ⅲa	H-4	103 108	覆土1 覆土2 Ⅲ	H-4、HP-3・103覆土1×1 視乱 O-27-b・4Ⅲ×2 O-27-c・2Ⅲ×1	5	HP-3 HP-7
4	35-4	Ⅲa	H-4	106	覆土4			HP-3
5	35-4	Ⅲa	H-4	65	床			
6	35-4	Ⅲa	H-4	54	床			
7	35-4	Ⅲa	H-4	67	床			

H-5 拓本掲載土器一覽

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
6	37-6	Ⅲa	H-5	136	覆土6		1	
7	37-6	Ⅲa	H-5	161	覆土6	H-5・161覆土6×19	19	
8	38-1	Ⅲa	H-5	162	覆6、床直上、覆土Ⅲ、Ⅳ上	H-5・162覆土6×1、H-5・236床直上×2 H-5、HP-16・260覆土×3 R-22-b・4Ⅲ×1、R-23-d・13Ⅳ上×1	8	HP-16
9	38-1	Ⅲa	H-5	236	床直上、Ⅲ	H-5・236床直上×1、H-1、5・35Ⅲ×2	3	
11	38-1	Ⅲa	H-5	123	覆土6、覆土6、床直上	H-5・123覆土6×1 H-5・124覆土6×1 H-5・236床直上×1	3	
12	38-1	Ⅲa	H-5	260	覆土1、床直上、Ⅲ	H-5、P-16・260覆土1×3 H-5・236床直上×4 R-21-d・19Ⅲ×1	8	HP-16
13	38-1	Ⅲa	H-5	260	?	H-5・260?×2	2	
14	38-1	Ⅲa	H-5	237	床		1	
15	38-1	Ⅲa	H-5	211	床		1	
16	38-1	Ⅲa	H-5	164	床		1	
17	38-1	Ⅲa	H-5	134	床		1	
18	38-1	Ⅲa	H-5	237	床		1	
19	38-1	Ⅲa	H-5	261	覆土		1	HP-20
20	38-1	Ⅲa	H-5	261	覆土		1	HP-20

H-6 拓本掲載土器一覽

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
3	40-3	Ⅲa	H-6	17	覆土上、Ⅲ	H-6・17覆土上×1、P-21-d・5Ⅲ×1	2	

H-7 拓本掲載土器一覽

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
3	41-4	Ⅲa	H-7	40	覆土1	H-7・40覆土1×5	5	
4	41-4	Ⅲa	H-7	15	・Ⅲb	H-7・15覆土1×4、N-26-c・3Ⅲ×1 O-30・1Ⅲb×1	6	
5	41-4	Ⅲb	H-7	65	覆土1・Ⅲ・	H-7・65覆土1×1、O-27-c・2Ⅲ×1	2	
6	41-4	Ⅲa	H-7	126	覆土1	H-7・126覆土1×3	3	HP-18
11	41-4	Ⅲa	H-7	114	床	H-7・114床×2、NH-7・115床×1 H-7・129床×1	4	
12	41-4	Ⅲa	H-7	126	覆土1・床・Ⅲ	H-7、P-18・126覆土1×2 H-7・92床×1、N-22-c・9Ⅲ×1 N-22-d・11Ⅲ×1、M-26・13Ⅲ×1	6	HP-18

H-1・5掘上土 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
11	45-1	Ⅲ a	NH-1・5掘上土上面	掘上3	Ⅲ	H-1・5・掘上3Ⅲ×1、P-3・56覆土上×1 P-20-b・1Ⅲ×1、S-21-a・10Ⅲ×1 S-21-a・21Ⅲ×3、S-22-b・9Ⅲ×1	8	
12	45-1	Ⅲ a	NH-1・5掘上土上面	掘上43	Ⅲ	H-1・5・掘上43Ⅲ×3	3	
13	45-1	Ⅲ a	H-1・5掘上土上面	掘上39	Ⅲ	H-1・5・掘上39Ⅲ×2	2	
14	45-1	Ⅲ a	NH-1・5掘上土上面	掘上55	Ⅲ		1	
15	45-1	Ⅲ a	NH-1・5掘上土上面	掘上39	Ⅲ		1	
16	45-1	Ⅲ b-2	NH-1・5掘上土上面	掘上6	Ⅲ		1	
17	44-5	Ⅲ a	NH-1・5掘上土上面	掘上18	Ⅲ	H-1・5・掘上18Ⅲ×4、H-1・5・掘上39Ⅲ×4 R-21-a・13Ⅲ×3、R-21-a・44Ⅲ×1	12	
19	45-1	Ⅲ a	NH-1・5掘上土上面	掘上39	Ⅲ	H-1・5・掘上39Ⅲ×2、S-20-d・6Ⅲ×2 S-20-d・14Ⅲ×2、S-20-d・19Ⅲ×2	8	

P-4 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
1	46-1	Ⅲ a	P-4	6	覆土3		1	

P-6 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
2	46-1	Ⅲ a	P-6	2	覆土2上、Ⅲ	P-6・2覆土2上×1 L-21-c・4Ⅲ×1	2	
4	46-1	Ⅲ a	P-6	7	覆土2上		1	
5	46-1	Ⅲ a	P-6	7	覆土2上		1	
6	46-1	Ⅲ a	P-6	7	覆土2上		1	

P-7 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
2	46-3	Ⅲ a	P-7	42	覆土中		1	
3	46-3	Ⅲ a	P-7	34	床直		1	

P-32 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
1	47-1	Ⅲ a	P-32	5	覆土3・Ⅲ	P-32・5覆土3×1 P-32・13覆土3×1 P-32・12覆土3×1 M-23-c・6Ⅲ×1 M-23-c・10Ⅲ×1	5	
2	47-1	Ⅲ a	P-32	5	覆土3・Ⅲ	P-32・5覆土3×2 M-23・2Ⅲ×2 M-23-b・21Ⅲ×1	5	
3	47-1	Ⅲ a	P-32	2	覆土2・3	P-32・2覆土2×3 P-32・5覆土3×1 未注記×2	6	
4	47-1	Ⅲ	P-32	2	覆土2・3	P-32・2覆土2×1 P-32・5覆土3×10 未注記×3	14	

P-15 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
2	47-1	Ⅲ a	P-15	1	城底		1	

P-3 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
13	49-5	Ⅲ a	P-3	3	覆土中		1	
14	49-5	Ⅲ a	P-3	79	覆土上		1	
15	49-5	Ⅲ a	P-3	6	覆土中・Ⅲ	P-3・6覆土中×2 P-3・66覆土上×1 Q-19-b・4Ⅲ×1	4	
16	49-5	Ⅲ a	P-3	37	覆土上・Ⅲ	P-3・37覆土上×1 P-3・49覆土上×2 P-3・79覆土上×1 O-19・1Ⅲ×1	5	
17	49-5	Ⅲ a?	P-3	69	覆土中	P-3・69覆土中×1	1	

P-13 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
1	50-2	Ⅲ a	P-13	1	覆土1		1	

P-9 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
2	58-2	Ⅲ a	P-9	1	覆土1		1	

P-14 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
3	58-2	Ⅲ a	P-14	2	覆土2		1	

P-16 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
4	58-2	Ⅲ a	P-16	2	覆土2		1	
5	58-2	Ⅲ a	P-16	3	覆土2		1	

P-18 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
6	58-2	Ⅲ a	P-18	1	覆土		1	
7	58-2	Ⅲ a?	P-18	1	覆土		1	

P-19 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
8	58-2	Ⅲ a	P-19	1	覆土・Ⅲ	P-19・1覆土×1 S-18-a・35Ⅲ×1	2	

P-26 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
9	58-2	Ⅲ a	P-26	4	覆土2	P-26・4覆土2×1 P-26・5覆土2×2 P-26・6覆土2×1 P-26・7覆土2×1 P-26・10覆土2×1 P-26・12覆土2×1	7	
10	58-2	Ⅲ a	P-26	2	覆土1		1	
11	58-2	Ⅲ a?	P-26	3	覆土1		1	ミニチュア

P-31 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
12	58-2	Ⅲ a	P-31	13	覆土1		1	
13	58-2	Ⅲ a	P-31	18	覆土2		1	
14	58-2	Ⅲ a	P-31	1	覆土1		1	

F-9 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
4	58-2	Ⅲ a	F-9	1	下部		1	

SP-11 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
2	59-2	Ⅲ a	SP-11	1	覆土1		1	
3	59-2	Ⅲ a	SP-11	4	覆土1		1	

F-10 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
1	59-3	Ⅵ c	P-10	1	覆土上		1	

F-5 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
1	59-3	Ⅵ c	F-5	1	上面		1	
2	59-3	Ⅵ c	F-5	5	上面		1	

FC-1 拓本掲載土器一覧

掲載番号	図版番号	分類	遺構名	遺物番号	層位	接合	破片数	備考
4	59-3	Ⅵ c	FC-1	150		FC-1・150×1 FC-1・152×1	2	

IV 包含層出土の遺物

表Ⅲ-5 遺構出土掲載石器一覧

H-1 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
11	石鏃	IA5	118		2.3	1.1	0.4	0.9	頁岩	34	フローテーションより出土
12	石鏃	IA5	14	覆土1	(2.7)	1.4	0.6	1.9	頁岩	34	
13	つまみ付ナイフ	ⅢA1c	55	床	5.5	3.0	0.8	14.0	頁岩	34	No13
14	つまみ付ナイフ	ⅢA4	69	覆土4	6.2	6.1	1.4	30.6	頁岩	34	No27
15	スクレイパー	ⅢB2b	77	床	12.1	5.2	2.0	90.4	頁岩	34	集石1 No2(集石1No4と合作)
16	スクレイパー	ⅢB2b	36	覆土1	9.1	3.7	1.3	42.2	頁岩	34	
17	スクレイパー	ⅢB2b	4	覆土1	8.3	2.3	1.2	16.8	頁岩	34	
18	スクレイパー	ⅢB2b	78	床	6.1	8.1	1.4	46.6	頁岩	34	集石1 No3
19	スクレイパー	ⅢB2b	9	覆土1	(4.9)	3.9	1.5	33.2	頁岩	34	
20	スクレイパー	ⅢB2c	114	床	4.5	2.5	0.8	12.2	頁岩	34	No36
21	スクレイパー	ⅢB3b	111	HP-1覆土1	8.5	4.5	1.4	23.2	頁岩	34	HP-1
22	スクレイパー	ⅢB6	57	床	9.9	6.0	0.7	49.3	玄武岩	34	No15
23	Uフレイク	VB2B	65	覆土1	7.2	4.1	0.9	25.6	頁岩	34	No23
24	Uフレイク	VB2B	76	床	11.3	5.9	1.7	86.4	頁岩	34	集石1 No1
25	Uフレイク	VB2B	20	覆土1	7.0	3.7	0.5	13.6	頁岩	34	
26	Uフレイク	VB2B	81	床	7.0	3.6	1.3	31.4	頁岩	34	集石1 No6
27	Uフレイク	VB2C	80	床	5.1	2.4	0.6	8.1	頁岩	34	集石1 No5
28	石斧	ⅥA	59	床	8.9	4.5	2.2	130.0	片岩	34	No17
34	石製片		49	覆土7	(6.6)	5.5	4.4	43.6	軽石	34	No7
29	たたき石	Ⅶ1	22	覆土1	13.3	9.2	3.5	589.6	安山岩	34	
30	たたき石	Ⅶ1	68	覆土1	17.4	7.7	4.4	810.0	安山岩	34	No26
31	たたき石	Ⅶ4	48	覆土7	11.1	8.1	4.9	640.0	安山岩	34	No6
32	たたき石	Ⅶ3	23	覆土1	15.4	9.0	5.7	1,248.0	安山岩	34	
33	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	50	覆土1	7.8	13.2	2.9	373.8	安山岩	34	No8

H-3 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
5	石鏃	IA5	19	床	(3.1)	1.3	0.5	1.4	頁岩	35	No11
6	Rフレイク	VB1	35	覆土22	5.6	4.0	1.4	22.2	頁岩	35	
7	石斧		1	床	9.9	4.4	2.3	151.9	泥岩	35	
8	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	9	覆土7	7.2	17.1	3.6	483.6	溶結凝灰岩	35	No1
9	砥石	ⅨB2	13	覆土10	15.5	9.2	2.4	540.0	安山岩	35	No5
10	石棒		2		(12.8)	9.2	7.9	1,143.0	安山岩	35	25%

H-4 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
8	石鏃	IA5	81	床	2.4	1.3	0.4	1.1	黒曜石	35	
9	スクレイパー	ⅢB2b	83	床	9.5	3.7	0.8	33.8	頁岩	35	
10	スクレイパー	ⅢB3b	25	床	4.3	5.0	1.2	19.8	黒曜石	35	
11	たたき石		88	床	7.5	3.7	2.8	104.7	安山岩	35	
12	半円状扁平打製石器		1	床	7.6	17.6	3.3	558.8	安山岩	35	
13	半円状扁平打製石器		40	床	11.3	16.2	3.8	955.0	安山岩	35	
14	半円状扁平打製石器		13	床	9.5	17.1	4.5	828.0	安山岩	36	
15	台石	X	101	床	36.7	19.6	10.7	12,000.0	安山岩	36	No92
16	台石	X	112	床	47.4	37.5	16.3	34,500.0	安山岩	36	No93

H-5 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
21	石鏃	IA5	186	覆土5下	3.5	1.7	0.5	2.0	頁岩	38	No95
22	石鏃	IA5	188	覆土5下	3.8	1.7	0.5	2.0	頁岩	38	No97
23	石鏃	IA5	121	覆土6	3.7	1.5	0.6	2.4	頁岩	38	No44
24	石鏃	IA5	265	HP-1上面	(3.3)	1.6	0.5	1.6	頁岩	38	No151
25	石鏃	IA9	283	床下	(1.8)	0.9	0.3	0.3	黒曜石	38	No165
26	つまみ付ナイフ	ⅢA1c	194	覆土6	6.0	2.7	0.7	7.6	頁岩	38	No103
27	スクレイパー	ⅢB2a	89	覆土5下	8.1	4.1	0.7	30.5	頁岩	38	No12
28	スクレイパー	ⅢB2a	245	HP-13覆土1	8.4	4.9	0.6	42.0	頁岩	38	HP-13 No2
29	スクレイパー	ⅢB2a	88	覆土5下	12.3	6.0	1.2	119.3	頁岩	38	No11
30	スクレイパー	ⅢB2a	244	HP-13覆土1	10.0	3.8	0.8	33.1	頁岩	38	HP-13 No1
31	スクレイパー	ⅢB2a	201	覆土6	6.8	3.0	1.1	27.3	頁岩	38	No110
32	スクレイパー	ⅢB2a	116	覆土6	6.2	2.9	1.1	19.4	頁岩	38	No39
33	スクレイパー	ⅢB2a	84	覆土7	4.9	4.7	1.1	26.6	頁岩	38	No7
34	スクレイパー	ⅢB2a	53	覆土6	5.7	2.8	0.7	11.1	頁岩	38	
35	スクレイパー	ⅢB2b	70	覆土6	9.6	2.8	0.8	26.4	頁岩	38	
36	スクレイパー	ⅢB2b	109	覆土6	7.4	5.1	1.0	40.2	頁岩	38	No32
37	スクレイパー	ⅢB2b	47	覆土6	4.1	4.1	1.1	24.2	頁岩	38	
38	スクレイパー	ⅢB2c	195	覆土6	5.0	3.3	1.1	16.0	頁岩	38	No104
39	スクレイパー	ⅢB2c	262	HP-20覆土	6.1	2.7	0.6	9.2	頁岩	38	
40	スクレイパー	ⅢB3a	126	床	5.5	3.3	0.8	15.4	頁岩	38	No49
41	スクレイパー	ⅢB3b	66	覆土5	5.1	8.1	1.1	38.2	頁岩	38	
42	スクレイパー	ⅢB9	38	覆土5	5.2	2.1	0.8	10.9	頁岩	38	
43	Rフレイク	VB1	85	床	4.0	3.9	0.8	8.8	頁岩	38	No8
44	Uフレイク	VB2A	144	覆土6	5.7	3.6	0.4	12.4	頁岩	38	No65

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
45	Uフレイク	VB 2 C	105	覆土6	5.5	4.1	0.7	13.9	頁岩	38	No28
46	Uフレイク	VB 2 C	8	覆土6	3.4	5.5	1.0	19.4	頁岩	38	
47	Uフレイク	VB 2 C	142	覆土6	4.5	2.3	1.0	8.9	頁岩	39	No63
48	石斧	VI A	264	覆土8	(12.2)	5.9	2.3	265.0	片岩	39	No150
49	石のみ	VI B	234	覆土6	(3.2)	1.7	0.8	5.9	泥岩	39	土器No 2 下
50	たたき石	VII 2	21	覆土5	15.3	11.2	6.9	1,343.0	安山岩	39	
51	半円状扁平打製石器	VIII 3	100	床	10.2	15.9	3.7	688.0	安山岩	39	No23
52	半円状扁平打製石器	VIII 3	63	覆土6	9.3	15.1	2.9	450.0	安山岩	39	
53	半円状扁平打製石器	VIII 3	35	覆土5	12.3	17.0	3.0	728.0	安山岩	39	
54	半円状扁平打製石器	VIII 3	92	覆土6	11.0	19.1	4.1	1,154.0	安山岩	39	No15
55	半円状扁平打製石器	VIII 3	82	覆土7	12.1	15.2	2.9	595.6	安山岩	39	No 5
56	石皿	X	270	覆土5下	27.5	23.2	2.0	1,556.0	砂岩	39	No156

H-6 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
4	スクレイパー	III B 9	32		2.5	2.9	1.0	8.9	頁岩	40	
5	Rフレイク	VB 1	23		6.1	2.7	0.8	14.2	頁岩	40	
6	Uフレイク	VB 2 B	27		6.4	3.4	0.7	19.7	頁岩	40	
7	Uフレイク	VB 2 C	22		3.6	2.5	0.6	5.5	頁岩	40	
8	Uフレイク	VB 2 C	20		3.6	1.9	0.3	3.2	頁岩	40	

H-7 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
13	石鏃	I A 4	10	覆土1	(3.3)	1.2	0.6	2.0	頁岩	41	
14	石鏃	I A 4	3	覆土1	4.6	1.7	0.8	6.0	頁岩	41	
15	石鏃	I A 4	41	覆土1	2.9	1.9	0.5	2.3	頁岩	41	
16	石鏃	I A 5	4	覆土1	2.7	1.7	0.4	1.4	頁岩	41	
17	石鏃	I A 5	66	覆土1	(2.6)	2.0	0.4	1.6	黒曜石	41	
18	石鏃	I A 9	78	覆土1	(1.7)	2.0	0.5	1.5	黒曜石	41	
19	石槍	I B 1	70	覆土1	(5.8)	1.9	1.1	11.3	頁岩	41	
20	スクレイパー	III B 2 a	104	床	6.7	3.3	1.8	36.5	頁岩	41	No19
21	スクレイパー	III B 2 a	37	覆土1	6.4	5.5	0.5	21.8	頁岩	41	
22	スクレイパー	III B 2 b	20	覆土1	6.3	2.9	1.0	21.5	頁岩	41	
23	スクレイパー	III B 2 b	42	覆土1	5.9	2.3	0.8	11.4	頁岩	42	
24	スクレイパー	III B 3 b	54	覆土1	2.7	5.2	0.9	12.3	黒曜石	42	
25	スクレイパー	III B 9	122	HP-3覆土	3.2	1.5	1.0	5.2	黒曜石	42	HP-3
26	Rフレイク	VB 1	5	覆土1	3.4	4.7	1.4	16.9	頁岩	42	
27	Uフレイク	VB 2 B	47	覆土1	5.7	4.9	0.9	32.3	頁岩	42	
28	Uフレイク	VB 2 B	46	覆土1	4.4	2.2	0.7	7.4	頁岩	42	
29	Uフレイク	VB 2 C	55	覆土1	5.2	4.9	1.1	23.2	頁岩	42	
30	石核	VA	23	覆土1	3.3	4.1	1.8	28.2	玉髓	42	
31	石核	VA	43	覆土1	6.6	6.7	4.4	235.0	頁岩	42	
32	石斧	VI A	96	床	(11.6)	6.0	2.4	243.5	片岩	42	No11
33	たたき石	VII 1	17	覆土1	11.5	5.1	3.0	231.3	安山岩	42	(N-26-d)
34	たたき石	VII 3	81	覆土1	15.7	6.4	5.4	760.0	安山岩	42	(P-27-a)
35	たたき石	VII 3	58	覆土1	13.7	8.3	6.5	979.0	安山岩	42	(O-26-d)
36	半円状扁平打製石器	VIII 3	82	覆土1	11.6	15.7	3.7	740.0	安山岩	42	(P-27-a)
37	北海道式石冠	VIII 4	83	覆土1	9.0	11.3	6.2	670.0	安山岩	42	(P-27-a)
38	台石	X	12	覆土1	14.5	18.5	9.2	2,980.0	安山岩	42	(N-26-c)

H-1・5掘上土 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
20	石皿	X	66	III	43.7	30.1	13.2	24,500.0	安山岩	45	
21	石皿	X	22	III	(37.1)	29.9	12.0	18,000.0	安山岩	45	

P-6 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
7	石鏃	I A 4	1	上面	3.4	1.4	0.5	1.9	黒曜石	46	
8	石鏃	I A 4	10	覆土2	2.6	1.4	0.4	1.3	安山岩	46	
9	石鏃	I A 5	13	覆土2上	2.7	1.3	0.6	1.1	頁岩	46	
10	石鏃	I A 9	12	覆土2	1.9	1.2	0.2	0.4	頁岩	46	
11	石鏃	II A 1	11	覆土2	(2.2)	1.3	0.3	0.7	頁岩	46	
12	スクレイパー	III a 2 b	38	覆土1	14.7	5.4	1.9	93.8	頁岩	46	
13	Rフレイク	VB 1	16	覆土2上	6.3	5.0	1.6	44.5	頁岩	46	
14	たたき石	VII 1	35	覆土1	12.2	8.7	5.6	790.0	珪石	46	
15	たたき石	VII 3	29	壙口	13.5	9.0	5.8	1,034.0	安山岩	46	No.16
16	半円状扁平打製石器	VIII 3	32	壙口	8.6	17.1	3.5	667.0	安山岩	46	No.19
17	半円状扁平打製石器	VIII 3	31	壙口	5.9	15.1	3.1	418.8	安山岩	46	No.18

P-7 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
4	Uフレイク	VB2C	30		6.4	5.7	0.7	22.5	頁岩	46	
5	たたき石	Ⅶ2	19	覆土下	8.6	12.0	6.5	1,000.0	泥岩	46	
6	北海道式石冠	Ⅳ4	18	覆土下	5.6	9.4	4.9	340.4	安山岩	46	
7	台石	X	32	覆土下	21.4	12.2	6.5	2,070.0	安山岩	46	

P-25 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
1	半円状扁平打製石器	Ⅳ3	2	壊口	8.2	16.9	3.8	710.0	安山岩	47	No. 2
2	半円状扁平打製石器	Ⅳ3	1	壊口	7.6	16.5	3.2	665.0	安山岩	47	No. 1

P-32 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
5	石鏃	IA4	7	覆土3	3.9	1.8	0.7	5.0	頁岩	47	No. 2
6	石鏃	IA5	6	覆土3	3.4	1.4	0.6	2.0	頁岩	47	No. 1
7	石鏃	II2	3	覆土2	(4.1)	1.7	0.7	3.3	頁岩	47	

P-3 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
18	スクレイパー	ⅢB2a	89	覆土上	6.0	4.7	0.8	23.0	頁岩	49	
19	たたき石	Ⅶ1	102	覆土下	21.0	7.1	5.4	1,173.0	頁岩	49	
20	たたき石	Ⅶ1	2	覆土中	9.5	6.4	4.8	357.4	安山岩	49	
21	たたき石	Ⅶ3	82	覆土上	12.5	6.9	3.6	442.4	安山岩	50	
22	たたき石	Ⅶ3	52	覆土上	15.5	8.8	5.1	660.0	安山岩	50	
23	半円状扁平打製石器	Ⅳ3	91	覆土上	10.4	14.6	2.1	436.4	安山岩	50	
24	半円状扁平打製石器	Ⅳ3	92	覆土上	10.1	(10.5)	1.7	234.8	安山岩	50	
25	半円状扁平打製石器	Ⅳ4	75	覆土上	10.8	14.7	2.3	470.4	安山岩	50	

P-5 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
1	石鏃	IA5	7	覆土7	2.8	1.6	0.3	1.3	安山岩	50	No. 5
2	石鏃	IIA3	1	覆土	(4.0)	1.7	1.0	5.9	頁岩	50	
3	スクレイパー	ⅢB2b	3	覆土5上面	9.6	5.7	1.7	71.6	頁岩	50	No. 1

P-21 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
1	北海道式石冠	Ⅳ4		壊底	10.1	14.3	6.1	1,040.0	安山岩	50	

P-24 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
1	北海道式石冠	Ⅳ4	4	床	9.8	(11.7)	6.4	917.0	安山岩	50	No. 1

P-30 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
1	北海道式石冠	Ⅳ4	3	底	9.9	12.9	5.6	860.0	安山岩	50	
2	石皿	X	2	覆土下	42.5	34.3	10.5	26,000.0	安山岩	50	(P-30・1)と接合

P-23 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
15	玉		1	覆土1	3.4	3.6	2.3	8.9	軽石	58	No. 1

P-26 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
16	スクレイパー	ⅢB2a	3	覆土1	7.5	3.7	0.8	22.6	頁岩	58	

P-27 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
17	台石	X	1	上面	37.7	16.4	13.5	13,500.0	安山岩	58	

SP-23 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
5	半円状扁平打製石器	Ⅳ3	1	覆土1	11.5	(14.4)	2.3	470.8		58	

FC-1 掲載石器

掲載番号	器種名	分類	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
5	Rフレイク	VB1	34		6.1	8.0	1.9	108.8	頁岩	59	
6	Uフレイク	VB2c	118		4.9	3.0	0.6	8.9	頁岩	59	

表Ⅲ-6 P-13覆土3層一括出土石器一覧

剥片個体番号	遺物番号	掲載番号	器種	接合	備考	剥片長軸	剥片短軸	最大厚	打角	打面長軸	重さ(g)	刃角(°)
1	532		フレイク	接合1	母岩2	9.0	12.7	1.4	100°	1.14	119.12	20°
2	633		フレイク	接合1	母岩2	9.4	14.0	1.7	100°	1.57	171.60	25°
3	734		フレイク	接合2	母岩2	12.1	7.4	1.9	100°	1.1	102.65	23°
4	835		フレイク		母岩2	5.6	7.6	1.3	110°	0.98	30.53	59°
5	936		フレイク		母岩1	11.8	7.3	2.3	110°	2.26	151.90	40°
6	1037		フレイク	接合3	母岩2	13.5	8.5	1.9	100°	1.21	133.00	23°
7	1138		フレイク	接合4	母岩2	11.2	10.0	1.4	100°	1.26	133.50	40°
8	1439		フレイク	接合6	母岩2	9.2	8.0	1.8	100°	1.14	101.33	21°
9	1340		フレイク		母岩2	13.7	8.1	2.8	110°	1.65	261.20	40°
10	1222		スクレイパー	接合5	母岩2	12.4	10.7	1.8	115°	0.32	166.50	81°
11	1541		フレイク		母岩2	14.9	9.2	2.4	100°	0.9	262.40	66°
12	1642		フレイク		母岩2	7.8	4.1	0.8	100°	0.57	14.73	29°
13	1723		スクレイパー		母岩2	7.9	14.6	2.1	—	—	180.60	67°
14	1843		フレイク	接合7	母岩1	15.1	6.6	2.8	100°	0.79	233.00	45°
15	1944		フレイク	接合7	母岩1	15.7	7.6	1.8	100°	0.8	163.70	51°
16	2024		Rフレイク		母岩1	16	8.6	2.5	115°	0.22	210.50	32°
17	2119		両面調整石器		玄武岩	18.6	4.6	2.1			166.20	
18	2218		両面調整石器		玄武岩	34.8	8.5	3.0			850.00	
19	2345		フレイク	接合8	母岩2	12	6.0	1.7	100°	1.0	103.41	42°
20	2430		Uフレイク		母岩2	11.3	8.3	1.9	115°	1.03	110.93	29°
21	2546		フレイク	接合9	母岩2	9.0	4.5	1.5	100°	0.7	55.99	35°
22	2647		フレイク		母岩2	11.6	2.9	1.4	100°	0.74	30.00	50°
23	2721		石槍		母岩2	18	6.4	2.3			241.90	
24	2848		フレイク		母岩1	12.3	5.8	1.4	110°	1.2	95.56	21°
25	2930		フレイク	折れ接合	母岩2	13	8.4	2.0	110°	1.5	130.01	28°
26	3150		フレイク		母岩2	8.9	7.0	1.6	110°	1.6	62.65	35°
27	32		フレイク	接合2	母岩2	12.3	10.1	1.7	100°	0.98	159.90	35°
28	3325		Rフレイク		母岩2	9.2	7.3	1.5	—	—	86.01	91°
29	34		フレイク	接合3	母岩2	11.5	7.0	1.7	100°	0.82	113.49	35°
30	35		フレイク	接合10	母岩2	8.5	9.0	0.9	100°	0.64	53.90	61°
31	3651		フレイク		母岩2	9.7	5.2	1.3	110°	1.5	42.54	30°
32	3752		フレイク		母岩2	8.2	5.6	1.3	100°	0.9	44.28	24°
33	38		フレイク	接合5	母岩2	10.5	5.6	1.4	115°	0.6	64.09	47°
34	39		フレイク	接合2	母岩2	8.0	6.2	1.5	115°	0.36	59.81	30°
35	4020		両面調整石器		玄武岩	16.7	8.8	1.8			233.80	
36	41		フレイク	接合8	母岩2	8.6	7.8	1.7	100°	1.0	75.74	46°
37	42		フレイク	接合8	母岩2	11.9	7.4	0.9	110°	0.8	77.38	32°
38	4331		Uフレイク	接合11	母岩2	8.1	5.6	1.1	100°	1.01	39.27	35°
39	44		フレイク	接合13	母岩2	6.3	5.0	1.0	110°	0.78	26.71	37°
40	45		フレイク	接合13	母岩2	7.6	6.3	1.6	110°	1.1	54.17	20°
41	4647		フレイク	折れ接合	母岩2	6.5	3.9	0.5	100°	0.3	13.01	23°
42	4854		フレイク		ガジリあり	10.8	7.5	1.3	100°	1.1	97.76	32°
43	4955		フレイク		母岩2	12.5	6.1	1.5	100°	1.1	79.13	24°
44	50		フレイク	接合10	母岩2	8.1	8.9	0.9	110°	0.5	49.03	45°

剥片個体番号	遺物番号	掲載番号	器種	接合	備考	剥片長軸	剥片短軸	最大厚	打角	打面長軸	重さ(g)	刃角(°)
45	5152	26	Rフレイク	折れ接合	母岩2	8.7	4.5	1.1	100°	1.1	42.45	58°
46	5356		フレイク		母岩1	10.9	3.9	1.8	100°	0.6	56.01	32°
47	5457		フレイク		母岩2	8.7	3.6	1.2	110°	0.8	19.76	22°
48	5558		フレイク		母岩1	11.9	4.6	1.4	100°	1.3	55.16	23°
49	56		フレイク	接合8	母岩2	10.9	6.6	1.2	100°	0.97	42.17	30°
50	57		フレイク	接合11	母岩2	8.6	7.0	1.3	100°	1.0	54.98	22°
51	58		フレイク	接合4	母岩2	8.9	7.0	0.8	110°	0.73	44.46	37°
52	5959		フレイク		母岩2	6.5	7.4	1.2	115°	0.7	36.68	22°
細片1	60		フレイク			—	—	—			0.40	
53	6160		フレイク		ガジリあり	7.4	4.8	0.9	115°	0.2	24.91	20°
54	6261		フレイク		母岩2	7.8	4.4	1.3	115°	1.2	27.59	21°
55	63		フレイク	接合6	母岩2	8.7	7.6	1.5	110°	1.55	63.33	34°
56	6465	62	フレイク	折れ接合	母岩2	11.3	5.3	0.9	100°	0.9	32.74	22°
57	66		Rフレイク	接合2	母岩2	7.8	5.2	1.0	100°	0.69	31.78	25°
58	6763		フレイク		母岩2	6.8	6.3	1.1	115°	0.6	33.60	30°
59	68		フレイク	接合12	母岩2	13	9.3	1.1	110°	0.86	92.94	40°
60	69		フレイク	接合14	母岩2	7.4	4.7	0.8	115°	0.71	18.31	30°
61	70		フレイク	接合15	母岩2	10.1	7.4	1.5	115°	1.1	80.99	43°
62	7164		フレイク		母岩2	8.9	6.7	0.8	100°	0.5	43.42	24°
63	72		フレイク	接合14	母岩2	6.6	3.4	0.7	115°	0.73	12.20	25°
64	7365		フレイク		母岩2	8.3	6.2	1.4	110°	1.4	46.17	40°
65	7466		フレイク		ガジリあり	6.0	4.7	1.0	115°	0.4	22.97	23°
66	75		フレイク	接合9	母岩2	9.4	5.8	1.0	100°	0.8	51.58	43°
67	7667		フレイク		母岩2	7.6	4.8	0.9	100°	0.93	35.20	23°
68	7768		フレイク		母岩2	6.4	4.4	1.3	115°	0.9	22.41	29°
69	7869		フレイク		母岩2	6.6	2.6	0.5	115°	0.2	7.88	27°
70	79		フレイク	接合15	母岩2	9.8	6.2	1.0	100°	0.76	57.35	42°
71	8070		フレイク		ガジリあり 母岩1	7.4	5.8	1.6	100°	0.9	50.15	20°
72	81		フレイク	接合16	母岩2	8.3	7.3	1.5	100°	1.06	67.63	40°
73	82		フレイク	接合12	母岩2	9.1	4.5	1.3	110°	0.64	42.24	22°
74	8371		フレイク		母岩2	11.2	5.7	1.5	115°	1.37	71.25	30°
75	8472		フレイク		ガジリあり	6.0	5.2	1.35	110°	0.75	19.85	25°
76	85		フレイク	接合16	母岩2	8.5	8.3	1.0	115°	1.17	38.14	33°
細片2	86		フレイク		細片	—	—	—			0.12	
細片3	87		フレイク		細片	—	—	—			0.28	
細片4	88		フレイク		細片	—	—	—				
77	8973		フレイク		母岩2	8.1	4.9	0.8	110°	0.75	20.92	21°
78	9027		Rフレイク		母岩1	8.3	6.1	1.5	100°	1.08	71.22	45°
79	9128		Rフレイク		母岩2	6.5	7.7	1.5	100°	0.75	54.36	65°
80	9274		フレイク		母岩2	7.0	4.3	1.7	115°	0.9	25.38	20°
81	9329		Rフレイク		母岩2	5.8	5.2	0.8	115°	1.42	31.93	42°
82	9475		フレイク		母岩2	6.1	5.7	1.5	100°	1.2	40.07	22°

表IV-1 包含層出土復原土器一覽 (I群)

掲載番号	図版番号	分類	接 合	破片数	口径	底径	器高	未 接 合	破片数	備考
1	60-1	I a	P-5・8 覆土7×1、N-23-a・5Ⅲ×1 O-20-b・1Ⅲ×2、O-22-b・1Ⅲ×1 O-22-c・7Ⅲ×1、P-22-a・8Ⅳa×1 P-22-d・8Ⅳa×1、P-23-a・9Ⅳa×4 P-23-a・10Ⅳa×6、P-23-a・11Ⅳa×2 P-23-b・12Ⅳa×2、P-23-b・14Ⅳa×1 P-23-b・15Ⅳa×4、P-23-b・18Ⅳ風×2 P-23-b・19Ⅳa×6、P-23-c・11Ⅳa×1 Q-20-b・9Ⅲ×2、Q-20-d・5Ⅳ×1	39	16.4	(8.3)	20.4	P-23-b・18Ⅳ風×1 O-23-c・3Ⅲ×1	2	
2	60-2	I a	P-22-b・3Ⅲ×3、P-22-d・9Ⅳa×3 P-22-d・12Ⅳa×2	8	(8.0)	-	(7.6)			
3	60-3	I a	O-22-c・12Ⅳ上×2 O-22-c・13Ⅳa×7	9	(10.1)	(4.6)	9.9	O-22-c・13Ⅳa×1 O-22-d・14Ⅳa×1	2	
4 b	61-1	I a	O-20-d・1Ⅲ×1、O-21-d・6Ⅲ×7 O-21-d・11Ⅲ×1、O-22-a・2Ⅲ×2 O-22-a・6Ⅲ×1、O-22-a・7Ⅲ×2 O-22-a・13Ⅳa×20、O-22-a・19Ⅳa×3	37	-	-	(28.1)	O-22-a・13Ⅳa×3 O-21-d・6Ⅲ×3、O-21-d・11Ⅲ×1 O-22-a・6Ⅲ×1 O-22-a・13Ⅳa×2 O-22-a・13Ⅳa×5 O-21-d・6Ⅲ×4、O-22-a・6Ⅲ×1 O-22-a・7Ⅲ×4、O-22-a・13Ⅳ×10	34	(口縁4a) (底部4c) (底部4d)
5	60-4	I a	M-23・1Ⅲ×11、M-23・2×2 M-23・5Ⅳ上×107、M-23・6Ⅳ上×19	150	(25.7)	9.1	38.8	M-23・1Ⅲ×2、M-23・5Ⅳ上×34 M-23・6Ⅳ上×21、N-23・2×7	64	
6	60-5	I a	N-23・2×11 H-6・5 覆土上×1、N-24・8Ⅲ×3 O-24-b・1Ⅳa×3、O-24-c・8Ⅳa×40 O-24-c・10Ⅳ風×35、O-24・2Ⅲ×1 P-22-c・1Ⅲ×1、P-23-a・9Ⅳa×1 P-23-a・10Ⅳa×6、P-23-b・12Ⅳa×4 P-23-b・15Ⅳa×2、P-24-a・4Ⅲ×2 P-24-d・4Ⅲ×2、P-24-d・10Ⅲ×1 P-24-d・13Ⅲ×3、P-24-d・15Ⅳa×2 P-24-d・20Ⅲ×2、P-24-d・23Ⅳa×1 P-24-d・24Ⅳa×1、P-24-d・25Ⅳa×17 P-25-a・11Ⅳa×1、P-25-a・13 擾乱×1	130	(24.8)	(9.9)	34.4	O-23-d・6Ⅲ×1、O-24-c・8Ⅳa×7 O-24-c・10Ⅳ風×3、P-23-a・10Ⅳa×2 P-23-b・14Ⅳa×4、P-23-b・15Ⅳa×3 P-23-b・19Ⅳa×1、P-24-a・4Ⅲ×2 P-24-d・3Ⅲ×2、P-24-d・4Ⅲ×2 P-24-d・9bⅢ×1、P-24-d・10Ⅲ×3 P-24-d・13Ⅲ×1、P-24-d・15Ⅳa×4 P-24-d・20Ⅲ×1、P-24-d・23Ⅳa×2 P-24-d・25Ⅳa×4		
7	61-2	I a	P-25-c・3Ⅲ×1、P-25-c・8Ⅲ×1 P-25-d・13Ⅳa×1、P-26-a・4Ⅲ×2 P-26-a・7Ⅳa×1、P-26-a・12Ⅳa×2 Q-25・4Ⅲb×3	11	-	(8.2)	(13.7)			

包含層出土復原土器一覽 (Ⅲ群)

掲載番号	図版番号	分類	接 合	破片数	口径	底径	器高	未 接 合	破片数	備考
1	61-3	Ⅲ a	H-24・1Ⅲa×5、M-24・5×2 M-25・3×13、M-25-c・1Ⅲ×1 N-24-d・11Ⅲ×1	22	(15.5)	-	(21.4)	L-24-c・1Ⅲ×1 M-23-c・10Ⅲ×1 M-25・3×1	3	
2	61-4	Ⅲ a	H-5・165 味×1、R-21-a・1aⅢ×1 S-21-a・5Ⅲ×2、S-21-a・10Ⅲ×7 S-21-b・5Ⅲ×1、S-21-d・6Ⅲ×1 S-21-d・13Ⅲ×2、S-21-d・18Ⅲ×3	18	(16.7)	-	(17.6)	H-5・272H P-11 覆土1×1、R-20-c・7Ⅲ×1 R-21-b・8Ⅲ×2、R-21-b・22Ⅲ×1 R-21-c・1Ⅲ×1、R-21-c・10×1 R-23-b・1Ⅲ×1、S-16-c・2Ⅲ×1 S-20-a・1Ⅲ×1、S-21-a・5Ⅲ×7 S-21-a・10Ⅲ×2、S-21-a・21Ⅲ×2 S-21-b・5Ⅲ×2 S-22-a・3Ⅲ×1 S-22・5Ⅲ×1	25	
3	61-5,6	Ⅲ a	R-20-c・7Ⅲ×1、R-21-b・22Ⅲ×1 S-20-a・21Ⅲ×1、S-21-c・15Ⅲ×1 S-21-d・18Ⅲ×3、S-22-a・13Ⅲ×2 S-22-d・14Ⅲ×1、S-22-d・21Ⅲ下×14	24	26.0	-	(16.2)	S-18-a・35Ⅲ×1、S-20-a・17Ⅲ×1 S-20-b・10Ⅲ×1、S-20-c・7Ⅲ×1 S-20-c・13Ⅲ×3、S-21-a・21Ⅲ×2 S-21-b・26Ⅲ×1、S-21-d・6Ⅲ×1 S-21-d・13Ⅲ×1、S-22-a・11Ⅲ×2 S-22-a・13Ⅲ×1、S-22-b・1Ⅲ×1 S-22-d・5Ⅲ×2、S-22-d・21Ⅲ下×1	19	
4	62-1	Ⅲ a	M-24・5×2、N-21-d・8Ⅲ×1 N-22-a・5Ⅲ×2、N-23-b・1Ⅲ×2 N-23-c・6Ⅲ×1、N-23-c・10Ⅲ×1 N-23-c・13Ⅲ×1、N-23-c・17Ⅳa×1 N-24・1×1、N-24-c・6Ⅳa×1 N-25・1Ⅰ×4、N-25-c・1Ⅲ×2 N-25-c・4Ⅲ×1、N-25-c・6Ⅳa×1 O-19-d・4Ⅲ×1、O-20-c・2Ⅲ×1 O-22-a・5Ⅲ×1、O-22-b・2Ⅲ×1 O-22-c・1Ⅲ×1、O-22-c・2Ⅲ×1 O-22-c・5Ⅲ×1、O-22-d・4Ⅲ×3 O-22-d・7Ⅲ×2、O-22-d・15Ⅳa×1	83	26.7	10.7	33.9	N-21-c・7Ⅲ×1、N-24-c・1Ⅲ×1 O-22-d・2Ⅲ×1、O-22-d・7Ⅲ×1 O-23-a・8Ⅲ×1、O-23-b・4Ⅲ×1	6	

掲載番号	図版番号	分類	接 合	破片数	口径	底径	器高	未 接 合	破片数	備考
			O-23-a・2Ⅲ×1、O-23-a・3Ⅲ×3 O-23-a・5Ⅲ×13、O-23-a・8Ⅲ×4 O-23-a・11Ⅲ×5、O-23-d・2Ⅲ×1 O-23-d・4Ⅲ×1、O-23-d・7Ⅲ×2 O-24-c・1Ⅲ×12、O-24-d・1Ⅲ×2 O-27・4Ⅲ×1、P-23-a・2Ⅲ×1 P-23-a・4Ⅲ×1、P-23-a・8Ⅳ上×1 P-27-d・1Ⅲ×1							
5	62-2	Ⅲ a	S-21・1×2 S-21-a・5Ⅲ×1、S-21-a・36Ⅲ×1 S-21-d・6Ⅲ×3、S-21-d・13Ⅲ×25	32	(20.0)	—	(19.8)	S-21-a・5Ⅲ×1、S-21-d・6Ⅲ×3 S-21-d・13Ⅲ×2、未注記×1	7	
6	62-3	Ⅲ a	P-3・88覆土上×1、P-3・26覆土中×1 N-22-d・3Ⅲ×1、O-19・1Ⅲ×6 O-20-d・2 aⅢ×2、O-21-c・4Ⅲ×1 O-21-c・6Ⅲ×3、O-21-c・10Ⅳ a×1 O-21-d・7Ⅲ×1、P-21-a・1Ⅲ×1 P-21-b・14Ⅲ×1、P-21-c・11Ⅲ×1 P-21-d・1Ⅲ×1、Q-21・1Ⅲ×2 Q-22-b・9Ⅲ×5、Q-22-c・7Ⅲ×2 Q-23-d・2Ⅲ×1、R-20-a・3Ⅲ×1 R-21-d・23Ⅲ×1、R-23-d・1Ⅲ×1 R-33-a・7Ⅲ×2	36	(18.9)	—	(26.2)	P-21-d・6Ⅲ×1 Q-19・1Ⅲ×1 R-21-b・8×2	4	
7	62-4	Ⅲ a	Q-21・1Ⅲ×1、Q-21-b・2Ⅲ×1 Q-21-b・4Ⅲ×1、Q-21-b・5Ⅲ×2 Q-21-b・9Ⅲ×10、Q-21-b・13Ⅲ×20 Q-21-b・16Ⅲ風×1、Q-21-c・16Ⅲ×1 R-25-d・1Ⅲ×1	38	(14.9)	6.9	21.6	Q-21-b・5Ⅲ×2、Q-21-b・9Ⅲ×3 Q-21-b・13Ⅲ×3、Q-21-c・2Ⅲ×1 Q-21-c・4Ⅲ×1、Q-21-c・15Ⅲ×1	11	
8	62-5	Ⅲ a	O-20-b・1Ⅲ×1、O-20-b・2Ⅲ×33 O-20-d・2 aⅢ×1、O-21-b・1Ⅲ×4 O-21-b・2Ⅲ×6、P-21-a・3Ⅲ×2 P-21-a・12Ⅲ×1、P-21-a・16Ⅳ上×1 P-21-d・9Ⅲ×2、P-27-a・1Ⅲ×1	52	(16.1)	7.5	20.3	O-19・1 aⅢ×1、O-20-b・2Ⅲ×7 O-21-b・2Ⅲ×1、O-21-b・4Ⅲ×1 O-21-c・2Ⅲ×1 P-19-b・7Ⅲ×1、P-19-c・6Ⅲ×2 P-20-a・7Ⅲ×2、P-21-a・3Ⅲ×1 P-21-a・7Ⅲ×2、P-24-d・6Ⅲ×2 Q-21-c・2Ⅲ×1	22	
9	62-6	Ⅲ a	H-6・2覆土上×1、O-21-b・2Ⅲ×3 P-21-a・2Ⅲ×1、P-21-a・3Ⅲ×3 P-21-b・11Ⅲ×1、P-21-c・4Ⅲ×2 P-21-d・9Ⅲ×1	12	(10.2)	5.6	11.1	P-21-b・4Ⅲ×1	1	
10	63-1	Ⅲ a	R-18-a・1Ⅲ×1、R-18-a・5Ⅳ上×1 R-18-b・1Ⅲ×1、R-18-c・1Ⅲ×4 R-18-c・4Ⅲ×6、R-18-c・8Ⅲ×1 R-18-c・11Ⅲ×14、R-18-d・1Ⅲ×3 R-18-d・6 aⅢ×5、R-18-d・9 aⅢ×4 R-18-d・10Ⅲ×3、未注記×1	44	(25.2)	10.2	(33.9)	R-18-a・1Ⅲ×1、R-18-b・1Ⅲ×1 R-18-c・1Ⅲ×4、R-18-c・4Ⅲ×1 R-18-c・8Ⅲ×2、R-18-c・11Ⅲ×4 R-18-d・1Ⅲ×3、R-18-d・6 aⅢ×13 R-18-d・10Ⅲ×2、R-18-d・11Ⅳ上×1 R-23-a・14Ⅳ a×1、未注記×18	51	
11	63-1	Ⅲ a	H-1、5・掘上2Ⅲ×2、N-21-c・6Ⅲ×1 N-21-c・10Ⅲ×2、N-21-c・13 aⅢ×1 O-20-b・2Ⅲ×5、P-19-d・2Ⅲ×1 R-21-a・41 aⅢ×1、R-24-c・10Ⅳ a×1 R-25-b・2Ⅲ風×1	15	(23.8)	9.1	26.2	M-25・7不明×1 P-21-a・16Ⅳ上×2	3	
12	63-3.4	Ⅲ a	Q-18-c・3Ⅲ×1、R-21-a・41 aⅢ×1 R-21-c・22Ⅲ×1、S-20-c・13Ⅲ×1 S-20-b・23Ⅲ×1、S-20-d・6Ⅲ×1 S-20-d・14Ⅲ×1、S-20-d・19Ⅲ×2 S-21-a・10Ⅲ×2、S-21-a・21Ⅲ×26 S-21-c・22Ⅳ上×2、S-22-a・13Ⅲ×2	41	(11.9)	(9.4)	(25.3)			
13	63-5	Ⅲ a	S-20-b・42Ⅳ a×6	6	—	—	(4.3)			
14	63-6	Ⅲ a	P-6・22覆土上×1、K-23-c・2Ⅲ×2 M-22・1Ⅲ a-Ⅲ b×1 M-21-b・9Ⅲ×1、M-21-d・6Ⅲ×1 M-22-b・2Ⅲ×2、M-22-b・4Ⅲ×1 M-22-b・6Ⅲ×3、M-22-b・13Ⅲ×1 M-22-b・16Ⅲ×1、M-22-b・19Ⅲ×4 M-22-b・21Ⅲ×3、M-22-b・26Ⅲ×4 M-22-c・10Ⅲ×7	32	(13.4)	(7.6)	19.7	M-22-b・21Ⅲ×1、M-22-b・19Ⅲ×1 M-23・2Ⅲ×1、M-23-c・18Ⅲ×3 M-24・5×1	7	
15	64-1	Ⅲ a	R-20-C・1Ⅲ×1、R-20-C・7Ⅲ×7 R-20-C・14Ⅲ×1、R-20-C・21Ⅲ×2 R-21-b・25Ⅲ×1	12	(6.4)	(3.2)	6.0	R-19-d・5Ⅲ×1 R-20-b・12Ⅲ×1 未注記×1	3	
16	64-2	Ⅲ a	O-20-b・2Ⅲ×1 P-21-a・3Ⅲ×1 Q-21-c・2Ⅲ×1 R-23-c・7Ⅲ×1	4	(5.8)	—	(3.2)	Q-21-b・2Ⅲ×1 Q-21-b・5Ⅲ×1 Q-21-c・16Ⅲ×1	3	
17	64-3	Ⅲ a	R-23-b・14木根×1	1	(2.9)	0.9	2.9			
18	64-4	Ⅲ b-2	P-24-d・20Ⅲ×74	74	13.1	(5.5)	19.8	P-24-d・20Ⅲ×42	42	
19	64-5	Ⅲ b-2	P-3・65覆土上×1、O-19・2Ⅲ×6 P-19-b・8Ⅲ×1、Q-18-d・5Ⅲ×1	11	8.3	3.6	(8.3)			

IV 包含層出土の遺物

掲載番号	図版番号	分類	接 合	破片数	口径	底径	器高	未 接 合	破片数	備考
			Q-18-d・6Ⅲ×1、Q-18-d・9Ⅲ×1							
20	64-6	Ⅲb-2	Q-20・1Ⅲ×1	1	-	5.1	(5.0)	P-20-c・8Ⅲ×1	1	
21	65-1	Ⅲb	M-21-b・1Ⅲ×2、M-21-b・3Ⅲ×3 M-21-b・5Ⅲ×6、M-21-b・8Ⅲ×6 M-21-d・9Ⅲ×6、M-21-d・14Ⅲ×4	27	12.5	5.6	13.8			
22	65-2	Ⅳa	S-18-a・8Ⅲ×16 未注記×1	17	-	10.3	(10.9)	S-18-a・8Ⅲ×3	3	
60	65-3	Ⅲa	S-20-d・3Ⅲ×2、S-20-d・6Ⅲ×7 S-21-a・21Ⅲ×4、S-21-d・1Ⅲ×5 S-21-d・6Ⅲ×6、S-21-d・13Ⅲ×6 S-21-d・18Ⅲ×16、S-21-d・28Ⅲ×1	47	(20.4)	-	(13.4)	S-20-d・3Ⅲ×2、S-20-d・6Ⅲ×1 S-21-a・21Ⅲ×2、S-21-d・1Ⅲ×2 S-21-d・6Ⅲ×3、S-21-d・13Ⅲ×2 S-21-d・18Ⅲ×10	22	
72	65-4	Ⅲa	P-3・49覆土上×1、J-22・1表土×1 J-22-c・1Ⅲ×1、K-21-a・1Ⅲ×1 K-22-d・1Ⅲ×1、K-23-a・18Ⅳa×1 Q-21・6Ⅲb上×1	7	-	8.9	(12.4)			
73	65-5	Ⅲa	NP-3・42覆土中×2 Q-20・15Ⅲ×6 Q-20-c・3Ⅲ×1	9	-	9.2	(12.6)	Q-20-d・1Ⅲ×1	1	
75	66-1	Ⅲa	S-21-d・13Ⅲ×4 S-21-d・18Ⅲ×18 未注記×4	26	-	(9.1)	(10.6)	S-21-a・5Ⅲ×1、S-21-d・1Ⅲ×1 S-21-d・13Ⅲ×4、S-21-d・18Ⅲ×5 S-21-d・1Ⅲ×5 (未注記)	16	

包含層出土復原土器一覽 (Ⅵ群)

掲載番号	図版番号	分類	接 合	破片数	口径	底径	器高	未 接 合	破片数	備考
1	70-1	Ⅵc	J-23-d・1Ⅲ×1、J-23-d・2Ⅲ×1 J-23-d・3Ⅲ×1、J-23-d・4Ⅲ×1 J-23-d・5Ⅲ×1、J-23-d・6Ⅲ×1 J-23-d・7Ⅲ×1、J-23-d・8Ⅲ×1 J-23-d・9Ⅲ×1、J-23-d・10Ⅲ×1 J-23-d・11Ⅲ×1、J-23-d・12Ⅲ×1 J-23-d・13Ⅲ×1、J-23-d・14Ⅲ×1 J-23-d・15Ⅲ×1、J-23-d・16Ⅲ×2 J-23-d・17Ⅲ×2、J-23-d・19Ⅲ×1 J-23-d・20Ⅲ×1、J-23-d・21Ⅲ×1 J-23-d・22Ⅲ×1、J-23-d・24Ⅲ×2 J-23-d・25Ⅲ×1、J-23-d・26Ⅲ×1 J-23-d・27Ⅲ×1、J-23-d・28Ⅲ×1 J-23-d・29Ⅲ×1、J-23-d・30Ⅲ×1 J-23-d・31Ⅲ×1、J-23-d・32Ⅲ×1 J-23-d・33Ⅲ×1	34	15.1	13.5	4.7	J-23-d・13Ⅲ×1	1	
2	70-2	Ⅵc	K-23-b・2Ⅲ×1 K-24-c・3Ⅲ×17 K-25-b・1Ⅲ×6 未注記×1	25	(16.6)	(5.2)	19.0	J-25-c・2Ⅲ×1、K-24-c・1Ⅲ×1 K-24-c・3Ⅲ×7、K-28・5Ⅰ×1 J-25-a・4Ⅲ×1、未注記×5	16	
3	70-3	Ⅵc	G-24・1Ⅲ×11 H-25・1Ⅰ×1 I-24・1Ⅲa×28	40	(16.2)	-	(18.1)	Fc 1-151・151×1、G-24・1Ⅲ×16 I-24・1Ⅲa×6、K-25-b・1Ⅲ×2	25	
4・8	70-4 71-2	Ⅵc	G-24-c・1Ⅲ×5、G-25-b・1Ⅲ×5 K-23・1Ⅲ×2、K-24・1Ⅲa×3 L-25・3Ⅲ×2 K-24・1Ⅲ×2	17	(26.7)	(6.5)	(7.8)	G-24-c・1Ⅲ×10、G-25-b・1Ⅲ×3 G-25-c・1Ⅲ×2、H-24・2Ⅰ×1 H-24-d・1Ⅲ×2、H-26-c・1Ⅰ×1 K-24・1Ⅲa×12、L-25・3Ⅲ×4 L-25-d・1Ⅲ×1	36	
5	70-5	Ⅵc	J-25-a・2Ⅲ×5 J-25-a・4Ⅲ×4	9	-	(5.3)	(11.7)	J-25-a・2Ⅲ×10	10	
6	70-6	Ⅵc	L-25・3Ⅲ×23 L-25-c・2Ⅲ×1	24	-	-	(12.5)	L-25・3Ⅲ×7	7	
7	71-1	Ⅵc	L-25・3Ⅲ×10 L-25-d・1Ⅲ×1	11	-	-	(10.1)	L-25・3Ⅲ×2	2	

表Ⅳ-2 包含層出土拓本掲載土器一覽

拓本掲載土器一覽 (I群a類) (II群b類)

掲載番号	図版番号	分類	発掘区	遺物番号	層位	備考
8	66-3	I a	O-21-d	6	Ⅲ	
			O-22-a	13	Ⅳa	
9	66-3	I a	Q-24-d	10	Ⅳa	
10	66-3	I a	O-23-a	10	Ⅲ	
11	66-3	I a	S-22-c	8	Ⅲ	
12	66-3	I a	O-24-c	8	Ⅳa	
13	66-3	I a	S-23-a	3、4	Ⅳa	
14	66-3	I a	S-23-a	3、4、6	Ⅳa	
15	66-3	I a	Q-25	4	Ⅲb	
16	66-3	I a	Q-24-a	1	Ⅲ	
17	66-3	I a	P-25-c	8、15	Ⅲ、Ⅳa	
18	66-3	I a	P-24-c	18、21	Ⅲ、Ⅳa	
			P-24-d	13、15、18	Ⅲ、Ⅳa	
19	66-3	I a	O-22-a	10	Ⅳa	
			O-22-b	13	Ⅳa	
20	66-3	I a	S-22-c	2	Ⅳ上	
21	66-3	I a	S-24	6	Ⅲa	
1	67-1	Ⅱb	G-27-c	1	Ⅲ	
2	67-1	Ⅱb	P-24-a	1	Ⅲ	
3	67-1	Ⅱb	R20	1	-	
			F-23	1	Ⅲ	
4	67-1	Ⅱb	G-25	1	Ⅲ	
			I-25-a	1	Ⅲ	
5	67-1	Ⅱb	G-24	2	Ⅲb	
6	67-1	Ⅱb	R20	1		
7	67-1	Ⅱb	R20	1		

拓本掲載土器一覽 (III群a類)

掲載番号	図版番号	分類	発掘区	遺物番号	層位	備考
24	67-1	Ⅲa	R80	1	-	
25	67-1	Ⅲa	R80	1	-	
26	67-1	Ⅲa	R80	1	-	
27	68-2	Ⅲa	R-23-c	7	Ⅲ	H-5に同一個体有り
28	68-2	Ⅲa	O-25-d	6	Ⅲ	
29	68-2	Ⅲa	Q-22-c	4	Ⅲ	H-1に同一個体
30	68-2	Ⅲa	Q-22-c	4	Ⅲ	
31	68-2	Ⅲa	O-21-a	1	Ⅲ	
			O-22-a	8	Ⅲ	
32	68-2	Ⅲa	P-32	2	覆土2	
			M-23-b	14	Ⅲ	
33	68-1	Ⅲa	S-17	1	Ⅳ上	
			S-17-c	ナシ	Ⅲ	
			S-17-c	8	Ⅲ	
			S-17-d	6、10	Ⅲ	
34	67-2	Ⅲa	P-23-c	6	Ⅲ	
			P-23-c	9	Ⅳ上	
35	67-1	Ⅲa	H-24	1	Ⅲa	
36	67-2	Ⅲa	P-19-b	7	Ⅲ	
37	67-2	Ⅲa	N-24-d	5	Ⅲ	
38	67-2	Ⅲa	L-23-c	10	Ⅲ	
			M-21-c	6	Ⅲ	
			M-21-d	14	Ⅲ	
			M-24	1	I	
39	67-2	Ⅲa	S-22-d	21	Ⅲ下	
40	68-1	Ⅲa	R-19-a	2	Ⅲ	
			R-19-b	2	Ⅲ	
			R-20-a	1、11	Ⅲ	
			R-20-b	12	Ⅲ	
			R-20-c	2、7	Ⅲ	
41	67-2	Ⅲa	M-25	3	Ⅲ	
			M-26	13	Ⅲ	
42	67-2	Ⅲa	S-14-a	24	Ⅳ上	
			S-19-a	20	Ⅲ	
43	68-1	Ⅲa	Q-23-d	1	Ⅲ	
44	68-1	Ⅲa	Q-22-b	1	Ⅲ	
			Q-22-d	3	Ⅲ	
			Q-23-b	1	Ⅲ	
45	68-1	Ⅲa	S-18-d	1	Ⅲ	
46	68-1	Ⅲa	R-19-c	7	Ⅲ	H-5、P-20に同一個体
47	68-1	Ⅲa	R-19-c	13	Ⅲ	
48	68-1	Ⅲa	R-19-c	13	Ⅲ	
49	69-1	Ⅲa	N-23-a	16	Ⅲ	
50	68-2	Ⅲa	N-21	2	I	

掲載番号	図版番号	分類	発掘区	遺物番号	層位	備考
51	68-2	Ⅲa	N-21-a	9	Ⅲ	
52	68-2	Ⅲa	N-21-a	10	Ⅳ上面	
53	68-2	Ⅲa	N-21-a	1	Ⅲ	
54	68-2	Ⅲa	N-23-c	4	Ⅲ	
55	68-2	Ⅲa	N-20-d	5	Ⅲ風倒	
56	68-1	Ⅲa	M-22-b	2、21	Ⅲ	
			Q-20-c	3	Ⅲ	
57	68-1	Ⅲa	Q-20-c	9	Ⅲ	
			Q-20-d	1	Ⅲ	
58	68-1	Ⅲa	N-23-d	6	Ⅲ	
59	68-1	Ⅲa	S-20-d	6	Ⅲ	
61	68-1	Ⅲa	P-21-d	6	Ⅲ	
62	68-1	Ⅲa	S-20-a	17	Ⅲ	
			S-20-d	6、14	Ⅲ	
			S-19-b	1	Ⅲ	
			S-19-c	4	Ⅲ	
			Q-20	1	Ⅲ	
63	68-1	Ⅲa	H-3	22	覆土9	
			M-23-b	14	Ⅲ	
			N-24	7	Ⅲ	
64	68-2	Ⅲa	L-23-b	4	Ⅲ	
			L-23-d	5	Ⅲ	
			L-23-d	7	Ⅲ	
65	68-2	Ⅲa	E-23-c	1、2	Ⅲ	
			E-23-d	3	Ⅲ	
			E-24	1	Ⅲ	
			F-23-c	1	Ⅲ	
66	67-2	Ⅲa	N-20-a	7	Ⅲ	
			N-21-c	6、7、10、13	Ⅲ	
			O-20-b	2	Ⅲ	
			P-21-c	15	Ⅳ上	
67	68-2	Ⅲa	O-22-d	12	Ⅲ	
68	68-2	Ⅲa	O-22-d	4、12	Ⅲ	
69	68-2	Ⅲa	M-26	13	Ⅲ	
70	68-2	Ⅲa	O-23-a	11	Ⅲ	
			O-23-c	3	Ⅲ	
71	68-2	Ⅲa	O-23-a	8、11	Ⅲ	
			O-23-c	12	Ⅳ上	
74	65-6	Ⅲa	M-30	1	Ⅲb	
			Q-27	1	Ⅲa	
			R-20-a	16	Ⅲ	
			S-19-a	13	Ⅲ	
76	66-2	Ⅲa	S-20-c	1、7、13	Ⅲ	
			S-21-b	13	Ⅲ	

拓本掲載土器一覽 (III群b類)

掲載番号	図版番号	分類	発掘区	遺物番号	層位	備考
77	68-2	Ⅲb-2	M-21-b	17	木根攪乱	
			M-21-d	9	Ⅲ	
			N-21	2	I	
			N-21-a	9	Ⅲ	
			N-21-a	10	Ⅳ上	
78	68-2	Ⅲb-2	N-21-c	7、11	Ⅲ	
79	68-2	Ⅲb-2	N-21-a	5	Ⅲ	
			N-21-a	10	Ⅳ上	
80	68-2	Ⅲb-2	N-21	2	I	
			N-21-c	1	Ⅲ	
			N-21-d	3	Ⅲ	
81	69-1	Ⅲb-2	O-25-b	4	Ⅲ	
			O-27-c	2	Ⅲ	
82	69-1	Ⅲb-2	O-27-b	4	Ⅲ	H-4、7に同一個体有り
			O-27-c	2	Ⅲ	
83	69-1	Ⅲb	Q-20-d	2	Ⅲ	
84	69-1	Ⅲb	S-20-b	36	Ⅲ	
85	69-1	Ⅲb	Q-23	2	Ⅲa	

拓本掲載土器一覽 (IV群)

掲載番号	図版番号	分類	発掘区	遺物番号	層位	備考
86	69-1	Ⅳa	S-18-a	8	Ⅲ	
87	69-1	Ⅳa	G-24-d	4	Ⅲ	
			S-17-c	5	Ⅲ	
88	69-1	Ⅳa	S-18-a	13	Ⅲ	
			S-18-b	2	Ⅲ	
89	69-1	Ⅳa	I-24	2	Ⅲa~Ⅲb	
			P-25-c	1	Ⅲ	
90	69-1	Ⅳa	K-25	1	I	
23	69-1	Ⅳc	S-20-a	22	Ⅲ	注口

IV 包含層出土の遺物

拓本掲載土器一覧 (VI群c類)

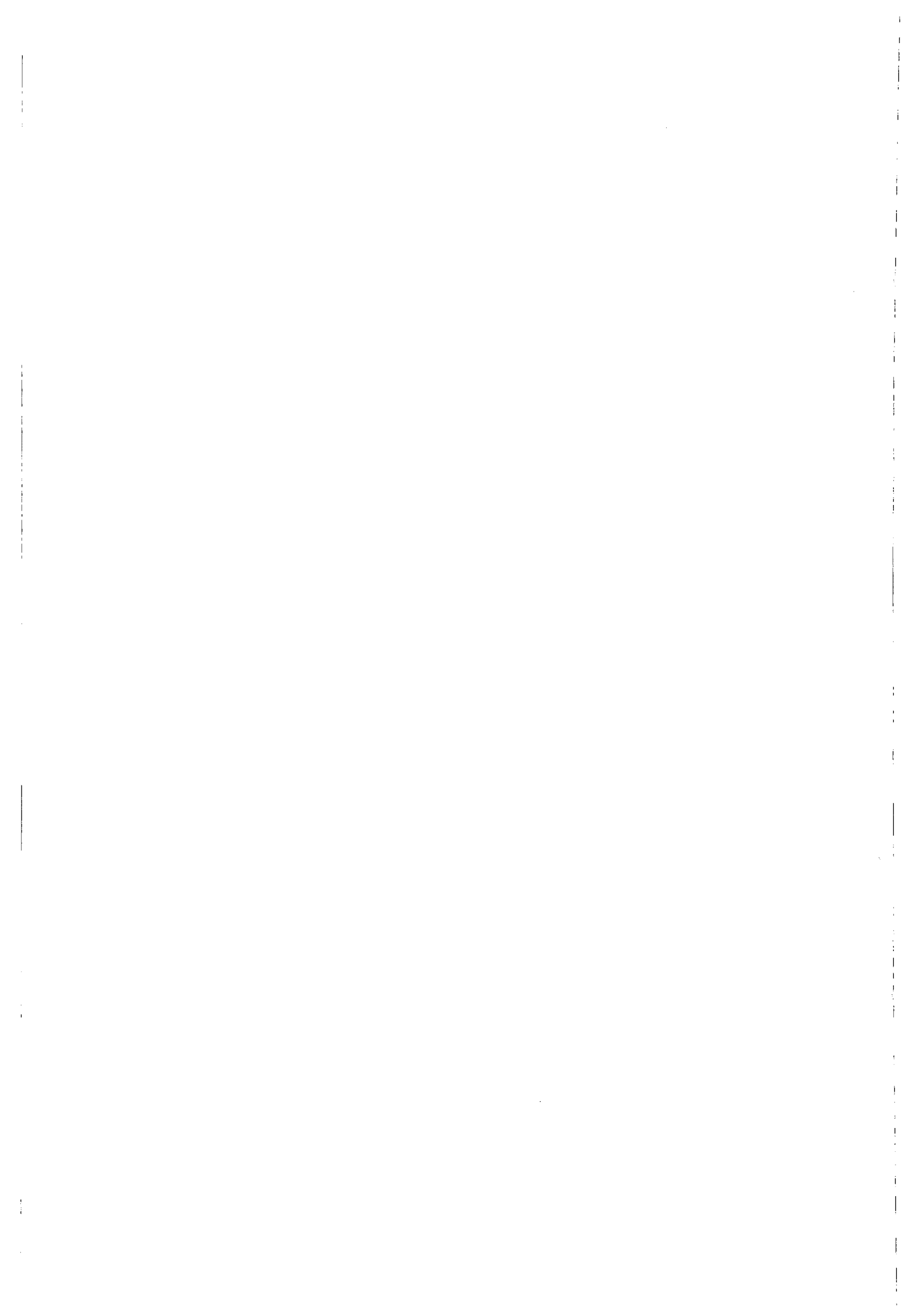
掲載番号	図版番号	分類	発掘区	遺物番号	層位	備考
9	71-3	VI c	G-25-c	1	Ⅲ	
			I-22	1	Ⅲ	
			J-24	1	Ⅲ	
10	71-3	VI c	J-27-c	2	Ⅲ	
11	71-3	VI c	I-25-c	5	Ⅲ	
12	71-3	VI c	I-25-c	11, 13	Ⅲ	
13	71-3	VI c	I-25-c	5	Ⅲ	
14	71-3	IV c	J-25-d	7, 9	Ⅲ	
15	71-3	IV c	I-25-c	5	Ⅲ	
			J-25	1	I	
16	71-3	VI c	J-26	2	I	
			J-27-a	2	Ⅲ	
17	71-3	VI c	I-26	3	I	
18	71-3	VI c	H-27-a	2	Ⅲ	
			H-27-d	1	I	
19	71-3	VI c	H-27	1	I	

掲載番号	図版番号	分類	発掘区	遺物番号	層位	備考
21	71-3	VI c	G-27-c	3	Ⅲ	
22	71-3	VI c	Q-22	1	Ⅲ a	
			L-25	7	Ⅲ	
23	71-3	VI c	L-25-a	11		
			M-25	2	ナシ	
24	71-3	VI c	M-30	1	I	
25	71-3	VI c	M-25	2	ナシ	
26	71-3	VI c	J-26-a	2	Ⅲ	
27	71-3	VI c	H-25-a	2	Ⅲ	
28	71-3	VI c	S-24-a	4	Ⅲ	
29	71-3	VI c	N-21-d	5	Ⅲ	
30	71-3	VI c	L-25-b	1	Ⅲ	
31	71-3	VI c	L-24	2	Ⅲ	
32	71-3	VI c	L-24	2	Ⅲ	
33	71-3	VI c	N-24	2	ナシ	

表IV-3 包含層出土掲載石器一覧

掲載番号	器種名	分類	発掘区	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
1	石鏃	IA 3	L-25-a	3	Ⅲ	(2.0)	1.2	0.3	0.5	頁岩	72-1	
2	石鏃	IA 5	S-19-a	18	Ⅲ	4.0	1.3	0.7	2.5	黒曜石	72-1	
3	石鏃	IA 4	S-19-d	24	IV上	4.3	1.3	0.6	2.4	頁岩	72-1	
4	石鏃	IA 4	P-20-c	1	Ⅲ	2.6	1.2	0.5	1.0	頁岩	72-1	
5	石鏃	IA 9	F-25-d	1	Ⅲ	3.4	1.8	0.6	1.7	頁岩	72-1	(F-25-a・2)接合
6	石鏃	IA 4	Q-20-c	10	Ⅲ	5.1	2.4	0.7	7.2	頁岩	72-1	
7	石鏃	IA 5	Q-20-b	12	Ⅲ	3.6	1.6	0.5	1.8	頁岩	72-1	
8	石鏃	IA 5	S-22-d	13	Ⅲ	3.9	1.4	0.6	2.6	頁岩	72-1	
9	石鏃	IA 5	S-21-a	18	Ⅲ	3.7	1.3	0.6	1.8	頁岩	72-1	
10	石鏃	IA 5	S-22-b	14	Ⅲ	4.3	2.1	0.9	6.5	頁岩	72-1	
11	石鏃	IA 5	N-28-a	1	Ⅲ	(2.1)	1.2	0.4	0.6	頁岩	72-1	
12	石鏃	IA 5	F-24	4	不明	(3.0)	1.7	0.5	1.7	頁岩	72-1	
13	石鏃	IA 5	M-23-c	7	Ⅲ	4.0	1.3	0.7	2.5	頁岩	72-1	
14	石鏃	IA 5	S-21-c	13	Ⅲ	4.5	1.4	0.6	2.7	頁岩	72-1	
15	石鏃	IA 5	L-26	7	I	4.1	1.8	0.7	2.9	頁岩	72-1	
16	石槍	IB 2	O-23-b	10	IV a	7.0	2.7	0.7	9.5	頁岩	72-1	
17	石槍	IB 2	M-22-c	3	Ⅲ	6.3	1.7	0.6	6.5	頁岩	72-1	
18	石錐	II A 1	N-24	9	Ⅲ	3.0	1.3	0.5	1.7	頁岩	72-1	
19	石錐	II A 1	N-23-a	9	Ⅲ	2.7	1.6	0.4	1.3	頁岩	72-1	
20	石錐	II A 1	F-27	2	表土	6.8	5.1	3.2	85.0	頁岩	72-1	
21	石錐	II A 2	M-23-b	22	Ⅲ	(2.4)	0.9	0.6	1.3	頁岩	72-1	
22	つまみ付ナイフ	III A 4	S-18-c	12	Ⅲ	8.1	3.4	0.7	12.3	頁岩	72-1	
23	つまみ付ナイフ	III A 1 b	R-20-c	3	Ⅲ	5.4	1.3	1.0	9.2	頁岩	72-1	
24	筒状石器	III B 1 b	S-17-d	5	Ⅲ	7.4	4.4	1.8	48.5	頁岩	72-1	
25	スクレイパー	III B 2 a	R-22-d	9	Ⅲ	6.9	3.4	1.1	25.3	頁岩	72-1	
26	スクレイパー	III B 2 b	L-21-a	2	攪乱	8.2	3.2	0.8	21.7	頁岩	72-1	
27	スクレイパー	III B 2 a	P-21-a	13	Ⅲ	6.4	5.5	1.2	45.0	頁岩	72-1	
28	スクレイパー	III B 2 a	O-29-b	1	IV a	7.8	5.6	1.8	79.5	頁岩	72-1	
29	スクレイパー	III B 2 b	S-23-c	2	Ⅲ	8.3	4.7	2.4	98.3	頁岩	72-1	
30	スクレイパー	III B 2 b	P-23-a	5	Ⅲ	6.6	3.3	0.5	10.7	頁岩	72-1	
31	スクレイパー	III B 2 b	S-21-d	20	Ⅲ	7.7	3.8	1.3	41.4	頁岩	72-1	
32	スクレイパー	III B 2 b	R-21-b	23	Ⅲ	7.7	4.1	0.7	19.5	頁岩	72-1	
33	スクレイパー	III B 2 b	Q-20-b	1	Ⅲ	12.9	4.4	1.5	87.2	頁岩	72-1	
34	スクレイパー	III B 2 b	O-26-a	3	Ⅲ	8.6	5.2	1.9	69.4	頁岩	72-1	
35	スクレイパー	III B 2 b	Q-20	9	Ⅲ	6.5	4.7	1.2	34.7	頁岩	72-1	
36	スクレイパー	III B 2 b	Q-20	8	Ⅲ	7.9	2.9	1.7	36.1	頁岩	72-1	
37	スクレイパー	III B 2 c	P-20-d	5	Ⅲ	6.8	5.0	1.0	35.2	頁岩	72-1	
38	スクレイパー	III B 2 c	R-22-b	14	Ⅲ	7.8	3.8	1.0	36.7	頁岩	72-1	
39	スクレイパー	III B 2 c	S-18-a	36	Ⅲ	7.7	3.2	1.2	33.2	頁岩	72-1	
40	スクレイパー	III B 2 b	K-25-c	1	Ⅲ	5.7	7.2	1.3	48.5	頁岩	72-1	
41	スクレイパー	III B 3 b	S-21-a	24	Ⅲ	5.1	7.1	0.7	21.3	頁岩	72-1	
42	スクレイパー	III B 6	Q-21	3	Ⅲ b	7.0	3.2	1.7	22.9	頁岩	72-1	
43	両面調整石器	IV 2	S-23-b	6	IV上面	6.7	3.7	1.4	37.3	頁岩	72-1	
44	石核	VA 1	S-20-d	4	Ⅲ	7.9	4.8	5.9	285.0	頁岩	73-1	
45	石核	VA 1	G-27-c	2	Ⅲ	5.1	6.8	4.3	144.9	玉髓	73-1	
46	石核	VA 1	S-21-d	2	Ⅲ	8.1	11.0	3.3	287.9	頁岩	73-1	
47	Rフレイク	VB 1	Q-23-c	10	IV a	10.2	6.2	2.7	181.5	頁岩	73-1	
48	Uフレイク	VB 2 A	N-24-d	13	Ⅲ	5.5	2.3	0.6	6.4	頁岩	73-1	
49	Uフレイク	VB 2 B	S-23-b	13	IV a	5.8	4.3	1.2	33.4	頁岩	73-1	
50	Uフレイク	VB 2 C	O-22-c	11	Ⅲ	4.9	6.4	1.2	39.8	頁岩	73-1	
51	Uフレイク	VB 2 C	S-18-d	4	Ⅲ	9.3	2.8	1.5	25.8	頁岩	73-1	
52	石斧	VI A	M-23-b	7	Ⅲ	(8.5)	(4.8)	2.6	135.0	泥岩	73-1	
53	石斧	VI A	O-23-a	18	IV上	5.8	(3.1)	1.0	25.9	片岩	73-1	
54	石のみ	VI B	R-23-c	5	Ⅲ	(4.2)	1.9	0.5	7.2	片岩	73-1	

掲載番号	器種名	分類	発掘区	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	図版番号	備考
55	たたき石	Ⅶ	Q-22-a	2	Ⅲ	12.6	6.4	3.2	346.0	安山岩	73-2	
56	たたき石	Ⅶ1	K-23-d	5	Ⅲ	9.5	6.4	3.2	223.9	泥岩	73-2	
57	たたき石	Ⅶ1	P-27-a	3	Ⅲ	11.0	8.6	6.4	810.0	泥岩	73-2	
58	たたき石	Ⅶ1	M-22-c	18	Ⅲ	5.0	4.8	3.6	100.1	安山岩	73-2	
59	たたき石	Ⅶ2	P-25-d	9	Ⅲ	11.6	8.9	6.4	747.0	頁岩	73-2	
60	たたき石	Ⅶ3	P-25-d	10	Ⅲ	12.5	8.1	3.3	499.2	安山岩	73-2	
61	たたき石	Ⅶ3	Q-22-b	4	Ⅲ	12.0	6.7	4.3	433.6	安山岩	73-2	
62	たたき石	Ⅶ3	M-21-c	3	Ⅲ	10.6	9.4	4.7	560.2	安山岩	73-2	
63	たたき石	Ⅶ3	Q-18-c	7	Ⅲ	12.4	5.1	3.5	297.1	安山岩	73-2	
64	たたき石	Ⅶ3	R-28-b	1	Ⅳb	10.1	6.8	5.1	390.6	安山岩	74-1	
65	すり石	Ⅶ1	S-23-a	8	Ⅳa	12.4	8.0	5.6	805.0	安山岩	74-1	
66	すり石	Ⅶ1	P-23-b	11	Ⅲ	18.0	7.8	5.8	1,123.0	安山岩	74-1	
67	すり石	Ⅶ5	S-20-b	29		9.2	9.2	5.8	690.0	安山岩	74-1	
68	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	R-21-b	11	Ⅲ	9.0	17.1	1.8	382.8	安山岩	74-1	
69	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	S-18-b	29	Ⅲ	9.5	14.3	2.9	528.2	安山岩	74-1	
70	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	P-24-c	7	Ⅲ	9.7	15.9	2.8	529.0	安山岩	74-1	
71	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	O-22-d	3	Ⅲ	7.9	17.8	3.6	610.0	安山岩	74-2	
72	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	S-18-d	28	Ⅳ上面	9.9	14.9	2.7	503.4	安山岩	74-2	
73	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	S-20-c	3	Ⅲ	9.8	17.0	2.3	464.8	安山岩	74-2	
74	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	M-22-b	10	Ⅲ	10.5	17.6	3.4	832.0	安山岩	74-2	
75	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	S-20-c	9	Ⅲ	15.2	18.2	1.5	517.8	安山岩	75-1	
76	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	R-21-d	11	Ⅲ	9.9	15.9	3.2	657.0	安山岩	74-1	
77	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	O-27	1	I	4.1	8.6	2.4	130.3	安山岩	75-1	
78	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	O-23-b	11	Ⅳa	7.7	11.0	2.0	271.8	砂岩	75-1	
79	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	N-22-c	2	Ⅲ	11.1	17.2	3.3	825.0	安山岩	74-1	
80	半円状扁平打製石器	Ⅶ3	O-20-d	9	木根撥乱	10.8	17.6	2.2	541.8	安山岩	74-2	
81	北海道式石冠	Ⅶ4	R-20-a	13	Ⅲ	8.8	13.6	5.2	964.0	安山岩	75-1	(R-21-d・6)接合
82	北海道式石冠	Ⅶ4	R-19-b	3	Ⅲ	9.6	10.7	5.6	840.0	安山岩	75-1	
83	北海道式石冠	Ⅶ4	R-21-d	4	Ⅲ	9.4	(11.7)	7.0	1,070.0	安山岩	75-1	
84	北海道式石冠	Ⅶ4	STA4+OOR	9		10.7	(13.2)	7.5	1,218.0	安山岩	75-1	
85	北海道式石冠	Ⅶ4	P-22-d	2	Ⅲ	8.9	13.2	6.8	850.0	安山岩	75-1	
86	北海道式石冠	Ⅶ4	P-21-b	28	Ⅳ上面	10.0	(16.3)	5.6	1,213.0	安山岩	75-2	
87	北海道式石冠	Ⅶ4	P-24-d	12	Ⅲ	9.0	13.0	6.7	983.0	安山岩	75-2	
88	北海道式石冠	Ⅶ4	S-20-b	30	Ⅲ	5.9	9.7	3.4	213.6	安山岩	75-2	
89	砥石	ⅨB	Q-23-c	12	Ⅳa	10.9	7.2	2.9	225.4	砂岩	75-2	
90	石皿	X	Q-24-b	9	Ⅳa	7.9	10.0	2.2	448.4	砂岩	75-2	
91	石皿片	X	Q-22	4	Ⅲa	20.5	(14.0)	10.3	1,178.0	軽石	75-2	
92	石皿	X	S-20-a	35	Ⅲ	33.2	23.1	9.9	12,500.0	安山岩	76-1	
93	石皿	X	S-18-d	44	Ⅲ	43.1	32.6	10.5	22,500.0	安山岩	76-1	
94	石錘	XI	P-23-b	16	Ⅳa	7.5	7.1	1.8	134.3	安山岩	75-2	
95	石錘	XI	P-24-c	4	Ⅲ	7.5	9.1	1.8	168.1	安山岩	75-2	
96	円盤状土製品		M-23-c	16	Ⅲ	(10.2)	(4.8)	1.0	42.52		69-2	
97	円盤状土製品		O-22-d	1	Ⅲ	(8.8)	(6.3)	0.9	50.31		69-2	
98	円盤状土製品		O-23-a	5	Ⅲ	(4.2)	(3.6)	0.7	11.7		69-2	
99	円盤状土製品		R-20-c	7	Ⅲ	(2.6)	(1.3)	0.5	1.47		69-2	
100	円盤状土製品		S-18-a	29	Ⅲ	(4.1)	(2.4)	0.7	7.82		69-2	
101	土製品		L-22-c	6	Ⅲ	(1.7)	(1.2)	1.2	1.91		69-2	
102	土製品		O-25	10	I	(2.5)	(1.7)	0.6	3.09		69-2	
103	土製品		O-25-d	10	Ⅳ上面	(1.6)	(1.7)	0.7	1.79		69-2	
104	土製品		M-22-1	1	Ⅲa~Ⅲb	(5.7)	(2.3)	1.6	16.2		69-2	



V 自然科学的分析

1 野田生2遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

野田生2遺跡では、縄文時代中期（サイベ沢Ⅶ式・見晴町式）を中心とした遺構（住居跡・墓・土壇・柱穴状ピット）が検出されている。このうち、縄文時代中期の竪穴住居跡H-3は、床面が東西に長い楕円形を呈し、柱穴が9基確認できる。いわゆる火災住居跡であり、住居構築材の一部と考えられる炭化材が多数出土している。また、H-3の西約2mから検出された土壇墓P-25は、直径約1mで深さ約40cmの椀状を呈し、土壇底面からやや浮いた位置から炭化材が出土している。

今回の分析調査では、これらの炭化材の樹種同定を行い、当時の用材に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、H-3から出土した炭化材34点（ND2-1～34）と、P-25から出土した炭化材1点（ND2-35）の合計35点である。

2. 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。ND2-14、16は、道管を有することから広葉樹材であるが、保存状態が悪く、種類の同定には至らなかった。また、SD2-6は、材ではなく、樹皮であった。その他の炭化材は、いずれも落葉広葉樹で、5種類（アサダ・クリ・カツラ・タラノキ・ハリギリ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.)

カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～4個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～30細胞高。

表V-1 樹種同定結果

番号	遺構名	層位	取上番号	樹種
ND2-1	H-3	床	14	カツラ
ND2-2	H-3	床	15	カツラ
ND2-3	H-3	床	17	カツラ
ND2-4	H-3	床	23	ハリギリ
ND2-5	H-3	床	26	クリ
ND2-6	H-3	床	30	樹皮
ND2-7	H-3	床	31	クリ
ND2-8	H-3	床	32	クリ
ND2-9	H-3	床	39	クリ
ND2-10	H-3	床	45	クリ
ND2-11	H-3	覆土9層	57	クリ
ND2-12	H-3	覆土9層	58	クリ
ND2-13	H-3	覆土9層	60	クリ
ND2-14	H-3	覆土9層	61	広葉樹
ND2-15	H-3	覆土9層	65	ハリギリ
ND2-16	H-3	覆土9層	66	広葉樹
ND2-17	H-3	覆土9層	70	クリ
ND2-18	H-3	覆土9層	79	クリ
ND2-19	H-3	覆土10層	47	ハリギリ
ND2-20	H-3	覆土10層	49	ハリギリ
ND2-21	H-3	覆土10層	50	ハリギリ
ND2-22	H-3	覆土10層	51	ハリギリ
ND2-23	H-3	覆土10層	52	カツラ
ND2-24	H-3	覆土16層	11	クリ
ND2-25	H-3	覆土16層	7	クリ
ND2-26	H-3	覆土16層	18	タラノキ
ND2-27	H-3	覆土16層	19	クリ
ND2-28	H-3	覆土16層	20	クリ
ND2-29	H-3	覆土16層	74	アサダ
ND2-30	H-3	覆土16層	75	アサダ
ND2-31	H-3	覆土22層	2	クリ
ND2-32	H-3	覆土22層	4	クリ
ND2-33	H-3	覆土	62	クリ
ND2-34	H-3	覆土	64	タラノキ
ND2-35	P-25	覆土7層下部	2	クリ

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科

散孔材で、管孔はほぼ単独で、まれに2～3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～30細胞高。

・タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

環孔材で、孔圏部は4～5列、孔圏外への移行はやや急で、小道管は2～3列が接線状に紋様を描きながら長く連なる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性であるが、保存状態が悪く幅および高さの詳細は不明。

・ハリギリ (*Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai) ウコギ科ハリギリ属

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状または対列状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～同性、1～5細胞幅、1～30細胞高。

4. 考察

竪穴住居跡H-3から出土した炭化材には、合計5種類の広葉樹材が認められ、クリが比較的多い。この結果から、住居構築材にはクリを中心とした落葉広葉樹材が選択・利用されていたことがうかがえる。炭化材は、住居中央付近から出土しているものが多く、縁辺部付近で出土しているものは少ない。これらの炭化材のうち、ND 2-19～23は直線状に出土しており、このうちND 2-19～22はハリギリであった。このことから、ND 2-19～22は同一部材に由来する可能性があり、出土状況から垂木の可能性がある。その他の部材については、小片の試料も多く、部位等の詳細は不明である。

比較的多く見られたクリは、強度や耐朽性に優れており、構築材としては適材である。また、アサダも比較的高い強度の材質を有する。このことから、クリとアサダについては、木材の強度を考慮した用材が推定される。一方、他の3種類は、クリやアサダに比較すると、強度は劣る。しかし、いずれも比較的樹幹が真っ直ぐになる種類であり、カツラとハリギリでは大径木も得やすい。このことが利用された背景に考えられる。

クリ材が住居構築材に多く利用される例は、函館市石川1遺跡および桔梗2遺跡等渡島半島南部の遺跡にみられる(三野、1988a、1988b)。一方、苫小牧市美沢3遺跡、千歳市末広遺跡等、石狩低地帯の遺跡では、コナラ節やトネリコ属が多く見られ、クリが少量混じることがある(三野、2000)。このことから、地域によって住居構築材の種類構成に違いがみられることが指摘できる。

現在クリは、石狩低地帯を自生の北限としている。山田・柴内(1997)によれば、北海道の縄文時代遺跡では、前期後半頃から石狩低地帯以南の地域でクリの種実の利用が始まり、前期末頃からは木材も出土するようになるが、それ以前のクリの痕跡は認められてない。このことから、縄文時代前期後半頃に、土器文化圏を共有する青森県などの地域から渡島半島南部の遺跡にクリが持ち込まれ、種実・木材の有用性から栽培されて、時代の経過とともに分布を拡大したことが指摘されている。この指摘に基づけば、本遺跡におけるクリの利用も、時期的には一致しており、周辺での栽培による可能

性もある。

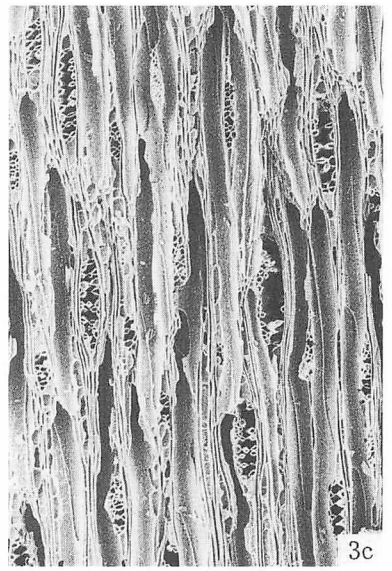
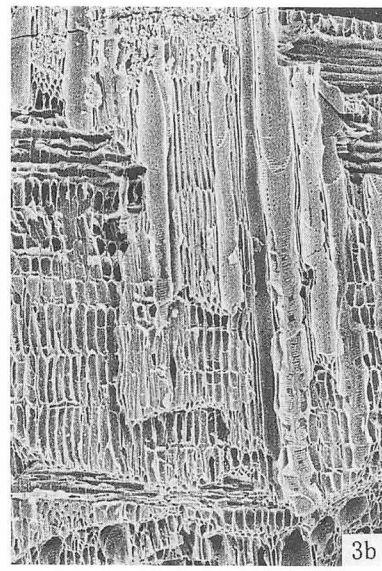
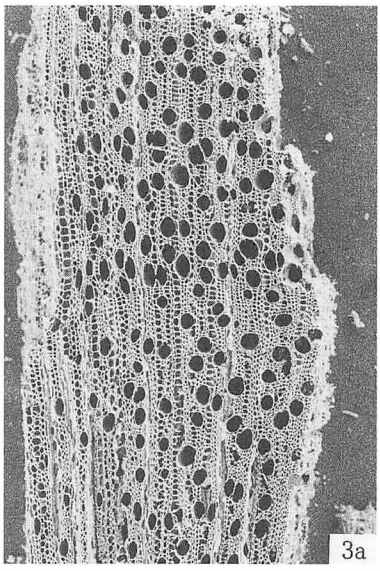
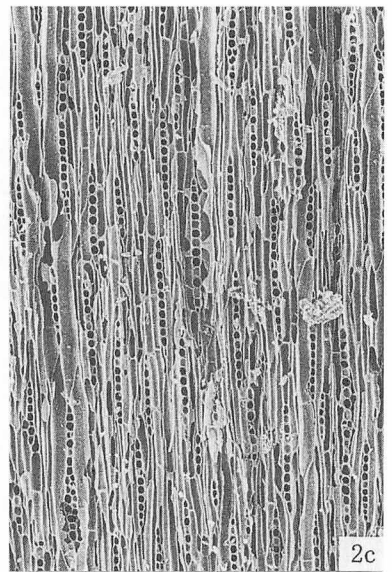
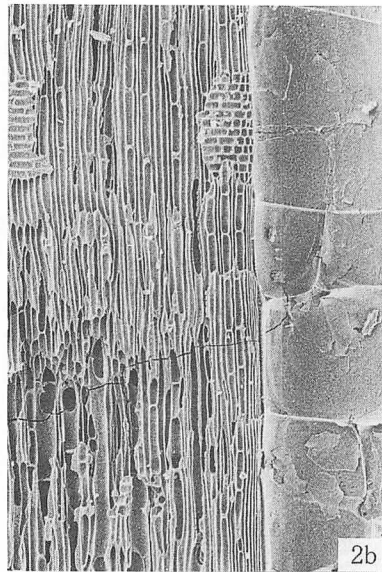
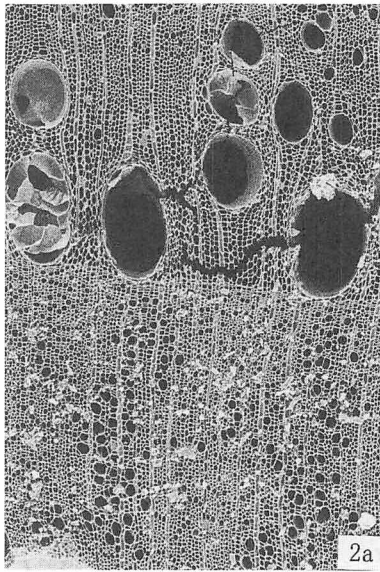
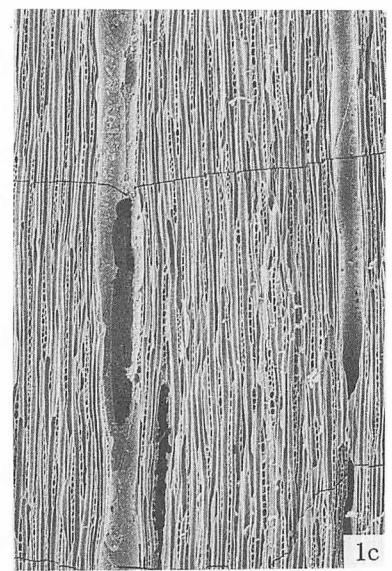
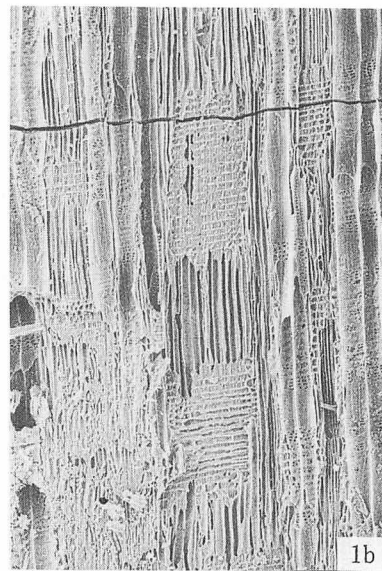
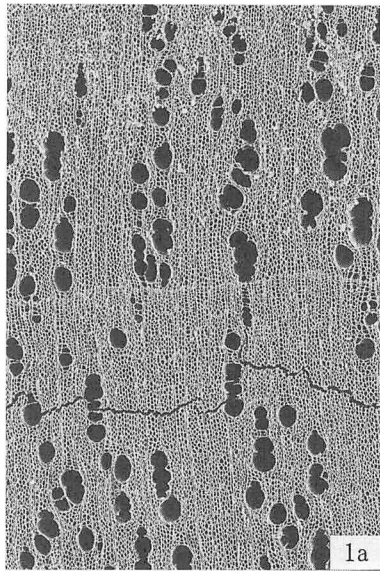
ところで、果実が有用な種類の木材を利用することは、一見すると矛盾する。現在栽培されているクリは、9年生～10年生以後から20年生前後の樹齢が成果期であり、一般に20年生以後は年毎に収量が減少する(志村、1984)。このことから、若木を果実確保のために保護・管理し、収量の落ちた老木を伐採して用材として利用したことが想定されている(千野、1983)。本遺跡でも同様の利用形態がみられた可能性もある。

アサダ、カツラ、タラノキ、ハリギリは、周辺地域に現在も生育している種類であることから、遺跡周辺で入手可能な木材を利用したことが推定される。

引用文献

- 千野裕道(1983) 縄文時代のクリと集落周辺植生 —南関東地方を中心に— 東京都埋蔵文化財センター研究論集、Ⅱ、p. 25-42.
- 三野紀雄(1988a) 石川1遺跡より得た炭化木片について 北埋調報45「函館市 石川1遺跡 —一般国道5号線函館新道道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—」、p. 255-259、財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 三野紀雄(1988b) 函館市桔梗2遺跡より得た炭化木片について、北埋調報46「函館市 桔梗2遺跡 —一般国道5号線函館新道道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—」、p. 202-206、財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 三野紀雄(2000) 先史時代における木材の利用(3)—石狩低地帯における木材利用の地域的・時代的な差異について— 北海道開拓記念館研究紀要、28、p. 1-25.
- 志村 勲(1984) クリの生育特性「農業技術体系 果樹編5 クリ基礎編」、p. 11-16、社団法人農山漁村文化協会
- 山田悟郎・柴内佐知子(1997) 北海道の縄文時代遺跡から出土した堅果類 —クリについて— 北海道開拓記念館研究紀要、25、p. 17-30.

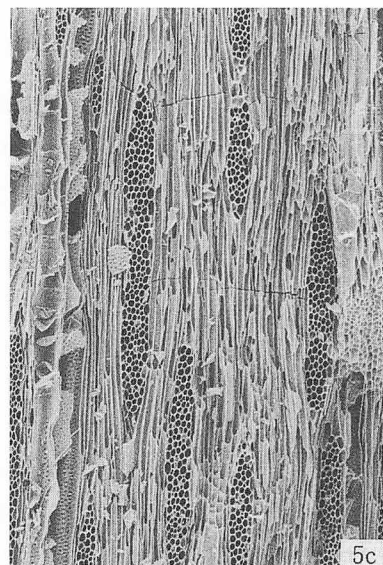
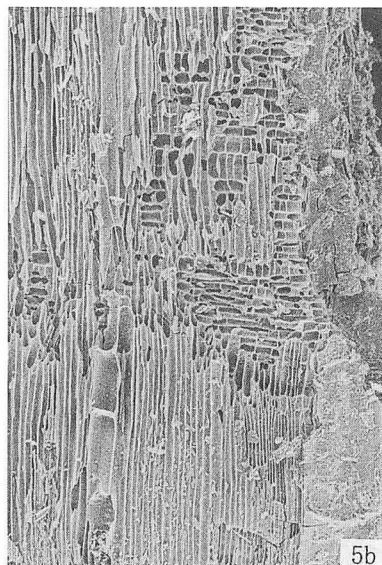
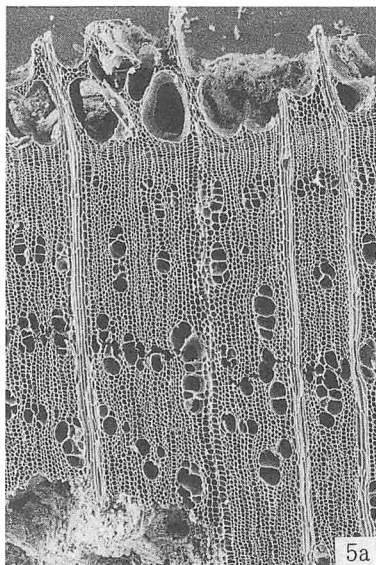
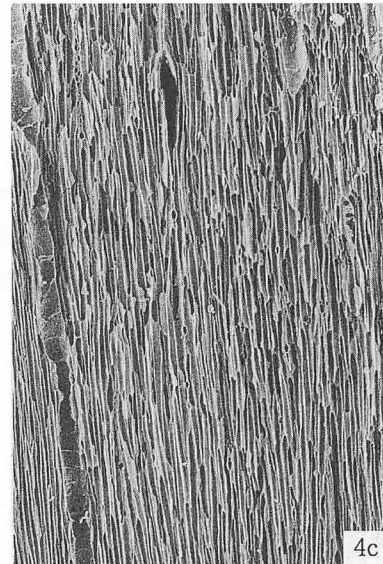
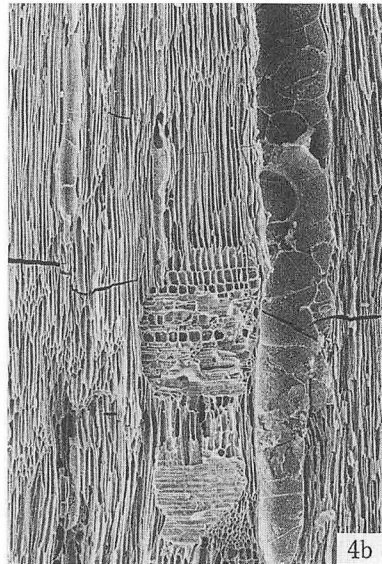
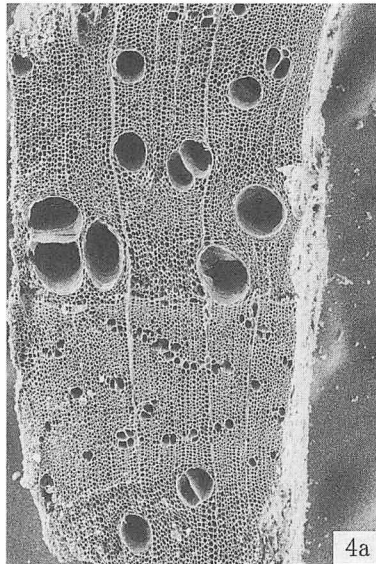
図版V-1 炭化材(1)



1. アサダ (ND2-29)
 2. クリ (ND2-31)
 3. カツラ (ND2-2)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μ m; a
200 μ m; b, c

図版V-2 炭化材(2)



4. タラノキ (ND2-34)

5. ハリギリ (ND2-20)

a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μ m; a
200 μ m; b, c

2 野田生^{の だ おい}2 遺跡から出土した炭化植物種子

よしぎまさかず つばきさかやすよ
* 吉崎昌一・** 椿坂恭代

1) 遺跡と調査の概要

遺跡の名称：野田生2 遺跡 (B-16-48)

遺跡の所在：北海道山越郡八雲町野田生^{やまこしぐんやぐもちょうの だおい}355—12ほか

調査機関：財団法人北海道埋蔵文化財センター

調査担当者：中田裕香^{なかだ ゆか}、立田理^{たつだ さとる}

遺跡の立地：八雲町の市街地の南東7.5km、標高32~37mの海岸段丘上に位置する。

検出遺構：竪穴住居跡7軒、墓5基、土壌29基、焼土14ヶ所、柱穴状ピット24カ所、焼土13カ所、集石1ヶ所、フリイク集中1カ所

遺構の年代：続縄文文化（後北C₁式土器・西暦3-4世紀）の焼土3カ所とフリイク集中1カ所以外は縄文文化中期（サイベ沢Ⅶ式、見晴町式土器）の遺構が大半であった。

2) 扱った資料

分析資料として扱った炭化植物は、駒ヶ岳火山灰d層(ko-d)に被覆された縄文文化中期の各遺構と続縄文時代の焼土から土壌を採取し、フローテーション法で処理後、種子の第一次選別を経て送付されてきた。これらの資料について実体顕微鏡で観察並びに撮影を行った。検出された植物種子の出土表は表V-2に示しておいた。

3) 各遺構から検出された種子

アカザ属 *Chenopodium* L.(図版1-1)

縄文文化中期の壙底直上(P-7)、縄文時代の焼土(F-3)と続縄文時代の焼土(F-1、5)から31粒出土している。種子は扁円形。嘴状に突出したヘソがある。種子はすべて酸化した状態で検出されている。アカザ属種子の場合、表皮の構造から被熱されなくても表皮の部分だけが酸化した状態で残存する場合が多い。これまでに、各時期の遺跡から検出されたアカザ属種子は、炭化されないで検出される場合が非常に多い。このような状況は種子構造上クチクラ層の特徴であるのか、サンプリング時やフローテーション処理時などに起こる混入の可能性も考えられる。アカザ属は荒地、畑に多い1年草で、日本全土に分布するとされているが、本邦における出現時期はまだ不明である。

考古植物学の立場からみてアカザ属がいつごろから本邦に出現するかは、大変興味のあるところである。遺跡によっては、未炭化の種子が大量に検出されるので、各層準における種子出現の頻度と年代測定を行い、コンタミネーションに関するDATAの蓄積が必要かもしれない。計測値は長さ2.0mm、幅1.3mm、厚さ0.7mm

ニワトコ属 *Sambucus* L.(図版1-2 a、b)

縄文時代中期の住居跡(H-6)の床面から検出された土器の中の土壌から1粒出土している。種子は狭楕円形で表面に独特の凹凸があり粗面である。計測値は長さ2.0mm、幅1.3mm、厚さ0.7mm

ブドウ科 VITIDACEAE (図版1-3 a、b)

縄文時代の焼土(F-3)から1粒出土。堅果は広卵状球形。背面は丸くその先は尖り、縦に凹ん

だへツがある。腹面には種子の中央に縦筋があり、その両側に倒皮針形に凹みがある。検出された種子は被熱による変形があり、詳細な分類は出来なかった。計測値は長さ4.8mm、幅4.3mm、厚さ2.7mm

クリ属 *Castanea* Mill.(図版1-4 a、b)

縄文時代中期の住居跡(H-5)の床面と壙底直上(P-7)から、縦筋状の太い稜がみられるクリ子葉の破片が0.37g出土している。

クルミ属 *Juglans* L.(図版1-5 a、b)

縄文時代中期の住居跡(H-4、5、6)の床面と焼土(H-7)、土壙(P-3)、壙底直上(P-7)から微細な核果破片が1.01g検出された。核の表面には縦に溝状の浅い模様があり、これらの特徴からオニグルミ *Juglans sieboldiana* Maximである。

冬芽(図版1-6)

縄文時代中期の壙底直上から出土している。詳細な分類は出来なかった。

不明種子

以上述べたもの以外に不明1として堅果類と考えられる細片が0.02g出土している。また、資料の保存状態がきわめて悪く分類出来なかったものを不明2として扱った。

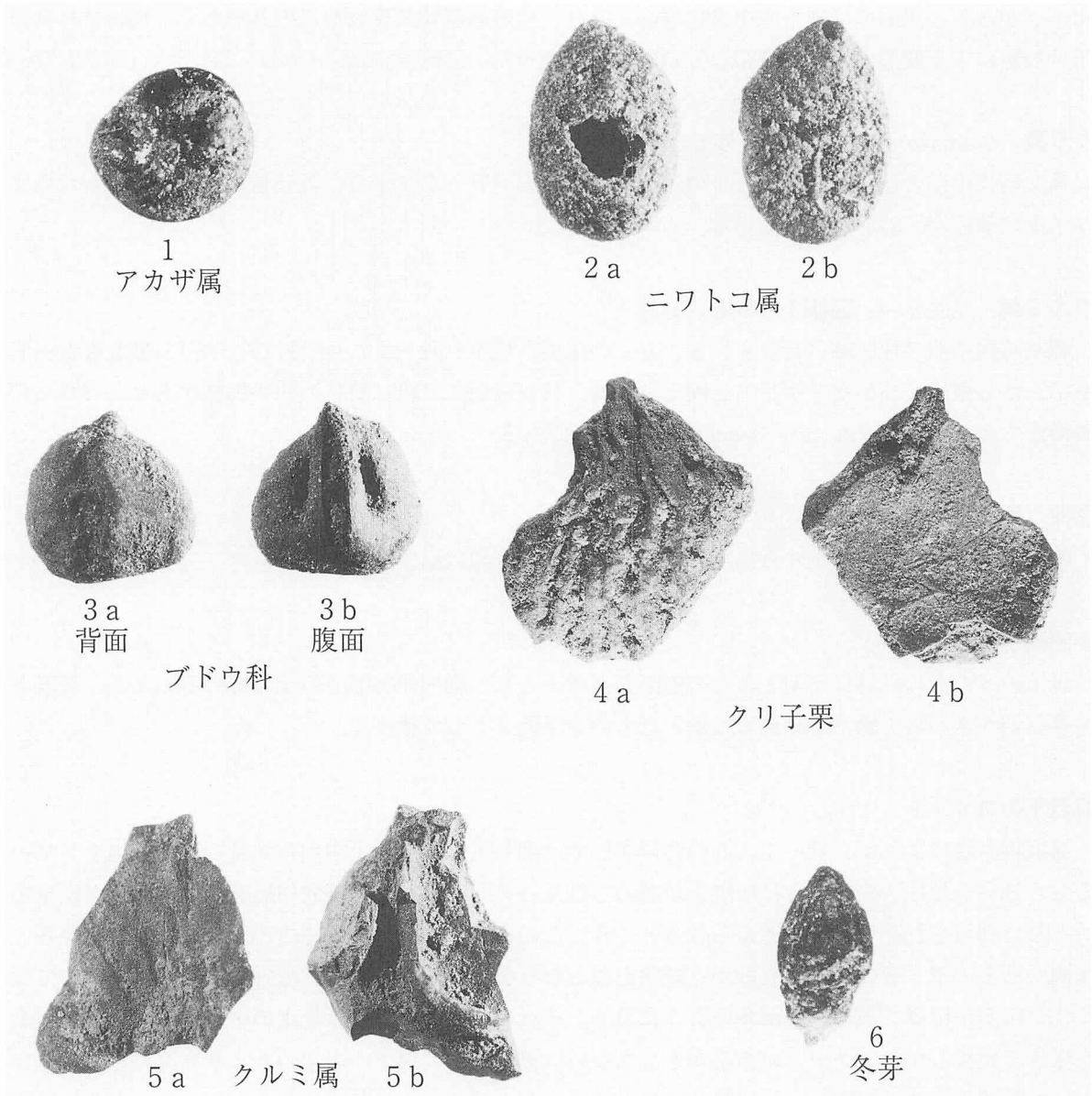
4)若干のコメント

発掘担当者によれば、H-1、5の各号住居では掘り上げ土や覆土中から大量の遺物が出土しているし、H-5号住居の覆土中には焼土が認められたという。これらは竪穴住居廃絶後の窪みが廃棄場所として利用された可能性が考えられるという。このような場合、竪穴住居の床面より廃棄物が多い傾向があるので、その層準にも細かな観察をおこなう必要がある。また、屋外の焼土遺構については年代の確定が困難である場合が多いように思う。それに高温で焼かれた焼土の中には、炭化植物が燃え尽きて残存しがたいケースがあるかもしれない。その場合、焼土の周辺あまり高温にさらされなかった範囲に留意して欲しい。同時に、焼土の中心の土壌に関しては、プラントオパールなどの検討が必要かもしれない。

ニワトコは集落周囲に普遍的にみられる木本。しばしば大量に密集して検出され、酒などの原料ではないか、と言う見解がある。しかし今回はそうした出土状況を示さなかった。微量ではあるがクルミは各遺構から検出されている。クルミの利用方法や処理については、まだはっきりしていない部分がある。多量のクルミを破碎して処理する場合は、屋外で作業が行われる可能性がある。その場合、遺構から散漫に出土するクルミ堅果の細片は、そのごく一部だったのではないか。各地で報告され始めているトチの実の処理場のような住居域以外の廃棄スポットが検出されるかどうか判断の鍵になるかもしれない。

* 札幌国際大学

** 札幌国際大学/吉崎研究室考古植物研究会



表V-2 炭化種子出土表

資料番号	遺構名	層位	時期	アカザ属 (粒)	ニワトコ属 (粒)	ブドウ科 (粒)	クリ属 (g)	クルミ属 (g)	不明1 (g)	不明2 (粒)	冬芽 (粒)
3	H-1 (P-22-a-5)	床	縄文時代中期							1	
4	H-1 (P-22-b-6)	床	縄文時代中期							1	
5	H-1 (P-22-c-3)	床	縄文時代中期							1	
6	H-1 (P-22-d-2)	床	縄文時代中期							2	
7	H-1 (Q-22-a-4)	床	縄文時代中期							2	
8	H-1 (Q-22-d-2)	床	縄文時代中期							4	
9	H-4 (HF-3)	床	縄文時代中期					0.18		1	
12	H-5 (R-21-d-3)	床	縄文時代中期							2	
13	H-5 (R-21-d-1)	床	縄文時代中期								
14	H-5 (R-22-B-4)	床	縄文時代中期					0.02			
15	H-5 (R-22-C-1)	床	縄文時代中期					0.56			
16	H-5 (R-22-d-2)	床	縄文時代中期				0.02				
19	H-5 (HF-1)	焼土	縄文時代中期				0.32			1	
20	H-5 (HF-3)	焼土	縄文時代中期							1	
21	H-6 (P-20-c), No37土器の中	床	縄文時代中期		1					1	
22	H-6 (P-21-a)	床 面直上	縄文時代中期						<0.00		
23	H-6 (P-22-b)	床 面直上	縄文時代中期						<0.00		
24	H-7 (HF-1)	焼土	縄文時代中期								
27	P-1 (H-24-a)	壇底直上	縄文時代中期								
28	P-3 (P-19-c)	覆土中焼土1	縄文時代中期								
29	P-3 (P-19-c)	覆土中焼土2	縄文時代中期					0.08			
32	P-7 (L-22-c)	壇底直上	縄文時代中期					0.13		6	1
34	P-7 (L-22-d)	壇底直上	縄文時代中期						0.01		
35	P-7 (L-23-a)	壇底直上	縄文時代中期	2					0.01	7	1
36	P-7 (L-23-b)	壇底直上	縄文時代中期				0.03	0.04			
37	P-15 土器の中の土	床	縄文時代中期							21	
38	P-17	壇底直上	縄文時代中期?							5	1
41	F-2 (Q-19-C)	焼土	縄文時代中期								
42	F-3 (I-28-d)	焼土	縄文時代	13		1				3	
40	F-1 (K-25-d)	焼土	縄文時代	13						3	
43	F-5 (H-26-c)	焼土	縄文時代	3						1	
合計				31	1	1	0.37	1.01	0.02	63	3

炭化種子

3 放射性炭素年代測定結果

(株)地球科学研究所

^{14}C age(y BP) : ^{14}C 年代“measured radiocarbon age”
試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。半減期はリビーの5568年を用いた。

補正 ^{14}C age (y BP) : 補正 ^{14}C 年代“conventional radiocarbon age”
試料の炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の ^{13}C 値を-25(%)に標準化することによって得られる年代値である。
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

$\delta^{13}\text{C}$ (permil) : 試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)で表現する。

$$\delta^{13}\text{C}(\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ [標準] = 0.0112372である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の測定、サンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース(“INTCAL 98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により約19000 y BPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000 y BP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。
“The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal PB. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a “best fit” compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results.”

測定方法などに関するデータ

測定方法	AMS: 加速器質量分析 Radiometric: 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法
処理・調整・その他	試料の前処理、調整などの情報
前処理	scid-alkali-acid: 酸-アルカリ-酸洗浄 acid washes: 酸洗浄 acid etch: 酸によるエッチング none: 未処理
調整、その他	Bulk-Low Carbon Material: 低濃度有機物処理 Bone Collagen Extraction: 骨、歯などのコラーゲン抽出 Cellulose Extraction: 木材のセルロース抽出 Extended Counting: Radiometricによる測定の際、測定時間を延長する
分析機関	BETA ANALYTIC INC. 4985 SW 74 Court, Miami, FL, U. S. A 33155

試料データ	C14年代 (y BP) (Measured C14 age)	δ 13C (Permil)	補正 C14年代 (y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 163030 試料名 (19320) ND 2 - 1 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material	4380±40	-26.8	4350±40
		acid/alkali/acid	
Beta- 163031 試料名 (19321) ND 2 - 2 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material	4460±40	-28.0	4410±40
		acid/alkali/acid	
Beta- 163032 試料名 (19322) ND 2 - 3 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material	4380±40	-26.4	4360±40
		acid/alkali/acid	
Beta- 163033 試料名 (19323) ND 2 - 4 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material	4450±40	-26.0	4430±40
		acid/alkali/acid	
Beta- 163034 試料名 (19324) ND 2 - 5 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material	4420±40	-27.5	4380±40
		acid/alkali/acid	
Beta- 163035 試料名 (19325) ND 2 - 6 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material	4520±40	-26.0	4500±40
		acid/alkali/acid	

年代値はRCYBP (1950 A. D. を0年とする) で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ (68%確率) である。

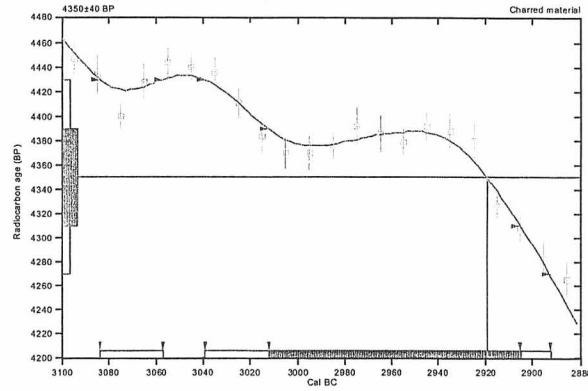
試料データ	C14年代 (y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}\text{C}$ (Permil)	補正 C14年代 (y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 163036	4540±40	-25.2 acid washes	4540±40
試料名 (19326) ND 2-7 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など food residue			
Beta- 163037	4540±40	-24.0 acid washes	4560±40
試料名 (19327) ND 2-8 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など food residue			
Beta- 163038	4880±40	-21.1 acid washes	4940±40
試料名 (19328) ND 2-9 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など food residue			
Beta- 163039	4900±50	-20.8 acid washes	4970±50
試料名 (19329) ND 2-10 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など food residue			
Beta- 163040	4560±40	-24.1 acid washes	4570±40
試料名 (19330) ND 2-11 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など food residue			

表V-3 炭素年代測定一覧

試料名	測定法	遺跡名	採取遺構	推定時期	採取層位	遺物番号	重量 (g)
ND 2-1	AMS	野田生 2 遺跡	H-3	縄文時代中期前半	床	—	1.00
ND 2-2	AMS	野田生 2 遺跡	H-5	縄文時代中期前半	覆土 6 層	2	0.03
ND 2-3	AMS	野田生 2 遺跡	H-6	縄文時代中期前半	床面直上	—	0.01
ND 2-4	AMS	野田生 2 遺跡	P-5	縄文時代中期前半	付属土壘覆土中	9	0.18
ND 2-5	AMS	野田生 2 遺跡	P-25	縄文時代中期前半	覆土 7 層下位	1	0.04
ND 2-6	AMS	野田生 2 遺跡	H-7	縄文時代中期前半	床面出土土器内	3	0.04
ND 2-7	AMS	野田生 2 遺跡	H-6	縄文時代中期前半	床面出土土器附着	38	0.05
ND 2-8	AMS	野田生 2 遺跡	P-3	縄文時代中期前半	覆土上出土土器附着	27	0.03
ND 2-9	AMS	野田生 2 遺跡	P-3	縄文時代中期前半	覆土上出土土器附着	14他	0.04
ND 2-10	AMS	野田生 2 遺跡	P-3	縄文時代中期前半	覆土中出土土器附着	74他	0.03
ND 2-11	AMS	野田生 2 遺跡	P-15	縄文時代中期前半	床出土土器附着	1	0.01

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

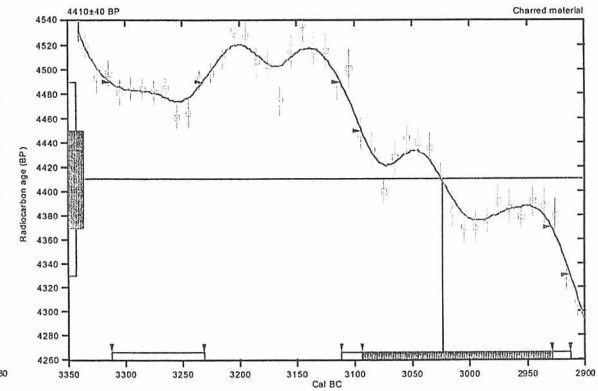
試料名 ND2-1 (Variables: C13/C12=-26.8;lab. mult=1)
 Laboratory number: Beta-163030
 Conventional radiocarbon age: 4350±40 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3080 to 3060 (Cal BP 5030 to 5010) and Cal BC 3040 to 2890 (Cal BP 4990 to 4840)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 2920 (Cal BP 4870)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3010 to 2900 (Cal BP 4960 to 4860)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

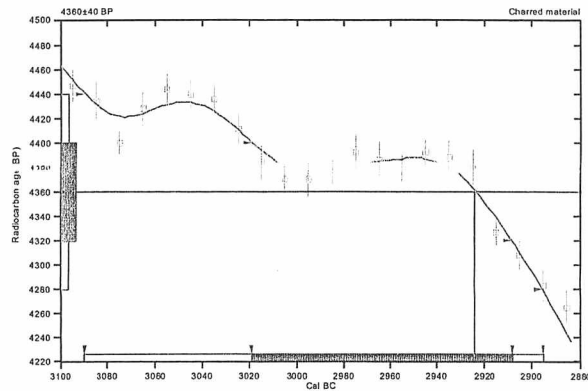
試料名 ND2-2 (Variables: C13/C12=-28;lab. mult=1)
 Laboratory number: Beta-163031
 Conventional radiocarbon age: 4410±40 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3310 to 3230 (Cal BP 5260 to 5180) and Cal BC 3110 to 2910 (Cal BP 5060 to 4860)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3020 (Cal BP 4970)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3090 to 2930 (Cal BP 5040 to 4880)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

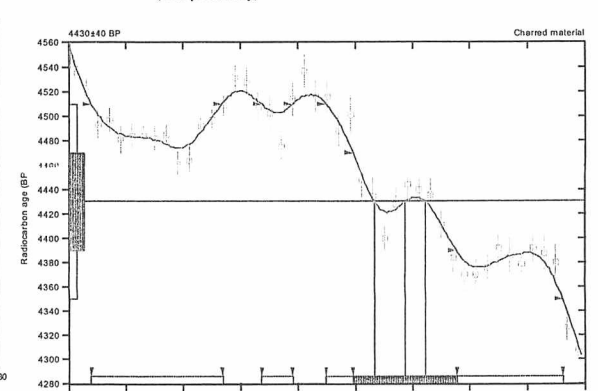
試料名 ND2-3 (Variables: C13/C12=-26.4;lab. mult=1)
 Laboratory number: Beta-163032
 Conventional radiocarbon age: 4360±40 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3090 to 2900 (Cal BP 5040 to 4840)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 2920 (Cal BP 4870)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3020 to 2910 (Cal BP 4970 to 4860)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

試料名 ND2-4 (Variables: C13/C12=-26;lab. mult=1)
 Laboratory number: Beta-163033
 Conventional radiocarbon age: 4430±40 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3330 to 3220 (Cal BP 5280 to 5170) and Cal BC 3180 to 3160 (Cal BP 5130 to 5100) and Cal BC 3130 to 2920 (Cal BP 5080 to 4870)
 Intercept data
 Intercepts of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3080 (Cal BP 5030) and Cal BC 3060 (Cal BP 5010) and Cal BC 3040 (Cal BP 4990)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3100 to 3010 (Cal BP 5050 to 4960)

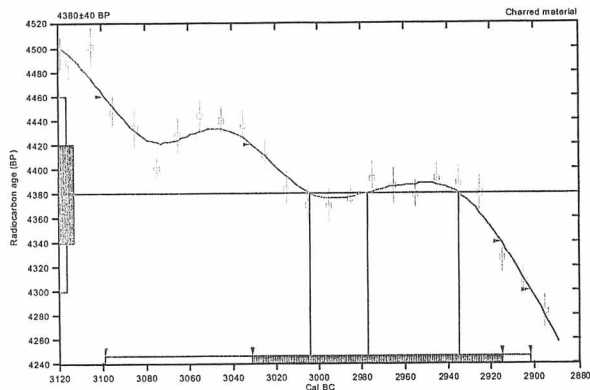


References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

図V-1 放射性炭素年代分析結果(1)

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

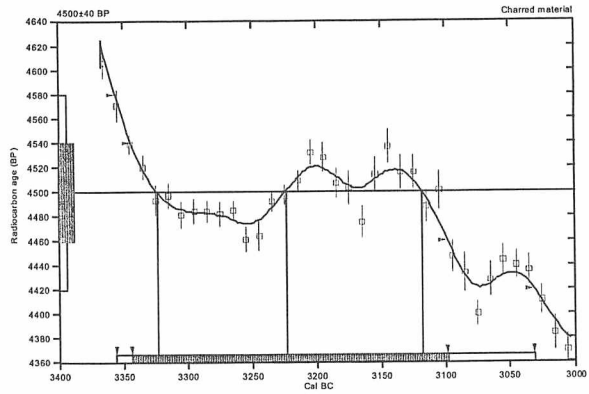
試料名 ND2-5 (Variables: C13/C12=-27.5;lab.mult=1)
 Laboratory number: Beta-163034
 Conventional radiocarbon age: 4380±40 BP
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 3100 to 2900 (Cal BP 5050 to 4850) (95% probability)
 Intercept data
 Intercepts of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3000 (Cal BP 4950) and Cal BC 2980 (Cal BP 4930) and Cal BC 2940 (Cal BP 4880)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3030 to 2920 (Cal BP 4980 to 4860) (68% probability)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

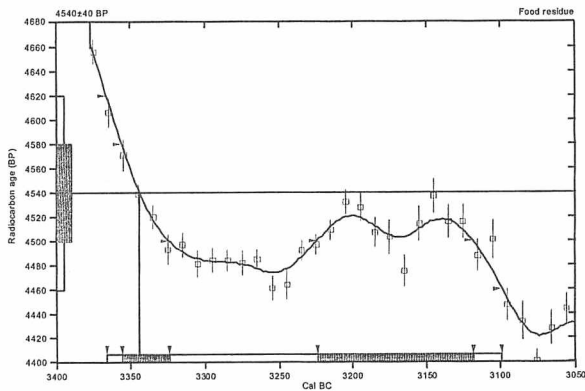
試料名 ND2-6 (Variables: C13/C12=-26;lab.mult=1)
 Laboratory number: Beta-163035
 Conventional radiocarbon age: 4500±40 BP
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 3360 to 3030 (Cal BP 5310 to 4980) (95% probability)
 Intercept data
 Intercepts of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3320 (Cal BP 5270) and Cal BC 3220 (Cal BP 5170) and Cal BC 3120 (Cal BP 5070)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3340 to 3100 (Cal BP 5290 to 5050) (68% probability)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

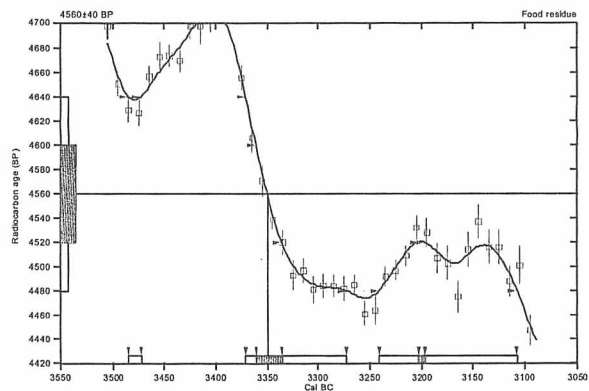
試料名 ND2-7 (Variables: C13/C12=-25.2;lab.mult=1)
 Laboratory number: Beta-163036
 Conventional radiocarbon age: 4540±40 BP
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 3370 to 3100 (Cal BP 5320 to 5050) (95% probability)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3340 (Cal BP 5290)
 1 Sigma calibrated results: Cal BC 3360 to 3320 (Cal BP 5310 to 5270) and Cal BC 3220 to 3120 (Cal BP 5170 to 5070)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

試料名 ND2-8 (Variables: C13/C12=-24;lab.mult=1)
 Laboratory number: Beta-163037
 Conventional radiocarbon age: 4560±40 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3480 to 3470 (Cal BP 5440 to 5420) and Cal BC 3370 to 3270 (Cal BP 5320 to 5220) and Cal BC 3240 to 3110 (Cal BP 5190 to 5060) (95% probability)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3350 (Cal BP 5300)
 1 Sigma calibrated results: Cal BC 3360 to 3340 (Cal BP 5310 to 5290) and Cal BC 3200 to 3200 (Cal BP 5150 to 5150) (68% probability)

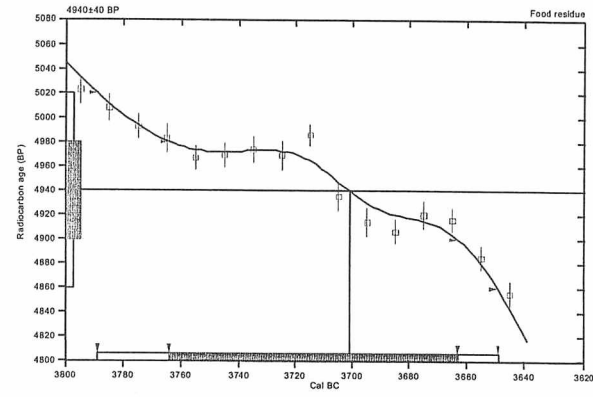


References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

図V-2 放射性炭素年代分析結果(2)

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

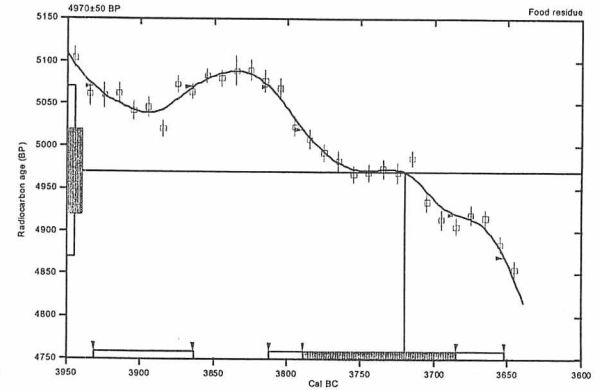
試料名 ND2-9 (Variables: C13/C12=-21.1;lab.mut=1)
 Laboratory number: Beta-163038
 Conventional radiocarbon age: 4940±40 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3790 to 3650 (Cal BP 5740 to 5600) (95% probability)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3700 (Cal BP 5650)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3760 to 3660 (Cal BP 5710 to 5610) (68% probability)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), psii-iii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

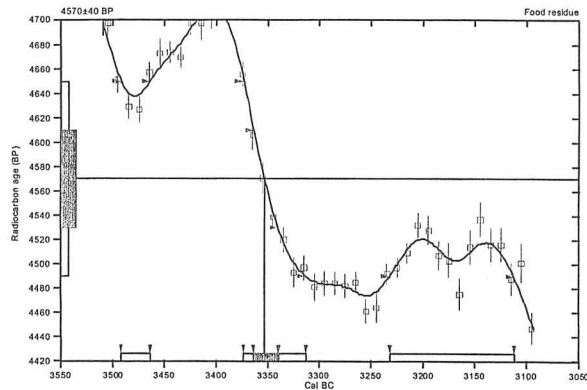
試料名 ND2-10 (Variables: C13/C12=-20.8;lab.mut=1)
 Laboratory number: Beta-163039
 Conventional radiocarbon age: 4970±50 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3930 to 3860 (Cal BP 5880 to 5810) and Cal BC 3810 to 3650 (Cal BP 5760 to 5600) (95% probability)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3720 (Cal BP 5670)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3790 to 3680 (Cal BP 5740 to 5640) (68% probability)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), psii-iii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

試料名 ND2-11 (Variables: C13/C12=-24.1;lab.mut=1)
 Laboratory number: Beta-163040
 Conventional radiocarbon age: 4570±40 BP
 2 Sigma calibrated results: Cal BC 3490 to 3460 (Cal BP 5440 to 5410) and Cal BC 3370 to 3310 (Cal BP 5320 to 5260) and Cal BC 3230 to 3110 (Cal BP 5180 to 5060) (95% probability)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3350 (Cal BP 5300)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3360 to 3340 (Cal BP 5310 to 5290) (68% probability)



References:
 Database used
 Calibration Database
 Editorial Comment
 Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), psii-iii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

図V-3 放射性炭素年代分析結果(3)

VI まとめ

1 遺構について

野田生2遺跡では2カ年にわたる発掘調査の結果、住居跡7軒、土墳墓5基、土壇29基、焼土13カ所、フレイク・チップ集中域1カ所、柱穴状小土壇24基を検出した。これらはほぼ三つの時期に属している。一つは縄文時代後北C₁式の段階のもので、もう一つは縄文時代中期前半、サイベ沢Ⅶ式～見晴町式に相当するもの。および縄文時代後期初頭、大津式の時期のものである。これらのうち本遺跡の主体を占める縄文時代中期前半の遺構について補足して説明しておきたい

(1)住居跡について

住居跡7軒のうち上記の時期に該当するものはH-1～3・5～7の6軒である。そのうち出土遺物などから時期が限定できるものはH-2、3を除く5軒である。中でも最も古いものは円筒上層b式新段階もしくはサイベ沢Ⅶ式古段階の古手に相当するH-7、ついでサイベ沢Ⅶ式古段階に相当するものにH-1、最も新しいものは見晴町式に相当するものでH-5、6の2軒である。

これらの住居の平面形は、長楕円形(H-7)、概ね楕円形(H-1、5)、不整形(H-6)、不整形(H-3)の4種があり、概ね時期差と重なっている。

H-3については中期前半の住居跡の中で異なった平面形を持つものである。このことはH-3の覆土中から石棒が出土していること、規模に比して焼土が多く検出され、それに伴う炭化物も多く出土していること、2対の柱穴が2度立て替えられた可能性があるなどの特殊な状況を反映しているためと考えられる。

なお、このH-3の床面から出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果は¹⁴C補正年代で4350±40 y.B.P.であり、近隣の土墳墓であるP-25から出土した炭化物(4380±40 y.B.P.)と近似した値を示している。このことからH-3は近接する土墳墓群と同時期に存在し、埋葬に関わる施設であった可能性もある。

(2)土墳墓について

検出された6基の土墳墓のうち埋設土器であるP-15を除く5基は調査区東部、沢に向かって張り出した部分に集中して検出されている。これらの土墳墓はすべてが縄文時代中期前半、見晴町式の時期のものと思われるものである。土墳墓は長軸方向や配列に関しての規則性は認められないが、規模や副葬品についてみると、以下の4つの区分がある。

- ①長軸が1 m20cmを越える比較的大きなもの(P-4、6、7) / 1 m以下の小さなもの(P-25、32)
- ②2点の礫石器もしくは大きな礫が墳口に副葬されるもの(P-4、6、25) / 土器が副葬されるもの(7、32)
- ③焼土が覆土中から検出されるもの(P-6、7) / されないもの(4、25、32)
- ④覆土の上位から石鏃が複数出土しているもの(P-6、32) / 出土しないもの(4、7、25)

これらの相反する特徴は、5基の土墳墓で全て同じ特徴を共有することがない。数が少なく、類例も見当たらないため、断定できないがこれらの特徴は何らかの意図をもって区別されたことを示唆する可能性がある。

(3)フラスコピットについて

検出された2基のフラスコピットはいくつかの共通点を持っている。壁は全周し、角度は急で直立もしくはオーバーハングするが、北東部の壁は緩やかであること。また覆土中位以下が埋め戻しとみ

られる汚れた土の堆積であること。加えて、規模は若干異なるが、壙底から小土壙もしくは落ち込みが検出されていることである。これに対し、両者の間で遺物の出土量には際立った違いがある。P-3の覆土中からは12個体の復原可能な土器のほか、たたき石や半円状扁平打製石器などの礫石器が多く出土し、土器を含めた遺物総点数は845点である。一方、P-5は非常に少なく、覆土から剥片石器が4点、土器片などの総点数は8点である。これらのフラスコピットは堆積状況、形態の類似から同様の機能のために作られていることが推測される。そして覆土中の遺物量の差は、P-3が機能後に廃棄場所として利用されたことを示すものであり、P-5がサイベ沢Ⅶ式古段階の住居跡H-1より新しいことも考慮に入れると、P-3がサイベ沢Ⅶ式古段階に役目を終え、P-5はサイベ沢Ⅶ式新段階～見晴町式の時期に機能していたものと考えられる。

(4) A類土壙について

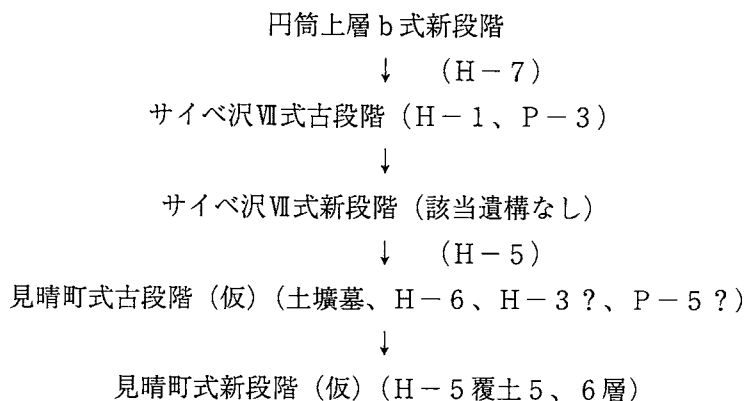
検出された29基の土壙のうち4基（P-13、21、24、30）は、石器や剥片が埋納されたかのような出土状態を呈する一群の土壙である。それらの壙底面もしくは平面形はいずれも直径50～80cm程度の円形を呈し、壙底付近には暗褐色土もしくは黒褐色土中にV層起源とみられる黄褐色土が混じる埋め戻し土の堆積がある。さらにP-21、24、30については北海道式石冠が壙底から出土するというもう一つの共通する特徴がある。なおP-13についてはこれら3基の土壙とは異質な点があり、項を改めて考察してある。

前述した特徴を持つ類例は2遺跡で認められた。泊村へロカルウス遺跡E地点の17号土壙（田部1997）は壙底から北海道式石冠の未成品が1点、半円状扁平打製石器1点が出土し、覆土も2層とする下位は炭化物と黄褐色土の混じる暗褐色土である。また、長万部町オバルベツ2遺跡P-55（佐藤ほか2001）は壙底から使用面を下にした北海道式石冠が1点出土し、覆土もローム粒子が混じる土である。同遺跡のP-56も、平面形はやや楕円形であるが同様な例と考えられる。

全ての例をみると、出土した北海道式石冠は未成品もしくは使用可能な成品であることが多い。このことは破損品として出土する包含層でのあり方とは異なっており、特徴の一つといえる。さらに言えば推論ではあるが北海道式石冠の製作または使用にこの形状の土壙が関わっていた可能性を示すものと考えられる。

(5) 縄文時代中期前半期の遺構の変遷

野田生2遺跡の縄文時代中期前半の遺構は以下のように変遷する。



このことから、野田生2遺跡では調査した範囲に限定されるが、上記の各時期につき1軒、または2軒の住居を単位としていたこと、また見晴町式の古い段階に住居から南西側約10m離れた位置に墓域を形成していたこと、そしてサイベ沢Ⅶ式新段階の時期に一時この場所が利用されなかった事が調査を通じて明らかにできたと考えている。

(立田)

2 土器について

(1) 縄文時代早期前半の土器について

本遺跡のⅠ群a類土器は刻み目のある貼付帯を特徴とし、条痕文・無文土器が主体的に伴う一群の土器である。貼付帯の文様に加え3条一組の浅い沈線で縦位と斜めの組み合わせで文様を描くもの(図Ⅳ-4-6)、貼付帯のみのも(図Ⅳ-2-5)、貼付帯がなく浅い条痕様の沈線で文様を描くものがある(図Ⅳ-2-1)。沈線文のものはあまり多くはないが、破片資料には横走沈線文のものがある。また、絡条体圧痕文の施文されたものは認められない。器形は胴部が僅かに膨らむ深鉢形で、平縁のもの、4か所に山形突起のあるものや小さな波頂部のある波状口縁があり、30cmを超える大型のもの、10cmに満たない小型のもの、その中間の大きさのものがある。小型のものには直線的に立ち上がる器形のものも認められる(図Ⅳ-2-2・3)。大半のものは内外面に、主に横方向に条痕文があるが、これは文様ではなく器面の調整痕とみられる。一部に横位の沈線文の効果を意識して残されている(図Ⅳ-4-6)が、器(外)面では削りなどで調整により消されていることが多く、とくに底部周辺は顕著で、平滑に調整されるのみみられる。条痕の原体は幅10~15mm前後のもので、条痕の条の幅は一定ではない。中には原体の端がまっすぐに切断されているものが認められる。観察した限りでは原体に貝殻を使用したと推定されるものはない。豊頃町高木1遺跡で指摘されているように「貝殻のように幅の一定ではない、つまり年輪のように幅が一樣でないものを施文具として」(平川1989)用いられたと考えられる。この他の特徴として肉眼観察ではあるが、胎土に海綿骨針の混入するものが比較的多くある。これらはほぼ同一時期のものと考えてよい資料で、アルトリ式とみなされるものである。八雲町内ではこの時期のまとまった資料は浜松2遺跡(三浦・柴田1991)と山崎4遺跡(北埋調報162)等で得られている。

浜松2遺跡では貼付帯と沈線文に特色のある土器群(Ⅰ群a類)と絡条体圧痕文で文様が構成される土器群(Ⅰ群b類)が報告されている(三浦・柴田1991)。浜松2・Ⅰ群a類は貼付帯の文様は共通するが、縦位、横位の沈線文での文様構成、貼付帯上への絡条体圧痕文の施文、また刺突文が多用されること等、野田生2遺跡のものとは異なる要素が多くあり、これらは本遺跡のものよりも新しい段階と考えられる。また、浜松2・Ⅰ群b類は文様構成、器形等から浦幌式に関連するものといえる。報告では口唇部の形状、施文、内面の貝殻条痕文の有無等、浦幌式と異なる点が指摘されているが、これらはアルトリ式の中で最も新しい段階に位置付けられよう。プユウヒ川をはさんで浜松2遺跡の対岸にあるコタン温泉遺跡においても、少量ながら口縁部に斜めの貼付帯があり絡条体圧痕文が複数施文された資料等が報告されている。胴部は横走する沈線文のようである(三浦・柴田1992)。

山崎4遺跡では平成12年度の調査で、D地区から住居跡3軒、C地区から柱穴で構成される建物跡、焼土等が検出されている(北埋調報162)。住居跡出土の土器には細い貼付帯のある波状口縁のもの(H-9)と貼付帯のないものがあり(H-10)、いずれも縦方向の粗い条痕様の沈線文が特徴的で、前者では胴下半部に横位方向にも認められる。ほかに貼付帯が複数めぐらされるものがあり、貼付帯上やその間に絡条体圧痕文を施す資料が1例報告されている。縦横の沈線文、刺突文の施されるものがあり、条痕文には貝殻によるものがある。底部が「く」の字状に外にはみ出すものも認められる。貝殻背面の押引文、腹縁圧痕文のある古い段階とみられるものもあるが、浜松2・Ⅰ群a類に共通する要素を見出すことができる。また、南側に隣接してある山崎1遺跡には斜位、格子目の沈線文に特色のある土器(三浦1984)が、沢をはさんで北側にある山崎5遺跡には条痕文・無文の小型の平底

土器がある(北埋調報 165)。ほかにシラリカ 2 遺跡には条痕文のある平底の底部が出土している(北埋調報 142)。これら 3 遺跡には貼付帯のある土器は伴っていないが、アルトリ式のある段階、あるいはその前後の時期に伴うものであろう。

次に、アルトリ式よりも古い段階の貝殻文、条痕文・沈線文の尖底あるいは平底土器の時期の資料を見ていくこととする。八雲町内ではこれらの時期のものはそれほど多くはないが、ここ数年の縦貫自動車道建設関連の調査で、少しずつ資料が増加している。

物見台式期のものは町内遺跡で最も標高の低い(10~11m)砂楽部川の扇状地に所在する八雲 3 遺跡から良好な資料が得られている(三浦 1990)。口縁部に押捺される貝殻腹縁文と刺突文、沈線文を特徴とする資料とともに有珠川 2 遺跡下層や静内町中野台地 B 遺跡の資料に対比される押引文の土器と円孔文の土器が伴っている。山崎 1 遺跡ではキャリパー形の器形、貝殻腹縁圧痕文を特徴とする物見台式が報告されている(三浦 1984)。また、山崎 5 遺跡では横位にめぐらされる貝殻腹縁圧痕文と鋸歯状沈線および刺突列が施される住吉町式に相当する平縁の土器と沈線文が描かれた尖底部が出土している(北埋調報 167)。このほか断片的ではあるが、栄浜 1 遺跡では住居跡覆土中に無文の尖底部および包含層には波状沈線文と口唇部に刻みのある住吉町式かと見られる口縁部が(柴田 1995)、大新遺跡には貝殻腹縁文、内外面に貝殻条痕文のある胴部破片がある(柴田 1997)。

平成12年度・13年度当センターで調査したボンシラリカ 1 遺跡には、尖底、平底かの判別はつかない資料であるが、沈線で菱形の文様を描き、縦位の貝殻腹縁文を特徴とする静内町駒場 7 遺跡の駒場式(古原 1982)、あるいは住吉町に相当するものがある(北埋調報 155)。また、黒岩 3 遺跡ではほぼ一か所から集中して検出された土器は尖底の存在も予想されているが、確実に報告されているのは平底のもので、出土状況からほぼ同時期のものと見られる(北埋調報 155)。これらは沈線で文様を描くものは多くないが波状の口縁部に貝殻腹縁の圧痕のあるもの、貝殻押引文、条痕で菱形を描く文様のもの、平底の底部に縦位の貝殻腹縁文のあるもの等で構成される。駒場式に関連するかともみられるけれど、角形の口唇断面、条痕文での文様等から、駒場式よりも古い時期に属するものと捉えておきたい。

虎杖浜式の資料はボンシラリカ 1 遺跡で横位の貝殻腹縁文のある資料が報告されている。また、同遺跡には虎杖浜式に後出し、アルトリ式に先行すると考えられる横走る沈線文と刺突文を特徴とする資料が、また平成13年度、当センターで調査を行った栄浜 1 遺跡には横走る貝殻条痕文のある同様の関連資料がある(北埋調報 175)。これらは芦別市滝里 4 遺跡で住居跡に伴って出土した資料(北埋調報 94・98)や、奥尻町青苗遺跡 E 地区の資料(木村 1998)等に対比され、従来から知られていた十勝地方の下頃部式や清水町上清水 2 遺跡(北埋調報 76)の資料、釧路市北斗遺跡第 1 地点(西 1993)の資料に相当するもので、石狩、後志地域にもあり、ほぼ全道的に分布するとみられる。

以上、町内の遺跡から出土した早期前半の土器を概括したが、このようにみていくと野田生 2 遺跡の資料には体部に横走沈線を意識した条痕文、口縁部文様帯には 3 条一組の浅い沈線で縦位と斜め組み合わせて文様を描くといった前段階からの要素を引き継ぐものがあり(図 IV-2-5)、また絡条体圧痕文のものが存在しないことから、アルトリ式のなかでも古い段階の様相を呈するものと考えてよいであろう。

八雲地域ではアルトリ式以前にボンシラリカ 1 遺跡の虎杖浜式、ついでボンシラリカ 1 遺跡、栄浜 1 遺跡の横走沈線文を特徴とする土器群があり、野田生 2 遺跡のアルトリ式の後に浜松 2 遺跡・I 群 a 類、山崎 4 遺跡の資料が、そしてアルトリ式の最末期には浜松 2 遺跡の I 群 b 類が位置付けられることが想定される。

(遠藤)

(2)縄文時代中期前半の土器について

本遺跡では、土壌P-33の覆土からとB地区の試掘調査の際に円筒土器上層b式が出土しているが、主体となるものはサイベ沢Ⅶ式から見晴町式にかけての土器である。

これらの中ではサイベ沢Ⅶ式古段階（立田 2002）に相当するものが多い。器形は、底部がほぼ垂直か若干外側に張り出し、胴部はややふくらみ、外反する口縁部の4箇所突起をもつ。結束第1種羽状縄文や結束第2種斜行縄文が底部付近の無文部を除いて全面に施され、口唇には燃糸や縄の圧痕、刻み目の加えられたものもある。文様に(1)台形状の突起をもち、口唇直下から胴部にかけて細い粘土紐の貼り付けられ、文様帯が形成されたものと、(2)台形状や棒状の突起をもち、縄文のみのものがある。(1)の貼付帯には燃糸の圧痕の加えられたものと素文（図Ⅳ-6-5、図Ⅳ-8-35等）のものがある。文様の主なモチーフは弧線で、それらが突起の下に垂下した粘土紐と胴部を横走る粘土紐で区画されたもの（図Ⅲ-45-1、図Ⅲ-59-1）もみられる。(2)では2種類の突起が向かい合う位置に施されたものや、突起の下に貼付帯や瘤状の貼り付けの加えられたものがある。遺構では竪穴住居H-7の床面（図Ⅲ-39-7）やフラスコ・ピットP-3の覆土（図Ⅲ-59-1～図Ⅲ-61-11）、H-1・5掘上土（図Ⅲ-45-1～4）等から出土している。H-7の土器は器形や文様等からみて他の遺構の土器よりも若干古い時期に属する可能性がある。

竪穴住居H-5から出土した土器（図Ⅲ-25-10）は複節の斜行縄文が施され、突起には横位の沈線が加えられている。H-6の床面出土の土器（図Ⅲ-32-1）は肥厚する山形の突起をもち、突起の部分には円形や紐状の粘土が貼り付けられている。土壌墓P-7・15に伴う土器（図Ⅲ-53-1、図Ⅲ-56-1）は、山形の突起が4箇所にあり、底部は張り出すものと張り出さないものがある。文様は、斜行縄文の施されたものと無文のものがある。これらは「見晴町的傾向」（立田 2002）をもつもので、サイベ沢Ⅶ式新段階の中でも新しい様相を示すと考えられるが、高橋がサイベ沢Ⅶ式の特徴とした「2・3本組の沈線で凸レンズ、弧状を描く」（高橋 1981）土器が伴っていない点には注意すべきだろう。

見晴町式土器（広田 2001、佐藤 2001、立田 2002）はH-5の覆土（図Ⅲ-23-1、図Ⅲ-24-2・3）、土壌墓P-6（図Ⅲ-51-1・3）や包含層から出土している。胴部はサイベ沢Ⅶ式よりもゆるやかに立ち上がり、大きくふくらむものもある。口縁の断面は三角形で、4箇所または3箇所に山形の突起をもつ。口唇には縄端の圧痕や縄文の施されたものもある。器面には斜行縄文が施されている。文様は(1)2本一組の沈線で縦位や弧線状に描かれたもの（図Ⅲ-24-3等）、(2)突起に粘土紐の貼り付けが加えられたもの（図Ⅲ-23-1、図Ⅲ-24-2等）、(3)口唇直下に縦位の縄の圧痕が加えられたもの（図Ⅳ-9-56）がある。(1)の縦位の沈線には突起の下に垂下し、文様帯を区画するもの（図Ⅲ-24-3）があるが、これはサイベ沢Ⅶ式の伝統をひくものと考えられる。(2)でうずまき状の貼り付けをもち、肥厚した口唇に沈線の加えられたもの（図Ⅲ-23-1等）は大木8a式併行に位置づけることができる。

本遺跡の東側に沢を隔てて隣接する野田生4遺跡では、サイベ沢Ⅶ式から見晴町式にかけての土器が遺構に伴って出土しており、それらの中には本遺跡で欠落した、沈線による文様の施されたものもみられる（財北海道埋蔵文化財センター編 2002c）。また、本遺跡の西側に位置する野田生1遺跡（財北海道埋蔵文化財センター編 2002e）では、調査担当者によれば、円筒土器上層b式から大安在B式にいたる土器が時期によって出土点数に増減はあるがとぎれることなく出土しているという。このような状況は、縄文中期前半に野田生地区の海岸段丘上を生活の場にしてきた人々が主となる居住域や墓域を時期によって移動させていたことを想定させるものである（註1）。

今後は、野田生地区における土器の器形、文様、器種構成についてより細かい分析を行う中で、渡島半島内で小地域差が存在したかという問題も含めて、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式の細分や大木系の土器の影響についてさらに考えたい。

註1 この移動は酒屋川と弥之助沢川の間にはさまれた山越地区の段丘上の遺跡を含めて行われていたかもしれない。

(3)後北C₁式について

本遺跡から出土した後北C₁式の器種は深鉢形のみである。器形は倒鐘形が多いが、口縁部が内彎するもの(図Ⅳ-12-3)もある。文様には以下のものがある。

(1)横走る縄文とそれを縁取る沈線によって構成されたもの(図Ⅳ-13-9、16~18)

(2)横走る縄文の施されたもの(図Ⅳ-13-11~13)

(3)横走る縄文を地として隆起線が施されたもの

(3)は①垂下する隆起線の上に斜位の隆起線で菱形等の文様が描かれたもの(図Ⅳ-12-1)と②横位や弧線状の隆起線が配されたもの(図Ⅳ-12-2~6、図Ⅳ-13-22~30)がある。①は文様にゆがみが大きい。②の隆起線の中にはメガネ状になったもの(図Ⅳ-12-3~5、22・26)もある。

これらの出土した位置にずれや偏りは認められず、同じ時期のものとしてとらえたい。

(1)~(3)に類似した土器は七飯町聖山遺跡(吉崎ほか編 1979)、七飯町上藤城3遺跡(横山編 2000)、青森市小牧野遺跡(青森市教育委員会編 1998)から出土している。(3)のような文様の施された土器は八雲町内では山越2遺跡(柴田 1988)、台の上遺跡(三浦 1987)、栄浜1遺跡(柴田 1988・1991b)等に例がある。

(1)のうち、沈線による文様帯の区画は瀬棚町南川遺跡の第Ⅳ群土器(高橋ほか 1976、上野ほか 1983)に由来する要素であろう(石本 1984)。恵山式土器を用いていた人々が後北式土器を受け入れていく過程で現れた現象の一つと考えてもよいのではないだろうか(註1)。

本遺跡の後北C₁式は胎土に小礫や砂粒を含むが、海綿骨針を含むものはほとんど認められなかった。本遺跡から約1km東に位置する野田生5遺跡では南川Ⅳ群に相当する恵山式土器や後北B式土器が出土しており、それらはどちらも約半数のもの胎土に海綿骨針が含まれていた(中田 2001)。また、台の上遺跡(八雲町教育委員会編 1987)から出土した後北C₁式、C₂・D式土器を実見したところ、それらの胎土には海綿骨針を含むものと含まないものがあった。海綿骨針の有無は、時期や遺跡によって、あるいは同じ遺跡内でもいくつかの異なる胎土が用いられていたことを示す指標といえよう。(中田)

註1 ただし、このような土器は余市町フゴッペ洞窟(名取編 1970)、江別市後藤遺跡(市立旭川郷土博物館編 1976)、浦幌町十勝太若月遺跡(石橋ほか 1975)等からも出土しており(大沼 1982)、道南地方以南の地域色としてのみ位置づけることは適当ではないだろう。

(4)縄文時代中期前半の土器と放射性炭素年代について

野田生2遺跡では、遺構から出土した土器の表面の炭化物、また出土した炭化材の計11点について放射性炭素年代測定を行った。結果は第V章3と本文中に述べたとおりである。

今回の調査で、遺構からⅢ群a類土器の良好な一括資料が出土し、筆者が先に八雲町山越3遺跡の調査において述べた、放射性炭素年代測定と土器の編年関係（北埋調報166）について、土器のセット関係から新たな知見が得られたのでここで補足しておきたい。

1) 野田生2遺跡における一括資料について

野田生2遺跡のⅢ群土器は点数にして11,999点出土し、復原できた個体は53個体であった。これらの中で、「同一遺構内でⅢ群a類土器が複数個体復原できた場合において、拓本資料中にもその他の時期の資料が混じらない」（北埋調報 166）とした、「一括資料」に相当するもの、または概ねあてはまるものは2つ挙げることができる。

- ① フラスコピットP-3覆土出土土器
- ② 住居跡H-5覆土5、6層出土土器

①は覆土上・中位から出土した11個体の復原土器である。これらの土器は、器形は台形突起がつくものと平縁に2種2対の小突起がつくものの2種があり、文様は撚糸の圧痕のついた細い粘土紐による文様がつけられるもの、または無文の粘土紐によるもの、あるいは地文のみのものがある。地文は結束第1種羽状縄文、もしくは結節のある縄文が施されており、地文と粘土紐との先後関係は地文が先に施文される。これらの特徴は高橋正勝氏のいうサイベ沢Ⅶ式と、狭義のサイベ沢Ⅶa式のものであり、資料①は、これらが混在する状況を呈するサイベ沢Ⅶ式古段階の比較的良好な資料といえる。同段階には函館市桔梗2遺跡H-14出土資料（北埋調報 46）が挙げられる。

②は覆土5、6層から2ヵ所の土器集中として出土した3個体である。3つの山形突起がつき、口唇に沿ってやや太い沈線がめぐるもの、また山形突起付近にのみ無文の細い粘土紐により装飾される土器計2個体と、沈線文が施されるサイベ沢Ⅶ式1個体である。

これらは見晴町式の中でも新しいものとみられる。同段階の良好な資料は少ないが、上ノ国町小岱遺跡、H-9a出土土器（北埋調報 30）が挙げられる。

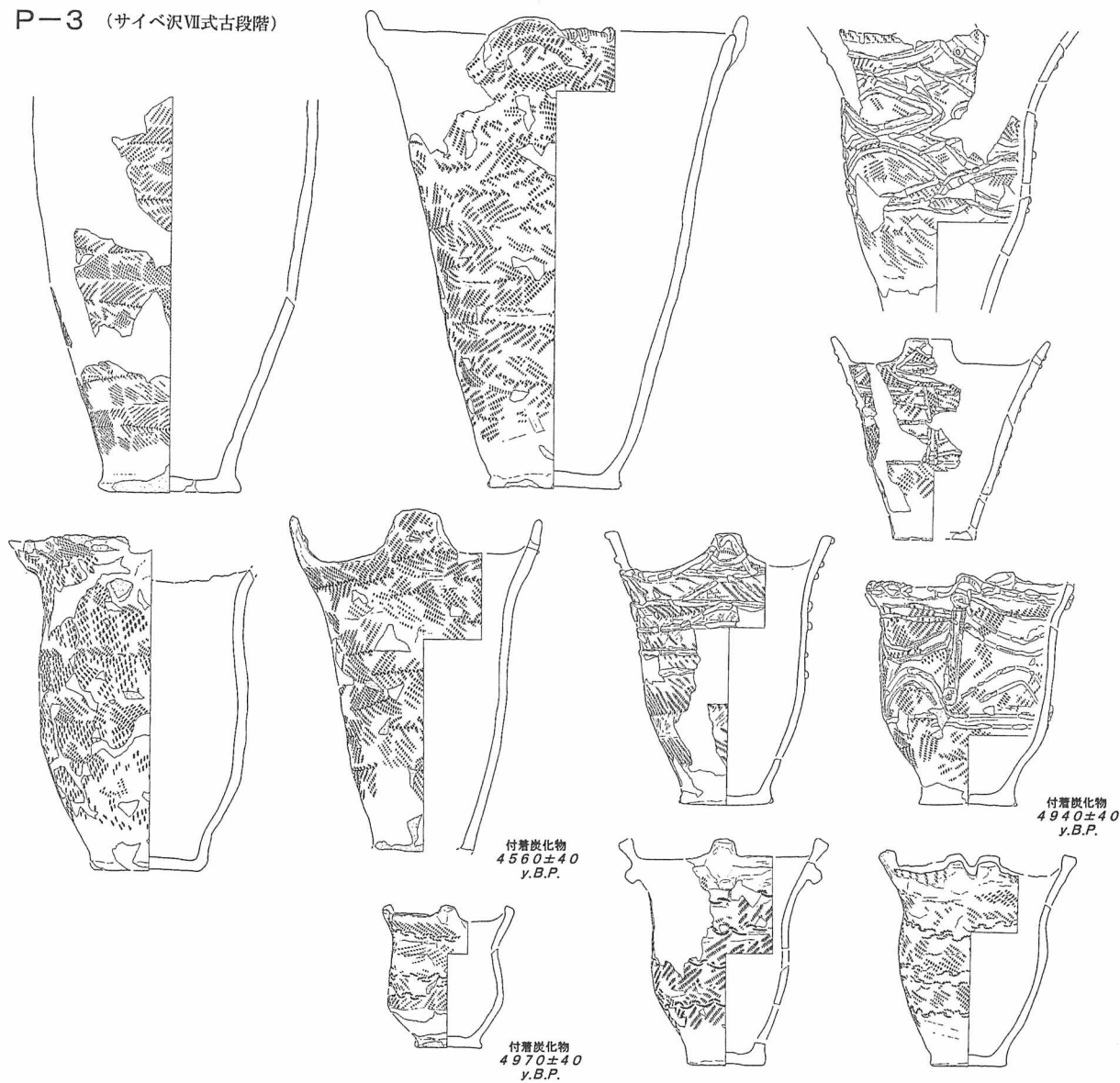
2) 炭素年代との比較

この①、②の一括資料のうち、①に関しては図Ⅲ-59~61-1、2、11の3点（図Ⅵ-1）の土器表面についた炭化物を分析した結果、1は 4940 ± 40 、2は 4560 ± 40 、11は 4970 ± 50 y. B. P.の値が得られた。これらの値は1と11については4960年付近にまとまりが見られるが、これは縄文前期に属する年代であり、かなり古手に振れている。もう一方の4560年もやや古いがおおむね円筒上層b式新段階~サイベ沢Ⅶ式古段階の年代とみることができる。土器表面の炭化物は海洋性の動物食料を煮炊きした場合、古く年代が出ることが多いらしく（辻・中村 2001）、山越3遺跡の同時期の土器（サイベ沢Ⅶ式）の年代も 4910 ± 40 y. B. P. (Beta-160076)であったことと関連するとみられる。しかし両者とも4900年代の近似した値であることは興味深いことである。

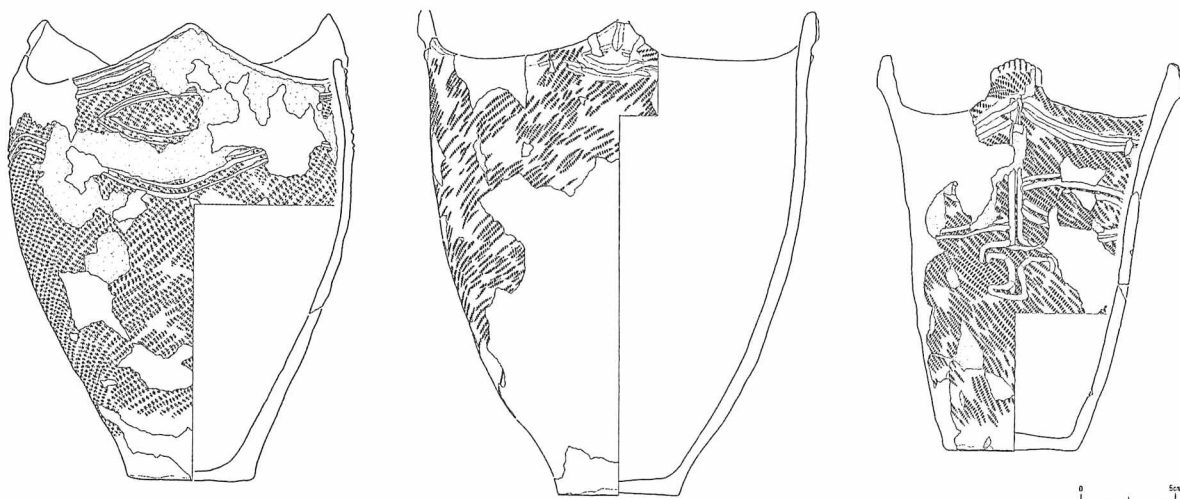
②については同一層位から出土した炭化物1点について測定した。こちらの値は 4410 ± 40 y. B. P.の値が得られており、こちらやや古く出ているが、概ね妥当な見晴町式の年代が得られているといえる。

今回分析に出した遺構の炭化物の年代は上記の4900年代になるものを除くと概ね二つの近似する値に分かれていると思われる。4500~4570 y. B. P.にあたるものはH-6、P-15、P-3土器付着、H-7床面出土土器内炭化物で、もう一つは4430~4350 y. B. P.にあたるものでH-3床面、H-5

P-3 (サイベ沢VII式古段階)



H-5、覆土5・6層 (見晴町式(新)段階) 同一層出土炭化物 4470±40 y.B.P.



図VI-1 野田生2遺跡 III群土器一括資料

覆土6層、H-6床面直上、P-5付属土壙覆土の炭化材の年代がそれにあたる。これら非常に大まかではあるが前者がサイベ沢Ⅶ式古段階もしくは円筒上層b式新段階、後者が見晴町式に相当するといえる。

本遺跡のⅢ群a類土器についてはサイベ沢Ⅶ式新段階の資料が欠落することが中田により指摘されている(Ⅵ章-2参照)が、これら2つの値の開きは、サイベ沢Ⅶ式新段階の時期に断絶があることが放射性炭素分析からも言える可能性がある。

野田生2遺跡の東側、無名の沢を挟んで200m程離れた地点に野田生4遺跡がある。サイベ沢Ⅶ式から見晴町の時期の遺跡であり、放射線炭素年代分析を行っている。これらの資料にはフローテーション作業によって得られた炭化種子が多くあり、本遺跡の分析例より実際に近い年代が出ていると思われる。それによると補正炭素年代で4460~4500±40 y. B. P.の値が得られており(北埋調報 171)、ちょうど野田生2遺跡の年代の開きを埋めるものである。

特に野田生4遺跡H-2の出土土器は若干の混入があるもののサイベ沢Ⅶ式新段階の資料と見られ、炭素年代は床面の炉跡出土のクルミ殻に対し、4460 y. B. P. ±40の値が出ている。

野田生2遺跡で欠落しているサイベ沢Ⅶ式新段階の生活の痕跡を、野田生4遺跡のH-2にもとめることは、炭素年代からもその可能性を指摘できるのではないだろうか。

これらのことから筆者が設定した円筒上層b式~見晴町式の土器編年は概ね妥当であり、遺跡周辺ではこれらを単位とした期間毎に居住場所を移動している様子が幾分明らかになったように思う。ただし補正された放射性炭素年代は筆者の区分より数十年の誤差がある。炭素分析自体の誤差も勘案したうえで、円筒上層b式とサイベ沢Ⅶ式の区分とした4500年、サイベ沢Ⅶ式と見晴町式の区分とした4400年にそれぞれ±50年の幅を持たせる必要もあると考えている。

また②の資料によって見晴町式も細分の可能性があることになり、この点に関しても地域性も考慮に入れて検討していきたい。

(立田)

3 石器について

(1) P-13と玄武岩製両面調整石器について

P-13は調査区北東側の緩斜面に位置し、平面形は壙口が楕円形、壙底は円形を呈し、平坦であり壁は急に立ち上がっている。時期は検出面、また縄文時代早期に相当する火山灰である駒ヶ岳火山灰g層(Ko-g)を切って構築されること、周囲で出土する遺物から縄文時代中期前半のものである可能性が高い。

本遺構の覆土3層から玄武岩製両面調整石器3点、石槍1点、スクレイパー2点、Rフレイク7点、Uフレイク2点の他フレイク71点が一括して出土している。これらは埋め戻しとみられる覆土の状態、石器の長軸が概ね北西-南東方向にそろっているという、あたかも置かれたような出土状態から埋納されたとみられるものである。

この一括出土遺物について、また推測される遺構の製作意図について述べる。

1) 玄武岩製両面調整石器について

3点の両面調整石器は玄武岩で作られており、うち2点は棍棒状、1点は張り出した部分のある台形状に加工されている。いずれも加工は荒く、側縁の稜線はジグザグである。また全ての石器の一部に原石面とみられる風化部分が残っている。

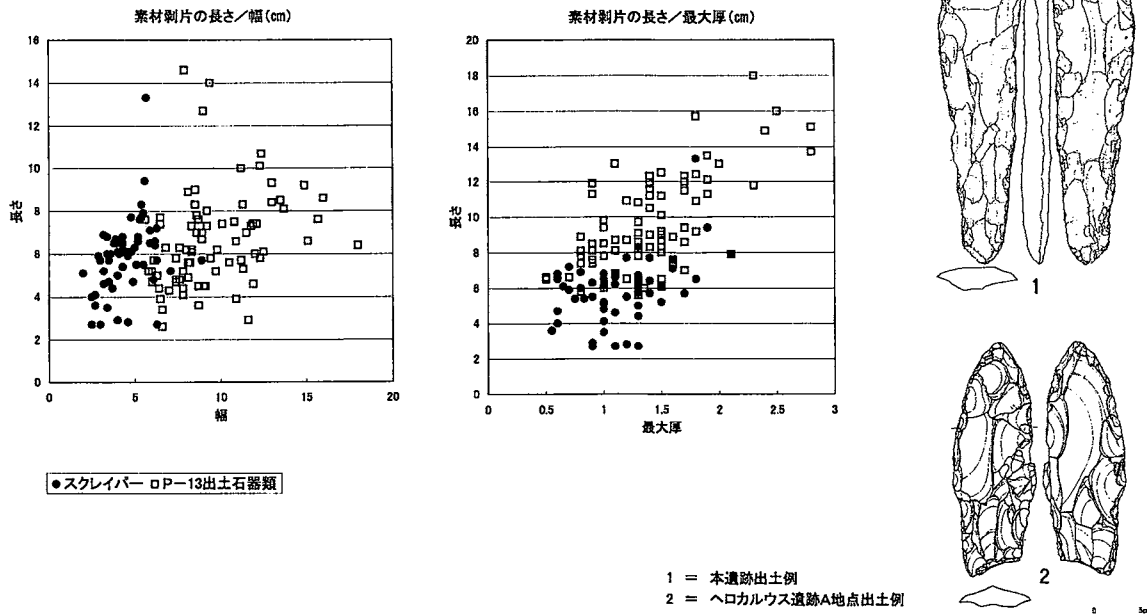
素材となった玄武岩は縄文時代晩期においては石器の石材として多用される傾向があるが、縄文時代中期前半を主体とする遺跡に限ってみれば、用いられる地域とそうでない地域に分かれるようである。例えば七飯町の鳴川右岸遺跡(北埋調報 87、112)では、剥片石器は全て頁岩製であった。また同じく函館市桔梗2遺跡(北埋調報 46)でも、図版、表を見る限りにおいて剥片石器は頁岩かあるいはメノウ質頁岩製である。反面、八雲町山越から野田生にかけての遺跡では、同時期の遺跡である山越3遺跡、山越2遺跡において、スクレイパーや石鏃の一部に同様な玄武岩を使用したと見られるものがある(北埋調報163、166)。本遺跡でもこれらの両面調整石器以外にはH-1のスクレイパー(図Ⅲ-6-22)が玄武岩を素材としている。

これらの玄武岩製両面調整石器のなかで最大のものの類例を1例みつけた。泊村へロカルウス遺跡A地点(吉田 1987)の包含層中から出土しているもので(図Ⅵ-2)、全長が24.6cmで両面が粗く加工され、槍先状に整形されている。一覧表中の石材の欄には讃岐岩?とあるが、この玄武岩はいわゆるサヌカイト(讃岐岩)とよく似た暗い灰色の外観を呈しているため、実見していないが同様の石材とみられる。同じA地区の包含層からはサイベ沢Ⅶ式相当とみられるものが多く出土しており時期もほぼ同じ頃といえる。

またこの石器が「棍棒型石器」と類似しているという指摘を受けた。棍棒型石器は北海道東北部に分布が限られ、石材に片岩もしくは砂岩を素材とする点で相違点があるが、全長30cm、幅10cm前後、重さ800~1500gといった外形寸法と重さに関してはよく似ており、さらに縄文時代中期の可能性を指摘している野村 崇氏の推定(野村 1985)とも合致する。この点に関しては今後の類例の増加を待って再度検討したい。

2) 石器の用途について

この他覆土3層から一括出土した頁岩製の石器は、71点のフレイクを主に石槍1点、スクレイパー2点など計83点であった。うち、36点については2点以上の接合資料16点となったが、その他67点は多くみても2種類の母岩しかなく、かなりの時間を費やしたのにもかかわらず接合しなかった。その場での加工を表す微細な剥片は土壙から出土していないことから、遺構外の場所で剥片剥離を行い得



図VI-2 玄武岩製両面調整石器・素材剥片比較グラフ

られた剥片の中から何らかの基準によって選択され、加工場所から運ばれて土壌に埋められたことは疑いない。この点について素材剥片の形状を最もよく残した剥片石器である、スクレイパーとの比較検討を試みた(図VI-2)。しかし、スクレイパーの素材剥片としてはかけ離れた値を示してばらついており、少なくともこの剥片をそのまま石器として利用した可能性はあまりないと言ってよいように思う。

3) 遺構構築の意図について

ではこれらの石器類は何の意図をもって埋納されたのであろうか、もはや推測する他に手段はないが、手がかりとしては出土状況が挙げられる。玄武岩製の3点の石器は最も上位にあった頁岩製のフレイクを1番目と換算すると、17番目と18番目、また34番目で出土しており、これはちょうど3点の玄武岩製石器が頁岩製の石器に挟まれた状態で埋められた結果と考えられる。

これらのような特徴を持つP-13は「意識的に埋め納めた状況下で、集落遺跡や墓以外でみいだされる遺物」(佐原 1985)という「デポ」にあたるものと考えられる。また上記のような剥片の様子から考えると「器物の使用目的に応じた実用的な『収蔵』」ではなく、住居から離れた土壌に埋められ、さらに不要品に近いフレイクによって隠されているかのような遺物出土状況から「人目に触れぬような工夫がなされる『隠蔽』」(田中 1996)に近いものように思われる。

このことから玄武岩製両面調整石器は隠されたものであり、頁岩製石器類は全てそうであったとはいえないが可能性として玄武岩製石器を隠匿するための偽装であったといえるのではないだろうか。

(立田)

(2)刃部に光沢のある石器について

野田生2遺跡に同じ縄文時代中期前半（サイベ沢Ⅶ式新段階）が主要な時期である野田生4遺跡を調査した坂本尚史氏から、出土したスクレイパーのなかに刃部付近に脂肪状の光沢が認められるものがあり、これらは使用痕の可能性があると指摘を受けた。

このことから野田生2遺跡出土のスクレイパー、Uフレイクについて見直しを行った。その結果、スクレイパー27点、Uフレイク2点から指摘のような痕跡が見つかった。ここではそうした石器について本遺跡での特徴を簡単に述べておきたい。図Ⅵ-3は再検討した結果確認した光沢のあるスクレイパー、Uフレイクで、実測したものを改めて観察して記録したものである。トーンが光沢の強弱、範囲を表している。掲載順は素材となる剥片の形状を、ついで刃部の形態を優先し、Uフレイクとスクレイパーは区別していない。

1～3、(H-5)30、(H-5)28は背面に側縁に平行な稜線がある石刃様の縦長剥片を用いるものである。4～8は原石面もしくは節理面が一部に残る剥片を用いるもの。7はUフレイクとしたもので、背面原石面側に連続しない剥離痕がある。光沢は背面左側側縁、腹面右側側縁の同一刃部に比較的明瞭に認められ、剥離痕に切られている。(H-4)9、9は前述した石刃様の剥片を用い、刃部が直線を呈するものである。10、(H-1)23は原石面、節理面が残る剥片を用い、刃部が直線を呈するものである。11～14（包含層30）、(H-7)21は不定形な縦長剥片を用い、刃部が直線を呈するものである。14はUフレイクである。打面には平坦面がある。15、16、（包含層）41は横長剥片を用い、刃部が直線を呈するものである。17は横長剥片を用い、刃部が内湾するものである。

1) 光沢のつく石器の特徴

スクレイパーの細分ごとの点数は、縦長剥片を用い、刃部が外反するもの(ⅢB2a)と直線を呈するもの(ⅢB2b)が同数の11点、横長剥片素材で刃部が直線を呈するもの(ⅢB3b)3点、Uフレイク(VB)2点で、横長剥片素材で刃部が内湾するもの(ⅢB3c)、破片で細分不能のもの(ⅢB9)が各1点である。

全ての石器において微細な剥離痕以外の細部加工は背面側になされている。また(H-5)30、(H-4)9を除いて細部加工は光沢を切っており、凹凸のため光沢が残らなかった可能性もあるが、このことは使用後にあたかも刃部を研ぎなおすような加工がなされたことを示すのかもしれない。

また全28点のうち17点に打面もしくは剥片末端のヒンジによる平坦面がある。この平坦面に人差し指をおき、親指を添えて全体を包み込むように持つと、ほとんど全ての石器において刃部が張り出すように持つことができる。素材の大きさから難しいものもあるが、このような石器の一つの使用方法として推定できるのではないだろうか。

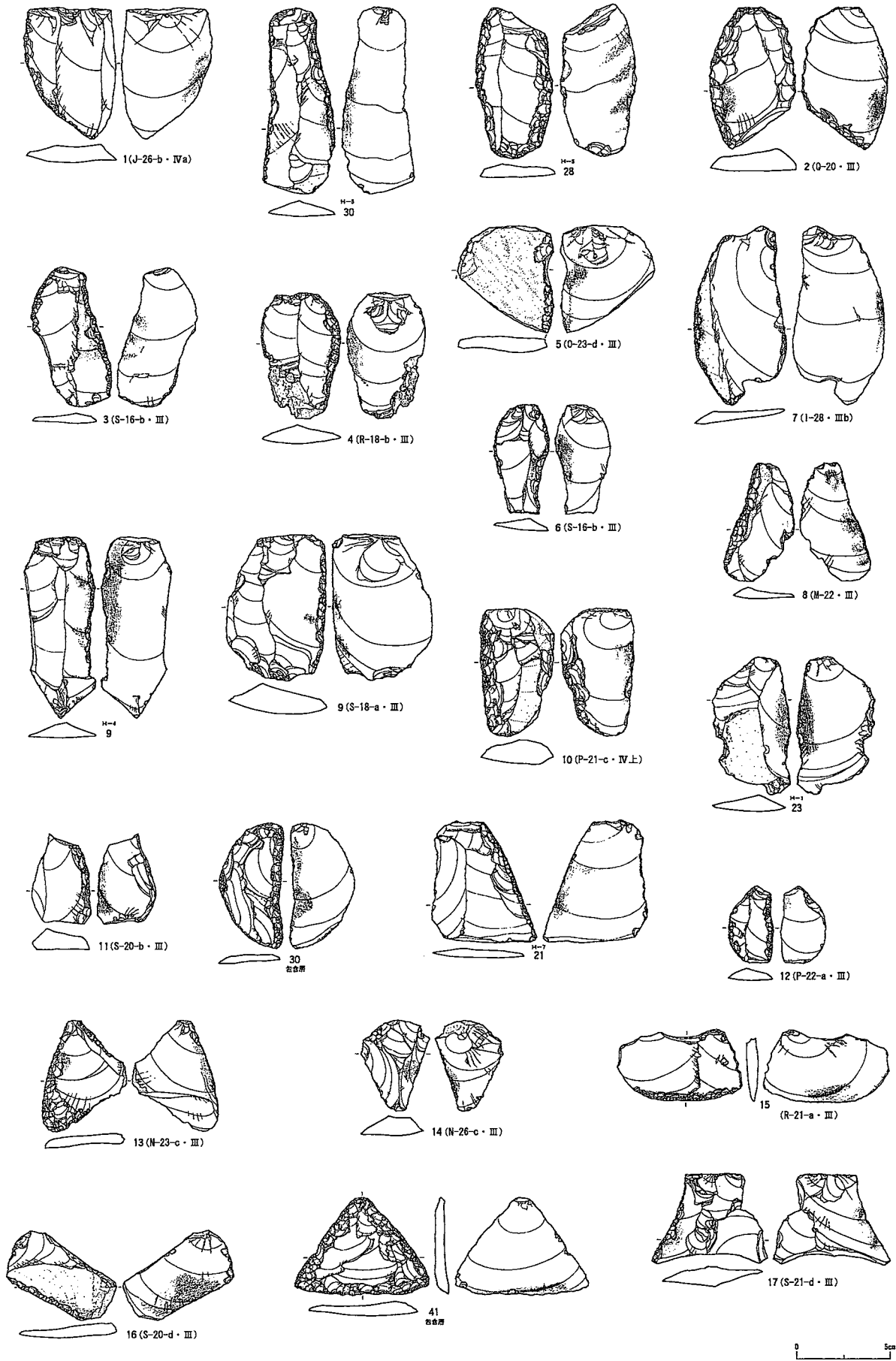
2) 光沢の特徴

光沢の特徴は背面よりも腹面側に明瞭についていることが多く、リングの凹凸のでっぱりに強くつくという傾向が指摘できる。なお光沢の幅は16のように1.5cmになるものもあるが、ほぼ0.5～1cmの幅に収まるものである。

3) 使用法の推定と今後の課題

本遺跡例では、スクレイパーだけではなく、Uフレイクといった細部加工がないものについても明瞭な痕跡があるものがあることがわかった。また、持ち方と光沢から推定される運動方向はおそらく刃部に平行な方向であったと考えられる。今後はこれらの成果を石器の分類方法に生かすとともに、加工対象を推定できる詳細な分析もあわせて行っていきたい。

(立田)



図VI-3 刃部に光沢のある石器 (出土グリット・層位)

引用参考文献

- 青森市教育委員会編 1998『小牧野遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 青森市埋蔵文化財調査報告書第40集
石橋次雄ほか 1975『十勝太若月―第三次発掘調査―』浦幌町教育委員会
石本省三 1984「北海道南部の縄文文化」『北海道の研究』1 考古篇1
上野秀一・羽賀憲二・田部 淳ほか 1983『瀬棚南川』
内山真澄 1980『寿都3遺跡』『寿都町文化財調査報告書Ⅱ』寿都町教育委員会
江坂輝彌・高山 純・渡辺 誠 1965「青森県九叟泊岩陰遺跡調査報告」『石器時代』第7号
江坂輝彌 1970『石神遺跡』石神遺跡研究会
江差町教育委員会編 1989『茂尻C遺跡』
及川研一郎 1987「北海道・八雲町落部遺跡出土土器の編年的位置」『溯航』第15号
大沼忠春ほか 1976『元和』乙部町教育委員会
大沼忠春 1978「東北地方北部の後北式土器について」『考古風土記』第3号
大沼忠春 1982「後北式土器」『縄文土器大成5―縄文』
大沼忠春 1989「縄文土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 縄文』
小笠原忠久 1984「北海道南西部における縄文時代前・中期の集落」『北海道の研究』1 考古篇1
木村哲朗ほか 1998『青苗遺跡 E地区』奥尻町教育委員会
久保 泰ほか 1983『白坂』松前町教育委員会
久保 泰 1991a『札前Ⅲ』松前町教育委員会
久保 泰 1991b『松城遺跡』松前町教育委員会
小島 朋夏 1999「北海道式石冠の分布とその意義」『北海道考古学』第35輯
児玉作左衛門ほか 1958『サイベ沢遺跡』市立函館博物館
古原敏弘ほか 1982『駒場7遺跡における考古学的調査』静内町教育委員会
(財)北海道埋蔵文化財センター 1985『湯の里遺跡群』北埋調報18
(財)北海道埋蔵文化財センター 1986a『上ノ国町小岱遺跡』北埋調報30
(財)北海道埋蔵文化財センター 1986b『木古内町建川1・新道4遺跡』北埋調報33
(財)北海道埋蔵文化財センター 1987『木古内町建川2・新道4遺跡』北埋調報43
(財)北海道埋蔵文化財センター 1988a『函館市石川1遺跡』北埋調報45
(財)北海道埋蔵文化財センター 1988b『函館市桔梗2遺跡』北埋調報46
(財)北海道埋蔵文化財センター 1988c『木古内町新道4遺跡』北埋調報52
(財)北海道埋蔵文化財センター 1991『上清水2遺跡・共栄2遺跡(2)・東松沢2遺跡・芽室町北明1遺跡』北埋調報76
(財)北海道埋蔵文化財センター 1994『鳴川右岸遺跡』北埋調報87
(財)北海道埋蔵文化財センター 1995a『豊浦町高岡1遺跡』北埋調報88
(財)北海道埋蔵文化財センター 1995b『滝里遺跡群V 滝里4遺跡』北埋調報94
(財)北海道埋蔵文化財センター 1996『滝里遺跡群VI 滝里4遺跡(2)』北埋調報98
(財)北海道埋蔵文化財センター 1997『鳴川右岸遺跡・桜町遺跡』北埋調報112
(財)北海道埋蔵文化財センター 2000a『長万部町花岡2遺跡・花岡3遺跡』北埋調報139
(財)北海道埋蔵文化財センター 2000b『八雲町シラリカ2遺跡』北埋調報142
(財)北海道埋蔵文化財センター 2000c『調査年報12 平成11年度』
(財)北海道埋蔵文化財センター 2001a『八雲町黒岩3遺跡・ボンシラリカ1遺跡』北埋調報155
(財)北海道埋蔵文化財センター 2001b『八雲町山崎4遺跡』北埋調報162
(財)北海道埋蔵文化財センター 2001c『八雲町山越2遺跡』北埋調報163
(財)北海道埋蔵文化財センター 2001d『八雲町野田生5遺跡』北埋調報164
(財)北海道埋蔵文化財センター 2001e『調査年報13 平成12年度』
(財)北海道埋蔵文化財センター 2002a『山崎5遺跡』北埋調報165
(財)北海道埋蔵文化財センター 2002b『八雲町山越3遺跡・山越4遺跡』北埋調報166
(財)北海道埋蔵文化財センター 2002c『八雲町野田生4遺跡』北埋調報171
(財)北海道埋蔵文化財センター 2002d『八雲町栄浜1遺跡』北埋調報175
(財)北海道埋蔵文化財センター 2002e『調査年報14 平成13年度』
斎藤 傑・氏江敏文 1974『松前町大津遺跡発掘調査報告書』松前町教育委員会
桜井清彦 1961「北海道山越郡落部遺跡」『日本考古学年報』12
桜井清彦 1964「北海道山越郡オトシベ遺跡」『日本考古学年報』15
佐々木和利編・山田秀三監修 1988『アイヌ語地名資料集成』

- 佐藤 剛 2001「土器」『八雲町山越2遺跡』北埋調報163
- 佐藤 稔ほか 2001『オバルベツ2遺跡(1)』長万部町埋蔵文化財調査報告6 長万部町教育委員会
- 佐原 真 1985「ヨーロッパ先史考古学における埋納の概念」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集
- 柴田信一 1988「八雲町の縄文時代の遺跡」『ゆうらふ』第31号
- 柴田信一 1991a「八雲町より出土した魚形石器について」『北海道考古学情報』第3号
- 柴田信一 1991b「八雲町の縄文時代の遺跡と遺物について」『文京台考古』第6号
- 柴田信一 1995『栄浜1遺跡』八雲町教育委員会
- 柴田信一 1997『大新遺跡I』八雲町教育委員会
- 知内町教育委員会 1975『森越』
- 市立旭川郷土博物館編 1976『市立旭川郷土博物館所蔵品目録』V
- 菅江真澄著 内田武志・宮本常一編訳 1980『菅江真澄遊覧記』2
- 鈴木克彦 1998「東北地方北部の縄文中期後半の土器—大木系土器層位的の伴関係土器集成—」『研究紀要』第3号
青森県埋蔵文化財調査センター
- 鈴木正語ほか 1995『釜谷5遺跡』木古内町教育委員会
- 鈴木正語ほか 1996『釜谷遺跡』木古内町教育委員会
- 鈴木正語ほか 1999『釜谷遺跡』木古内町教育委員会
- 高橋和樹・内山真澄・土田亜佐子ほか 1976『瀬棚南川遺跡』
- 高橋正勝・小笠原忠久 1980「4 縄文文化前期・中期」『北海道考古学講座』
- 高橋正勝 1981「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ
- 田川賢蔵 1956「トコタン遺跡について」『先史時代』第4輯
- 田川賢蔵 1958「北海道山越郡元山遺跡」『日本考古学年報』10
- 武内収太・山田悟郎 1968「山越郡八雲町熱田遺跡における緊急発掘調査」『ゆうらふ』第12号
- 竹内理三編 1987『角川地名大辞典』
- 竹田輝雄 1956「北海道虻田郡豊浦町アルトリ遺跡出土の遺物について」『上代文化』26
- 立田 理 2002「山越3遺跡のⅢ群a—3類土器の編年の位置と放射性炭素年代について」『八雲町山越3遺跡・山越4遺跡』北埋調報166
- 田中英司 1996「日本先史時代のデポ」『考古学雑誌』第80巻2号
- 田部 淳 1997『ヘロカルウス遺跡E~G地点』泊村教育委員会
- 千代 肇・岩本義雄 1975「北海道八雲町上八雲の遺跡について」『北海道考古学』第11輯
- 千代 肇 1965「北海道八雲町大関遺跡について」『在華王路示』No.6 函館遺愛女子高・中学校歴史研究班考古学グループ
- 千代 肇 1965「北海道の縄文文化と編年について」『北海道考古学』第1輯
- 千代 肇 1975「北海道の円筒土器文化」『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
- 辻 誠一郎・中村俊夫 2001「縄文時代の高精度編年：三内丸山遺跡の年代測定」『第四紀研究』40(6)
- 中田裕香 2001「縄文土器について」『八雲町野田生5遺跡』北埋調報164
- 永田方正(復刻) 1984『初版北海道蝦夷語地名解』草風館
- 名取武光編 1970『フゴッベ洞窟』
- 鍋島直久 1991『ハマナス野vol.XIII』南茅部町教育委員会
- 西 幸隆ほか1993『釧路市北斗遺跡第1地点』釧路市埋蔵文化財調査センター
- 野村 崇 1982「八雲町トコタン2遺跡」『北海道における農耕の起源(予報)』
- 野村 崇 1985「棍棒形石器について」『北海道縄文時代終末期の研究』みやま書房
- 長谷部言人 1927「円筒土器文化」『人類学雑誌』第42巻第1号
- 平川善祥ほか 1989『高木遺跡』北海道開拓記念館研究報告9
- 広田良成 2001「土器」『八雲町山崎4遺跡』北埋調報162
- 福田裕二 1992『ハマナス野vol.XV』南茅部町教育委員会
- 福田裕二 1995『八木A遺跡Ⅱ・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 福田裕二 1997『八木A遺跡Ⅲ・八木C遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 北海道教育委員会 1979『有珠川2・植苗3遺跡』
- 北海道教育庁生涯学習部文化課 2001『市町村における発掘調査の概要』
- 北海道函館中部高等学校考古学研究部 1974『道南遺跡分布事典』
- 北海道立地下資源調査所 1974『八雲町の地質』
- 町田 洋・新井房夫 1992『火山灰アトラス』
- 松浦武四郎著 吉田武三校註 1970『三航蝦夷日誌』上巻

- 松浦武四郎著 秋葉實解説 1988『武四郎蝦夷地紀行』
- 三浦孝一 1980『山崎遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1982『栄浜1遺跡発掘調査概報』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1983『栄浜』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1984「第二編 先史時代」『改訂八雲町史 上巻』
- 三浦孝一 1987『台の上遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1989『浜松2遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1990『八雲3遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1998『栄浜1遺跡Ⅳ』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1986『栄浜1遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1987『栄浜1遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1988『山越5・6遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1991『浜松2遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1992『コタン温泉遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1993『大関校庭遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1995『浜松5遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1997『大新遺跡Ⅰ』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1998 a『大新遺跡Ⅱ』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1998 b『旭丘1遺跡』八雲町教育委員会
- 峰山 巖ほか 1977『栄浜遺跡』乙部町教育委員会
- 峰山 巖 1972「第一編 先史時代」『豊浦町史』
- 三宅徹也 1980「円筒土器」『縄文文化の研究』第3巻 縄文土器Ⅰ
- 三宅徹也 1988「円筒土器上層様式」『縄文土器大観』2 中期Ⅰ
- 村越 潔 1974『円筒土器文化』
- 八雲高等学校郷土史研究部 1970『郷研紀要』4
- 八雲町編 1984『改訂八雲町史 上巻・下巻』
- 山田秀三 1972『北海道の川の名』
- 山田秀三 1984『北海道の地名』
- 山内清男 1929「北関東に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第1巻第2号
- 横山英介編 2000『上藤城3遺跡発掘調査報告書』七飯町教育委員会
- 吉崎昌一・直井孝一・松岡達郎編 1979『聖山』七飯町教育委員会
- 吉崎昌一 1965「縄文文化の発展と地域性 北海道」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』
- 吉田 周子 1987『ヘロカルウス遺跡』北海道文化財研究所



1 遺跡周辺の地形（噴火湾を望む）



2 25%調査状況（平成12年度）



3 基本土層

図版 2



1 農道南側地区完掘状況（南西から）



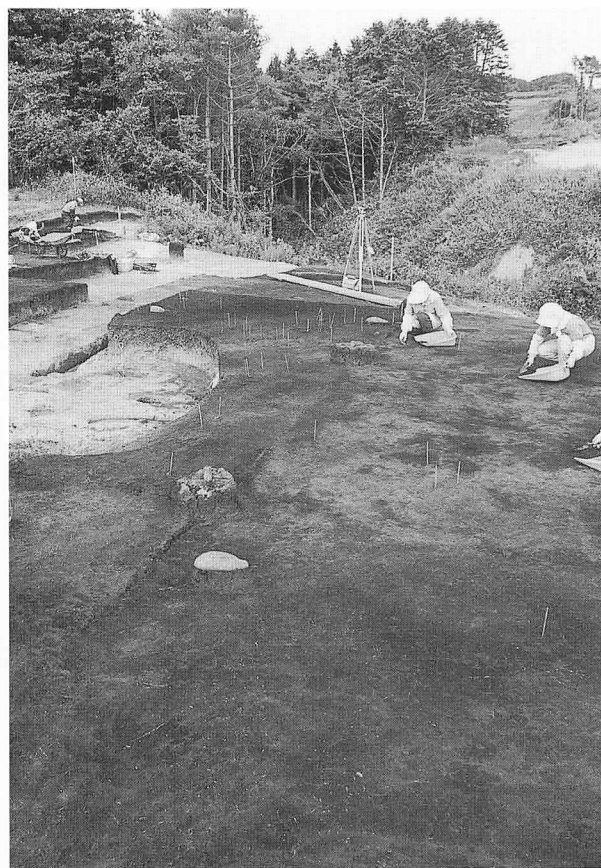
2 完掘状況（北西から）



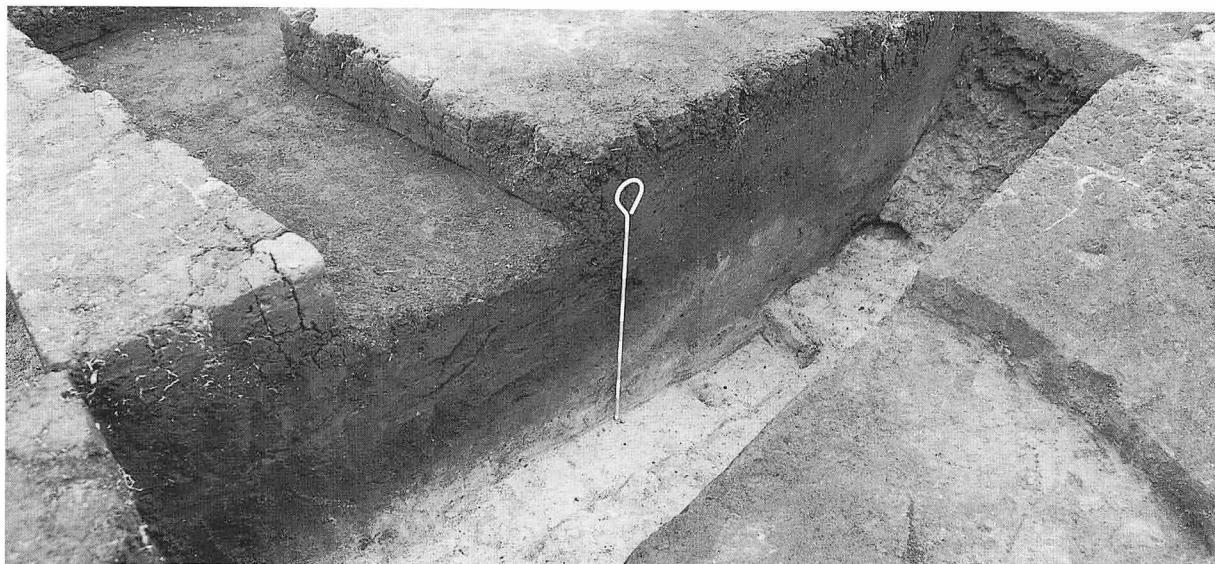
1 H-1 (南から)



2 H-1 検出 (北西から)



3 H-1 掘上土検出状況 (南西から)



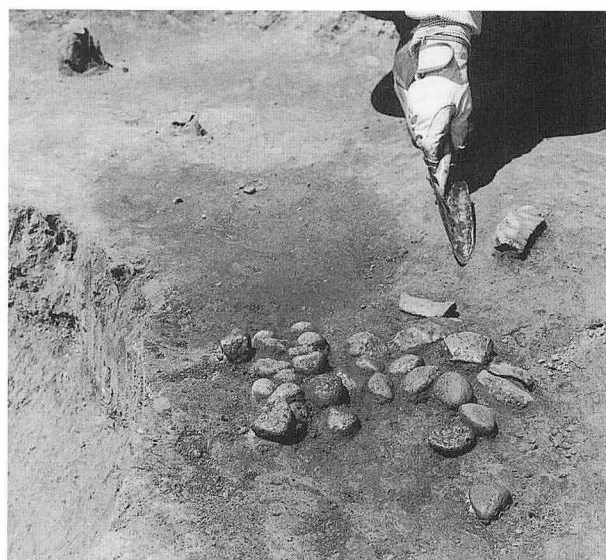
1 H-1 土層断面 (北西から)



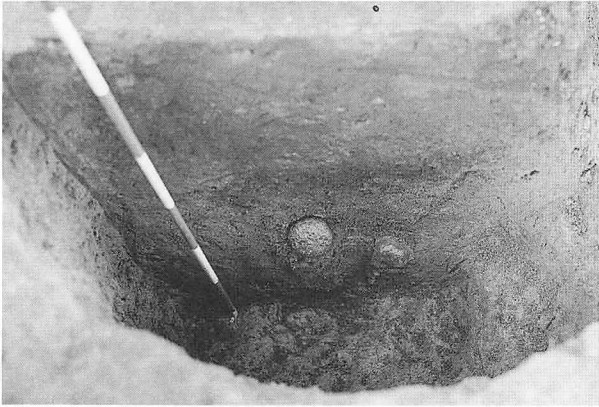
2 H-1 土層断面 (北から)



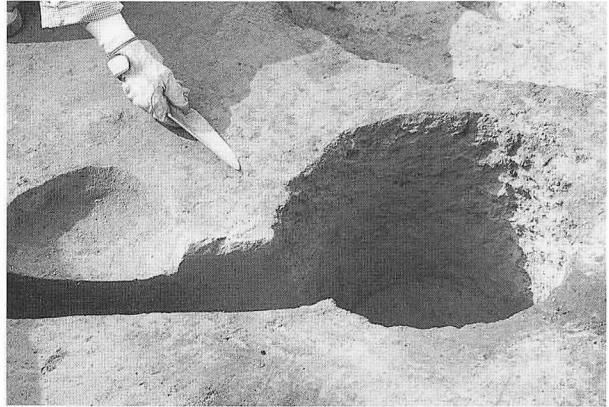
3 H-1 土器集中1 (東から)



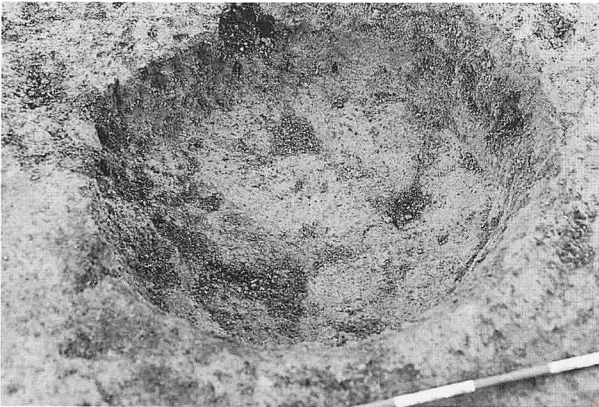
4 H-1 床面遺物出土状況 (北から)



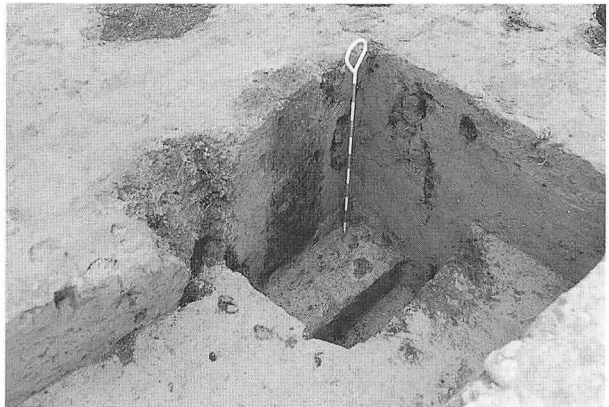
1 H-1・HP-1土層断面（南から）



2 H-1・HP-2、6（北から）



3 H-1・HP-4（南西から）



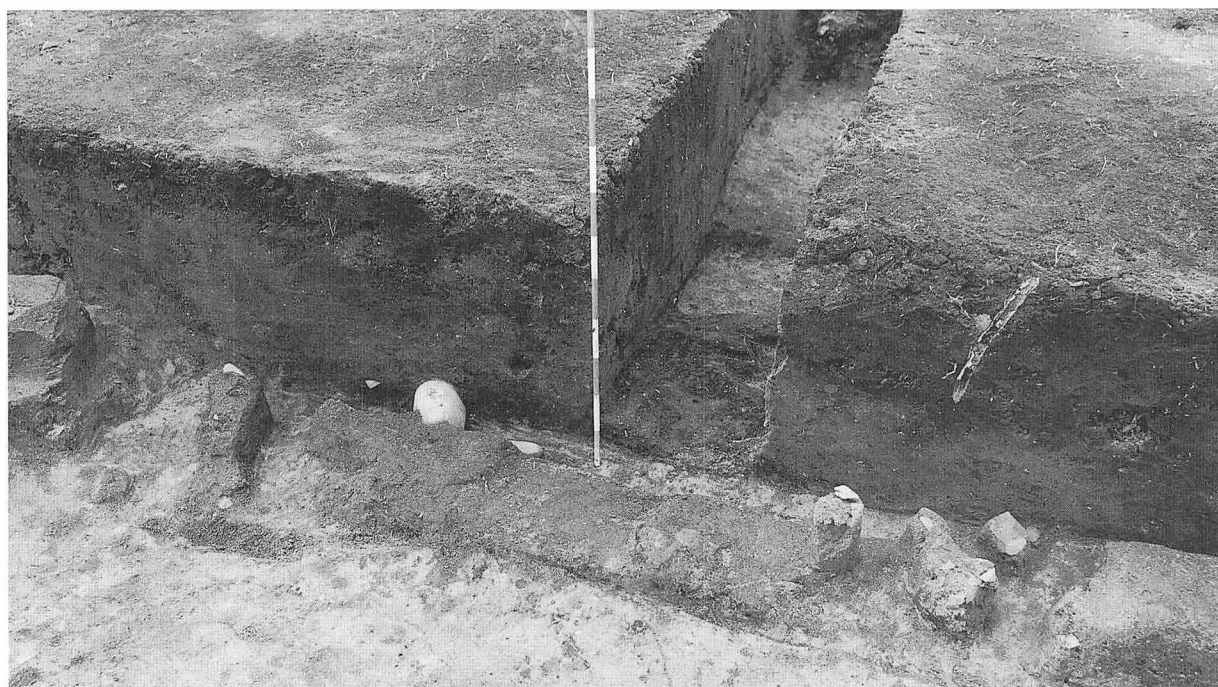
4 H-1・HP-10土層断面（南東から）



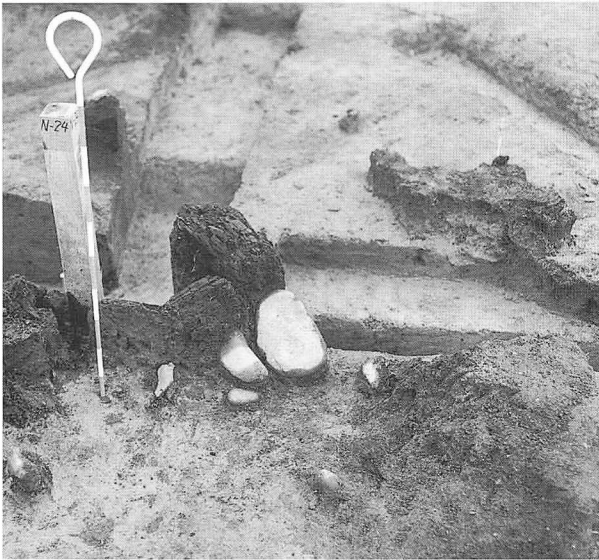
5 H-2（北東から）



1 H-3 (北から)



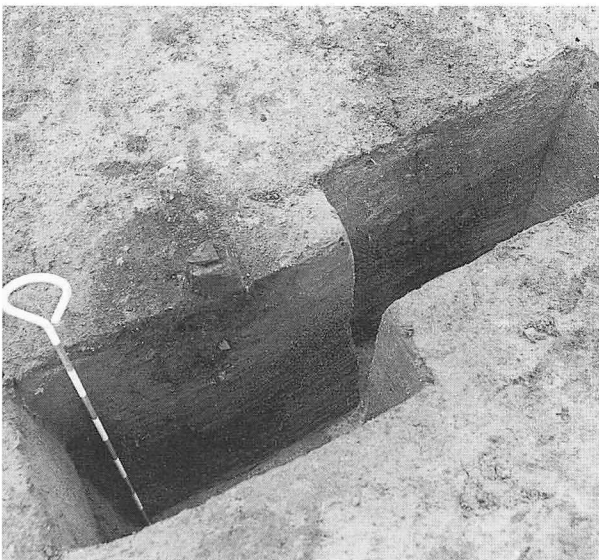
2 H-3 土層断面 (北東から)



1 H-3 炭化物出土状況 (北東から)



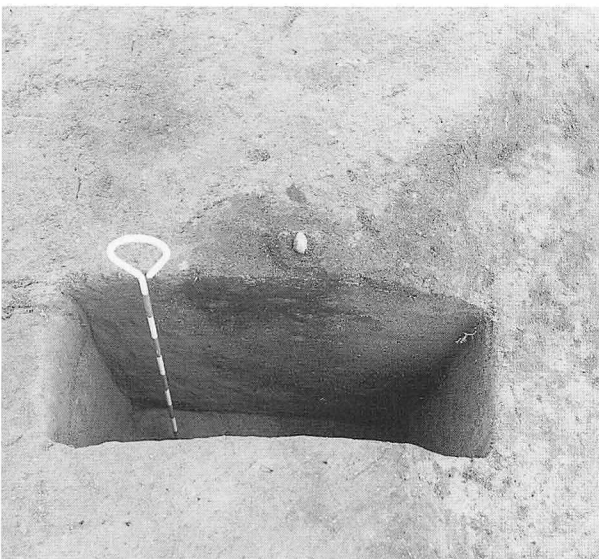
2 H-3 掘上土検出状況 (北から)



3 H-3・HP-1、2土層断面 (西から)



4 H-3・HP-5 (北西から)

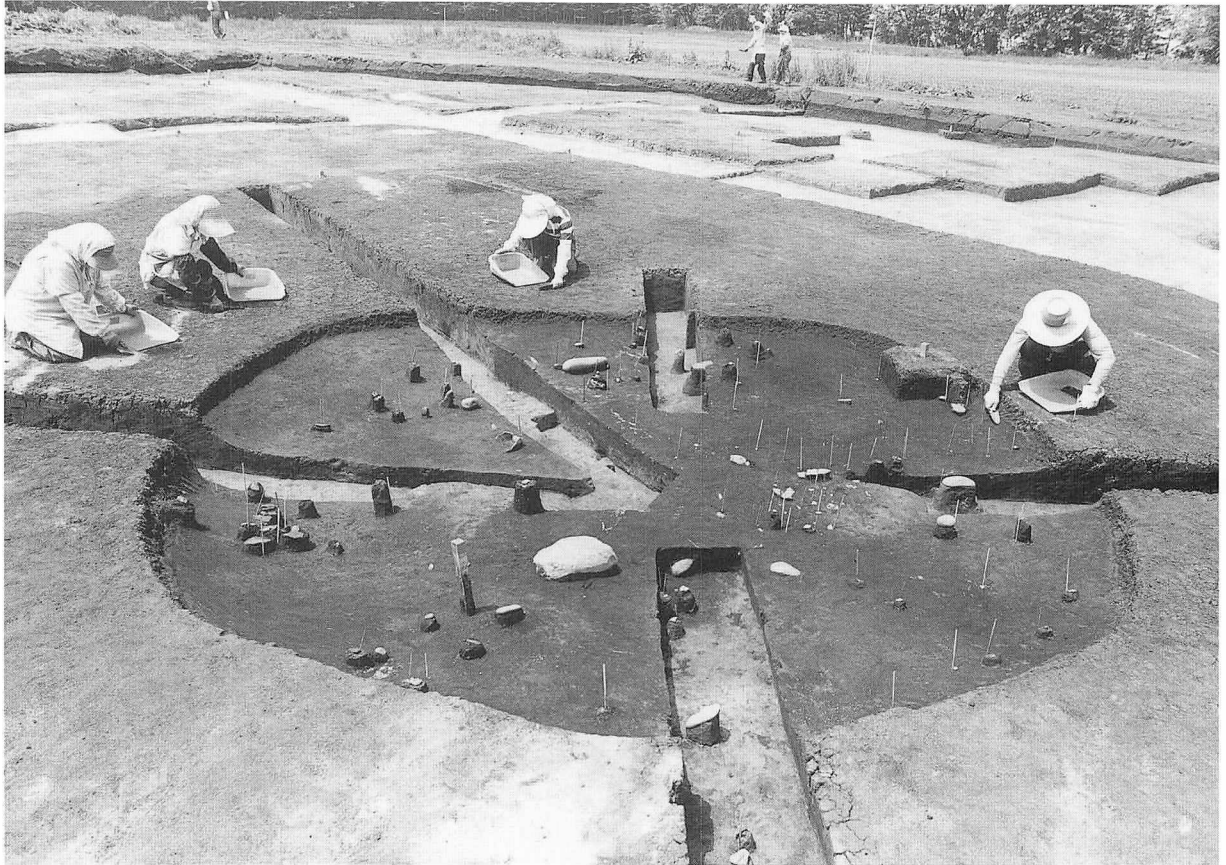


5 H-3・HP-9土層断面 (南西から)



6 H-3・HF-1、2土層断面 (北西から)

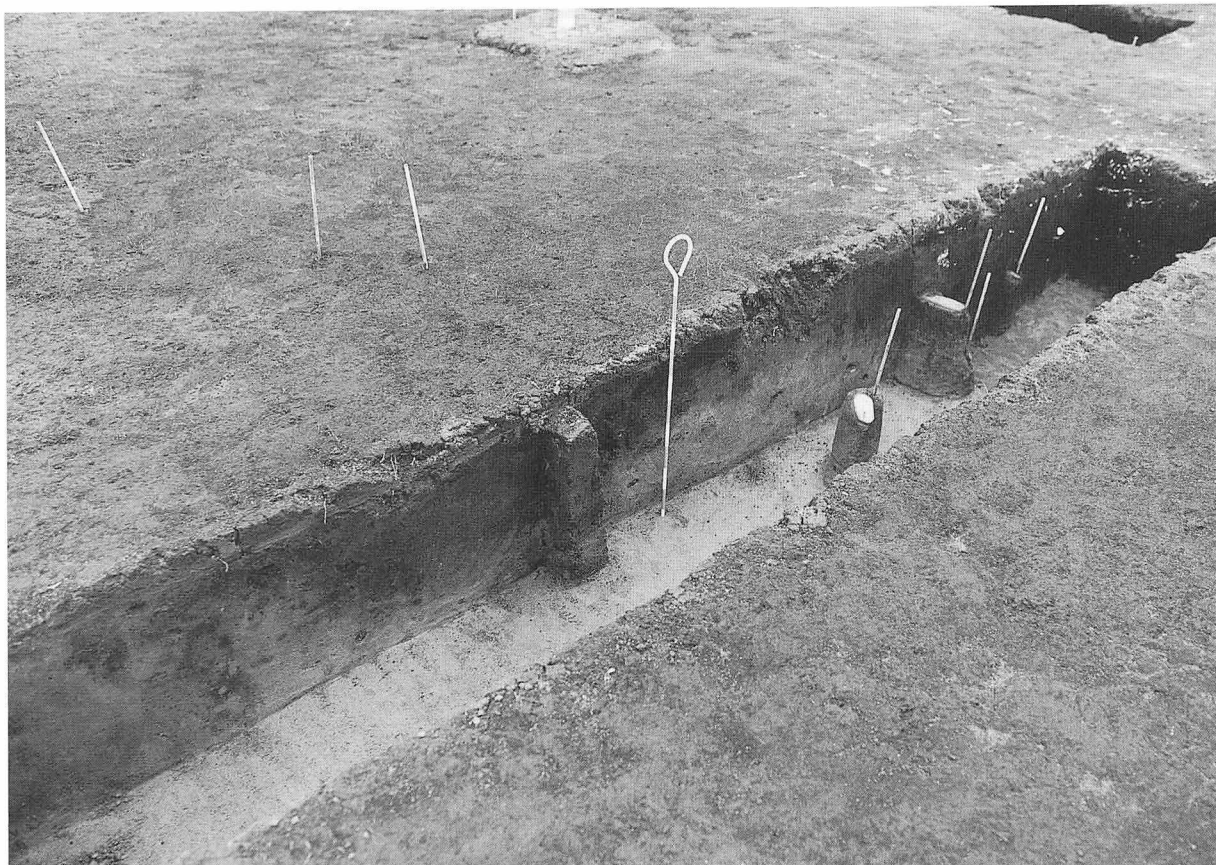
図版 8



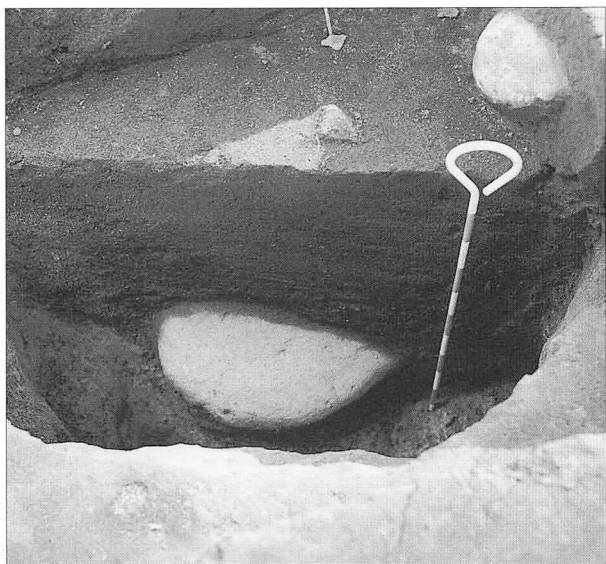
1 H-4 (東から)



2 H-4 検出 (西から)



1 H-4 土層断面 (南西から)



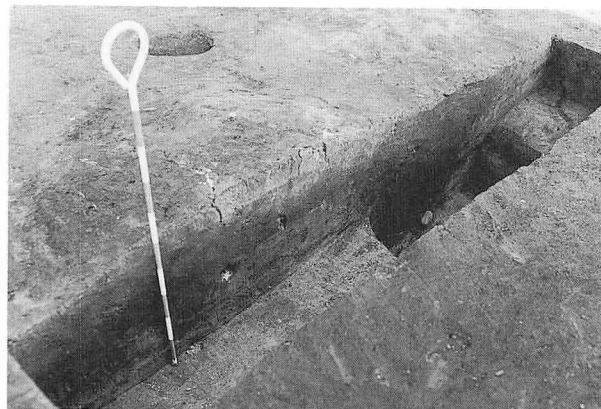
2 H-4・HP-1 土層断面 (北東から)



3 H-4・HP-1 遺物出土状況 (東から)



1 H-4・HF-1 (南西から)



2 H-4・HP-2とHF-5土層断面 (西から)



3 H-4床面遺物出土状況 (北東から)



4 H-4土器出土状況 (南から)



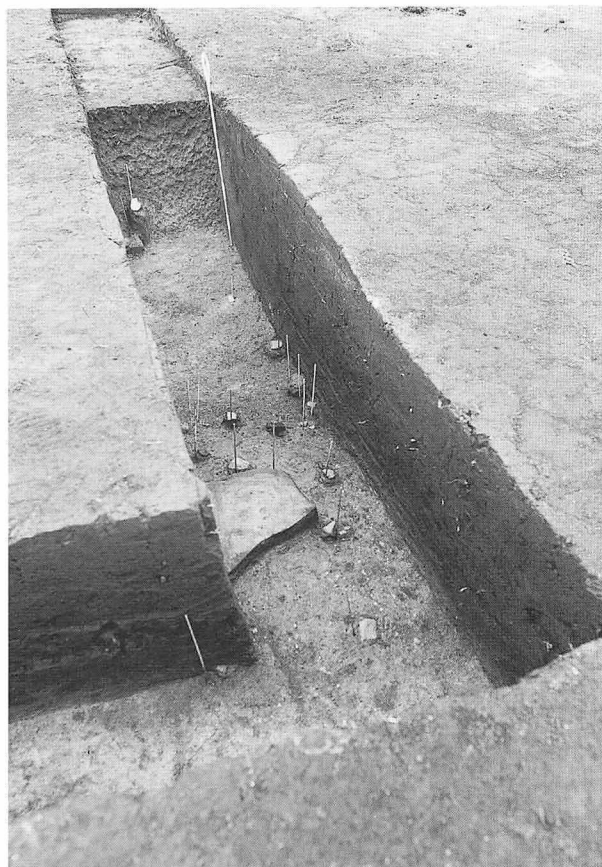
5 H-4土器出土状況 (南から)



1 H-5 (北西から)



2 H-5 検出 (北から)



1 H-5 土層断面 (南から)



2 H-5 調査状況とH-1 (北から)



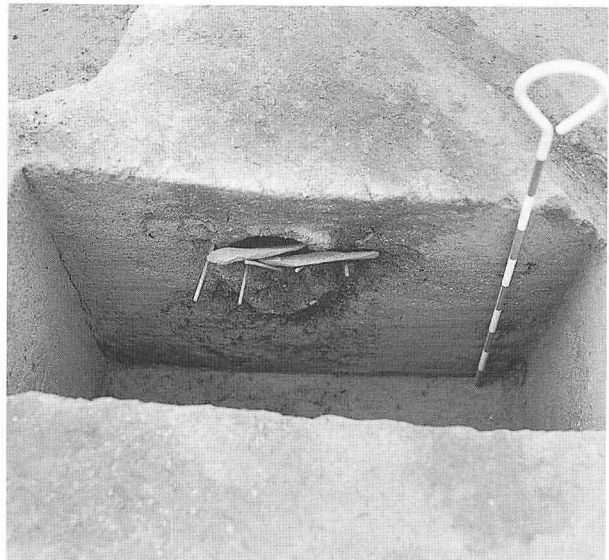
3 H-5 覆土遺物出土状況 (南から)



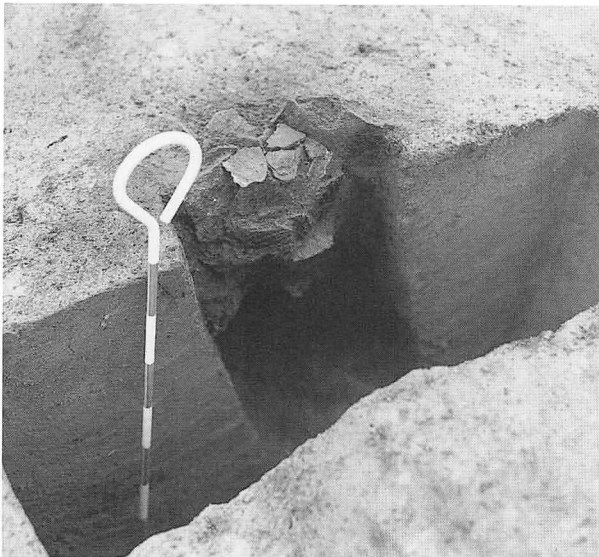
1 H-5 掘上土検出状況 (北東から)



2 H-5 覆土遺物出土状況 (北西から)



3 H-5・HP-13土層断面 (南東から)



4 H-5・HP-10遺物出土状況 (東から)



5 H-5・HP-16遺物出土状況 (南から)



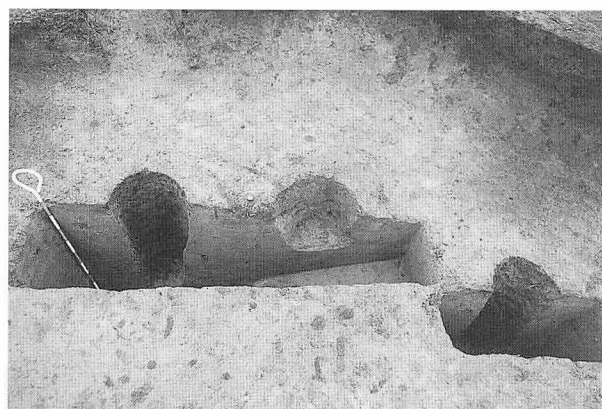
1 H-6 (南西から)



2 H-6 土層断面 (西から)



3 H-6・HP-2 土層断面 (南から)



4 H-6・HP-1~3 (南から)



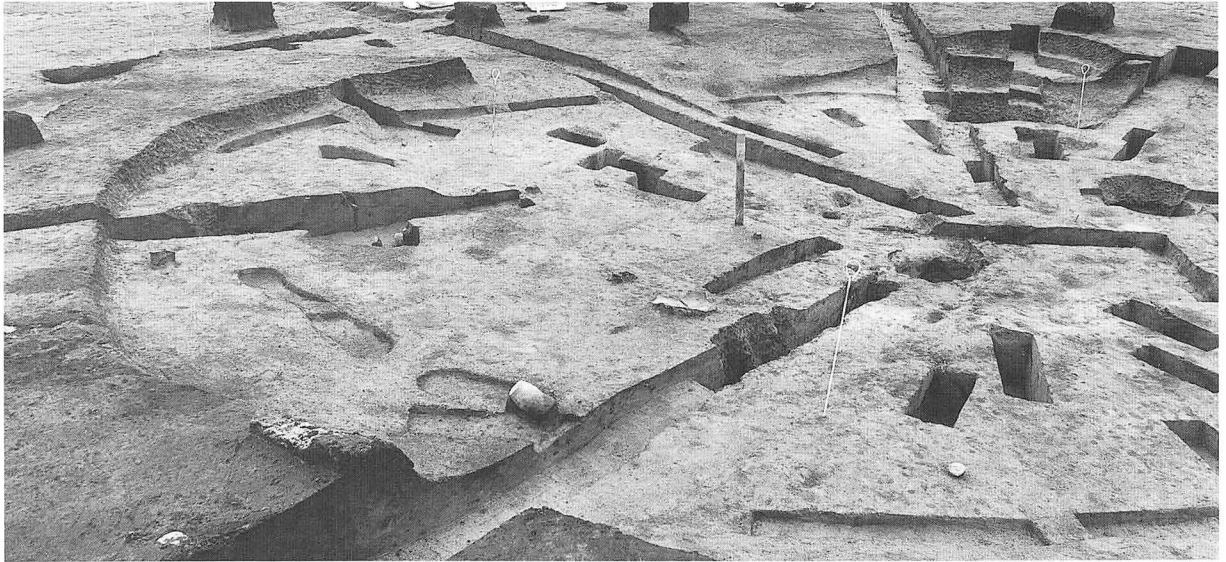
1 H-6 床面遺物出土状況 (南西から)



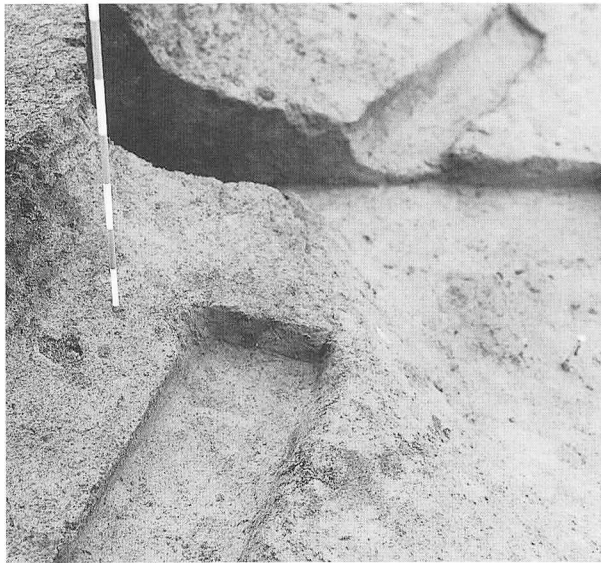
2 H-6 埋設土器断面 (北から)



3 H-7 (北西から)



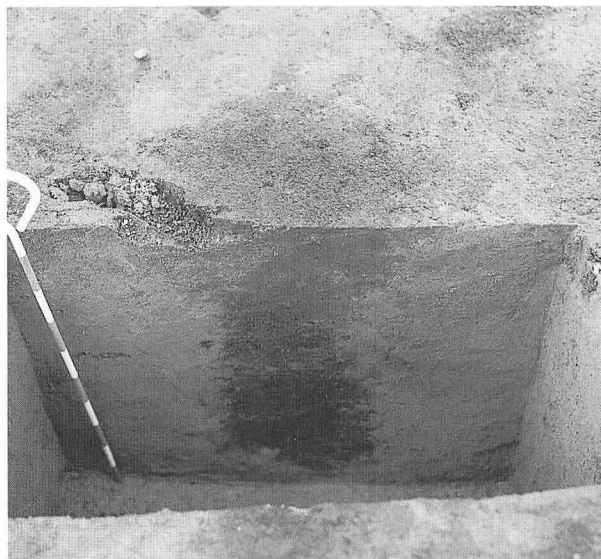
1 H-7溝検出状況(南東から)



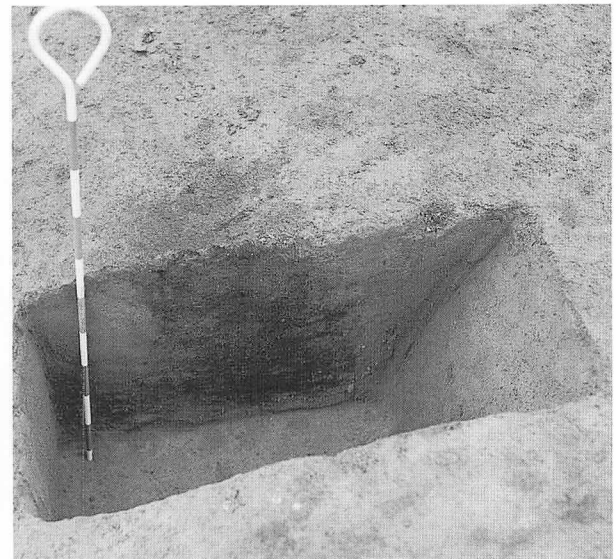
2 H-7溝土層断面



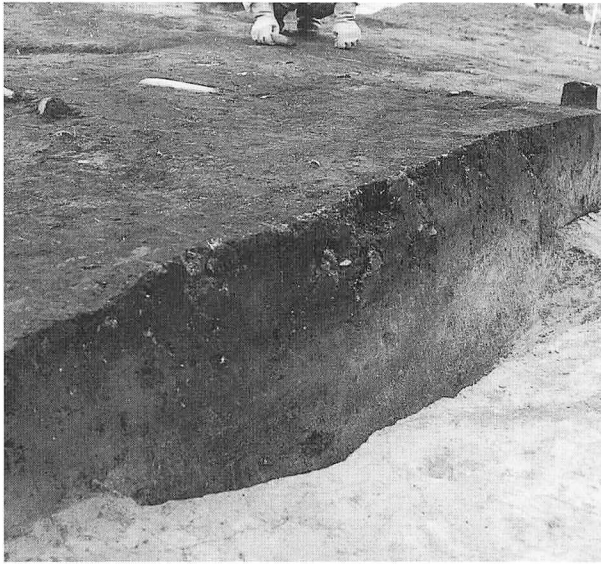
3 H-7溝土層土面(南東から)



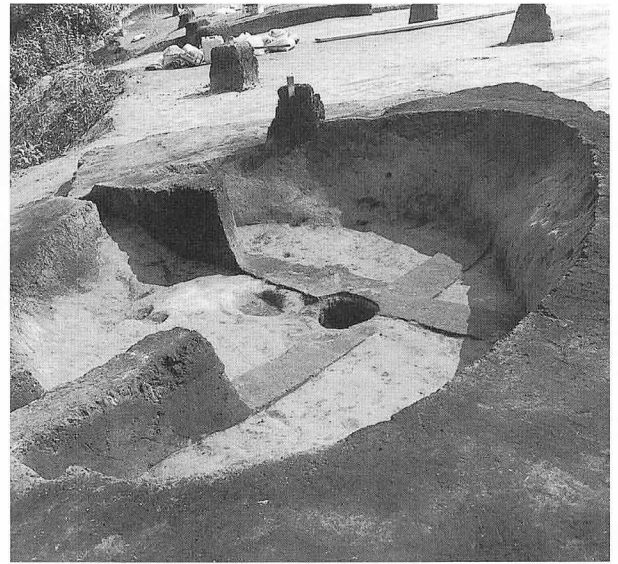
4 H-7・HP-2土層断面(南から)



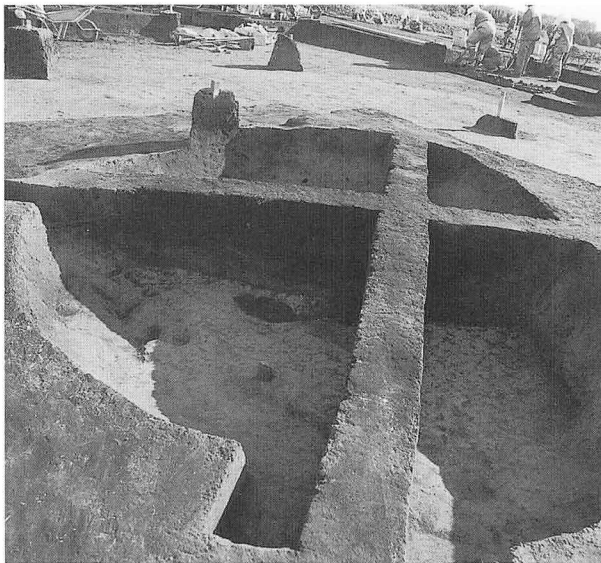
5 H-7・HP-10土層断面(西から)



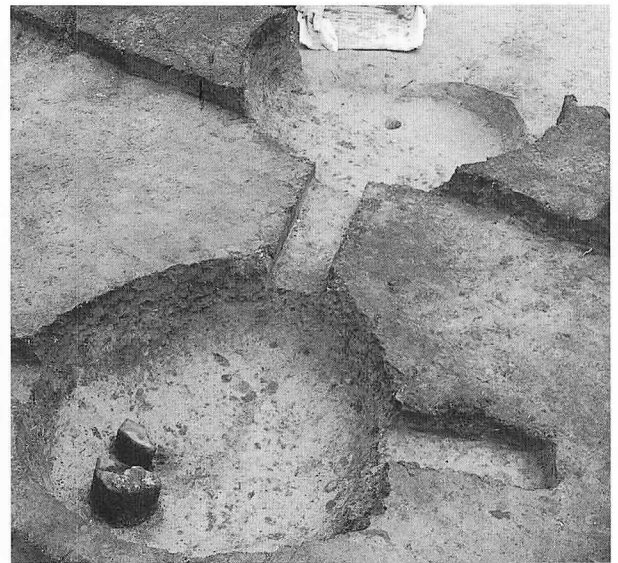
1 P-6 土層断面 (北西から)



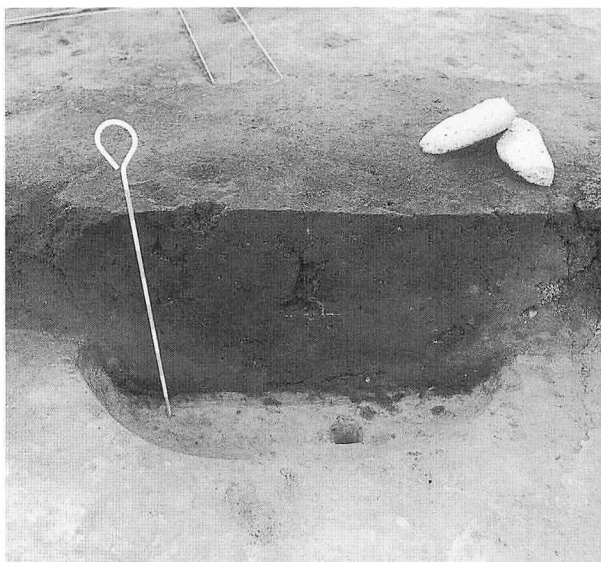
2 P-7 (北東から)



3 P-7 土層断面 (東から)



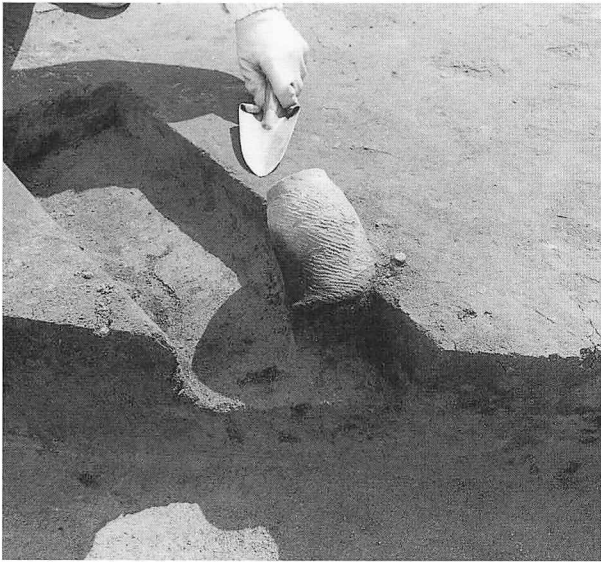
4 P-25 (奥) と P-32 (北から)



5 P-25 土層断面 (南東から)



6 P-25 炭化物出土状況 (南西から)



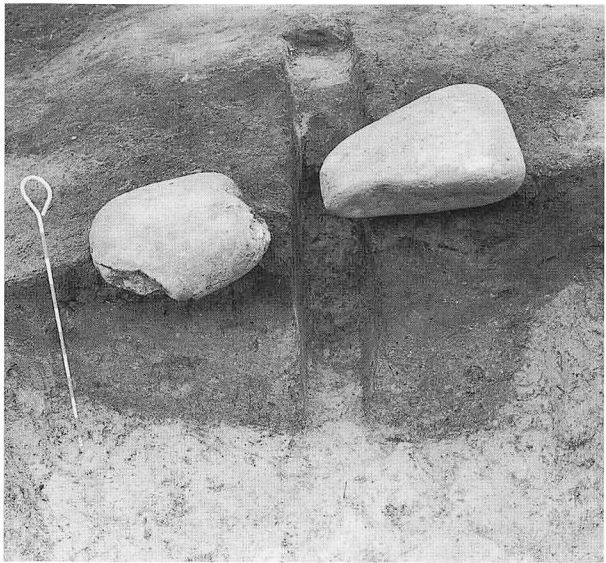
1 H-7床面遺物出土状況（北東から）



2 H-7床面遺物出土状況（北から）



3 P-4（北東から）



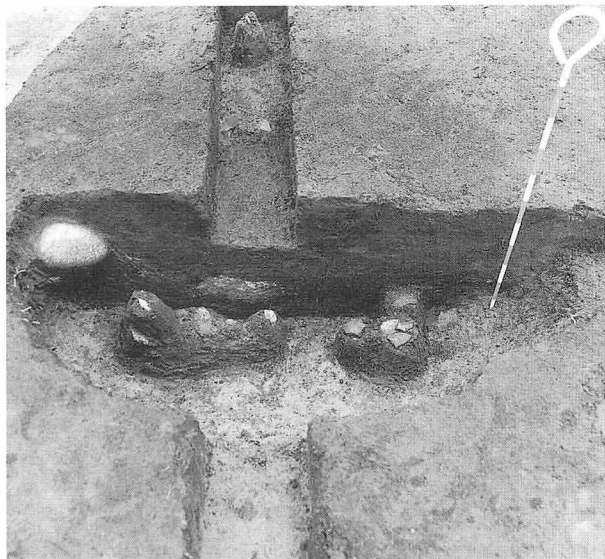
4 P-4土層断面（東から）



5 P-6（西から）



6 P-6遺物出土状況（南から）



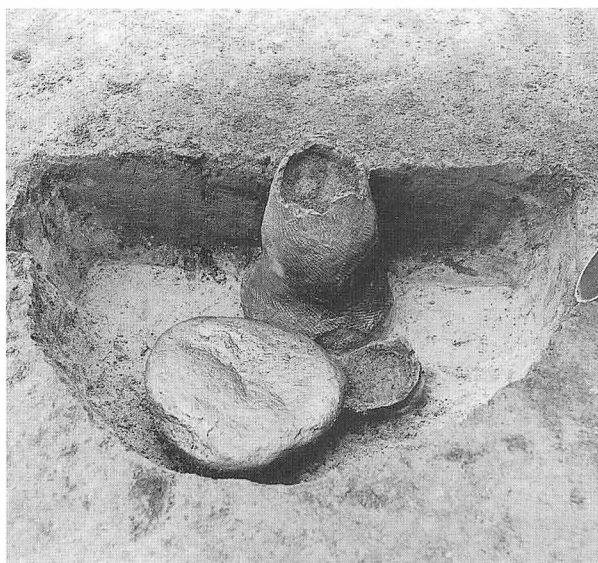
1 P-32土層断面（南西から）



2 P-32遺物出土状況（西から）



3 P-15（南から）



4 P-15土層断面、遺物出土状況（南から）



5 P-3（北から）



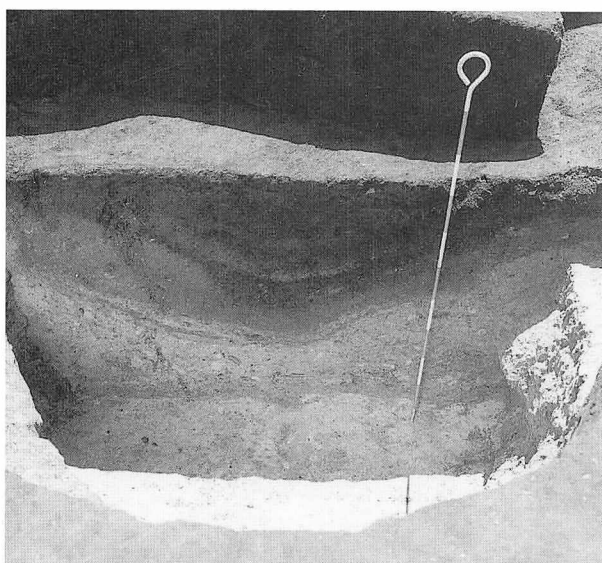
6 P-3遺物出土状況（東から）



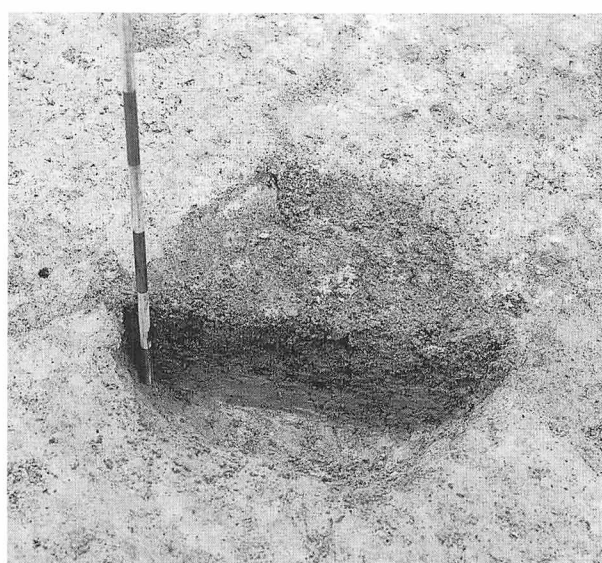
1 P-3 土層断面 (北から)



2 P-5 (北西から)



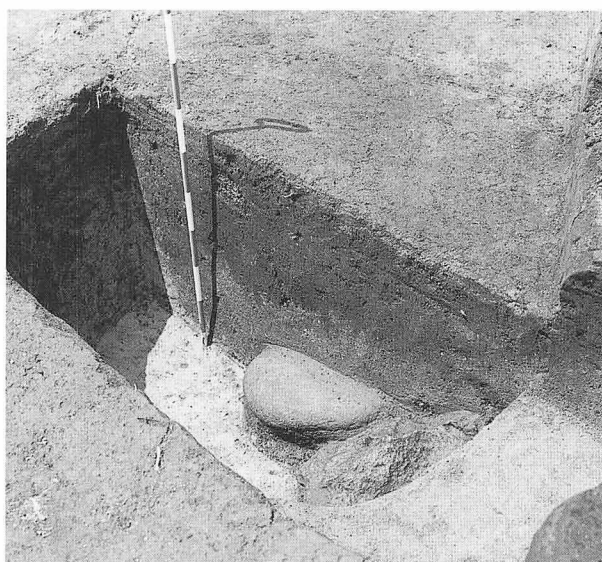
3 P-5 土層断面 (北西から)



4 P-5 付属土層断面 (南東から)



5 P-21 (南東から)



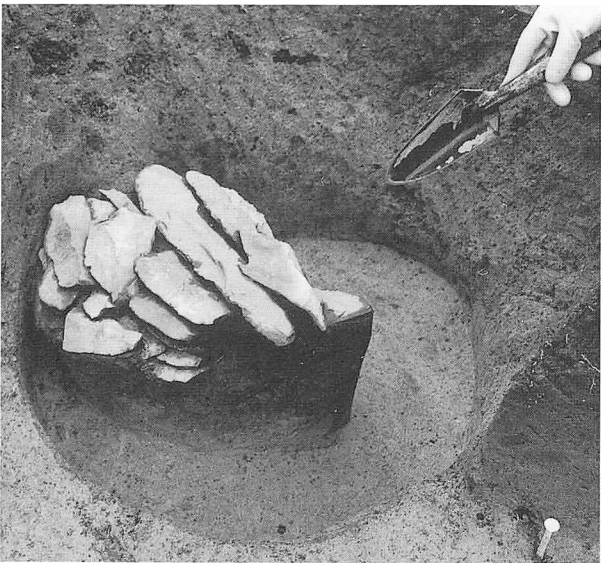
6 P-21 土層断面 (南東から)



1 P-13土層断面 (南から)



2 P-13遺物出土状況 (北西から)



3 P-13遺物出土状況 (南から)



4 P-13遺物出土状況 (北から)



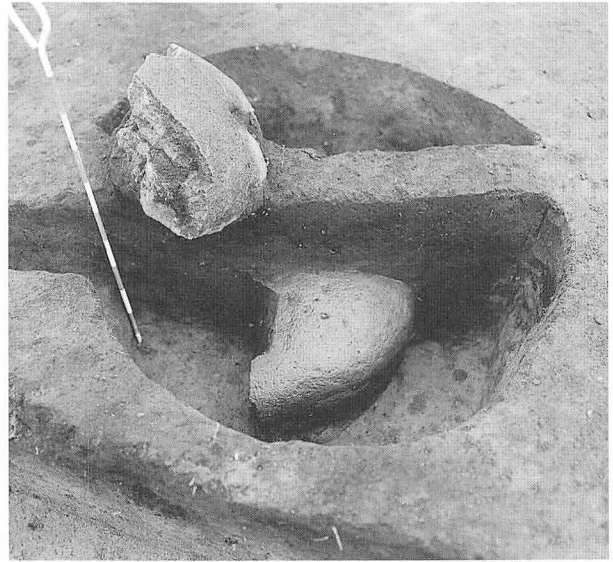
5 P-24 (南東から)



6 P-24土層断面 (南から)



1 P-30 (東から)



2 P-30土層断面 (北から)



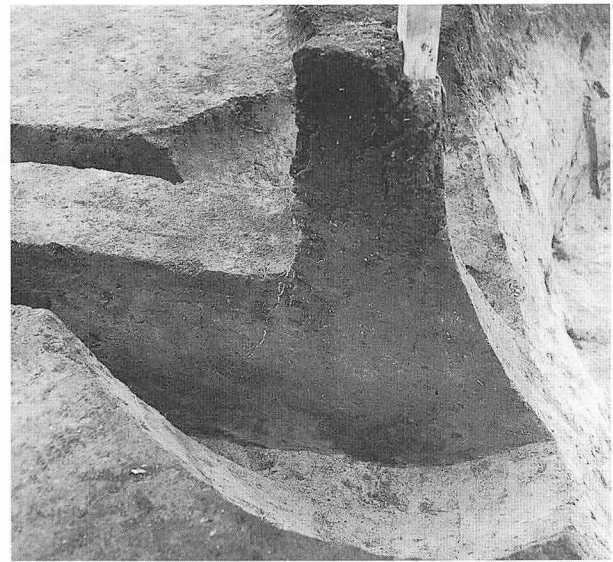
3 P-1 (北西から)



4 P-1土層断面 (南から)



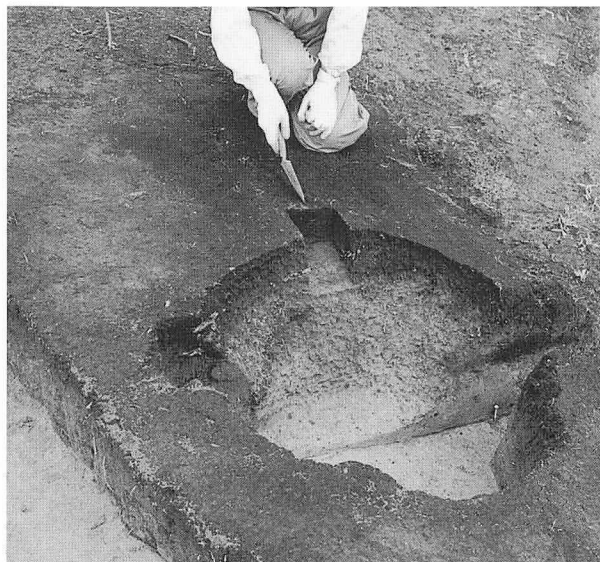
5 P-2 (東から)



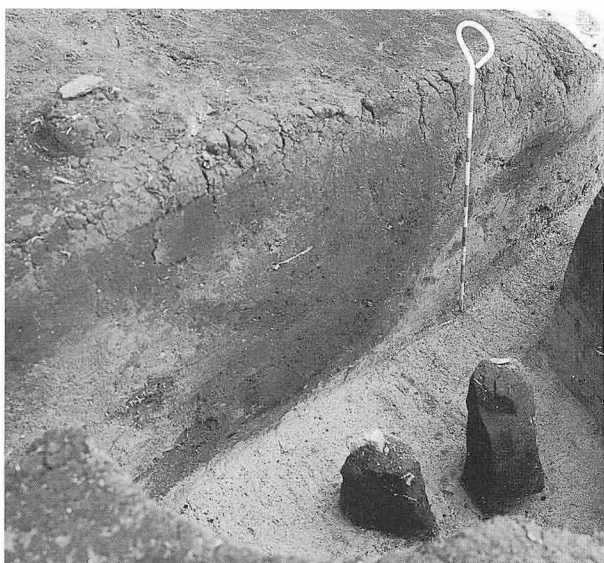
6 P-2土層断面 (東から)



1 P-8 (南東から)



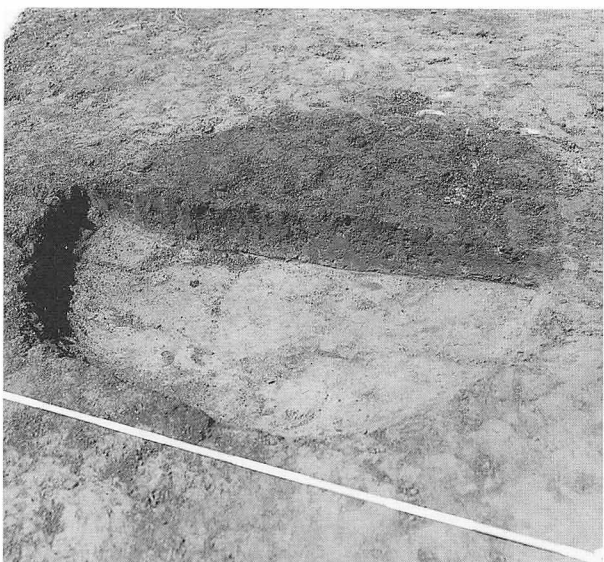
2 P-9 (南西から)



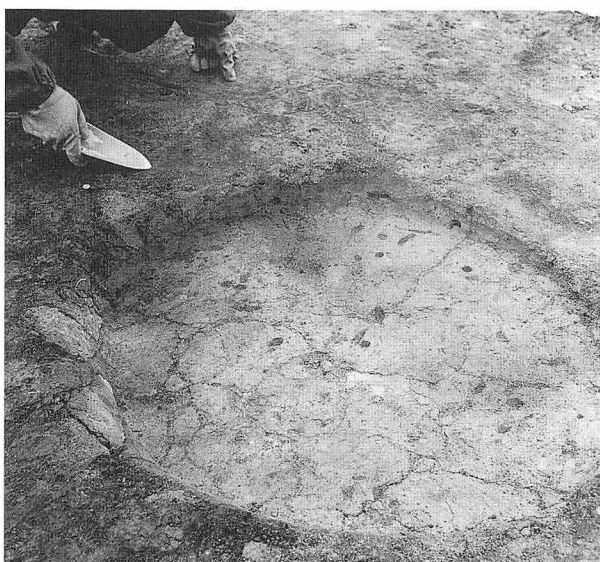
3 P-9土層断面 (南から)



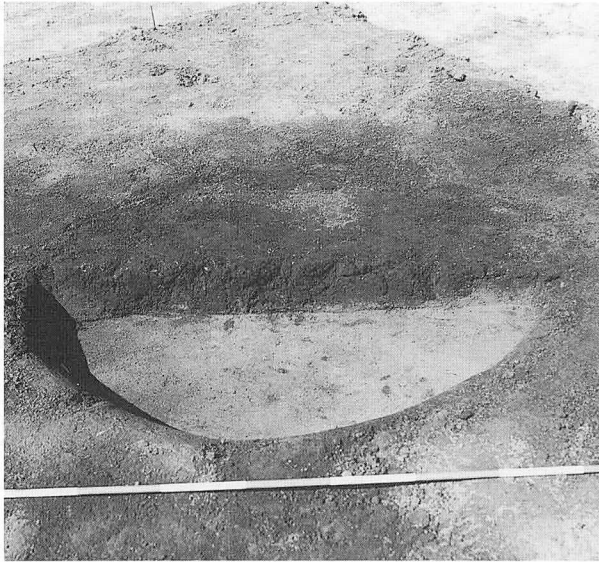
4 P-11 (南東から)



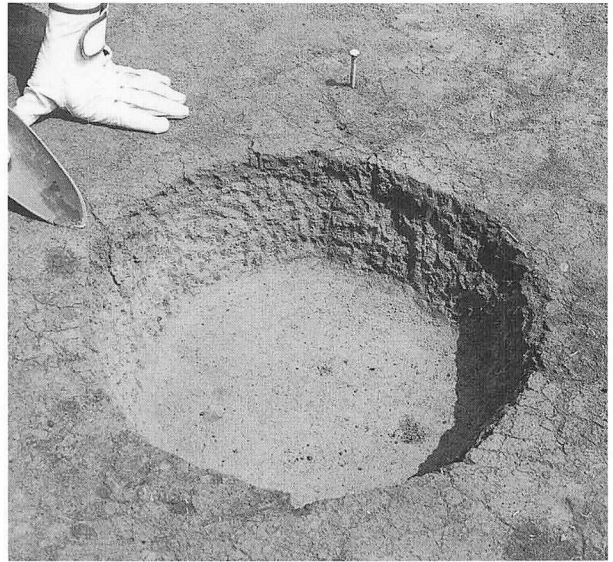
5 P-11土層断面 (南から)



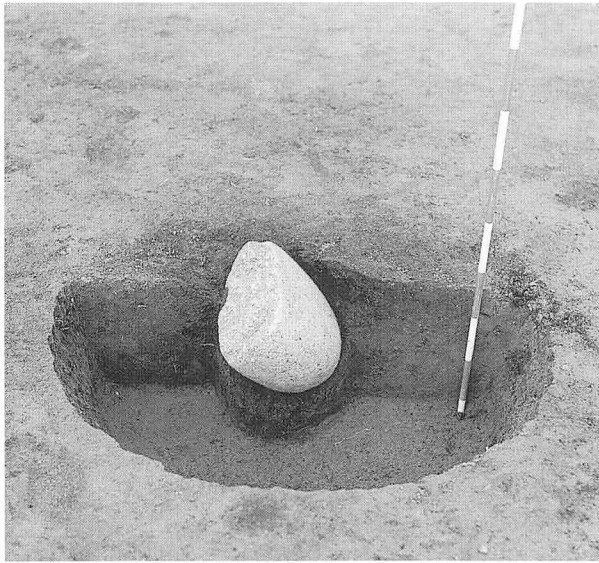
6 P-12 (南西から)



1 P-12土層断面 (南西から)



2 P-14 (南から)



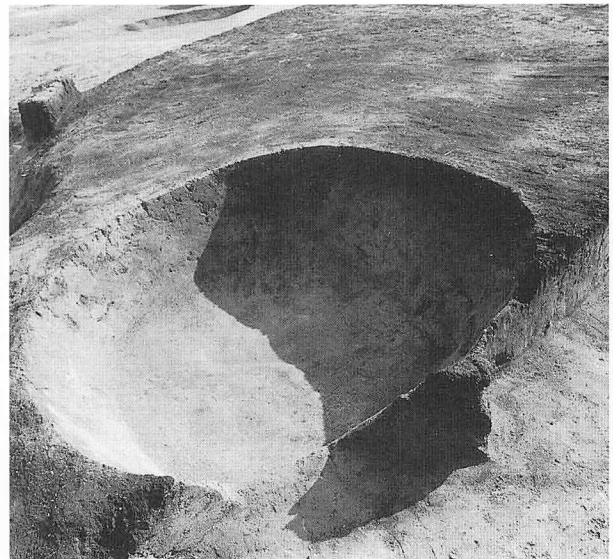
3 P-14土層断面 (西から)



4 P-16 (南東から)



5 P-16土層断面 (南から)



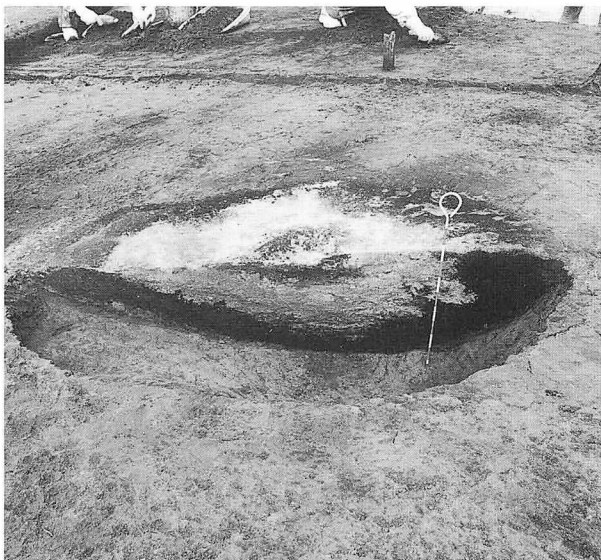
6 P-17 (北東から)



1 P-17土層断面 (南西から)



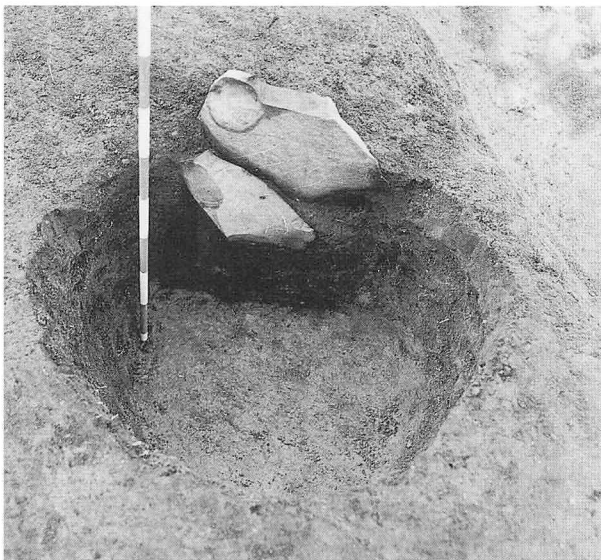
2 P-18 (南西から)



3 P-18土層断面 (南西から)



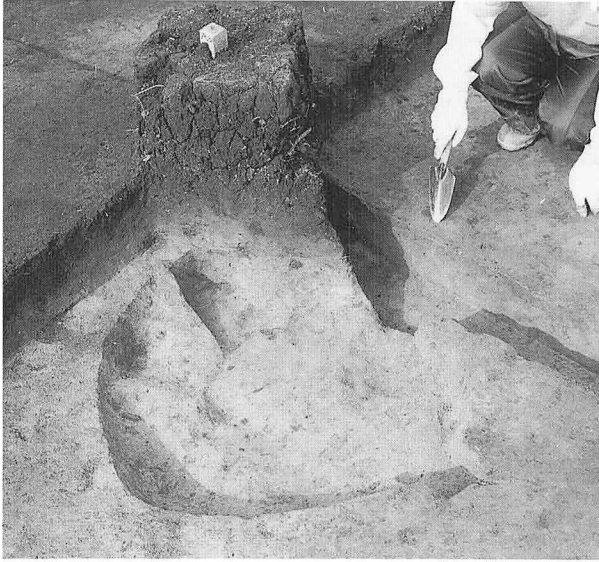
4 P-19 (西から)



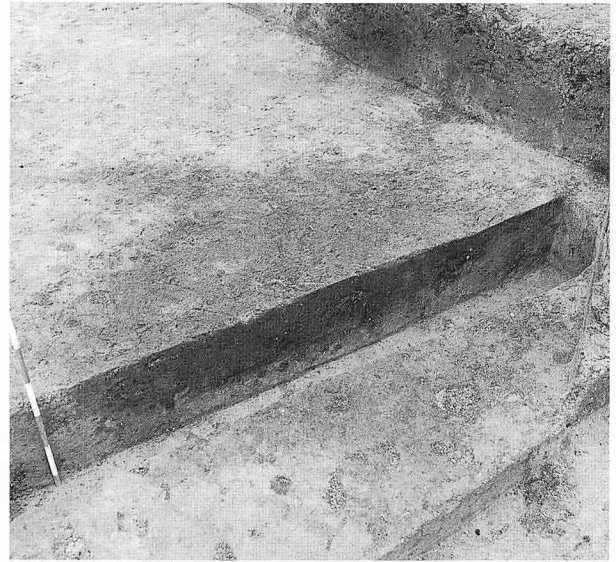
5 P-19土層断面 (南西から)



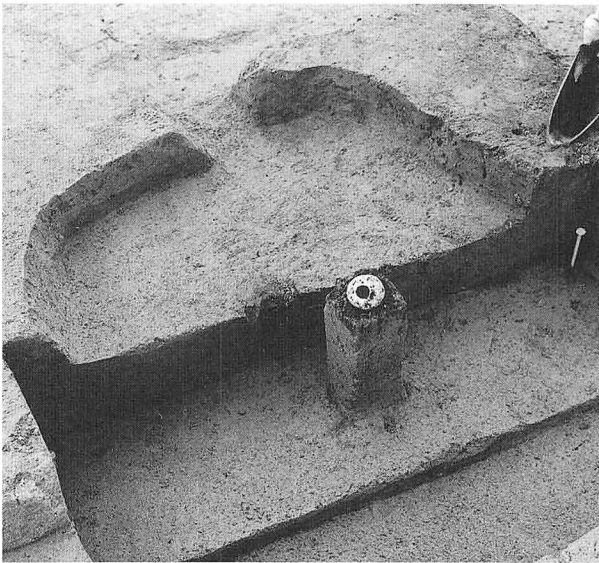
6 P-20 (北東から)



1 P-22 (南から)



2 P-22土層断面 (東から)



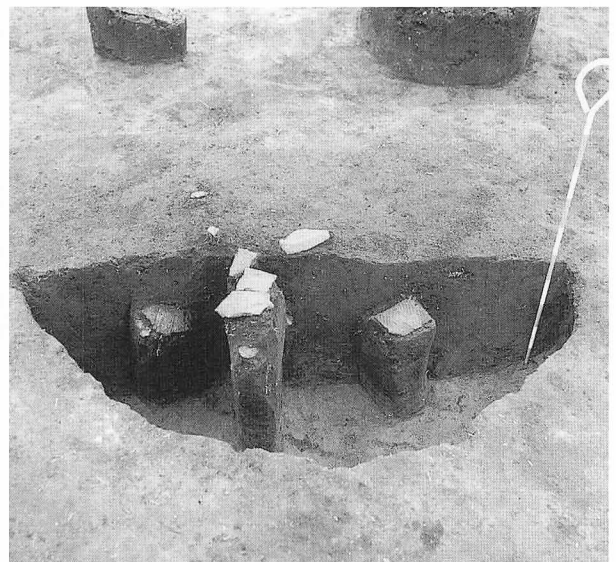
3 P-23 (南西から)



4 P-23遺物出土状況 (西から)



5 P-26 (南西から)



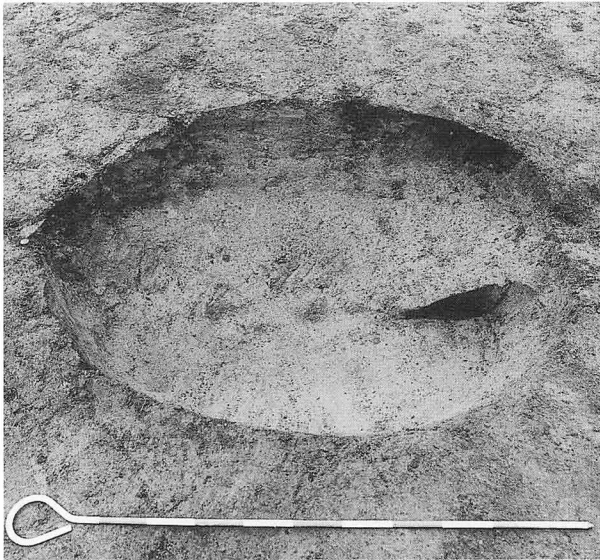
6 P-26土層断面 (東から)



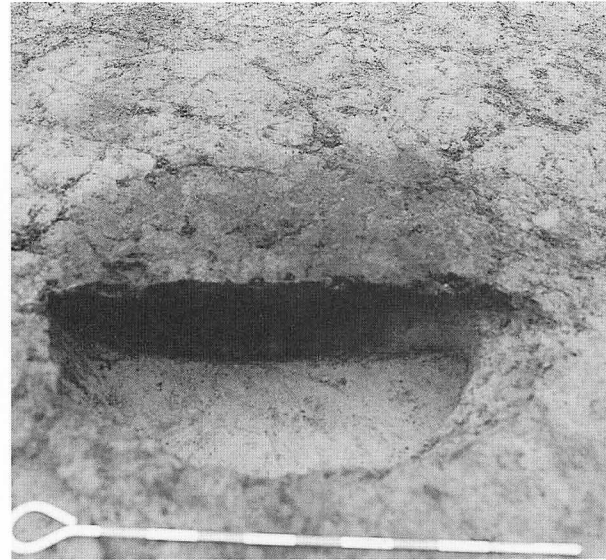
1 P-27 (東から)



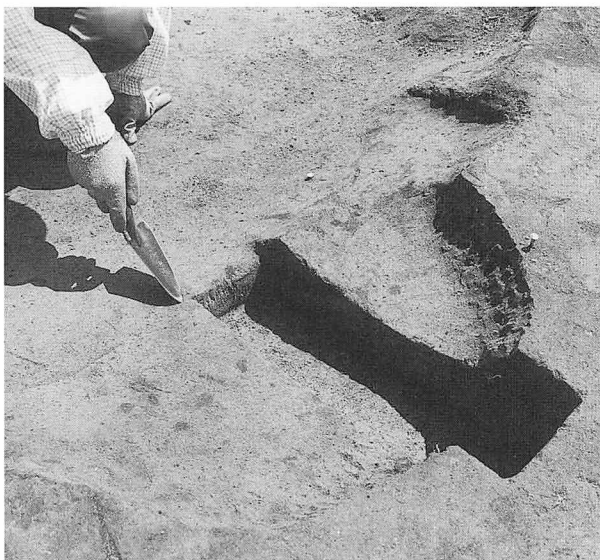
2 P-27土層断面 (東から)



3 P-28 (南西から)



4 P-28土層断面 (南西から)



5 P-29 (北西から)



6 P-29土層断面 (南西から)



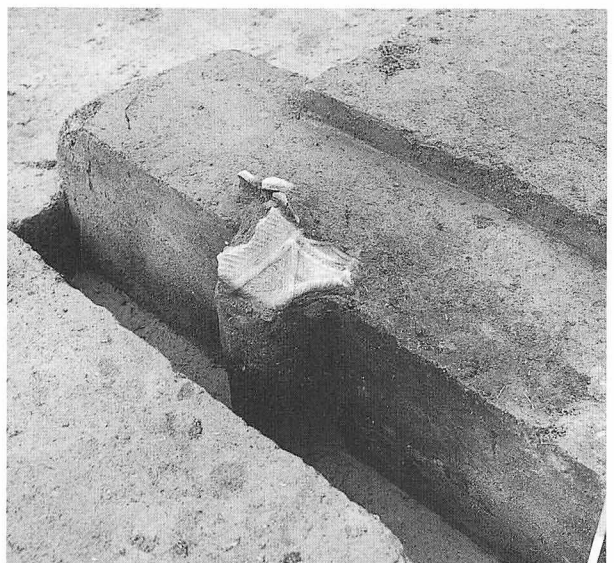
1 P-31遺物出土状況（南西から）



2 P-31土層断面（南西から）



3 P-33（南西から）



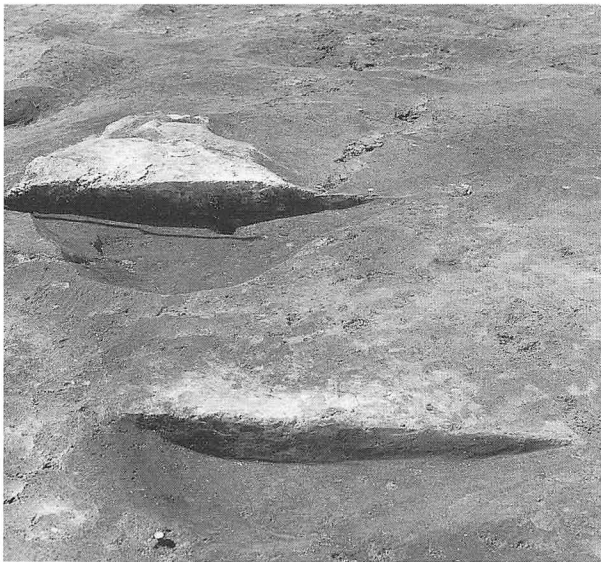
4 P-33土層断面（南から）



5 P-34（南から）



6 F-2（南東から）



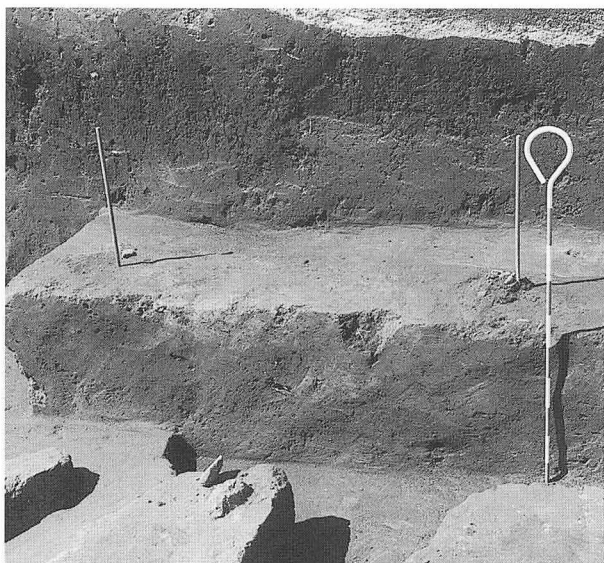
1 F-3・4 (南から)



2 F-6 (北西から)



3 F-8 (北西から)



4 F-10 (南から)



5 F-11・12 (南から)



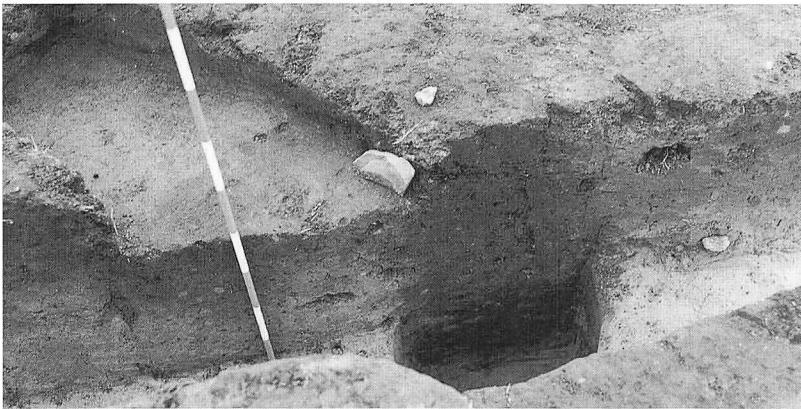
6 F-13 (南西から)



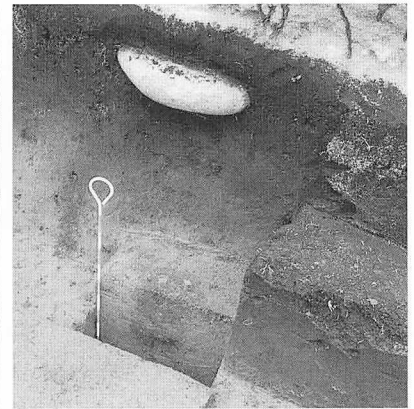
1 S-1 検出 (東から)



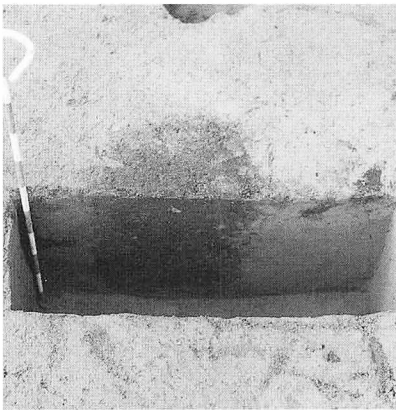
2 S-1 土層断面 (東から)



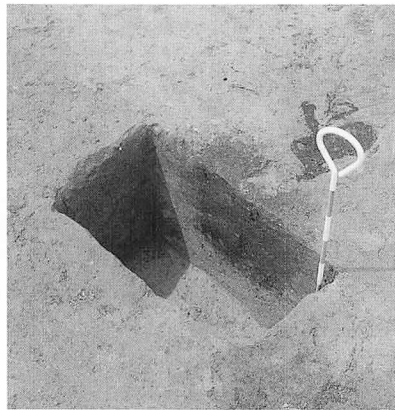
3 SP-4、5 土層断面 (北西から)



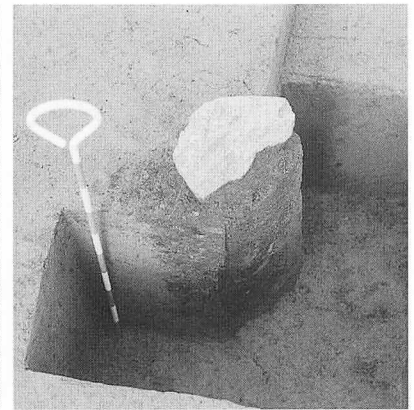
4 SP-10 (南東から)



5 SP-14 (南から)



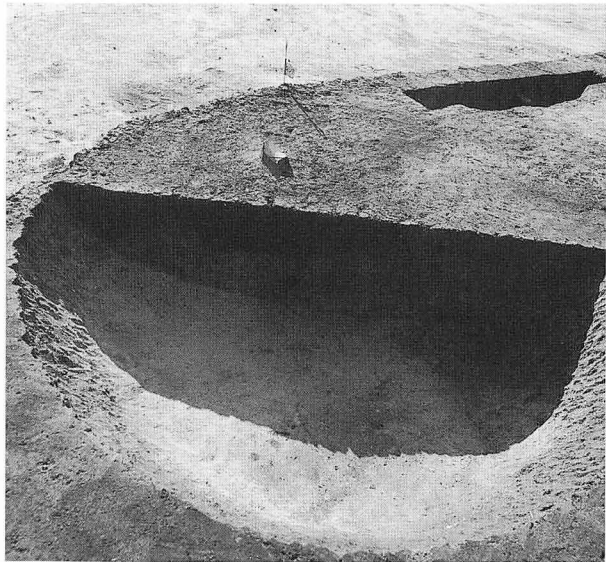
6 SP-22



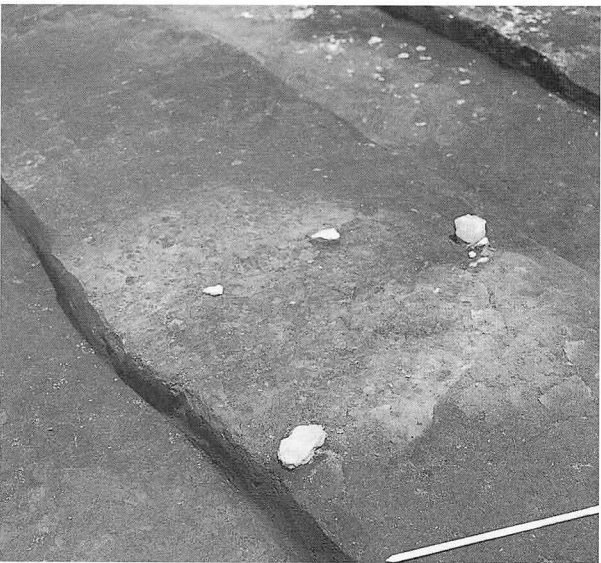
7 SP-23 (西から)



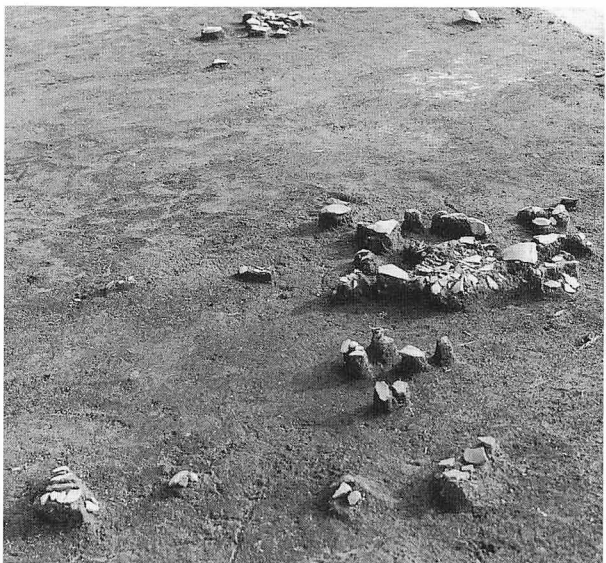
1 P-10 (北東から)



2 P-10土層断面 (南から)



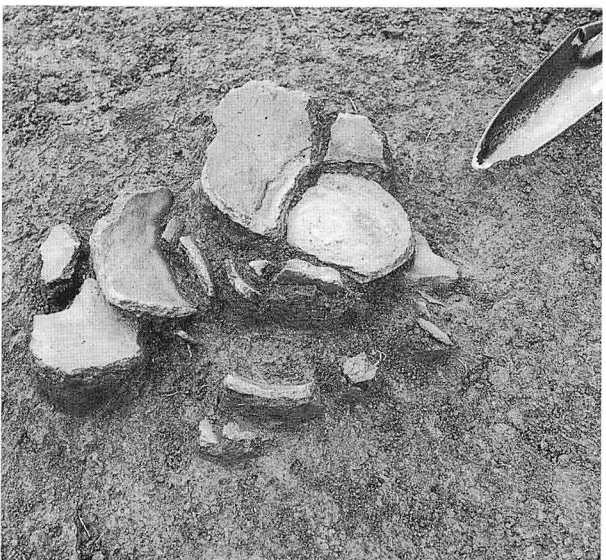
3 F-5 (南から)



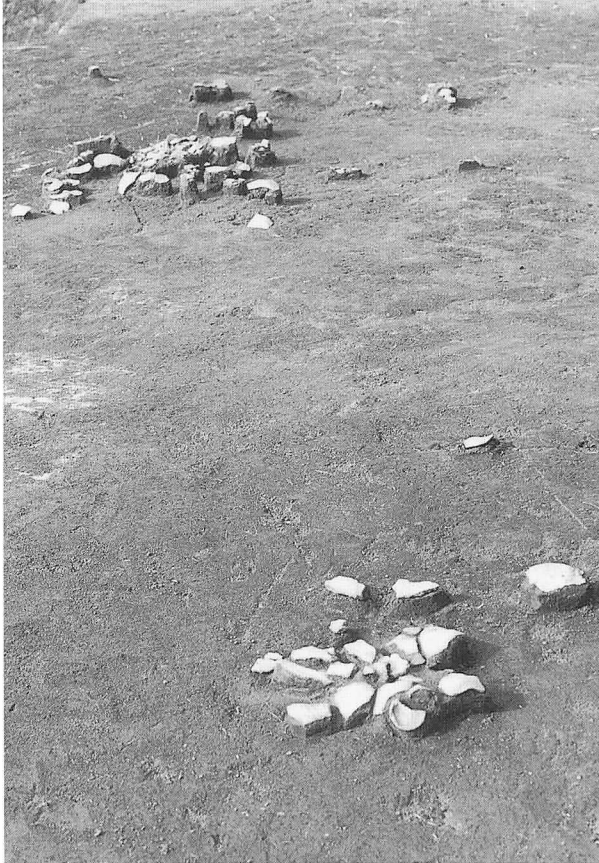
4 FC-1 (南から)



5 遺物出土状況 (O-22-d区 西から)



6 遺物出土状況 (S-18-a区 北から)



1 Ⅲ層上面遺物出土状況（北から）



2 Ⅳ層上面遺物出土状況（北西から）



3 遺物出土状況（P-24-d区 南から）



4 遺物出土状況（O-24-c区 北から）



5 遺物出土状況（S-22-d区 南西から）



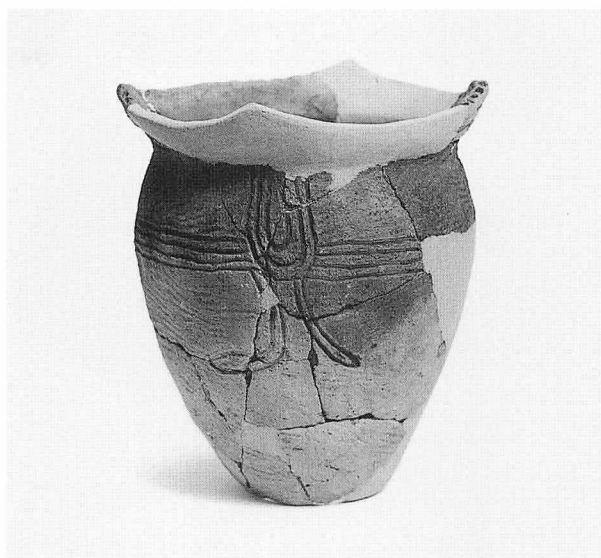
1 H-1 出土の土器 (図Ⅲ-5-1)



2 同左



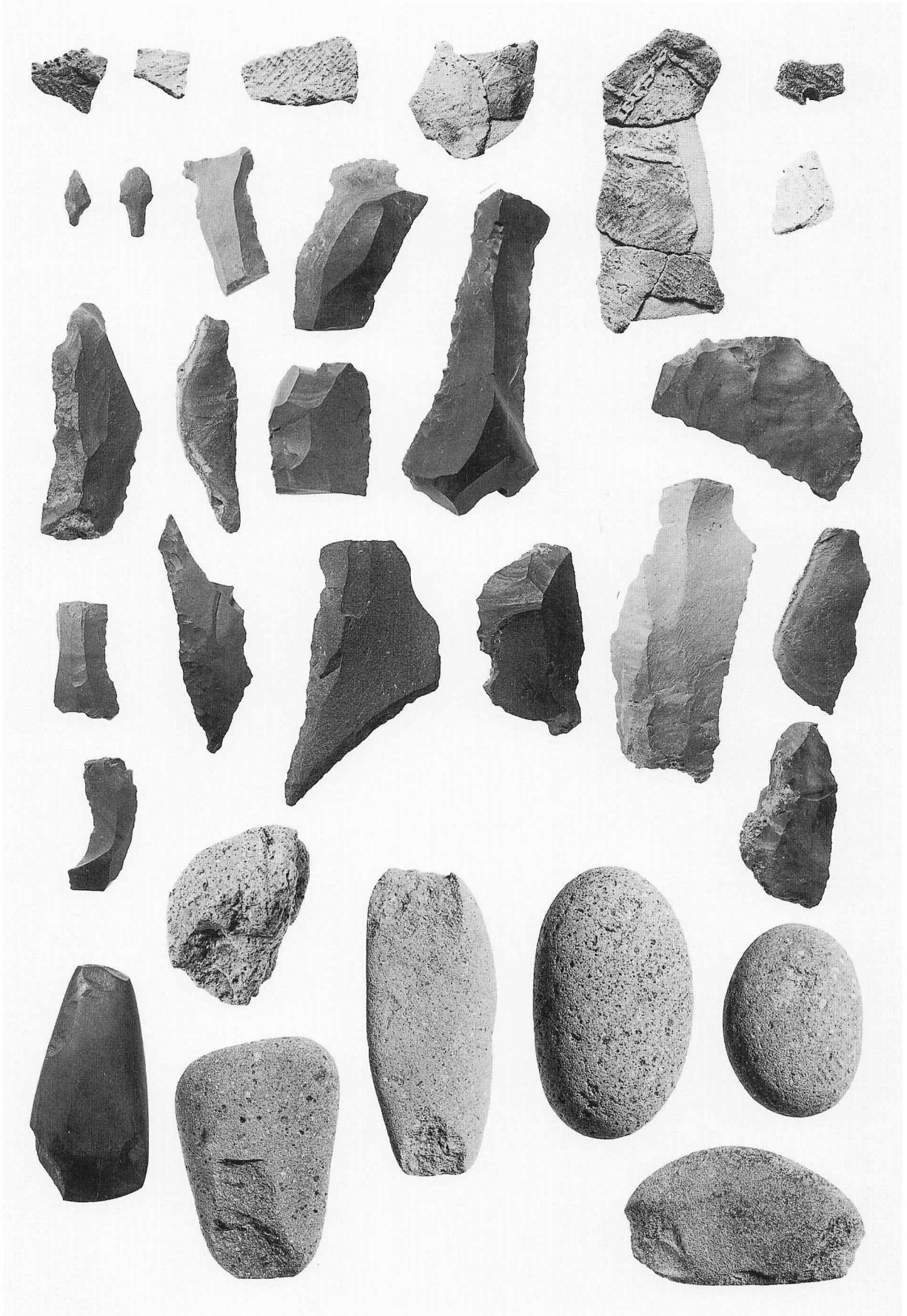
3 H-1 出土の土器 (図Ⅲ-5-2)



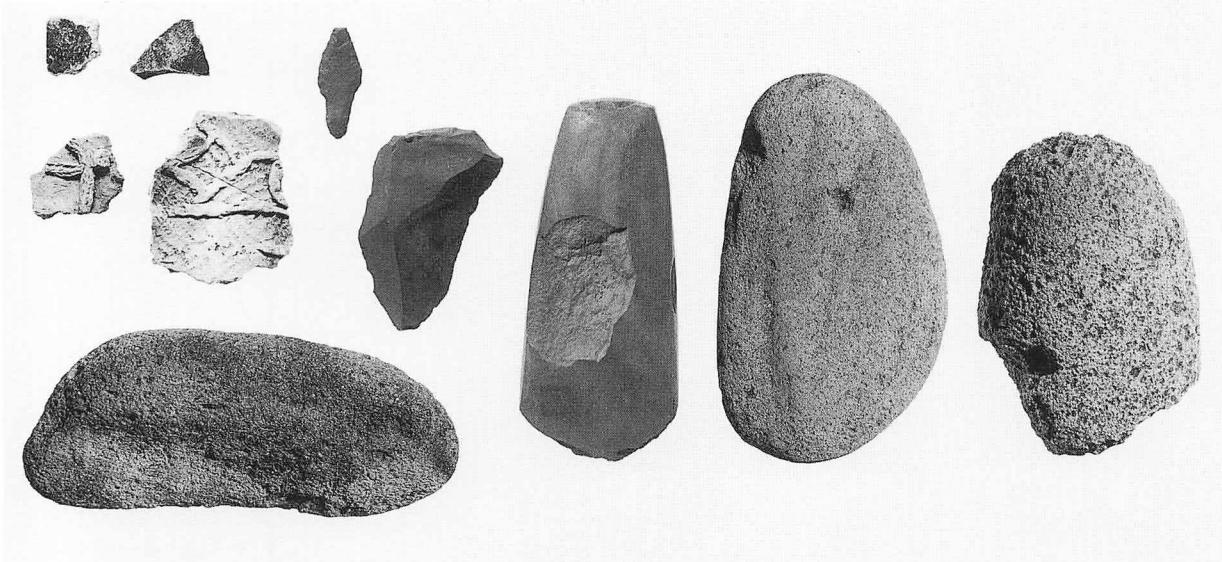
4 同左



5 H-1 出土の土器 (図Ⅲ-5-3)



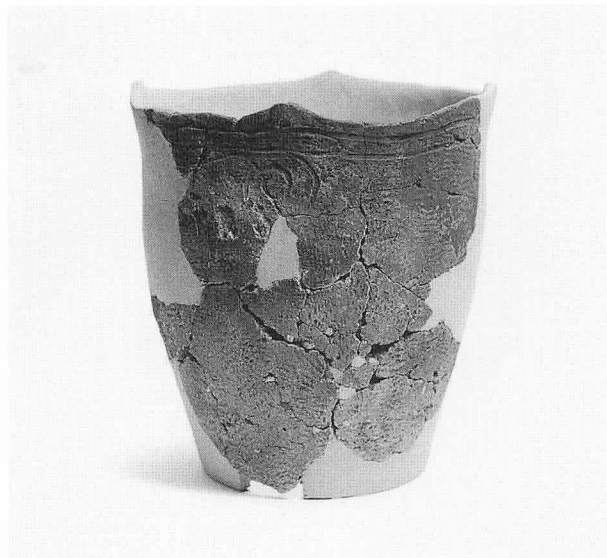
1 H-1 出土の遺物



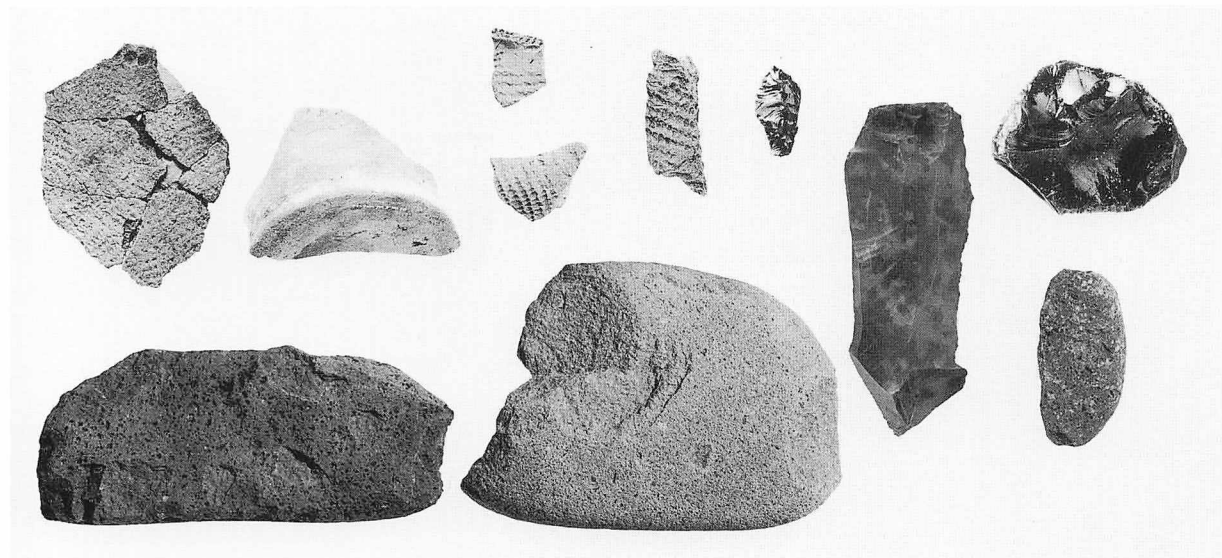
1 H-3 出土の遺物



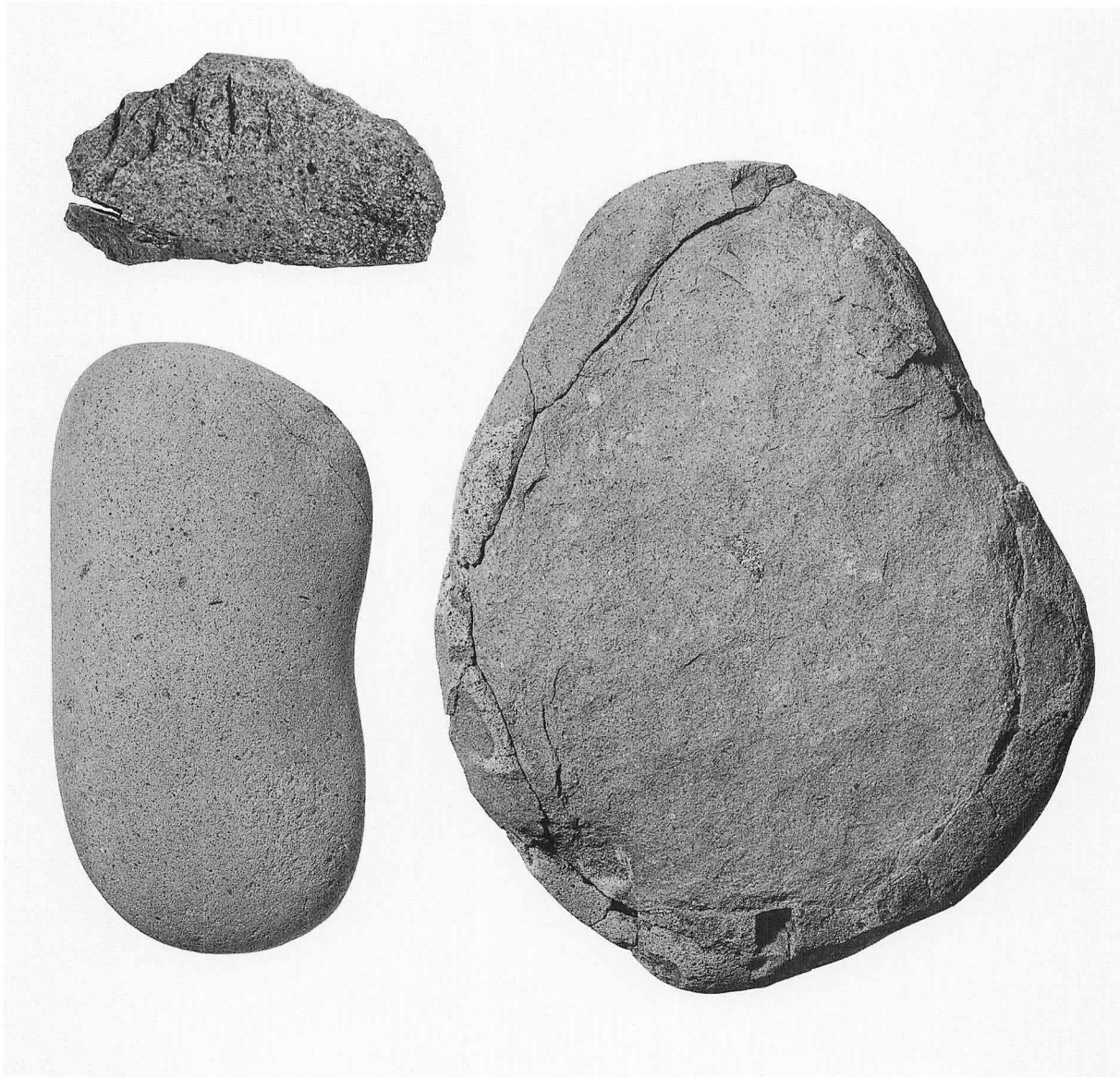
2 H-4 出土の土器 (図Ⅲ-16-1)



3 H-4 出土の土器 (図Ⅲ-16-2)



4 H-4 出土の遺物(1)



1 H-4 出土の遺物(2)



2 H-5 出土の土器 (図Ⅲ-23-1)



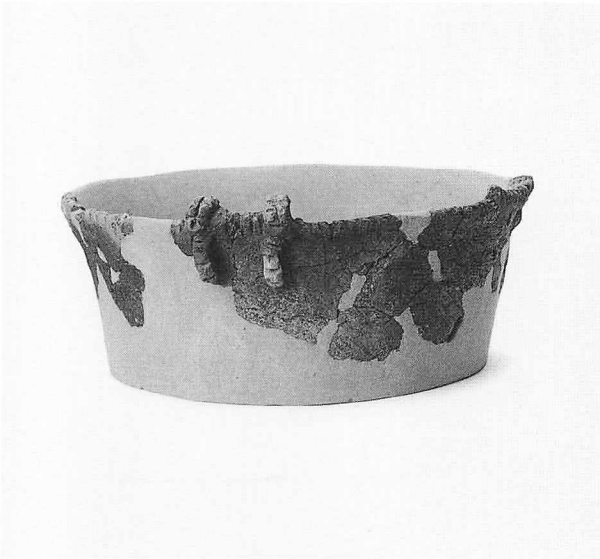
3 同左



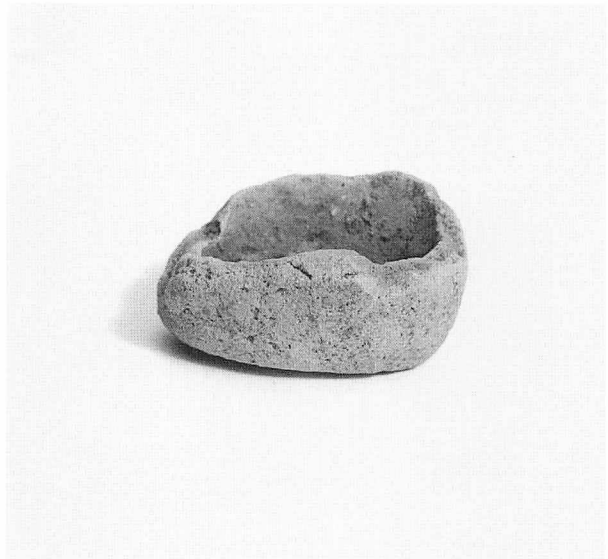
1 H-5 出土の土器 (図Ⅲ-24-2)



2 H-5 出土の土器 (図Ⅲ-24-3)



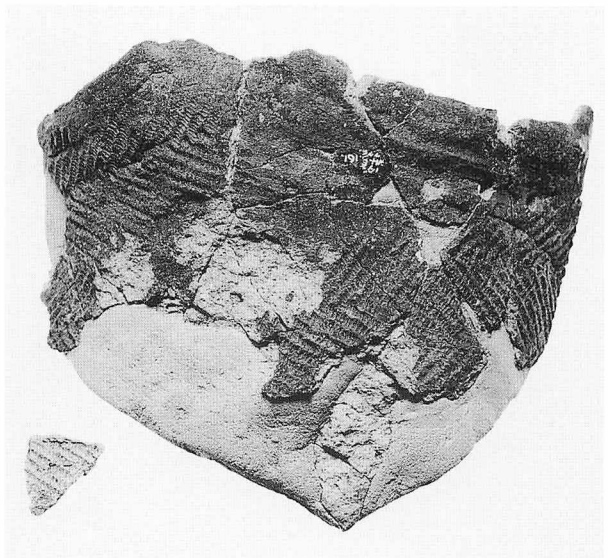
3 H-5 出土の土器 (図Ⅲ-25-4)



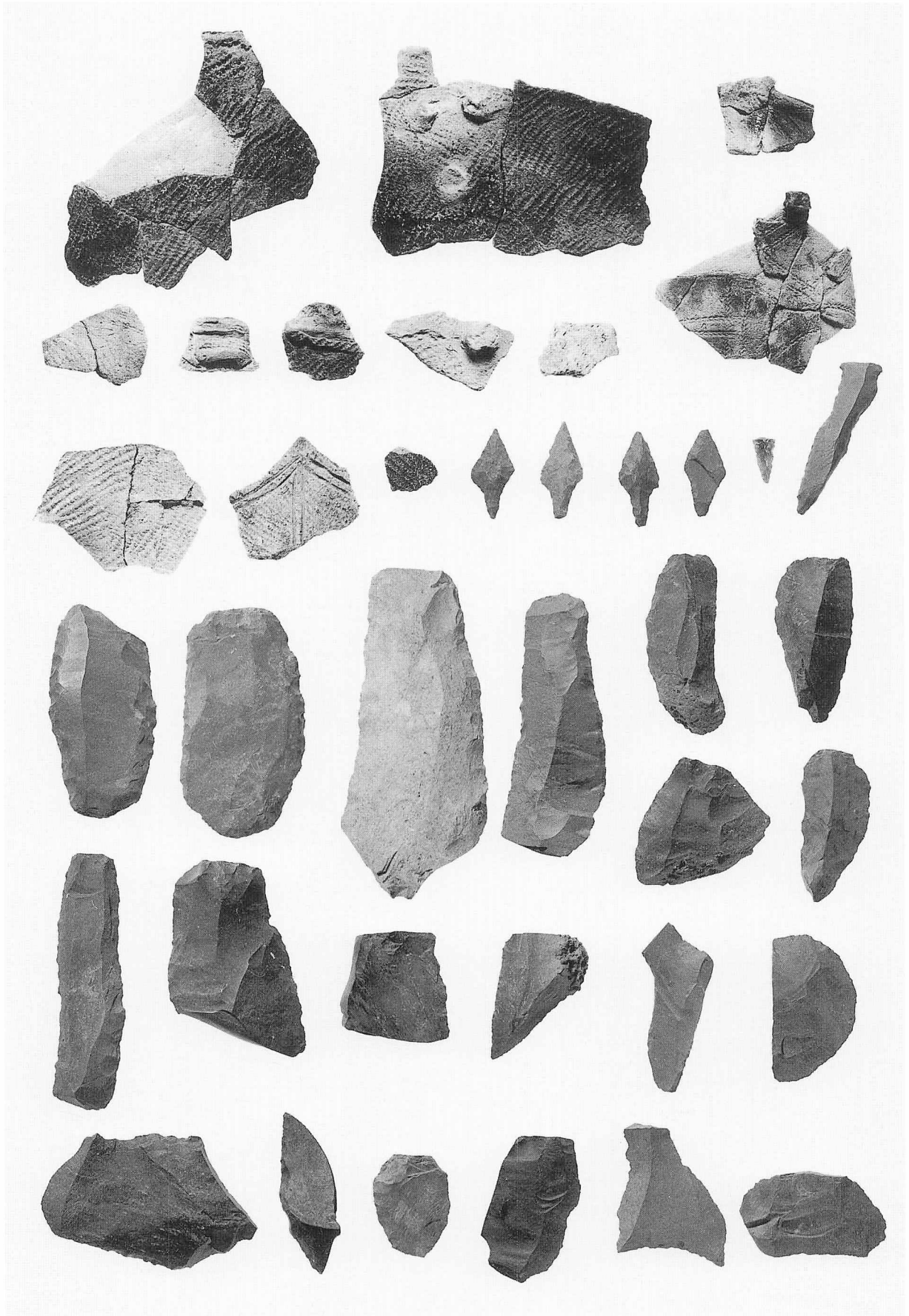
4 H-5 出土の土器 (図Ⅲ-25-5)



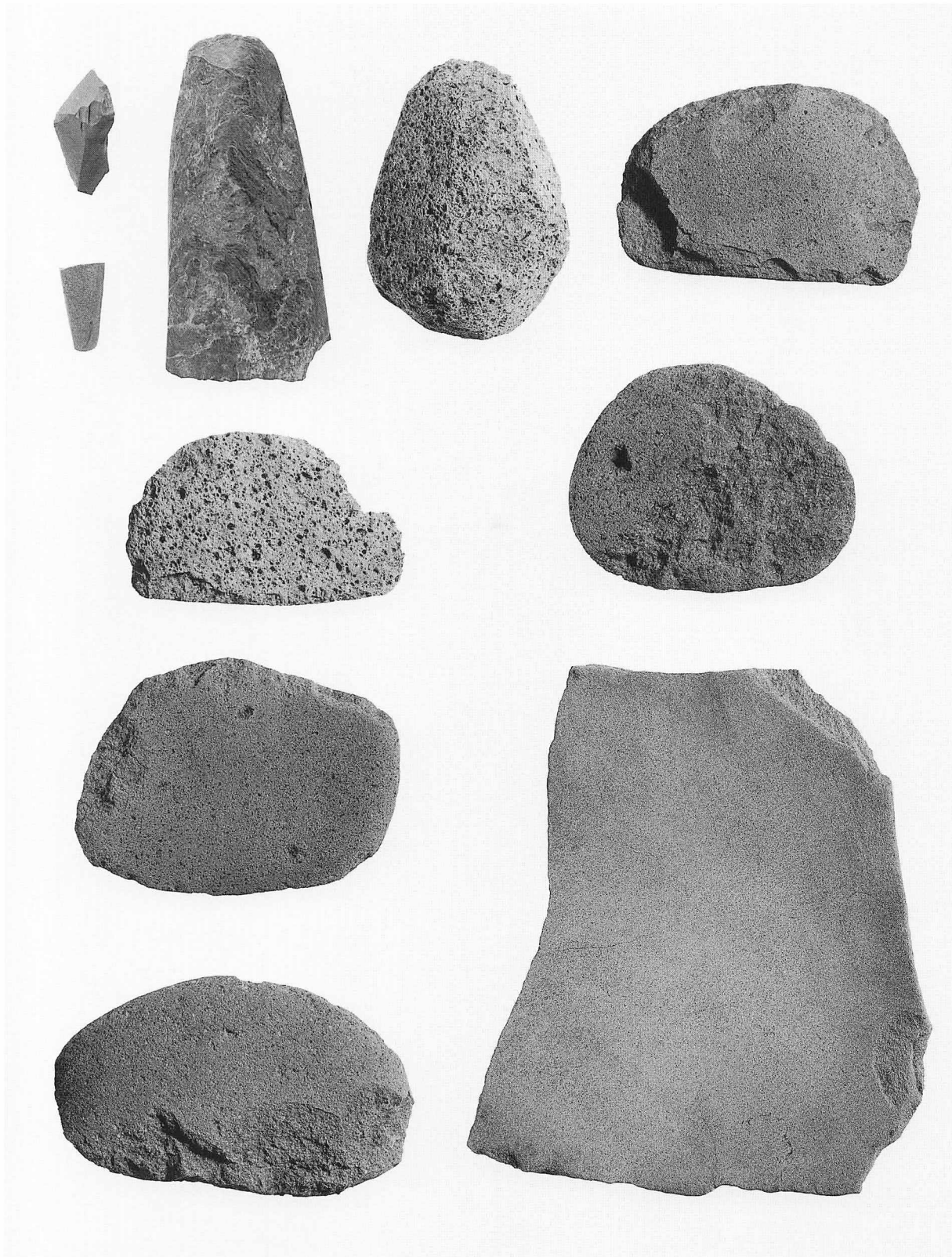
5 H-5 出土の土器 (図Ⅲ-25-10)



6 H-5 出土の遺物(1)



1 H-5 出土の遺物(2)



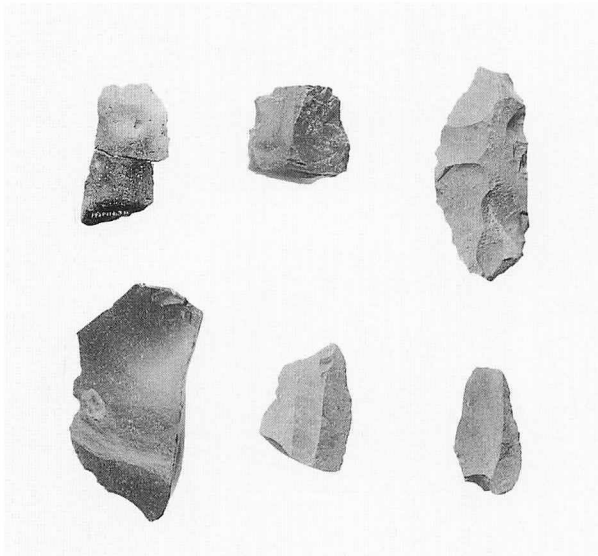
1 H-5 出土の遺物(3)



1 H-6 出土の土器 (図Ⅲ-32-1)



2 H-6 出土の土器 (図Ⅲ-32-2)



3 H-6 出土の遺物



4 H-7 出土の土器 (図Ⅲ-38-1)



5 H-7 出土の土器 (図Ⅲ-38-2)



6 H-7 出土の土器 (図Ⅲ-39-7)



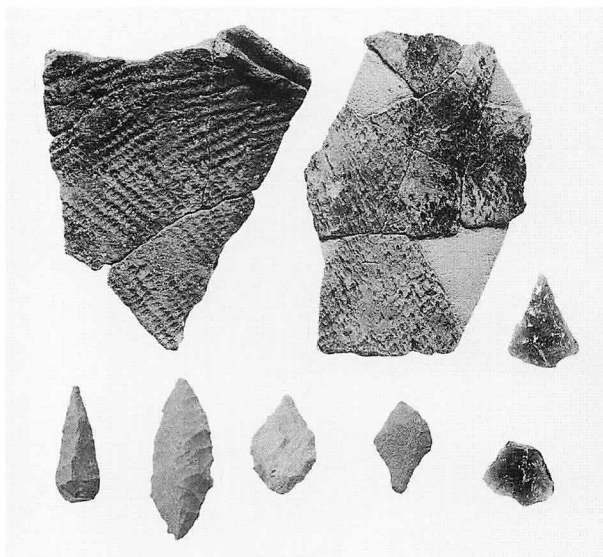
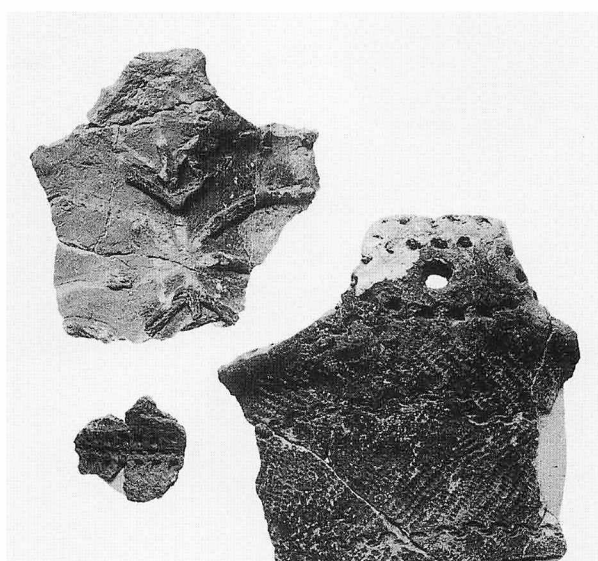
1 H-7出土の土器(図Ⅲ-39-8)



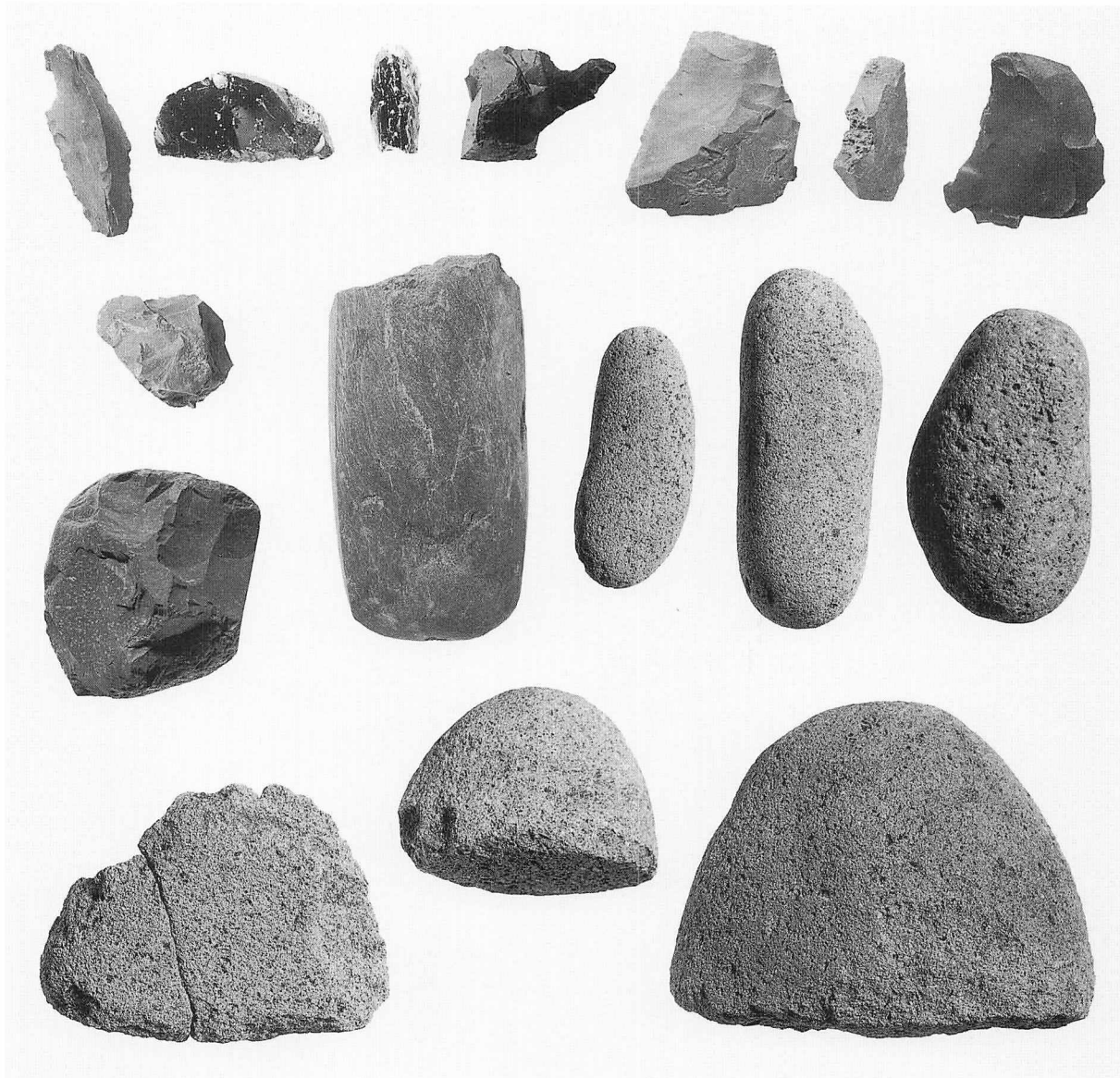
2 H-7出土の土器(図Ⅲ-39-9)



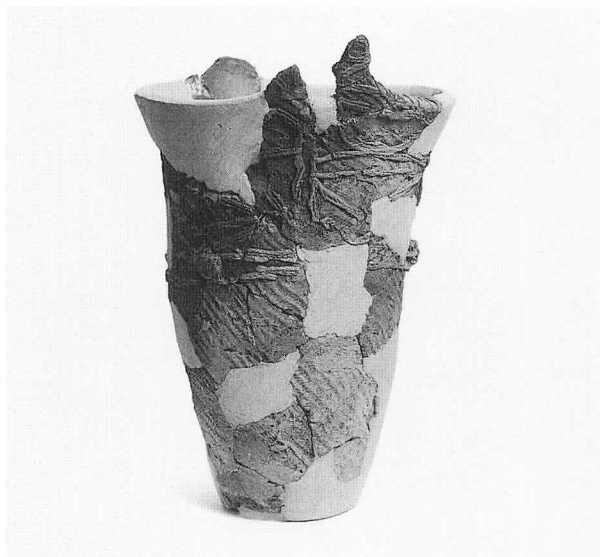
3 H-7出土の土器(図Ⅲ-39-10)



4 H-7出土の遺物(1)



1 H-7出土の遺物(2)



2 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-45-1)



3 H-1・5掘上土出土の土器(図Ⅲ-45-2)



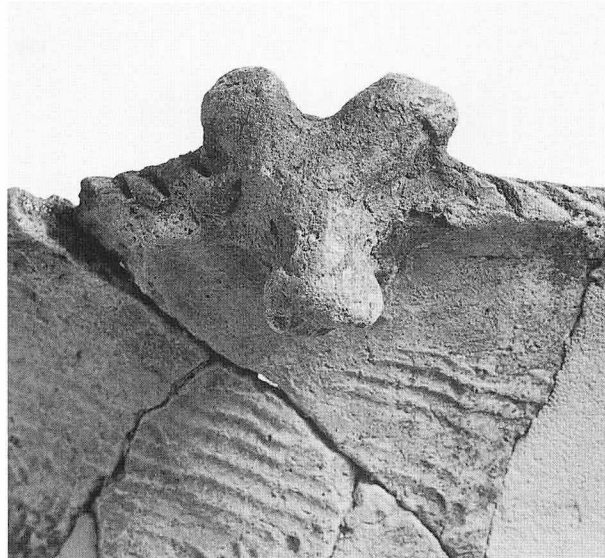
1 H-1・5 掘上土出土の土器 (図Ⅲ-45-3)



2 H-1・5 掘上土出土の土器 (図Ⅲ-46-4)



3 同右上



4 同突起部分の拡大



5 H-1・5 掘上土出土の土器 (図Ⅲ-46-5)



6 H-1・5 掘上土出土の土器 (図Ⅲ-46-6)



1 H-1・5 掘上土出土の土器 (図Ⅲ-46-7)



2 H-1・5 掘上土出土の土器 (図Ⅲ-47-8)



3 H-1・5 掘上土出土の土器 (図Ⅲ-47-9)



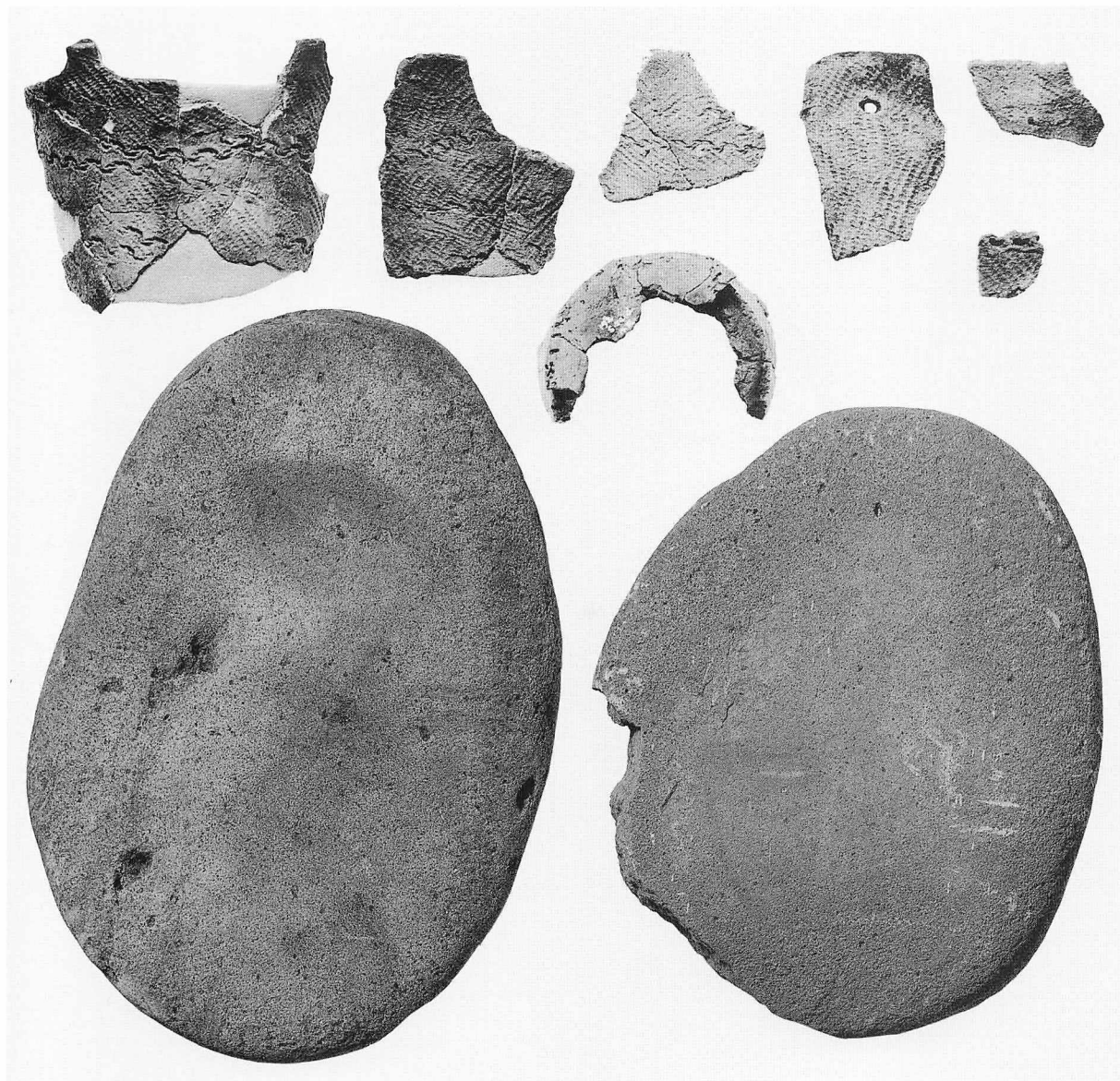
4 H-1・5 掘上土出土の土器 (図Ⅲ-47-10)



5 H-1・5 掘上土出土の土器 (図Ⅲ-47-17)



6 H-1・5 掘上土出土の土器 (図Ⅲ-47-18)



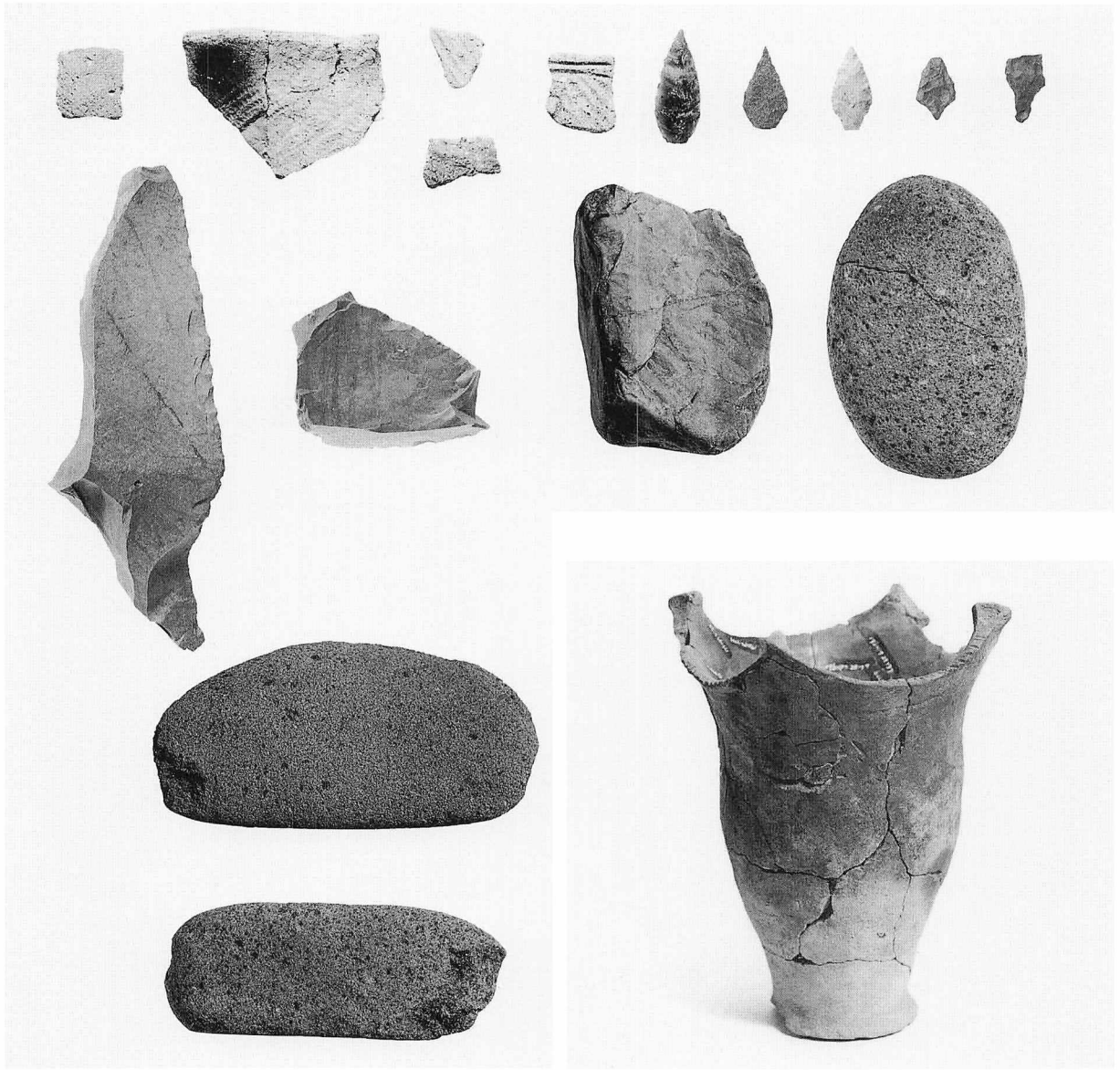
1 H-1・5 掘上土出土の遺物



2 P-6 出土の土器 (図Ⅲ-51-1)

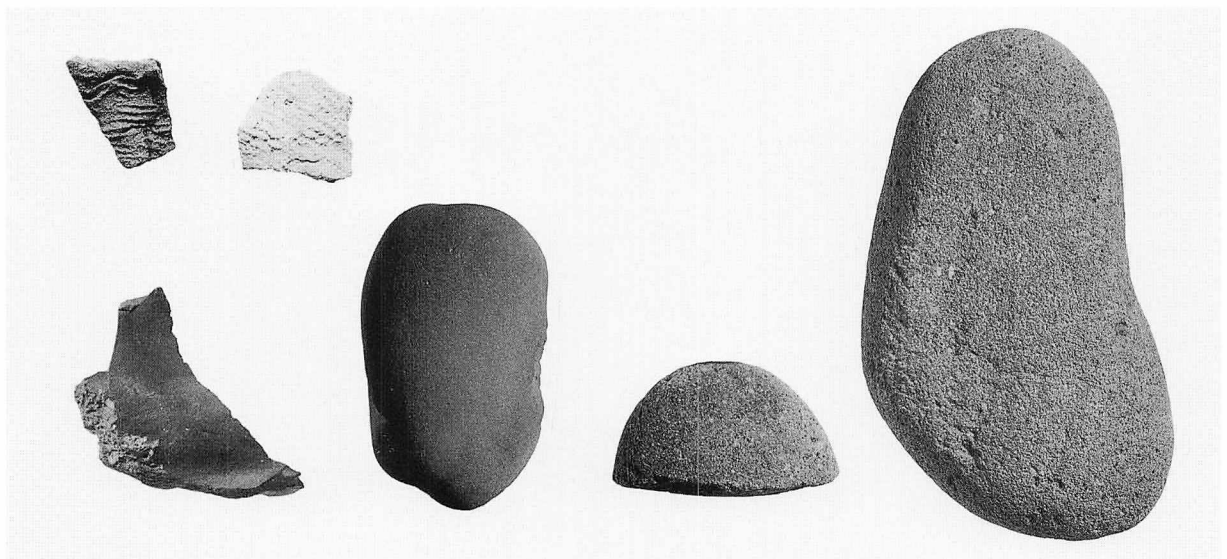


3 P-6 出土の土器 (図Ⅲ-51-3)



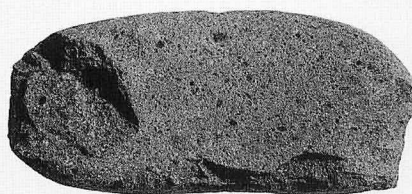
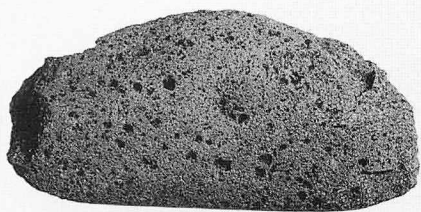
1 P-4・6出土の遺物

2 P-7出土の土器(図Ⅲ-53-1)

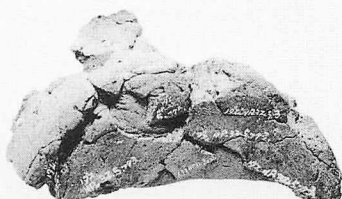
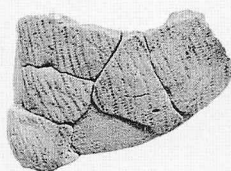
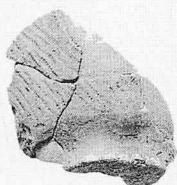
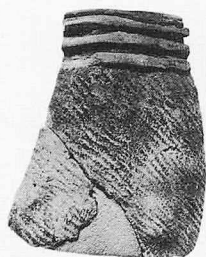


3 P-7出土の遺物

P-25



P-32



P-15



1 P-25・32・15出土の遺物

2 P-15出土の土器 (図Ⅲ-56-1)



3 P-3出土の土器 (図Ⅲ-59-1)



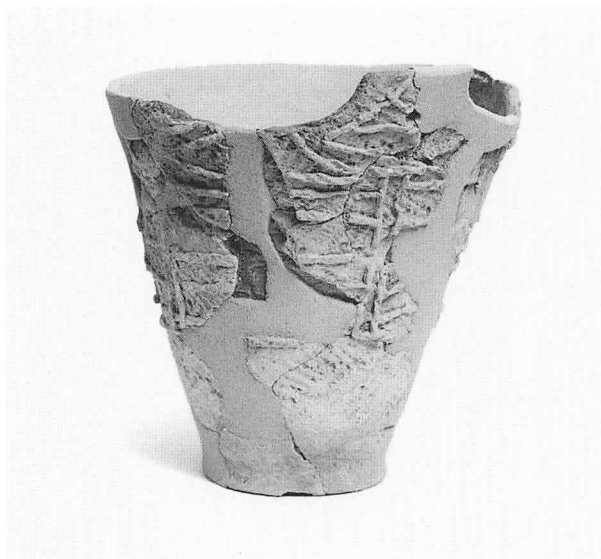
4 P-3出土の土器 (図Ⅲ-59-2)



1 P-3 出土の土器 (図Ⅲ-59-3)



2 P-3 出土の土器 (図Ⅲ-60-4)



3 P-3 出土の土器 (図Ⅲ-60-5)



4 P-3 出土の土器 (図Ⅲ-60-6)



5 P-3 出土の土器 (図Ⅲ-60-7)



6 P-3 出土の土器 (図Ⅲ-60-8)



1 P-3 出土の土器 (図Ⅲ-61-9)



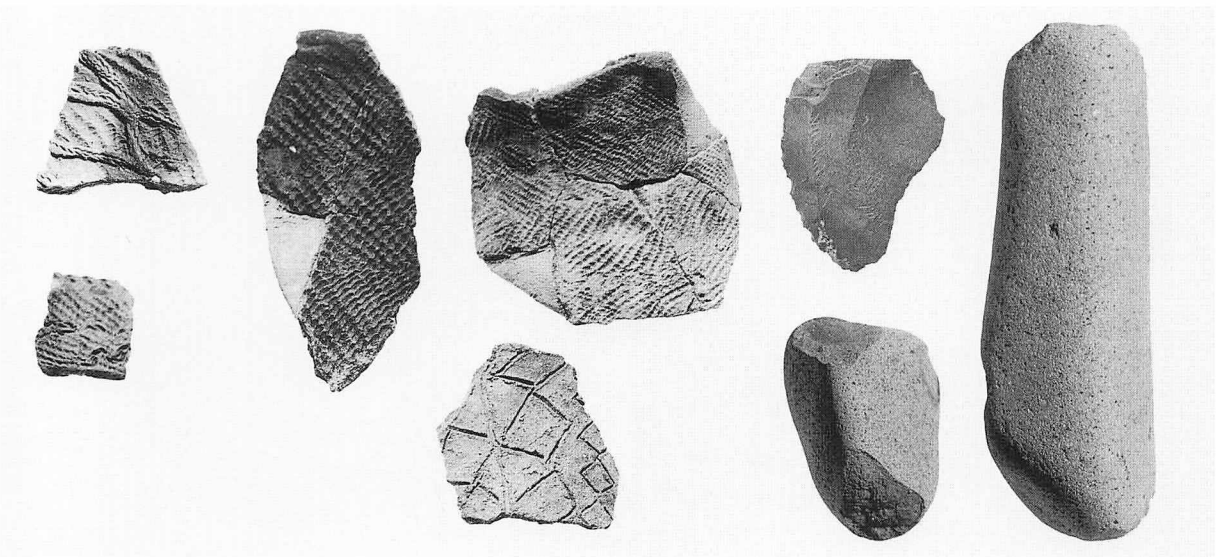
2 P-3 出土の土器 (図Ⅲ-61-10)



3 P-3 出土の土器 (図Ⅲ-61-11)



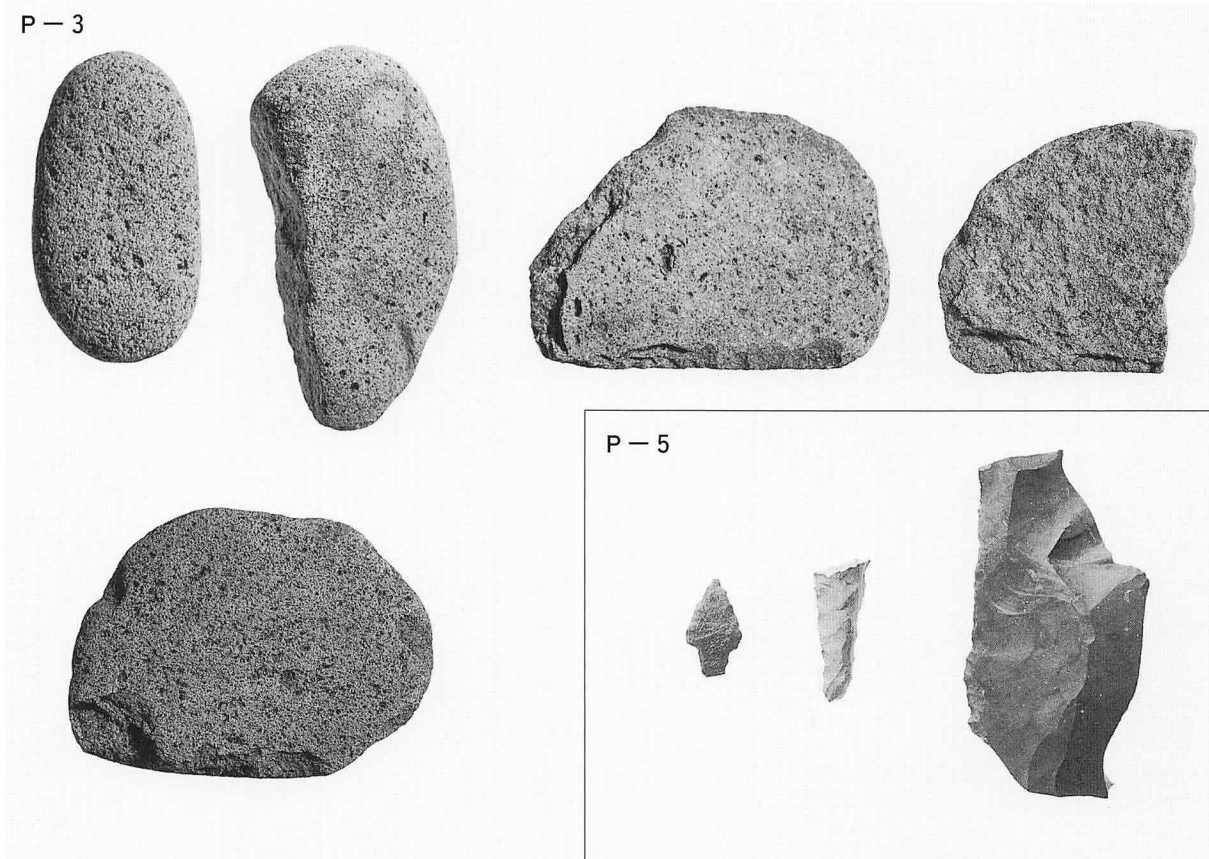
4 P-3 出土の土器 (図Ⅲ-61-12)



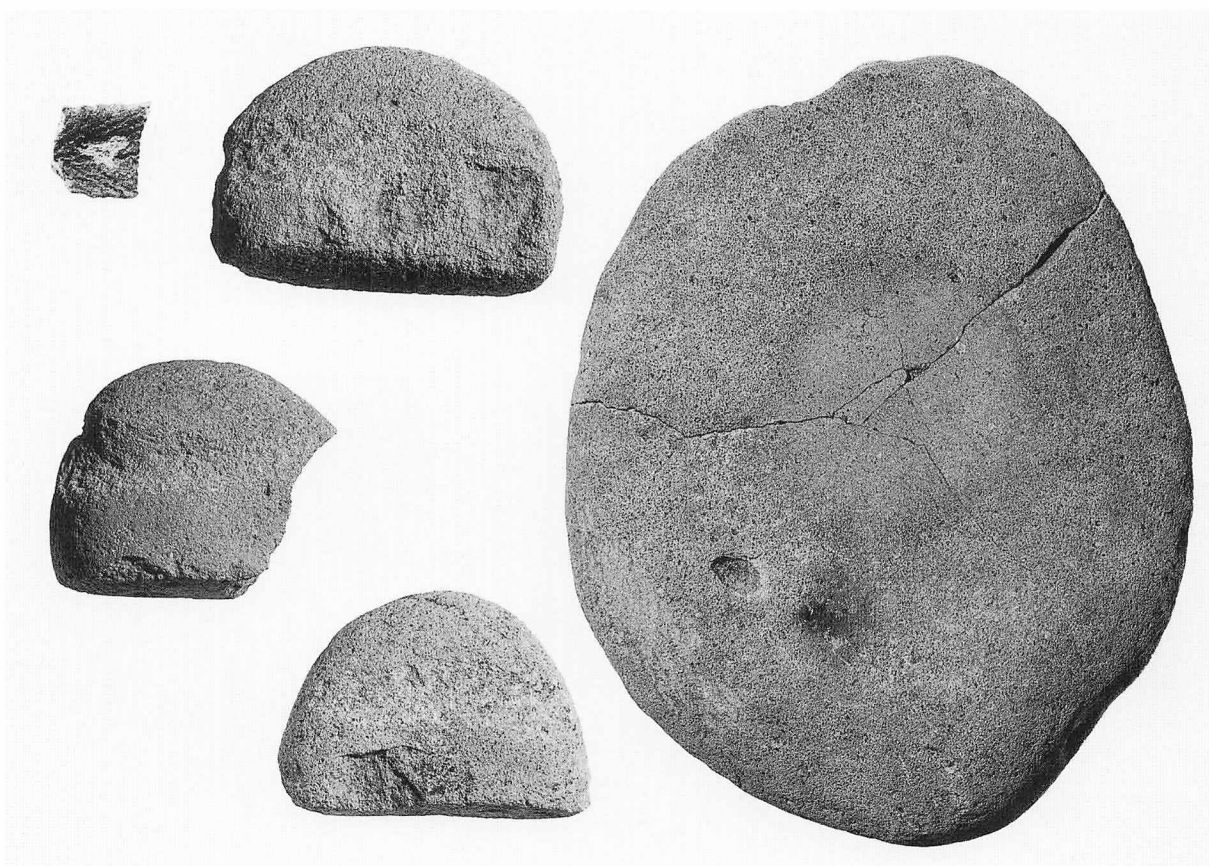
5 P-3 出土の遺物(1)

図版50

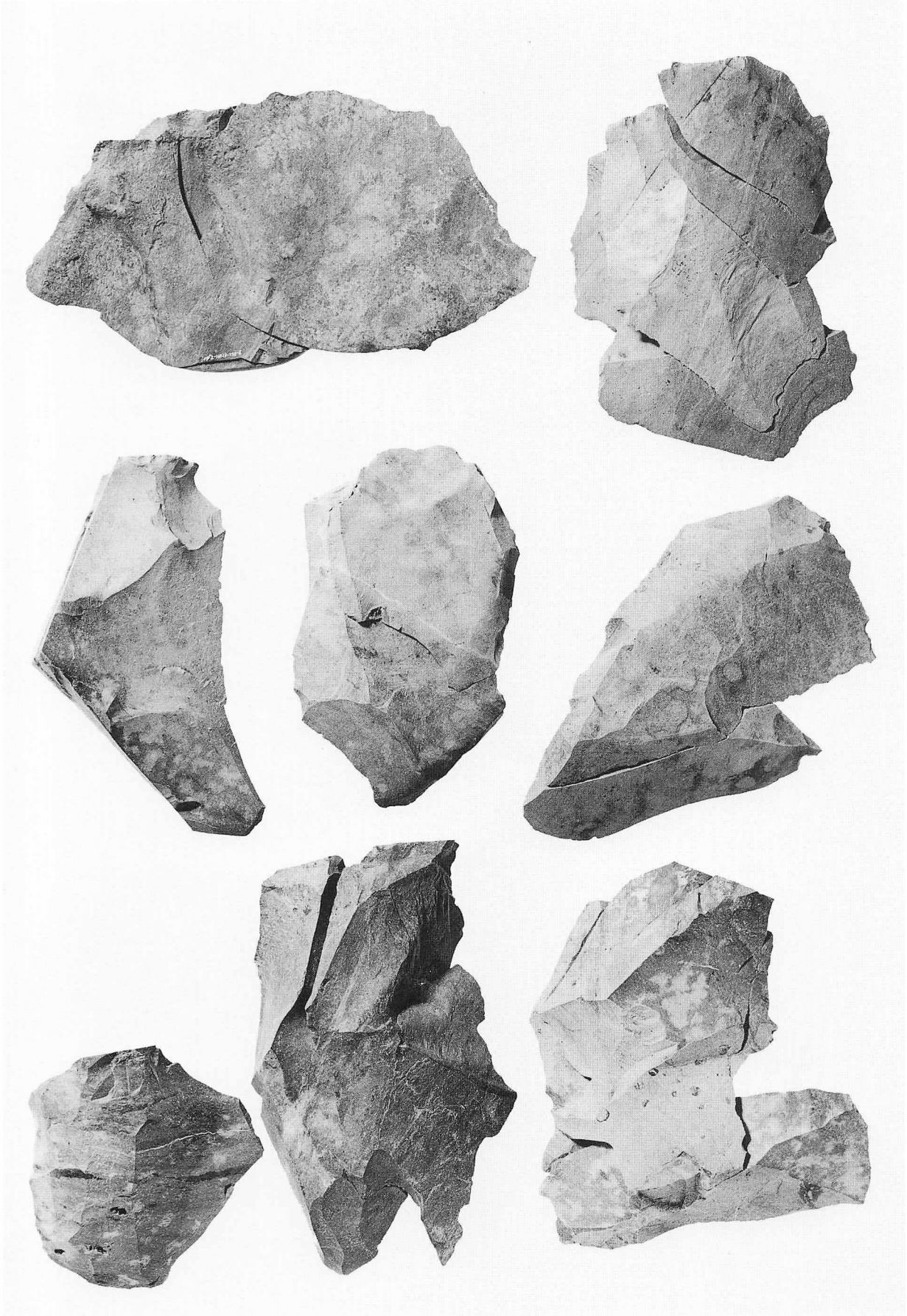
P-3



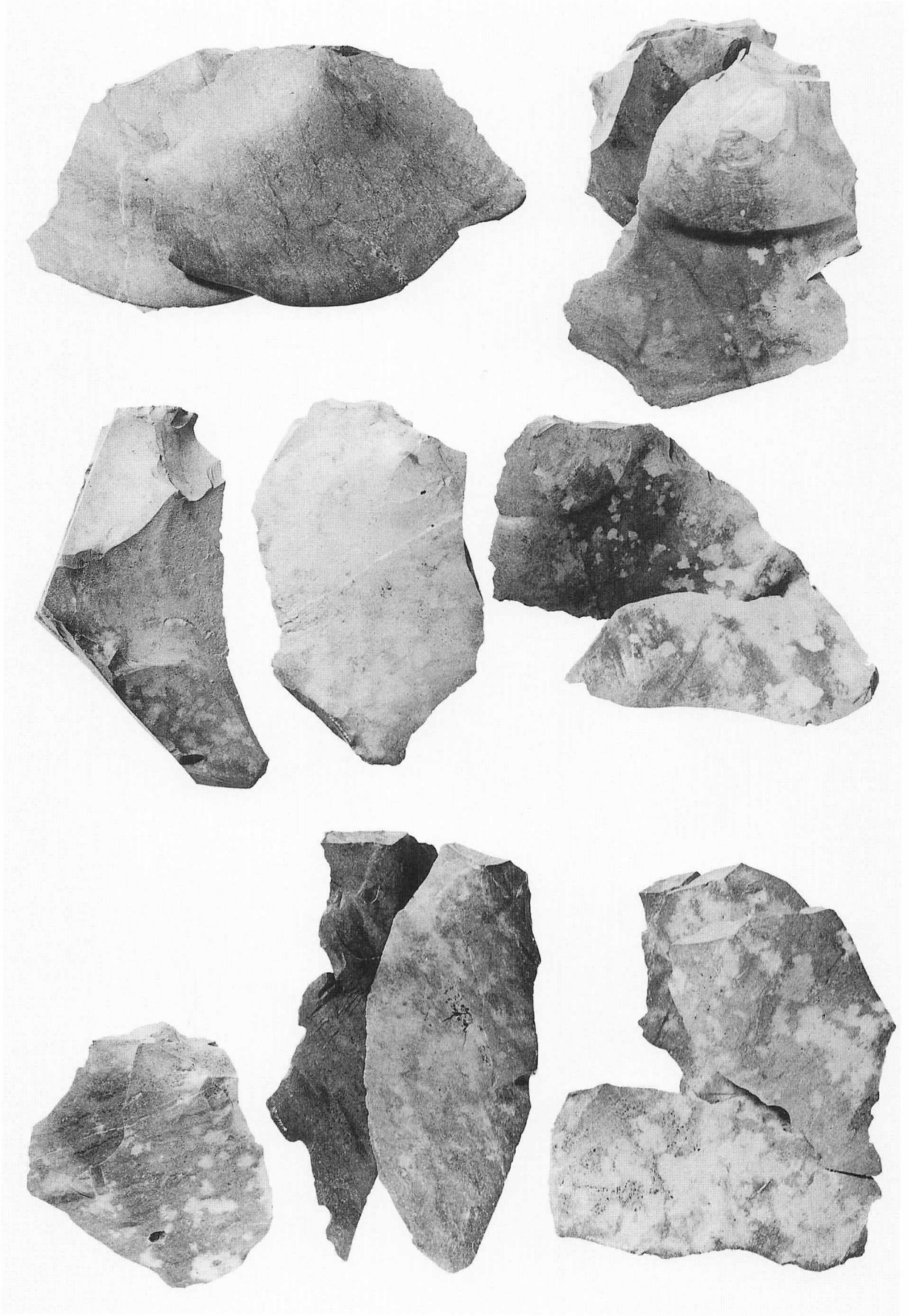
1 P-3出土の遺物(2)、P-5出土の遺物



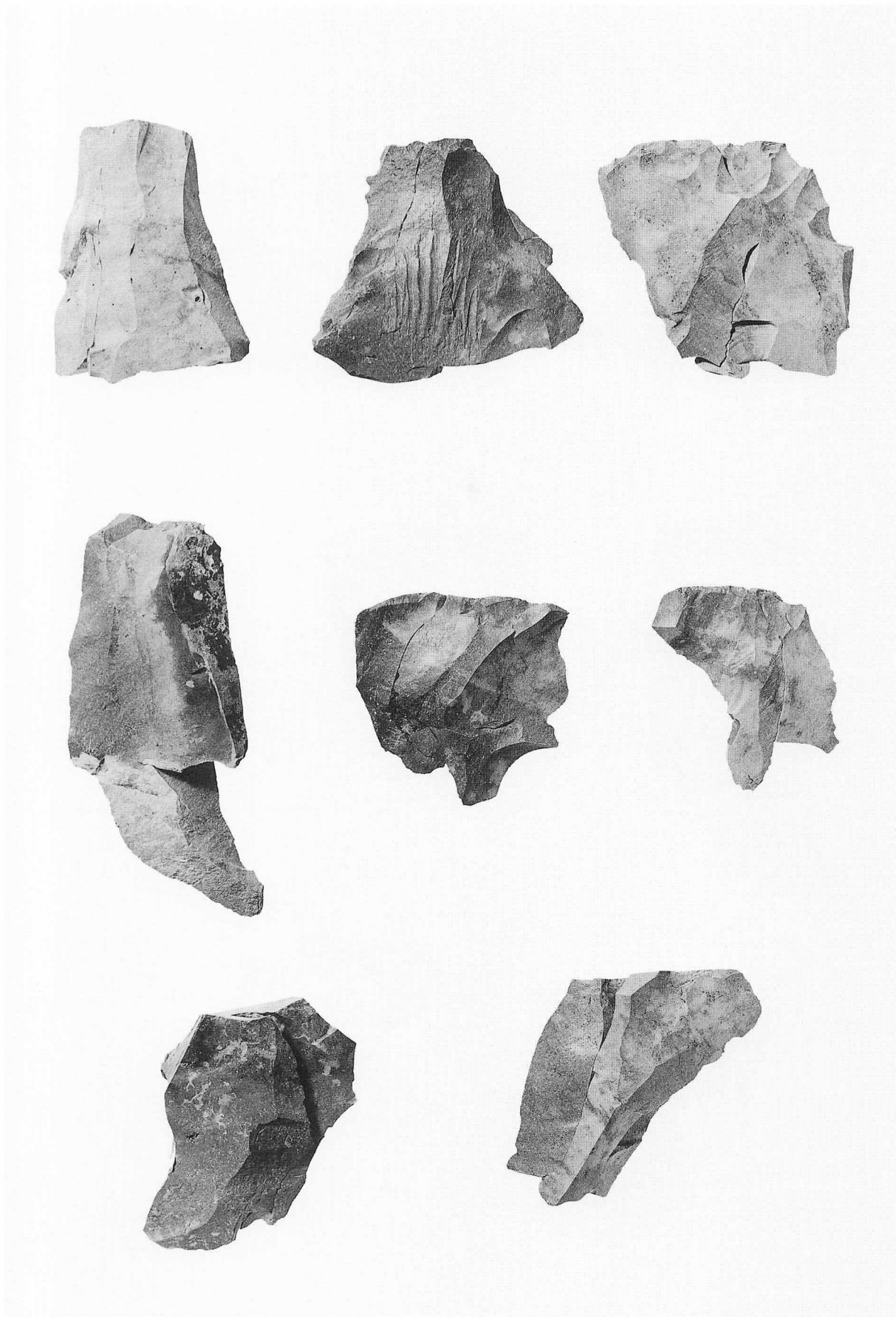
2 P-13・21・24・30出土の遺物



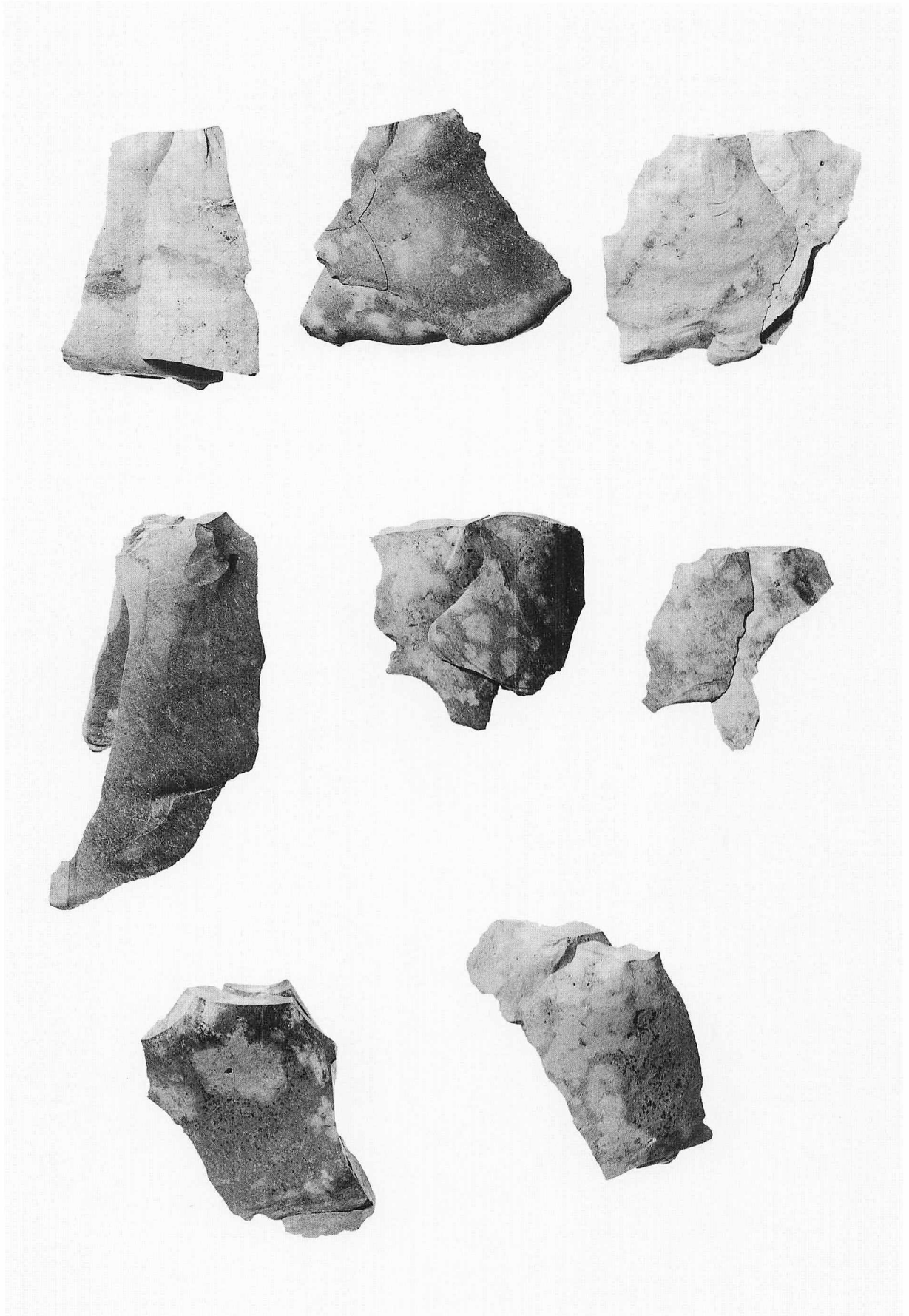
1 P-13出土の遺物(2)表



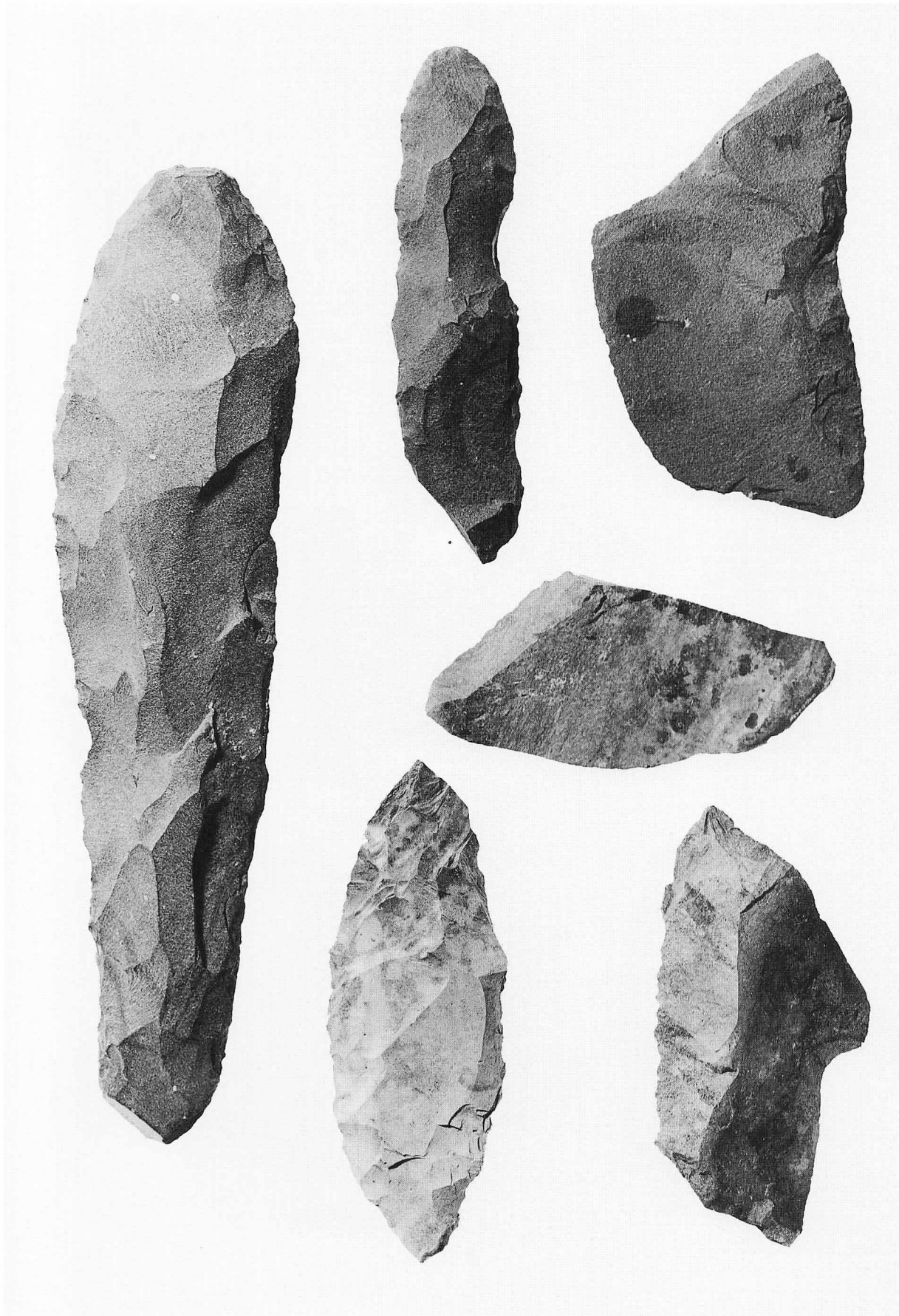
1 P-13出土の遺物(2)裏



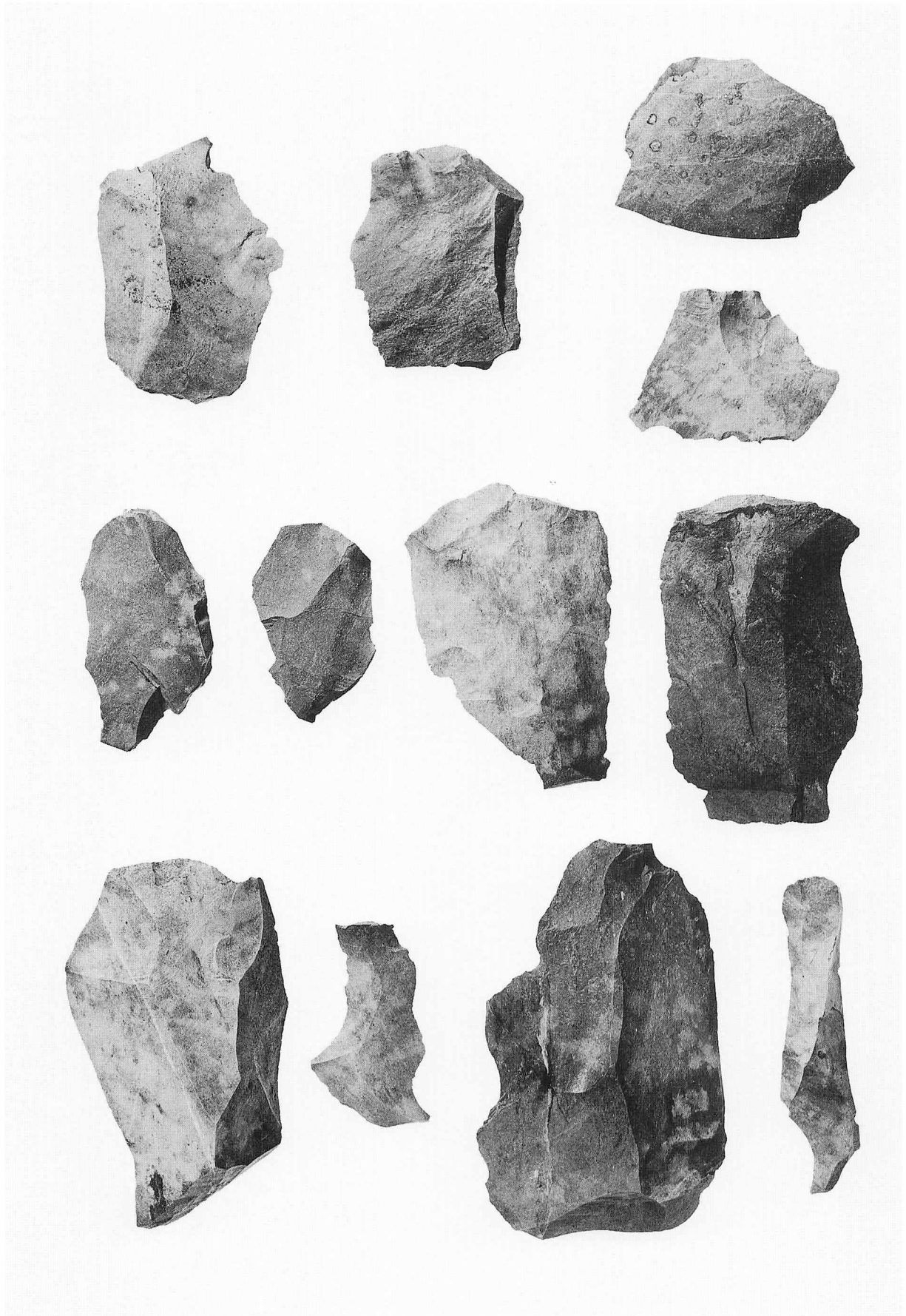
1 P-13出土の遺物(3)表



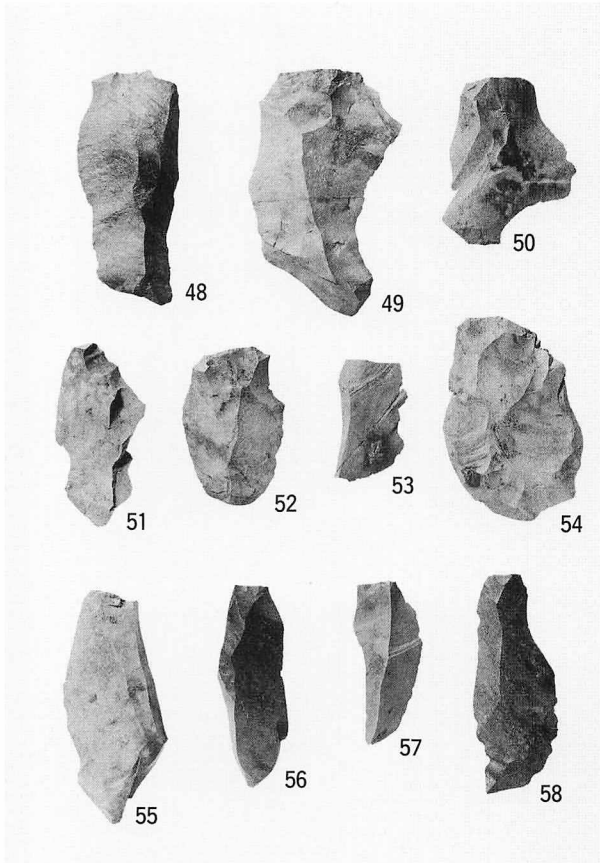
1 P-13出土の遺物(3)裏



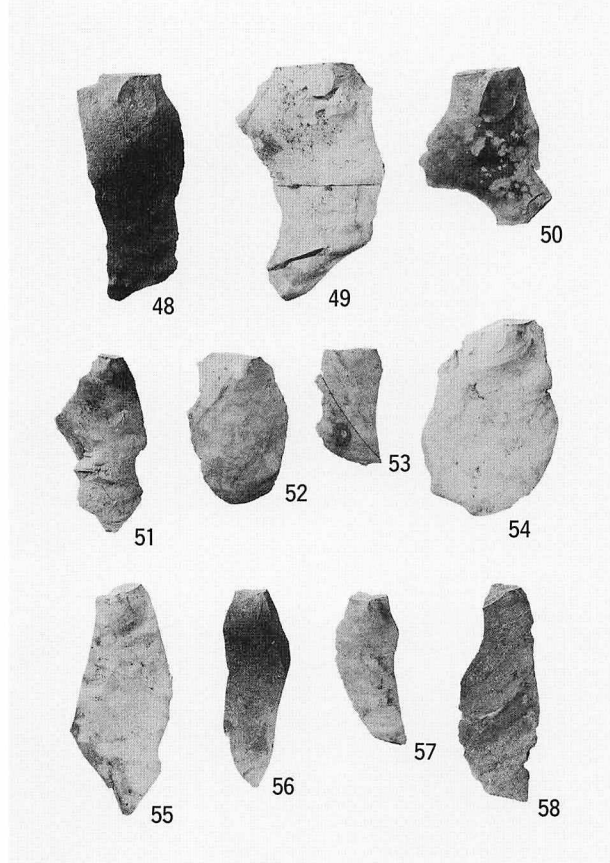
1 P-13出土の遺物(4)



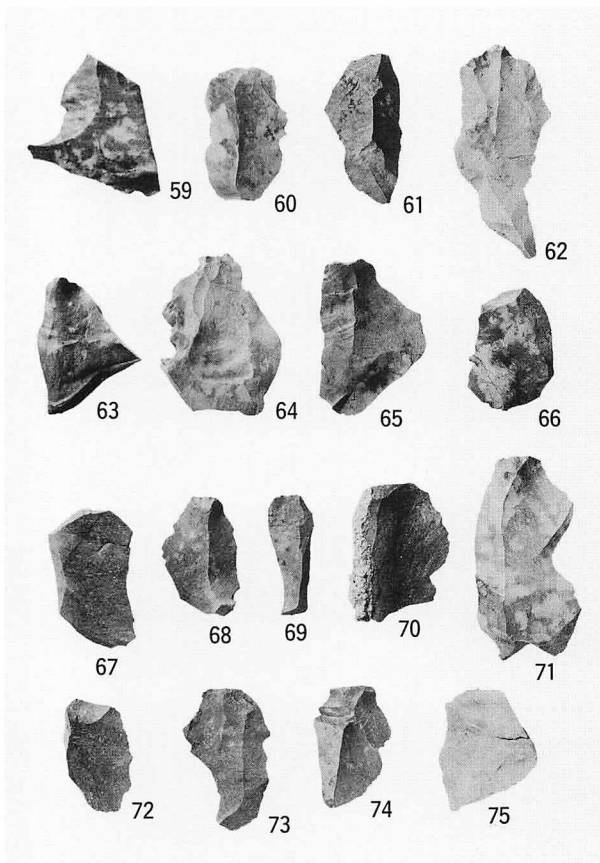
1 P-13出土の遺物(5)



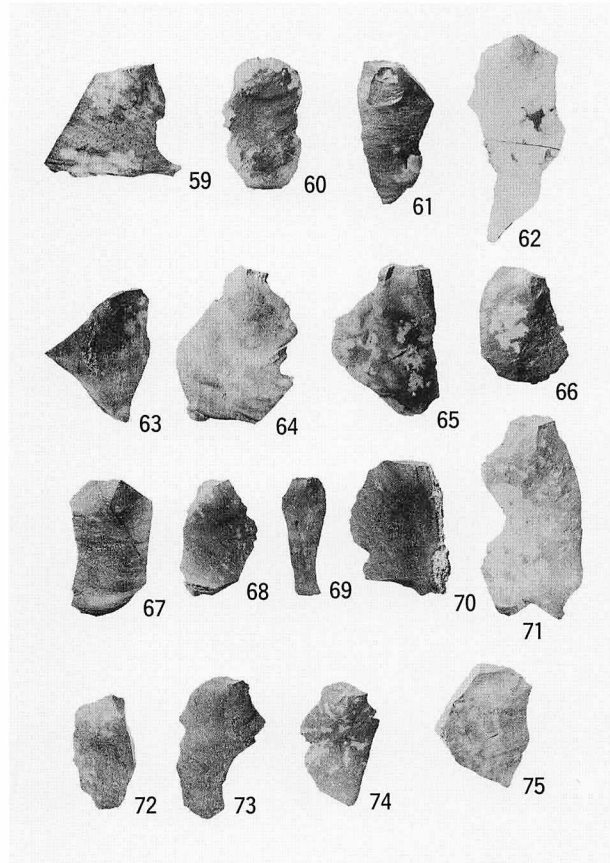
1 P-13出土の遺物(6)表



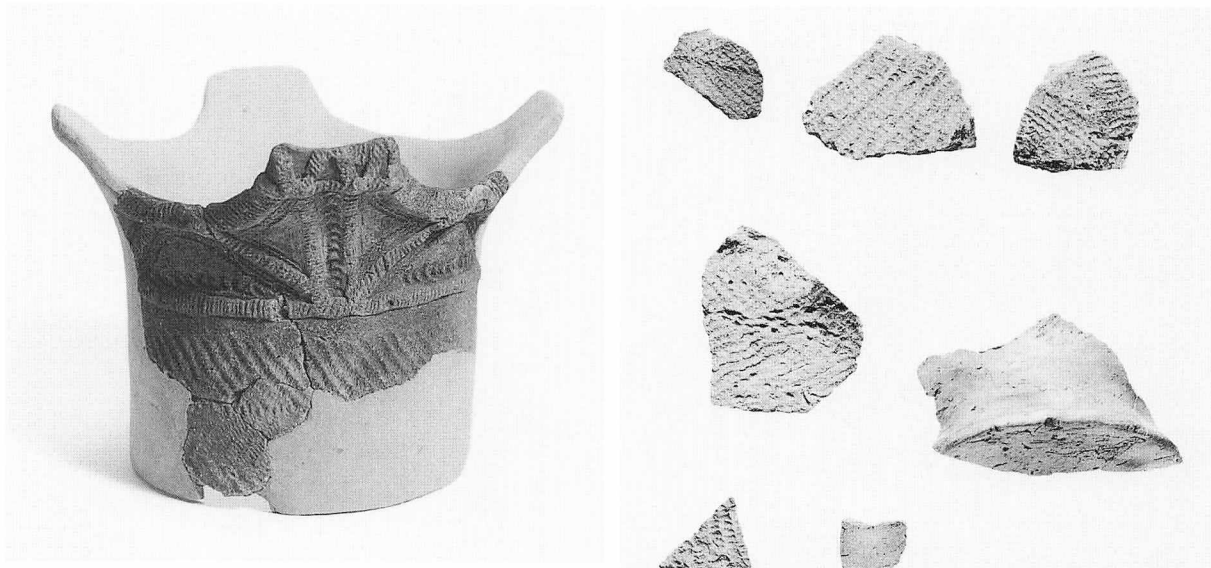
2 P-13出土の遺物(6)裏



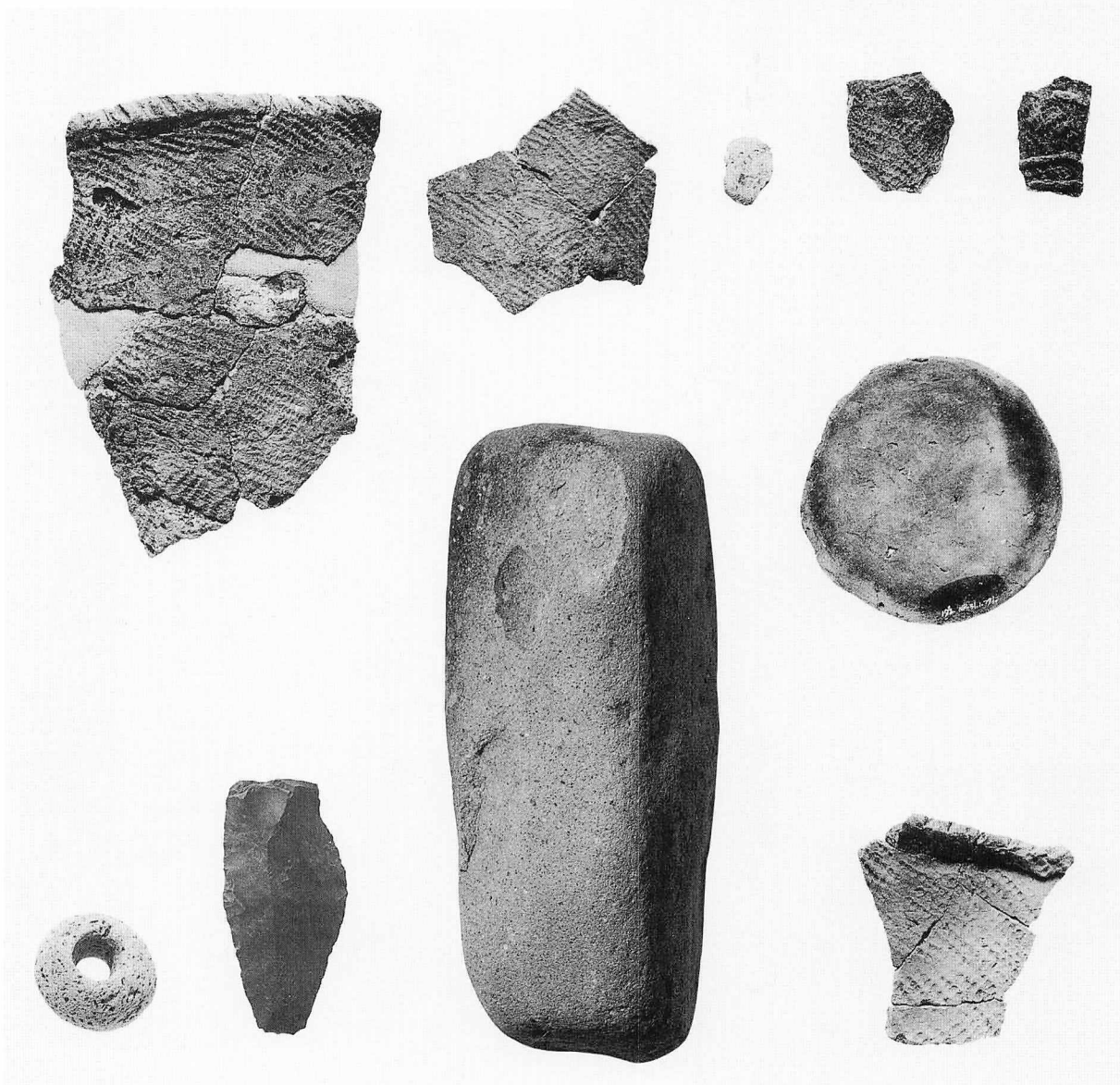
3 P-13出土の遺物(7)表



4 P-13出土の遺物(7)裏



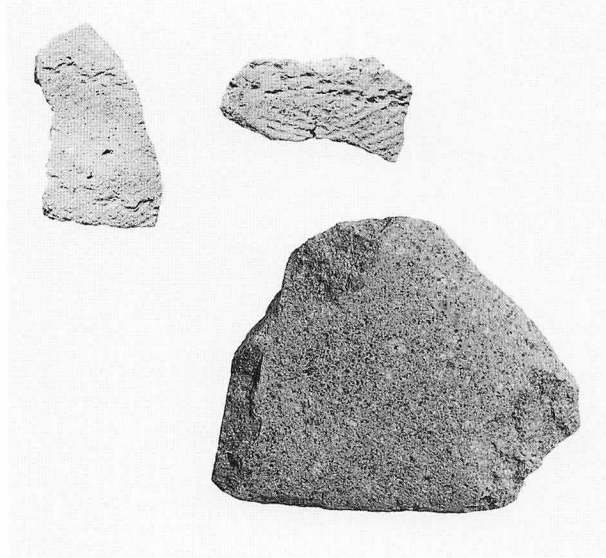
1 P-33出土の土器 (図Ⅲ-85-1)



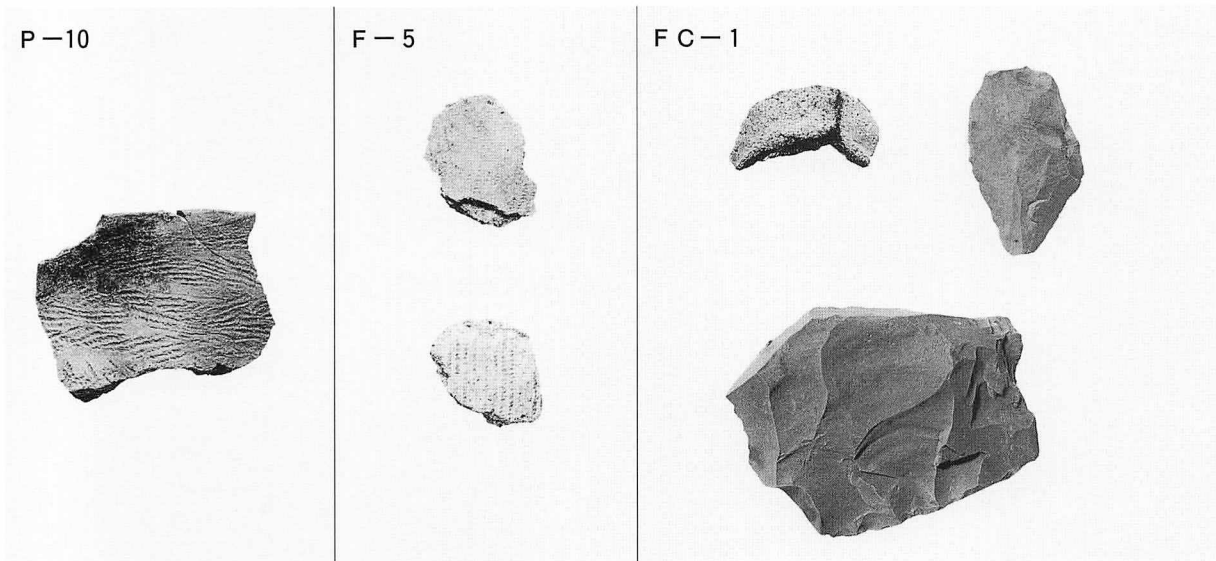
2 P-9・14・16・18・19・23・26・27・31、F-9出土の遺物



1 SP-11出土の土器 (図Ⅲ-90-1)



2 SP-11・23出土の遺物



3 P-10、F-5、FC-1 出土の遺物



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-2-1)



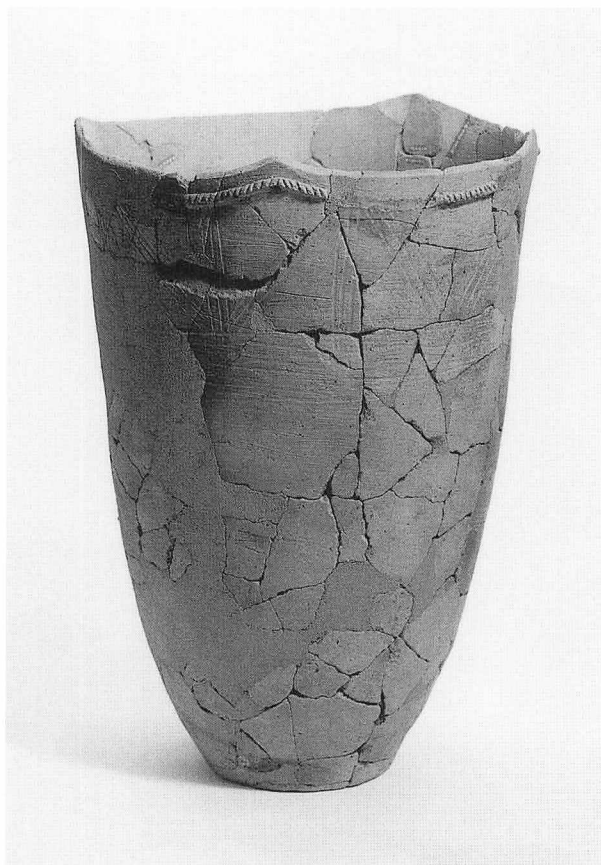
2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-2-2)



3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-2-3)



4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-3-5)



5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-4-6)



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-2-4 b)



2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-3-7)



3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-5-1)



4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-5-2)



5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-5-3)



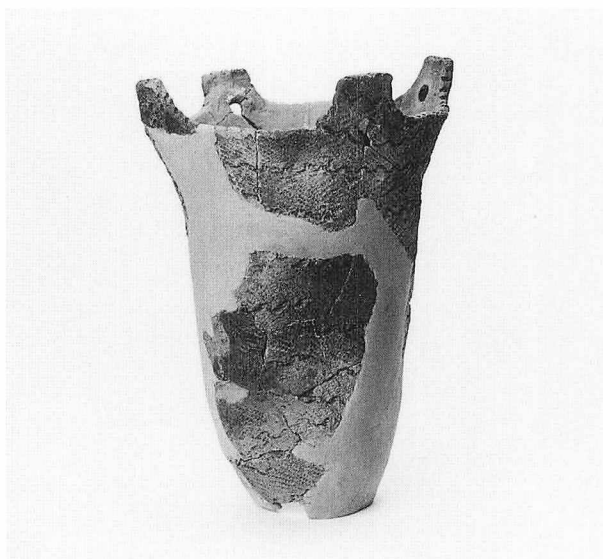
6 同左



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-5-4)



2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-6-5)



3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-6-6)



4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-6-7)



5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-6-8)



6 包含層出土の土器 (図Ⅳ-6-9)



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-6-10)



2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-11)



3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-12)



4 同左突起部分の拡大



5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-13)



6 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-14)



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-15)



2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-16)



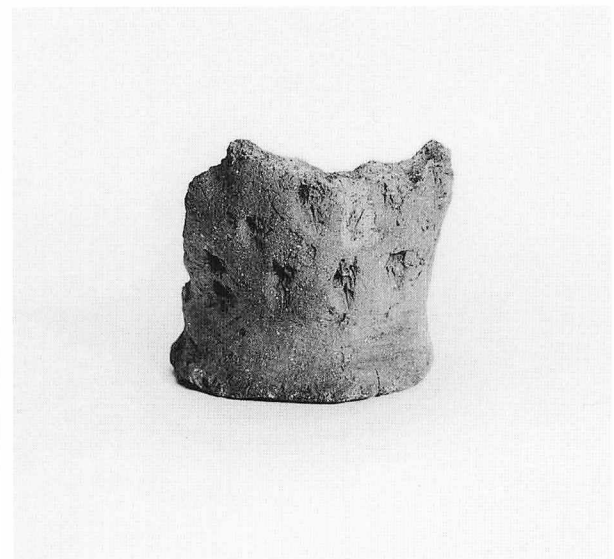
3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-17)



4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-18)



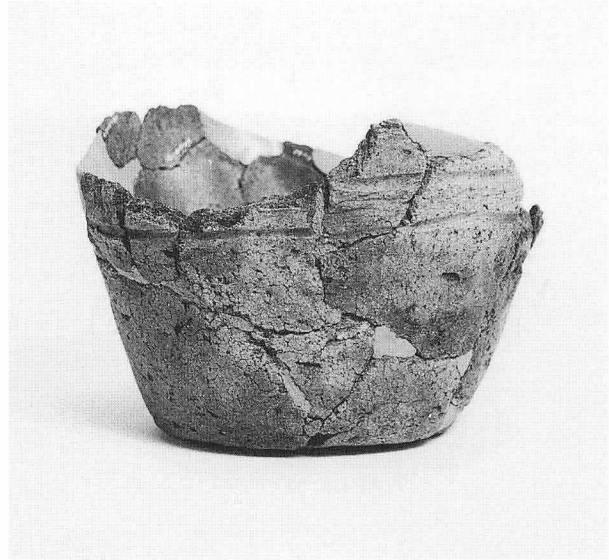
5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-19)



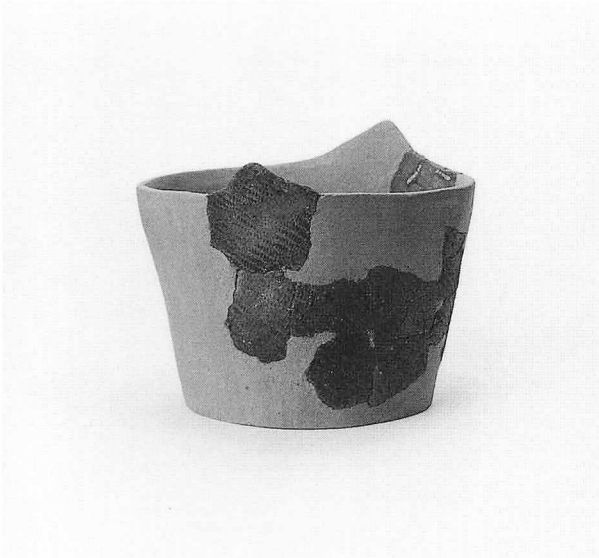
6 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-20)



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-21)



2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-7-22)



3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-9-60)



4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-10-72)



5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-10-73)



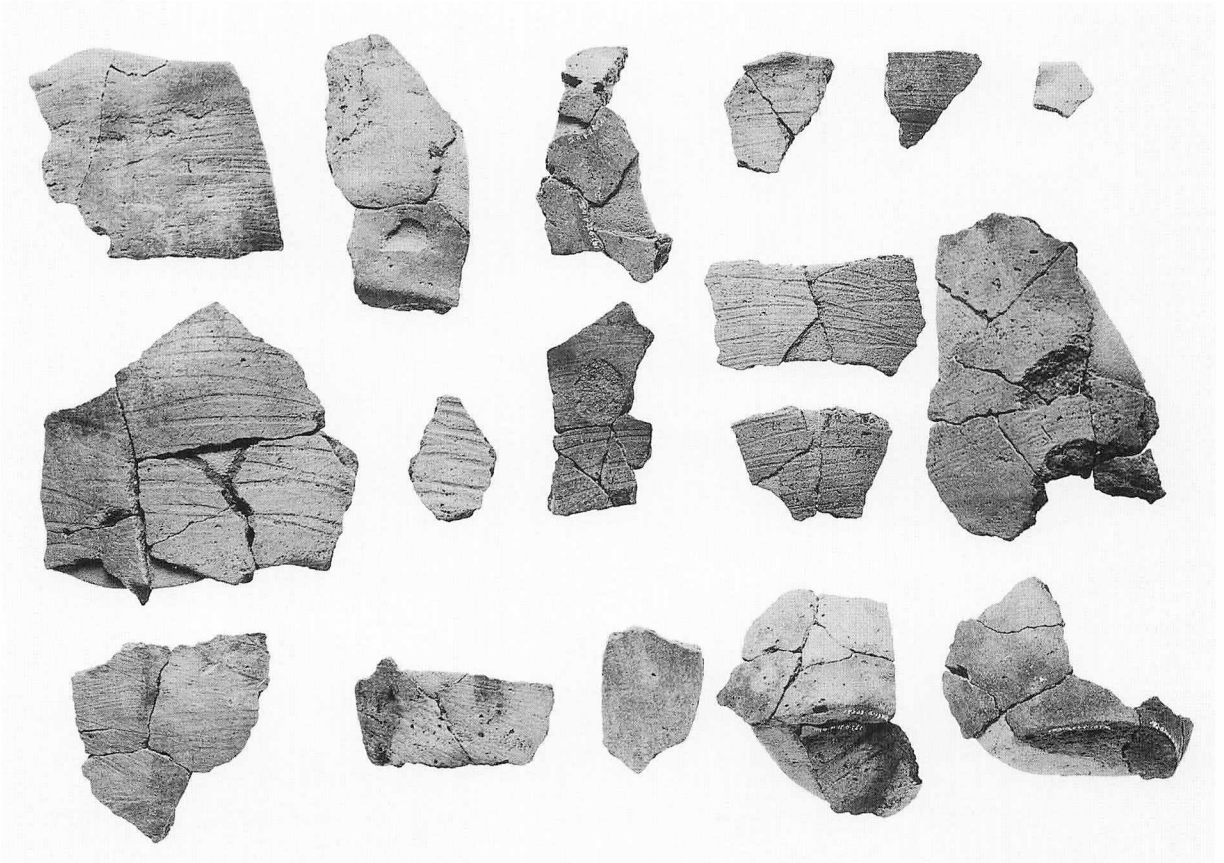
6 包含層出土の土器 (図Ⅳ-10-74)



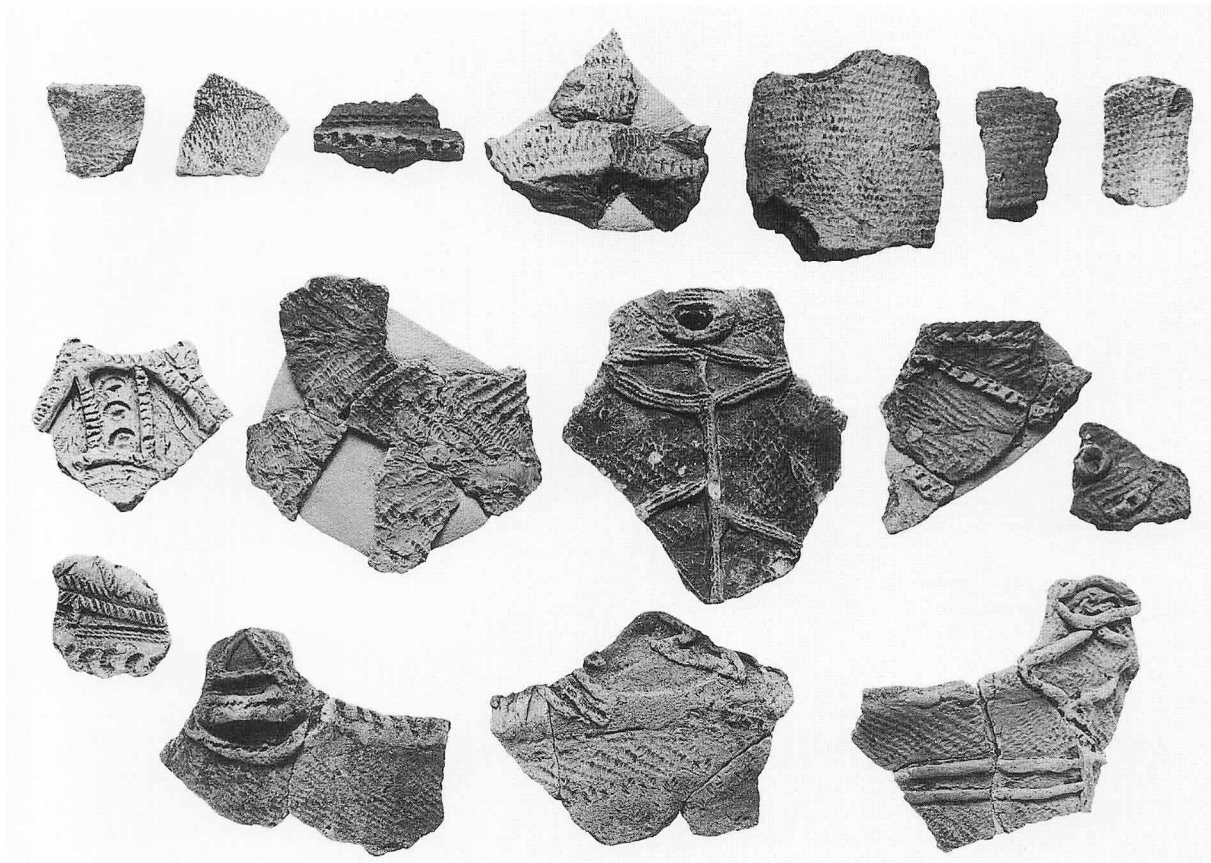
1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-10-75)



2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-10-76)



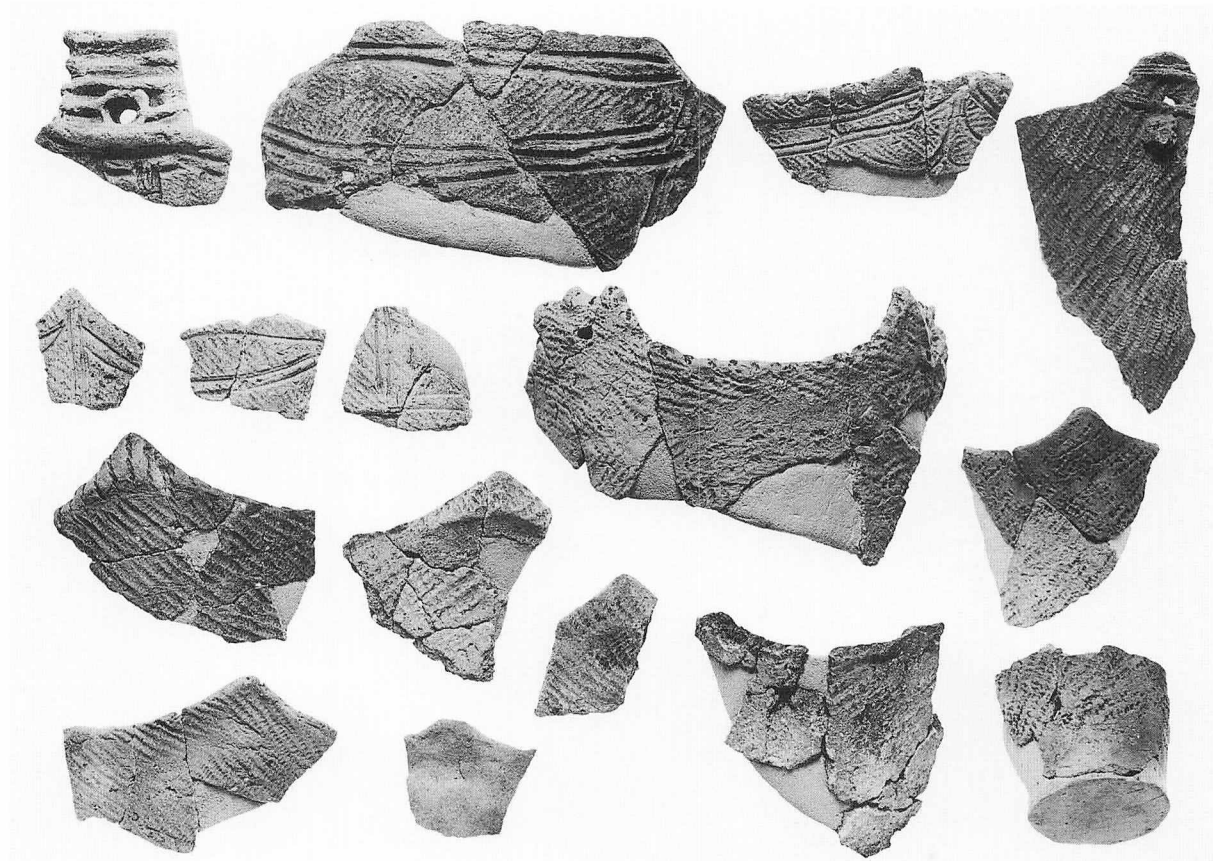
3 包含層出土の土器 (I群)



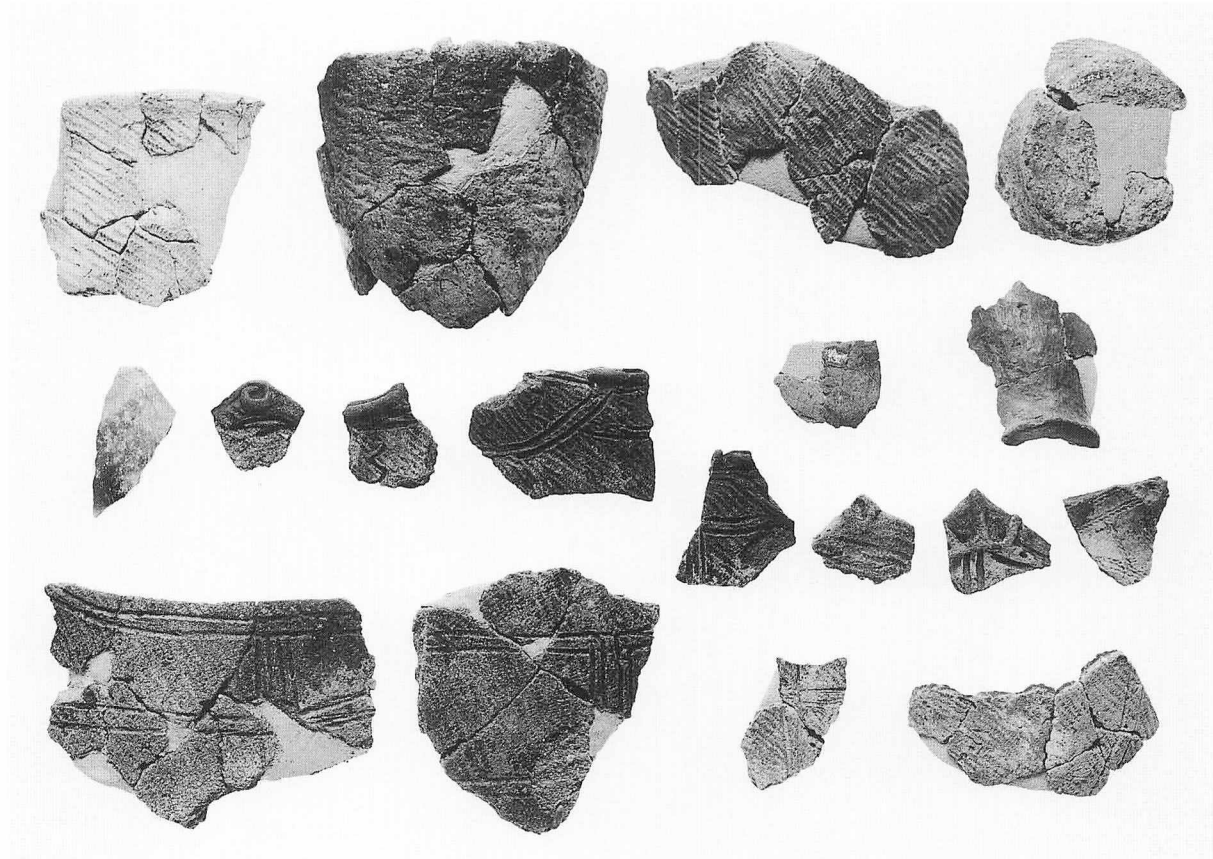
1 包含層出土の土器（Ⅱ・Ⅲ群）



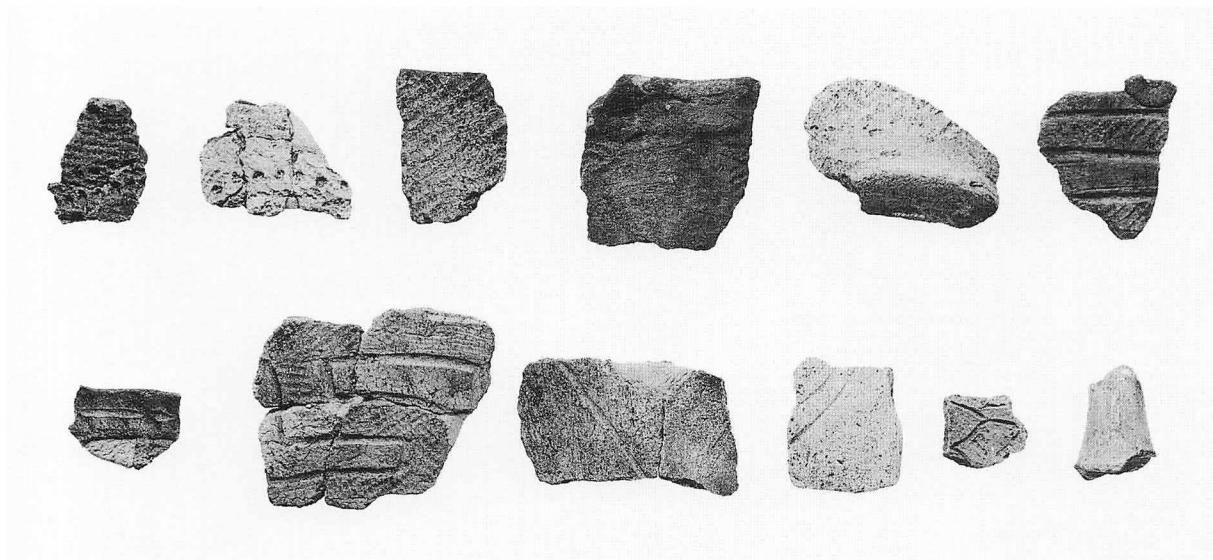
2 包含層出土の土器（Ⅲ群）



1 包含層出土の土器（Ⅲ群）



2 包含層出土の土器（Ⅲ群）



1 包含層出土の土器（Ⅲ・Ⅳ群）



2 包含層出土の土製品



1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-12-1)



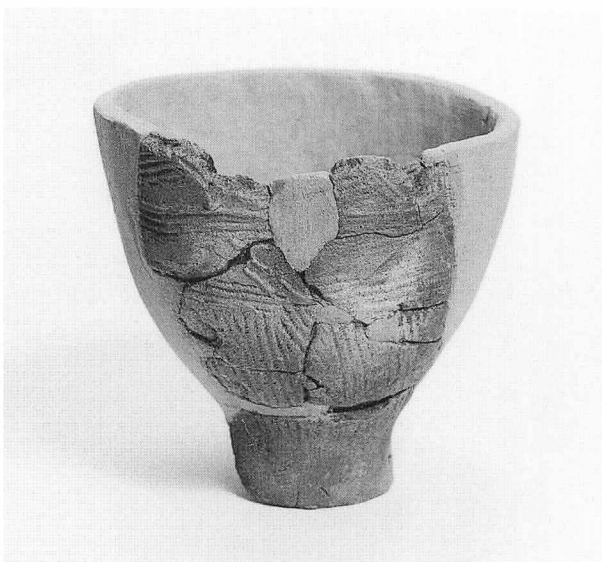
2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-12-2)



3 包含層出土の土器 (図Ⅳ-12-3)



4 包含層出土の土器 (図Ⅳ-12-4)



5 包含層出土の土器 (図Ⅳ-12-5)



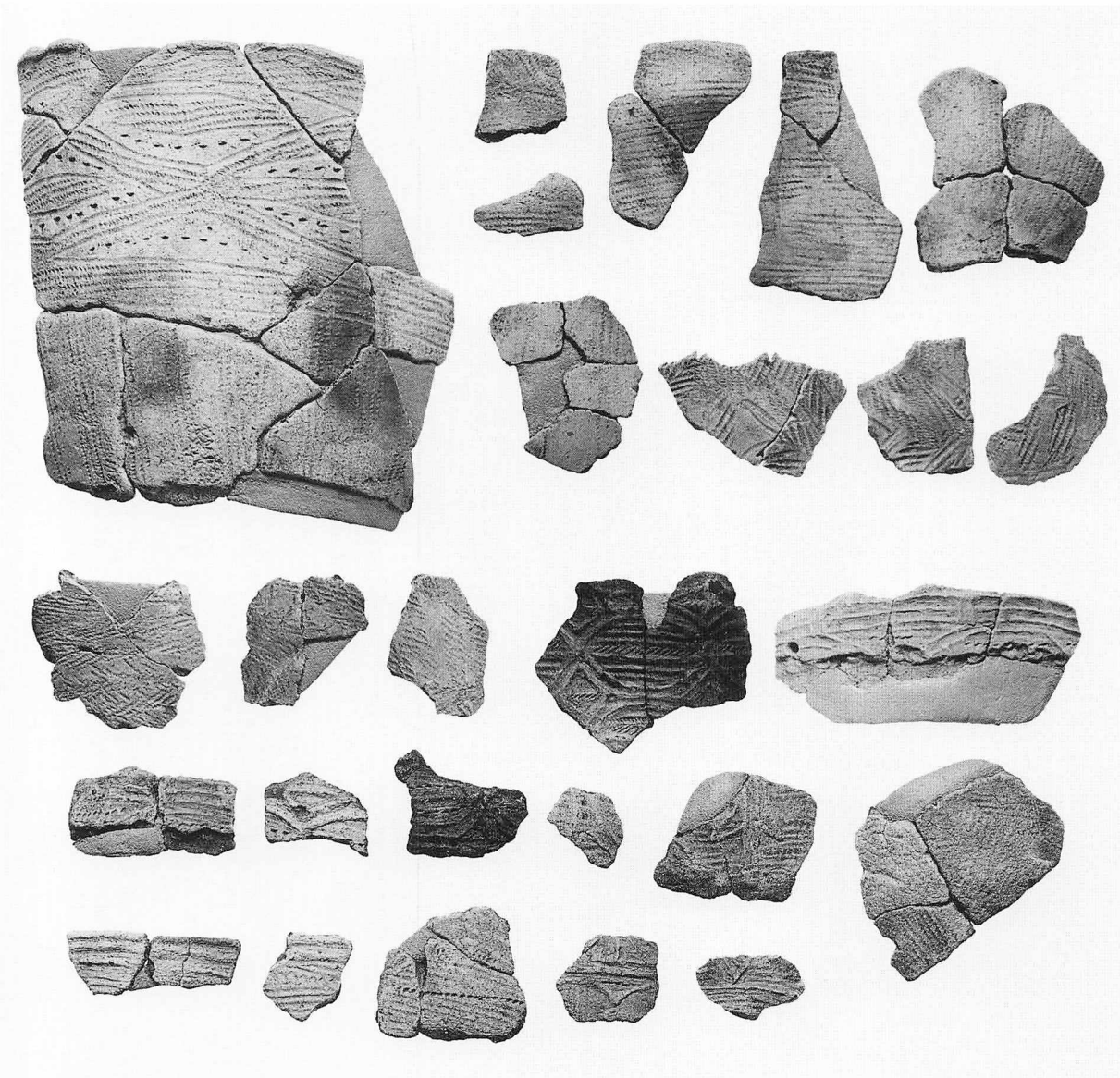
6 包含層出土の土器 (図Ⅳ-12-6)



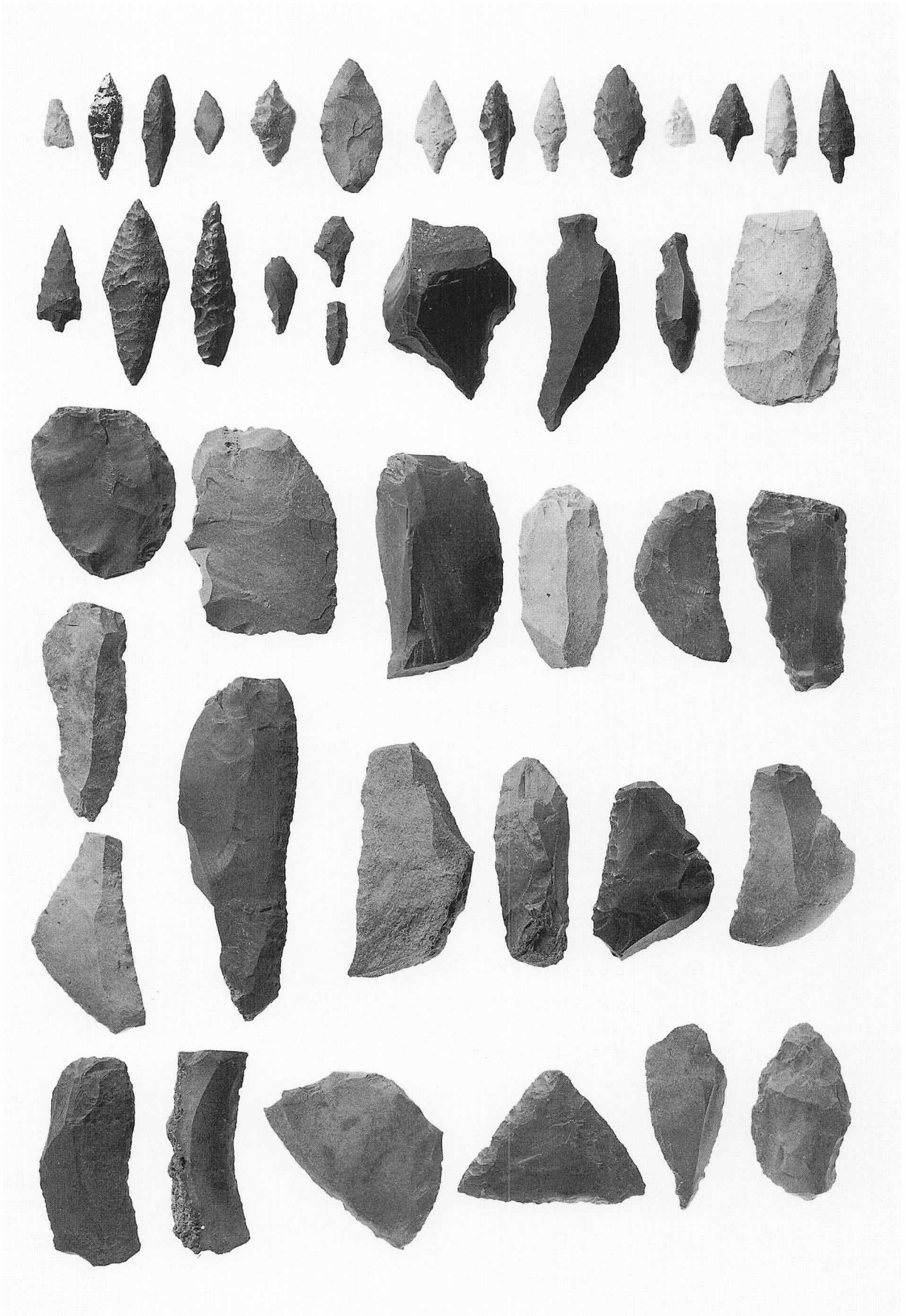
1 包含層出土の土器 (図Ⅳ-12-7)



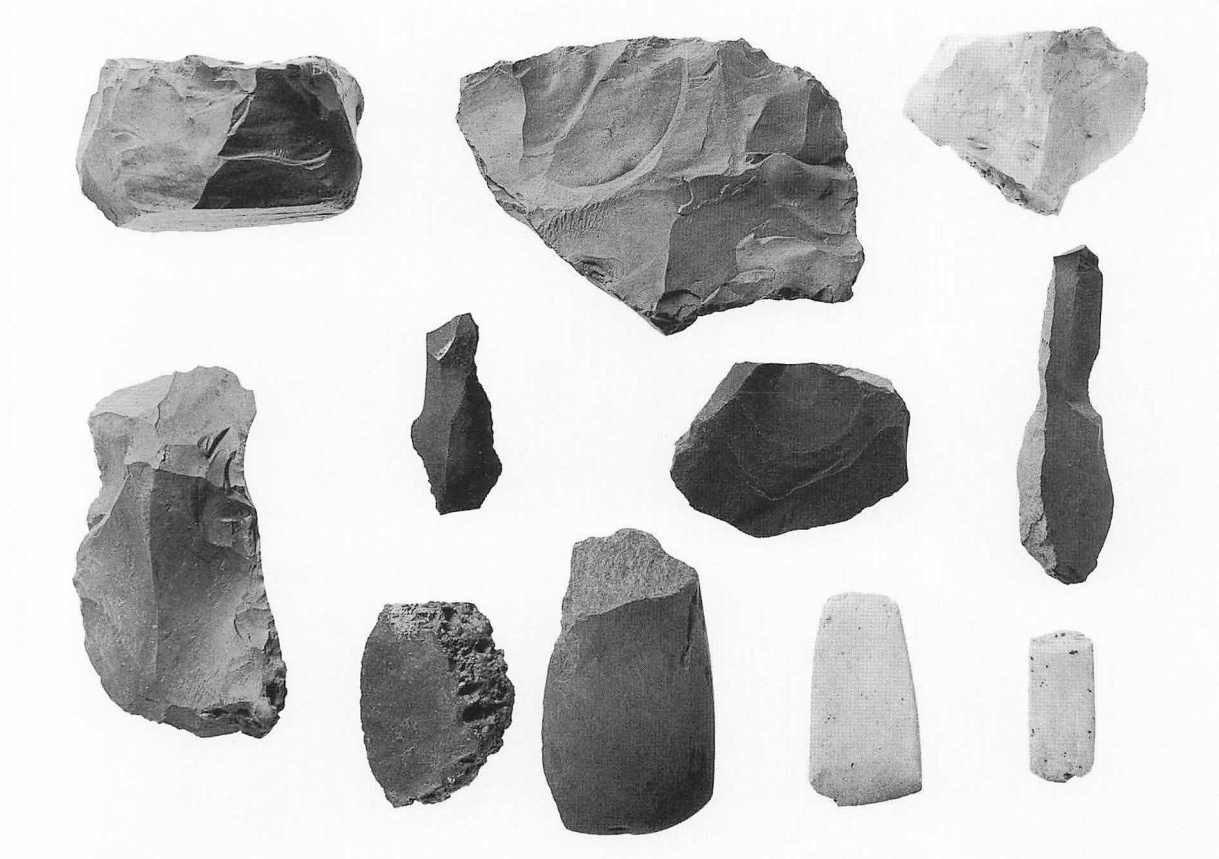
2 包含層出土の土器 (図Ⅳ-12-8)



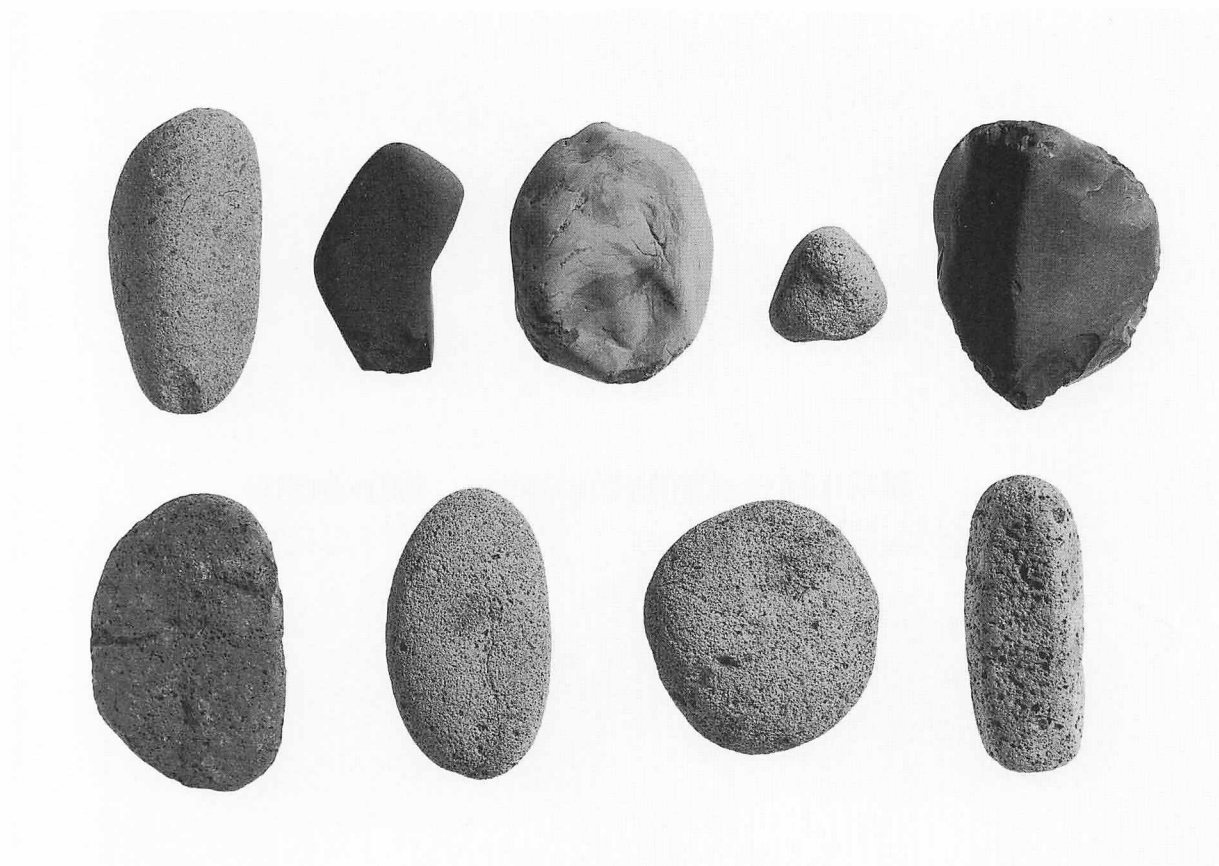
3 包含層出土の土器 (Ⅵ群)



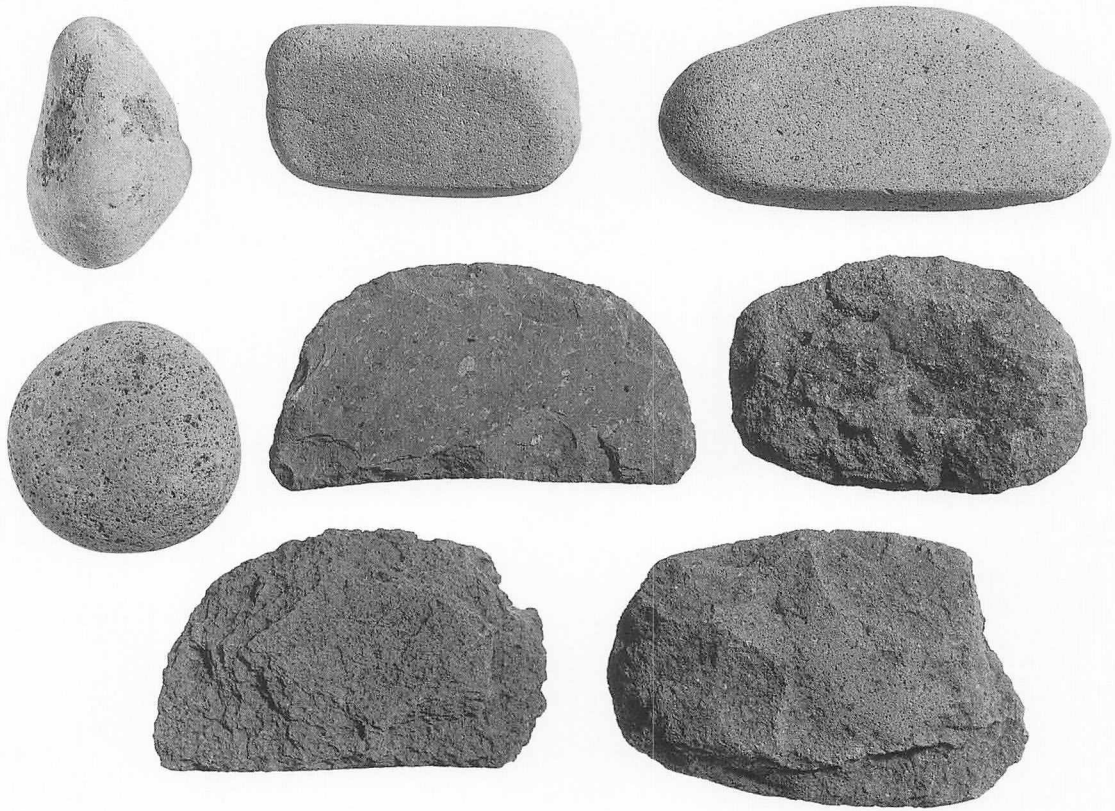
1 包含層出土の石器(1)



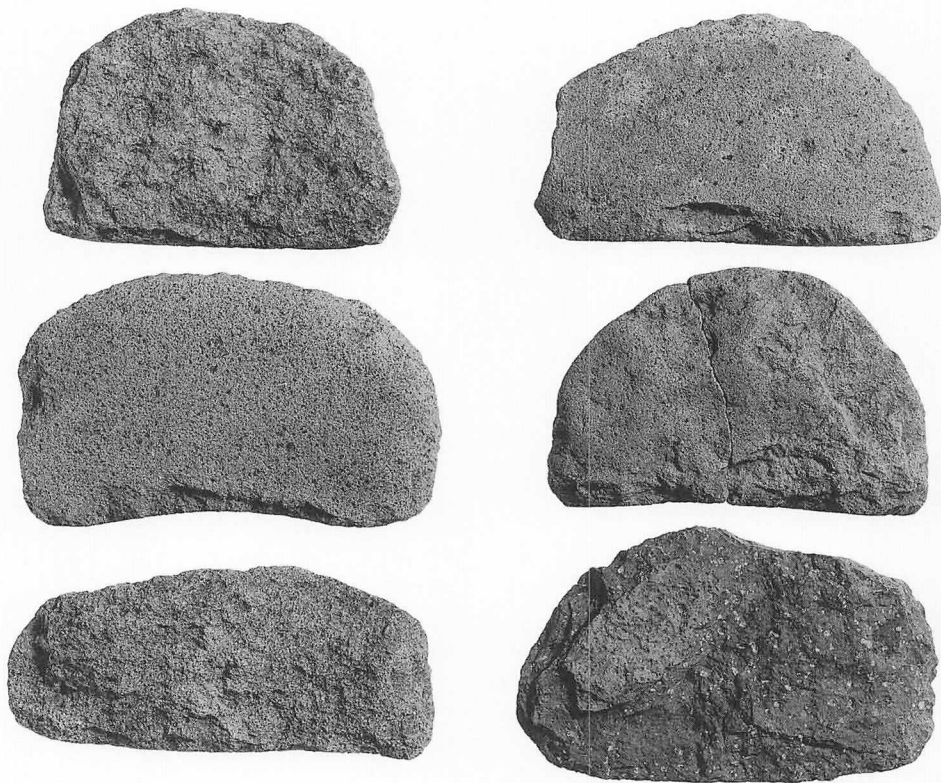
1 包含層出土の石器(2)



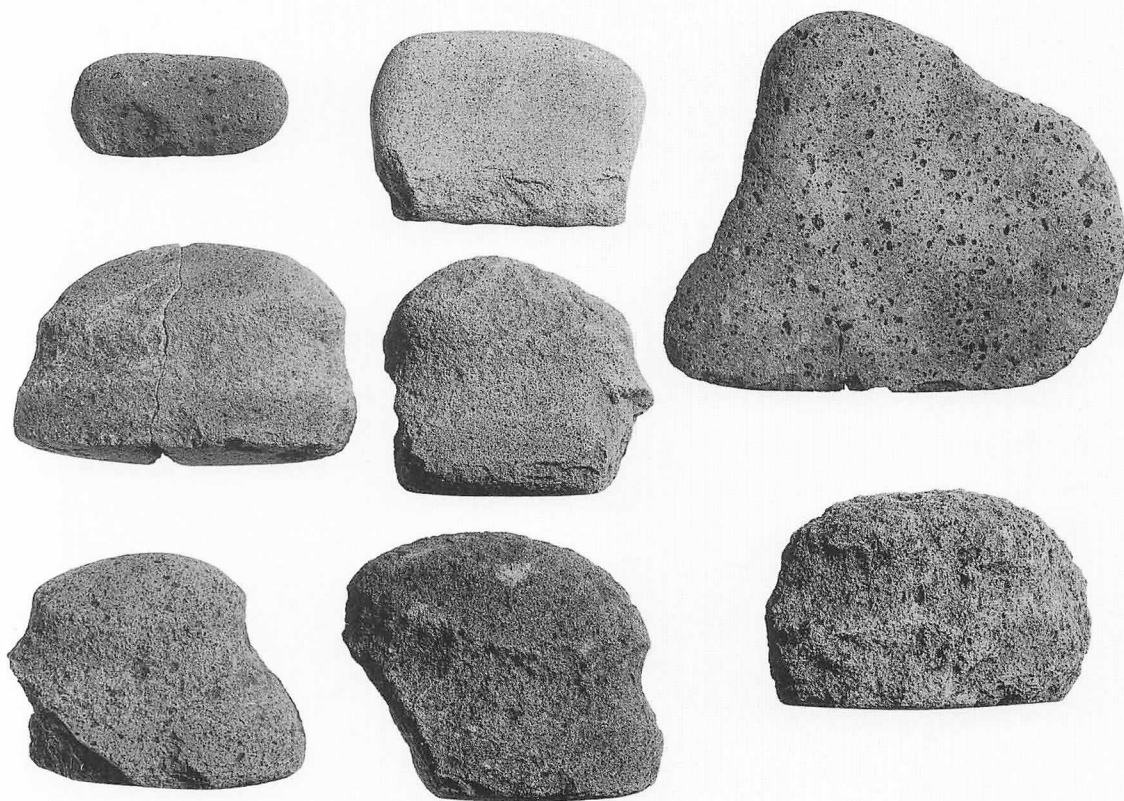
2 包含層出土の石器(3)



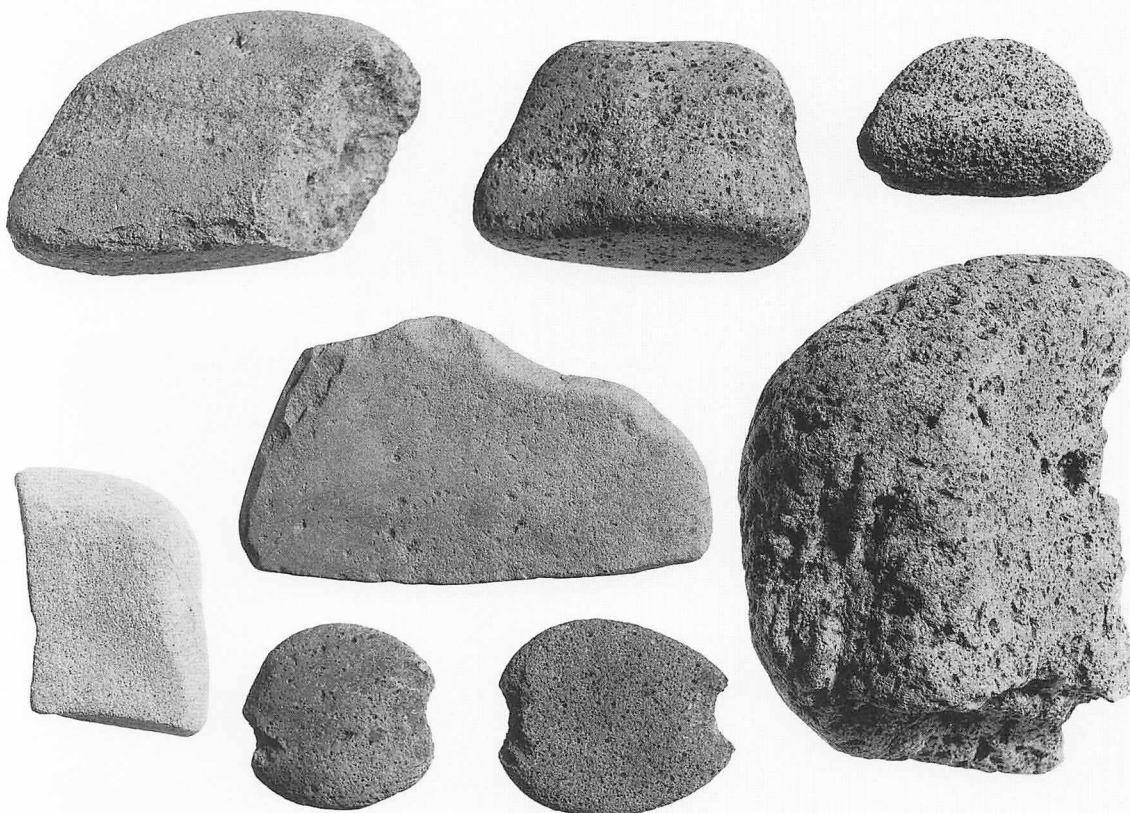
1 包含層出土の石器(4)



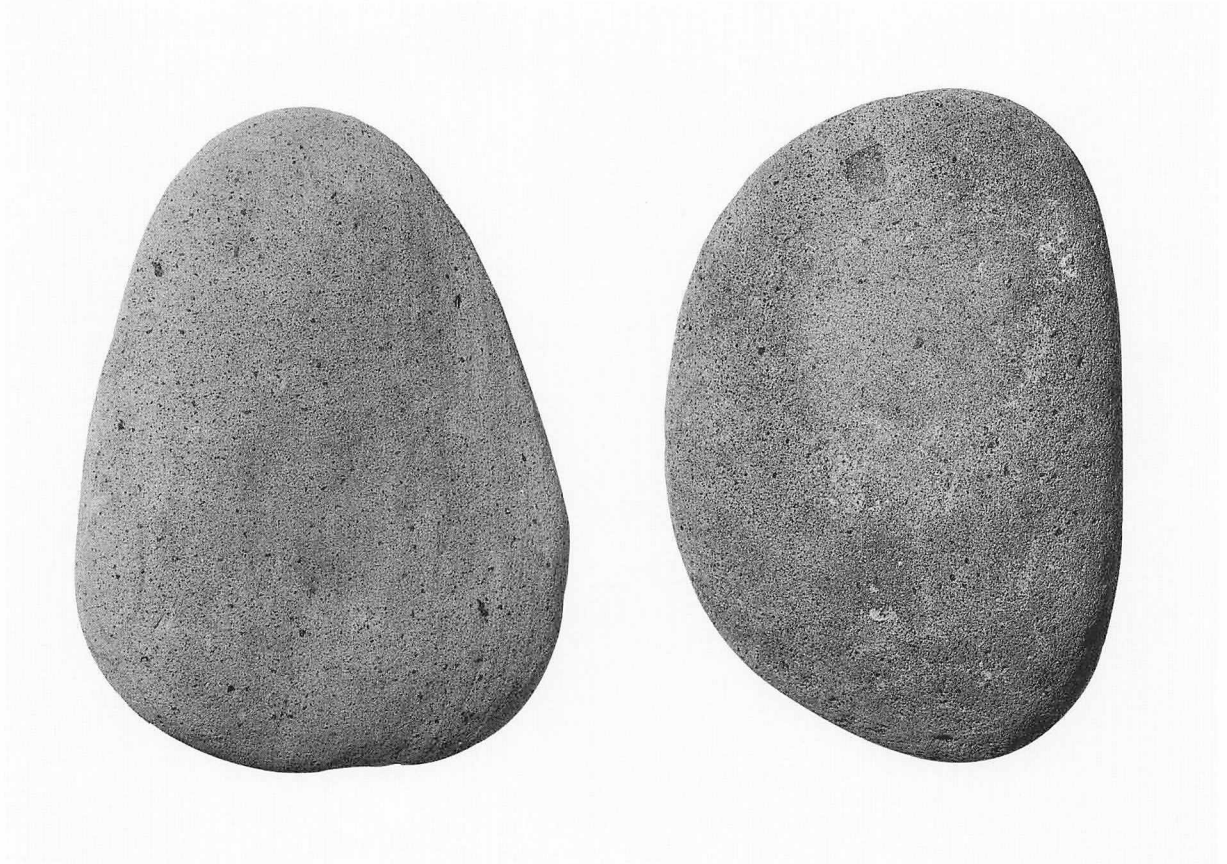
2 包含層出土の石器(5)



1 包含層出土の石器(6)



2 包含層出土の石器(7)



1 包含層出土の石器(8)



2 H-5 出土の土器

報告書抄録

ふりがな	やくもちょうのだおいにいせき							
書名	八雲町野田生2遺跡							
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第167集							
編著者名	中田裕香・立田理・遠藤香澄							
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地-1							
発行年月日	2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のだおいにいせき 野田生2遺跡	ほっかいどうやまこしくん 北海道山越郡 やくもちょうのだ おいにいせき 野田生355-12ほか	01346	B-16-62	140°	42°	2000.07.13	680m ² 2,186m ²	高速道路北海道縦貫自動車道建設 工事に伴う 事前調査
				21'	13'	2000.10.31		
				19"	10"	2001.05.08		
						2001.08.10		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
野田生2遺跡	集落跡 墓	縄文時代 早期 中期 統縄文時代	竪穴住居 7軒 土壇墓 5基 土壇 29基 柱穴状小ピット 24か所 焼土 13か所 集石 1か所 フレイク集中 1か所	縄文土器 サイベ沢Ⅶ式 見晴町式 条痕文平底土器 など 後北C ₁ 式土器 石器等 石鏃・石槍・石錐・つまみ付きナイフ・スクレイパー・両面調整石器・石斧・すり石・北海道式石冠・半円状扁平打製石器 ・たたき石・砥石・石錘 ・台石・石皿	縄文中期前半の集落・墓域			

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第167集

八雲町 野田生2遺跡

北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年3月29日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地-1
Tel(011)386-3231

印刷 株式会社 広報社印刷
〒064-0809 札幌市中央区南8条西10丁目石黒ビル
Tel(011)532-8160

